

Charlotte ~時を超える想い~

ナナシの新人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

都内の名門進学校の特待生として在籍している少年——宮瀬翔。

彼には、高校生とは別のもう一つの顔がある。

数字の波が満ち引きを繰り返すマーケットの世界を駆ける天才。

彼が“予知”の特殊能力者であることを知った、星ノ海学園生徒会長  
の友利奈緒は、星ノ海学園生徒会へ引き込むため、生徒会の仲間たちと共に接触を試みる。

なぜ彼が、天才となり得たのか。世間で天才と謳われる少年の壮絶な過去が明かされた時、物語が動き出す。

そして、この出逢いは、二人の運命を大きく変えることになった。

# 目次

Prologue

Prologue Episode 1 運命 1

Prologue Episode 2 夕暮れの街 5

偽り編

Episode 1 出会い 12

Episode 2 特殊能力 24

Episode 3 教鞭 33

Episode 4 制約 42

Episode 5 朝練 51

Episode 6 決着、実験 59

Episode 7 選択肢 73

Episode 8 ギターケース 85

Episode 2.5 笑顔 90

生徒会活動日誌 1 99

Episode 9 調査 103

Episode 10 友だち 113

Episode 11 再会 124

Episode 12 転機 133

Episode 13 眠らない街 139

Episode 14 理由 145

生徒会活動日誌 2 153

Episode 15 言葉 159

Episode 16 魅力 168

Episode 17 家族 180

Episode 38	優しさ	421
Episode 37	素直な気持ち	410
Episode 36	失態	398
Episode 35	検証	385
Episode 34	胸騒ぎ	377
Episode 33	少しの勇氣	369
Episode 32	決意	361
生徒会活動日誌 4		354
Episode 31	温もり	344
Episode 30	共鳴	333
救済編		
Episode 30	対峙	321
Episode 29	予感	313
Episode 28	歌声	300
Episode 27	後悔	287
Episode 26	チケツト	280
Episode 25	涙	273
Episode 24	仮説	263
Episode 23	想い	257
生徒会活動日誌 3		250
Episode 22	可能性	238
Episode 21	揺らぎ	227
Episode 20	鍵	212
Episode 19	心境の変化	202
Episode 18	自覚	190

Another Episode 2	626
Another Episode 1	617
Another Episode	613
生徒会活動日誌5	602
Epilogue 未来	594
Episode Final 愛	581
Episode 52 約束の場所	568
Episode 51 旅立ち	559
Episode 50 フエイク	546
Episode 49 希望	537
Episode 48 黒幕	526
Episode 47 記憶	514
Episode 46 誓い	499
Episode 45 覚悟	487
Episode 44 潜入	474
Episode 43 日記	464
Episode 42 救済計画	447
Episode 41 甘えられる場所	436
Episode 40 声	428
Episode 39 奇跡	

Prologue  
Episode 1 〈運命〉

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

有名な小説の書き出しだ。

俺は、この猫はすごい猫だと思った。少なくともこの猫は、自分が猫であることを自覚していたからだ。名前は無くとも、生まれも判らずとも、自分という存在を知っている。猫としての生き方と言うものを、しつかり理解して生きている。

それなのに俺は、自分が何なのか、何がしたいのか、何を出来るのか。そして、生きる意味さえも分からずにいた。なぜ生きているのかも分からず。将来のことはおろか、ただ漠然と今を生きているだけの日々。

いや、生きているとも言えない。

ただ、そこに居るだけの存在だった、あの頃……。目の前に広がる、まばゆい煌びやかな世界でさえも。失意の中に居た俺には、世界の全てが灰色に見えていた。

そう。あの日、あの時……。幼かった俺に、手を差し伸べてくれた。あの人と出逢うまでは――。

\* \* \*

六本木のとある超高層タワービル内、某証券会社。

時刻は、平日午前10時30分。学校に通っているまともな学生なら、決していないハズの場違いな場所に今、俺は居る。

「坂本さん。key百貨店12万株成り行き、買い」

「わかりました〜！ 宮瀬翔！ key百貨店、買いだ！ 買いっ

！ 値が上がるぞ！ どんどん買わせるー！」

俺が頼んだ買い注文を受けたスーツ姿の男性は、大きな声で店内で仕事をしている職員全員に向かって号令を投げかける。

彼は、この証券会社で取次ぎ業務の責任者を任されている。駆け出しの頃から鼻屑にさせてもらっている人で、私生活の面においても何

かと気にかけてくれている。

そして彼が言葉にした、宮瀬翔みやせしやうと言う名前。それが、俺。現在、都内屈指の進学校に籍を置いている新入生であると同時に、もうひとつの顔がある。

坂本さかもとさんの声に同調して、他の職員たちが一斉に電話をかけ始めた。鳴り止まない電話の着信音、キーボードを叩く音、まさに戦場と表現しても大袈裟ではない。

この世界では、誰もが狼で、誰もがカモ。

目まぐるしく荒れる狂う数字の波。この波は、秒刻みで満ち引きを繰り返し、敗者を容赦なくのみ込む。

一般的なサラリーマンの生涯平均所得は約2億前後といわれているが、ここでは2億という数字は数秒で得て、数秒で失う、そういう世界だ。

これが、俺のもうひとつの顔——時代遅れの相場師。

そしてここが、俺の戦場。マーケットの世界。

午前の取引を終え、昼食を摂るために証券会社を後にした俺は、同じ六本木のタワービル内に暖簾を構える食事処へ赴く。いつも世話になっている坂本さかもとさんを誘ったが、午後の資料をまとめなければならぬとフラれてしまった。ま、それもいつものことで、昼食へ向かう前の通過儀礼のようなものになっている。

そんな訳でいつも通り、同じタワー内の12階に暖簾を構えるお気に入りへの食事処へ。隅々まで掃除の行き届いた、とても落ち着きのある店内。ここは食事の質はもちろんのこと、会員制でテーブル席だけではなく、個室も完備されていたりとプライベートが完全に守られるため大変重宝している。

いつもの様に、店内の一番奥の窓際の席に座り、お任せの日替わりの定食を注文し、窓の外に広がる大勢の人たちが行き交う大都会東京の街並みを眺めながら、運ばれてきた料理をいただく。普通の高校生では、決してあり得ない非日常だが、これが俺の日常。

昼食を食べ始めて数分後、常にマナーモードに設定してある携帯のバイブが振動した。

——またか。食事くらいゆつくり食べさせてほしいんだけどな。  
小さくタメ息がもれる。

どうせ、担任からの学校へ登校しろという催促の電話だろう。

これもいつものこと。いくら授業免除の特待生とは言えど、出席日数が足りなければ進級できない。心配……というよりも、自分の評価を下げたくないだけだろう。特待生が不登校となれば、学校としては深い痛手となり、その噂が広がれば学校の評判は落ちる。ひいては担任はもちろん、校長の責任問題にまで発展しかねない。それだけは避けたいといったところだろう。

正直、今の高校生活は退屈極まりなかった。

実はとある事情により、既にアメリカの大学を飛び級で卒業している。それは、自身が有する特別な力に関係しているのだが。日本へ帰国後、訳あって日本の学校へ進学することになった。しかし、生真面目なクラスメイトたち、生徒の親の顔色と自分の評価を気にして、教科書をただ流し読むだけの教師。興味を引く目新しいものも何もない退屈な日常……代わり映えない日々嫌気が差し、入学してひと月も経たないうちに今の生活に戻った。

この電話の相手が担任だとしたら、また正論に正論を重ねたありがたいお言葉を延々と聞かされるかと思うと憂鬱になるが、それでも、無視するのは気が引ける。

仕方なく液晶画面を確認すると、表示されていた発信相手は担任ではなかった。携帯の液晶に表示されるには知らない名前と番号。しかし、名前と番号が表示されているということは面識があるはず……なんだが、まったく覚えがない。考えても仕方ないため、とりあえず出ることにした。通話ボタンをプッシュして、耳元へ持っていく。

「はい、宮瀬みやせです」

『お疲れ様です、先日はありがとうございました。以前、雑誌の企画で取材させていただいた——』

出版社名と名前を聞いて思い出した。

今から二ヶ月ほど前、特集を組みたいとインタビューの申し入れを

して来た雑誌の編集者の名前だった。

『不躰で申し訳ないのですが。星ノ海学園の生徒会長が、宮瀬みやせさんとお会いしたいと言っているのですが……』

「はあ……？」

正直、意味がわからなかった。

星ノ海学園の生徒会長。自分の高校の生徒会長ならまだ話は予想できる。しかし、他校の生徒会長が無関係な俺にいったい何の用事なのか、気にならないとなれば嘘になるが。わざわざ引き受ける義理もないため断ることにした。

「申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」

『そうですか、そうですよね…… わかりました。先方には、私から伝えておきますので』

「すみません。お願いします」

『いえ、こちらが無理を承知でお願いした事ですので。では——』

「そうですか。あのひとついいですか？」

ただ……ひとつだけ気になることがあった。

なぜ、そこそこの名の知れた出版社の編集者が、たかが学生の願いを聞き入れて連絡を寄越したのか。それが妙に頭に引つ掛かり訊いてしまった。

そして、この判断が俺の——俺たちの運命を大きく動かす事になるとは、この時はまだ思いもしなかった。

Prologue Episode 2 夕暮れの街

夢を見ていた。

子どもの頃の夢。幸せな夢。

決して裕福とは言えなかったけど、ささやかながらも満ち足りた幸せな日々。

今でも時々、あの時の夢を見る。

どんなに願っても、祈っても、悔やんでも、もうあの幸せな日々には戻れないと言うことは分かっている。

だから…… あたしは、守るって決めた。

もう二度と、あたしと同じ想いをする人が生まれないように――。

\* \* \*

高校に入学して早ひと月。ゴールデンウィークが過ぎ、つい先日まで薄紅色の小さく可憐な花を咲かせていた校庭の桜は散って代わりに鮮やかな若葉が芽吹き、寒くもなく暑くもない心地よい日差し、頬を撫でる爽やかな風、遠くには青空を覆うように高く伸びる真っ白な入道雲は、少しずつ春から夏へと季節の移り変わりを感じさせる。

そんな、過ごしやすい初夏の日の放課後。

この春から、星ノ海学園高等部に通っているあたしは、同学園の生徒会室の生徒会長の席に座っている。なぜ、新入生のあたしが生徒会長の席に座っているかと言うと。実は、この春の新入生にも関わらずこの学園、星ノ海学園の生徒会長を務めているから。

その理由は、常人では決してありえない特異な能力チカラを有しているため。

——その力は、特殊能力。

特定の人間が、思春期の時期にだけ使える不思議な能力チカラ。

「今日はもう、来そうにありませんね。解散にしましょう」

腕時計の針に目をやりながら、細い路地まで細かに標されている東京都全域の地図が埋め込まれた部屋中央の大テーブルで、ボードゲームをプレイ中の二人の男子に声をかける。

「はい、了解しました」

「こんな時間まで残って結局時間のムダかよ」

一人は素直に頷き、もう一人はまるで当て付けのように悪態をついた。

前者の男子は、高城<sup>たかじょう</sup>。後者は、乙坂さん<sup>おとさか</sup>。二人ともあたしと同じ特異な能力を持つ特殊能力者で、関係は、ビジネスパートナーと言ったところですよ。

「まあまあ、そうおっしやらずに。見つからないと言うことは、良いことなのかもしれないのですから」

「はあ？ どう言うことだよ。僕たちと同じ特殊能力者を見つけて、保護することが、この生徒会の使命なんだろう？」

「はい、もちろんその通りです。ですが、見つからないと言うことは前回見つかった能力者で、全ての能力者が発見されたという可能性も否定出来ません」

「ふーん、そうとも取れるのか。もしそうなら、僕たちはお役御免だな」

「閉めますよ。ここに泊まるのなら止めはしませんけどー」

二人が片付けながらのんびり会話している間に帰り支度を済ませ、スクールバッグを肩にかけたあたしは一足先に生徒会室を出て、廊下から二人に部屋のカギを見せる。二人とも急いで帰り支度をして、生徒会室を出た。スタイリッシュな両開きの扉をしっかりと施錠して、学校を後にする。

「では、あたしはここで。お疲れさまでした」

校門を出たところの横断歩道の前で立ち止まったあたしは、二人に背中を向ける。

「なんだ？ お前は帰らないのか？」

「今日は、雑誌の発売日なので、向かいのコンビニでチェックしてから帰ります」

「へえ、お前も雑誌とか読むんだな」

「おや。乙坂おとさかさんは、お読みにならないのですか？」

「読むって言っても、マンガかファッション雑誌を立ち読みするぐらいだな」

「それは有意義ですね。実は私は、愛読している雑誌がありました——」

信号が赤から青に変わった。話込んでいる二人は放っておいて、ひとり、横断歩道を渡って目的のコンビニに入る。入り口を入つてすぐ横に鎮座する本棚に、新しく並べられた雑誌や週刊誌の見出しを一冊ずつチェックしていく。

本当のところあたしは、好んで購読している雑誌は特にない。今チェックしているのも、特殊能力者に繋がる記事がないか探しているだけに過ぎなかつたりするのだけれど。とりあえず、思春期の中高中生向けの雑誌とオカルト雑誌。それと少し気になる見出しがあつた雑誌を購入して、帰宅の途につく。

コンビニを出て五分ほどの場所に、星ノ海学園併設のマンションが建っている。あたしは、このマンションで一人暮らしをしているから「ただいまー」と挨拶をしても当然、返事は返つてこない。

「いただきますー」

寝室で部屋着に着替え、ちよつと早めの夕食を食べながら買つてきた雑誌の記事に目を通す。

中高生向けの雑誌は、人気アイドルやら流行のファッションの記事が中心で。オカルト雑誌の方も、海底に沈んだ幻の大陸やら心霊スポットなど能力者に繋がりそうな記事はなかつた。

読み終えた雑誌を重ねて、最後の雑誌を手にとつた。芸能スキャンダルなどのまったく興味がない記事は飛ばして、気になつた見出しの記事を開く。書かれているのは、同世代で国内外を問わず活躍する人々を紹介する記事。

スポーツで活躍する人、芸能界で活躍する人、カルチャーの世界で活躍する人。どの分野も、あたしが住む世界とは真逆の明るいスポットライトを浴びて輝かしい世界で活躍する人たち——。

「ん？ 異色の天才投資家は、現役高校生……？」

その他の記事とは比べ物にならないほどの異彩を放つ内容。記事で特集されている人物は、日本の経済界その物を動かすほどの天才的才能を持つ個人投資家として、ご丁寧の実績とプロフィールが写真（白黒）付きで紹介されていた。

「今年入学したばかりの高校一年生、同い年か。学校は大田区……ちよつと調べてみるか」

もしかしたら特殊能力を使って相場を操っているのかも知れない。協力者からはまだ何の連絡もないのだけれど雑誌の記事が気になったあたしは、翌日の午後の授業を一時間早く早退して、プロフィールに書かれていた高校へ調査へ向かうことにした。

\* \* \*

東京都大田区桜坂。地名の通り、桜並木が続く長い長い坂道を登りきった先に正門を構える学校は、都内でも有数の名門進学校。雑誌に紹介されていた人は、この学校に特待生として通っているみたいですよ。

あたしは正門の前で、能力者の調査をする時にいつも構えるビデオカメラを準備しつつ、下校してくる生徒が来るのを待った。そして――

「すみませーん、少しお尋ねしたいんですがー」

「フンツ……」

最初に声をかけた男子は、ただ無視するだけではなく、着ている制服を見て、若干小バカにしたような顔で通り過ぎていった。まあこんなことは、調査しているとよくあることなので想定内です。

――あたしに、もう少し色気があればちよつとは違うのかもしれないけど。さて、気を取り直して調査再開っす。

「ありがとうございます」

「いえいえ、それでは」

話を聞いてくれた、物腰の柔らかい二年生の女子にお礼を言って、

教えてくれた情報を一旦整理する。

まずは、この学校の生徒について。アイボリーカラーのブレザータイプの制服の胸ポケットのエンブレムの色で学年を識別できる。青が三年、赤が二年、そして、緑色が一年生。と言うことで、緑色のエンブレムの一年生を中心に話を聞くことにしましょう。

「ねえ、キミー！」

「ん？」

突然声をかけられて、顔をあげる。

そこには、都内屈指の進学校にはあまりそぐわない、髪を金色に染めたチャライ男子がニヤニヤと笑みを浮かべていた。左胸のエンブレムは青、三年生ですね。

「おつ、キミかわいいねえー。僕と遊びに行かない？ 奢るからさー！」  
「いえ、遠慮しておきます」

この手の輩は、誰に対しても同じようなお世辞を使ってナンパするから信用するに値しません。

「そんなこと言わないでさー。さつき男にも声かけてたじゃん、遊び相手を探してるんでしょ？」

「違います。人を探しているだけです」

「人？ 誰を？」

「この学校の特待生です。一年生の」

「一年の特待生？ ああ…… アイツか」

「えっ、知ってるんすか？」

「まあね！ 僕は情報通だから、この学校で知らないことはないよ」  
意外な一面つすね。何はともあれ、聞かない手はないつす。

「ふふーん、どーしよーかな〜？」

下心みえみえのニヤケ顔。仕方ないな。

「教えていただけるのでしたら、お茶に付き合ってもいいですよ」  
「マジっすか!? じゃあさっそく——」

「先に教えてください。内容次第で判断します」

「…… ガード固いつすね。まっ、いいか」

この学校、光坂大学附属高校に学業免除の特待生として入学。先の

実力試験は全教科満点と免除の学力はもちろんのこと、体力テストでも学年トップを記録と常人離れた運動能力も有している。

しかし、現在は学校を欠席がち。その理由は本業の投資家稼業の方へ力を入れているためらしいです。

「調子に乗ってるみたいだから、いずれはシメてやろうと思ってたんだけどねえー。まあ、あれかな？ 僕に恐れをなして逃げたってやつ」

——そうは思えないっすけど。この人、細身ですし。

さて、とりあえず必要な情報は一通り聞き出せました。あとは、どうやってこの場を抜け出すかですが……。

「おい、何してんだ？」

話を聞いていた金髪の男子と同じ三年生の男子が登場。結構イケメンっすね、タイプじゃないっすけど。その人はアゴで「今のうちに行け」と、あたしに合図してくれた。

「あん？ 何だ、お前かよ。悪いけど今日は、遊んであげる暇ないんだよねー。今から、デートだからさ！」

「はあ？ 相手も居ないのに何言ってるんだ、お前」

「ここに居るだろって、あれ？ 居ない!？」

隙を見計らって、あたしは既にこの場を離れていた。

「どうせ夢でも見てたんだろ。つーか今も、夢の中なんだけどな」

「……はい？」

「だから、これが夢なんだ。本当のお前は今、授業中の教室で机に突っ伏して爆睡してる」

「マジかよ!？」

「ああ、おおマジだ。ほら、お前に気づいた教師が、お前の後頭部に照準を合わせて教科書を振りかぶったぞ。しかも角だ」

「超やべえじゃん！ どうすればいいんだよ!？」

「よし、俺が殴って目を覚ましてやろう」

「…… スゴい痛いっす」

「その痛みも含めて夢だな」

イジって楽しんでるだけのようだが、とにかく逃がし

てくれた男子に感謝しつつ最寄り駅へと向かった。あたしは自宅マンションへは帰らず都心へ向かう電車を乗り継ぎ、教えてもらった六本木へ足を運んだ。

「ここか」

目の前にそびえ立つ超高層タワービル。

情報によると、このタワービル内に住居を構えているらしいのですが。これ以上は無理っすね、さすがにセキュリティが厳しすぎる。一介の高校生にどうこうできるレベルじゃない。

「はあ……」

思わず漏れる、タメ息。ふう……とひとつ小さく息を吐いて気持ちを切り替えてきびすを返す。

少し日が傾き始めた初夏の夕暮れ。

「――宮瀬 翔、か」

立ち止まり振り返る。

夕日に照らされて徐々にオレンジ色に染まっていくタワービル。

――……能力者でなければいいんですが。

あたしは、この調査が無駄足であることを祈りながら大勢の人たちが行き交う大都会の街を後にした。

## 偽り編

### Episode 1 ㄱ 出会い

教室に四時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。英語の授業を受け持つ女性教師はパンツ！ と一度手を叩いて、みんなの注目を集めた。

「はい、じゃあ今日はここまでよ。来週からの中間試験の問題は今日の授業内容からも出題されるから、ちゃんと勉強しておくこと。いいわねっ」

「ええーっ!?!」

教室中が不満一杯の声で包まれる最中、スカートのポケットに入れているスマホが振動した。取り出してディスプレイを確認すると「今、向かっている」と一言だけ記されたメッセージが届いていた。

「おにー!」

「あくまー!」

「うるさいわねっ。クラス委員、号令!」

「は、はいっ。起立——礼っ」

授業終わり恒例の挨拶も済んで、学校は昼休みに入った。

隣の席に人だかりができる前に、その人だかりの原因になる女子を連れて、あたしは廊下側後方の席で机の上を片付けながらダベっている、二人の男子のところへ向かった。

「お昼は、学食ですか?」

「そのつもりだけど」

「そうですか。では、今日も一緒に——」

「残念ですが、それは出来ません」

「おや、友利さん<sup>ともり</sup>。ゆさりんもっ!」

引くほど高いテンションで高城<sup>たかしやう</sup>が呼んだ「ゆさりん」とは、あたしが連れてきた女子——黒羽<sup>くろはね</sup>柚咲<sup>ゆさき</sup>さんのことです。

彼女は、現役の人気アイドルで西森<sup>にしもり</sup>柚咲<sup>ゆさき</sup>と言う芸名で活動している。まああたしは、アイドルにあまり興味がないのでよくは知りませ

んが少なくともクラスで人気者なのは間違いありません。

そして、彼女も特殊能力者。

半年前に原付バイクで事故死したお姉さんを、自分の体に降霊させる能力を持つています。ちなみにお姉さんは、美砂みささんと言います。

「協力者が現れます。生徒会室へ行きますよ」

「昼飯が、まだなんだが？」

「お昼ご飯より能力者保護が優先です、決まってるっしょ」

「承知いたしました。お昼は、出先のコンビニで済ませましょう」

「ハア、仕方ないな。さっさと終わらせよう」

と言うことで、四人揃って生徒会室へ移動。協力者はまだ来ていないため、各々椅子や空き箱に座って現れるのを待つ。そして、待つこと十数分——ボタンツ！と突然勢いよく扉が開き、顔が見えないほどの長髪で、全身ずぶ濡れの怪しい男子が生徒会室に現れた。

「能力は……予知能力……」

テーブルに埋め込まれた地図の上に、濡れた指先から一粒の水滴を落としてそう告げて何事もなかったかのように生徒会室を出く。

今の男子が、あたしたち生徒会の協力者。名前は、熊耳くまがみ。特殊能力者の能力と居場所を発見できる特殊能力を持ち、あたしたちに情報をもたらしてくれる。まさに保護活動を行うための最重要人物。

——それにしても、予知能力。  
告げられた能力に自然と、机に積み重ねた一冊の雑誌に目がいっ  
た。

「予知能力か、また定番中の定番な能力だな」

「そうですね。先日の——」

「高城たかじょう、場所はどこだ？」

乙坂おとしざかさんと話しているところを割り込んで、熊耳くまがみが落とした水滴の場所を訊く。もしあたしの勘が当たっているのならおそろく、あの場所のはず。

「ここは……六本木の高層タワービルですね」

——当たり前か。

やはり今回の能力者は、以前調査した光坂の特待生。予知能力で不

正に荒稼ぎしてるってところか。

「これを見てください。以前から目をつけていた記事です」

あたしは、三人が見やすいように雑誌を開いてテーブルに置いた。黒羽くろばねさんが、開かれたページの記事を読み上げる。

「えくと、天才投資家は現役高校生”って書いてありますね」

「なるほど、予知能力を使って株や為替の取引をしているんですね」

「はい、上げている利益も桁違いですから間違いないと思います」

「ですがなぜ、学校ではなく六本木のタワービルなんでしょうか？」

「確かにそうだな。普通なら今は学校に行ってる時間だろ」

高城たかしようの疑問に乙坂おとさかさんも同意した。事情を知らないのだから当然の反応。あたしは、今回のターゲットであろう人物について事前に調べてまとめておいた情報を伝える。

「あの一、光坂高校ってスゴいんですか？」

「乙坂おとさかさんが在席していた陽野森高校と一、二位を争う都内屈指の超名門進学校です」

「はわわっ………！」

まあ、彼は自身の能力を利用して不正入学したカンニング魔っすけど。

「……… 何だよ？」

「別に、何でもありませんよー」

バツの悪そうな目で見てくるってことは、自覚あるんすね。と、こんなことで時間を浪費するのは不本意、本題に戻しましょう。

「こちらの体力テストの方は予知能力とは無関係なので自前なんでしょうけど。学業の方は投資と同様に能力を使って予めテストの内容を予知している可能性が考えられます」

「ある種のカンニングですね」

「だから、どうして僕を見るんだよ！」

「いえいえ、何も他意はありませんよ」

「んー？」

同じやり取りが二度続き、事情を知らない黒羽くろばねさんは不思議そうに小さく首を傾げて高城たかしようと乙坂おとさかさんを見つめていた。

「さあ、早退して調査に行きますよ。あたしは一応報告してきますので、三人は先に校門で待っていてください」

そう言っただけは、雑誌を手に持って先に生徒会室を出た。職員室へは行かずに、空き教室でスマホを操作して電話をかける。

「あ、友利ともりです、ご無沙汰してます。はい、変わらずしています。あの、実は、お願いがありました——」

電話かけた相手は以前あたしの兄と親交があった、この記事の編集者——。

\* \* \*

地上約250m。TV局、オフィス、レストラン等の複合商業施設や公共公益施設を構える超高層ビルを、あたしたちは見上げていた。

「で、来たのはいいけど、どうやって調べるんだ？」

「確かにそうですね。制服のまま入ったら我々は浮いてしまいます。調査どころではなくなくなってしまいますね」

時刻は、まだ13時を過ぎて間もない。

タワーの前は、観光客やスーツ姿のビジネスマンでごった返している。時間が時間なだけに制服姿の学生は、あたしたち四人以外に見当たらない。

「そうだな……」

あたしは、チラツとタワーの脇に立つカフェに目をやった。カフェの店内は、満席というほどではないが多くの客が少し遅めの食事をしている姿が目に入った。

これくらいなら、まだ間に合うかも知れないっすね。

「そのカフェで対象者ターゲットが現れるのを待ちましょう」

「はいっ、わかりましたっ」

あたしの提案に黒羽くろばねさんが同意してくれことにより、タワー付近のカフェで待つことに決まった。それを聞いた高城たかしやうは、さっそく気を効かせて名乗り出る。

「では私は、先に行つて席を確保してきます」

「お願いしまーす」

人混みを避けながらカフェに移動。先に高城たかしやうが確保したオープン

テラスの席に座る。すぐに店員さんがお水と注文を取りに来てくれた。

「わたしは、季節のフルーツパンケーキとミルクティーをお願いしますっ」

「あたし、このローストビーフピッツアとボロネーゼパスタの HALF、それとアイスティーで！」

「僕は、アイスコーヒー」

「私も、同じ物で」

六本木タワーの入り口を注意深く観察していると注文した料理が運ばれてきた。テーブルに並べられた料理にあたしの目はきつと輝いていると思う。

「おお、うまそうっすね！ いただきまーす！」

さっそく運ばれてきたローストビーフピッツアを口いっぱいにはうばる。

「んうーんっ！ このピザうっまっ！」

冠のローストビーフはもちろん、モチモチした生地と濃厚だけど決してしつこくないチーズが口いっぱいには広がり、あまりの美味しさに思わず顔が綻んでしまう。それは黒羽くろばねさんも同じで、彼女もとても幸せそうな表情かおをしていた。

「はわあく、このパンケーキのフルーツみずみずしくてすごく美味しいっ」

運ばれてきた料理に思う存分舌鼓をうつ。

「どうだ高城たかしやう、見つかったか？」

「いえ、注意してはいますが、それらしき人物は見当たりませんね。乙坂おとさかさんの方は、いかがですか？」

「僕の方も同じだ。おい、友利ともり——」

さてさて今度は、パスタを食べますか。

「このパスタ、うっまー！」

「ったく、こいつは……」

ゴロゴロしたソースが生パスタに絡んでこれも絶品！ このお店は当たりっすね。雑誌の情報もバカにならないなあ。

「友利っ！」

「——うわっ！ なんですか？ 急に大きい声を出して  
せっかくお昼を堪能してたのに。」

「何度も呼んだからな。さっきの雑誌を見せてくれ」

「はいはい、雑誌つすね。はい、どうぞ」

一旦フォークを置いて、トートバックに入れた雑誌を乙坂さんおとさかに手渡して再びパスタを食べる。うん、やっぱりうまい。

「ったく、本気で探す気あんのかよ……」

ブツブツと小言を呟きながら受け取った雑誌を開らいて特集記事を読み始めた。

「本格的に投資を始めたのは去年からみたいだな」

「そのようですね。ですが今年だけでも億単位の利益を出してますよ……？」

「天文学的数字すぎて訳がわからないな……ん？」

「どうしました？ 何か気になる事でもありましたか？」

「このページ以外の他にも付箋があるぞ」

「おや、本当ですね、開いてみましょう」

「六本木グルメ特集。六本木タワービル近くの絶品ローストビーフピッツア！」

乙坂さんおとさかは無言で雑誌を閉じると顔を上げて、高城たかじょうに問い掛けた。

「なあ？ 高城」

「はい……」

二人は横目であたしを見ながらコソコソ内緒話を始めた。

男らしくないな。どうせ、このピザを食べたいだけだったんじゃないのか？ とか思ってるんしょ。まあ別にいいですけど、美味しいし。

「すみませーん！ 店員さん、このローストビーフピッツアの追加お願いしまーす！」

「おい、友利ともり。お前、真剣に探す気あるのか？」

「ん？ ありますよ？ 大丈夫つすよ、気長に待ちましょう」

「んな悠長でいいのかよ」

「いいんすよー。ほら、ひと切れピザあげますからおとなしく待っていてください。はいっ、あーん」

テキトーな返事を返し、乙坂さんおとしがの口元にピザを差し出す。

「い、いや、それは……」

目は泳いで、あからさまに動揺している。

「何意識してんすか？」

「お前が意識しなさすぎなんだよっ。人も多いじゃないかっ！」

「あなたは中学生っすかー？ ほら、さっさと口開けるっ！」

半ば強引に口に押し付けると、ようやく観念してピザを食べた。

「う、うまい…… うますぎるっ！」

「ですよねっ」

やっぱり美味しいものには、どんな不機嫌だった人でも笑顔にする魔法がある。それに相手が笑顔だと何だかこっちも嬉しくなりますね。

「ん？ 何見てんすか」

なんだか意外そうな顔で見られている気がする

「いや、何でもない。それより、もうひと切れくれないか」

「ええー？ 自分で頼めばいいじゃないっすかー。一枚も小さいですし」

「いくら小さくてもさすがに食べれない。コンビニで昼食べたし」

「ハア…… もう仕方ないなー。ひと切れだけっすよ」

そんなあたしたちの会話を高城たかしようと黒羽さんくろぼねは、どこか遠い目で見るように微笑んでいる。

「青春ですね」

「はいっ」

黒羽さんくろぼねと話していた高城たかしようは、唐突にワナワナと小刻みに身体を震わし出した。どうせまたろくでもない妄想でもしているんでしよう。黒羽さんくろぼねも、それを本能的に察知したのかクエスチョンマークを浮かべながら、少しのあたしの方に椅子を移動した。

「なあ、もしかして僕たちが到着する前に移動したんじゃないのか？」  
「確かに、それはあり得ますね」

このカフェに来店してから三時間近く経過しても調査対象の予知能力者が姿を見せないことに、乙坂さんおとさかと高城たかしやうは少し焦りを見せ始めた直後、あたしのスマホからアラームが鳴った。ポケットからスマホを取り出してアラームを止めて席を立つ。

「さて、では行きましょう」

「帰るんですか?」

黒羽くろばねさんの無邪気な質問に「帰りませんよ。何しに来たんですか? 会いに行くんです」と少し呆れながらあたしは答える。

「会いに行くって。いったい誰に会いに行くんだ?」

「能力者つすよ、決まってるっしょ」

「……は?」

「え〜と?」

「それは、どういうことなのでしょう?」

能力者に会いに行くと言う言葉に乙坂おとさかさんは間の抜けた声をあげて、他の二人も同じような反応をしている。

「察し悪いなく。ここにくる前に16時に会えるようアポを取つといたんすよ」

「ちよつと待て! それなら昼から来る必要は無かったんじゃないのか? てか、どうやって連絡を取つたんだ?」

「そんなの決まってるっしょ、1日20食限定お一人様一食限りのローストビーフピッツアを食べにきたんすよつ。あとついでに、雑誌の編集者が以前兄と親交があった方なので連絡して取り次いでもらつたんです」

「ピザが本命で能力者はついでかよ! しかも二枚食べるために僕たちを利用したのかっ!」

「乙坂おとさかさん、落ち着いてください。今は言い争っている場合ではありません」

「そうですよー、約束の時間に遅刻しちやいますよー?」

二人の説得に渋々頷いた乙坂おとさかさん。

何はさておきあたしたちは、予知能力を持つ特殊能力者と会うため六本木タワービルへ向かう。予知能力者との約束の時間10分前に

六本木タワーのドアを潜った。

「スゴいな、ここ」

「ええ、そうですね」

高城は、乙坂さんの感想に同意。

タワーの中は解放感を感じるエントランスが広がり、半吹き抜けの天井、長いエスカレーター、スタイリッシュなデザインの内装の中を移動する人たちを見れば、住む世界が違うことは一介の学生であるあたしたちが感じるには充分だった。ただし、黒羽さんひとりを除いて。

——さすが芸能人、よく来るTV局が入っているとは言え、落ち着いてますね。さてあたしは、カメラの準備をしておきますか。

「星ノ海学園高等部の友利奈緒と言います。16時に、宮瀬翔さんとお会いする約束をしているのですが」

エントランスのクロックで、カウンター越しに女性スタッフに用件を伝える。

「星ノ海学園高等部の友利奈緒さまですね。はい、お話は伺っています。居住者用のエレベーター内の端末に、こちらのカードキーをタッチしてください。このカードキーは使い捨てとなります。午前0時が使用有効期限となっております。以降はお使いできなくなりますので、お気をつけ下さい」

「わかりました、ありがとうございます」

スタッフにお礼言ってから振り向き、三人をうながす。

「では行きましょう」

「ああ」

「はい」

「宮瀬、翔さん？ んー……？」

「柚咲、どうかしたのか？」

「あつ、いえ、なんでもありません。きっと気のせいですねっ」

ついてこないから振り返ると黒羽さんは可愛らしく手をパタパタと振って、乙坂さんは軽く首を傾げていた。

「何してるんですかっ？ 置いてくぞー」

「すみませ〜ん、すぐに行きま〜すつ。乙坂さん、行きましようつ」  
「あ、ああ……………」

二人が来るのを待ちながらボタンを押してエレベーターが降りてくるのを待つ。すぐにやって来て高城が小声で乙坂さんに話しかけた。

「乙坂さん……………」

「なんだ？」

あたしの後ろにいるから顔は見えませんが、声色から真剣さが伝わってくる。

「乙坂さん……………」。先ほどゆきりんと一体何を話していたんですか!？」

「まともにも聞こうとした僕がバカだったよ」

——まともにも相手する必要はないっすね。

その後も高城は何やら追及していましたが乙坂さんは全て無視を決め込んだ。

一階に到着したエレベーターに乗り込み端末にカードキーをタッチすると、エレベーターのドアが閉じて自動に動き出した。

「我々が今日ここに来ることは、予め『予知能力』で予知しているかも知れませぬね」

再び話を切り出した高城。

今度は本当に真面目な話。あたしも同意した。

「そうだな…………… そうですね。あたしたちの能力も既に予知され、何かしら対策をとられていることは否定できません。気を引き締めて行きましよう」

「怖いこと言うなよ」

「少しは緊張感を持ったらどうですか？」

「…………… す、すまない」

少し威圧的に言うと、乙坂さんは素直に謝った。

エレベーターは20階で止まる。あたしたちは、エレベーターを降りた。そして、降りた先には——。

「これは…………… 初めて星ノ海学園の併設マンションを見たときも凄

いと思いましたが。これは驚きましたね……」  
「はわわ〜……」

「いや、驚くなんてモノじゃないだろ。エレベーターを降りたら目の前が玄関なんだぞ……！」

目の前には玄関が一つあるだけで他に何も無い。このワンフロア全てが住居スペース、ペントハウスになっているみたいですね。

——ここが熊耳くまがみが見つけた予知能力者、宮瀬翔みやせしやうの自宅。あたしは小さく深呼吸して、インターフォンに手を伸ばす。

「さあ、行きますよー」

「お前は驚かないのか!？」

「ん？ ちゃんと驚いてますよ?。」

——それ以上に嫌悪感が勝つてただけで。

「さあ押しますよ? 気を抜かないでください」

一言忠告してからインターフォンを押した。

するとすぐに反応が返ってきた。

『はい』

「星ノ海学園の友利奈緒ともりな おです」

『どうぞ』

カチャツとロックの外れる音がした。

ドアノブに手をかけて引く。重量感がありながらもドアはとても軽く滑らかにスムーズに開いた。

「おじゃましまーすっ」

室内へ入る。あたしたちを出迎えたのは、赤いネクタイにアイボリーカラーのサマーセーターを着た制服姿の高校生。

自然な黒髪ながら光に角度によっては染めていないにも関わらず若干茶色に反射して見える。襟足の長さは乙坂おつさかさんと同じくらいで、前髪は左から右に流れていて顔は隠れていない。身長は高城たかしやうよりも高く、モデルと言われても疑わないほど容姿は整っていた。

「星ノ海学園の生徒会の皆さんですね。お待ちしていました」

初めて対面した宮瀬みやせさんは、モノクロの写真で見た印象よりもずっと穏やかな雰囲気です。とても能力を悪用しているようには思えない

くらい、とても優しく微笑んでいた。

ただ、その微笑み、どこか陰を帯びているように見えたのは、気のせいだったのだろうか――。

## Episode 2 特殊能力

15時。午後の取引を終え、同じタワー内の自宅に戻る前に商業施設が集まる一階の洋菓子屋で茶菓子を購入したのち、客人を迎えるための準備を始める。昼に連絡を寄越した編集者の話では、訪ねてくるのは星ノ海学園の生徒会長ではなく、他にも数人の生徒会役員を引き連れて訪ねて来ると言う話だった。

家を訪ねてくる全員が、俺と同じ高校生。それならこちらも制服の方が話はしやすいだろうと思い、久しぶりに学校の制服に袖を通しながらおもてなしを考える。

星ノ海学園の生徒会長は、同い年の女子。名前は、ともりなお友利奈緒。他の面々は、性別も学年も不明。とりあえず、コーヒーと紅茶を用意しておくことにして。同タワー内の洋菓子店で調達したケーキの箱を冷蔵庫に入れて、物置の奥から何カ月前に株主優待で貰ったティーセットの入った箱を引っ張り出し、キッチンに備え付けの食洗機に入れて、ダイニングテーブルでコーヒーマーカーとティーバッグ、スティックシュガーなどもてなしの準備を済ませる。

少しゆっくりしていると、約束の時間の十分前まで迫っていた。

洗浄、乾燥を終えた食器を並べつつ掛け時計に目をやる。クロークで部屋を訊ねる時間と移動時間を考えれば、五分ほどと言ったところだろう。しかし――。

「星ノ海学園の生徒会、か……」

彼女たちを待っている間に星ノ海学園のホームページを調べたが、特に突出した点もないごく普通の私立学校だった。そんな学校の生徒会が一体どんな用件があるか、正直なところ皆目見当もつかないが、所詮相手は高校生。そこまで警戒する必要はない。

ソファアームに深く身体を預けて、客人の来訪を待つ。そして、ほぼ予想通りの時間にインターフォンが鳴り響く、どうやら到着したようだ。

――大丈夫、上手く出来る。よし、始めるとしよう。

自身に言い聞かせ、ひとつ深い息を吐いて、席を立ち対応へ向かう。

「はい」

『星ノ海学園の友利奈緒です』

「どうぞ」

端末を操作して、オートロックを解除。一呼吸間があったから、ゆつくりと扉が開いた。

一番最初に目に入ってきたのは、両サイドを結んだセミロングの髪、大きく綺麗な瞳の少し幼さが残る女の子。

——この子が、友利奈緒さん。

「おじやましまーすっ」

「星ノ海学園の生徒会の皆さんですね。お待ちしていました」

「今日は、急な申し出を受けてくださりありがとうございます」

彼女は会釈し、丁寧に礼の言葉を述べた。

「いいえ。どうぞ、お上がりください」

「失礼しまーす。さあ行きますよ」

後ろの三人（男子二人、女子一人）を促して、部屋に招き入れる。

俺の後に続いてリビングに入った彼女は「うっわ、すっげ〜！」と、とても興奮した様子で声を上げ、右手に構えたビデオカメラを回し始めた。彼女から少し遅れて、三人もリビングに入ってくる。

「確かに、これは凄いな」

「壁一面がガラス張りですね。六本木の街を一望出来ますよ」

「わあ〜っ！」

腰まで延びる髪の左側を黒いリボンでアップにした女子はパタパタと、一面ガラス張りの窓に駆け寄って行った。二人の男子も歩いてだが、同じように窓際に立ち窓の外に広がる街並みを眺めている。

「どうぞ、お掛けください」

テンションが上がっている四人に微笑みかけながら、ソファの方へ案内。ガラステーブルを挟み、星ノ海学園の生徒会と対峙。さっそく用件を訊ねる。

「どういった用件なのでしょう？」

「はい。その前に……」

奈緒は簡単に、他の三人を紹介を始めた。

サイドアップの女生徒は、黒羽柚咲。眼鏡を掛けている男子は、高城丈士朗。掛けていない方が、乙坂有宇と言う名前。そして年齢は、全員同じ同級生と判明。

「なあ、高城」

「なんででしょうか？」

「友利は、どうして——」

乙坂と高城は、なにやら小声でヒソヒソ話をしている。どうやら何かいつもと勝手が違うらしい。しかし奈緒は、特に気にするそぶりも見せず冷静に話しを切り出した。

「あなたは、光坂高校の学業免除の特待生だそうですね？」

「ああ、はい。そうですね。一応」

俺が今、在席している学校である光坂大学附属高校は、陽野森高校と並び都内で一、二を争う屈指の進学校。しかしなげ今、そんなことを確認する必要があるのだろうか。

「失礼ですが。全国模試や高校の成績を調べさせてもらいました。どれも見事な成績です」

「それはどうも、ありがとうございます」

「それに、投資家としても成功されている」

以前インタビューを受けた雑誌の特集記事をテーブルの上に広げた奈緒は、まるで反応を探るのように一瞬鋭い目を向けた。何か特別な理由があつて接触を試みているのは確からしい。そこで俺は「まだまだですよ」と返し、あえてこちらから切り出すことにした。

「本題を、どうぞ」

見透かされたにも関わらず、彼女は動じない。むしろ真剣な表情で、まっすぐ俺を見据えた。良い度胸をしている。

「私たちは、あなたが不正を行為を行って、学業と投資家としての成功を納めていると考えています」

「そうなんですか？」

その想定外の言葉に俺は、奈緒から視線を外して他の三人に確認を求めた。彼女の言葉を肯定するように先ず一番に高城が頷き、乙坂と黒羽もひとつ遅れて同じように頷いた。どうやら三人とも、彼女と

共通の認識を共有しているらしい。奈緒なおに視線を戻す。

「それでそれは、どういった方法で行っていると考えているんですか？」

否定せずに不正の方法を聞いたことに対して、奈緒なおは——釣れた！  
と言わんばかりに若干口角をあげ、勝ち誇ったような表情を見せる。

まあ、疑われたら先ず否定から入るのが一般的。おそらく何か確証があつて来たんだろうけど。俺は、不正行為を何一つとして行っていない。証拠に、インサイダー取引での容疑はもちろんのこと事情聴取すら一度も受けたことはない。

だが、次に彼女から発せられた答えに、俺は——。

「予知能力です……！」

「……予知能力ですか？」

予知能力。考えもしていなかった言葉を聞いてた俺は、左手を口元に持っていき、少し下に視線を落とした。そのしぐさのせいなのか、彼女は更に続けて追い打ちをかけるようにたたみ掛ける。

「あなたは予知能力を使い、事前にテストの内容と株価の変動を把握している」

——しかし、まさか予知能力とはね。まったく、想定外もいいところだ。

「ですが。その能力ちからは思春期にのみ発病する突発性の病気のようなもので、いずれ消えて無くなります」

——使えると思つたが、よりよつてこんな面倒な能力モノに化けたものだ。これでは意味がないじゃないか。けど、どうやって能力を知つた？　こんなことを話すと言うことは、何か確信があつてのことだろう。

「あの！　聞いてますか？！」

考え事をしていると、奈緒なおは不機嫌そうに声を上げた。若干苛立ちを感じているような表情かおをしている。

「あ、はい、聞いてますよ。どうぞ、続けてください」

「ほんとおつすか？！」

目を細めて疑念と抗議の声を上げた彼女は、大きくタメ息をついて仕切り直して話を続けた。

「まーいいです。とにかく、このままその能力を使い続けると酷い人生を送ることになります」

「と、いいますと?」

「いずれ科学者に捕まり、実験台にされます」

——なるほど、それを知っているのか。しかし、一学生いちがくせいが知っているのは妙だ。表向きには普通の学園を装いつつも、ある程度情報を保持している組織と繋がっていると見て差し支えないだろう。更には、特殊能力を探知・探知出来る能力者がいる、と。

「そんな絵空事を信じろと?」

「まー、そう言うでしょうね」

この切り返しは想定内と言うことらしい。つまり、今までにも同じ活動をしてきた実績がある。確定だな、探知能力が居る。

「美砂さん、お願いしまーすっ」

「美砂さん?」

名前からして女性。でも奈緒なお以外の女子は、サイドアップの女子しか居ない。彼女は確か、黒羽くろばね柚咲と紹介されたハズだけど——。

「はい? —— ったく、しようがねえーなあ!」

話を振られた、黒羽くろばねの雰囲気が一変した。

彼女がパチンつと指をならすと、人差し指の先端から赤い焰が出現した。炎を自在に操る能力——さしずめ”発火”と言ったところか。制約次第ではあるが、なかなかレアな部類の能力。

「各々違いはありますが、あたしを含めて、ここにいる全員が特殊な能力を持っています。信じていただけましたか?」

——四人とも特殊能力者。さり気なく三人を流し見る。やはり居るのか、この中に、探知・探知系能力者が。

「仮にそうだとして、私にどうしろと?」

「我々の学校——星ノ海学園に転校してください。そして、能力が消えるまで通い続けてください」

どちらに転ぶか分からないが面白い。

それに俺の答えは、話しを聞いた時から決まっている。

「なるほど…… わかりました。構いませんよ」

「おっ、マジっすかつ！」

「あれ？ なんだすんなり行っただな」

「そのようですね」

「アタシのお陰だな！」

得意気に胸を張る美砂？ あるいは、柚咲。二重人格というヤツなのだろうか。とりあえず、最初の穏やかな女子を黒羽、口調の強い時は美砂と認識しておくことにして、話を戻す。

「理解が早くて助かります。では、さっそく転校手続きの書類を——」  
奈緒は、雑誌を入れていたトートバックから入学案内の封筒を取り出した。その前に伝えることがある。

「ですが、あなたたちはひとつ勘違いしている事があります」

その言葉に奈緒の手が止まり、顔上げてまっすぐ俺を見る。

「勘違いとは、何でしょうか？」

「私は、予知能力は持っていますよ」

「…… 信じてもらえたんじゃないんですか？」

「もちろん信じましたよ。目の前で、美砂の特殊能力を見せられましたから」

「では、なぜですか？」

めんどーなヤツだなく、と言いたげに俺に問いかけた。

「先ほども言いましたが、予知能力は持っていないからです」

俺の返答を受け、奈緒の顔が歪んだ。女の子がしている顔じゃない。  
い。

「ああん!? なんだそりゃ、めんどくせえーなっ！ 燃やすぞっ!？」

「落ち着け！ 美砂！」

俺の態度に痺れを切らした美砂がキレ、手のひらから深紅の炎を発生させ威嚇してきた。乙坂と高城が慌てて止めに入るが止まらない。  
い。

それどころか無理に押さえつけようとしているから若干火の粉が舞っている。引火したら惨事になりかねない。

——仕方ない、使うか。

精度にはやや不安が残るが、予知能力など持っていないと信じさせるには絶好の機会。そう思った矢先だった。

「火を消してください。スプリングクラーが発動します。そうなれば部屋中は水浸し、もちろんあたしたちも。濡れたまま電車に乗って帰るつもりですか？」

「……チツ、そいつはセンスがねえな」

奈緒の説得に素直に従い、美砂は火を消した。

「……水浸し」

「どうした？」

「乙坂さん、台風の中継を思い出してください。薄着の女性ばかりを狙う、あの卑猥なカメラワーク！　つまり今スプリングクラーが発動すれば、服が透けたゆきり——」

『ひくなっ！』

力説する高城に、奈緒と美砂はびったり声を揃えてツツコミを入れ。さらに美砂には、「もう二度と袖咲に近づくな！」と言われ必死に頭を下げて謝罪している。その様子にタメ息をつき呆れる奈緒と乙坂。

——もう話どころじゃないな。

俺は、ソファアールから立ち上がり窓辺へ歩いていく。すっかり暗くなった東京の街並みを眺めながら、彼女たちに提案を持ちかけた。

「今日は、ここまでにしましょう」

「……そうだな、そうですね。今日のところは失礼します。行きましょう」

奈緒は、俺の言葉をあつさり受け入れる。三人にも帰ることを促した。あまりにも潔く引く奈緒に、乙坂は問いかける。

「いいのか？」

「状況証拠だけで物的証拠は何もありませんから。仕方ないっしょ？」

その奈緒の言葉の後に「は？　なんで？」と、乙坂の声が聞こえた。その直後——強烈な違和感が身体を襲う。まるで体が支配される

ような、とてつもない感覚に思わず笑いが込み上げてくる。

必死に平静を保ちつつやや視線をずらすと、窓ガラス反射して、戸惑っている奈緒なおと乙坂おとさかの姿が見えた。

さっきのやり取りから見ておそらくコイツは、乙坂おとさかの能力か。冷静を装い振り返る。

「外は、もう暗いですね。タクシーを呼びましょうか」

「いえ、大丈夫です。失礼します」

「そうですか。では、お気をつけて」

早足で部屋を出ようとする背中を声をかける。

「友利さん」

「ん、何ですか？」

「また」

「……はい」

奈緒なおに声をかけたあと、訪てきた時と同じように微笑んで四人を玄関まで見送る。四人は玄関を出てエレベーターに向かうが、その途中で黒羽くろばねは振り返り、どこか観察するように俺を見つめてきた。

不思議に思った俺は首を少し傾げて、黒羽くろばねに声をかける。

「どうしました？」

「あの、前にどこかでお会いしたことありませんか？」

話し方も雰囲気も部屋に来た時と同じに戻っていた。どうやら袖咲ゆさきになったらしい。やっぱり二重人格なんだろうか。

それはとりあえず置いておいて、左手をアゴへ持っていき記憶を辿る。だがいくら記憶を辿っても、彼女に見覚えはない。

「いえ……、初対面だと思いますよ」

「そうですか？　じゃあわたしの勘違いですね、すみませんっ」

「いいえ。外はもう暗いですからお気をつけてお帰りください」

「はいっ」

ペコッと頭を下げると奈緒なおたちの方に駆けていった。

彼女がエレベーターに乗り、扉が閉まるのを確認してから俺は部屋に戻る。リビングのソファに座って目を閉じ、先ほどのことを思い返す。彼女たちの用件は、俺の予測を遥かに越えたものだった。ただ

の私立高校だと思っていた星ノ海学園が、まさか特殊能力者を見つけ出し転校させることを目的としていたなんて。そんなことは頭の片隅にすら存在しなかった。

——それにしても「略奪」とは、本当に驚いた。

これ程の能力は、米国でもお目にかかれなかった超レアな能力。

それに袖咲、そして美砂と呼ばれていた女子。多重人格なのか、特殊能力なのかはわからなかったけど。「発火」もユニークな能力だ。

あとの二人……奈緒と、眼鏡をかけた男子生徒……高城と言ったか、いったいどんな能力を保有しているのか興味がでてきた。また笑いが込み上げてくる。可笑しなモノだ。かつては憎しみさえ覚えていた特殊能力のハズが、こんなことを考えるなんてな。

「……よし」

ポケットから携帯を取り出して、編集者から聞いた番号へショートメールを打つ。用件を打ち終えて送信ボタンを押す。返信は来なかったが、代わりに約束のインターフォンが鳴った。ソファアを立ち応対。玄関のロックを解除すると、ゆつくりドアが開いた。

玄関に立っていたのは、ショートメールを送った相手——友利奈緒。

## Episode 3 教鞭

翌朝、いつもの起床時間よりも一時間早く起きて自宅を出た俺は、桜並木の長い坂道を歩いてきた。久しぶりに歩く通学路。この長い長い坂道を上り終えた先、街全体を見渡せる小高い丘の上に正門を構えた光坂高校の敷地へ、俺は約一月ぶりに足を踏み入れた。

まだ登校する生徒もない静かな校舎に入り、下駄箱で靴を履き替えて、二階にある職員室を目指す。自分の足音だけが響く物静かな廊下、階段を上り職員室の前に立った俺は、軽く戸をノックをしてドアノブに手をかけた――。

\* \* \*

「なんだと……?」

「な、なんと!?!」

「はわわっ?」

昨日、自宅を訪ねてきた四人のうち三人が慌てふためいている。ただ唯一彼女は、奈緒なおだけはいたって冷静。最前列の窓際の席で頬杖をついて、窓の外に広がる雲ひとつない青空を眺めている。

「宮瀬みやせ翔しょうです。光坂大附属高校から転入して来ました。よろしくお願いたします」

第一印象が、とても大事。丁寧に頭をさげてから顔をあげてニコツと愛想よく微笑んでおく。すると女子生徒からは黄色い声、同時に男子生徒からは刺すような痛い視線をいただいた。そんな転校生が来た時に起こる特有のざわめきの中、クラス担任は騒ぎを治めるため声を張り上げた。

「静かに! 大事な連絡事項がある。彼には少しの間だが、ケガをされ入院された仲村なかむら先生の代理として、英語の教科を受け持つってもらうことになっている」

「はあーっ!?!」

大声をあげて、バン! と大きな音が教室中に聞こえるほど、机に

勢いよく両手をついて立ち上がった乙坂<sup>おとさか</sup>。ついでに男子生徒たちから落胆の声……というより、悲鳴に近い嘆き声があちこちから聞こえてきた。中には机に突っ伏して、この世の終わりを迎えたような顔をしている男子も居る。

どうやら、英語教師の仲村<sup>なかむら</sup>先生の入院が余程ショックだったらしい。星ノ海学園<sup>せいのうがくえん</sup>へ来る前に入院先病院に立ち寄って挨拶をしたけど、かなりの美人だったから無理もない。それに女子からも、彼女の病状を心配する声が多数あがっているから、男女ともに人気のあるのが分かる。

「そこ、うるさいぞ。乙坂<sup>おとさか</sup>も座れ。ええー、彼は、飛び級制度があるアメリカで既に大学を卒業していて、教員免許も取得しているから何も問題ない」

担任の言葉を聞いて、先ほどとは別の意味でざわめき立ち「ウソだろ?」や「マジかよ」など、クラスメイトたちからは驚愕と困惑が入り交じった声があがる。しばらく収まりそうにない状況に担任はやれやれとひとつタメ息をついて、強引に終わらせるかかると。

「連絡は以上だ。では宮瀬<sup>みやせ</sup>くん、授業の方をお願いします」

「はい。それでは皆さん、教科書を開いてください」

\* \* \*

午前の授業は無事に終わり、学校は昼休みに入った。職員室で担任と授業の進行などについて談笑しながら午後の授業の準備を済ませたのち、生徒会室へ向かう。その途中午前に授業を受け持った、他のクラスの女子生徒に呼び止められた。何やら廊下では話をし辛いと言ふことで、校舎裏へ場所を移動して話を聞くことに。

「rail<sup>レール</sup>のID教えてください!」

校舎裏に着くなり目をつむりながら、スマホを差し出された。彼女の言う『rail<sup>レール</sup>』とは、スマホ専用無料通信アプリ。まるで線路の様にチャットでメッセージを繋いで複数人と同時にコミュニケーションを取れる便利なアプリケーション。

ただ俺の携帯は、スマホではないため自分の携帯を見せながらやりわり断りの返事をする。

「すみません。スマホではないので r a i l は出来ないんです。ごめんなさい」

「そうですか……」

とぼとぼ校舎へ歩いていく女子生徒の後ろ姿に罪悪感を感じながら見送り、気持ちを切り換えるため大きく深く息を吐いて空を見上げる。

朝と同じ、雲ひとつない晴天。ふと、校舎の窓辺からこちらを見ている女子生徒と目が合った。

「うっわあく、女子にあんな表情かおさせるなんて最低ですわねー」と言いたげに、彼女は小さく笑っている。

——急いそぐ。

校舎へ戻り、生徒会室へ向かった。

「いったい、どうなっているんだ!」

生徒会室の前に着くと、中から大きな漏れ聞こえてきた。この声は、乙坂おとしが。

「乙坂さんの言うように、何か裏があるのかもしれないね」

「でもでも、授業はとつても分かりやすかったですよ」

「はいっ。ゆさりの言う通り、とても分かりやすかったですねっ」

「ま、担任も領きながらメモ取っていたくらいだから……って、そんなことはどうでもいい! いったい何が目的か探らないと……!」

他の生徒会役員の声も漏れ聞こえるけど、さすがに盗み聞きを続けるのには少々気が引ける。極力会話を気にしないように努めながら、スタイリッシュな両開きのドアの片側を開けて、生徒会室に入る。

「すみません、遅くなりました」

「なんだと……?」

「な、なんと!」

「はわわっ」

三人は、俺の訪問に驚いている。

様子から見て、ここへ呼び出したことは聞かされていない。

「な、なんでお前が、生徒会室につ!？」

「あたしが、呼びました」

「友利が!？」

昨夜のやり取りが不穏だった事もあってか、奈緒の自分が呼んだと平然と答えたことに乙坂は、さらに驚きの声を上げる。

「はい、そうっすよ。しっかし、驚いたな」

「英語の授業を受け持ったことですか？」

教鞭を執ることになったことは急遽決まったため話していなかった。

「いえ、まあそれですけど。さっきので、三人目っしょ？」

「ああ、そっちのことですか」

奈緒が言ったのは、先ほどの女子生徒とのやりとりのことだった。

目が合ったから触れられるかもとは多少思ってたけど。一応、持っている携帯の機能上しかたなかったことを説明していると、乙坂が間に割って入ってきた。

「ちよつと待て! お前、いったい何が目的なんだ!？」

「おかしなことを聞きますね? 特殊能力者を実験台としている科学者たちから、特殊能力者を保護する。それが、この星ノ海学園……

そして、生徒会の目的ではないのですか?」

「はい、その通りです」

乙坂へ答えたつもりが、奈緒が肯定してくれた。昨夜、彼女から聞いたのだから間違っていないのは当然。しかし彼は、収まらない様子でさらに喰ってかかってくる。

「僕が言っているのは、そういうことじゃない! お前、昨日は転校を拒否してたじゃないかっ!」

「宮瀬さんは、予知能力を持っていることを否定しただけで、転校については『わかりました』って了承していたしよ」

「え? あ、あれ? そうだったっけ……?」

「ふむ。確かに、転校について了承していましたね。物別れに終わってしまいました」

「そういえば、そうでしたね」

奈緒なおのフォローに、高城たかしやうと黒羽くろばねも思い出したらしく肯定してくれた。ただあの時奈緒なおは、転校手続きの書類を持って帰ったから、乙坂おとさかが勘違いしてしまったのも無理はない。

「あの、ひとつお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ」

高城たかしやうは、ごく自然な質問をしてきた。

「なぜ、教鞭を？」

「ああ、それは、校長先生にどうしても頭を下げられたので仕方なくですよ」

それは、昨夜のこと。転校手続きの書類を提出するため星ノ海学園へ出向いた時のことだ。すっかり日も暮れて、夜空に星が瞬き出した頃、星ノ海学園を訪ねた。来賓用の玄関から職員室前の窓口へ行くと、職員室の中はどこか妙に慌ただしい様子だった。

とりあえず、窓口で事務員に転入手続きの書類を手渡し、帰宅しようとして廊下を歩いていたら、突然後ろから声をかけられた。振り向いて、声の主を確認すると、呼び止めたのは教師だった。のちのクラス担任。事情も分からぬまま、教師に校長室に連れて行かれて室内に入ると、校長と思われる人物が、とても判りやすく頭を抱えていた。

その理由は、この学校の人事について。星ノ海学園には学年ごとに一人ずつ教科担当教師がいるらしいのだが、現在、三人の内の一人名は定期的な研修で長期出張に出掛けていて、実質二人で回しているとのこと。しかし、もう一人がケガをして、救急車で都内の病院に救急搬送されたら連絡が入った。診断の結果は、全治三週間。しばらく入院が必要。

つまり現在、英語の教師は実質一人しかいない状況。今から代理を探すのも時間的に難しく、アメリカの大学で教員免許を取得していた俺に白羽の矢がたった。

そして翌日、つまり今日。

光坂高校を出たあとケガをされた英語教師。仲村先生なかむらが入院している病院を訪ねて、各クラスの授業の進行状況などを聞き、引き継ぎ

を済ませた。

「ゴメンね。宮瀬くん」

「いえ、お大事になさってください」

「この借りは必ず返すからねっ！」

といった感じで、こう言うことになってしまった。

因みに、仲村先生のケガの理由は、学生時代の友人たちとのサバイバルゲームらしい。

「なるほど、そのような事情でしたか」

「いきなり授業を任せられちゃうなんて、すごいですっ」

「つて言うか、本当に教員免許持つてるんだな……」

順を追っていきさつを話すと、みんな、ある程度納得してくれた。しかし、卒業に必要な単位のために取っただけだったが、このような形で役に立つとは思ってもよらなかった。

「ところで、その制服は光坂のもですよね？」

「ええ、昨日の今日だったんで制服は間に合わなかったんですよ」

「ああ、それでか」

それに実は、まだ正式な転校手続きは済んでいない。提出したのが夜だったため書類の処理は間に合わなかった。そんな訳で手続き上は体験入学と言う形だったりする。星ノ海学園の制服は、二・三日もすれば届くそうさ。

「はいはい、話はまた次の機会にしてください」

奈緒は、机にあった教科書を手を取った。

「じゃあ始めましょう。テスト勉強」

「今日も、やるのか……」

「当たり前っしょ。それに昨日出来なかった分を取り戻さないとならいんすから。今日は、下校時間ギリギリまで残ってもらいます」

「——なアツ!？」

露骨に嫌そうな顔をする乙坂に、彼女は更に追い討ちをかけた。

「と言うことで、さっそく始めましょう」

「はい。それでは私はまた、柚咲さんの勉強を見させていただきます  
！」

「よろしくお願いしまゝです」

「どうやら何日か前から来週の間試験に向けて試験勉強をしていたようだ。高城たかじょうは黒羽くろばねの勉強を見る、と言うことは……。

「宮瀬みやせさんは、乙坂おとさかさんの勉強を見てあげてください。あたしの教え方では、ご不満なようなので」

「……そんなこと一言も言っていないんだが？」

「言いながらも、思いきり目を逸らしている。とりあえず、部屋の隅のパイプ椅子を引っ張り出し、二人で乙坂おとさかの勉強を見ることになった。

「それで、苦手な教科は？」

「……ぜんぶ」

「と言うことです。この人は、赤点回避が目標です」

「了解。それじゃあ数学からいきましようか」

試験範囲をチェックしてから、テーブルを挟んだ正面に座っている乙坂おとさかに見えるように教科書を開いて置く。

「数学とか一番難しいじゃないかっ！ もっと簡単な教科とこころから手をつけて欲しいんだが……！」

「難しいそうに見えますけど、暗記する項目については文系の半分くらいです。それに試験範囲は分かっているんで、理解するのに時間がかかる応用問題とこ・文章問題ちやうもんは捨てます。残りの問題は、足算・引算・掛算・割算が出来ればどうにかかりますから解き方さえ理解すれば赤点回避くらいは簡単ですよ」

「……そんなことしなくても、お前の予知能力で答えを教えてくださいば——」

「はあ……」

大きなタメ息をついた奈緒なおは、冷たい目で乙坂おとさかを見据えた。

「あたしたちの能力は、いずれ消えるんです。前にも言ったつしよ？」

「……分かったよ、やればいいんだろっ！ クソツ！」

悪態をつきながらも、問題を解き始めた。

そして時間は過ぎ、中間試験を明日に控えた休日の夕暮れ。

「それでは、……までにしませう。おつかれさまでした」

「はい、おつかれさまです」

「おつかれさまでしたーっ」

「……終わった」

乙坂は、ペンを持ったまま机に突っ伏した。今日も朝から、通して試験勉強だったんだから仕方ない。

「まだ終わってません。本番は明日なんですから」

「……わかってる。じゃあ僕は帰るからな」

「はいはい、おつかれさまです。みなさんも夜更かしはせず明日に備えてください」

「はいっ、がんばりまーすっ」

「おまかせください。それでは我々もお先に失礼します」

乙坂に続いて、黒羽と高城も生徒会室を出ていった。俺は勉強道具を片付け、奈緒は部屋の戸締まりをしている。彼女が立つ窓の向こうには、オレンジ色に染まっていた空が広がっていた。

そのオレンジ色に輝く光の中で、彼女は振り返った。

「閉めますよ」

「はい」

俺たちは、一緒に生徒会室を出る。

「どうですか?」

「そうですね。数学と英語はいけると思いますが」

「そうっすか」

英語は授業を活用出来たのが大きい。数学以外の他の科目はあまり時間を割けなかったから正直ギリギリだと思う。それを分かっているから奈緒の顔から樂觀は一切見受けられない。

「ところであたしも教えて欲しいことがあるんですが」

「あ、はい、どうぞ」

階段の踊り場で、彼女は不意に立ち止まった。

『Please tell me your true ability. (あなたの本当の能力を教えてください)』

『It is a secret. (それは秘密ですよ)』

英語で訊かれ、英語で返す。

すると彼女は、少し不機嫌そうに目を細めた。  
そして試験は終わり、生徒会役員全員無事に赤点を回避することが  
出来た。

## Episode 4 制約

中間試験も終わり、目標であった赤点回避を生徒会役員全員が無事に達成した、テスト結果発表日翌日の昼休み。職員室で午後の準備をしていると、机に置いた携帯が振動した。着信は、メール。送り主の欄には友利奈緒ともりなおと表示されており、本文は『緊急連絡。至急、生徒会室へ来てください』と書かれている。

——緊急の用事。

どういった用件かは判らないが、緊急と書かれている以上待たせる訳にはいかない。昼食はあきらめて手早く授業の準備を済ませ、生徒会室へ向かう。職員室から生徒会室までは少し距離がある。授業を受け持ったことのあるクラスの生徒たちに授業のことで声をかけられたりしながら、清掃の行き届いた廊下を少し早足で歩く。

それにしても、この学校……天井へ目を向ける。

設置されている監視カメラの数が尋常じゃない、転入して一番最初に思ったこと。この廊下だけで、五台の監視カメラが設置されている。それに廊下だけではなく、その他の教室に必ずもある。トイレの中にはさすがになかったけど、これほどプライベートがない環境は異常。この学校の存在意義からして、能力者の監視が目的なのだろうが、果たしてここまでする必要があるのだろうか、と微かに疑問が湧く。

「おっと、失礼」

考え事をしながら歩いていたせいで、出会い頭にぶつかりそうになった。相手が女子ならロマンスが始まりそうなシチュエーションだが、まったく見覚えのない男子。受け持っていない三年生だろうか。

「いや、気にするな」

低いテンションの男子はズボンのポケットに両手を突っ込んで、俺が上ってきた階段を下っていく。その後ろ姿に目を離せなかった。なぜなら、鎖骨付近まである前髪で顔が隠れ、おまけに全身ずぶ濡れという異様な姿だったから。

しかし、こんなことをしている場合じゃない。急いで、生徒会室のドアをノックして中に入る。一緒に試験勉強をした四人が揃っていた。

「お待たせしました」

「何してたんすかー?」

生徒会長の椅子に座っている奈緒は目を細め、若干不機嫌そうな顔をしている。メールが届いてから既に十分以上経っている。素直に非を認めて謝罪し、午後の授業の準備と授業内容の質問に答えていたことを正直に伝える。

「そうですか、そういうった理由でしたら仕方ありませんね。遅くなる場合は連絡をください」

「わかりました。気をつけますね」

いつもの表情に戻った奈緒は席を立て、スポーツ新聞を片手に東京全域の地図が広げられたテーブルの前へ移動。

「ん? なんすか」

「あ、いや、あまり怒らないんだなって思って」

なぜかおそるおそる訊いた乙坂の質問に、彼女は小さくタメ息をついて答えた。

「事情が事情ですから。あたしたちの能力は、いずれ消えます。その先は、普通の人間に戻る訳ですから、進学にしても、就職にしても学業は必須っしょ」

「ああー、そっか」

「そういうことです。さて、では本題に入りますよ。高城」

「はい。水滴が示した場所は、都立関内学園のグラウンドです」

——水滴。さっきのずぶ濡れの男子が頭に浮かんだ。何か関係がありそうな気がするが、真意は不明のまま話は進む。

「よし、ビンゴ! これを見てください!」

奈緒は、どや顔でスポーツ新聞をテーブルに置く。どうやら高校野球の記事のようだ。

「いやー、前から目をつけていたんすよー」

広げられた新聞記事を手にとった乙坂は、掲載されている記事を読

み上げた。

「ナックルボールを操る超高校級投手。三試合連続完全試合プロ入り即戦力間違いなしの逸材、競合必須……」

後ろから覗き込んで記事を見ると、完全試合を達成した投手が写真付きで掲載されていた。

「完全試合って、すごいんですか？」

「もちろんですよ。そうですね、ゆきりんに分かりやすく説明すると、リリースしたシングルが三枚連続でダブルミリオンセラーを達成するといったところでしょうか」

「はわっ!?! そ、それは、とてつもないことなのではないのでしょうか」

「だから、おかしいって話なんだろう」

記事の投手、福山ふくやまのピッチング内容に盛り上がる三人。状況をまだ掴めていない現状の俺には、話の概要が見えてこない。

「この記事が何か？」

「あなたが来る前に見つかった、新たな能力者の情報です。能力は、〃念働力〃。百聞は一見に如かず、これを見ていただければ納得していただけるかと」

いつも持ち歩いているカメラとTVをケーブルで繋げて、再生ボタンを押した。すると、記事に出ていた関内学園ふくやまの福山投手の実戦投球の映像が映し出された。

「この映像は、記事が出たあと実際に練習を見学に行って撮影した動画です」

投手の手から放たれたボールはバッターの手前で大きく変化して、捕手のミットに収まった。

「想像以上に凄い落差の変化球ですね」

「これが、ナックルってヤツか。道理で完全試合達成出来るわけだな」  
「ところがどっこい。今度は腕に寄った映像に切り替えます。ピッチャーのリリースポイントに注目して見てください」

画面が切り替わり、リリースポイントに寄った映像が写し出された。

「ん？」

スロー再生された映像を見て、途轍もない違和感に気がついた。

「どうなさいました？」

「握りが通常のフォーシームですね。リリースした直後に回転が始まっていますから、おそらくバッター到達までに10回転前後はしていると思います」

「気が付きましたか、流石の洞察力つすね。その通りです」

「どういうことだよ？」

「ナツクルつて、指をこう立てて押し出すように投げるんです」

机の引き出しから取り出した野球の硬球を使って、奈緒はナツクルの握り方を実践して見せる。

「このようにして、ボールの回転を極力殺すことでナツクル特有の変化が生まれます」

「はわー」

「じゃあ、回転がかかっているのに揺れるってことは——」

ボールを借りて、ストレートの握りでボールを持つ。

「“念動力”で変化させている紛い物ということになりますね。そもそも、ストレートも立派な変化球なんですよ」

ストレートにしても、変化球にしても必ずボールに回転が加わる。その回転により進行方向後方の空気の圧力に変化が生じ、物体は圧力の小さな方向へボールが引き寄せられ曲がる。一方、ナツクルボールは、打者まで殆ど無回転に近い状態で到達することにより、自然と縫い目が空気抵抗を拾い、それによりボールの後ろを流れる圧力に不規則な乱れが生じて独特の変化を生み出す。

「ストレートは、進行方向へ進むボールがバックスピンの影響を受けて、揚力が働いて他の球種より落下が小さいんです」

「よ、揚力？」

「なるほど、気圧と風の関係に似ていますね」

「えっと、訳がわかりませんっ！」

高城は領き、乙坂と黒羽は頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「どうあれ、正当な方法でないことは間違いありません」

「では彼が、我々の次のターゲット『念動力』の能力者で間違いのないようですね」

「そういうことです。さっそく、調査に行くぞー」

「早退して行くんですか？」

今は昼休み。まだ午後の授業が残っているし、関内学園までは結構距離がある。昼休みの時間内に戻って来られるとは到底思えない。

「ご心配なく。生徒会特権で遅刻や早退をしても、あたしたちの内申点には影響ありません。あなたの時も同じように早退して会いに行きました」

「そうだったんですね。申し訳ないですが、午後の授業がありますのでご同行できません」

「授業を受け持つのも大変だな」

意外なことに乙坂おとさかが、一番最初に労いの言葉をかけてくれた。奈緒なおも納得して頷いてくれる。

「わかりました。では今回も、あたしたち四人で調査に向かいますよ」

「はい、参りましょう」

「はいっ」

「わかった」

生徒会室を一緒に出て、ドアの前で四人を見送る。

「お気をつけて、いつてらっしゃい」

「はいっ、行ってきまーすっ」

「行ってまいりますっ」

「ああ」

「行ってきまーす」

黒羽くろばねは、笑顔で。高城たかしやうは敬礼を。乙坂おとさかは、やや面倒そうに。奈緒なおは普段と変わらない感じで、調査へ出かけていった。四人を見送った俺は、急いで昼食を済ませ。職員室で予め用意しておいた、二年生の教科書と資料を持って、次の授業を受け持つ教室へと向かう。

——やはりこの学校には、能力を探知出来る能力者がいる。

生徒会室でのやり取りからして、おそらくあの全身ずぶ濡れの男子が探知能力を持っていると仮定して問題ない。どういった制約で発動しているのかはまだ分からないが、レアな能力であることは間違いない。

それにしても、これだけの能力者を束ねるこの学校の理事長は、いったいどんな人物なのだろうか。

\* \* \*

今日の授業をすべて終えて、職員室に立ち寄ってから生徒会室へ向かう。ドアをノックをすると「どうぞー」と、奈緒なおの声が返ってきた。どうやら、能力者の調査は終わったらしい。

一呼吸おいて、ドアを開けて中に入る。生徒会室には返事をした彼女が一人、椅子に座ってパソコン画面を眺めながらぽりぽりと、お菓子を食べていた。

「おつかれさまです」

「おつかれっす」

顔を上げて、劳いの言葉を返してくれる。

「お帰りなさい。おひとりですか?」

「黒羽くろばねさんは、本業。乙坂おとさかさんと高城たかじょうは、特にやることもないので帰りました。食べますかー?」

「ありがとうございます。いただきます」

生徒会長の席の一番近くにあったパイプ椅子に座って、ひとつお菓子をいただき、話を伺う。

「能力者の方は、首尾よく片付きましたか?」

「今度の日曜日に試合をすることになりました」

「試合ですか?」

「はい、野球の試合です。あたしたちが勝てば、能力の使用を止めることを了承してもらいました」

「そうですか。勝算の方は?」

「こちらも能力を使い対抗します。まあ、それでも五分に持ち込めるかどうかっすけど……」

頭の後ろで手を組んで背もたれに深く身体を預けた。勝算は、おそ

らく三割弱といったところ。

「なかなか大胆な賭けにできましたね。頑張ってください」

「何他人事みたいに言ってるんですか？ あなたも出るんすよ」

自分で自分を指を差し、確認を求める。

「当然っしょ。協力するって言ったんですから。というわけで、今から対策を練りましょう」

そんな訳で、二人で作戦会議をすることに。

「具体的な策はあるんですか？」

「抑える方は、乙坂おとしざかさんの能力を使えばどうにかかりますが。打つ方は…… はあく」

大きなタメ息をついて、今度は机に突っ伏してしまった。どうやらこれといった対策はないらしい。

「『略奪』で奪ってしまえば早いですよ？」

「それはダメです、倫理的によくありませんので！」

あくまでも能力者に納得して使わないことを約束させたい、と彼女は言った。優しい人。そういう考えなら全力サポートしよう。

「先ほどの映像を見せていただいてもいいですか？」

「どうぞ〜」

許可を貰いカメラをテレビにケーブルを繋ぎ動画を再生。スロー再生で注意深く付け入る隙を探す。

——完全に回転している。それにしても、この握り…… 家庭用のカメラでここまで鮮明に写っている。予選が始まれば取材は殺到するし、当然他校にも解析もされる。こんなの不正行為をしていると教えているようなもの。彼女の言うように即座に止めさせないと、とりかえしが見つからないことになる。

「何か見つかりましたかー？」

やる気のなさそうな声で訊いてきた。

「ええ、いくつか」

「えっ？ まじっすかっ」

がばつと勢いよく起き上がり、隣に寄ってくる。

「で？ でっ!? 何がみつかったんすか!？」

「少し落ち着いてください」

「落ち着いてるっすよ！」

と言いながらも、元々大きな彼女の瞳がもつと大きくなっているのが微笑ましい。

「彼の二セナツクルですが、大きく分けて二種類あります」

「二種類ですか？」

「これを見てください」

二種類の映像を交互に再生して、気づいたことを説明する。

「カウントを稼ぐ時や打ち取りたい時に使う変化の小さいナツクルと、空振りを狙う決め球の変化の大きいナツクルの二種類」

「それで？」

「序盤は特に、変化の小さいナツクルを多投します。体力、精神力、もしくは両方の消費を極力抑えたいんだと思います」

「大きく動かそうとすると比例して消費も激しくなると読んだわけですか」

「ええ。特に初球は、この小さな変化のナツクルが多いです。手を出してくれば儲けものって考えなんでしょう」

「つまり、狙いはその初球になりますね」

「はい。ですがこれは、第一打席の初球にしかチャンスはないと思います」

「なぜですか？」

「それは——」

その意図を話すと、難しい表情で腕を組んだ。

「なるほど。ですが、あのナツクルを一球で仕留められる自信はあるんですかー？」

「アメリカで、バッティングゲージに通いつめていた時期があったんで勘を取り戻せれば。それに、あのナツクルには致命的な欠点があります」

福山の投げる致命的な欠点、それは感情が入ってしまうということ。そして、唯一つけ込める点でもある。

「甘いコースだとヒットにされる可能性がある、でも球数は抑えたい。」

だから、あの小さな変化のナツクルは内か外の低めのストライクゾーンにしか来ません」

「盲点でした。ナツクルと聞いて、てつきり変化はランダムだと思い込んでいましたが、揺らしながらコースを狙って投げていたんですね」

所詮コースは内か外——ふたつにひとつなら十分に狙える。

でも当然、確実という訳じゃない。しくじった場合の保険は必要不可欠。彼女も同じことを考えていた。

「仮に失敗した場合、あたしたちでどうにかするしかない訳ですが。コースは絞れても実際に打てるかどうか」

ニセナツクルとはいえ、ナツクルと同じように左右上下に揺れながら向かって来ることは事実。揺れに惑わされれば、コースを絞れても打つのは至難の業。少しでも確率をあげるしかない。

「友利さん、近所にスポーツ用品店がありますか？」

「はい、少し歩きますが、ご案内します。あたしもー、ホームセンターへ行きたいんですがー」

そう言った奈緒は笑顔だった。

それも何かを企んでいるような——。

## Episode 5 朝練

昨夜セットしておいたスマホのアラームが鳴る前に、カーテンの隙間から差し込む朝日で、自然と目が覚めた。今日は、日曜日。いつもならもう少しのんびりしてから、能力者の調査へ出かけるところですが、今日は先日約束を取り付けた関内学園野球部と、あたしたち星ノ海学園生徒会一部、野球部の合同チームとの試合当日。

朝ごはんをしっかりと食べて、少しゆっくりしてから身だしなみ支度を整え、自宅を出る。実は、試合開始まではまだ時間がある。けどあたしにはやることあるので、ひと足先に星ノ海学園の野球グラウンドへ。

「友利さーんっ」

「ん？ ああー……」

マンションの外へ出たところで、誰かに呼び止められた。あたしを呼ぶ人なんてあまりいないので誰かと想像ば、黒羽さん。因みに、妹の柚咲さんの方です。彼女は、星ノ海学園併設マンション一室のベランダから、あたしに向けて手を振っている。そして「待っててくださいーいっ！」と、お願いされてしまったので、歩道の入り口で待つことに。

「お待ちせしましたー」

「それで、なにか？」

「洗濯物を干そうと思ったら、友利さんをお見かけしたので！」

同じ制服に身を包み、屈託のない笑顔で言っただけの黒羽さんに、ちよつとあつけにとられてしまった。結局流れのまま、一緒に学校へ行くことに。

「まだ、時間ありますよね？」

「試合の前に少し練習を、と思いましたが」

「あ、そうなんですわねー」

普段女子ソフトボールが使用している女子更衣室を借りて（許可を貰い済み）、動きやすいジャージに着替えて、まだ他に誰も来ていないグラウンドに出たあたしたちは、適当に距離を取る。

「左利きですか？」

「はい？」

「いえ、右利き用のグラブを反対に着けているので」

「えっ？ …… はわわっ!？」

あたしが左手にグラブを付けているのを見て、左手に着け直した。

「お訊ねしますが、野球は？」

「えっと、お父さんがテレビで見ているのを、わー！ なにかやってるっ、て感じで——」

「そうですか、わかりました」

予想通り、まったくの素人と判明。ま、スポーツも芸能も興味がな  
いと積極的に見ないですし、なにより彼女は多忙を極める現役のアイ  
ドルな訳ですから知らなくても当然。

とりあえず、ボールの投げ方と取り方を簡単に教えて、キャッチ  
ボールをしてみました、が——。

「す、すみませんっ」

山なりのゆっくり投げたボールも怖がって避けてしまい、練習にな  
りませんとは言っても、ボールは当たりどころが悪いと大ケガになり  
かねない硬球ですし、すぐに慣れろってのは酷なことですが。

「あっ—」

転がったボールを拾いに行つた黒羽くろばねさんが、グラウンドに来た人影  
を見つけた。あたしも、その人を目視出来た。

「宮瀬みやせさん、おはようございますっ—」

「おはようございます—」

昨日の放課後、試合当日の朝練を約束した宮瀬みやせさんが、約束の時間  
10分前にグラウンドに姿を現した。着替えも既に済ませて準備万  
端といった感じです。

「お二人とも、おはようございます。黒羽くろばねさんも、いらっしやっ  
ていたんですね」

「はい、友利ともりさんと一緒にキャッチボールしてました！」

「そうでしたか、それは楽しそうですね」

「はいっ、とっても楽しいですっ！」

なにがそんなに楽しいのやら。そもそも、キャッチボールは成立してませんし。と、そんなことをいつてる場合じゃありませんでした。

「さて。では、さっそく始めましょう」

「いいんですか？」

「いいもなにも本来の目的はそつちですから」

グラブをベンチに置いて、バックから取り出した別のボールが入った袋を宮瀬さんに手渡し、野球部の備品の金属バットを持って、右のバッテリーボックスで構える。宮瀬さんは袋を持ってマウンドに立ち、軽く足場をならしてから袋の中のボールを手を取った。

「あ、なにをするんですか？」

「見ての通り練習つすよ。相手投手が多投するナツクルの」

「なつくる？——って宮瀬、ナツクルを投げれんのかつ!？」

口元に人差し指を添えて頭の上にクエスチョンマークを浮かべていた黒羽くろばねさんに、突然、姉の美砂みやせさんが降りてきた。

「いいえ、投げれませんよ」

「はあ？ どう言うことだよ？」

「見てればわかるつすよ。お願いしまーす」

「あ、はい、いきます」

腕を組み、首をひねる美砂みやせさんを後目に特訓開始。セットポジションから足を上げた宮瀬みやせさんの投げたボールは、真つ直ぐな軌道を描き途中から急激に揺れ始め、手前で小さく縦にストンつと落ちた。かうじてバット先端に当てることが出来た打球は、ファースト方向へのポテポテのファウルボール。

——うくん、やつぱりそう簡単には打てないつすね。でも初球で当たられたのは幸先が良い証拠、昨日は、三球かかりましたし。

「ちよつと待て！」

改めて構え、二球目に入ろうとしたところで、血相を変えた美砂みやせさんが割って入ってきた。

「今、めっちゃ揺れたぞ！ ナツクル投げられないんじやなかったのかよ!？」

「簡単なことです。このボールを見てください」

先ほどのファウルボールを拾い上げて美砂さんに見せると、彼女はすぐにボールの異変に気がついた。

「これ、なんだ？ 何か付いてるぞ」

「鉛テープっすよ」

「鉛テープ……？」

先日、関内学園へ調査に出向いた放課後。相手投手の特殊能力を使用して操るニセナックル対策として、ホームセンターで購入した代物。鉛テープを貼って意図的にボールの重心をずらし、疑似的にナックルの揺れを再現しました。ちなみに鉛テープは、マスキングテープの上から貼ってあるのでボールを痛める心配はありません。とは言っても、さすがにローター式のピッチングマシンでは使えないので、宮瀬さんに投げてもらっています。

「スゲーな、あたしにも打たせてくれ！」

「ま、いいっすけど。どうぞ」

バットを受け取った美砂さんは意気揚々と左打席に立ち、バットを持った右腕を宮瀬さんに向けて伸ばし、左手を右肩に添えるような仕草を見せた。一朗さんみたいっすね。

「よし、来やがれ！」

「いきますよ」

「ふんっ！」

宮瀬さんの投げた疑似ナックルを盛大に空振った。

次も空振り、その次も空振りで迎えた四球目、真後ろへのファウルを打った。

「ハア、ようやく当たったぜ。とんでもねえな、ナックルってヤツは」  
そう言いながらも四球目で当てるんですから、運動神経は良いみたいですね。切りのいいところで交代し、何球か普通の打ったあと、接戦の試合展開を見越して送りバントの練習に切り替える。これも、ナックル対策と一緒に話し合ったこと。

「ふう、ありがとうございます」

失敗が続く中、時間的に最後の一球を狙い通りに転がせた。

そろそろ他の人たちがやって来る時間、野球用具を一旦片付けて

レーキでグラウンドを馴らす。

「じゃあお前らは、放課後にいつも二人で練習してたのか？」

「ええ、お互いの用事が済んでからだったので短時間ですけどね」

「なんだよ、アタシも誘えよな！」

別に除け者にした訳ではないのですが、作戦上、高城たかしようと乙坂おとさかさんにも声をかけてないです。それに、彼女の場合は――。

「いつもすぐになくなったじゃないっすか。妹さんの方ですけど」

「そりやあな。柚咲ゆさは今、すげーがんばってんだ」

「詳細な理由は言えねえけど！」と、スゴい得意気な表情かお……いえ、自慢の方が正しいのかもしれないかもしれません。

「まあ、そういう訳さ。じゃあ、柚咲ゆさに変わるぜ――あれ？」

意識が戻った黒羽くろばねさんは、キョロキョロ辺りを見回してから気まずそうに苦笑い。

「わたし、また寝てたみたいですね」

「少し疲れが溜まっていないのですか。最近、お忙しいようですよ」

「あ、いえ、全然大丈夫ですつ、ご心配をおかけてすみませんつ」

宮瀬みやせさんのフォローに黒羽くろばねさんは、心配ご無用と笑顔を見せる。疲れがあるのは確かみたいですが、無理して笑ってるって感じではなさそう、どちらかといえは充実してるという感じでしょうか。

「さあ、グラウンド整備も終わりましたし。ベンチでひと休みして待ちましょう」

「はーいっ」

「飲み物買ってきますね」

「ありがとうございますーす」

一墨側ベンチに座って、タオルで汗をぬぐう。宮瀬みやせさんが奢もてってくれたスポーツドリンクをいただき話をしながら他の人たちの到着を待った。

\* \* \*

星ノ海学園生徒会の男子二人、両校の野球部、そして審判を務めてくださる審判員がグラウンドに到着。整列して礼、それぞれのベンチへ戻る。

相手のベンチ前では今回のターゲット、念動力の持ち主である福山ふくやまさんが、バッテリーを組むキャッチャーと話をしている。距離があるので会話の内容は聞き取れませんが、だいたい見当はつきますけど。

——おっと、キャッチャーの顔つきも変わりましたね。

最初は、ユニフォーム姿の正規の野球部は四人だけで、あたしたち女子が混ざってるのに試合をする意味があるのか？ って感じでしたが、説得が上手くいったらしく、キャッチャーも本気になったみたい。あたしはスタメンをベンチ前に集めて、円陣を組んだ。

「おまえらしく、負けたら全員ケツバットだからなー、しまっっていくぞー」

「お、おおー……」

ちよつとテキトーに言ったとはいえ、一体感はまだでゼロ。まあ急造チームなんてこんなものっす。後攻のあたしたち星ノ海学園が先にグラウンドへ出て守備につく。

「プレイボール！」

先発投手の投球練習が終わり、関内学園の一番バッターが打席で構え、主審のコールで試合が始まった。

「よしっ！」

星ノ海学園ちのエースは初回を三者凡退に抑え、マウンドで軽くガッツポーズを取った。なかなか上々な立ち上がりを見せる。それにしても——。

「うちのピッチャー打てないなんて、相手バッターもひでえーな」

「そうなのか？」

あたしと乙坂おとさかさんの会話が聞こえたらしく、エースが回り込んで怒鳴ってきた。

「オイッ！ 休日返上して本気だしてやってるのになんだその言いぐさは——！」

「事実ですので」

実際、去年の夏も秋の予選も初戦敗退でしたし。

「ちよつ、試合放棄するぞ!？」

「えっ? それは困ります。投げてください」

「なら、もう少し言葉を選べよ!」

涙ぐみながら訴えて来られた。感情が高まってる今、なにを言ってもこれ以上は押し問答になるだけ。

——はあ、まったく。

「黒羽さん、お願いしまーす」

「はいっ!」

現役アイドルの彼女に、この場を委ねる。

「おまつじないく、おまつじないく、れいせいになるのおまじないっ!」

ビシッと敬礼した黒羽くろぼねさんは、転入初日に教室の空気を一変させた不思議な踊りとゆるい歌を披露。それを聞いた高城たかしやうが、どこからか取り出したはつぴを着て、すかさず横から飛び出してきた。

「でたあーッ! ゆさりんのおまじないシリーズNo. 9! 冷静になるのおまじないッ!」

「まったく冷静じゃないけどな」

「はいっ。これで冷静になりましたあ〜」

テンションMAXの高城たかしやうの咆哮、冷静にツツコミを入れる乙坂おとさかさん、エースも彼女のファンだったらしく非常にだらしない表情かおで、満面の笑みの黒羽くろぼねさんを見つめて惚けている。

「ひくなっ!」

「はっ!？」

あたしが突っ込みを入れるとエースは我に返った。やや気恥ずかしそうに軽く咳払いをして、平静を装いながら逃げるように小走りでベンチへ。

「何ですか? 今の」

「お前も知らなかったんだな。僕も最近知ったんだけど、柚咲ゆさは現役の人気アイドルなんだ」

「アイドルですか?」

「僕もよく知らないんだけどさ。何年か前まで、朝の番組のコーナーでやっていたらしい」

「へえ、そうなんですか」

この初めて見るやりとりに理解が追い付かなかったのか宮瀬さんは、近くにいた乙坂さんに黒羽さんのことを訊いていた。あの反応からしてアイドルにはあまり興味が無いご様子、あたしと同じっすね。

「ところで彼女は——黒羽さんは、多重人格ですか？」

「いえ、違いますよ」

「あ、友利さん」

転入が決まってから試験勉強に野球の練習と、ずっと多忙で黒羽さんのことをまだ話していなかったことを思い出したあたしは、黒羽さんの能力は死者を自身に降霊させる「口寄せ」で、事故死した美砂さんが「発火」の能力を持っていることを宮瀬さんに説明した。

「なるほど、それで人格が替わったように見えたんですね」

「それと黒羽さんは、お姉さんが自分に降霊している自覚がありません。このことは——」

「はい、黒羽さんには内密にしておきます。すぐ近くにいるのに会えないのは酷な話ですから」

「——はい、お願いします」

最後までいう前に、あたしの考えを汲み取ってくれた。

それにしても。今、一瞬、すごく哀しそうな表情をしたような。でも、次見た時にはもう、いつもの表情に戻っていた。

——気のせいだったんでしょうか……。

## Episode 6 決着、実験

両校共に無得点で、二回の攻防に入った。

先攻の関内学園はこの回先頭の四番が、ツーベースヒットで出塁。続く五番ピッチャー福山ふくやまは、ライトへ大きなフライを打ち上げた。打球は、ライトを守る黒羽くろぼねのほぼ真上へ。

「はわあ〜っ」

「ヤバイ、やっぱり柚咲ゆさが狙われたか!?!」

ファーストの乙坂おとしさかがベースを離れ、黒羽くろぼねのフォロワーへ走った直後、彼女の表情が一変。一步後ろに下がり落下地点やや後方から助走をつけて捕球した勢いのままセカンドからタッチアップしたランナーを刺すために、中継に入った奈緒なおの頭上を越す送球をサードへ向かって投げた。が、送球はセカンドベースの手前でバウンド。ショートを守っている俺がツーバウンド目で拾い上げると、サードベースを蹴ろうとしたランナーはホーム突入を自重、ベースへ戻った。

「くそっ、柚咲ゆさの肩弱えな!」

口寄せで黒羽くろぼねの中に降りてきた姉、美砂みさの判断で失点には結びつかなかったものの一死三塁のピンチ。しかしここは、エースの粘り強い投球でピンチを無失点で切り抜けた。

「お願いします」

「行つてきます」

真剣な眼差しで送り出してくれた奈緒なおの期待に答えるべく、バツターボックスへ向かう。

「なあ、何かあるのか?」

「どうしてですか」

「まあ、なんとなく」

何かを感じ取った乙坂おとしさかと、奈緒なおの会話を背に聞きながら、右バツターボックスに立つ。トントントンとホームプレートプレートを軽く叩いたバットをスイットピッチャーに向けてから戻し、顔の前でじつくりと握りと感触を確かめながらグリップエンドを中指と小指で挟み込み、ゆつたりとバットを寝かせて構える。

「おおっ！ 落合みてえーなセンスのある構えだな！」

「あいつ、アメリカで野球やってたのか？」

威圧感のある大きなバッティングフォームでも、マウンドの福山ふくやまは怯まない。それだけ自信があるのだろう。サインに頷き、投手の右腕から放たれたボールは途中から左右に小さく揺れる軌道で描いて進む。

「きたっ！」

奈緒なおが、ベンチから身を乗り出して叫んだ。

ここまでは、事前の読み通り。いくら揺れたところで外か内の二択、確率は五割ニフイチ。揺れにさえ惑わされなければ所詮100キロ程度の打ち頃のスローボール。この日のために、バッティングセンターで打ち込んできた。見極めてからでも十分に捉えられる。

ブレながら向かってきたボールは、インコースへ滑り落ちるように小さく変化。オープンステップで体に巻き付くように肘をたたみ、ナツクルがインコース低めへ変化しきる前に芯で捉えた。

「なに!? ナツクルが!？」

「うそ!？」

関内バッテリーからはありえないと驚愕の声上がり、味方ベンチからも驚きの声飛び交う。

「あの、ナツクルを!？」

「打った!？」

「なんてセンスだっ！」

ただ一人、彼女を除いて。

「いっけー!!」

思い切り引つ張った打球は大きな放物線を描きながら、レフトポール際へ飛んでいく。打球ゆくえを見届けながら、ベースをゆっくり回る。

「ギリギリか？」

「切れる、切れるー！」

マウンドの福山ふくやまが大声を張り上げる。

打球は、レフトポール際を通りフェンスの向こうへと消えていっ

た。

「判定はっ!？」

奈緒なおの声に同調するように両校の選手たちが、三塁塁審の判定に注目。塁審は一瞬の間を開けてから、両手を大きく上へ広げた。

判定は、ファウル。フェンスを越える大きな当たりは、ポール際ギリギリで切れた。ボールが予想よりも来なかったことで、ドライブが掛かった打球はポールを巻く前に切れてしまった。

「惜しかったな」

「ええ、あと数センチでしたね」

「くっそおー!」

味方ベンチから、落胆の音が聞こえる。誰よりも悔しがる彼女の期待に答えられなかった。そんな星ノ海学園ベンチとは逆に、助かったと安堵の表情の関内バッテリーはすかさず、主審にタイムを要求。キャッチャーはマウンドへ駆け寄り、ピッチャーと短めの言葉を交わすと、主審に礼をいいポジションに戻り、主審のコールで試合再開。だがここで、試合前から危惧していたことが起こった。

「おいおいっ!」

「ちっ」

美砂みさは不満気に声を張り上げ、奈緒なおは小さく舌打ち。二人の態度の理由は、キャッチャーは座らずに立ったまま外側に右腕を掲げた。

つまり、敬遠。この試合で一番怖いのは、ホームラン。油断がある初球をひと振りして仕留められなかった場合、勝負を避けられることは予測済み。だから、次の手は用意してある。

「男が敬遠なんて、センスねえーなっ! 勝負しろっ! 勝負っ!」

ベンチでバットを振り回しながらヤジを飛ばす美砂みさを、乙坂おとさかと高城たかしよがどうにか宥めようとしているが、彼女のは激しさは増すばかりで収まらない。

「有史ありふみ、気にするな!」

あまりの剣幕に少し動揺しかけた福山ふくやまだったが、キャッチャーの言葉で我に戻った。ひとつ息を吐いて心を落ち着かせて頷くと、美砂みさのヤジに惑わされることなく、きつちり敬遠球を投げきられ、一死一塁。

そして、次の打者の高城たかじょうを奈緒なおが呼び止める。この状況になった場合に事前に立てた作戦を伝えている。会話が済むと彼女はベンチへ戻り、高城たかじょうは話を上手く飲み込めていないと言った様子の表情かおをしながらも、バッターボックスに入った。

しつかりと伝わっているとは思うけど、ひとまず様子見。

高城たかじょうに対し、第一球を投じる。遅いボールを引き付けてフルスイングするも、かすることもなくバットを虚しく空を切った。ストライクを奪われたが、お陰で、彼女の指示がしつかり伝わっているのを確認出来た。

——よし、行くか。

二球目、ピッチャーがモーションを起こすと同時に躊躇なく、二塁へスタートを切る。

「走ったぞー！」

「なに!？」

「ダメだ、有史ありふみ！ 目を切るなー！」

「しまっ——！」

まさかの盗塁に動揺したりリリースが乱れた、最初から叩きつけるような低い投球、失投。これでは、ボールは動かせない、もし能力で低めのボール球をストライクゾーンへボールを動かそうモノなら、味方にも怪しまれてしまう。それは絶対にできない。その読み通り、投球はホームベースの手前でバウンド。

しかし、完全な暴投もキャッチャーが身体を張ってボールを前に落とす。すかさずセカンドを見るも、既にセカンドベースに到達。二盗が成功し、一死二塁。

しかし今のよく止めた、後ろに逸らしていてもおかしくない投球だった。今度は油断しないように目で牽制して、モーションを起こす。同時にスタートを切るも、今度はフェイクで二塁に戻る。投球は、三盗を警戒し大きくウエスト。

「ボールー！」

「くっそ………」

汗を拭い、うつむきかげんで帽子をかぶり直した。その仕草に落ち

着かせようと、キャッチャーが声をかける。

「バッターオンリー！ランナーは刺す！」

カウントツーワンからの四球目。今度は、スタートを切る。高城たかしようは、再びフルスイング。

「——くっ!?!」

フルスイング後の大きなフォロースルーに送球を躊躇した。盗塁成功。三盗が成功し、一死三塁のチャンス。

しかし問題は、ここから。相手も空振りのリスクが高いスクイズがないことはわかってる。あとは、投手が強気でくるか、弱気でくるか。ワイルドピッチを怖がり甘いコースなら、いくらナックルといえど当てることはできる。当てさえすれば、ツーアウトでない限りゴロでも一点入る場面。

ただ、キャッチャー信じて投げきられたら厳しい。

「よっしー！」

マウンド上で、大きくガッツポーズ。バッテリーの選択は、後者の強気。高城たかしようを空振りの三振に抑え、ツーアウト。続く美砂みさは粘りを見せるも内野フライに打ち取られて、スリーアウト。

——お見事。

心の中で賛辞を送りつつ、ベンチに戻る。奈緒なおが、グラブを二つ持ってきて「どうぞ〜」と一つ手渡してくれた。

「ありがとうございます」

「おしかったっすね」

「福山ふくやまさんの気迫に圧されましたね」

「次、あれ使いますか？」

「そうですね〜」

先制したいけど、切り札は勝負所まで取っておきたいところ。

「温存しておきましょう。まだ悟られたくないですから」

「終盤の勝負どころです。では先ずは守りましょう」

「はい、行きましょう」

三回表。関内学園は、下位打線八番からの攻撃。星ノ海学園のエースは、八番・九番とテンポ良く打ち取りツーアウトを奪い。ふた回り

目の一番バッターの打球はピッチャーの頭を越えてセンターへ抜けそうな当たりを、予めセカンドベース寄りに守っていた俺は、セカンドベースの後方で捕球し、流れのまま一塁へ送球。ボールはバシツ！と音を鳴らして、乙坂のミットに収まった。塁審のアウトコールを聞いてベンチへ戻る。

「ナイスっ！」

「どうもです」

賛辞を送ってくれた奈緒と、グラブを合わせる。ベンチに戻ると今度は、乙坂が声をかけてきた。

「今のよく追いついたな、予知能力か？」

「そんな能力持ってませんよ。コースと初回の振りから予測して、セカンド寄りにポジションをとっていただけです」

「では、行つてきまーす」

「はい、いってらっしゃい」

三回裏。

この回先頭バッターの奈緒は、五球目を打つて内野ゴロに倒れた。次は、ラストバッターの乙坂の打席。

「乙坂さん」

「ん、なんだ？」

「フルスイングでお願いします」

「僕もか？ 当たる気がしないんだが……」

「お願いします」

「…… わかったよ」

指示した通り三球ともフルスイングで空振り三振に倒れる。続く一番バッターも三振倒れ、チェンジ。

四回表も、何とか抑えて裏の攻撃。二番・三番と連続で三振を奪われるも、ツーアウトで四番の打順で、バッテリーは明らかなボール球を二球続けて放った。

「やられたっすね」

「ええ、あのキャッチャー相当切れますね」

ストレートのフォアボール、主審が一塁を指差す。

「さて、行つてきます」

「いつてらつしやいませ〜」

バッターボックスに立つも、キャッチャーは立ち上がったまま、結局、二打席連続で敬遠。二死二塁一塁のチャンスも、ツーアウトのため盗塁を無視してバッター勝負。高城は三振に打ち取られて、たまたま先制のチャンス逃した。

その後は、両投手の好投でゲームが進む。

そして七回表、四番ヒット、五番フォアボールの後、六番の内野ゴロの間に進塁し、一死二、三塁のピンチ。

ここで奈緒がタイムをかけて、内野がマウンド上に集まり作戦会議を行う。

「仕方ない、こちら能力を使いましょう。乙坂さん、バッターに乗り移つて三振してください」

「…… ああ、わかった」

今度は、エースに向かって話す。

「あなたは、ワイルドピッチにだけ気をつけてください」

「…… わかった」

自分の不甲斐なさを感じながら帽子を深くかぶり、顔を隠して奈緒の言葉に頷く。

試合再開後、作戦通り乙坂はピッチャーがモーションに入ると同時に七番バッターに略奪を使って乗り移った。バッターは力なく見当違いなど振って、空振り。それが三度続きバッターアウト。その異変が特殊能力であること感づいた福山は、セカンドベース上で肩で息をしながら悔しそうに表情で叫ぶ。

「くっそー！ こんなところで……！」

直後、サードランナーの四番の顔つきが変わった。

——不味い。成功体験が散漫を生んだ。

ランナーが出ているにも関わらず、投手のモーションが大きくなつたところを狙われた。

「走つたっ！」

奈緒の声を聞いて焦ったエースの制球は乱れて、外角高めへの失

投。ホームクロスプレー、判定はセーフ。遂に均衡が崩れた。

「くっそー！　ここまで読んでなかった！」

「ホームスチールか!？」

「タイムお願いします」

「うむ、タイム」

マウンドへ行つて、バツが悪そうにしている投手に声をかける。

「この失点は気にすることありません。むしろ、ここまでゼロに抑えてくれたお陰で勝てます」

「え？」

「とにかく、後続を抑えましょう。話はそれからです」

「…… あ、ああ、わかった」

ポジションに戻る。

「なにを話していたんですか？」

「セットポジションで投げろって言っただけですよ」

「そうっすか」

エースは、気を取り直して後続を抑えた。

そして試合は、一点差のまま九回裏星ノ海学園最後の攻撃。ここで関内バッテリーは先頭バッターの四番と勝負した。さすがに逆転のランナーをノーアウトで出したくないのだろう。福山は注文通りナックルで打ち取り、ワンナウト。

俺が最後の打席に立つと、キャッチャーも立ち上がった。

「また、敬遠かよ」

「徹底していますね」

「でも、ここまでするか？」

「それだけ、甲子園へ行きたいのでしよう」

試合を見ながら乙坂と話す高城に、奈緒は話しかけていた。

「高城、バントで転がして一塁を駆け抜けてください」

「バントですか？　ですが、当てるのも難しいですよ？」

「大丈夫です。前に転がすだけなら出来ます」

「しかし、視認されるでしょうか？」

「証拠は、カメラのハイスピードモードで撮っておきますので」

「わかりました」

それを聞いて、バッターボックスでバントで構える高城への初球。今までよりもブレの小さいナツクルが、真ん中付近にきた。高城は、ボールしつかり見てバントで転がす。福山はマウンドを駆け降り、一塁へ送球。

「ファースト！」

その刹那、何かフエンスに激突した。

今が高城の能力……瞬間移動」と、いうより高速移動、あるいは超加速と言ったところか。呆気にとられる一塁塁審に、奈緒はすかさず近付きカメラの映像を見せる。

「ほらあー！ ほらあー！ 見てくださいっ！ ファーストベースに触れてるっしょ？ セーフっしょ？」

「セ、セーフ！」

担架で運ばれて行く高城を褒める、奈緒。

「よくやったっ、高城、犠牲は無駄にはしませんっ。臨時代走っ！」

「文字通り犠牲バントじゃないか！」

高城のセーフティバントが決まり、一死二塁二塁。ベンチ戻った奈緒は、ネクストバッターの美砂にバットを手渡した。

「美砂さん、お願いします」

「任せろっ、アタシのセンスで打っ！」

宣言通り、初球をセンター前へキレイに弾き返した。

「見たか、アタシのセンス！」

「おおっ！ すっげー、ホントに打った！」

一打同点・逆転のピンチに関内学園の捕手は再びタイムをかけて、内野陣をマウンドに呼び寄せた。

「有史、大丈夫か？」

「あ、ああ……」

滝のように流れる汗をぬぐう、福山。心配と、励ましの言葉が聞こえてくる。入念な打ち合わせのあと審判に礼をしてキャッチャーは座り、奈緒は美砂の使ったバット拾って打席に立った。奈緒とキャッチャーは一言、二言、言葉を交わしてから、プレイが再開された。

球威も球速も確実に落ちているが、これほどとは計算外だった。二球目もストライク。続けて、三球目を投げた。

「あつたれー!」

外角やや高めに来たナツクルをバットの先端近くで捉えた。流し打ち、打球は前進守備の間を破つて、ライト前ヒット。同点。

セカンドランナーもホームに突入ライトからの返球でホームタツチアウト、二死二塁・一塁。キャッチャーは、再び声をかけにマウンドへ走った。

「くつそー!」

「落ち着け、まだ終わってない!」

「……けど、勝てなかつたっ!」

この試合は、あくまでも練習試合として組まれているため延長戦はない。つまり同点になった時点で関内学園の勝利は無い。

「有史ありふみが何を背負って戦ってるのかわからない。けど、向こうの女子が言ってたぞ。引き分けでも有史ありふみの勝ちだって」

「……オレの、勝ち?」

「ああ、そうだ。あと一人だ、抑えよう!」

「あ、ああッ!」

奈緒なおはタイムをかけて、ファウルゾーンに転がったバット拾いベンチに戻ってきた。

「靴紐が切れました。誰か、代走お願いします。乙坂おとさかさん、あとはお願いします」

「僕の能力じゃ打てないぞ?」

「たまにはガチで挑んでみたらどうですか? カンニング魔おとさかの乙坂有宇ゆうくん」

「黙り込んでしまっている乙坂おとさかに声をかける。

「大丈夫です。乙坂おとさかさんなら必ず打てます」

「……行ってくる」

奈緒なおからバットを受け取った乙坂おとさかは、バッターボックスに向かって歩き出した。

「お疲れさまでした」

「ここで決めたかったんですけどね」

「あれはライトの返球が完璧でした、相手を褒めましょう。けど、ナイスバッティングでしたよ」

「あのバットののおかげっすよー」

「いいえ、きっちり捉えたのは、友利さんの力ですよ」

遡ること、試合が決まった日の放課後。

案内してもらったスポーツ用品店で買い求めた代物は、中距離打者向けの通常のバットよりも芯が広めのバット。

通常のナックルの握りとは違って爪を立てて投げない福山の偽ナックルは、握力ではなく精神的な面の疲労が大きいと仮定。不規則に変化するナックルを捉えられる確率を上げ、当たれば一発があると意識付けさせるフルスイング、捕手も捕球がままならない緩いナックルの弱点を突く盗塁で常に得点圏内に進み、ヒットはもちろん、暴投、エラーすらも許されない状況を作り出し、常にプレッシャーを与え続ける。

これがあの日の放課後、二人で立てたこの試合の筋書き。

「乙坂さんと高城さんの二人の打席で、変化の大きなナックルを計二十球以上放らせる。ここまでは計算通りだったんですけどね」

「キャッチャーの機転で盗塁を封殺されたのは計算外でした。ま、セカンドランナーをタダで貰える美味しい展開になりましたけど。さて」

試合に意識を戻す。

バッターボックスで構える乙坂は、緊張しているのか少し顔がこわばっているように見えた。でも大丈夫。予兆は、幾度となくあった。

球審のコールで試合再開。セットポジションから第一球、ファウル。二球目もカット、ファウル。空振りを奪い続けていたマウンド上の福山の異変に、小さく笑った奈緒がこちらを見た。

「ようやくできてきましたね」

「ええ。予想よりもかかりましたけど、出来るだけのこととはしました。あとは、乙坂さんに任せましょう」

乙坂に視線を戻す。甘いコースの三球目もカット、徐々にタイミン

グが合ってきている。そして、追い込まれてからの四球目。セットポジションではなく、ワインドアップからの渾身の力で投球。しかし、まったく変化することなく、やや内角よりの高めに来た。乙坂は躊躇することなく、バットを振り切った。快音が轟く、捉えた打球は三塁線を破り、ファウルゾーンを転々と転がる。

「おおーっ!!」

奈緒が、隣で大声を上げた。二塁走者の美砂は、打球を見ることなく三塁を蹴った。今、レフトが追いついて、中継へ送球。

「僕が中継に入る！ ホームカバーに入ってくれ！ 隆人！」

福山が、シヨートの代わりに中継地点でボールを受け、そのままバックホーム。美砂は、既にホームの数メートルまで来ている。

「行けるっ！ アタシのセンスならっ！」

ホームベース手前から、ヘッドスライディング。ほぼ同時に福山の返球が捕手のミットに届いた。ホームクロスプレー、主審が判定コール。

「セーフ！ ゲームセット！」

「よっしゃ！ 見たかっ!? アタシのセンスっ！」

「すごいぜ！ ゆさりん！」「すごいんだ！ 野球部に入って欲しいな！」 等々野球部員が、美砂へ賛辞を送っている。

「よっし！ なんとか勝てたっすね！」

「はい。さあヒーローを出迎えに行きましょう」

笑顔の奈緒と一緒にベンチを出て、乙坂の元へ駆け寄る。

「勝ったのか？」

「はい、あなたのお陰です」

「ナイスバッティングでしたよ。乙坂さん」

二人で、労いの言葉をかける。

「そっか、勝ったのか。よっし！」

小さく握った拳を開いて見つめる、乙坂。

「なにしてんすか？ 行きますよー」

奈緒が乙坂を促し、俺たちは福山の元へ。

「約束です。今後はこの能力は使わないでください」

「……………僕は、平凡なピッチャーだった。でも隆人は違うつ。ほんとに脚光を浴びるべきキャッチャーなんだ……………！うちの野球部が弱い事はわかってたのに、あいつは僕とバッテリーを組むことを選んでくれた。だから、あいつを大きな舞台へ連れて行ってやりたかったっ！」

「私利私欲ではなく、友情のために能力を使ったんですね」

「ああ……………」

「あたしたちはズルをして勝ちました、あなたもズルをして投げました。でも、ちゃんと見てくれる人はいます。大学でも、社会人野球でも、彼の親友として見守ってあげたいと思います。そしていつか『あいつは、僕の親友なんだぜ』って言える日が来ます。大丈夫っす。絶対っす」

「ああ、そうですね」

福山は、踵を返して関内学園ベンチへ戻っていく。

「あのっ！」

福山は、振り返り訊いてきた。

「なんででしょうか？」

「最初の打席、あなたも能力を使ったんですか？」

「はい、使いましたよ」

「……………そうですね」

そう言う福山は、ベンチへ向かって行った。そんな彼の背中を見ながら、奈緒は乙坂に話しかける。

「乙坂さん、彼に乗り移ってください」

「は？ なんで？」

「ちよつとした実験です」

「ん？……………わかった」

福山に乗り移った乙坂が意識を失った。そして、きっかり五秒後に意識が戻る。

「……………ん？ わあっ!？」

「お疲れさまです」

奈緒に、身体を支えられていたことに驚いて慌てて離れる。

「いったいなんなんだ……？」

「今はまだわかりません。さ、帰りましょう」

星ノ海学園対関内学園の試合は、星ノ海学園のサヨナラゲームで幕を閉じた。

## Episode 7 選択肢

関内学園との試合のあと、更衣室で着替えを済ませ、奈緒とおとぎか  
三人で通学路を歩いている。さつきまで黒羽も一緒に、星ノ海学園向  
かいのコンビニでアイスを食べていたのだけれど。仕事の打ち合わ  
せが入った、と急遽連絡があり、車で迎えに来たマネージャーと一緒  
に仕事場へと向かった。現役の人気アイドルというのは、実に多忙な  
ようだ。

星ノ海学園高等部と隣接の中等部の前に差しかけた時、試合後の  
俺と福山の会話について、乙坂が聞いてきた。

「そう言えばさ」

「はい、なんですか？」

「お前、いったいどんな能力を使ったんだ？」

「さあ」

「さあ、て……」

実はあの試合、俺は自分の保有する特殊能力をいつさい使わなかつた。それは、奈緒から「納得して能力を使わないこと約束させたい」と試合が決まった放課後に聞いたのもあるけれど。実戦で、あの特殊能力を使うには、正直まだ、精度に自信がなかったからだ。

「…… やつぱり、予知能力なんじゃないのか？ ナツクルを打つてたし」

明確に答えないと疑われることは道理なのだが、言えること言えないことは誰にだってある。そんな訳で、どうはぐらかそうと考えていると、奈緒が助け船を出してくれた。

「使っていませんよ」

「はあ？」

「宮瀬さんは、能力を使っていません。あれは、実力です」

「いやでも、能力を使っただって肯定してたよな？」

「ああ、あれは…… そうですね。正確には、能力の副産物といったところですよ」

奈緒の言葉に補足を入れたが、乙坂はますます困惑してしまつたよ

うで、眉間にシワを寄せながら首をかしげてしまった。

「どういう意味だ？ 訳が分からないんだが」

「そのまま言葉通りの意味ですよ」

実際言った通りだから、ウソは一切ついていない。

「あたしたちが持つ特殊能力は、何かしら不完全なところが在ることは、あなたも自覚あるっしょ？ それを補うために身に付けたチカラ……と、言ったところではないですか」

奈緒の推察はいい線をついている。しかし、完璧ではない、当たらずも遠からず。

「ん、半分正解ですね」

「だから、訳が分からないんだが……？」

「つまり、能力とは別で。努力の賜物つてことですよ」

「あなたとは正反対つすね」

「ぐっ、どうせ僕は、カンニング魔だよ！」

奈緒と二人で乙坂をイジリ、乙坂の自虐でオチが付き、三人とも自然と笑みがこぼれた。

そして、たあいもない世間話をしながら歩くこと数分、星ノ海学園の併設マンションに到着。

「着きましたね。それでは私は、ここで失礼しますね」

「ん？ ああ、そういうえば宮瀬は、ここに住んでいないんだったな」

「ええ。本業の都合上、自宅でなければ効率よく作業出来ませんから。特別に許可は得ています、麗しの生徒会長さまに」

奈緒に顔を向けて言うと、彼女はどこか得意気な表情をしていた。

「そっか、じゃあまた明日」

「はい、お疲れさまでした。友利さんも、また明日」

二人に別れの挨拶をし、くるりつと踵を返す。そして、併設マンションに背を向けて、最寄り駅へ歩き出そうとしたところを、奈緒に呼び止められた。

「待ってください」

「はい、なんででしょう？」

「あたしも今から、夕食の買い出しに行きますので話ながら行きま

しよう」

買い物に行くスーパーは、最寄り駅への道中にあるため一緒に店まで行くことになった。

「友利ともりさんは、自炊されるんですか？」

「うーん、そうっすね。普段は、お弁当で済ませる事が多いです。けど、食べたい料理ものが置いてなかった時は、自分で作ります」

「そうなんですね」

「あなたも、一人暮らしっすよね？　普段食事は、どうしてるんですか？」

「時間がある時は作ってましたけど。最近あまり時間が取れないので、外で済ますことが多いですね」

星ノ海学園へ来てから教鞭に特殊能力者対策と、転校前からは考えられないほど多忙で濃密な日々を過ごしている。そのため前のように自炊する余裕もなく、帰宅前に自宅のタワービル内に暖簾を構える店で済ませることが半分日課になっていた。

「そうですか」

彼女にとっても想定外な事案だったとはいえ、俺が教鞭を執ることに時間を割いていることを気にさせてしまった。少しバツが悪い、そんな微妙な空気が俺たちの間に流れる。

「でも、それはきつと充実しているって事なんでしょうね」

「ん、そうなんすか？」

「はい」

これは彼女への気づかいじゃない、本心だ。退屈だった日常に比べて本当に時間の流れが早く感じる。ちゃんと伝わったのか、彼女の表情が少し和らいだ気がした。

話している間に、目的のスーパーへ到着。入り口の前で足を止めた俺は、改めて彼女に向き合い別れの挨拶する。

「それでは、ここで失礼しますね。お疲れさまでした」

「は？　あなた連れっしょ？　最後まで付き合ってください。さあ、行きましょう」

「え？　はあ、わかりました……」

有無を言う隙もなく、押し切られる形で結局一緒にスーパーに入店。買い物カゴを片手に下げ、食材を物色。惣菜売り場へ向かわないところを見ると、夕食は自炊するようだ。

「何を、お求めになるんですか？」

「そうっすねー。最近いっぱい運動したので、お肉にしようと思います」

にくっ♪ にくっ♪ と、楽しそうに精肉コーナーへ向かって歩く、奈緒なおの後を付いていく。

「どつれにしようかなあ〜っ」

「ごきげんですね」

「だつてえ〜！ 肉、最強じゃないですかっ！」

目を輝かせながら本当に嬉しそうに笑顔で答え、再び商品に視線を戻した。赤みと指しの入った牛肉のパックを手に取り見比べている。「うーん、どっちも捨てがたいっすね。今日は、ちよつと奮発しよつかな〜っ」

「あれー？ 友利ともりのお姉ちゃん？」

「——ん？」

不意に名前を呼ばれた奈緒なおは振り返って、声の主を確認した。目の前に居たのは、買い物カゴいっぱい商品に乗せたカートを引いた、ロングヘアで小柄な女子。誰かに似てるような、そんな気がした。

「やっぱり、友利ともりのお姉ちゃんなのでっ！」

「歩末あゆみちゃん？」

「はいっ！ あゆなのでっ！」

「どうして、ここに？」

歩末あゆみと呼ばれた少女に不思議そうに訊ねると、彼女は、とても得意気に胸を張って答えた。

「警備員さんの目を盗んで、買い物に来た所存でござるー！」

「そうなんだ、何を買いにきたの？」

「お肉とお野菜。それと、日用品でござるー！ 近くのコンビニでは種類が限られますし、何より割高ですのっ！」

彼女の手には、四つ折りにされた特売のチラシが握られていた。ち

らつと買い物カゴの中を見ると、日持ちする食材や容量の多い徳用の洗剤などが目に入った。

「そっかく、歩未ちゃんはいね」

奈緒が褒めながら頭を撫でると、歩未は嬉しそうに顔をほころばせる。

「えへへ」

「でも、危ないですから。今度からは、ひとりで来ちゃダメだよ？」

「はっ！ 承知しましたっ！」

——ビシッ！ と敬礼。

「それでもう、お買い物は済んだの？」

「えーつと、あとは有宇お兄ちゃんの歯ブラシで終了でござるっ」

——有宇お兄ちゃん……乙坂の妹さん。

「そっか、じゃあ少し待っててもらえるかな？ お買い物が終わったら一緒に帰りましょう」

「はいっ！ あの、ところで、そちらのお兄さんは？」

初対面の俺を見て、歩未は首を傾げる。俺を指差した奈緒が、紹介してくれた。

「この人は、あたしや歩未ちゃんのお兄さんと同じ生徒会の一員です」

「宮瀬翔です。よろしくお願いしますね、歩未さん」

「はいっ！ 乙坂歩未ですっ！ よろしくお願いしますっ！ 有宇お兄ちゃんが、いつもお世話になっていきます！」

「挨拶は済みましたね。じゃあ買い物が終わったら、入り口の近くで待っててね。あたしたちも、すぐに行きますから」

「はいっ！ お待ちしておりますっ！」

お互いに買い物済んだあと合流する約束をして、歩未と別れ買い物再開。

「快活な妹さんですね」

「はい、いつも笑顔で可愛らしいです。さて、あたしたちも急いで買い物済ませちゃいましょう。にくっ、にくっっ！」

買い物カゴの中に次々と肉を入れていく。カゴの中は、あつという間に数種類の肉でいっぱいになった。そこでふと疑問に思い質問す

る。

「野菜は買わないんですか？」

「ええ〜っ!! 野菜つすか〜?」

野菜が嫌いなのか、露骨に嫌そうな顔をした。

「ちゃんと食べないと栄養バランスを崩しますよ?」

「あなたが、食べてくれるならいいですけど〜」

「友利ともりさんが食べないと栄養にはなりませんよ。ここの会計は出しませんから、ちゃんと食べてください」

「むう〜っ」

「ふくれてもダメです」

「…… わかりましたっ、食べますっ! 食べますよっ! 食べれば

いいんっしょ!」

プイツ、と拗ねて顔を背けてしまった。

さて、どうしたものか……。そういえばあの時、美味しそうにケーキを食べてたな。よし、これでいこう。

「あとでケーキ買って上げますから、機嫌直してください」

「…… 歩未あゆみちゃんの方もいいっすか?」

「もちろん、最初からそのつもりですよ」

「マジですかっ? 早く野菜売り場に行きましょーっ」

ケーキで釣る作戦、成功。

機嫌が直った奈緒なほは、野菜売り場で野菜を次々とカゴに放り込んでいく。適当かと思っただら葉野菜、根菜、緑黄色野菜とバランスよく選んでいた。

「これで、よしっ! つと、さあ会計を済ませましょー」

「なに作ろっかな〜?」と、悩んでいる奈緒なほとレジに並んで会計を済ませる。それにしても……。随分買い込んだものだ。清算済みのカゴの中の食材は、明らかに一人分を越えて二・三人分はあるように思える。手分けして食材をレジ袋に詰め、入り口に向かうと約束通り、歩未あゆみが大きな買い物袋を両手に下げて待っていた。

「お待たせしました。待たせちゃってゴメンね」

「いえいえ、全然待つてないですー」

「そっか、それでは帰りましょう」

「はいですー!」

「歩未さん」

「はい、なんでしようかー?」

歩未あゆみに向かつて、手を差し出す。

「荷物を貸してください」

「えーっ!? いえいえ、そんなこと——」

「歩未ちゃん」

戸惑う歩未あゆみに、奈緒なおはうなずいて見せた。

それを見て観念したようのか歩未あゆみは、彼女の身長に不釣り合いな大きな買い物袋を預けてくれた。

「すみませんです〜」

「いいえ。さあ、行きましょう」

スーパーを出てすぐには帰らず、セキユリテイ上あまり遠くへ出られない歩未あゆみを連れて、デイスカウトショップや本屋などを見て回った。二人とも楽しそうだったから、こつちもなんだか嬉しくなる。さすがに女性物の下着も置いてあるショップに連れていかれた時は気が気じゃなかったけど。

と、そんな感じで一通り見て回って、洋菓子屋の前に差し掛かったところで、奈緒なおは足を止めた。

「歩未ちゃん、ケーキを買って帰りましょう」

「えっ、ケーキっ!?!」

ぱあーっ、と表情が明るくなった。と思つたら、今度はすぐにショッピングとうなだれた。コロコロと表情が変わるとても感情が豊かな娘だ。

「でも、余分なお金持ってないのです……」

「大丈夫ですよ。このお兄さんが、奢ってくれるそうなので」

紹介してくれた時と同じように俺を指差した。

「——そんなんっ! 荷物も持ってもらってるのにつ!」

「私がケーキを食べたいんですよ。でも一人では、お店に入り難いので、友利ともりさんと歩未あゆみさんが一緒に来てくれると入りやすいんですけ

ど、一緒に入っていたただけませんか?」

「でもでもっ」

それでも遠慮する歩未あゆみに俺は、ある提案を持ちかけることにした。「では、こうしましょう。今度、歩未あゆみさんの手料理をご馳走していただけますか? 今日ケーキは前払いということでしょうか?」

「あゆの料理でいいんですか?」

「歩未あゆみさんの料理がいいです」

「うくん…… わかりました! 必ずやご馳走いたしますっ!」

「決まりですね。楽しみに待っています」

「はいなのですー!」

「では歩未あゆみちゃん、入りましょうっ」

奈緒なおは歩未あゆみの手を取って洋菓子屋に入った。その後、続いて店内に入る。店内は甘い匂いで満ちていた。

「歩未あゆみちゃん、どれにしますか?」

「いっぱいあって悩むのです」

「うくん……」と唸りながら、色とりどりのケーキが陳列されているショーケースとにらめっこ。まだ少し時間がかかりそうだ。

「友利ともりさんは、お決まりですか?」

「はい、これっす!」

彼女が指差した先にあったのは、少し小さめのホールケーキだった。それでもひとり食べるにはいくぶん大きい。

「食べられますか?」

「大丈夫っすよー。あたし一人で食べる訳ではないのでっ」

「そうですか」

きつと明日、学校に持って行って祝勝会でもやるつもりなのだろう。この時はそう思っていた。と言うか普通はそう思うだろう?

奈緒なおの注文を確認したところで、今度は歩未あゆみに訊ねる。

「歩未あゆみさんは決まりましたか?」

「まだ迷ってます」

「どれで迷っているんですか?」

「これとこれ」と言って、赤いイチゴが乗ったショートケーキと季節のフルーツで彩られたタルトを指差した。

「では、二つとも買いましょう」

「ええーっ！ 二つともっ!?」

「はい、一つは歩未さんの。もう一つは、乙坂さんの分。これで二つです」

「半分こすれば両方食べれるっすね」

「有宇お兄ちゃんの分もっ!?」

「歩未ちゃんのお兄ちゃん、今日は大活躍だったんっすよ」

そう今日の試合は、乙坂のお陰で勝ったと言って間違いない。そのお礼の意味も込めて、と説明すると多少葛藤しながらも納得してくれた。

「ありがとうございますっ！」

「いいえ、どういたしまして」

店を出て併設マンションへの帰り道で歩未は、乙坂が大活躍したことが相当嬉しかったらしく「自慢の兄であること」や「夕食は必ず一緒に食べること」が乙坂家の掟などいろいろなことを教えてくれた。そんな彼女の話を奈緒は、ずっと優しく微笑みながら聞いていた。

「でねっ、あゆは、ゆさりんが大好きなのですっ！」

「ゆさりん? …… って、黒羽さんのことですか?」

「黒羽? ゆさりんは、西森柚咲でござるっ!」

「西森は、芸名っすよ」

「なるほど、そういうことですか」

アイドルに疎い俺に教えてくれた。黒羽ではあまりにもアイドルっぽくないとのことで、西森という芸名になったらしい。

「ゆさりんは、歌も上手なのですっ!」

「歌ですか?」

「はい、ハロハロですっ!」

『How—Low—Hei—』通称『ハロハロ』。十代の若者を中心に圧倒的人気を誇るバンド。

そのボーカルを務めるのが西森柚咲こと、黒羽柚咲。彼女のおつと

りとした見た目から、バンドのボーカルというのはちよつと想像できないな。

「高城も、彼女のファンなんですよ」

「高城さんも？」

「はい、それはもうドン引きするぐらいです」

「へえー、そうなんですか」

言われてみれば試合前、黒羽絡みで妙なテンションになっていたなと思いつきながら歩いていると、二人が生活している併設マンションに到着。

歩末に案内されて乙坂家に着き、彼女はインターホンを押した。ゆっくり扉が開き、家の中から彼女の兄——乙坂が顔を出した。

「ただいまでござるー！」

「——歩末っ！ どこに行つてたんだっ!？」

「ごめんなさいです。お買い物に行つてました……………」

歩末の横から、奈緒がひよいと顔を出す。

「こんばんわー」

「友利!？」

「あたしだけじゃないっすよ」

「…………… って、宮瀬も!？」

思いもよらぬ二つの顔に、乙坂は驚く。

「いやー、実は買い物途中に歩末ちゃんに会いまして、連れ回しちゃったんですよー」

「そうなんですよ。心配をさせてしまつて申し訳ないです」

「いえっ!?! お二人は、あゆのために——」

「これはお詫びのケーキっすっ。歩末ちゃんと食べてください」

歩末の言葉を遮るように奈緒は、乙坂にケーキが入った箱を押し付けるように手渡した。

「お前たち……………」

「はい、これは歩末さんの買い物袋です」

「…………… すまない」

——あまり叱らないであげてください、と小声で頼むと「わかつた」

と小声で返ってきた。

「ではあたしたちは、これで失礼しまーす。またね、歩未ちゃん」

「それでは失礼します」

「友利お姉ちゃん、宮瀬お兄さん、ありがとうございますございましたー！」  
見えなくなるまで手を振って見送ってくれた。

そうして次は、奈緒の家へと向かう。彼女もこの併設マンションで生活しているため、階は違えど歩いてすぐのところの部屋があるらしい。

「歩未ちゃんは、いつも可愛いなあ〜」

「お兄さん思いの良い妹さんですね」

「はい、あたしの妹にならないかな〜」

奈緒の部屋の前に到着。

「あつ、ここです」

「そうですか、では荷物を……」

「少し待っていてください」

そう言うとカギを開け部屋へ入って行った。玄関前の手すりに身体を預けて待つ。少しして扉越しに——どうぞー、と彼女の声が聞こえた。

「……失礼します」

少し躊躇してドアを開けると、私服に着替えた奈緒が立っていた。

「荷物、ありがとうございます」

「いえ、はい、どうぞ。では私はこれで……」

買い物袋を渡して帰ろうとすると奈緒は、とんでもない事を言い出した。

「あがって行ってください。ケーキのお礼に夕ご飯を〜馳走します」

「いや、さすがにそれは……」

そう言われても……さすがに一人暮しの女の子の部屋に上がるのは抵抗がある。

「歩未ちゃんのご飯は食べられても、あたしの作る〜飯は食べられない、とっ？」

目を細めて軽く威圧感を感じる声で言われてしまうと……。

「……いただきます」  
俺には、他の選択肢はなかった。

## Episode 8 くギターケースく

「すぐに作りますので、楽にしていってください」

リビングへ案内してくれた奈緒なほは、淡い桃色のエプロンを着て、対面式のアイランドキッチンに立ち、さっそく夕食を作り始めた。

「手伝います」

「それではお礼になりませんので座っていてください」

「……… そうですか」

そう言われても、やっぱり落ち着かない。

そこで、気を紛らわすために本業の方へ手をつけることにした。そのためには携帯ではなくパソコンが必須。持っているか訊いてみる。

「友利ともりさん」

「はい？ なんですか？」

手を止めて、こちらを見た。

「パソコンはありますか？ 持っていたら、お借りしたいんですけど」

「部屋にありますので、ご自由にどうぞー」

「ありがとうございます」

部屋の場所を教えてもらい、彼女の部屋へ向かう。

「……… 失礼します」

当然ながら部屋には誰も居ないことは分かっているけど、何となく断りを入れてから部屋に入る。目当てのパソコンは勉強机の上に置いてあって、すぐに見つかった。しかし、室内には勉強机の他にベツトやタンスなどの家具もある寝室を兼ねた部屋であったため、目当てのパソコンを拝借して、すぐにリビングに戻ることに。

「お借りしますね」

「はい、どうぞー」

彼女の返事を聞いてから、電源コードを差し込みパソコンを立ち上げる。デフォルトで無線が飛んでいることを確認してブラウザを開く。検索ワードに契約している証券会社の社名を入力して、出てきたホームページへアクセス。

「うわぁ………」

認証画面でIDとパスワードを打ち込みログインした画面を見て思わず声が溢れてしまった。その声に気が付いたらしく、奈緒は手を止めて顔をあげた。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ、なんでもありませんよ」

「そうっすか？」

不思議そうに首をかしげていたが再び調理に手を戻した。俺は画面に目を戻す。本業の方はここ数日、転入の手続きや英語の教鞭、試験勉強、特殊能力者対策などにより疎かになっていた。それを裏付けるように溜まりに溜まった売買報告書と契約時締結書類などの重要な書類の山がズラリと並んでいる。

想定以上に膨大な数で嫌になりそうになったけど、目を通さない訳にはいかない。気合いを入れるため、いちど天井に視線を向けてから目を閉じる。ひとつ大きく深くを息を吐いて、画面に目を戻して向き合う。

——よし……、やろう。

キッチンから聴こえてくるトンントンとリズムよく包丁をふるう、どこか懐かしくも心地よい音をBGMに、俺は作業に取りかかった。

「はいっ、出来ましたっ」

近くで聞こえた声で呼び戻される。顔を上げると湯気のたった料理が盛られた皿を持った奈緒が、すぐ近くにいた。こんな近くまで来られても気がつかなかったと言うことは、普段よりも作業に没頭していたみたいだ。

「はいはい、ぼーっとしてないでパソコンを片づけてください」

「あ、はい」

パソコンの電源を落として、ダイニングテーブルに手料理を置くスペースを作る。

「ところで、なに見てたんですか？ エッチなサイトっすか？」

「はい、そうですよー」

まるで小悪魔のような笑顔で茶化してきた彼女に対し、笑いながら

テキストに返事を返すと「うっわあ、さいてーっすねっ」と、笑顔のまま返ってきた。

次々テーブルに並べられていく料理の数々に驚く。あくまでメインは肉料理だが、色とりどりの野菜がバランスよく使われているのが分かる。

エプロンをハンガーにかけてから正面に座った奈緒なほと一緒に手を合わせて、いちばん近くにある料理の一つに箸を伸ばし、口に運ぶ。「どうしました?」

あまりのおいしさに思わず絶句してしまった。

「おいしい。スゴく」

「そうっすか? それなら、よかったっす」

素直に感想を伝えると、彼女はにと白い歯を覗かせて微笑んだ。テーブルに並んだ料理は、二人分にはいささか多いように思えたが瞬く間に平らげてしまった。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでーす」

「美味しかったです。本当に」

「なんども言うのと嘘っぽいつすよ?」

照れ隠しなのか、少し意地悪っぽく答えて、食器を片付け始めた。俺も立ち、空になった食器を流しへ運んで手伝いを申し出る。

「手伝います」

「いえ、大丈夫っすよ」

「お願いします」

「はあ、わかりました。では、あたしが洗った食器を拭いてください」  
並んでキッチンに立ち、彼女が洗った食器を受け取って拭き上げて、種類別に重ねて食器棚に片付ける。洗い物を終わると、彼女は先ほど買ったケーキの箱を冷蔵庫から取り出し、大きなホールケーキから二人分を切り分けた。ケーキ屋での言葉「あたし一人で食べる訳ではないのでっ!」と言った、その言葉の意味が今わかった。

あの時からケーキのお礼と称して招き入れることを考えていたんだろう。その理由はおそらく、俺の能力を探るため、と言ったところ

か。時計を確認する。時計の短針は、20時を差していた。帰る口実には持つてこいだ。

「さあ、食べましょーっ」

「先にパソコンを片づけてきますね」

「はーい。んーっ、おいしいなあ〜」

美味しそうにケーキを食べる奈緒なおに断りを入れて、パソコンを片づけるため再び彼女の寝室に入る。元あった机の上にパソコンを片付けて部屋を出ようとすると不意に、壁に立て掛けられている長方形のケースが目に入った。

「これは……」

「兄のギターです」

突然、後ろから声をかけられた声に振り向く。奈緒なおが立っていた。

「お兄さんの、ですか?」

「はい、メジャーデビューの直前まで使っていたものです」

奈緒なおは、長方形のケースを開けると中のギターを取り出した。外見は綺麗に手入れをされているが、よく見るとところどころ傷みがあるのが分かる。

「兄が帰ってくるまで、綺麗にしておきたいんですけど……」

専門店に依頼することや、動画サイトで手入れの手順を覚えたそうだが、下手に手を出してキズつけたくないし、何より手元から放したくない。そういうと少し哀しそうな顔を見せた。

その悲しげな表情を見ていられなくて――。

「あの、手入れをさせてもらっていいですか?」

「……出来るんですか?」

「はい、教えていただいたことがあるんです」

そう答えると少し考えて――お願いします、とお兄さんのギターを預けてくれた。

以前教わったように傷んだ弦を丁寧を外し、ケースの中にあつた新品の弦に張り替える。一緒に入っていたチューナーを使いひとつひとつチューニングをしていく。チューニングを終えて他に不備がないことをチェックして、奈緒なおにギターを手渡すと、彼女は、受け取っ

たギターを大事に戻してケースを閉じた。

下を向いていたから表情は解らなかつたけど「ありがとうございませ……。」と、ささやくような小さな声でお礼の言葉が聴こえた。

「——さて、ケーキを食べましようっ！」

振り返った奈緒なおの声は先ほどとは違いハッキリとした声だった。少し目潤んでいるような気がしたけど、きつと気のせいだろう。

「えっと、さつき食べてましたよね？」

「あれくらいじゃ、ぜんぜん足りないっすよっ！ なんのタメにホルで買ったと思ってるんすか？」

「……マジですか？」

「当然っしょ？」

「あたりまえじゃないですか？」つと、さも当然のように言つてのけた彼女の目は本気だった。

「ほら、行きますよー」

座ったまま固まっていた俺の手を取つて、半ば強引に立たせて背後に回つた。そして、背中を軽く押されながらリビングに戻る。目の前に鎮座するフルーツをふんだんに使用した、まるで山のようなケーキをコーヒで流し込んだ俺とは対照的に、奈緒なおはさつきにも増して上機嫌に、とても幸せそうな表情かおでケーキを食べている。

「大丈夫なんですか？」

「ん？ なにがですか？」

「その、胃もたれとか……。」

「これぐらい問題ないっすよっつ」

女子は偉大だと、改めて感じる出来事だった。

ケーキ食べ終わった頃には、すでに21時を回っていた。もう一度夕食のお礼の言つて部屋を出る。

そしてマンションから最寄り駅に向かう道中で思い出した。帰宅後、膨大な数の書類を処理しなければならぬ事を。

——今夜は、徹夜になるかも知れないな。

自宅を構える都心と比べると、いくぶん星々がまたたく夜空を眺めながら家路を急いだ。

## Episode 2. 5 笑顔

予知能力者との話し合いは一時保留になり、あたしたちは彼が自宅を構える六本木タワービル内のエレベーターに乗り、下へ向かっている。

「結局、無駄足だったな。それで、どうするんだ？」

「もっと情報を集めて出直すですね。しかし、今回は厄介になるやも知れません」

扉横のボタンの近くに立っているあたしの後方で話している男子二人の会話が耳に入った。

「能力者の説得に当たる場合は、事前に情報を集めて対処に望むんです」

「…… ああ、僕の時はそうだったな」

「ですが今回は、証拠を集める集めない以前に、もっとイレギュラーなことが起きてしまったので」

「それだ、どうして乗り移れなかったんだ……」

「友利ともりさんは、どう思われますか？」

高城たかじょうから投げ掛けられた質問に、あたしは振り向かず前を向いたまま答える。

「分かりません。ですが、確たる証拠を掴めてない以上どうすることもできません。とにかく——」

ポケットに入れたスマホが振動した。取り出して、画面を確認。着信は電話番号だけで送信できるショートメール。発信者の見覚えのない番号に最初は迷惑メールかと思いましたが、タイトルに書かれていた文字を見て、急いでメールを開いて本文を確認する。

タイトルには「宮瀬みやせです」と予知能力者の名前が記され、本文には「もう一度話しをしましょう。日時と場所はお任せします。もちろん断っていたいただいても構いません」

わざわざ一度帰した上での連絡。

一対一で話したい、四人一緒だと話し難い…… ま、実際あんなことになった訳です。しかし、能力が効かない得体の知れない相手。

何か別の思惑があるかもしれないという疑念と共に、この機を逃せば二度と機会は訪れないかもしれないという葛藤。

「友利さん、よろしいですか?」

「何ですか?」

スマホをポケットにしまう。

「明日以降ですが、いかがされますか」

前を歩いていた乙坂さんおとさかと黒羽さんくろばねも足を止め、視線をこちらを向けて返答を待っている。

通常であれば、身辺調査に当たり動かぬ証拠を掴むところですが。今回ばかりは組織のコネクションを使ったとしても、世界に名が知れ渡る企業も複数入るビルのセキュリティを躲すのは困難、というより信用問題に発展する以上ほぼ間違いなく不可能。手持ちの限られたカードで立ち回る他ない。例え、罠であったとしても。

「出直します。対策を練り、再度コンタクトを図ります」

「またここへ来るのか……」

やや項垂れる乙坂さんおとさかとは対照的に、黒羽さんくろばねは笑顔を絶やささない。

「能力を使い続ければ、大変なことになりますから。それに乙坂さんおとさかの時は、私と友利さんともりでもっと長い時間をかけて調査しました。とはいえ穩便に済めばそれにこしたことはありませんけどね」

「でもわたし、ちゃんとお話すれば分かってくれると思いましたが。穩やかで優しそうな方でしたし」

「はい、そうでしたねっ! ゆさりんに説得されたら、私ならイチコロです!」

会話を聞き流しつつ、打開策を考える。

二人きりであって話すなら個室、それも決して外部に洩れないようにセキュリティが完璧なところ。そんな都合のいい場所——ああ、ありましたね。期限は今日の23時59分まで、出たとこ勝負でいくしかない。

エレベーターは一階に到着、六本木タワービルを出て最寄り駅へと向かって歩く。さて、問題はここから。怪しまれず自然と別行動を取

るには。

「ん？」

改札の前であるものを見つけた。これなら行けます。

「今日は、ここで解散にしましょう」

「はあ？」

「解散ですか？」

「一緒に帰らないんですかー？」

三人から疑問の声が上がる。星ノ海学園併設の同じマンションに住んでいるですから当然と言えば当然。もちろん、不審に思われることは想定済み。あたしは、壁に貼られている広告を指差した。

「近くの百貨店のデパ地下で、19時以降限定のお弁当があるんです。あたしは、それを買ってから帰ります」

「19時って、まだ結構時間あるじゃないか」

「ですから、ここで解散しましょうという話です」

「そういうことでしたら。お二人は、どうなさいますか？」

「わたし、これからお仕事です。仕事現場の最寄り駅でマネージャーさんがお迎えに来てくれます」

「では私が、護衛いたします！ ファンに気づかれたら大変なことになりますからー」

「まあ、そういうことですので、あたしはここで――」

「待て、僕も行く」

この広告のお弁当に興味を持ったのか、駅を出ようとしたところで乙坂さんが、一緒に行くと言い出してしまいました。

「歩未ちゃんが、晩ご飯を作って待ってるんじゃないですか？」

「そ、それは……」

「帰りが遅くなると心配するっしょ」

「…… わかったよ、じゃあな」

乙坂さんの妹の歩未ちゃんを利用してしまったのは少し心苦しいですが、説得は成功しました。三人が改札をくぐったのを見届けてたあたしはひとり、駅を出て、ショートメールに返信を送る。ちよつと急ぎましょう。多くの人たちで賑わう歩道を、六本木タワーへ向かつ

て歩きだした。

指定した時間の五分前に、指定場所に到着。

「ふう……」

大きく深く深呼吸をして心を落ち着かせて、インターフォンを押す。すぐに中から反応が返ってきた。

『はい』

「友利です」

『お待ちしていました』

カチツ、とロックが外れる音がした。

ドアのぶに手を掛け、ゆつくりと開ける。玄関には、先ほどと同じように予知能力者が微笑んでいた。

「お一人ですか？」

「先に帰りました。二人の方が話しやすいこともあるのではないかと  
思っています」

「なら、個室のある店にしましょう」

「いえ、お構いなく。指定したのはこちらですので」

「そうですか？ では、どうぞ。お上がりください」

「お邪魔します」

彼のあとに続いて、すみずみまで掃除の行き届いた広いリビングに入り、先ほどと同じテーブルを挟んでソファに座って対峙。

あたしは、さっそく用件を訊ねた。

「話とはなんでしよう？」

「そう警戒しないでください、と言っても無理ですね」

その通り。警戒と緊張感を解くわけにはいきません。何せ、乙坂おとさかさんに能力を奪わせようとしたのに失敗に終わったんですから。いったいどうやって略奪を防いだのか、なんとしてでも口を割らせないと、と考えていると――。

「『略奪』、途轍もない能力ですね」

「な、なぜわかるんですか?!」

予想もしていなかった言葉に虚をつかれたあたしは、自分でもビツクリするくらい動揺してしまった。そんなあたしに対して、彼は優し

く微笑みながら疑問に回答してくれる。

「保有する特殊能力のひとつです」

「やはりあなたは、複数の能力を持っているんですね……！」

膝の上で握った両手に自然と力が入る。

「相手の能力を知る・相手の能力を防ぐ」最低でもこの二つの能力を持っている能力者、イレギュラーにもほどがあります。

「質問形式にしましょうか。あなたの質問に嘘偽りなく答えます。ただ、答えられないことに関しては答えられません。いかがですか？」

あたしの感情の揺らぎを見透かしたのように、分かりやすくともありがたい提案を持ちかけてくれた。それに、おかげで冷静になれましたし。

「あなたには、なにもメリットがないじゃないですか」

「確かに、そうですね。ふむ。では、もう一度話し合う機会を与えてくれたお礼と言うことでいかがでしょう」

——いったい、どういうつもりなんでしょうか。はつきり言って意図がわかりません。ま、敵意は感じませんが。

「分かりました。ではさっそく、ひとつ目の質問です。あなたは、複数の特異能力を持っているんですか？」

「はい、その通りです」

即答。

「続けて二つ目、予知能力は？」

「持っていますよ」

これも即答。それに声色や表情の変化もいっさい見受けられない。

「三つ目。では、どのような能力を持っているのですか？」

「全部は言えませんが、ひとつは『偽り』、偽装です」

「……偽り」

口元に手を持って行き、やや目をふせて少し考える。

——もし仮に、本当に『予知』能力を持っていないとしても。複数の能力を保有し、かつ、自覚して使用している。危険にもほどがある。なにより、乙坂さんの『略奪』を防いだ特異能力は、奪えない以上ど

うにかして引き込まないと。思考を巡らせていると、まるであたしの疑問を晴らすように自らの能力の説明を始めた。

「偽りは主に、探知系、探查系能力への対策です。文字通り能力を偽装、偽ることができます。ただ、どんな能力に偽るのかは使用者には解りません」

「なるほど……」

それが、偽りの不完全なところ。熊耳くまがみが能力を間違えたのは、そういう理由。もし本当ならですけど。

「予知能力と言われた時は驚きました。そんな能力があれば便利ですね」

「四つ目、他にはどんな能力を？」

「言えません」

「五つ目、略奪を防いだ能力は？」

「言えません」

——何にも答えてくれないじゃないっすか。

ちよつと不快な視線を向けると、困ったような顔で笑った。

「そんな顔しないでください。言えないことを言ってしまうのと同義になってしまっんです」

「……六つ目。あなたの目的はなんですか？」

「といますと？」

「隠すということは、何か目的があるからではないかと考えてました」

「なるほど、目的ですか。以前はあつたんですけどね。今は、さほど執着を持っていませんね。何が目的だったかは教えられませんよ」

「むう、七つ目っす、この成績と運動能力はっ？」

あたしはトートバックから、光坂の生徒から教えてもらった情報をまとめた用紙をテーブルに置いた。

「学業も、運動も、努力の賜物ですよ」

「ほんとおっすかー？」

「はい」

疑いの眼差しを向けてみましたが、とても爽やかな笑顔が返ってき

ました。

——ぜんぜんボロ出さなかつすね、どつかのカンニング魔と違って。それにしてもよく笑う人。それに、嫌みもまったく感じませんし。

『ちゃんとお話すれば分かってくれると思いましたが。穏やかで優しそうな方でしたし』

なぜか不意に、黒羽くろばねさんの言葉が頭に浮かんだ。

いや、でもさすがにそれは………目の前の能力者ターゲットは優しく微笑んだまま、あたしの言葉を待っている。

何より一人で来たことを気遣って、代替案も提案してくれた。

本当に、ただ純粹にもう一度話をするためだけに………賭けてみますか。

「それでは、最後の質問です」

「はい、どうぞ」

「あなたの能力は、星ノ海学園生徒会の活動に使えるので、あたしに協力していただけますか」

ふと笑顔が消えて、今度は不思議そうに首をかしげた。

「あなたに？ あなた方に、ではなく？」

「はい、あたしにです」

「それは、なぜ？」

「わざわざ一度帰してから、もう一度話をしたいと。『あたし』に連絡してきたからです」

一瞬固まったと思ったら、すぐに白い歯を見せて吹きだした。失礼な人つすね。

「あつははっ、すみません。なるほど、わかりました。協力しましょう」

「えっ？ マジつすか？」

「はい、『あなた』に協力します」

「ありがとうございます。では、転校手続きの書類を——」

やや呆気にとられつつも、テーブルの成績表をしまつて、代わりに星ノ海学園の入学案内を見やすいように置く。

「どうぞ」

「はい、確かに受け取りました」

受け取った封筒を開いて、中の書類とパンプレットに目を通しだした。手続きについて簡単説明する。

「特待生になるので、転入試験は免除になります」

「そうなんですね」

「ま、普通に試験を受けても余裕なんでしょうけど」

若干探るように言ってみましたが、特に変わった反応はない。

「この書類はいつまでに提出すればいいですか？」

「うーん、そうっすねー」

——気が変わらないうちに引き込みたい……ダメ元で言ってみるか。

「今日中にお願ひできますか？」

「わかりました、構いませんよ」

「マジっすか？ ありがとうございます。書き終えたら、星ノ海学園までご案内します」

「案内していただいていいんですか？ もう、遅いですけど」

「あたしは、星ノ海学園の併設のマンションに住んでいますのでご遠慮なくどうぞ」

「そうでしたか。じゃあお願いしますね。少し外しますね」

手続きの書類を残して席を立つと、キッチンのテーブルからおぼんを持って戻ってきた。

「よかつたら食べて待っていてください」

「おおうっ、ケーキっ！ いいんですかっ？」

「先ほど出すつもりだったんですけど、機会がなかったの」

「ありがとうございますっ。いただきますっ、うつまー！」

ちようどタごはんの時でお腹も空いていたから、よりいっそう美味しく感じますね。まあ実際、美味しいんですけど。

「って、アメリカの大学出てんすかっ？」

ケーキを食べながら書類を覗くと、とんでもない経歴が書き記されていました。

「ええ、一年と数カ月前に」

「…… 本当は、予知能力持ってんじゃないんすか？」

「持っていませんよ。さあ、記入し終わりました」

「はい、お疲れさまでした。では行きましょう」

あたしたちは、お互いの電話番号とメールアドレスを交換してから部屋を出る。六本木駅から約一時間電車に揺られ、星ノ海学園の最寄り駅に到着。そこからは徒歩で移動、途中あたしが住む併設マンションを紹介して、目的地の星ノ海学園に到着。

「ここが、星ノ海学園です」

「ありがとうございます。ここで、大丈夫です」

「はい。あ、忘れてました。引越しはいつにしますか？」

「引越し？」

保護した特殊能力者はみんな、安全の確保のため併設マンションで暮らしていることを伝えたところ……。

「難しいですね、本業はあくまでも投資家ですので。仮に全て処理するとしても相当な時間がかかります。設備が整っていないと出来ないこともままあるんです」

「そうですか、わかりました。事情が事情ですし、生徒会長権限で特別に許可します」

と云うか彼の場合、自宅の方がセキュリティも上でしょうし。

「ありがとうございます」

あたしは姿勢を正して宮瀬さんみやせに向き直した。

「改めまして、星ノ海学園の生徒会長、友利奈緒ともりなほです」

「光坂大学付属…… いや、もうすぐ元になりますね。宮瀬翔みやせしやうです」

お互いに——よろしく願います、と挨拶を交わし。宮瀬さんみやせは星ノ海学園へ、あたしは併設のマンションへ帰る。

都心よりもキレイに星が見える夜空を眺めながら、あたしは誓った。

——いつか必ず、本当の能力をあばいてみせます、と。

## 生徒会活動日誌 1

生徒会活動日誌。

最近サボりがちだったんっすよねー。さて、久しぶりに記録をつけますか。

関内学園との試合の後、あたしはある事を考えていました。それは、どうやって宮瀬みやせさんの能力を聞き出すかです。

初めて出会ったあの日、殆どの質問をはぐらかされてましたし。

寮への帰り道を、乙坂おとさかさんを加えた三人で歩いていると、乙坂おとさかさんが彼の能力について話題を切り出してくれました。

これには、ナイス！ と心の中で賛辞を贈りました。いや、声に出しそうになって危なかったな！。

ですが結果は…… やはりというべきか、彼は答えをはぐらかしました。

ま、答えるわけないっすよね。あたしは自分なりの見解を述べましたが…… めんどいなヤツだなー、なかなかボロを出しません。ですが「半分正解」ということは、あながち的外れではないということでしょうか。

しっかし、あの化け物みたいな成績と運動能力が努力の賜物ってマジなんすかね？ 甚だ疑問です。

なんてことを話しているうちに、併設マンションの到着。何とか引き留める方法を考えないと。咄嗟に思いついた、夕食の買い物を実に時間を稼ぐことに成功。店への道を歩いていると、自炊するか訊かれました。特に隠すことでもないのだからにすることと、普段はお弁当で済ますことを答えました。

その時に思い付いたんすよ。胃袋を掴んでしまえばいいと！ それで、イチコロっしょ！

スーパーの前で別れを告げられましたが、ここでもなんとか引き留めることに成功しました。何はともあれまず、メインの肉！ 選んでいると「ごきげんですね」と言われました。

当たり前っじゃないっすか！ 肉、最強っしょ！

ですが、ここで思わぬ人物と遭遇しました。乙坂さんの妹、乙坂歩未ちゃんです。一人で買い物に来たといっていましたか……。警備員なにやっつてんすかね!? 一人で帰らせるのは危険と判断し、一緒に帰る事を約束しました。ひとまず一安心です。

歩未ちゃんとは別々に別れ、買い物物を再開。肉をカゴに入れていると野菜は買わないのかと言われました。野菜を食べるとしつこく言われてたのでしかたなく買いましたけど……。あいつはあたしの父親か?? まあ、あとでケーキを買って貰える事になったのでいいですけれど。

買い物物を終えて歩未ちゃんと合流。一緒にあたしたちが住居を構える併設マンションへ。

宮瀬さん、自然に歩未ちゃんの荷物を持つとうとしました。最初は断られていましたがあたしのフォローで受けとることに成功。

右手にあたしの買い物袋、左手に歩未ちゃんの買い物袋を軽々と持っています、重くないんすかね?

帰る途中で洋菓子店に立ち寄りしました。スーパーで約束したケーキを買うためです。歩未ちゃんは遠慮してましたが……。『歩未ちゃんの手料理』を条件に納得して頂けたようです。

しっかし、歩未ちゃんの『自分の手料理でいいのか』という問に『歩未さんの手料理がいいです』と間髪入れずに答えるなんて……。ひくなっ!! まったくキザっすねっ。女たらしもいいところです。

何はともあれ無事に歩未ちゃんを乙坂さんの元へ送り届けることが出来ました。

歩未ちゃんは、勝手に買い物に行ったこと、遅くまで帰らなかったことを怒られてしまいました。あたしと宮瀬のフォローで許してもらえたようです。

しっかし歩未ちゃんは可愛いなー。あたしの妹にならないっすかねー? 今度、歩未ちゃんに頼んでみましょうっ。

あたしの部屋へ着くと少し待たせて着替えを済ませました。さて、こっからが本題です。着替えをしながらどのように引き込む

か考えてました。

心の苦いですが『歩未ちゃんあゆみの料理は食べられて、あたしの料理は食べられないのか』と歩未ちゃんあゆみを利用させてもらいました。

ごめんね。歩未ちゃんあゆみ、ナイスです！

ひとまず引き込む事に成功。

料理を作っている途中で『うわあ……』と聞こえましたが何でもないといわれましたが、

あれは何だったんでしょう？

集中していたのか、出来ましたと声を掛けると少し驚いたようです。

その様子にエツチな画像でも見てたのかと尋ねると『はい、そうですよ』と無駄に爽やかな笑顔で返事が返ってきました。

どうやら本業の作業のようっすね。

さて手料理を振る舞うなんて少し緊張しましたが美味しいといってくれたので安心しました。

肉料理は任せてください！ タレが決め手なんすよ！

食べ終わると洗い物を申し出られました。引く気は無さそうでしたので分担して作業する事にします。

あたしが食器を洗い、宮瀬さんみやせが拭く。二人でやると早いっすねー。星ノ海学園に転校する前は自炊していたと言っていたのでやはりなれてるんでしょうか。手際がいいです。

洗い物も片付き買って貰ったケーキを食べていると、彼はパソコンを片付けに行きました。時計を見たら20時を回っていたので、おそらく帰る準備をしているのでしょうか。

ですが、まだ話を聞き出せていないので引き留めるため、あたしも部屋へ向かいました。

部屋に入ると彼は部屋の隅に置いてあるギターケースを見ていたようです。あたしは、兄のギターであることを説明しケースを開きギターを取り出し見せました。

あたしは、兄が帰ってくるまで綺麗にしておきたい事を話すと彼は

手入れを申し出ました。

出来るのですか？ と尋ねると『はい』と答えが返ってきました。あたしが、ギターを手渡すと宮瀬<sup>みやせ</sup>さん手慣れた様子で手入れを進めて最後はチューニングまでしてくれました。

見違えるくらい綺麗になったギターを見たら、ちよつと……まったく、何でもできるんっすねっ。

そのあとは買って貰ったケーキを二人で食べました。

いやー美味しかったなー！ まあ、彼はつらそうでしたけどっ。

今日は、結局話を聞き出すことは出来ませんでした。が次の機会には必ず聞き出してみせます！

今日のところはこれで終わりにしましょう。

——追伸。

あの人がギターを手入れしている姿はまるで小さな頃にいつも見ていた兄がギターを手入れしていた姿とダブって見えて。すこし懐かしさを感じた気がしました。んー……。さて、今度こそ終わりにします。

## Episode 9 調査

奈緒なおの家をおいとまして、自宅がある六本木タワービルに到着した時にはもう午後の十時を過ぎていた。明日も、いち時間目から受け持ちの授業がある。湯船は諦めてシャワーで汗を流し、いつものようにコーヒーを淹れて、仕事部屋のパソコンで未読の書類の処理を始める。

仕事を始めて数時間切りの良いところでひと息つく。背もたれに体重を預けながら、慌ただしくも充実した今日を振り返った。

「念動力に瞬間移動、か……」

前者はレアな能力で応用もかなり効く。後者の方はリスクが高い、任意の場所への直接移動ではなく、初速から目にも止まらぬ超加速で物理的に移動する能力。その証拠に高城たかしやうは、ベース上で止まる事が出来ず激突したことを考えると「超高速移動」というほうが分かりやすいだろう。まあどちらにせよ、どっちも面白いごきげんな能力であることはかわりない。

「ふう……」

——よし、続けよう。作業に戻る前に掛け時計を見る。掛け時計の短針は、すでに午前一時を回っていた。眠気と戦うためにキツチンに戻ってコーヒーを入れ直す。出来るのを待つ間窓際へ向かった。窓の向こう側に広がる六本木の街には、まだ多くの光が灯っていた。夜更けの中、いまだに煌々とした街並みを眺めていると、ふとさっきのことを思い出した。

久しく忘れていた、誰かと過ごす穏やかな時間。

——……さて、あと一息、頑張りますか。出来上がったコーヒーをカップにそそぎ仕事場へ戻った。

\* \* \*

翌朝、いつもと同じく職員室で準備を済ませ教室へ向かう。すると既に登校してきてた乙坂おとせかと高城たかしやうが話をしていた。俺に気づいたクラ

スメイトと朝の挨拶を交わしながら、彼らの元へ向かう。

「おや、宮瀬さん。おはようございます」

「おはよう」

「おはようございます。身体の方は大丈夫ですか？」

昨日の試合で負傷退場し病院送りになっていた高城の頭には包帯、頬には絆創膏と実に痛々しい治療のあとが残っている。

「はい、慣れていきますのでっ」

「病院送りが慣れるって異常だけだな」

ドンっ、と胸を叩いて得意気と言う高城に、乙坂の的確な突っ込み。あの能力の性質からしてよくあることなんだろう。

「試合の方は無事勝てたようですね。乙坂さんが、大活躍だったとお聞きました」

「いや、僕だけの力じゃない。みんなが繋いでくれたから勝てたんだ」  
「嬉しいこと言ってくれますねっ。病院送りになった甲斐があるというものですー！」

「高城さん、これをどうぞ」

名誉の負傷だと誇らしげに胸を張る高城に、今朝学校へ来る前にある人から受け取った封筒を手渡す。

「なんででしょうか？」

「功労賞ですよ」

「はあ、それはありがとうございます。開けてもよろしいですか？」  
「どうぞ」

封を切り中に入っている長方形の紙を確認した高城は、突然ワナワナと身体を震えさせる。その挙動不審な高城の態度に、乙坂は少し引きききみ訊く。

「どうしたんだ？」

「……………これは……………『How—Low—Hello』のライブチケットじゃないですかっ!! しかも全公演限定10席! 幻のステージバック席ツ!!」

高らかに叫ぶ。クラスメイトの黒羽がボーカルを務めるライブチケットだけに教室内もざわついた。ただ、乙坂はあまり興味がなさそ

うだ。

「それ、すごいのか？」

「すごい所の物ではありません!! いいですか? 乙坂さん! ハロハロのライブ自体が何千という競争率を誇っているんです。その中でも一万をゆうに越える倍率を誇るのが、このステージバック席! ゆかりんを間近で観られるのは勿論の事。サイン入りライブTシャツ、ツーショット写真撮影等の豪華特典付きで、ファンなら喉から手が出るほどの超プレミア席なんですっ!」

「そ、そうか……」

バンバンッ! と何度も机を叩きながら力説する高城に、乙坂はドン引きしている。

「こんな素晴らしい物、本当に頂いてもよろしんですかッ!」

鼻息も荒く眼鏡が曇るほど興奮して確認してきた。「ええ、もちろんですよ」と少し引きぎみに答える。更にテンションが上がった高城は咆哮した。

「私はッ、初めて能力者である事を神に感謝いたしますッ!」

「ひくなっ!」

登校してきた奈緒は、涙を流して咆哮していた高城に激しく突っ込む。

一先ず、まったく気にするようすもなくチケットを頬ずりしている高城のことを放置して、俺は彼女への挨拶を優先した。

「おはようございます。友利さん」

「はい、おはようございます」

「おはよう」

乙坂も続いて挨拶。

そして、乙坂は申し訳なきような声で、昨日のことを話し出した。きっと俺と奈緒が揃うのを待っていたのだろう。

「昨日は、すまなかったな」

「なんのこことっすか?」

わざとらしく惚ける奈緒。そんな彼女の態度に、乙坂はやれやれと言った感じ。

「歩未を送ってくれたことだよ」

「あたしが、連れ回したんですから当然のことです」

彼女の言葉に、俺は「違いますよ」と訂正を入れる。すると奈緒は軽く首を傾げた。

「ん？」

「私たち、ですよ」

その言葉を聞いた奈緒は、少し呆れ気味に「そうでしたね、あたしたちでした」と訂正してくれた。俺たちのやり取りを見た乙坂は少し考え込むと違う言葉を選んだ。それは何を言っても意見を変えないと判断した言葉だったんだと思う。

「……そうか。二人とも歩未と遊んでくれてありがとう」

「はい、どういたしまして」

少し微笑んで言った奈緒言葉とほぼ同時に、始業ベルが鳴り響いた。

\* \* \*

午前の授業が終わり昼休み。一度、職員室に立ち寄ってから教室に戻ると、さっそく高城が劳いの言葉をかけてくれる。

「お疲れさまです。宮瀬さん」

「いえいえ、ありがとうございます」

「二人とも昼飯にしよう」

「そうですね。では学食へ行きましょう」

「あ、先に行っていてください」

二人に断りを入れてから席を立ち、窓側一番前の席で愛用のカメラを弄る奈緒に話しかける。

「友利さん」

「ん？ ああ、おつかれっす。なんですか？」

「よかったら、一緒に学食に行きませんか？」

奈緒は予想していなかったのか、少し驚いたと言うよりも少し戸惑った、そんな表情を見せる。けど、すぐに「お弁当がありますので」

と言って、学校向かいのコンビニの弁当を机の上に置いた。

「そうでしたか。では、またの機会に」

「はい」

席を離れて教室を出て二人が待つ学食に向かう。学食に着くと既に長蛇の列ができていた。

「あいかかわらず、すごい人だな……」

「出遅れましたからね、仕方ありません。また売店にでも……」

たかじょう  
高城の言葉を遮る。

「昼食は、私が調達してきます。お二人は席の確保をお願いしますか？ テキトーでいいですよね」

「ん？ ああ、頼む」

「あ、はい。席の確保はお任せください」

少し困惑している二人を置いて、手の空いている学食の店員に話しかける。店員から大きめのお盆を受け取り、二人が待つ席に向かった。

「はい、お待たせしました。どうぞ」

「こ、これはっ！」

「まさか……っ！」

二人の声が震えている。

「授業が終わると同時に学食へ駆け込まなくては食べられない幻のカレー！ 牛タンカレーじゃないですか!？」

「これって限定品なんだろう!? この時間でどうやって手に入れたんだ!？」

二人して興奮して問いただしてきた。

「教員特権で取り置きして貰いました。先週末に頼んでおいたんですよ」

「なんと!? そんな裏技があつたとはっ!？」

「職権乱用じゃないかっ!？」

「さあ、なんの事だか？ とりあえず食べましょう」

「ああっ！ そうだなっ！ う……… うまーい！ やっぱカレーはスパイスが効いてないとカレーじゃないよなっ!？」

乙坂は、目に涙を浮かべながらカレーをがつつき始めた。カレーが好物なんだろうか。俺も一口運ぶ。うん、確かにうまい。話をしながら食事を済ませ、午後の授業の準備に入った。

\* \* \*

授業終わり奈緒をから呼び出しを受けて、急いで用事を済ませて生徒会室へ向かっている。廊下の向こうから黒羽が歩いてきた。

「黒羽さん」

「あ、宮瀬さんっ」

声をかけると少し早足でかけよってくる。

彼女がここにいる、と言うことは……。

「もしかして用事終わっちゃいました？」

「いえ、わたし、今からレッスンがあつて早抜けさせてもらつて」

「そうでしたか、がんばってくださいね」

「はい、ありがとうございます。えっと、それですね……」

黒羽は、肩にかけてスクールバッグを気にかけている。

「週末にライブがあるんですけど——」

「ライブ？」

——ああ……高城に渡したチケットの……。

「神奈川県のスーパードリーマーであるんですけど、是非見に来ていただけたらと思つて」

「神奈川？」

——あれ？ 渡したチケットは確か……。

「あ、都合悪いですか？ 急ですもんね……」

「いえ、そうじゃなくて。黒羽さんのバンドのことよく知らなくて、それでもよかつたら——」

言い終わる前に黒羽の表情が、ぱあーっと明るくなった。

「関係者席ですので、ノリとかぜんぜん気にしないで大丈夫ですっ」

「そうなんですか？ じゃあぜひ観に行かせていただきます」

「はいっ。えっと、ちよつと待つてくださいいねー」

バッグからチケットの入った白い封筒を取り出した。

「はい、どうぞですっ」

「ありがとうございます」

「えへへ」

「ところで、レッスンの方は？」

「…… え？ はわあつ、そうでした！ もう行かないとつ。それじゃあまた明日ですっ」

「また明日、お気をつけて」

「はーいっ」

急いでいると言っていた割りにはまだ少し余裕があるのか、振り向いて笑顔で手を振っていた。彼女の姿が見えなくなるまで見送った俺は、生徒会室へ急いだ。

「それで、今日はなにをしていたんすかー？」

生徒会室に入ると、生徒会長の席で肩肘をついた奈緒なほに、やや不機嫌そうな視線を向けられた。今日は、ちゃんと少し遅くなると連絡は入れておいたんだけど。

「引き継ぎの資料を作るために学年とクラスごとに資料まとめていたんです」

「ああ、そっか。英語の先生、来週から復帰するんだったな」

「ええ、ちょうど中間テストが重なったので。結構な量なんですよ」

「それは大変ですね。ご苦労様です」

「だな」

「いえいえ」

気づかってくれた二人と同じく彼女も納得してくれた。

「仕方ないですね。さて、それでは行きましょう」

「どこへですか？」

「能力者の調査です。今回は急を要する内容ですので現場へ向かいながら説明します。それに今度の調査には、あなたの能力チカラがきつと必要と思いますので」

——俺の能力が必要か、まだ彼女にも打ち明けていない俺の能力が……。

\* \* \*

目的地へ向かっている間に能力者について聞かせてもらった。

今回のターゲットは「電撃」の能力者。どんな形で電撃を発生させるのかまでは分からないが、穏やかな能力じゃないことは確かだろう。

「人通りが多いな……」

探知能力者が提示した情報を元に降り立った場所は、大勢の人々が行き交う都心の駅だった。

「これでは能力者を絞り込むのは難しいですね……」

高城たかしやうが言ったことはもつともだが、それ以上に俺は別の懸念を抱いていた。

「とりあえず怪しい人ヤツがいなか付近で聞き込みと見回りをしましょう」

「ですね。では私は、駅の西側を調査します」

「待て。相手の能力が具体的に分からない以上、尾行は禁止です。怪しい人間を見つけたらまずは写真。その後、情報の共有を最優先で」

「了解しました。それでは、行って参ります！」

敬礼した高城たかしやうは駅の西側へ。乙坂おとさかは、反対の東側へ。

「あたしは駅北へ行きます」

「では、駅南こごですね」

「はい、お願いします」

奈緒なおは、駅構内へ入っていった。

辺りを見回してみる。時間が時間だけあつて一般もさることながら学生の姿も多い。これは骨が折れそうだ。

とりあえず駅前を見渡せて、学生も多いカフェのテラス席に座って注意深く観察しながら、店員さんと世間話をしつつそれとなく聞いてみたり、近くの席の女子たちがしている噂話に耳を傾けてみたが、これといった情報は得られなかった。

「ん？」

携帯がメール受信した。送信者は友利奈緒ともりなお。メールの内容は、乙坂おとさか

が怪しい人物を発見したと言うものだった。

「これが能力者ですか」

「はい、間違いないと思います。しっかし——」

「自ら怪しいと公言しているようなモノですね」

乙坂が撮った写真に写っていたのは、もう制服も夏服に変わった初夏だというのに、長袖のパーカーを首まで上げ、頭にはフードを被つて、ビルの影から覗いている姿は見るからに怪しい。しかも、この男は……………。

「黒羽さんを尾行していたと」

「ああ、間違いない。マネージャーと話してる袖咲を見てた」

「なるほど」

——ファンか？ いや、この鋭い視線は違う気がする。

「ストーキングだなんて許せませんねえ……………」

彼女の大ファンの高城が殺気立ってる。

「ファンとは限らないっすよ。はい、友利です」

俺たちをよそに、奈緒は電話をかけていた。

「よろこんでいるところ申し訳ないのですが、美砂さん」

電話は、黒羽へ心当たりの確認の電話だった。

美砂の話によると先日、写真と同じフードを被った男に脅された。脅しの内容は、ライブをすれば不幸になる。その時は、ただそれだけで姿を消したらしいが一瞬電流のようなモノが走って周囲の灯りが全部消えたと言うこと。

やはり電撃の能力者が、黒羽を狙っていることは間違いなさそう  
だ。

\* \* \*

「あなたはどう見ますか？ 今回の件」

用事があったためお互い学校に戻った俺と奈緒は、生徒会室で今回の件について少し意見交換をしている。

「能力者のバックに身内がいるのは間違いないでしょうね」

能力者が黒羽くろぼねを脅した現場は、所属事務所が所有しているダンススタジオの廊下。出入り口には当然警備の目がある。誰かが手引きしなければ潜入は不可能だ。

「黒幕は、芸能関係者。黒羽くろぼねさんの活躍で割りを食っている人、もしくは個人的な恨みを持つ人と言ったところでしょうか」

「あたしも同意見です。それも芸能界でそれ相応の権力を持つ人物と思われれます」

「ええ、間違いありません。なにか心当たりがないか、黒羽くろぼねさんに聞いてみますか？」

「いえ、その必要はありません」

「なんとなく見えてきましたから」と、心当たりがあったのか意味深に言って席を立った。

「とにかくあたしたちに出来ることは、ライブ本番での犯行を未然に防ぎ、能力者を確保することです」

「そうですね」

「はい。では帰りましょう」

「もう少し資料作りを進めたいので、お先にどうぞ」

「そうっすか、大変っすね。じゃあお先に失礼しまーす」

「あ、そうだ。これ、よかったらどうぞ」

生徒会室に来る前に学食で受け取ったビニール袋を彼女に差し出す。

「ん？ なんすか？」

「学食のカレーです」

「はあ、ありがとうございますーす」

「また明日」

「はい、また明日。おつかれさまです」

戸締まりをして生徒会室を一緒に出て、俺は彼女を見送ってから職員室に戻り、引き継ぎの資料作りに戻った。

## Episode 10　　く友だちく

太陽が傾き始め、西の空がオレンジ色に染まり出したころ。ちょうど切りのいいところで今日の引き継ぎ資料の制作を終えることにした。

今夜は、20時から用事がある。更衣室を使わせてもらい、家から持参したスーツに身にまとい、最寄りの駅から新宿を経由して六本木に到着した時には、19時を回っていた。

少し急ごうと階段を上りると駅の構内は、いつもよりも大勢の人で溢れ返っていた。不思議に思っていると拡声器を持った駅員のアナウンスが聴こえてきた。どうやらトラブルで反対の路線が止まっているらしい。どうりで人が多いわけだ。

ごった返す人並みを避けながら出口へ急ぐ。その出入り口付近で、もう夜だというのに、大きなサングラスと顔を覆うマスク姿の怪しい人影が注目を集めていた。

その人だからから「あれ、ゆきりんじゃね?」「だよね!　声かけて見ようかつ」と、いくつもの声が聞こえてくる。「ゆきりん」という呼び名には聞き覚えがあったけど、時間の20時が迫っていたため気に止めず横を通り過ぎようとした、その時――。

「えっ!?　いえ、違いますよー!」

マスクをしているから多少くぐもっていたけど、知っている女性の声が入った。立ち止まって、騒ぎの中心にいる声の主をよく見る。サングラスとマスクで顔は隠れているが、腰まで伸びた長く艶やかな金髪と特徴的なサイドアップのヘアスタイル。間違いない、見知った顔がそこにいた。クラスメイトで、同じ生徒会で活動を共にしている、黒羽柚咲くろばね ゆさだった。

「柚咲ゆさは、アイドルなんだ」

『週末にライブがあるんですけど――』

野球の試合の時の乙坂おとしがと、今日日本人が言っていた言葉を思い出した。仕事の帰りだろうか、電車が止まって身動きが取れないみたいだ。人だかりの周囲を見回してみる。近くにマネージャーらしき人

物は見当たらない。そうこうしているうちに野次馬の数がさらに増えていく。黒羽は、困り果てた様子であわあわし出してしまった。

このままだと騒ぎは収まりそうにない。開始予定時刻は迫っているが、考える余地もなく、彼女を助けることの方が大事だ。

俺は、黒羽を助けるため、スーツの上着を脱ぎ、ワイシャツの両袖を捲り上げ、パソコンを使う時にかけるPCメガネをかけ、それっぽく変装する。そして、人混みを縫うように避けながら彼女の元へ向かう。けど、声をかけるにしても本名で呼ぶのは不自然だ。彼女の芸名は、確か——そう、西森柚咲だ。

「西森さん」

背中越しに、黒羽に声をかける。

「いえっ！ 違います……す〜？」

否定しようとして振り向いたすぐ近くにある予想していない俺の顔に大きな目をより丸くしている。俺は構わずに、ここから連れ出すことを優先させることにした。

「探しましたよ。もう次の収録が始まります。急ぎましょう」

携帯の時計を見せるふりをして「宮瀬です。話を合わせてください」と書いたメールの画面を見せる。黒羽は「わかりました」と小さくうなずいた。

「は、はいっ、すみませんっ！」

「みなさん、申し訳ありませんが、彼女はこれから大事な収録があります。ですので道を開けていただけませんか？」

「すみませーんっ、通してくださいさーいっ！ お仕事に遅れちゃいますーっ！」

黒羽の必死の訴えを聞いた野次馬たちは左右に分かれ、まるで映画のワンシーンのように人だかりの真ん中に出口まで続く道ができた。現役の人気アイドルの力とは本当に凄いモノなんだと改めて実感した。

「急ぎましょう」

「はいっ！」

駆け足で駅の外へ連れ出し、TV局が入る六本木タワー方面へ向か

う。これで少しは誤魔化せるだろう。だが駅でもスマホを黒羽くろばねへ向けていたファンが数人追いかけてきている。追っ手をまくためあえて人通りの多い方へ彼女を誘導し、人混みに紛れこみながら周囲の様子をうかがい、隙を見て人通りの少ない路地へ入る。

「どうやらまけたみたいですね。もう大丈夫ですよ」

「はい、ありがとうございますーっ」

サンングラスとマスクを外した黒羽くろばねは、ぺこつと頭を下げた。俺もメガネを外す。

「いいえ。ところで、なぜこんな所に？」

「えっと、レッスンのあとライブの宣伝を撮影していたんです。けど、マンションに帰ろうと思ったら電車が止まっていて……」

「なるほど、そういう事ですか。マネージャーさんとは連絡取れないんですか？」

「スマホのバッテリーが切れちゃってるんです……」

路地から顔を出してタクシー乗り場を確認すると、すでに行列ができてあがっていた。バス停の方も同じで何本待ちになるか見当もつかない。こういった場合は列に並んじまうことが一番上作なのだが、アイドルの彼女が列に並べば駅と同様の事態が起こりかねない。

もし仮に、六本木から徒歩で併設マンションへ帰るとするとしたも20キロ近くある。昼間ならまだしも、暗い夜道を土地勘も無しに歩いて帰宅するのは困難だろう。都市部は便利である反面、インフラにトラブルが起こると今回のように大変なことになってしまう。

「どうしましょう……」

「そうですね」

黒羽くろばねは不安そうな表情かおをして、俺に意見を求める。

「電車が動くまで時間を潰しましょう。黒羽くろばねさん、夕食はもう済ませましたか？」

「いえ、まだです」

「では食事に行きましようか」

「えっと、でも……」

「実は私も、まだなんですよ。今しがた星ノ海学園から帰ってきたと

こで、よかつたら付き合っただけませんか？」

「あの……わたし、お金持ってないんです……」

テレビ局から駅まで車で送ってもらったまではよかつたのだが、財布やポーチの入ったバックをマネージャーの車内に置き忘れてしまったらしく。ポケットに入れていたICカードと小銭しか持ち合わせがないとのことだった。

「それなら問題ありません。私が出しますから」

「ええーっ!? そんな悪いですよ……」

「お誘いしたんですから当然のことですよ」

「うくん……」

どうしようか悩んでいる黒羽のお腹が、くうくと小さい音を鳴らした。

「行きましようか」

「……はい」

頬を紅く染めて、恥ずかしそうにお腹を隠しながらうなづいた。

さて食事を一緒に食べることは決まった。あと残る問題は店をどうするか。普通の店ではプライバシーの保護に不安が残る。そこで俺は、六本木タワービル内12階に暖簾を構える、お気に入りの食事処へ彼女を連れていくことにした。

「ここは会員制ですので、プライバシーは完全に保証されます。どうぞご安心ください」

「す、すごく高級そうなんですけど……」

彼女は目を丸くして、はわわ……と震えている。その様子が、どこか可愛らしくて微笑ましい。

「見た目だけですよ。値段はリーズナブルです」

「……そうなんですか？」

「はい」

戸惑う黒羽をどうにか納得させて、入店。

対応してくれた顔馴染みの定員はすぐ、彼女の存在に気付き、気を効かせて人目に付きづらい個室を用意してくれた。席に案内してもらってから事情を説明したところ、私物の充電コードも貸してくれ

た。こういった気配りが出来るところも鼻根の理由するひとつ。

「わあ〜！」

コードをスマホに繋いだ黒羽は、ぱたぱたと窓辺に寄っていき、窓の向こうに広がる夜景を見て振り向く。

「とつてもキレイですっ」

「気に入って貰えてよかったです」

笑顔を見せると、再び東京の夜景へ視線を戻した。

運ばれてきた料理を食べながら彼女の仕事の話、学園生活、俺が転校する前の生徒会での活動など世間話をして過ごした。

「う〜ん？」

ふいに少し首をかたむけた彼女は、何か考えているような仕草を見せる。

「どうしました？」

「あの〜、宮瀬みやせさんは星ノ海学園から帰って来たんですよね？」

「はい、そうですよ」

「どうして、スーツなんですか？」

授業の時も制服で行っている、自然な疑問だった。あまり気を使わせたくなかったから話していなかったけど、時刻は既に20時を大きく回っていたため話すことに。

「20時から、近くのホテルで株主総会があつて、予め着替えてきたんですよ」

「えっ——」

腕時計の時間を見た黒羽は「はわーっ！」と想像通り盛大に取り乱して、頭を下げた。

「す、すみませーんっ！」

「いえ、議事録を読めば十分ですので問題ありませんよ。それに友人の方が大切ですから」

「あつ、ありがとうごさいますっ！」

顔を上げた黒羽は、少し照れながらも嬉しそうに微笑んでお礼を言ってくれた。

「どういたしましたして。ある程度充電できたんじゃないですか」

「あつ、そうですよねー。掛けてみます」

ケーブルを抜いて、マネージャーに電話を掛ける。

「あ、おつかれさまです」

どうやら無事、マネージャーと連絡がとれた。

食後のコーヒーを飲んで一安心していると「ええっー!？」と大きめの声が聞こえた。正直、あまりいい感じがしない。

「ど、ど……どうしましょう……」

涙目になりながら助けを求めてきた。

とりあえず状況を訊ねる。

「どうなさいました?」

「マネージャーさんが……」

マネージャーは、週末のライブに関係する仕事の打ち合わせで現在東京にいないとのこと。電車はまだ動いていない。スマホで調べてもらったところ、なんらかの原因で架線がショートし、復旧は早くても明け方の始発になる見通し。

——架線のショート……電撃の能力者、出来すぎているが関係あるのか? いや後にしよう。今はそれどころじゃない。事務所の方にも連絡を入れたが、運悪く他のタレントの打ち合わせや別の仕事で、今日は全員が出払っているとのことだった。

窓辺へ歩いて駅の方を見る。タクシーもバス停も乗車を待つ列は先ほどよりもずいぶん延びていた。

「ホテルを探しましょう。まだ空き部屋があるかもしれません」

「でも、お金が……」

「先ずは探しましょう」

「あ、はいっ」

俺は直接電話で、黒羽くろばねはスマホでホテルのホームページから付近のビジネスホテルの空き情報を片っ端から当たってみた。だが初動が遅かったため、やはり空き部屋は見つからなかった。唯一空いていたのは、この六本木タワー内の最上階のスウィートルーム。だが、それは全力で拒否されてしまった。

——緊急事態だ……仕方ない。

商業施設がいくつも入る一階に降りて必要な物を買ひ揃える。エレベーター近くのクロークの前を通ろうとしたところで受付の女性に声をかけられた。どうやら届け物があつたみたいだ。俺は封筒を受け取り、ひとつ前のエレベーターで先にながっていった黒羽くろぼねと二階で合流。他の客が誰も乗ってこないを確かめて端末にカードキーをタッチする。これでこのエレベーターは直通に変わった。誰かが乗って来ることも、見られることもない。エレベーターは20階の自宅で止まった。

「あちらがバスルームで、そこが寝室になります。ご自由にお使いください」

「でも。宮瀬みやせさんは？」

「ビジネスルームに簡易ベッドがありますので」

「でしたら、わたしがそつちを……」

「普段からそちらを使っていますので、どうぞお気になさらずに」

「…… わかりましたっ、ありがとうございますっ」

始めて来た日と同じようにパタパタと窓際に歩いてく。

「わあ、スゴいキレイですねー！」

「気に入ってもらえて何よりです。何か淹れますね。コーヒー、紅茶とひと通りありますよ」

「えっと、じゃあミルクティーをお願いしますっ」

笑顔で振り向いて可愛らしい返事が返ってきた。

時間のことを考え、カフェインレスの紅茶でミルクティーを作りて、二人分の飲み物と茶菓子をテーブルに用意してから声をかける。

「どうぞ」

「ありがとうございますっ」

ソファアーに座り、コーヒーを飲みながら先ほど受け取った届け物に目を通す。少し大きめの封筒、差出人は先日電話をくれた雑誌の編集者だった。封を切り中身を取り出す、雑誌が二冊と一枚の手紙、内容はインタビュアの礼と記事が掲載された雑誌を送るとのこと。

「あつ、これ、友利ともりさんが持ってた雑誌ですね」

「そうなんですか」

「はいっ」

この雑誌の記事を見て予知能力者が俺であると予め推察していたらしい。もう一冊の雑誌を見る。表紙に書かれた日付は一年以上前のモノだった。当時の記憶を辿るも、特に何も思い出せない。

「そちらも見えていいですか？」

「はい、どうぞ」

雑誌を手渡す。ページ開いて目を通し始め、しばらくしてページを捲っていた彼女の手が止まった。

「あれ？」

「どうしました？」

「この記事を見てくださいっ」

黒羽が広げたページの記事を見る。

掲載されていたのは、年齢はまちまちの学生が複数名。その中には俺と、今よりも少し幼さを感じるが目の前にいるに彼女に似た女子も居た。

「黒羽さん、ですか？」

「はい、こっちは宮瀬さんですよね？」

「ええ……」

——うくん？ と口元に人差し指を当てながら黒羽は記憶を辿っている。そして、「思い出しましたっ」と記事の出来事を話し始めた。それを聞いて俺も少しだが思い出した。

去年の春頃、黒羽が受験に専念するため芸能活動を休止前最後の仕事で。司会者が質問を投げ掛けそれに答える。よくある企画だった。

ただ、特別アイドルに興味がなかったことや、他にも人が居たこと。彼女は受験、姉の美砂の他界などさまさまことなどが積み重なり、お互いこの頃のこととはよく覚えていなかった。

ただ、黒羽の方は奈緒に俺の名前を聞いたときから何か引つ掛かったそう。

「わたしたち、前に一度会っていたんですね」

「みたいですね。すみません、覚えていなくて」

「いえ、わたしもこの雑誌を見るまで思い出せませんでしたし」

雑誌をテーブルに広げ、当時の事を思い出しながらの会話。

「芸能界って、想像以上に大変なんですね」

「楽しいこともいっぱいあるんですよ」

「どういった時ですか？」

「そうですね。知らない土地ところに行けたり、色々な人とお知り合いになれたり……」

口元に右の人差し指を当てながら嬉しそうに話す。

「それに、宮瀬みやせさんや友利ともりさん、生徒会のみんなとお友だちになれました。えへへ」

屈託の無い笑顔。なるほど、これが彼女の魅力か。高城たかじょうが熱狂的になるのもうなずける。

「……わたし、初めてなんです」

無邪気な笑顔が穏やかな表情かおに変わった。

「小学生のころから今のお仕事をさせてもらって。中学校も、前の学校でも、本当のお友だちと言える人は居なくて……」

どこでもアイドル扱いか。確かにクラスでも俳優とか芸人とか芸能界の話はなしを聞かれているところをよく見かける。

「でも宮瀬みやせさん、生徒会のみなさんは、特別じゃなくて普通に接してくれて。だからわたし、友利ともりさんがわたしのライブに行きたいって言うってくれた時、本当に嬉しかったんです」

誰の企みかは分からないが、彼女の邪魔させる訳にはいかない。黒羽くろはねの、本当に嬉しそうな笑顔を見て本気でそう思った。

「はわっ、わたし、語りすぎてしまいましたっ」

「いえいえ、ライブ楽しみにしていますね」

「——はいっ」

飲み物を入れ直すために席を立つ。ふと時計を見ると短針は0時を回っていた。

「黒羽くろはねさん、時間は大丈夫ですか？」

「えっ……わたし、明日も朝からレッスンがあるんですけどっ！」

慌ててソファアーから勢いよく立ち上がった。

「それは大変ですね。休んでください」

「は、はいっ！ すみませんっ、お風呂お借りしますっ！」

「どうぞ、着替えなどは用意しておきますのでスウェットでいいですか？」

「はい、ありがとうございますっ」

黒羽は、バスルームに早足で駆けて行った。カップを片付けて寝室に入り、クローゼットから以前株主優待で送られてきた封を切っていない新品のスウェットと商業施設で買ったトラベルセットなどが入ったビニール袋を手にバスルームへ向かう。彼女に声を掛けて、許しを得てから脱衣所に置いた。

リビングに戻り、引き継ぎ資料の続きに取り掛かる。少ししてスウェット姿の黒羽がバスルームから姿を見せた。

「ありがとうございますっ」

「いいえ」

「それ、なんですか？」

さつきと同じ形で向き合う。

「引き継ぎの資料ですよ。来週から、仲村先生が復帰されるので」

「あ、そうなんですわ……」

少し残念そうな表情に見えた。

「時間、大丈夫ですか」

「あつ、お先に失礼しますね。お休みなさいです」

「はい、お休みなさい」

彼女が寝室へ入るのを見届けてから資料作りに戻る。切りの良いところでテーブル広がる資料を片して、ビジネスルームに向かい、いつものように取関係の資料に目を通す。

それにしても寝室にはカギがあるのにロックした気配はなかった。気づかなかったのか、それとも信用されているのか。まあどっちでもいいか。

リビングに戻ってコーヒーを入れ直し、今日までの日々を振り返る。

友利奈緒を始めとする星ノ海学園生徒会メンバーと出会ってからまさ日は浅いけど、慌ただしくも退屈しない日々が続いている。

ただ、こんな生活も悪くない。  
俺は、そう思い始めていた。

## Episode 11 〓再会〓

翌朝、まだ東の空も薄暗い明け方の早朝5時。週末のライブに向けたレッスンのため、マネージャーが迎えに来る併設マンションへ帰る予定の黒羽は、寝室からリビングへ姿を現した。昨夜遅くまで話に付き合わせてしまったせいかな、まだ少し眠そうに軽く目をこすっている。

「おはようございます。黒羽さん」

「あ、はい、おはようございますう。洗面台お借りしま〜すう……」  
彼女が支度を整えている間に俺は、朝食の準備に取りかかった。最近を作る時間をあまり取れず、朝も外で済ませることが多かったため久しぶりにキッチンに立つ。料理とは言っても昨夜トラベルセットと一緒に買った食材しかないから、トーストとベーコンエッグに市販のカットサラダを添えただけの簡単な料理<sup>も</sup>だけ。

「はわ〜、いいにお〜いっ」

「飲み物は、何にしますか?」

「えっ? わたしも、いただいいていいんですか?」

「はい、もちろんですよ」

オレンジジュースとコーヒーを用意して、身支度を終えた黒羽と一緒に、テーブルを囲む。話題は昨夜の続き、学校と芸能活動。今週は、週末のライブを優先のためあまり登校出来ないそうだ。

「ほんとは、もっとちゃんと学校に通って生徒会のお手伝いとかもしたいんですけど……でも今度のライブが終わったらしばらくお休みをいただいているんですっ」

「そうなんです。ところで最終公演はいつになるんですか?」

昨夜聞きそびれたことを訊ねる。

「あ、今回はツアーじゃなくて復帰ライブですので、週末のライブだけなんですよー」

——と言うことは、あれはどう言う……。

日付までは確認しなかったけど、高城<sup>たかしやう</sup>に渡したチケットは確か、東都文京区のドームだったはず。正規ルートじゃないにしろ黒羽<sup>くろぼね</sup>の

所属事務所から知人を經由して手に入れたチケットだから間違いない本物なんだけど。

「あのく、どうかしました?」

「あ、いえ、なんでもありませんよ。ところでジュースのおかわりはいかがですか?」

残りわずかになっているコップを見ながら訊くと、「ありがとうございますっ、いただきますっ」と彼女は微笑んだ。

「ごちそうさまです、お世話になりましたっ」

「いいえ、お気をつけて」

「はいっ、ありがとうございますっ」

本来であれば駅の改札まで見送るか、一緒に登校して併設マンションまでエスコートすべきところなんだろうけど。昨夜のことだけでもかなりの人の目に触れた。それに加えて、こんな朝方に人気アイドルの彼女と二人で並んで歩いているところを週刊誌に撮られでもすれば、もつと大変で面倒な騒動さわごになりかねない。無論それは彼女に迷惑かけることとなる。そんな訳で見送りは玄関まで。

エレベーターのドアが閉まるまで笑顔を手を振ってくれた黒羽くろぼねを見送った俺は、部屋に戻って洗い物を片付けて、登校の準備に取りかかった。

ささっと支度を済ませて、いつもの時間に自宅を出る。そしていつものように六本木駅から電車に乗り星ノ海学園へ。その電車内でふと気がついた。

同じタワー内にあるテレビ局に事情を説明して空いている楽屋に泊めてもらえば良かったんじゃないか——と。

\* \* \*

電車は、昨夜の影響もなく始発から定刻通り最寄り駅に到着。駅から歩いて星ノ海学園へ向かう途中の道端に、昨日はまだ蕾だったアジサイが青・赤・紫と色とりどりの小さな花を咲かせている。空から降り注ぐ日差しも日を追うごとに強く暑さを増していく。

初夏から夏へと少しずつ姿を変えていく季節を肌を感じながらの穏やかな登校……と言うわけには、なかなか行かたりする。同じ駅で降りたフレンドリーな同級生たちに声をかけられて、授業の質問だったり、ちよつと反応に困る遠慮のない女子同士の会話だったり、今日はいささか賑やかなで登校風景だった。

「おはようございます。宮瀬さん」

「おはようございます。高城さん、早いですね」

「昨日は、興奮してなかなか寝付けませんでした！」

ライブチケットをプレゼントした時と同じく、眼鏡が曇るほどのハイテンション。昨夜の事が知れたらと思うと——想像したくない。

「そうですか、それはよかったです」

「週末のライブが待ちどろしいです！ ですが……」

さつきまでのハイテンションが一転真面目な表情に変わる。

「我々には、もっと重要な任務があります。浮かれてばかりもいられません……必ず成し遂げましょう！」

「ですね。あ、そうだ——」

チケットのことを確認しようとしたところへ、青い顔をした乙坂が登校してきた。すると高城は、すかさず出迎えに向かう。確認はまたあとにして俺も、乙坂の元へ。

「おはようございます。乙坂さん」

「おはようございます」

「…… ああ、おはよう」

「どうなさいました？ 表情に覇気がないように感じますが？」

「いや、何でもなし……」

体調が悪そうな乙坂を高城は気づかったが、乙坂はそのまま倒れるように机に突っ伏して動かなくなった。ピザソースを封印だとか何とか、よくわからない小言を青い顔で言っている。何か悪いものでも食べたのかもしれない。

乙坂の身を案じて水を買いに教室を出た高城と入れ替わりで、奈緒が登校してきた。今日は初めて会った日と同じ、トートバッグを持っている。

「友利さん、おはようございます」

「おはようございます」

奈緒と挨拶を交わし、連絡事項だけの短いホームルームが済むと俺は、担任と一緒に教室を後にした。職員室に立ち寄り、二年生の教科書を用意して、階段をひとつ上の階に登って2—Bの教室に入る。

「おはようございます」

「おはよー」

「おう、おはようさん。ちょっと訊きたいことがあるんだけど、ここ文法なんだけどさ」

「ここは——」

教室に入るなり、年下にも関わらず男女ともに気さくに接してくれる。さすがに最初は戸惑っていたけど。

それにしても、このクラスに来る度に目につく窓側の空席。

この席の主を、俺は知らない——。

\* \* \*

午前の授業をすべて無事に終えて、昼休み。

普段通り乙坂、高城と学食へ行くため教室に戻る。

「おつかれさまです。宮瀬さん」

「おつかれ」

朝元気がなかった乙坂が復活していた。どうやら体調不良は改善されたみたいだ。

「いえいえ、では行きましょうか？」

学食に向かうため教室を出ようとしたところ、教室の入り口で「待つてください」と、トートバッグを持った奈緒に呼び止められた。

二人に——先に行ってください、と声をかけてから彼女に向き合う。

「なんですか？」

「これをどうぞ」

奈緒から手渡されたのは、ピンク色の包み。受け取るとずっしりとした重みがある。

「これは？」

「お弁当です」

教室がざわめき立ったのがわかる。「あの友利が……」。「ウソでしょ?」と、クラスメイトから驚きと戸惑い、憶測が入り交じった声があちらこちら聞こえてくる。

彼女はそれらを気にする様子もなく、弁当を作ってきてくれた理由を教えてくれた。

「昨日のお礼です」

「昨日?」

「ほら、カレーの件っすよ」

「ああ……」

放課後に渡した学食の牛タンカレーのお礼だった。

「それから、例の調査の件で話があります。生徒会室へ行きましょう」

「わかりました。二人に連絡は?」

「今回は、二人の方が話やすい内容ことと思いますので。あなたにとっても」

——二人の方が話やすい……。おそらく、電撃の能力者対処に当たって、俺の能力についてと言ったところだろうか。確かにそれなら、一部能力を知っている彼女と二人の方が話やすい。

俺は領いて、行けなくなったと断りのメールを高城たかじょうに入れて生徒会室へ向かった。

「時間が惜しいので食べながら話しましょう」

テーブルを挟んで座り、包みをほどくと二段重ねの弁当箱が出てきた。上はバランスのとれたおかず、下は存在感抜群の真っ赤な梅干しが白米の真ん中に鎮座した日の丸弁当だった。

「あ、もしかして梅干し苦手っすか?」

「そんなことないですよ。ごはんに梅干しは王道かつシンプルに美味しいですし」

「おっ、わかっているじゃないっすか。昆布とか、おかかとか、海苔弁当もよかったんですけどねー」

衛生面も考えて殺菌効果のある梅干しにしてくれたみたいだ。

「いただきますね」

「どうぞー」

お弁当の定番唐揚げに箸を伸ばして、口に運ぶ。

「スゴいおいしい……」

どのおかずも冷めても美味しいようにしつかり味付けがされてる。そしてなにより、この弁当にはいつさい冷凍食品を使つてない。相当な手間暇をかけて作つてくれていることがわかる。

「それはよかつたつす」

表情は変わらなかつたけど、少しホツとした、そんな感じの声色だつた。

「それで、週末の話ですが——」

一旦箸を置いて、話を切り出す。

「あなたの能力で犯行を未然に防ぐことは可能ですか？」

「そうですね……」

俺も箸を置く。

「実際に見てみないことにはなんとも」

一瞬で表情が変わり、少し身を乗り出した。

「と言うと、能力の発動には条件があるんですね？」

「さあ、どうでしょう」

テキトーにはぐらかして箸を持つ。

そんな俺の態度に彼女は、腕を組みながらいぶかしげな視線を向けてくる。

「安心してください。あなたたちに危害が及ぶようなことはさせませんから」

「はあ、それは、どうもです……」

この話これで終わり、お互い昼食を済ませる。

空になったふたつの弁当箱をトートバッグに入れると、いつものように紫色の音楽プレイヤーで楽曲を聞き始めた。

「どんな曲を聴いているのですか？」

「ん？ ZHIE<sup>ッ</sup>ND<sup>エ</sup>っていうバンドの曲です」

プレイヤーの画面を見せてくれたが、聞き覚えのないバンド名だつた。「聴きますか？」とプレイヤーを渡してくれた。イヤフォンを耳

に付け、再生ボタンを押し流れる音楽を聴く。

聴こえてきた楽曲は、洋楽。

女性のボーカルの透き通る様な声。どこまでも伸びていくような透き通る歌声は、孤独感に似た切なさを不思議な感覚に陥った。感じたままを伝えると、彼女は嬉しそうに『ZHIEND』の事を話しました。

作詞作曲を手掛けるボーカルが両目の視力を失っていること。奈緒のお兄さんが、大好きなバンドだったこと。そして、彼女自身も好きになったことを。

俺は、気になって訊いてしまった——奈緒のお兄さんの事を。

「今、友利さんのお兄さんは？」

「隠すことでも無いですし、会いに行きますか？」

「最近、行けてないですし」と、どこか悲しそうな小さな声で呟いて席を立った。午後は受け持ち授業がなかったため学校を早退して、二人で駅へと向かう。

「少し遠いですけどいいですか？」

「はい、構いません」

電車に揺られながら都外へ。さらに県を一つ越えた先の駅で下車。ここから路線バスに乗り換えて移動。バスの車内で、奈緒は自分とお兄さん、一希さんの過去を話してくれた。

「まず最初は、兄が特殊能力者になりました。あたしが、国立の中学の受験に受かった時のことです。兄の能力は、空気を自在に振動させる能力。ライブで、ギターを様々な楽器の音色で奏でて演奏していたのを、科学者に見つかりました。裕福とは言えない母子家庭だったあたしたちは、家計が助かると、女手ひとつで育ててくれた母の土下座を目の当たりにして。兄と一緒に、科学者が運営する全寮制の学校に通うことになりました。見かけは普通の学校で、友だちもすぐに出来ませんでした。ですが、健康診断という名目で毎日検査を受けさせられることに不安感と不信感を持ち。同じ学校に通っている兄を探そうとすると、決まって友だちが邪魔をする。兄と再会出来たのは一年後、非道な人体実験を受け続けた兄の精神は壊れていました」

彼女の、兄妹の過ごしてきた日々は想像以上に過酷だった。

「それで、星ノ海学園で特殊能力者の保護活動を」

「もう二度と兄のような事が起こらないように……。次、降ります」  
バス停を降りてすぐの長い階段を登ると、そこには大きな病院。彼女の後に続いて、院内へ入る。

「友利奈緒です。兄の面会にきました」

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

看護師にお礼を言つて、病室へ向かう。

友利一希ともりかずきと記された病室の前に着くと、奈緒なおは軽くドアをノックしたが、中からの反応は無い。

「時間的に切れてるか。あの、予め言っておきます。たぶん、あなたの想像以上です」

覚悟……。理解して欲しい。そんな感じのニュアンス。

返事がないのはいつものこと、と言った感じで気にする様子もなく、病室の扉を開けた。彼女の後に続いて、俺も病室へ入る。

最初に目に入ったのは、病室内に枚散る大量の羽毛。

次に叫び声が耳に入り、声の主はベッドの上で羽毛布団をかきむしる男性。

その人が彼女の兄、一希かずきさんだった――。

「やっぱり、鎮静剤が切れてる」

こんな状態のお兄さんを見ても、彼女は冷静に手慣れた様子でナーコールを押した。

「あーあ、また布団がダメになった」

そう呟いたが、必死に吐き出しそうな感情を抑えている。

すぐに看護師と医者が駆けつけ、暴れる一希かずきさんに鎮静剤を打つと、しばらくして興奮状態が収まっていく。医者と看護師が病室を去り、ベッド脇の椅子に腰を下ろした彼女は、落ち着きを取り戻した一希かずきさんに話しかける。

「奈緒なおです、わかりますか？ 今日、あたしの友だちもお見舞いに来てくれました」

声をかけるが、一希<sup>かずき</sup>さんの焦点は定まっていない。

実際に会って実感した、度重なる非道な人体実験により心が壊されたんだ、と。そうでもなければ自身を守れなかった、が正しいのかもしれない。

「やっぱり、反応なしですか」

先日のギターの時と同じ……いや、もっと悲しそうな表情で顔をふせた。小さくタメ息をついた彼女は顔を上げると、花瓶を持ち「花瓶の水を交えてきます」と言っつて、病室を出ていった。

俺は、彼女が座っていた椅子に座つて、一希<sup>かずき</sup>さんに声をかける。

「——お久しぶりです。友利<sup>ともり</sup>一希<sup>かずき</sup>さん、俺のこと覚えていますか……？」

## Episode 12 転機

奈緒が花瓶を持って病室へ戻ってきた。

俺は席を立って、椅子を開ける。花瓶を元の場所に戻した彼女は座り、一希さんに話しかけた。

「少し外へ出ませんか？ ちょうど時間帯が一番絶景です」

奈緒の問いかけにもやはり、一希さんの反応はない。彼女は顔をこちらに向けて、俺を見上げて言った。

「兄を車椅子に乗せるのを手伝ってくださいませんか？」

俺は頷き、一希さんをベッドから車椅子へ乗せた。車椅子は彼女が引き、三人一緒に病院を出る。病院から少し歩くと、そこは岬だった。

地平線へ沈む夕陽に反射して、空と海が茜色に染まっていくな。

なんとも形容しがたい美しさ、それでいて、どこかもの儂さを感じる昼と夜の狭間の時間の景色――。

「綺麗な場所ですね」

「すごいっしょ」

「これ程の環境を用意するのは難しいでしょう」

「逃げ出したあとに出会った、唯一信頼できる人のお陰です。一番美しい場所にある、この病院に無償で入れてくれました」

「すごい方ですね」

それから、どちらも言葉を口にする事もなく、沈み行く夕日が水平線へ消えるまで見つめていた。しばらくして奈緒は、また目を伏せて呟いた。

「はあ、やっぱり興味を示さないか。ちよつと肌寒くなってきましたね、戻りましょう」

「そうですね、戻りましょう」

奈緒の言葉に頷き、病院へ戻る。

一希さんさんを再びベッドに寝かせ、布団をかけてカーテンを閉じる。俺たちは最後に「また、来ます」と、一希さんに声をかけて、病室を後にした。

受付の看護師に礼を伝えて病院の玄関を出て、長い階段を下り、バ

ス停へ向かう。最寄りの駅へと向かう帰りのバスの中、もう暗くなつた窓の外の風景を眺めている、奈緒なおに話しかける。

「二人は、大変な思いをされてきたんですね」

「……あなたもですか。同情はやめてください。知識も、運動能力も、お金も、ぜんぶ、ぜんぶ持つてるくせに」

「俺は、あなたが思っているような。そんな出来た人間じゃないです」

「それは、嫌みですか?」

明らかな敵意を持って、睨み付けられた。

俺は、彼女の目を逸らさずに答える。

「……そんなんじゃない。こうなったのは、俺にも責任の一端があるから」

「それは、どういう意味ですか?」

彼女の問いに俺は答えなかった——いや、どう答えたらいいのかわからなかったんだ。

駅前でバスを降り、電車に乗り換えて、星ノ海学園の最寄り駅へと向かう。電車の中は、帰宅ラッシュの時間帯を過ぎてこともあつて空いていたけど。俺と彼女の間には、まるで透明人間でも座っているかのように、ひとつ席が空いていた。

星ノ海学園の最寄り駅に到着。到着を告げるアナウンス聞いた奈緒なおは、スクールバッグを肩にかけて立ち上がる。彼女は、俺に顔を向けることなく、まるで何の感情の籠もっていない業務的な言葉で礼を言った。

「今日は、ありがとうございました。それでは、また」

彼女が電車を降りようとした刹那、俺は、無意識に彼女の腕を取った。いや……取ってしまったが正しかった。

その直後、電車のドアが閉まる。

何ごとかと他の乗客の視線が俺たちに集まった。けど、そんな些細なことまったく気にならなかった。このあと何を話せばいいのか、そればかりが俺の頭の中を支配していたからだ。

ゆっくり振り向いた奈緒なおは、戸惑った表情かおをしている。

「あの、何するんすか? おかげで降り損ねたんですけど……離し

てください」

何も言わない俺に対し、彼女の表情は戸惑いから不安に変わっていきるのがわかる。

「……………話しがしたい。あなたに全てを話します」

「……………わかりました」

「とりあえず、離してくれますか？」と言った、彼女の言葉を聞いて慌てて腕から手を離す。

「あ、すみません」

「いえ。ま、ちよつと驚きましたけど」

奈緒は、少し複雑そうな顔をしながらも席に戻った。

話しやすさを考慮してか、さつきよりも半人分だけ距離を詰めて座った。

「俺の家で話しましょう。あなたに、見せたいものがあります」

「はい、わかりました。ですが、その前に寄りたい所がありますので、先に行ってください」

「わかりました。お待ちしています」

電車を乗り継ぎ、六本木駅に到着。奈緒は一人、俺の自宅のある六本木タワーとは反対側へ歩き出した。一足先に自宅へ戻った俺は、クロークの受け付けスタッフに奈緒が来ることを伝えて、彼女を向かえる準備を始める。とりあえず飲み物の準備をし、ソファアに腰深く座って、真っ白な天井を見上げてから目を閉じ、心を落ち着かせる。どれくらいの間がたっただろう。インターフォンが鳴った。画面を確認すると、奈緒が立っていた。

玄関に向き、鍵を開けて扉を開く。大きな紙袋を二つ持った彼女が立っていた。

「お待たせしました」

「いえ、いらつしやいませ。どうぞ」

「おじやましまーす」

玄関に入って直ぐに、奈緒はムツと表情を強ばらせた。

「どうかしましたか？」

「なんでもないっす、上がってもいいっすか？」

「ど、どうぞ」

よくわからなかったが、少し機嫌が悪いのはわかる。何か気にさせることでもあったんだろうか。

とりあえず、二人分の飲み物を用意して、初めて話し合った時と同じ形でテーブルを挟んで、奈緒なほと向かい合う。

「さて、何から話しましょうか」

「あなたは、自分にも原因があるといいました。それから教えてください」

言いあぐねていると、彼女が切り出してくれた。

——ありがたい。正直、何から話せばいいのか、まだぜんぜんまとまっていなかった。

「わかりました、単純な理由です。俺が、もつと早くアメリカへ渡つていれば、友利ともりさんと友利ともりさんのお兄さん……一希かずきさんを、こうなる前に救うことが出来たからです」

「それは仕方のないことではないですか。あなたには、あなたの都合があつたわけですし。それに、あなたには関係の無い事でしょう？」

「……いいえ、関係あるんです」

奈緒なほは、首をかしげる。

「それは、どういう意味でしょうか？」

「……俺は、あなたのお兄さん。一希かずきさんに、生きる意味を教えてくださいましたんです」

「——えっ？」

「小学五年、十才の夏の話しです」

俺は、話し始める。

一希かずきさんと出会い、過ごした。あの短い夏の日々を……。

\* \* \*

俺には、親がない。

父親は物心ついて間もなく病死。母親もその後を追うように亡くなった。両親の親も既に他界していて身寄りが無かった俺は、施設生活を送っていた。

そこがどんな場所なのかは、すぐにわかった。

代わり映えない毎日、何を目的に生きていくのかもわからない。そんな生活に嫌気がさした俺は、施設を抜け出して、街へと飛び出した。

最初は、見慣れない街並みに心が弾んだ。ただただ、それが楽しくて一日中歩きまわった。けど、いつしか夜になって帰る場所もなく、腹も減って動けなくなつて、道端に座り込んだ。

それから一時間以上が過ぎて、21時を回った頃声をかけてくれたのが、一希さんだった。

『こんな時間に何やってんだ？ 腹へつたろ？』

そう言つて、菓子パンと飲み物を差し出してくれた。

その頃、一希さんは学校帰りに路上ライブを行うのが日課だったそう。いつもライブをしている場所に、子どもの俺がいたから気になつて声をかけてくれたとのことだった。

一希さんは、ただ黙つて話を聞いてくれた。十才のガキの拙い話を、バカにせず、めんどくさがらず、真剣に最後まで聞いてくれた。

それが、本当に嬉しかった。本音で話せる相手なんて誰ひとりいなかったから。

話し終わると、施設まで送つてくれた。

別れ際「また行つてもいい？」と尋ねると「おうっ！」と力強くも、優しく答えてくれた。

もちろん、施設の職員にはこつぴどく怒られたが、そんなことどうでもよかった。

次の日も、その次の日も、毎日のように抜け出して、一希さんの元へ足を運んだ。

一希さんは、俺の知らない色々なことを教えてくれた。ギターのこと、「サラ」と言う人がボーカルと務めるロックバンドのような演奏を目指していること。俺と同じ年の妹が居ること。ギターの弾き方や、手入れの仕方も、その時教えてもらった。

音楽の才能はあまりなかったけど、それでも毎日が本当に楽しかった。灰色だった世界が、色鮮やかに染まった。

だけど、それは長く続かなかつた。

老朽化に伴い施設の移転が決まった。今までと違って、歩いて会いに行ける距離ではなくなってしまった。

移転前の最後日、「俺はぜってー！メジャーデビューする！だから、お前も頑張れよ！」と、そう言って笑顔で送り出してくれた。真っ直ぐ目標に向かう一希<sup>かずき</sup>さんが、幼かった俺には、とても輝いて見えた。

その言葉は、両親を失い、生きる意味を見いだせなかった自分に何ができるのか、何をしたいのか。

その意味を教えてください、そんな気がした。

## Episode 13 眠らない街

休憩を提案して時計を見ると短針は既に23時を回っていた。あと半刻ほどで、終電の時刻を迎える。

「今日は、ここまでにしませう」

「いえ、続けてください」

「ですが……」

「お願いします」

まつすぐな眼差し。引く気はない、そんな強い意思を感じた。

「……わかりました、続けませう。淹れ直しますね」

二人とも手をつけることなく汗をかいたコップをキッチンで洗い流し、飲み物を淹れ直して席に戻る。

「本当は、会うつもりはなかったんです」

「初めて会った日のことですか？」

「そうです。編集者から電話を受けて、最初は断ったんです。でもあなたが、一希かずきさんの妹だと知り承諾しました」

「では、あたしの協力を受け入れてくれたのも。あなたが、友利ともり一希かずきの妹だったからですか？」

「そうなりますね」

その言葉を聞いて、彼女は少し寂しそうな表情をしたように感じた。

「そうですか」

「けど、今は少し違います」

「ん？」

彼女は可愛らしく首をかしげる。

「コロコロ表情が変わる友利ともりさんを見てると退屈しませんから。そう、そういう所ですね」

蒼み掛かった大きく綺麗な目を細め、感情を殺した無表情で話の続きを促される。

「続きをお願いします」

「と、言われても。一希かずきさんとは、それ以来会っていませんからね」

近状を知ればと思っていたが。まさか、こんな事態になっているとは想像もしていなかった。

「そうですか。では、あなたの能力を教えてください」

「能力ですか？」

「はい。あなたは、すべてを話すと言ってくれました」

「…… そうでしたね」

左手を口元に持っていき視線を斜め落とし考える。これは、俺の癖。考えごとをするときによく出てしまう。少し目を閉じて、小さく息を吐き出してから顔を上げて、奈緒なほの目をまっすぐ見つめる。

「わかりました、話しましょう。俺の本来の能力は、『継承』といったところですよ」

「『継承』…… ですか。どういった能力ですか？ 言葉からして、何かを引き継ぐ能力のようですが。まさか、他人の能力をつ？」

「いいえ、そんな反則的な能力ではないですよ。まあ、ある意味それ以上の能力かもしれませんが……」

漏れそうになったタメ息を堪える。

この能力は、俺の人生を変えた力――。

「俺の能力…… 『継承』は自分の意思ではなく、とある条件下において強制的に発動する能力です」

「それはどういった能力で、どんな条件なんですか？」

「それを説明するには、俺の過去を話す必要があります」

「教えてください」

「順を追って話さないと理解できないと思います。長くなりますよ？」

「構いません」

「…… わかりました、話しましょう。初めて自分の能力に気がついたのは、今から――」

自分の能力、どんな生活を送ってきたのか。そして、渡米の理由。そのすべてを包み隠さず話した。話を聞いている間、彼女は表情を幾度となく変えながらも質問など、口を挟むことなく、ずっと真摯に耳を傾けていた。

「なるほど…… 突拍子のない話ですが。それなら、あなたへの化け物のような学力も、身体能力も、略奪を防いだ能力も全部説明がつかずね」

「理解が早くて助かります」

「もう一ついいですか？」

「どうぞ」

「初めて会った日、あなたは『今は、さほど目的に執着はない』と言っていましたけど。今も同じですか？」

「見つけ出します、必ず——」

「そうですか」

はつきりした答えを聞いた彼女は、また少し複雑そうな表情を覗かせた。

もう一度時計に目を向ける。やはりと言うべきか、もう終電の時間を大きく回っていた。

「もう午前2時を回っていますね。終電もありませんし、タクシー呼びましょう」

「いえ、その必要はありません。着替えを買ってきましたので」

「そうですか？ では、どこか近くのホテルを……」

「いえ、ここに泊めてください」

「…… はい？」

想定外の返答に、素っ頓狂な声をあげてしまった。

「何か問題がありますか？」

「むしろ問題しかないと思うんですが……」

「そうっすかー。仕方ないな」

そう呟き、こう続けた。

それは、俺にとつて痛恨の言葉だった。

「他の女は泊められても、あたしは泊められないっすかー？」  
面を喰らって、思わず息を呑む。

——やられた、完全に動揺してしまった。

狙い通りと言いたげに、彼女は勝ち誇ったようなどや顔をしている。

「凶星つすか〜?」

「なんの事でしようか……?」

平然を装うが蔑まれた表情で見つめられ。そして、めんどくさそうに目を細めた。

「往生際わるいなー、女の匂いがします。それも知ってる匂いっす。まさかあく、引つ越しを拒否したのわあく、女の子を連れ込むためだったとはー。これは特例を見直す必要があるっすねー」

この言葉だけで十分だった。

「どうぞ、お泊まりください」

「では、ご飯を作りましょう」

「今から食べるんですか?」

「当然っしょ、お昼からなにも食べてないんすよー?」

どうやら、ここに来る前に寄る所があるというのは夜食の食材と着替えの調達だったらしい。彼女は買い物袋から取り出したエプロンを着け、ダイニングキッチンへ。奥から「お借りしまーす。うっわ! ひつろ!」っと声が聞こえた。

リビングの窓を開け、俺はテラスに出た。

高層階を吹き抜ける外の風は、もう夏がすぐそこまで来ているいうのに少し肌寒く感じた。手すりに肘を乗せて、高層ビルと街灯が照らす東京の街並みを眺めながら、しばらく風にあたっていると、背中越しに声をかけられた。

「出来ましたよー」

その声に振り返る。すると奈緒なほはテラスに出て、やや早足で近づいてきた。

「どうしたんですか?」

「はい?」

心配そうな顔をして、俺の目元を指さす。

「それ……」

指摘された左の目元に手をやると、少し目元が濡れていた。

「大丈夫ですか?」

「ああー、大丈夫ですよ。風にあたり過ぎただけです」

「そうですか？ では、食べましょう」

「いただきます」

彼女に促され、一緒に部屋に戻る。

テーブルの上には、肉や野菜をバランスよくふんだんに使った色とりどりの料理が並んでいた。

「スゴいですね」

「あなたが、野菜を食べるとしつこく言うからっす」

抗議の声の中に、どこか優しさを感じた。

手を合わせて、料理に箸をのぼし口に運ぶ。

「おいしいっす」

「そうっすか、よかつたっす」

料理は多いように思えたけど、どれもおいしくて残すことなく遅い夕食を食べ終わり、キッチンに並んで立ち食器を洗う。片付けを終えると奈緒はエプロンを脱ぎ、荷物から着替えを取り出した。

「お風呂借りまーす」

「はい、どうぞ。そこになります」

バスルームの場所を伝えて、奈緒を見送ってから、リビングのソファに腰を掛けて目を閉じる。そして、今日の出来事を振り返った。とても濃い一日——これほどの濃い時間を過ごしたのはいつ以来だろうか……？

ただ、惰性のように過ごしていた日々からは考えられないほど濃密な時間だった。

「風邪ひくっすよっ？」

その言葉に目を開く。目の前には、少し顔の火照った奈緒が、覗き込むようにして立っていた。どうやら思った以上に時間が経っていたらしい。

「お風呂、ありがとうございます」

「いえ、俺も入ってきます」

「どうぞ、ごゆっくりー」

寝室のクローゼットから着替えを持ち出し、浴室に入る。少し冷たいシャワーを浴びて目を覚まし、風呂から上がる。リビングに奈緒

の姿は見当たらなかった。寝室をノックするも反応は返ってこない。  
「あそこか……」

テラスに向かう、なんとなくそこにいるんじゃないかと思った。そして思った通り、彼女はそこにいた。

俺は、さつき奈緒なほがしたように彼女の背中越しに同じ言葉をかける。

「風邪ひきますよ?」

「だいじょうぶです」

振り返ることなく夜空を見上げたまま、彼女は静かに答えた。

「何を見てるんですか?」

「星を見えます」

「そうですか」

彼女の隣に移動して、同じように夜空を見上げる。

眠らない街、東京。

この街では、夜空に星は見えない。

それでも、しばらく一緒に夜空を見上げていた。

「よし。そろそろ寝ましょう。さすがに疲れました」

「そうですね。あと2時間ほどですけど」

東の空が少し明るくなった頃、奈緒なほの言葉に同意して部屋に戻った俺たちは、それぞれ眠りに就いた。

## Episode 14 〈理由〉

『本当に帰るの?』

『ああ……』

『研究は?』

『俺がいなくても時間を掛ければ出来るだろ? それに——使われたら感知出来る』

『…… そうだね』

『じゃあ行くよ』

『うん。こっちで進展があったらすぐに連絡するよ』

『ああ、頼む。またな——』

\* \* \*

朝6時。眠りについてから一時間ちよつとが経った頃、携帯の目覚ましで起きた俺は、奈緒なおが寝ている寝室のドアをノック。一呼吸間をおいて「どうぞ」と彼女の返事が聞こえた。

とは言われても。躊躇ちゅうちゆいを覚えたつつも、ドアノブに手をかける。特に反動はない。黒羽くろばねと同じで、寝室のドアにカギはかかっているなかった。信用されてるのか、それとも——とにかく、ドアを開けて寝室に足を踏み入れた。

「おはようございます。友利ともりさん」

「おはようございます……」

ベッドの上で体を起こしている彼女は、まだ眠そうに目をこすっている。就寝から二時間弱での起床、流星に辛そう。

「少しでも眠れましたか?」

「…… はい、おかげさまで」

「そうですね、それは良かったです。準備があるんで一時間後に出ますけど」

「あ、あたしも一緒に出ます」

「わかりました。じゃあ、朝食用意しておきますね」

「ありがとーございます」

背を向ける。

——そうだ、忘れてた。

俺は振り向き、寝室を出る前にベッドに向かって手を伸ばした。奈緒との距離が近づく。俺の取った行動に「な、なんすか？」と、や戸惑った様子を見せる彼女の反応は新鮮だけど、俺は構わず手を伸ばした。

そして、彼女の背中越しにある棚。その上に置いてあるケースを手にとって見せる。

「目薬です」

「……着替えるので出て行って下さい」

目を細めた彼女は、酷く冷たい声色で言い放った。

追い出されるように寝室を出た俺は、気を取り直してキッチンに立ち、朝食の準備を始める。とは言っても、食材は殆ど用意していない。今出来るのは、トーストとオムレツ。それと昨夜、奈緒が買ってきた食材の残りを使った簡単なサラダ程度。

コンロに火を入れて、電気ケトルでお湯を沸かし、その間に食パンをトースターにセット。溶いた卵を熱したフライパンに落とし、オムレツを作る。トースト、オムレツ、サラダをそれぞれテーブルに並べ終わるとほぼ同時に、見慣れた星ノ海学園の夏服に身を包んだ奈緒が顔を見せた。

「あ、朝食出来ましたよ」

「ありがとうございます」

朝食を済ませて、一緒に部屋を出る。

星ノ海学園に向かう電車の隅で他の乗客に迷惑にならないように小声で話をすることに。

「気になっていたんですけど。友利さんは、物事を進める前に予め策を講じる方ですよね」

「はい、どちらかといえは」

「どうして、あんな中途半端な状態で来たんですか」

「それは、あなたのせいです」

「はあ？」

見に覚えがないが、軽く批難のするような声。まったく見当がつか

ない。

「雑誌であなたのことを知って、協力者が見つける前に事前調査で光坂高校に向いたのですが。あなたは、既に不登校でした」

「ああー……」

高校に入学して、1ヶ月ほどでまともに登校しなくなった。理由は単純に退屈だったから。代償として、教師のとてもありがたい小言を聞くハメにはなったけど。

「で、調べようにも住所は六本木のタワービル。厳重なセキュリティに手も足も出ず、出来たのは成績を調べるくらいだったんです。それに、まだ能力者と確定していませんでしたし」

「なるほど。それで能力者であることが確定してから編集者に取り次ぎを頼み、ぶっつけ本番で会いに来たと言うわけですか」

「はい。まさか、あんな簡単に転校を了承してくれるとは思いませんでしたけど」

「はは、それはどうも。もうひとついいですか？」

「どうぞー」

もう一つの疑問を訊ねる。

「『念動力』の能力者の時と違って、転校させようと話しを持ちかけてきましたよね。どうしてですか？」

「最初は、予知能力が今後の調査に使えると判断したからです」

「きっかけは、『略奪』で能力を奪えなかったからですか？」

「それもあります」

「それも？ 他に理由わけがあるんですか？」

「ま、いろいろ……」

言葉尻を濁して「ここで乗り換えっすね」と先に電車を降りて、向かいのホームに歩いていった。

——誤魔化す、と言うことはあまり聞かれたくないのだろう。だから、この話はもうしなかった。

先に降りた彼女の後を追って、電車を乗り換え、最寄り駅に到着。ここからは徒歩で、星ノ海学園に向かう。その道中、乙坂おとしがについての疑問に答えてもらった。

「自分の能力を『略奪』だと認知していないみたいですけど？」  
「伏せています。好都合なことに自分の能力を『乗り移り』だと思つてますから」

知らないのなら、あえて知らせる必要もない、と。

確かに、『略奪』は超がつくほど希少かつ強力な能力。いうなれば、能力者殺し。などと話をしていると、星ノ海学園の正門に到着。いつものように教室に入り、乙坂や高城。クラスメイトたちと挨拶を交わして、授業の準備に取りかかる。

代理教師もあと数日、俺はあること考えていた。それを実行に移す準備のため、休み時間に証券会社へ電話を掛ける。

「あ、坂本さん。宮瀬です」

「宮瀬さん、ご無沙汰ですね。どうですか？ 学生生活は？」

「そうですね。新鮮なことが多いです、いろいろと」

『はっはっは、それはそれは——』

俺の心情を察し、とても愉快そうに笑っている。

『それで今日は、どうなさったのですか？』

「俺が保有している株式の中で投機に使用していた株を全て売却してください」

『全てですか』

「はい、お願いします」

『投資と債権の方は？』

株には大きく分けて、投資と投機の二種類がある。前者は長期的、後者は短期的に利益を出す方法。

「そちらは継続でお願いします」

『わかりましたー。二日ほど掛かります』

——お願いします、と言つて電話を切り、午前最後の授業に向かう。クラスは1—B……。自分のクラス。教科書を片手に教室に入ると、朝は居なかつた黒羽が登校してきていた。彼女は俺に気がつく、笑顔で近づいてくる。

「あつ、宮瀬さん、おはようございますっ！」

「おはようございます。黒羽さん」

屈託の無い笑顔で元氣よく挨拶をしてくれた。

この明るい笑顔を見ると、彼女の人気な理由がよくわかる。それと同時に強烈な殺氣を感じた。人懐っこい彼女の笑顔から視線を外し、目だけを動かして殺氣の出所探る。出所は、黒羽の席周辺。そこに集まっている野郎共も殺氣だった。

その隣の席では、奈緒がめんどくさそうな表情をして、ほほ杖をついていた。

どう切り抜けようか模索していると、ちょうど良いタイミングで授業開始を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「時間ですね」

「あつ、ほんとですね。ではは〜っ」

黒羽は小走りで、自分の席に戻って行つた。

完全にチャイムに助けられた。ナイスなタイミングで鳴ってくれたチャイムに感謝しつつ、無事に午前の授業を終えて昼休み。乙坂、高城と学食の購買でパンと飲み物を買って、教室で話ながら食べていると突然乙坂が「昨日の午後、居なかつたよな？」と訊いてきた。特に隠す必要も理由もなかつたため正直に、奈緒と一緒に、一希さんの見舞いに行つたことを話した。話している間の二人の表情を見て、この二人も一希さんの現状を知っているとそれはすぐにわかつた。

「ところで、黒羽さんはいつ登校してきたんですか？」

少しばかり重くなつた場の空気を払拭するべく、やや強引に話題を変える。黒羽の話題を振つたのは、高城確実に食いついてくれるから。

「ゆさりんはですねっ！」

高城は予想を裏切らず食いついてくれた。乙坂が余計なことを……と、言いたげ俺を見ている気がしたが気のせいだろう。黒羽の魅力を延々と語る高城の言葉を頷きながら聞き流し、昼食を済ませた。

午後の授業を終えて、職員室で引き継ぎ作業をしてから生徒会室に向かう。ドアの前に立ち、軽くノックをすると「どうぞ〜」と奈緒の

返事が聞こえた。ドアを開いて生徒会室に入る。

生徒会室に居たのは、奈緒なおと黒羽くろぼねの女子二人だけだった。

「あつ、宮瀬みやせさん、おつかれさまでくすつ」

「ありがとうございます。お二人ですか？」

「二人は先に帰りました。週末まで特にすることもありませんので」

「そうですか。お二人は帰らないんですか？」

「あたしは、生徒会の仕事があります。黒羽くろぼねさんは、あなたを待っていて

たみたいですよー」

奈緒なおは黒羽くろぼねに視線をやつて、話を振る。すると彼女は「そうなん

ですよ」と鞆の中から、なにやらかわいらしい紙袋を取り出した。

「どうぞ〜」

「ありがとうございます。これは？」

「お土産ですつ」

受け取った紙袋の中は、レッスン場近くの洋菓子屋の焼き菓子らしい。奈緒なおが座っている生徒会長の机にも同じ紙袋と、ライブの招待チケットが置かれていた。

「わたし、明日のライブのリハーサルがありますので、お先に失礼しますつ」

「はい、お疲れさまです。お気をつけて」

「おつかれつす。チケット、ありがとうございます」

「——はいっ！ それでは〜」

スゴく嬉しそうに笑顔で手を振った黒羽くろぼねは、生徒会室を出ていった。これを渡すために、わざわざ残っていてくれたらしい。いただいたお土産をバッグのしまつて、机に向かって書類に目を通して、奈緒なおに話しかける。

「手伝います」

「いいつすよ。すぐに終わりますから」

「二人なら、もつと早く終わります」

彼女は、はあ……と深くタメ息をついて「では、これをお願いします」と机の上に積み重ねられている書類の一部を渡してくれた。受け取った書類に目を通す。内容は部活動の予算案だった。

「これを参考に、公正になるように振ってください」

渡された資料は、昨年度の予算表と部活動の実績の記された資料と、各部からの要望書。それらを元に予算を割り振る。ひと通り振り終わったところで、奈緒に確認を求めた。

「こんな感じでいかがでしょうか」

「はやっ！ もう出来たんすか？」

「数字を扱うのが本業ですから。甘かったら修正します」

書類を受けとると、彼女は黙ったまま予算案に目を通し始めた。少しして「問題ないっす」と言つて、判子を押した書類を箱に入れた。

「他に手伝えることはありませんか？」

「いえ、こちら片付きました。帰りましょう」

戸締まりをして職員室に書類を提出し、校門をくぐり、併設のマンションへ。その道中を並んで話しをしながら歩く。

「高城は、CDの予約に行きました」

「CDですか？」

「黒羽さんの新譜。予約開始が今日からみたいで、店舗ごとに予約特典がーとかなんとか」

高城が居なかった理由はそれか。しかし普段から会える本人よりも、CDを選ぶとは……スゴいファン根性。

「では、ここでまた明日」

「はい、また明日」

奈緒は、マンションに入っていく。

彼女を見送ってから、俺は帰路についた。今朝とは反対に電車を乗り継いで、自宅に到着。荷物はテーブルに置いて、寝室で着替えを済ませ、黒羽に貰った紙袋の中を見る。袋には焼き菓子と二枚のディスクケース。

ディスクケースは、黒羽がボーカルを務める「Howlowhowlee」のCD。一枚は、黒羽の直筆サイン要りのベストアルバム。もう一枚は、シンプルなCD-R。

そちらのケースには「おとといは、ありがとうございました。わたしの新曲です！ よかったら聴いてくださいっ！」と書かれた可愛ら

しい文字の最後はハートマークで締められていた。

——高城<sup>たかしょう</sup>が予約した新譜は、これか。

それにしても、いつかの登校中クラスメイトの女子たちにハートマークは仲が良ければ男女に関係なく使うと聞いていたけど。知らない人が受け取ったら勘違いしそうな感じの見た目。高城<sup>たかしょう</sup>が見たら発狂する姿が目には浮かぶ、少々厄介な火種になりそう。

二枚のCDと一階の店で買った夕食を持ってビジネスルームに入り、貰ったアルバムを聴きながら書類の作成を始める。

グループはロックバンドと前もって聞いていたけど、普段のおつとりとした黒羽<sup>くろぼね</sup>からは想像出来ないほど力強い歌声に驚いた。普段とは真逆の力強い歌声はとても新鮮で、彼女の新しい魅力を感じた。

## 生徒会活動日誌 2

生徒会活動日記。

さて、今日も記録をつけていきましょう。

宮瀬みやせさんに手料理を振る舞った翌日、学園へ登校すると教室の外まで聞こえる声で高城たかじょうが泣きながら叫んでいました。どうやら、宮瀬みやせさんから功労賞として『How—Low—Hello』のライブチケットを貰ったのが原因。

しっかし「私は初めて能力者であることを神に感謝します」と高らかに叫ぶとは……ひくなっ！ 他に感謝することはないんでしょーか、まったく。

そのあと乙坂おとしざかさんが、昨日の歩未あゆみちゃんの件で謝りの言葉を述べてきました。

あたしは、自分が連れ回したので謝られる事はないと伝えると「違いますよ」と一緒に行動していた宮瀬みやせさんが訂正しました。何と言いますか、律儀ですね。

そして、このやり取りを聞いた乙坂おとしざかさんは謝るのではなく、お礼を言うてくれました。素直に言われると少しこそばゆい感じですね。

午前の授業が終わって、昼休み。カメラのメンテナンスをしながら切りのいいところでお弁当を食べようと思っていたところ、宮瀬みやせさんがやってきました。一緒に学食へ行こうと誘われたのですが、お弁当を持っていたのでお断りしました。

……けど、なんで誘ったんすかね？

さて、考えていても仕方がないので時間を進めて放課後。

生徒会室で、いつものように熊耳くまがみを待っていました。おとさかおとしざかが、どうやらこの日は来そうにないので解散にしました。乙坂おとしざかさんと高城たかじょうは、やることもないとのことです。すぐに帰宅。遅れてやってきた宮瀬みやせさんは、来週から復帰する英語教師——仲村なかむら先生との引き継ぎ資料の制作作業が残っていたようです。教鞭を受け持つというのは大変なんすね。

ですが、来週から戻っちゃうのかー。留学経験者の授業は分かりやすかったんで少し残念な気もありますが、調査の方に専念してもらえ

るので利点と考えましょう。

そんなわけであたしは、通常の生徒会の仕事を片付けることにしました。宮瀬みやせさんは自分の作業が残っているにも関わらず、あたしの手伝いを申し出ました。

『あなたも自分の仕事があるつしよ』と言うと、少し間を置いて『……そうですね』と、彼は自分の作業に戻りました。

あの自己犠牲の精神はどこからくるんすかねー？ ストレス溜めてそうです。

彼は、二時間ほどが経過すると、生徒会室に戻ってきました。

あたしは生徒会の仕事を終えて能力者の手掛かりを探して雑誌を読んでいたが、彼の方はまだ掛かるようです。先に帰ることを告げると、ビニール袋を渡されました。袋の中は、学食のカレーだそうです。噂には聞いてますけど、学食のカレーって美味しいんすかねー？ 帰ってからさっそくいただくことにしました、と、ちようど温め終わりました。

「うつまー」と、思わず声が出てしまった。なんすか、これ!? しかも牛タン乗ってるつすよ！ 牛タンっ！ いやー、ホント美味しいなー。

しかし、お陰でいい口実が出来ました。明日はお礼と称してお弁当を作って行こうと思います。今度こそ、本当の能力を聞き出してみせます。

\* \* \*

翌日、登校すると乙坂おとさかさんが机に突っ伏していました。悪いものでも食べでしょうか？

そして勝負の昼休み、あたしは宮瀬みやせさんに声をかけました。作ってきたお弁当を渡すと不思議そうな顔をしていましたが、昨日のカレーのお礼だと言うと納得したようです。

なんか周りが騒がしかったつすけど、なんすかねー？

生徒会室でお弁当を食べながら能力者の可能性がある記事に目を通してもらいました。あたしと同意見とのこと。あとお弁当もおいしいと言ってくれました。

お弁当を食べ終えて、どう話しを切り出すか考えながら音楽を聴いていると、何を聴いているのかと訊かれました。

『ZHIEND』というバンドだと答え、イヤフォンを彼に渡ししました。実際聴いた彼も『ZHIEND』の良さを理解してくれたようです。やっぱ、わかる人にはわかるんだよなー！

しかし、ここから話しは思ってもみない方向へと進んでいきました。

兄が好きだったバンドと話すと……兄のことを訊かれました。特に隠すことでもないので、早退して会いに行くことに。

病室に入ると、また鎮静剤が切れていました。

ナースコールを押し、駆けつけた医者と看護師が鎮静剤を打つ見慣れた光景。しばらくして落ち着きを取り戻した兄の近くに座って、話けましたが、やはり気づいてもらえません。

あたしは花瓶を持って、病室を出ました。

水をかえて病室に戻ると宮瀬みやせさんはあたしが座っていた席に座っていました。あたしに気がつくとすぐに立ち上がり席を開けてくれましたが。何か、兄に話しかけてくれたのかも知れません。

その彼にお願いして、兄を車椅子に乗せて病院近くの岬へ出かけました。夕陽に反射して、空も海もオレンジ色に染まっていてすっごく綺麗なんです。でも、やっぱり興味は示してくれませんでした。

兄との面会を終えて帰りのバスの中、悪気が無いのはわかってるのですが同情はされなくなりました。語気を強めたあたしの言葉に対し、彼は『俺はそんな出来た人間じゃない』と答えました。

あたしはその答えに感情を剥き出しにしてしまつて。彼はそのことには一切触れず『自分にも責任がある』と自責の念に駆られているような感じの声色で言っていました。こういう意味か聞いても答えにくれません。

沈黙が続く、電車に乗り換えて最寄りの駅に着き降りようとすると腕を掴まれました。離してほしいと告げても離してくれず、どうすればいいのか困惑していると「話しをしたい」と、神秘的な面持ちで言われて……彼の自宅で話すことになりました。理想とは違う形でし

だが、今聞かないと次はない、そう直感的に察知し、帰りが遅くなることも視野に入れ、夕食と着替えを購入するために一度彼と分かれ買い物に出かけました。

彼の自宅に着き玄関に入ると、以前は感じなかった香水の匂いがしました。しかもこれ、知ってる匂いです。いったい、どういうことですかね？　なんか、ムカつくつす……　って何で憤ってるんですよーか。ま、後々使えそうな弱みを握ったのでヨシとしておきます。

初めて会ったときと同じ様にテーブルを挟んで向かい合い、話しが始まりました。まさかまさか、彼は兄を知っているとのこと。それも、生きる意味を教えてもらったと言われた時は驚きました、本当に。

その後、兄との思い出話、本当の能力、彼が歩んできた壮絶な過去、渡米の理由等を教えてくれました。プライベートに関わるのでここでは残せませんが、衝撃的な内容でした。もしあたしが彼の能力を持つていたら、数回で心が折れていたかもしれません。

話が終わる頃には午前を回っていました。彼はタクシーを呼ぶこと、ホテルを手配することを提案しましたが、あたしは彼の家に泊めてほしいと伝えました。

もちろん拒否されるとわかっていたのでこう言いました。『他の女は泊められてもあたしは泊められないっすかー？』と。普段から冷静沈着で同級生とは思えない落ち着きを持つ彼が、明らかに動揺しました。

間違いありません、あの反応はクロです。平然を装っていましたが、握った弱みとどめを刺してやりました。

と言うことで、夕食の仕度。話しを聞いていた時は集中していたので気になりませんでした。気が緩んだ途端にお昼から食べてなかった分一気にきました。お腹鳴らなかつたですよ？　しっかし、キッチンひつろ！　しかも、柳刃包丁とかまであるんすけど、いったいどんな本格的な料理作るんですかね。

料理が出来たんで声をかけようと思つたら、リビングにいませんで

した。少し探すと、テラスにいました。どうやら、風に当たってみたいのです。

声を掛け、振り向いた彼の目からひと筋の涙が……大丈夫ですか？ と訊くと『風に当たりすぎただけです』と言っていましたが……。

さて、次です。テーブルの料理を見て驚いた様子でした。一口食べて『おいしいっす』って、それ、あたしの口マネっす。

食べ終え、前と同じように二人で洗いものをしました。やっぱり分担してやると効率いいっすね。手際もいいですし。テンポよく片付きました。

片付けが終わり、あたしは先にお風呂をいただきました。

キッチンも広ければ、これまたお風呂も広かったです。シャワーだけでしたが、あの湯舟は脚を伸ばせますね。ソファで目を閉じていました。眠っているのか、考え事をしているのか、わからなかったので声をかけましたが…… どうやら後者だったみたいです。

彼がお風呂に向かうと、あたしは彼がいたテラスへ向かいました。季節は初夏なのに少し肌寒い風が身体を火照りをとってくれて気持ちがいいです。ふと、空を見上げると星は見えませんでした。

『風邪ひきますよ？』と声をかけられ、何を見てるのか？ と訊かれたので星を見ていると答えました。彼が隣に来て一緒に夜空をみました。

本当は来る前にホテルとってたんです。でも今はあの人を一人にしちゃいけないそんな気がしたんです。

朝、ノックの音で目が覚めた。

どうぞ、言うとお宮瀬みやせさんが寝室に入ってきました。1時間後に出るというので一緒に出ることにしました。

部屋を出る前に、宮瀬みやせが近づいてきて……あたしの後ろにある目薬のケースを手に取りました。ケースにはドライアイの文字が……。

夜中の涙の原因はそれですか…… 心配して損しました…… はい、次行きまーす。

星ノ海学園に向かう電車の中で、初めて訪ねた時のことを聞かれました。

宮瀬みやせさんの言うように作戦を立てて行動する方ですが、彼の場合はタワー内の警備も防犯カメラも多いですし、能力を使つてもすぐにバレますからやつかいでした。

続いて、何故転校させる方法を選んだか訊かれましたが、言ったように”予知”と”略奪”を阻害した理由が主。まあ後は、なんとなく後悔してしまうような、そんな気がしたんです。そう、あの機会を逃してしまつたら霧のように消えてしまふ、そんな気がして——さて、次です。

\* \* \*

放課後、生徒会の仕事をしていましたが熊耳くまがみは現れなかつたので解散にしました。

いつもどおり乙坂おとさかさんと高城たかじょうは帰宅。黒羽くろばねさんはお土産を宮瀬みやせさんに渡すために残りました。

家に帰ってからいただきましたが、あのお菓子おいしかったなー、どこの銘菓なんすかね。今度聞いて、取り寄せてみようかな。

その後生徒会室へやって来た宮瀬みやせさんに、黒羽くろばねさんはお土産を渡すと、すぐに仕事に出掛けていきました。現役の人気アイドルって大変なんすね。

書類に目を通していると一昨日と同じように宮瀬みやせさんは手伝いを申し出てきました。

最初は断りましたが結局手伝ってもらう結果に。

予算案を渡したらすぐに片付けてくれました。彼の本業上、数字に強いとは思っていましたが……早いっすねっ！

その後は書類を提出して併設マンションまで話ながら帰ることになりました。

今日の記録は、ここで終わりにします。

## Episode 15 言葉

週末、黒羽のライブ当日。

土曜日ということので今日の授業は午前中だけ、ホームルームも連絡事項だけで放課後を迎えた。

「さて、帰るか。現地集合でいいんだよね？」

「はい、開演一時間前に集合となっています。会場はわかりますか？」

「新横浜の近くだろ？ 行ったことないけど」

「では、私のご案内いたします。せっかくなので、お昼は横浜で食べるというのはいかがでしょう？」

高城の提案を聞いて、乙坂の目の色が変わった。

「是非ともそうしよう！」

「宮瀬さんは——」

「これから引き継ぎ資料の最終チェックをしようと思っっていますので、お気になさらずに」

「そうですか、ご苦労様です。それでは我々は、ひと足先に現地へ向かわせていただきます。『楽園』でお会いしましょう！」

鼻息を荒くしつつ敬礼した高城は乙坂と昼食に何を食べるか話をしながら、教室を出ていった。

「おつかれっすー」

「あ、友利さん」

支度をしていたところへ今度は、カバンを持った奈緒が声をかけてきた。

「友利さんは、二人と一緒に行かないんですか？」

「これから用事があるんです。あなたと同じで」

「そうでしたか、お互い大変ですね」

「まったくです。では、また後ほど」

教室で奈緒と別れた俺は、作りかけの資料とスクールバッグを持ち、職員室へ向かった。

教職員たちと挨拶を交わして、いつも使わせてもらっている席に座る。この席は、休養中の仲村先生が普段使用している席。キレイ好き

のようで、机の上は整頓されていた。だけど引き出しの中に、モデルガンが入っていたのにはさすがに驚いた。担任の話によると、趣味のサバイバルゲームで使用している代物らしい。

——さて、片付けますか。

手を組んで腕を前に出し、軽く伸びをしてから机に向かい、資料作りのまとめ作業に取りかかった。

\* \* \*

「友利さん？」

午後1時を回り、資料作りを終えて一度自宅へ帰ろうと校舎を出たところ。正門前の花壇の石垣に座って、スマホに目を落としている。俺の声に気づいて顔を上げた奈緒は、スマホを制服のポケットにしまつて立ち上がった。

「おつかれさまですーす」

「どうしたんですか？」

「あなたに用事があったんで待っていました。歩きながら話まず、行きましよう」

要領を得ないが、とりあえず隣に並んで歩く。

特に特別な話もなく、少し歩いて併設マンションに着くと。

「着替えて来ますので、ちよつと待っていてください」

ライブへ行く準備をするために奈緒は、併設マンションへ入っている。エントランのベンチに座って支度が整うのを待つ。女性の身支度は時間がかかるものと思っていたが、奈緒は10分そこそこで着替えを済ませて戻って来た。

袖がフリルのノースリーブブラウス、膝上丈のフリルスカート。夏らしく、そして、とても女の子らしいファッション。

「お待たせしました」

「いいえ。似合ってますね」

「——えっ？ そつすか……？」

「ええ、可愛らしいと思いますよ」

素直な感想述べると、驚いたような戸惑うような表情を一瞬見せて、少し戸惑ったように顔を逸らした。

「……慣れていないのであれですが、その、ありがとうございます」  
そう小さな声でお礼を言って、顔を上げた。

「さあ、行きましょう！」

今度は俺が支度をするため、六本木の自宅へ。

準備は、あらかじめしてある。リビングで待っていてもらって、寝室で着替えを済ませ、今度は乗り換えのため東京駅へ。東京駅に着いた時にはもう14時を過ぎていた。お互い昼食を食べていないというところで横浜方面行きの電車に乗り換える前に、昼食兼夕食の調達。

「決まりましたか？」

「糸を引つ張ると温かくなる牛タン弁当〜！ は前に食べたし、別のにしよっかなー？ あなたは、何にするんですか？」

「そうですね」

売店のショーケースに目をやる。ショーケースには、奈緒なおが言っていた牛タン弁当を始めとした肉系の弁当。カニやイクラなどの海産系。幕の内弁当や、炊き込みごはんの純和風弁当など目移りしそうなほど数多くのサンプルが展示されている。移動時間や移動方法を考えると、手軽に食べられるサンドイッチかおにぎり辺りが無難だろうか。

「あ、時間なら気にしなくて大丈夫ですよ。移動は、特急列車ですからっ」

得意気な表情かおで、ポーチの中から東京駅から新横浜駅行きの特急列車指定席の切符を二枚取り出した。

「どうしたんですか、それ？」

「上が用意してくれたんです、詳しいことはのちほど。まずはお昼を選びましょう」

購入した弁当と飲み物を持って、駅構内のフリースペースのテーブルで向き合って座る。美味しそうに弁当を食べながら奈緒なほは、特急列車の切符について教えてくれた。

「英語教師代理を引き受けてくれた件の謝礼です。お礼を伝えて欲しいと頼まれました」

——入れ違いにならないように正門で待っていたのか。

奈緒は箸を置いて、背筋を伸ばし。そして、ぺこつと頭を下げた。「お疲れさまでした。とても助かりましたし、とても分かりやすかったです。ありがとうございます」

お礼の言葉。穏やかな声色から言わされている言葉じゃないことがひしひしと伝わってくる。だから俺も、自分の言葉で答える。

「どういたしまして」

「はい、伝えておきます」

昼食を食べ終え、同じ構内のカフェに立ち寄り食後のコーヒーをふたり分買って、特急列車のホームへ上がる。15時過ぎ発の列車に乗車切符に記された席を探す。

「おおっ、豪華っすねっ。さすが、グリーンシート！」

休日と言うこともあって自由席はほとんど埋って込み合っていたが、通常料金や指定席よりも更に値が張るグリーンシート車内の乗客はまばらで、俺たちの他に数人しか乗車していない。奈緒は窓側の席座り、俺は通路側の席に座る。車内に車掌のアナウンスが流れ、列車は走り出した。

奈緒は、アイスカフェラテを飲みながら四つ折りにした用紙に目を通している。この用紙は切符と一緒に受け取った、電撃の能力者に関する報告書。

「うくん、なるほど……」

「何か掴めましたか？」

「上がコネを使って今回当選したファンクラブ会員を調べてくれましたが、写真の男に該当する人物はいなかったようです。あたしたちと同じく、関係者席のチケットを使うとみて間違いないでしょう。一応共犯者と思われる芸能関係者を監視しているそうです」

監視対象は、当初の予想通り全員が権力を持つ芸能関係者。大手プロダクション、ライバル事務所のトップ、某テレビ局の大物プロデューサーが監視対象になっているようだ。

「それと、能力者の詳しい情報は残念ながら得られていません」

「そうですか」

「あなたの、あの能力でも未然に防ぐことはやっぱり難しいんですか

？」

事情を知る前の質問とは、少し違ったニュアンスで同じ質問。

「やってできないことはないですけど、おそらく厳しいと言うのが正直なところですよ。先日話した通り、私の——」

「俺”でいいですよ。あたしは、あなたの事情を知っているんですから気兼ねなくどうぞ。疲れるっしょ？　いろいろと」

優しい言葉で気づかってくれます。

「安心してください。あなたの過去の話や本来の能力チカラのことは報告書にはいつさい記入してませんので」

奈緒なおが言った報告書は、星ノ海学園の存在理由が特殊能力者の保護を目的としているため、個人の身体的特徴や病気に有無、家族構成から家庭事情までが事細かに書かれている代物らしい。

「協力者が見つけた通り、”予知能力者”として報告を上げておきました」

「いいんですか……？」

虚偽の報告をすうと言うことは、彼女が唯一信頼している相手に対する裏切り行為と取られても言い訳もできない重大な選択こと。しかし奈緒なおは、俺の問いに「構いません」と躊躇なく答えた。

「あの夜の話ことは、あたしの胸の中だけにしまっておきます」

「……　ありがとうございます」

感謝の言葉を伝え、俺は改めて質問に答える。

「物体を通しての間接的なのか、それとも目標への直接的な作用なのかさえ分かれば、能力で対処できるんですけど」

難しい表情かおで、奈緒なおは腕を組んだ。

『「一瞬電流のようながもの走って、周囲の灯りが全部消えた」。美砂みささんが言っていた状況では、どちらとも取れますね」

「ええ。ですが、ある程度予測できる方法があります」

「えっ、マジっすかっ？」

「能力者が座る関係者席の位置で——」

「なるほど。黒幕の権力で、能力を使いやすい席を確保している可能性が高いわけですね」

さすが頭の回転が速い、俺の言いたいことをすぐに察した。でもこの方法には、ひとつ難点がある。いくら関係者席に絞り込めているとは言え、暗闇の中で能力者を特定するのは至難のわざということ。

「そこは、高城たかしやうが見つけ出すのを期待しましょう。不自然な挙動をとる輩はすぐに判別できると息巻いていましたし」

黒羽くろばねの大ファンだからこそ、ファンとは違う空気を嗅ぎ分けられる、と。

「あのハイテンションには普段なら引いているところですが、今回は役立ちそうです」

「頼もしいですね」

「……まあ、そつすね」

すつと窓の外へ顔を向けた。

そのしぐさに思わず笑いそうになる。

「なんすか……？」

「いえいえ、なんでもありませんよ」

『ご購入ありがとうございます。まもなく新横浜——』

大きな目を細めて微妙な視線を向けられていたところへ、ちょうど到着を告げるアナウンスが流れた。お互いに降りる支度を済ませる。

「スゴい人ですね」

列車を降りてホームに出ると、まるで通勤ラッシュの時のように大勢の人たちで溢れ返っていた。その人たち中でよく目に止まるのは、黒羽くろばねのバンド「How—Low—He—ro」のグッズを身に付けている人たち。アイドルがボーカルを務めるライブと言うことで男性ファンの比率の方が高いかと思っていたが、女性ファンもかなり多い。

ライブ会場へ向かうファンの流れにまかせて歩き、会場前の物販ブース付近で先に来ていた乙坂おとしざか、高城たかしやうと無事合流することができた。「けど、ホントものすごい人の数だな。この人たち、みんな袖咲ゆきさきのライブを観に来てるんだよな？」

「そういう訳でもありませんよ。公式サイトでは販売していないライブ会場限定のグッズもありますから。中には、残念ながら抽選に外れ

てしまったファンの方が雰囲気を共有したいがためだったり、ライブ会場限定のグッズを目当てに足を運んでいたりします。何せ待望の復帰ライブですからね」

「ふーん、そういうものなのか」

「ということですので、私も——」

「ムダ話してないで最終確認するぞー」

「な、なんと無慈悲なタイミング！」

「ほら、行くぞー！ お二人も来てください」

若干涙ぐんでいる高城たかしょうを強制連行して歩く奈緒なおに着いていく。ライブ会場を少し離れた人もまばらなベンチ前で、彼女はチケットを取り出した。

「全員、チケットとは忘れずに持ってますね？」

「はい、もちろんです！」

代表して、高城たかしょうが高らかに答えた。

「いいですか？ 今回の犯人は、複数犯と思われれます」

「どうして、そんなことが分かるんだ？」

「簡単なことです。セキュリティがしっかりしている芸能人が使うスタジオに気づかれずに侵入できるとは考えにくいからです」

先日、そして今日話した内容の要点をまとめ、裏で手引きしているであろう黒幕の犯人像を伝えた。

「なるほど、真犯人は芸能関係者ですか。ゆさりんの活躍を妬む人のしわざ。許せませんね……」

「なんだか、ドラマみたいだな」

「それと、実行犯の電撃の能力者についてですが。能力の有効射程範囲などが未知数のため細心の注意を払ってください」

「注意って、具体的にはどうすればいいんだ？」

「当然ながらまずは見つけることです。そして、見つけ次第乗り移ってください」

「は？ どうして？」

乙坂おとしが自身は、本当は自分が「略奪」という能力であることを知らないとは言え。彼の能力で目標の能力を奪ってしまうのが一番安全か

つ確実な方法であることは間違いない。問題は、悟られずにどう納得させるか……。

「あなたが標的に乗り移っている間に拘束するからに決まってるっしょ」

「拘束するって…… また高城の体当たりか!? 実際に痛いのは、僕なんだからな……!」

——相手に乗り移っているときの痛覚は、乙坂おとしざかが受けるのか。実に興味深い能力だ。例えば乗り移っている間に、本人または乗り移っている相手が息絶えた場合、彼の精神はどうなるのだろうか等など疑問は尽きない。

「瞬間移動の体当たりはしませんので、ご安心を——と言うよりできません。大勢の観客、DVD撮影用のカメラが回っているライブ会場では瞬間移動は使えません。そんな状況で能力を使えば、私は科学者に捕まってしまいます」

「そうか、それもそうだな……」

高城たかじょうの話聞いた乙坂おとしざかは、ホッと胸をなでおろす。俺が転入する以前に、トラウマになるほどの出来事があったことがうかがえる。

「そういうことですので。犯人を特定しても高城たかじょうは能力を使えないので、乗り移りしだい壁や地面やフェンスに頭を打ちつけて気絶させてください」

「出来るか!」

「乗り移ってから四秒後に頭を振りおろせば当たる直前に戻れます。大丈夫です、何度でもやり直しはききます」

「僕が言っているのは、そう言う意味じゃないんだが!」

奈緒なおの作戦に猛抗議する乙坂おとしざかだったが、「柚咲ゆさきさんを守るため、力をお貸しください!」と高城たかじょうの説得を受けてしぶしぶうなづいた。

受け付けで貰ったチケットをスタッフに見せて、座席まで案内してもらおう。用意されていた座席はアリーナサイドの最前列、黒羽くろばねが歌うステージのすぐ近くだった。

「では全員! ライブTシャツとペンライトの準備はいいつすね!」

「はい、もちろんです! いざライブへ!」

「思い切り楽しむ気じゃないのか……？」

「あはは……」

ライブの観客にまぎれ怪しまれずにターゲットを探すため俺たちも、ライブグッズを身に付けて観覧することに。ちなみにこれらライブグッズは、すべて必要で経費で落ちるそうさ。

開演時間まで会場内を見渡す。ざっと見たところ照明器具や音響器具はもちろんのこと。演出に使うのか、天井付近にまで組まれたパイプなどの通電性の高い金属製の物が目につく。

——これはちよつとマズイ、その気になれば会場内のどこからでもステージを狙える。さすがに会場全体をカバーするのは厳しい……。

突然照明が落ち、アリーナは暗闇に包まれた。会場全体から表現し難い熱気のようなものがふつふつと沸き上がっていくのを肌を感じる。

そんな時ふいに袖を軽く引つ張られた。

隣に顔を向けると、奈緒が顔を寄せて耳打ちしてきた。

「もしもの時は、お願いします」

「——はい」

返事をするとはほぼ同時に、暗闇の中先日貰ったアルバムで聴いた曲のイントロが流れ出し。ステージ中央にまばゆいスポットライトが当たり、赤を基調としたステージ衣装に身を包んだ、黒羽が姿を現した。

彼女の登場にますます盛り上がるライブ会場。

『みんなー！ ただいまー!!』

とびきりの笑顔の黒羽の挨拶でライブは幕を開けた——。

## Episode 16 魅力

スタートから二曲目を歌い終え、ライブは黒羽のオープニングMCに入った。マイクを片手に、ステージ中央でスポットライトを浴びてキラキラと輝く彼女は、まぎれもなくアイドル。

ここへ来た目的を忘れて、思わず見いつてしまいそうになる。

それは、みんなも同じだった。ステージ上で見せる魅力的な彼女の笑顔に目を奪われ、話に聞き入っている。

「いかがですか？ ゆさりんのステージは」

周りの迷惑にならないように、小声で高城に感想を訊かれた奈緒は、すつと黒羽から視線を外し。周囲の観客の様子に目を配りながら答えた。

「まあ、悪くないですね。ZHIENDのライブにはおよびませんけど」

「そうでしょう！ お二人はいかがですか？」

得意気な表情の高城は、俺と乙坂にも同じように感想を求める。

「なんていうか、歩末にも見せてやりたかったな」

彼の妹の歩末が、黒羽の大ファンだという話を先日していたのを思い出した。黒羽に頼めば快く、彼女の分のチケットも用意してくれるのだらうけど。今回は、事情が事情だけにお土産にライブグッズを買っていくことで納得してもらったという話し。

「宮瀬さんは、いかがでしょうか？」

「楽しそうですね」

「おや、宮瀬さんは、楽しめていないのですか？ もしや、こういったところは苦手でしたか」

「いえ、そうじゃなくて。黒羽さん、とても一生懸命ですごく楽しそうだなって思ってる」

「——そうなんです！」

一瞬きよとした表情を見せた高城は、うつむき加減で眼鏡を直し顔を上げると目を輝かせて黒羽の魅力を熱く語りだした。

「ゆさりんが心から楽しんでるからこそ我々ファンも心から応援す

ることでき、一緒に楽しむことができると！ 特殊な世界ですから我々の想像をしえない辛いことも当然あるでしょう。ですが、だからこそ——」

『それじゃあ次の曲いくよっ！ イン트로でわかるかな？』

黒羽のオープニングMCが終わり、会場の照明が落ちた。

「おっと、熱く語り過ぎてしまいましたね。見張りは私に任せて、お三方はしばしライブをお楽しみください」

「いいのか？ お前が一番楽しませてたじゃないか」

「だからこそですよ。ゆさりんやスタッフの努力を台無しにしようと企んでいるヤカラの思い通りには私がさせません……！」

「ただのミーハーじゃなかったんだな……」

黒羽のことが絡むと暴走ぎみ高城だが、今日はそんな様子を微塵もみせない。本当に頼もしく感じる。奈緒も、乙坂も同じみたいだ。

「それに私は、いつも楽しんでますから。当然今回のライブの円盤を購入し、ゆさりんグッズに囲まれた部屋で正座して、エンドロール後の注意書きまで思う存分堪能する予定です！ そしてまぶたの裏に焼き付けたゆさりんの天使の微笑みを思い浮かべながら食事をし、入浴中も——」

「ひくなっ」

「やっぱりただのミーハーじゃないか、見直した僕がバカだった……」

「あはは……」

いつもの調子に思わず苦笑い。とりあえず高城の言葉に甘えさせてもらい、俺たちはもう少しだけ黒羽のライブを楽しませてもらうことにした。

会場中に響き渡るサウンドと歌声は、CDの音源とはまったく違うライブならではの迫力に圧倒されてしまう。

「友利さん」

「ん？」

曲がサビに差し掛かろうとしたその時、周囲を警戒していた高城が、奈緒に耳打ちをした。

「どこだ……？」

「ひとつ後列端の席です。ひとりだけペンライトのサイリウムの色が微妙に違います」

極力顔は動かさず、高城たかしようが言った座席を確認。間違いない、乙坂おとしざかが写真を撮ったフードの男。電撃の能力者。彼女も、スマホに保存してある顔写真と見比べて確認している。

「間違いありません、アイツです。さあ、早く乗り——っ!？」

奈緒なおの視線に気づいたのか、能力者は不意に仕切りの鉄柵を掴んだ。その刹那、電流が走る。こちらが対処する隙もなく、電流は鉄柵を伝ってステージ上部に組まれた照明機材のコードをショートさせた。暗闇に火花が散り、小さな破裂音とともに機材を支えていた鉄パイプが破壊され、支えを失った照明機材は、真下で歌っていた黒羽くろぼねの頭上へ向かって一直線に落下していく。

『あ……』

「ゆ、柚咲ゆささんッ！」

高城たかしようの叫び声とほぼ同時に機材が地面に落下。その衝撃で破片の一部がステージと客席の間まで飛び散った。あまりにも突然で衝撃的な出来事に会場内は静まり返り。さらに追い討ちをかけるように、さっきまで黒羽くろぼねが立っていた場所に赤とオレンジ色が混ざり合った炎が上がり、動揺が広がっていく。

——いや、ああいう類いの機材は、あんな激しい炎上はしない。何より、あの色の炎は見覚えがある。

炎上するステージを見つめたまま言葉を失っている、奈緒なおの肩を揺さぶって言い聞かせる。

「彼女は無事です！」

「——あっ！」

ステージに気をとられている間に電撃の能力者は、アリーナを出ようとしていた。すぐに追わないと取り逃がす。今ここで取り逃がせば、また同じことを企てる可能性だって十分考えられる。

「——追うぞっ！」

「し、しかし……っ!」

「柚咲は!？」

「大丈夫、あの人が放っておくワケないっしょ！」

「あの人って…… そうか、美砂か！」

炎の光に照らされて足下に転がった壊れた機材に片足を乗せた黒羽…… 姉の美砂が、止まっていた曲の続きをアカペラで力強く歌う。

怯むことなく歌い続ける彼女の歌声に引っ張られるようにしてバンドも演奏を再開。さらに美砂は、曲の盛り上がりに合わせて炎を派手に操り会場中に漂っていた悲壮感を一掃し、このハプニングを最高の演出に書き換えてしまった。

盛大にもり上がるアリーナを出て、前を走る電撃の能力者を追いかける。

「一瞬空白を作ります。お願いします」

「えっ? わかりました!」

走るスピードを上げて、能力者との距離を一気に詰める。

「くっ!」

すぐ後ろまで迫っていることに気づいた能力者が走りながら、通路の壁に向かって伸ばした左手よりも一瞬早く、壁に手を触れる。

直後、衝撃が走った――。

能力者は足を止め、何度も壁に手を触れるが何も起こらない。

「な、なんで!？」

――悪いが、これ以上思い通りにはさせない。

能力は把握した。電撃の能力は直接ではなく、媒体を通じて目標へ電流を流す能力。威力は最大で、強化スタンガン程度。対処法は単純、電流の通り道で遮断してしまえばいい。

「今だ、乗り移れ!」

「…… ああ!」

「高城!」

「はい!」

戸惑う能力者に乙坂が乗り移り、無防備になったところへ高城が瞬間移動で体当たり。見事な連係プレーで、能力者もろとも突き当た

りの壁に激突した。

奈緒は様子を確かめるため、倒れている二人の元へ駆け寄って行く。

「完全にのびてるな。よし、今のうちに拘束するぞ」

「はい、わかりました」

何ごともなかったかのように立ち上がった高城と一緒に、実行犯の確保にあたる。

「うまくいったのか……？」

「ええ、おかげさまで。大丈夫ですか？」

「あ、ああ、すごい痛かったけどな……」

「はは、それはおつかれさまでした」

浮かない表情で起き上がった乙坂を労いつつ、奈緒たちの元へ向かう。

「ではあたしは、コイツを上引き渡してきます。先に、アリーナへ戻っていただいて構いません」

「えっ？ いいんですか!？」

「代わりにいきますかー？」

「いえ、お言葉に甘えさせていただきます！」

姿勢を正して敬礼する高城に、奈緒は若干呆れ顔でダメ息をつくどくるつと身を翻した。

「では、またのちほど」

「はい、お願いします！」

気絶したまま拘束されている能力者を、どこからか持ち出してきた台車で連行していた。

「それでは我々は、『楽園』へ戻りましょう！」

「ああ……」

「あ、ちよつと、トイレに寄っていきます。先に戻っててください」  
「そうですか、わかりました。では」

二人と別れて、男子トイレへ。

近くのトイレに入った俺は、用を足すつもりは最初からなく、直行した洗面台で手を流していた。

「ライブをすれば不幸になる、か……」

正直、音響機材を破壊してライブを中止に追い込む程度の妨害だと想っていた。

でも実際は違った。本気で黒羽を狙った攻撃だった。美砂がいたからよかつたものの、当たりどころによっては最悪の事態だつて十分に考えられた。

手のひらに触れて落ちた水が渦を巻き、排水溝へ流れ落ちていくのを見つめながら、自分の自身の読みの浅さを悔いて唇を噛みしめる。

小さく息を吐き、水で洗い流した顔に残る水滴をペーパータオルで軽くを拭き取って、トイレを出る。ちょうど戻ってきた奈緒とばつたり出会った。

「あつ」

「友利さん、早かったですね」

「あらかじめ近くで待機していましたので。あたしたちも戻りましたよ」

話ながら、アリーナへ戻る。

「ん？ なんだ、一緒に戻ってきたのか」

「ライブはどうしたんすかー？」

アリーナの中は照明が灯り、ライブ開始前と同じように明るかった。それに空席もいくつか目立っている。

「ブ레이크タイムだよ。スタッフが壊れた設備の復旧作業してるんだ」

乙坂の言った通りステージ上では、運営スタッフが懸命に復旧作業を急ピッチで進めていた。別のスタッフが拡声器を手に復旧状況を伝えて回っている情報によると、あと十分ほどで再開できる見通しとのことだ。

「ところで、高城さんは？」

「この時間を利用して、ライブグッズを買いに行っている」

「あなたはいいんですか？ 歩末ちゃんに頼まれてるんしょ」

奈緒に訊かれた乙坂は、座席の下からハロハロのロゴが入った袋を取り出して見せる。

「僕はもう買った。あいつは限定商品が再入荷したとかで物販の行列にならんぞ。長くなりそうだったから先に戻ったんだよ」

限定商品を買えたのか、高城は満面の笑みで再開予定時刻ギリギリに戻ってきた。

その後ライブは予定時刻通り無事に再開された。

そして最後の曲を歌い終え、バンドメンバーたちと一緒に手を繋いで頭を下げたあと、拍手が鳴り止まないステージにひとり残った黒羽は、「みんなー！ 今日ほんとうにありがとうーっ！ また会おうねーっ！」と最後まで笑顔で手を振って舞台袖へ入っていく。

「終わったか、結構長かったな」

「中断があつたから長めにやってくれたんでしょ。さあ帰りましよう」

「お待ちを、まだアンコールが残っています！」

「ああー、そんなのがあるのか」

拍手は徐々に鳴り止みアンコールにかわっていく。しばらくして別の衣装に着替えた黒羽が、もう一度ステージに姿を現した。

『みんなーアンコールありがとうー！ えーっと、今日はいろいろあつてみんなにいっぱい迷惑かけちゃったから特別に新曲を歌っちゃおうと思いますっ！』

アンコールは、テレビでもラジオでも今まで最長でサビまでだけしか流していない新曲をフルで初披露。このサプライズに会場は、今日一番の盛り上がりを見せる。

「高城が何枚も予約した新譜のやつか。よかったっすね、一足先にフルで聞けて。ん？ どうした？ おーい」

返事がない高城の顔の前で、奈緒は視界に入るように何度も手を振ったが反応はない。一点を見つめ立ったまま気を失っていた。もちろん曲が始まると意識を取り戻し、一番感動していたことは言うまでもない。

「これで本当に終わったな。そう言えば高城、宮瀬にもらったチケットは使わなくてよかったのか？」

——レア物だったんだろ？ と、乙坂は高城に尋ねた。

「そのいただいたチケットなのですが。今回のライブの物ではなかったんですよ」

「そうなのか？」

「はい」

高城は、俺が渡したチケットを乙坂に渡した。

「見てください、日付が今日ではないんです」

「あ、ホントだ。ずいぶん先の日付だな」

「そうなんです。ですが、この日にライブの予定は——」

——ないんですよ、と続く前に、会場の照明がすべて落ちた。

『えっ？ えっ？』

姿は見えないけど黒羽が困惑しているのことは、マイクが拾っている声で容易に想像できる。また妨害工作かと思っただけ、マイクが生きていると言うことは……。

『どーむらいぶ？ んー……？ はわわっ!』

大型ビジョンに写し出された「12月25日クリスマス、ドームライブ決定!」という文章は、ファン以上に黒羽自身が一番驚いていた。

\* \* \*

ライブ後、アリーナの裏口付近の通路で話をしながら黒羽が来るのを待っている。

「まさかクリスマスをゆきりんと一緒に過ごせるとは…… 正に聖夜! 私は、こんな幸せでいいのでしょーかッ!」

「ひくなっ」

俺が渡したチケットは、今さっき発表されたドームライブのチケットだった。

「けど、まだ決まってないライブのチケットなんてどうやって手に入れたんだ？」

「知り合いが、黒羽さんが受験勉強で芸能界を離れたさいの株価下落対策で、事務所の社長に頼まれて出資していたんですよ。そのツテで都合をつけてもらったんですけど、まさか未発表のライブのチケット

とは思いませんでした」

「とんでもない知り合いだな…… お前、どんな人脈もってるんだ？」

「みなさーんっ」

ステージ衣装からラフなTシャツに着替えた黒羽くろばねが、小走りで俺たちのところへやって来た。

「今日は、来てくださってありがとうございます！ ステージから見えてました！」

「おつかれさまです。ケガはありませんでしたかー？」

「あ、はい、大丈夫ですっ」

「そうっすか。それはなによりでした」

「ありがとうございますっ。でもビックリしました。いきなり照明が——」

ひとつ引っ掛かっていることがある。

あの時、奈緒なおと目が合った瞬間に能力を使った。どうしてあのタイミングだったのか、黒羽くろばねが照明の真下にいたからなのか、それとも別の理由が——。

「聞かれていますよ」

「——はい？」

奈緒なおに声をかけられて、ライブの感想を訊かれていたこと知った。

「すみません、ちょっと考えごとをして。そうですねー」

「どきどき」

感想を待っている黒羽くろばねは、期待と不安半々と言った感じ。

「カツコよかったです」

「カツコいい……ですか？」

黒羽くろばねは少し戸惑っている。

でも、それが本心。歌やダンスもだけど、普段の無邪気でのほほんとした雰囲気と違う一生懸命な表情は、本当に魅力的だと思った。

「そうですねー。お恥ずかしながら、可愛いとかキレーとかは言われるんですけど、カツコいいはあまり言われないので。えへへ」

少し気恥ずかしそうにしながらも、嬉しそうにいつもの笑顔。

「はいはい、話はここまでにしておきましょう。行かなくていいんですか?」

奈緒の目線の先には、おそらくマネージャーと思われるスーツ姿の女性が、微笑ましそうこちらを見ている。

「あつ、わたし、今からライブの打ち上げがあるんでしたー!」

「おや、そうでしたか、それは残念です。チケットをいただいたお礼に、みんなで食事でも思っていたのですが」

「すみませ〜んっ」

「いえいえ、お気になさらずに」

「今日は、ありがとうございますとっ」と黒羽はぺこっと頭を下げ、手を振りながらマネージャーのところへ。

「あたしたちも帰りましょう」

「ああ、そうしよう。少し疲れた、痛かったし……」

「そうですね。私も今日は、新しいライブグッズの配置に勤しむことにいたします!」

そんな訳で寄り道せずに帰ることになった。

一度アリーナの表側に回り横浜駅へ向かう前に、俺は足を止めた。

「あ、お先にどうぞ。ちよつと見ていきます」

「ん? ああ、黒羽さんのグッズ買うんすか」

「ええ、少し貢献しておこうかと思ってます」

先日のCDと今日のチケットのお礼も兼ねて。

何より、離れるいい口実になった。

何はともあれとりあえず、物販エリアへ向かう。物販はもうすでに片付けの準備に入っていたが、ありがたいことにエリアマネージャーが融通を利かせてくれた。スポーツタオルを購入して、アリーナの敷地外へ出る。

すると先に帰ったハズの奈緒が、スマホを片手に待っていた。

「あ、無事に買えたみたいですね」

「ええ。どうしたんですか?」

「話があったので待っていました。話ながら行きましょう」  
隣を歩幅を合わせて歩く。

「先ほど今回の黒幕を特定し、拘束したと連絡が入りました。上が適切に処理したのもう心配いらないうことです」

「そうですか、それはよかったです。それを伝えるために？」

「まあ、それもあります」

「それも？」

「あ、ちよつと寄っていきますので。その公園のベンチで、少し待っていてください」

そう言うとドラッグストアへ入っていった。歩道を挟んで向かい側の公園のベンチに座って、店から出てくるのを待つ。奈緒は、もの十分ほどで戻ってきた。

「お待たせしました」

「いいえ」

立ち上がろうとしたところで、奈緒は隣に腰をおろした。

「それでは、手を出してください」

「はい？」

「だから手です」

よくわからないけど、とりあえず右手を差し出す。

「違います、こっちはです」

左手首を取られ、強引に引き寄せられた。

外灯の明かりを頼りにまじまじと、俺の左手を見ている。

「うくん、何か所か水ぶくれが出来てますが思ったよりも軽傷みたいです。薬を塗りますので、ちよつとのあいだ動かささないでください」

ドラッグストアで買ってきた火傷の治療薬を丁寧に塗ってくれた。触れる手が温かくて、やさしい。

「いつから気づいていたんですか？」

「ライブが再開した後の曲中です。ずっと左手で持っていたペンライトを、再開後は右手で持っていました。極力左手を動かさないようにして手のひらも見せないようにしていましたので。まあ、電流が流れる壁に素手で触ったんで、ただでは済まないだろうなーと思って」

これは対処に遅れた、俺のミスが招いた結果生じた火傷。悟られな

いように振る舞っていたけど、奈緒には見抜かれていた。

「あの三人は、きつと気づいてないっすよ。ずっと見ていないとわからない些細な違いでしたし……あっ」

まるで失態をおかしたかのように、少し焦った感じの声を出した。

「どうしました?」

「——なんでもないっすつ。はい、終わりましたつ。明日病院へ行って、ちゃんと治療を受けること。いいっすね?」

「ありがとうございます。でも明日は、日曜日なので……」

「大丈夫っす、と言うかすでに手配済みです。組織の息がかかった病院なので、身元を調べられる心配は一切ありません。安心してください」

負傷を見抜いた洞察力といい、この辺りもさすが抜かりがない。

「と言うことで明日、病院の最寄り駅で待ち合わせしましょう」

「さすがにそこまでは。病院名を教えてくださいただければ、あとは自分で

——

「あたしの名前で手配してるので一緒に行った方が滞りなく進むんですよ。それにあたしも、少し用事がありますし」

そう言うことならお言葉に甘えさせてもらおう。

「決まりですね。では行きましょう」

奈緒はなぜか、駅とは違う方向へ歩き出した。

「帰らないんですか?」

「晩ごはん。名物のシウマイ弁当を買って帰るつもりだったんですけど気が変わりました。せっかく横浜に来たので中華料理にしますつ。ひとりじゃお店に入りづらいので付き合ってください」

うなづいて彼女の隣へ。

「どこのお店ですか?」

「ここー。さつき調べて目をつけておいたんですつ。麻婆豆腐と青椒肉絲がおすすめみたいで——」

俺にスマホを見せながら、とても嬉しそうに話す奈緒の笑顔は、ステージで歌っている時の黒羽に負けないくらい魅力的だった。

## Episode 17 家族

ライブ翌日の日曜午前、自宅の六本木から電車で昨夜待ち合わせの約束をした病院の最寄り駅に降り立つ。休日ということもあり、駅前は大勢の人たちで賑わっている。

約束の時間までまだ少し余裕あるけど、早めに待ち合わせ場所へ向かうことにした。人混みの中を歩き、駅からほどなくのところにある待ち合わせ場所の公園に到着。

待ち合わせ相手の奈緒は、すでに来て待っていた。

初夏の暑い日差しの中、木々の葉が揺れる涼しげな木漏れ日が照らすベンチに座り、どこか憂いを帯びた表情で噴水の方を見つめていた。

——家族。

彼女の視線の先には、小さな子ども連れの家族。噴水の周りではしゃいで嬉しそうに走り回る子ども、それをたしなめる母親。二人に近くで、父親が見守っている。どこにでもある家族の休日。

そう、ごくありふれた日常の風景のひとつ。

普段なら特に気にも止めない、ささやかな幸せな時間。

ただ生きることだけで精いっぱい、あの頃の俺には気に止める余裕なんてまるでなくて——いや、違う。ずっと考えないように生きてきた。

「おはよーごいませーす」

突然掛けられた声に、少し驚いた。

声の主は、奈緒。いつの間にかベンチを離れた彼女は、目の前まで来ていた。

「あ、おはようございます。早いですね」

「お互いさまっしょ」

確かにその通り、待ち合わせの時間までまだ15分近くある。

「お加減はいかがですか？」

「おかげさまで」

「そうっすか。それで、なにか考えることですか」

俺の方が気にしていたのに、逆に心配されてしまった。

「風が抜けて気持ちいいなって想って」

咄嗟に出たごまかしは見透かされたのか、彼女は少し間を開けて「そうっすね」と言っつて、噴水の方へ顔を向けた。俺も同じ方へ顔を向ける。

空から降り注ぐ日差しが噴水の水に反射して、まるで宝石を散りばめたようにキラキラと光輝いている。水辺で遊んでいた家族の姿はもうそこにはなく、子どもを真ん中に手を繋いで楽しそうに公園を出ていったところ。

「綺麗ですね」

「はい、綺麗です。わっ……！」

不意に風が抜けた。少しウェーブのかかった髪の毛が、なまぬるい初夏の風になびいて揺れる。乱れた髪を直す彼女のしぐさは、初めて出会った時よりも、少し大人びて見えた。

「風、結構強いっすね」

「この辺りも高い建物が多いですから」

数多くの高層ビルが建ち並ぶ都市部特有のビル風。遮る建造物が少ないこの公園は、行き場を失った風の通り道。頬を撫で、細くキレイな髪をなびかせる夏場の貴重な涼も、彼女には少々厄介な贈り物のようなのだ。

「当たらないところへ行きましょう」

「あ、いえ、お気遣いなく。病院の前に、寄りたいお店があるんですが。いいですか？」

頷いて答える。

公園を出て、話ながら隣を歩き。大手のショップが軒を連ねる繁華街の大通りから一本脇道へ入ると景色が一変、古くからある町工場や個人経営店などが建ち並ぶ商店街に出た。繁華街と比べると人数は少ないが、人通りはそこそこある。彼女は、商店街に店を構える花屋の店先で作業をしている女性店員に声をかけた。

「あの、お花をお願いしたいんですが」

「はい。どのような——」

彼女が注文したのは、白と薄紅色を基調とした華やかな花束。昨夜、病院に用事があると言っていた理由がわかった。

「お見舞いですか？」

「はい。今から行く病院に、知り合いの女の子が入院しています」

「そうですか。ちよつと、隣のお店に行つてきます」

「わかりました」

花束の仕上がりを待つ間に、隣の青果店で適当に見繕ってもらおう。フルーツカゴを受け取り店を出ると、花束の方もちよつと出来上がっていた。

「よかつたら一緒に渡してあげてください」

「ありがとうございます。きつとよろこんでくれると思います。さあ、こつちです」

少し歩いて、目的地の病院に到着。院内へ足を踏み入れる。病院特有の薬品のおいが鼻についた。あまり得意じゃないにおい。好きな人の方が稀だと思うけど。

「昨日連絡した、友利ともりです」

「はい、伺っています。こちらをお連れさまに——」

看護師と話していた奈緒なおが、受け付けから戻ってくる。

「これを書き終えたら、看護師さんに渡してください」

「わかりました。ありがとうございます」

「はい。ではあたしは、お見舞いに行つてきます。また後ほどここで」

花束とカゴを持って、奈緒なおは小児病棟へ。俺の方は待ち合い室で問診票に氏名、生年月日、持病の有無などを記入した用紙を看護師に提出し、待ち合い室で呼ばれるのを待つ。休日で患者が少ないこともあり、すぐ診察を受けることができた。医者いしやの診断結果は、軽度の熱傷。会計で処方箋をもらつて院外の薬局へ行こうとしたところで、奈緒なおがこちらへ歩いてきた。

「あ、終わってたんすね。どうでした？」

「軽い火傷でした。お見舞いのほうは？」

「お見舞い相手の学校の友だちが来ていたんで早めにおいとました」

処方された塗り薬を薬局で受け取ったあと俺たちは、駅前のカフェで早めの昼食をすることになった。案内されたテラス席で、向かい合う形で座り注文した料理が運ばれて来るのを待つ。

「お見舞いのフルーツ、とても喜んでいました。お礼を伝えて欲しいとのことですよ」

「そうですか、それはよかったです。早く良くなるといいですね」  
「はい、ですね」

今一瞬だけ、うなづいた奈緒の表情が、ほんの少し曇ったように感じたのは気のせいだろうか。

「お待たせしましたー」

「おおっ！」

お互いに頼んだ料理がテーブルに並ぶ。奈緒の顔がぱーっと明るくなった。

「前から思っていたんですけど、宮瀬さんって健康志向つすよね」

「ん？ ああ…… そうかもですね」

アメリカにいた頃、偏った食生活を送っていて痛い思いをしたこともあって、食事に気をつけるようにしている。奈緒が頼んだ料理を見ている。見事な肉料理、野菜は付け合わせ程度。前も野菜を買うことを渋ってた。

「野菜苦手なんですか？」

「別に、苦手って訳ではないですけどおー」

——好き好んでは食べない、と。

「あ、そうだ。これ、どう思いますか？」

奈緒は話題を変えた。けどこれは、ぼつが悪くて変えた訳ではない。渡されたスマホを見て、すぐに分かった。スマホに写っているのは、雲ひとつない青空に墨を落としたような黒い影のようなもの。

「これは？」

「今週発売の雑誌の記事の一部です。影を拡大した画像が下にあります」

画面をスクロールすると彼女の言った通り、拡大された画面が表示された。拡大された影はまるで、人を逆さまにしたような形をしてい

る。

「それで、これが元の記事です」

「フライング・フューマノイド。空飛ぶ人間ですか」

元記事は俗にいうオカルト雑誌。何とも信憑性の薄い出どころ。というのもこの手の写真は、パソコンを使った合成写真であることが大多数を占める。特に技術が発達した現代では9割以上、10割に迫るほど捏造されたものと相場が決まっている。

しかし彼女は、この写真が合成の作り物とは違う、とある可能性を口にした。

「おそらく、空を飛ぶ練習をしているのかと  
「なるほど」

確かにそれは、ありえない話じゃない。

写真の場所は人里を離れた山中、能力の鍛練には持つてこいの場所。

「撮影場所も突き止めてあるので、あとは熊耳くまがみが来てくれれば確定なんすけどねー」

「くまがみ?」

初めて聞く名前。

「そういえば、まだ会ったことなかったつすね」

周囲の様子を窺い少し身を乗り出した彼女は、俺にだけ聞こえるような小声で話す。

「熊耳くまがみは、あたしたちの協力者です。特殊能力者の居場所と保有する能力を知る能力チカラを持っています」

探知探査系の能力者、両方を有するかなりレアな部類の能力。どんな制約があるかはわからないが、この能力なら見つけられるのかもしれない。長年探していた、あの能力者を――。

「あつ、やつぱりー!」

突然の聞き覚えのある声。大きなサングラスをかけた同世代くらいの女子が、どこか嬉しそうに手を振りながら駆け寄ってくる。彼女の姿には見覚えがある、黒羽くろぼね。

「黒羽くろぼねさん、こんにちは」

「こんにちはですっ」

「おつかれー。こんなところで会うなんて奇遇ですね」

「今日からお休みをいただいでいて、お買い物に來たんです。そうしたら、お二人を見かけたのでっ！」

サングラスを外して屈託のない笑顔を見せた黒羽くろばねは、テーブルの周りを何度か見回すと、いきなり慌てだした。

「も、もしかして、わたし、お邪魔しちゃいましたかっ?」

どうやら、デートと勘違いされているみたいだ。奈緒なおはテーブルに肘をつき、若干めんどくさそうな表情かおで答える。

「別に、デートの類ではないのでお気になさらずに」

「でも……」

「でも、なんですか……?」

「な、なんでもありませんっ!」

奈緒なおをじっくり見て何か言いたげな黒羽くろばねだったが、彼女から何か感じとったのか気圧されていた。

「座らないんすか?」

「えっと、お邪魔していいんですか?」

「言ったっしょ、別にデートじゃないって。それにちようど訊きたいこともあったんで」

俺もうなづいて見せると、黒羽くろばねはやや遠慮がちに空いている椅子に座った。

「休暇はいつまでなんすか?」

「えっと、期末試験が終わるまでです。今回は、少し長めにお休みをいただけましたっ」

学校が長期休暇に入る前のちよつと早い夏休み、と言ったところだろうか。

「三週間くらいか、うまくタイミングが合えば」

「はい?」

「ごつちの話です。アイスもおいしいなー」

不思議そうに首をかしげる黒羽くろばねをよそに奈緒なおは、美味しそうに食後のデザートに舌鼓みを打っている。

「友利ともりさんは普段、お洋服はどこでお買いになるんですか？」

「なんですか、唐突に」

「昨日も、今日も、とつてもかわいいので気になりました！」

「普通のシヨップすよ。芸能人アイドルが買い物するようなお店じゃないですよ」

素っ気ない態度で答えた奈緒なおは、止まっていたスプーンを何事もなかったかのように再び動かし始める。塩対応に少ししよげてしまった黒羽くろばねをフォローがてら、どこで買い物をするのか訊ねる。

「シヨッピングモールのセレクトシヨップとか、あのお店とかですねー」

黒羽くろばねが指を差した先には、学生でも手軽に買い物できる全国チェーンのカジュアルシヨップの看板。

「へえ、意外っすね」

「わたし、ブランド物とかはあまり興味がなくて。結局、同じお店で買うので似たり寄ったりになっちゃっうんですよー。それで友利ともりさんは、どんなお店に行くのかな〜って」

「あたしも、シヨッピングモールに入ってるシヨップとか似たようなところですよ。さて、そろそろ出ますか」

チケットと案内してくれたお札の意味を込めて三人分の会計を済ませ、外で待っている二人のもとへ。

「ごちそうさまでしたっ」

「いえいえ」

「ごちそうさまでーす。さて行きましょう」

「どちらへ？」

「ほらさっきの話ですよ。念のため準備をしておこうかと思いつて」

「ああ……」

——雑誌のライティング・フューマノイドの件。仮にあの人影のようなモノが能力者なら、山中での探索も十分に考えられる。そのための下調べ。

「どちらから行きますか？」

「まずは生活必需品です。近くにショッピングセンターがあるので、そこへ行きましょう」

スマホで確認して歩きだした奈緒は数歩先で振り返り、立ち尽くしていた黒羽に声をかけた。

「来ないんすか？ 来ないなら置いてくぞー」

「あつ、待ってくださーいっ！」

笑顔で追いかけて来た黒羽も一緒に三人で、歩いて10分ほどのショッピングセンターへ。テントやコンロなどのアウトドア商品、モバイルバッテリーなど調査に必要ななりそうな物をチェックして回る。

「キャンプに行くんですか？」

「遊びじゃなくて、調査のためです」

「見つかったんですか？」

「あらかじめリストアップしておけばその時に滞りなく進むっしょ。そのための備えですよ」

「なるほど。でしたらわたし、虫除けスプレーと日焼け止めクリームを見ておきたいですっ」

「ご心配なく、それらはすでにデオドラント商品と一緒にチェック済みです。よし、ここもおつけー、次いきますよー」

家電量販店を後にして向かった先は、黒羽も買い物をする言っていたカジュアルショップ。目当ては就寝時に着る服。学校の指定のジャージよりも寝心地の良さげなスウェットに目をつけて、隣のショップへ。

「ここで最後でーす」

隣のショップは、女性物の下着専門店。さすがにこの店には入れない。入り口から少し離れたところで、二人を見送る。

「いつてらっしやい」

「あれ？ 一緒に入らないんすかー？」

奈緒はまるでいたずらっ子のような笑顔を見せて、俺の反応を面白がってる。

「入りませんよ。そこのベンチで待ってます」

「え、でもでも男子の意見も聞いてみたいっていうか」

「はいはい、冗談はその辺にしてください。黒羽くろばねさんが反応くろばねに困つてますよ」

「——あつ！」

黒羽くろばねは唇に左の人差し指を当てて、なにか考えごとをしているようだった。

「黒羽くろばねさん？」

「なにボーツとしてるんすかー？」

「——はっ！ いえ、なんでもないですっ」

笑顔で両手を小さく振り、「そっかそっか」とどこか嬉しそうになづいた黒羽くろばねは、先にシヨップに入つて振り返った。

「友利ともりさん、行きましょー！」

「はあ？ では、行ってきまーす」

「えへへ」

「何すか？ その笑顔は」

「いえいえ、なんでもないですよ」

後ろで手を組んでご機嫌に隣を歩く黒羽くろばねに奈緒なおは、居心地が悪そうにややいぶかしげな視線を向けていた。

対照的な二人が戻つて来るのを少し離れたベンチで待つ。ポケットに入れた携帯が振るえた。発信者は鼻肩にさせてもらっている証券会社の坂本さかもと。先日依頼した件についてだろうか。ベンチを離れ、他の客の迷惑のならないところに移動して対応する。

「はい、宮瀬みやせです。お疲れさまです」

『お疲れさまです。先日の件ですが——』

やはり先日依頼した件だった。

『明日中にはすべて片付くと思います』

「ありがとうございます。すみません、無理を言つて」

『これが仕事ですから』

電話越しに、お互い笑い合う。

『そうだ、伝言を預かっていました。たまには顔を見せなさい』  
『そうです』

「はい。時間ができしだい報告に行きます、とお伝え願えますか？」  
『了解です、お伝えしておきます。取引の詳細はいつも通りメールでお送りします』

「はい、お願いします。失礼します」

通話を終えてベンチに戻ると、二人もシヨップから戻ってきた。しかし、先ほどまでとは二人ともどこか少し様子が違う。

「どうかしました？」

「……なんでもないっす」

奈緒は目を細めて、若干恨めしそうな視線を黒羽くろぼねに向けると目を伏せた。

「やっぱり、もつと野菜を——」

思い詰めた表情かおで、なにやら考え込んでいる。

「友利ともりさん、どうしたんですか？」

「あ、あはは……」

訊いてみても黒羽くろぼねは苦笑いをするだけで理由は分からなかった。

\* \* \*

自宅に戻り、明日退院予定の仲村先生なかむらに提出する引き継ぎ資料の最終確認を済ませた後、リビングでパソコンを立ち上げる。

——空気があればありがたいんだけど……。

航空会社のホームページにアクセスして検索。そして目当ての、アメリカ行きの航空券に空きを見つけ、即購入手続きを済ませる。購入手続きが無事に完了のメールを受信したのを確認し、アメリカ在住の友人にメールを打ち、簡単に旅支度を始める。

数日後俺は、日本を離れる。

長い間探していた能力者を探す手がかりを掴むために——。

## Episode 18 　　～自覚～

最初に感じたのは、異様な眩しき。次に、猛烈な倦怠感。

「起きたみたいだね」

すぐ近くで声がした。よく知っている声だった。声がした方へ顔を向けようと動かそうとしたが、顔は思うように動かなかない。顔だけじゃない。腕も、足も、声すらもともに発声できない。まるで自分の体じゃないみたい奇妙な感覚。かろうじて目だけは動かせた。

まだ眩しくてよく見えない目を細めて見た視線の先に映ったのは、点滴から伸びる透明のチューブが繋がった細い腕。自分のものとは思えない痩せ細った腕に想う。

——俺は、いったいどれだけの時間を……………。

疑問に答えてくれたのは、よく知る声の主。親友の声。

「半年近くも眠っていたんだから思うように動かせないのも無理はないよ」

——半年…………… それじゃあ……………。

「詳しい話は、体が快復してからにしよう。今は、それだけを考えて——」

「ドクター呼んでくるよ」と言つて、徐々に遠ざかっていく足音。

やたら眩しく感じる真っ白な天井、一定の感覚で聴こえる機械音、医薬品の臭いが鼻につく。

——俺が今までやってきたことは、いったいなんだったんだ……………。

もう終わらせたい、今すぐ楽になりたい。そんなどうしようもない負の感情が、心の中を掻き回す。医療用ラックにガーゼかかかになを切るためのハサミがあった。あれで終わらせられるのだろうか。だけど、体は動かず、なにも出来ないもどかしさが、心をより虚しくさせた。

まともにしゃべれるようになったのは、一週間以上経ってからだった。

\* \* \*

翌朝、カーテンの隙間から差し込む朝日で自然と目が覚めた。枕元にセツトした目覚まし時計よりも30分ほど早い時間。体を起こし、軽く伸びをしてから窓を開けると、都会とは思えないほど爽やかな風が寝室の中を駆け抜けていく。今日一日の始まりを告げる、朝。テラスに出て、空を見上げる。雲ひとつない青空が高層ビルが建ち並ぶ向こうまで広がっていた。

まだ涼しく清々しい夏の早朝。そんな陽気とは裏腹に、俺の気分は晴れどころか、どんよりとした薄暗い雲に覆われているように沈んでいた。理由は、分かっている。今朝見た夢のせいだ。アメリカで生活していた頃の夢。あまり思い出したいくない記憶。帰国してからしばらくして見ることも少なくなっていた夢。いつからだろう。最近になつてまた、ときどき見るようになった夢。

少しなまぬるくなつてきた風を肌を感じながら、ひとつ大きく息を吐いて、部屋に戻り、登校の準備を始める。

最寄り駅から星ノ海学園へ向かう通学路で、学園に併設するマンションの玄関から出てきた乙坂おとさかとぼつたりと出くわした。簡単な朝のあいさつを交わし、教室に入ると「おはようございます。先日はおつかれさまでした」と既に登校していた高城たかじょうがさっそく、あいさつにきた。あいさつを返し、自分の席に座った乙坂おとさかは、彼と雑談を始め。スクールバッグを置いた俺は、人だかりが出来て賑やかな黒羽くろばねの席の横を通つて、いつものようにビデオカメラを弄っている奈緒なおのところへ向かった。

「友利ともりさん、おはようございます」

彼女は手を止めて、顔を上げた。

「おはようございます」

「昨日は、ありがとうございました」

「ごちそうさまでした。いろいろ付き合ってもらつて――」

そう言つて、彼女は俺の顔から目はずし、火傷を負っている左手に視線を落とした。まだ多少の腫れと痛みは残っているが、我慢できないほどの痛みじゃない。処方された軟膏がよく効いて、包帯をする

必要もないほどに回復している。

——もう大丈夫、と軽く握り開いて見せると、少し表情が和らいだ気がした。

「例の件進展はありましたか？」

「いえ、今のところ何も。と言うか、いつも前触れも唐突にくるので」「そうなんですね」

話をしていると予鈴が鳴った。ほどなくして教室へやって来た担任は出席確認を取り、連絡事項を済ませると授業に入った。黒板に向かって初となる授業。転校する前もほとんどまともに授業なんて受けて来なかったから、どこことなく感慨深いものがあつた。

午前の授業が終わり、昼休み。購買で昼食を調達するため教室を出ると、廊下の反対側からこちらへ小走りで来た担任に呼び止めた。

「午後の授業のなんだが。今日だけまた引き受けてもらえないか？」

休職していた仲村先生なかむらは本日無事に復帰を果たしたが、なんでも別の担当教師に急な出張が入ってしまったとのことだった。当初は自習にする予定だったそうだが、月末に期末試験が控えていることもあつての再依頼。特に断る理由もないため「ええ、構いませんよ」と答えて、再び臨時に引き受けることに。

「悪いな、助かる」

担任は「埋め合わせはするから」と慌ただしく、職員室へ戻つていった。教師というものもなかなか多忙なようだ。急いで購買へ行き、運よく残っていたサンドイッチと缶コーヒーを買つて、教室へ戻る。食わずに待っていてくれた乙坂おとさか、高城たかしやうと共に、少し遅くなつた昼食を食べる。

「この光景いつまで続くんだ？」

自分の席に座る黒羽くろばねを中心に囲うような形ちで、昼を食べ終えたクラスメイトたちの賑やかな談笑が聞こえてくる。その状況に、乙坂おとさかは少し呆れたような声で呟いた。

「ゆさりんは、現役のトップアイドルですから無理ありませんよー」  
彼の疑問を拾い、鼻と口から牛乳を垂らしながらアイドル西森柚咲にしもりゆさの魅力を力説する高城たかしやう。

「垂れていますよ」

「おっと、私としたことが。これは失礼しました」

高城<sup>たかじょう</sup>が、ハンカチで口と鼻を拭っていると。教室前方のドアが勢いよく開かれ、見覚えのない顔を含めた女子生徒四人がしかめっ面でズカズカと、教室に入ってきた。

「ん？ 何事だ？」

「さあ？」

四人は迷うことなくまっすぐ、イヤフォンで音楽を聴きながら頬杖をついて窓の外を眺めている奈緒<sup>なお</sup>の元へ向かっていった。

「見当はつきませんが、知らない方がいいこともあります」

机に垂れた牛乳を拭き終えた高城<sup>たかじょう</sup>は、俺たちの疑問に目をそらしながら答え。我関せずと言った感じで食事を再開した。

「はあ？ どういう意味だ？」

乙坂<sup>おとしざか</sup>は察していないみたいだが、高城<sup>たかじょう</sup>の態度と言葉で容易に想像はついた。俺は黙ったまま、椅子から立ち上がる。

「おや、どうなさいました」

「トイレです。どうぞ続けてください」

「そうですか。ごゆつくり、お気をつけて」

教室を出た俺は、トイレには行かずに校舎裏に身を隠す。この辺りは能力者を監視するため、校内のあらゆるところへ設置されている監視カメラも、人の気配もなく、死角が多くある場所。予想が当たっていれば、おそらくここだろう。出来ることなら取り越し苦労であって欲しいが、それはむなしくも叶わなかった。

身を隠してからしばらく。やはりと言うか。奈緒<sup>なお</sup>が、先ほどの女子生徒達に引きずられる形で姿を現した。それと意外なことに、乙坂<sup>おとしざか</sup>も隠れながら付いてきていた。

まさかの来客に気を取られていると、リーダー格と思われるロングヘアの女子が、奈緒<sup>なお</sup>を乱暴に壁に押し付けた。暴力的な行為にもまったく言っていないほど動じず、少しうつむき加減で無表情のまま、いつものようにただじつと音楽プレイヤーで音楽を聴いている。

校舎の陰に身を隠して様子を伺っている乙坂<sup>おとしざか</sup>に目を向ける。物陰

から様子を窺うだけで、動く気配は感じなかった。

「まずは！ リカのぶんつ！」

奈緒なおを押し付けた女子は右の拳を、彼女の顔に向かって振りかぶった。これは洒落にならない。

——まずい、しかもグー。間に合うか。

咄嗟に飛び出し、奈緒なおの顔に拳が当たる刹那、伸ばした右手で拳を受けとめる。ギリギリ間に合った。バチンツ！ と確かに衝撃音がしたにも関わらず自身の体に痛みが来ないことを不思議に感じたのか、目を伏せていた奈緒なおが顔を上げる。

「あ——」

目があった瞬間、奈緒なおは小さく声を上げた。一瞬の沈黙のあと予定外の出来事に、殴りかかった女子が声を荒げる。

「な、なによっ!? あんた!?!」

「あれ? 知らないんですか。英語の教師していたんですけど、臨時ですけど」

俺も彼女のことを見覚えはない。

「——し、知らないわよっ! あんたは関係ないでしょ!? どきなさいよっ!」

「いや、さすがに無理です。この状況を見過ごすことは出来ません」  
知っている顔の取り巻きの一人が「ちよ、ちよとまずいって……!」と止めに入るが。「そいつのせいで『リカ』と『ユリコ』はっ!」と、友人と思われる名前を口にした。なにか特別な事情があるらしい。けど、俺にも引けない理由はある。

「理由はわかりませんが、彼女をキズつけさせる訳にはいかないんですよ」

「どけって言うてるでしょっ!?!」

今にも殴り掛かって来そうな女子に対して俺は、奈緒なおを庇い背中に隠した。その行為がより一層彼女の感情を高ぶらせてしまい眉がっり上がる。

「いいえ、退きません。彼女は…… 友利ともりさんは、俺の大切な人だ。絶対に退かない」

「うっさいっ！ 邪魔すんなー!!」

痺れを切らしたロングヘアの女子生徒は、もう一度右拳を振りかざした。今度は、俺に向けて拳が飛んでくる。その拳を避けなかった。左頬にクリーンヒット。殴られた衝撃で右に流れた顔を戻して、女子生徒を見る。

「少しは気が晴れましたか？」

「あ、あんた、わざと——」

「今日のところは、これで退いていただけませんか？」

諭すように声をかける。リーダー格の女子は戸惑いながらも、他の女子に促されて、校舎へと戻っていった。

一つ息を吐き、振り向く。ややうつむき加減の奈緒なおに問いかける。

「ケガはありませんか？」

「お陰様で。なんで、ここに来たんですか」

「まあ、なんとなくこうなるんじゃないかと思って。あなたを守るために」

彼女は、うつむいたまま何も言わなかった。

「教室へ戻りましょう」

校舎に戻ろうとしたところで、袖を軽く引つ張られる。

「ん、どうしました？」

「血がでています」

指摘された口元に手を当てて指先を見ると、うっすらと鮮やかな赤い血がにじんできた。

「本当だ。歯に当たったんですね、たぶん」

「動かないでください」

ポケットからハンカチを出した奈緒なおは、つま先立ちをして口元の血を拭ってくれた。

——そして「ありがとうございました」と、小さな声でお礼の言葉が聞こえた。

折れたたんだハンカチをしまった彼女のスマホに着信が入った。

「あ、協力者が現れます。急いで、生徒会室へ行きましょう」

「ええ」

スマホの画面を確認し、俺に振り向いて言った彼女はもう、星ノ海学園生徒会長の凜々しいいつもの友利奈緒だった。

\* \* \*

生徒会室に入ると三人は既に集まっっていて、俺たちと協力者の到着を待っていた。

「はわっ、どうしたんですかっ?」

ソファアーに座っていた黒羽くろはねが心配そうに寄ってくる。どうやら、口元に少し血が残っていたのを見つけられてしまったみたいだ。

「昼ご飯を食べてる時に、噛んでしまったんですよ」とテキストにごまかす。すると黒羽くろはねは、「そうですかー。もしかしてケンカじゃないかと思っで心配しちゃいましたよー」と、安心したように笑顔を見せた。結構するどくて、ちよつとビックリした。

「あ、そうだ。ちよつと待っててくださいねー」

ポーチから小さめの絆創膏を出して手渡してくれた。お礼を言っで貰った絆創膏を貼りながら横目で、乙坂おとさかを見る。椅子に座り、どこか思い詰めたように顔をしていた。

そうこうしていると突然、ボタンツ! と、勢いよく生徒会室の扉が開いた。現れたのは、全身ずぶ濡れの長髪の男子生徒。どこかで見ただことがあると思ったら以前出会い頭にぶつかりそうになった男子。

奈緒なおを見る。彼女は小さく頷いで答えた。この男子が、例の探知能力者——熊耳くまがみで間違いないようだ。

熊耳くまがみは、生徒会室中央部のテーブル一面に貼られた地図の前に立ち、濡れた指先から一滴の水滴を落とす。

「能力は……」  
「空中浮遊」

それだけ告げると踵を返し、生徒会室を出ていった。俺はもう一度、奈緒なおを見る。奈緒も俺を見ていた。自然と目が合うと、ドヤっとしたり顔を向けてきた。

「空中浮遊か、また定番な能力だな」

「ですね。えーと、場所は……都心を外れた山中のようですね」

高城たかじょうが、水滴の落ちた場所を言う。どうやら、水滴が能力者の居場所を示しているようだ。

「よしきた〜！ これだっ！」

奈緒は、雑誌をテーブルに叩きつけた。テーブルに広げられた雑誌は、昨日見せてもらった「フライング・ヒューマノイド」の記事。

「いやー、前から目を付けてたんっすよー」

「この写真の黒い影が能力者だつて言うのか？」

「はい。憶測ですが、ここで飛ぶ練習をしているのだと思います。ですので、この場所で張り続けなければいずれ姿を現すハズです」

「張り続けらばっていつまでだよ？」

「もちろん姿を現すまで。決まってるっしょ？」

「私たちは、それで構いませんが。ゆきりんは？」

奈緒と乙坂の会話に割って入った高城が、素朴な疑問を言った。けど、それは心配ないだろう。

「わたしも大丈夫ですよ。しばらくお休みをいただいていますのでっ」

「と言うことです。さっそく買い出しに行きましょう」

「行きましょう」と言いたいところだけど、そうもいかない。先約に担任の頼まれごとがある。

「すみません。急な出張が入ったそうので午後の授業を受け持つことになってるんです」

「そうですか、わかりました。ではあたしたちは、先に現場へ行つていきます」

奈緒の許可を貰えて、とりあえずひと安心。一度全員で教室へ戻つて、帰り支度を済ませた四人はすぐに調査へ出掛けていった。俺は職員室で受け持つ学年とクラスを聞き、担当する教室へと向かった。

5時限目の授業を滞りなく終え、次は6時限目。これで本当に最後の授業だ。

「最後は…… 2—Bか」

二年生の教科書に持ちかえて教室へ入る。

入り口に近い席で楽しそうにだべっていた二人の女子が、俺に気づいた。

「あれ？ 宮瀬くんだー」

「どうしたの?」

「先生が急な出張で。今日だけまた臨時です。お願いしますね」

「あ、そうなんだー」

「よろしくねー」

教壇へ向かって歩きながら、教室全体を見渡す。すると、いつも空席だった席に、面白くなさそうな表情かおの女子生徒が片肘をついて座っていた。ふと彼女と目があう。

「なっ!? あ、あんたっ!?!」

「ああ、どうも」

あの空席の主は、昼休み奈緒に絡んできたロングヘアの女子だった。彼女の声は何事かとクラスがざわめく。

「静かにしてください。授業を始めますよ?」

手を叩いて呼びかけた俺に注目が集まった。そこで、また今日だけ教壇に立つこと伝えて授業に入ろうとしたところで。教卓の目の前の席の女子が「どうしたの?」と口元の絆創膏を指差し訊ねてきた。その質問に、ロングヘアの女子生徒が少し気まずそうな表情を見せる。おそらく告げ口されると思ったのだろう。

「いや、ちよつと考え事して歩いていたらぶつけちゃったんですよ」

「ええ、そうなの? 気をつけなきゃだめだよ?」

「はい、気を付けます。それでは始めますね」

黒羽くろばねの時と同様にテキトーにはぐらかして授業を始める。その後、最後の授業を終えて教室を出た。少し教室から離れたところで背中越しに、「ちよつと待ちなさいよっ!」と声をかけられた。振り向く。俺を呼び止めたのは、あの女子だった。

「なんででしょうか?」

「..... その..... なんで——」

「なんで庇ったのか、ですか?」

彼女は、ゆっくり頷いた。

「教師ですから。さつきまでですけどね」

深くひとつ息を吐き、彼女をまつすぐ見据える。

「あなたの事情はわかりません。彼女を責めるなどいいません。で

すが、彼女にもそうしななければならない事情があったんだと思います。わかってあげてくれとはいいませんけど。憶えておいてください」

彼女は、なにも答えない。

「それでは、失礼しますね」

「……待って——」

「なんですか?」

「……ケガさせて……ごめん」

「あなたが怒ったのは、友だちを思っただけのことなんでしょ?」

黙ったまま、小さく頷いて答えた。

「それならいいです。ああ、そうだと、一つだけ。授業は出た方がいいと思いますよ?」

「ちよつ……それ、今いつ?」

「あははっ」

俺は笑って職員室へ戻った。

スライド式のドアを横に引いて室内に入る。

「失礼します」

「あつ、宮瀬くん。おつかれさま」

「おつかれさまです」

最初に労ってくれたのは、今日復帰した仲村先生なかむら。続けて担任も労いの言葉をかけてくれた。

「ねえ。宮瀬くんみやせ、借りていいかしら?」

「どうぞ」

棚に教科書を戻しているうちに仲村先生なかむらと担任の間で、当人の俺の意思は関係なく取り引きが成立していた。勝手に決めないでいただきたいのだけれど。抗議する前に担任は、「ホームルームも出席扱いにしとく。そのまま帰ってくれていいからな」と言っただけで、そそくさと職員室を出て行ってしまった。

「こつちで話しましよ」

有無を言う間もなく職員室横の応接室へ連行されてしまった。無駄に豪華なテーブルを挟んで向かい合って座る。

「中間の成績みたけど、みんな上がってるわね。主に女子が」  
「あはは……」

淹れてくれたインスタントコーヒーをいただきつつ、苦笑いでやり過ぐす。

「乙坂くんと柚咲ちゃんは、単語。高城くんはリスニングが課題と……。この資料も的確だし。なにか、お礼をしないといけないね」

「別にいいですよ。充実した日々を送れましたから」

「欲がないわね。なにかないの？」

「そうですねー」

左手をアゴに添え、目を閉じて少し考えてみる。――

「じゃあ、ひとつお願いしてもいいですか？」

「なんでもいいわよ」

「友利さんのことをお願いします」

「友利って…… 奈緒ちゃん？」

「はい」

高城の様子からして、今日みたいなことも稀にあるのだろう。今回の調査が終れば俺は、しばらく日本を離れることになる。もしその間に、同じようなことが起きたら――守ってあげられない。

「ふーん…… わかったわ。任せなさい」

「お願いします」

話は、これで終わり。お茶のお礼を伝えて席を立つ。

「ねえ、宮瀬くん、ひとつ聞いてもいいかしら？」

「あ、はい、なんですか？」

「あなた――」

――ああ、そうか…… 俺は……。

この時、仲村先生に聞かれたことで初めて自覚したんだ。これが、そう言う気持ちなのだ――。

「もちろんです」

「そう…… 重いわよ？ あの子が背負っている物は」

「はい、わかっています」

「そう、頑張りなさいっ」

応接室を出ると携帯が振動した。画面を確認するとメールが届いていた。送信者は、話題に上がっていた奈緒<sup>な</sup>お<sup>お</sup>。内容を読んで返信。その後すぐ、彼女から届いたメールに書かれていた頼まれごとを果たすため、星ノ海学園を後にした。

## Episode 19 く心境の変化く

特殊能力発見能力者の熊耳くまがみから新たな特殊能力者の情報をもたらされたあたしたちは、見つかった特殊能力者との接触を試みるため、いつもの調査通り学校を早退し、さっそく調査の準備に取りかかる。「どうして、〃どうもろこし〃ばかりなんだ？」

先日、野球の帰りに買い物をしたのと同じスーパーで食料の買い出し中、あたしの後ろをショッピングカートを引いている乙坂おとさかさんが、買い物カゴの中に入れられた大量の〃どうもろこし〃について疑問を呈した。

「なんでって、バーベキューっていったら〃焼きどうもろこし〃は定番っしょ。表面にお醤油を塗って、炭火で焼くと美味しくないのでか」

「まあ、それは同意するけど。でも、炭火焼きって結構煙でるからバレないか？」

「二オイに釣られて、逆に向こうから近づいて来てくれるかもしれませんよ」

それが、本当の狙い。

いくら居場所と能力を特定したとはいえ、それはあくまでも発見当時の居場所。黒羽くろばねさんの時と同様に対象は常に動いている。つまり、木々が生い茂る山の中でどこに居るかもわからない人間をあてもなく捜索するのは、あまりにも無謀という訳で、あえて目立つ行動を取り、こちらから誘きだしてしまおうと言うのが今回の作戦。とは言っても長丁場になることを視野に入れて、やっぱり美味しいものが食べたい。しっかりと質の良いものを選ばないとっすね。

「このくらいあれば十分ですね。あとは、ステーキ用のお肉く、スペアリブ、ウインナーつと。あつ、その前に他の野菜も見とかないとですね」

精肉コーナーへ行く前に、同じ野菜売り場で根菜、緑黄色、葉物と。栄養価の高い野菜と日持ちする野菜を選んで、カゴの中に入れていく。

「へえ、案外フランス良く買うんだな」

「まあ、最近はですけど……」

チラツと振り向くと、黒羽くろばねさんと高城たかじょうが数歩をうしろを話しながら歩いている。彼女と不意に目が合う。なにが嬉しいのか、それとも楽しのかは知りませんが、昨日一緒にお店を見て回っていた時と同じようなニコニコ顔になった。

そして、その笑顔で思い出す。

あたしが、野菜もすっかり食べようと思った、あの出来事を――。

「はい、次！ メインのお肉コーナーへいきますよーっ」

「ちよつと待て。僕も欲しいものがあるんだ。持ってくるから待っていてくれ」

「仕方ないなー、じゃあ早くしてください」

一時的にシヨッピングカートを預かって、乙坂おとさかさんを待ちながら今後回るお店の順番を考えていると、後ろの二人の会話が聞こえてきた。

「これはまた」

「どうしたんですかー？」

「いえ、いつもでしたら効率重視で待たずに先に行くような方ですの  
で。珍しいこともあるのだなと思ひまして……」

なんかスゴく失礼なことを言われた気がするんですが、気のせいっ  
すかね。振り向いて、軽く睨むような視線を高城たかじょうに向けると、眼鏡を  
直す仕草をして顔を背けた。

そこへちようど、ししとうのパックを持ってきた乙坂おとさかさんが戻つて  
くる。

「ししとー？ 辛くないっすかー？」

「その辛さがいいアクセントになるんだよ」

「ふーん、まあ別にいいですけどー」

受け取ったししとうのパックをカゴに入れて、後ろの二人にも食べ  
たい物がないか訊ねる。特にこれと希望はないとのことでしたので、  
メインの精肉コーナーでお肉を見る。消費期限が長く美味しそうな  
お肉、野菜、飲み物も買って次のお店へと向かう。デイスカウント

ショップやドラッグストアを回り。最後は、昨日ホームセンターであらかじめチエックしておいたテントやコンロを、サービスカウンターの店員さんに頼んで台車に乗せてもらう。買い物をしている間に、タクシーを手配して待機していた乙坂さんおとしさかと高城たかしろうと駐車場で合流。能力者の居場所が特定された、山の入り口へ向かう。

都会を離れ、人里離れた山道を目的地へと走るタクシー。助手席に座っているあたしは、今のうちにメールを打つ。送信相手は、宮瀬さん。授業も終わった頃ですし、迷惑にもならないでしょう。メールの内容は、星ノ海学園の併設マンションの管理人室に預けてある荷物を受け取ってきて欲しい、と言うお願い。

彼からの返事は、「わかりました。今、学園を出るところです。また連絡しますね」とすぐに返ってきました。今から星ノ海学園を出て、一度自宅に戻って準備をしてから来るとなると。あたしたちの現地到着から、三、四時間遅れと言ったところでしょうか。都心からかなり離れた山奥ですし。

それからタクシーで移動すること一時間あまり。登りやすそうなところでタクシーを降りる。

「さてと。それでは男性は、バーベキューコンロとテントを持ってください。食材は、あたしと黒羽さんくろはねで持ちます」

「テントって……まさか、泊まりなのか!？」

「現れるまで張り込むって言ったじゃないですか」

「確かに言ってたけど……」

黒羽さんくろはねが、不安そうな顔をして控えめに手を上げた。

「あのく、着替え持ってきてないんですけど……?」

「それは問題ありません。管理人室に預けた荷物を、宮瀬さんが持ってきてくれる手はずになっています。先ほどメールで、お願いしておきました。ほら、昨日のつすよ」

「あつ、そうでしたかー。それでしたら安心ですっ」

「僕たちののは?」

「着替えなくても死なないっしょ」

「——なっ!？」

「さあ、行くぞー」

まるで苦虫を食い潰したよう表情で納得いかないと言った乙坂さんをあたしはスルーして、両手に買い物袋を持つ。二人もそれぞれ荷物を持つと、乙坂さんも観念してしぶしぶテントを肩に担いだ。

そしてあたしたちは、草木が生い茂る鬱蒼とした山に足を踏み入れた。

道なき道、獣道をひたすら進むこと二時間弱。ようやく開けた草原に出た。雑誌の写真と今居る草原から見える山々の景色を見比べて、同じ場所の間違いなことを確認出来た。

「よっし、到着！ 暗くなる前にテントを張りましょう」

星ノ海学園を出発して数時間。目的地に到着したあたしたちは休むこともなく、手分けしてテントを張り始める。

「あ、そっちは井戸があるんで危ないっすよー」

「——えっ？ おわあーっ!？」

不意に、乙坂さんの身体が傾いた。どうやら古井戸に片足が落ちたみたいです。忠告がちよつと遅かったみたいですね。

「い……今、下手したら落ちるところだったぞ!？」

「だから言ったじゃないっすか。井戸があるって」

「もつと早く教えて欲しかったんだがっ!」

高城の手を借りて、古井戸から脱出。

「高城、ここは危険だ！ 別の場所にしよう!」

「同意です！ あちらはいかがでしょうか、平坦な場所があります!」

「よし、そうしよう!」

身をもつて危険を経験した乙坂さんの提案に高城も賛同して、別の場所にテントを張り始めた。その乙坂さんが落ちそうになった井戸をあらためて見て、あたしは能力者対策に使えるようなことを思い付いた。あとで仕掛けておきましょう。

そして、無事にテントを張り終えた。乙坂さんは、妹の歩未ちゃんに電話。黒羽さんは、テント前に設置した折り畳み式の簡易ベンチに座って休憩。あたしと高城は、別々の方へ見回りを兼ねた散策に出た。歩いて見て思った。誘き出すにしても、遮る物がなにもない平原

で能力を使って逃げられたら厄介なことになりそうです。

平原をひととおり見て回りテントに戻っている途中、制服のポケットに入れたスマホが鳴った。

「はい、友利ともりです」

『おつかれさまです。宮瀬みやせです』

「おつかれっす」

電話の相手は、宮瀬みやせさん。タクシーでこちらに向かっていると言う連絡でした。

「どの辺りですか？」

『今さっき、山道に入ったところですよ』

あたしたちと同じ場所でタクシーを降りて、徒歩で山を登るとなると二時間前後と言ったところでしょうか。

『夕食は、お気になさらずに』

「わかりました、そうさせてもらいます。森の中は暗くなると思いますので、お気をつけて」

『はい。ああそうだ、甘い物を持って行きますね』

「えっ、マジっすかっ？　ありがとうございますっ。お待ちしてまーすっ」

もう午後5時を回っているのに、日の長い夏の空は青いまま。人によつては少し早いかもですけど、重い荷物をもって獣道を登って来たわけですから、みんなもお腹は空いているでしょう。お礼を伝えて通話を終えたあたしは、テントに戻ると、さっそく夕食の準備に取りかかった。

「よし、準備おっけー。黒羽くろぼねさん、お願いしまーす」

「はいっ。」

少し首を傾げた黒羽くろぼねさんの体がピクンっつと震えて、ガラツと雰囲気が変わる。

「——チツ、着火材とか買わねえのなって思ってたらそう言うことかよ。人をライター扱いすんなよな——」

不満を漏らしながらも美砂みささんは、自身が有する“発火”の能力を使って、コンロの炭に火をつけてくれた。

「宮瀬が、まだ来てないぞ?」

「さつき電話をくれました。まだ二時間以上かかるそうなので、先に食べていてくれていいそうです」

「そうなのか」

「では我々は、お言葉に甘えさえていただきましょう」

「だな!」

と言うことで、人数分のとうもろこしを網の上に乗せて炭火で焼く。焦げ目が付き始めた辺りで醤油を塗ると、食欲をそそる芳ばしい匂いと一緒に白い煙がもくもくと立ち上り出した。

「やっぱ煙でバレるだろ、これ……?」

乙坂おしざかさんの心配をよそに、あたしは焼き上がった「焼きとうもろこし」を口にほうばる。

「んん〜っ。焼きとうもろこし」おいしいなあ〜っ。やっぱこれっすよね〜。ささっ、みなさんもうぞ〜」

こんがりといい具合に焼き上がったとうもろこしをみんなにもすすめる。

「ここは、柚咲ゆさきに譲るか……あれ?」

突然意識が戻り、少し戸惑う黒羽くろはねさん。そこへ、「どうぞ!」と高城たかじょうが、すかさず膝まづいて焼きとうもろこしを差し出した。

「これ、わたしがいただいていいんですか?」

「もちろんですっ!」

「ありがとうございますっ」

受け取ったとうもろこしをほうばる。

「はわあ〜、これおいしい〜っ」

「確かに、うまいな。芳ばしくて」

「でしょ、でしょ〜! 焼きとうもろこしは、任せてくださいっ。あとはお肉に〜、お野菜〜っ」と

網に残っているとうもろこしは一旦別の容器に取り上げて、別の食材を焼き始める。焦げた醤油の匂いとはまた違った、とても魅力的な匂いが周囲に広がる。この匂いと煙に釣られて来てくれると、とてもありがたいんですけどね〜。まあ初日ですし、来ないとは思いますが

ど。

「スペアリブ、うつまっ！」

「ウインナーの噛んだときのジューシー感！」

「肉だけじゃなくて、間に野菜も挟んで食べるー」

「わあ、このお肉もすごくおいしいっ」

「肉は、タレが決め手なんすよ！」

「野菜を食べてるのは、僕だけじゃないか……」

あたしたちが肉類を中心に食べていると、乙坂さんおとしさかは若干ふてくされた様子で一人、焼き野菜を食べている。

「なに一人で食べてるんですか、分けてください」

「あ、ああ……」

横にしゃがんで話しかける。乙坂さんおとしさかの紙皿を見ると、そこには野菜の山。お肉は一枚も乗っていませんでした。

「野菜しか食べてないじゃないっすか。ほら、お肉も食べてください」

仕方なく自分の紙皿のお肉を乙坂さんおとしさかの紙皿に移す。そのお肉を少し躊躇しながら口に運んだ。

「ああ……いただきます。うまいな！」

「でしょ、このタレも市販のをブレンドして作ったんすよっ。ん？」

普通に話かけているだけなのに、乙坂さんおとしさかはどこか呆気にとられたような間の抜けた顔をして、あたしを見ている。

「どうしたんすか？」

「あ、いや、なんか嬉しそうに話すなって思っ……」

夏の長い日も暮れて、辺りはすっかり夜になった。賑やかなテントを一人離れたあたしは、森の奥の先の高台へ来ていた。遠くには、きらびやかな都会の夜景が広がっている。

二つ並んだ座りやすそうな平たい岩の右側の方に腰をかけ、音楽プレイヤーで「ZHIEND」の曲を聴きながら先ほどの、乙坂さんおとしさかの言葉を思い返していた。

——あたしが、嬉しそう……ですか。

まあ自分が作った料理ものを美味しいって言ってもらえるのは素直に嬉しいですけど。

だけど、もう誰も信じないと心に決めて。人との関わり合いを極力断ち切ったあたしが、そんなことをまた素直に感じるようになったのは、いつからだろう。ついこの間まで、他人からどう思われようとなにも感じなかったのに……。

ちようど今、聴いていた曲が終わりに差し掛かった時、うしろの茂みが動いた音が聞こえた。一定の間隔で聞こえる。誰かが近づいてくる気配。

「——なにか？」

振り向いた先にいたのは、乙坂さんおとせがでした。イヤフォンをしていたから、きつと気づかれていないと思ったんでしょう。不意を突かれる形になって少し動揺している。

「い、いや！ えくと、その……いつも音楽聞いているだろ。どんなのを聞いているのかなって……」

「これですか？」

制服の胸ポケットから紫色の音楽プレイヤーを取り出して、その画面を見せる。

「“ZHIEND”ジエンドっていうバンド」

「知らないな。有名なのか？」

「世界的には人気な、兄が好きだった海外のバンドです」

「……そうか」

事実を話したただけなので特に気にしてませんが。乙坂さんおとせがの方はちよつと違うようで、一人気まずそうにしている。

「どうしました？」

「えつと……それ、ちよつと聴かせてもらっていいか？」

「はあ？ ま、別にいいですけど」

音楽プレイヤーを乙坂さんおとせがに手渡す。彼は隣の岩に座ると曲を聞き始めた。あたしは、夜空に目を向ける。キラキラとまたたく星々が真つ暗な夜空を鮮やかに、それでいてどこか儂げに彩っていた。

夜空から外した視線を隣に戻す。乙坂さんおとせがは目を閉じて、楽曲を聞き入っていた。

「いかがですかー？ 感想のほどは」

「なんていうか……こう、広い場所に一人で立ってるような不思議な気分になる」

「おお〜！ なかなかわかってるじゃないっすか〜！」

あたしは思わず、彼の肩に軽くパンチを入れた。

「ZZH I E N D」の音楽は、すごく……すごく広大で、ひたすら孤独なんです。それは作曲もこなすボーカルが両目の光を失っているからだと思うんです」

いつも持ち歩いている、ビデオカメラの電源を入れる。

「景色がどこまでも広がっていくイメージで……」

録画した動画を再生すると乙坂さんおとしざかを調査していた時の映像が流れた。

「今は、こんなチンケなカンニング魔なんて撮ってますけど。いつか、ZZH I E N D」のPVを撮るのが夢なんです」

外したイヤフォンから漏れる好きな曲にリズムを取りながら鼻歌を歌う。

「それ、プレイヤーごとあげますよ」

「いや、さすがにそれは……」

「能力の仕事で結構貯金あるんで、新しいの買いますから問題ないっす」

「そうか……。じゃあ貰っておきな」

「はい」

テントへ戻って行く、乙坂さんおとしざか。

そしてあたしは、また夜空を見上げる。

小さな子どもの頃、家族でこんな風に夜空を見たことあった気がする。

「キレイですね」

想い出に浸っていると、乙坂さんおとしざかとは別の人の声が近くでした。とても穏やかで、とても優しい声。あたしは振り返ることもなく答える。

「はい。とてもキレイです」

「隣、いいですか？」

「どうぞ」

声の主。宮瀬みやせさんは、静かに隣に腰をおろした。

遙か遠くに見える大都会の夜景と夜空に広がる満天の星々、今日は空気も澄んでいて、まるでミルクを流したような天の川が夜空をに輝きを放つ。ミスマッチなのに幻想的で、それでいてどこか儂さを感じる風景をあたしたちは、しばらく二人並んで静かに眺めた。

「そろそろ行きましようか。お菓子の他に、ケーキも持ってきましたよ」

「えっ、マジですかっ、早く行きましょー!」

先に立ち上がったあたしは、彼の手を取って急かす。掴んだ手から伝わる温もり。火傷を負った左手にはもう包帯は巻かれていない。その代わり口元には小さな絆創膏。あたしを庇って負ったケガ。

——ああ、そうだったんですね……。

いつも自分をかえりみず、他の誰かのために傷つくこともいとわな  
い人。

この人と出会ってから、あたしは少し変わったんだ。

「本気ッ!？」

清潔さを感じさせる白を基調にした研究室の一幕。テーブルを挟んで向き合い、ソファアームに座っている俺より少し年上の白衣姿の青年は、テーブルに両手をつけて、勢いよく立ち上がった。

「ああ、うまく取り入って協力を得られれば、この研究も一気に進む。うまくいけば全てに片が付く。賭けるだけの価値は十分にあるさ」

ガラステーブルに置かれた、小さな小瓶に目を落とす。

「ダメだ、あまりにも危険すぎる! 前回だって——」

「心配するな。ダメだったとしても、またやり直せばいいだけのことだろ」

「だけど、次も戻って来られる保証はどこにもないんだ。もし、戻れなかったら——」

唇を噛み締め、思い詰めた表情<sup>かお</sup>を見せる。本気で心配してくれている、それは痛いほど伝わってくる。けど、俺の覚悟に変わりはない。

——いや、違う。覚悟だなんて、そんなたいそれたモノじゃない。義務だとか、正義感だとか、そういった類いの心情からくるものじゃない。ただ俺自身が、研究とか、実験とか、もうどうしてもよくなりつつあった。だから——。

「その時は、潔く終わるよ」

それにもし、失敗しても大丈夫。目の前に居るのは、誰もが認める本物の天才。俺が居なくても、きつと辿り着く。俺たちが目指している、*“全ての救済”*。その場所まで、必ず辿り着いてくれる。

「俺は、ここで終わってもいい……」

——時に縛られるのは、もう疲れた。

\* \* \*

すぐ近くで、誰か声が聞こえる。優しい声、心地いい声、その呼ばれる声と、軽く体が揺さぶられる感覚で目が覚めた。まだ少し重いま

ぶたを開けて、顔を横に向けると、奈緒が座っていた。

「あ、起きたみたいっすね」

「交代の時間ですか？」

「はい」

隣では高城が、乙坂を起こしていた。夜もふけた就寝前のこと、能力者に対して4時間ごとに交代で監視をすることが決まった。最初は奈緒と黒羽が、見張ることになった。

「大丈夫ですか？ 少しうなされてようですが」

「大丈夫ですよ。少し寝苦しかっただけなので」

「そうっすか？ では、お願いします」

奈緒と話をしている間に、乙坂も起きたようだ。俺たちはテントを出て、テント前の簡易ベンチに座り、頭のうしろで手を組んで暇そうに夜空を眺めている黒羽、姉の美砂に交代を告げる。

「どうしました？ 考えごとですか」

見張りの最中どこか上の空だった乙坂に、高城が訊ねた。

「あ、いや、少し変わった夢を見ていたんだ」

少し変わった夢を見ていた。その言葉に、高城は続けて訊く。

「変わった夢ですか？ どんな夢だったんですか？」

「ん？ なんだか、懐かしい夢。僕と歩未と一緒に歩いていて、隣にもう一人いたんだ。兄妹は、僕たちふたりだけなのに」

二人兄妹という話に少し引っかけたが、高城はそうでもないらしい。

「確かに、少し変わってますね。そういえば、宮瀬さんもうなされていたようですが」

「アメリカにいた頃の夢を、少し」

「そう言えばお前、アメリカで何をしてたんだ？」

「大学に通っていただけですよ」

「それでうなされるとは、どんな激動の日々を送ってたんですか？」

「レポートと実験に追われる日々ですね」

「それは、激動だな」

他愛のない話をしていると、いつの間にか朝日が登り朝を迎えた。

結局昼になっても、「空中浮遊」能力者は姿を見せなかった。昼食を調達するため、近くを流れる川で釣りをすることに。

「うお〜っ！ ニジマスだーっ！ ニジマス釣れたー！」

「くっそ、なかなかやるじゃねーかつ。それよりデカイの釣ってやる！ マス来い、マスっ！」

「私も負けませんよ！」

奈緒が見事、大きなニジマスを釣り上げる。それを見た美砂と高城は対抗意識を燃やし、乙坂は若干呆れ顔でタメ息をつく。

「朝っぱらから元気だな」

「はは、そうですね」

マイペースで釣りを楽しんでいると、川のせせらぎの中に紛れて、ガサツと茂みの奥の方から物音が聞こえた。隣の奈緒の視線も俺と同じ方へ向いた。どうやら、彼女も気がついたみたいだ。直後。

「よしっ！ また釣れたー！」

奈緒は、二匹目のニジマスを釣り上げた。人数分の魚を確保出来たところで、河原で石を組み、集めた枯れ草などで焚き火を作り、釣った魚を塩焼きにする。

「う〜んっ、ニジマスもおいしいな〜」

「ゆさりんさん、これいい感じに焼けましたっ」

「ゆさりんじゃねえよ！ でもまあ、柚咲に譲るか……あれ？」

美砂から黒羽に意識が戻ったところで、高城は片膝をつき、まるで女王にでも献上するかのよう焼き上がったニジマスを彼女の目の前へ持っていた。

「これ、わたしがいただいていたいいんですかー？」

「もちろんですー！」

黒羽は、受け取ったニジマスを口に運ぶ。

「わあ〜、すごくおいしくいっ」

「こういうのも、たまにはいいっしょ？」

「はいっ」

何やら乙坂が、疑念の視線を奈緒に向けているような気がしたが、彼女の方はまったく気にするそぶりは見せなかった。

日が暮れ始めた頃、黒羽が手を上げて奈緒に質問をした。

「あの、今日も泊まりですか？」

「はい、なにか問題でも？」

「えっと、お風呂に入りたいなあ〜って……」

「大丈夫です、用意してあります。どうぞこちらに」

「え、えっ？」

黒羽を用意してあるという風呂に連れて行き、しばらくしてから戻ってきた奈緒に、乙坂が訊く。

「風呂が用意してあるって、本当なのか？」

「お風呂は、女性専用です」

「はあ!？」

「男子は、川で体を拭いてください」

風呂に入れないことがよほどショックなのか、高城は頭を抱えてしまった。

「あああーッ!? ゆさりんが入った後のお湯に入れられないなんてーッ!」

突然頭を振り回し、発狂。それを見た奈緒は間髪入れずに、「ひく なっ!!」と突っ込みを入れる。ほんとぶれないな。ここまで一途でいられるのは、ある意味で尊敬に値する。

「ボディシートなら持つて来てますよ」

「ありがたい。けど、足だけでも浸かってくる」

「そうですね、行きましょう」

真新しいタオルを手に川の浅瀬に足を流しに行く二人に俺は、「先に行つていてください」と伝えて。大きめの石に座つて川を眺めている奈緒に話しかけた。

「友利さん、少しいいですか？」

「はい、なんででしょう？」

浅瀬で顔を洗っている二人から少し離れ、一希さんの現在を知つてからずつと考えていたことを、彼女に告げた。

「一度、アメリカへ戻ろうと思つています」

「なぜですか？」

奈緒の顔つきが変わる。

「向こうに、例の物の手がかりになる物があります」

「それは、なんですか？」

「特殊能力の研究記録。それと、特殊能力者と、保有する能力が記載されたデータ」

「それは、すごいですね。それで、いつ立つんですか？」

「明日の夜。深夜の便で、LAへ立つ予定です」

「明日って。まだ、能力者見つかってないっすよ？」

「友利ともりさんも、気づいていたでしょ。明日には、しびれを切らして姿を現しますよ」

「そう、ですね」

俺と向き合っていた奈緒なほは、川に顔を向ける。ただ俺がそう感じただけで、本当ところはわからないけど、月明かりに照らされた奈緒なほの横顔が、ほんの少しだけ寂しそうに見えた。

「そんな表情かおしないでください。すぐに戻ってきますよ」

川のせせらぎ中「はい」と小さな返事が聞こえた気がした。

\* \* \*

「それでは今日も、昨日と同じローテーションで監視しましょう」

「待て。明日で、もう三日目だぞ？ いったん仕切り直した方がいいんじゃないか……？」

馴れない野外でのキャンプ生活、いつ現れるかもわからない能力者ターゲットを待ち続けるのは正直辛いものがある。家に帰りたくなる乙坂おとさかの気持ちは理解出来る。それはもちろん、奈緒なほも同じで。

「能力者が、ここへ来ることは間違いありません。それにあたしたち生徒会は、何日授業をサボったところで内申に影響はありません。前にも言ったっしょ」

「——だとしてもだつ！ さすがに家に帰りたい、妹がいるんだつ」

「そんなこと知ってますよ」

「じゃあ朝には戻ってくるから様子を見に帰らせてくれ」

「ダメです」

ぴしやりと強い口調で拒否。

「ひとりにそれを許したら、みんなそう言います。みんな、あなたと同じ気持ちです。ですが今は、我慢してください。能力者を守るために――」

その言葉に乙坂は顔を伏せ、高城と黒羽は顔を見合わせる。

「それに大丈夫だと思えますよ。おそらく明日中に決着はつきます」

結局、この夜も能力者は姿を現さなかった。

そして翌日、美砂の能力で火を入れたコンロの網でとうもろこしを焼く。

「また焼きとうもろこしかよ……」

飽きた、と言わんばかりに乙坂は呟いた。

「あのー、あなたたちは、ここで何をしているんでしょう？」

乙坂じゃない、聞き覚えのない声が聞こえた。声が聞こえた方を見る。テントの後方の森の中から、同世代くらいの青いバンダナを頭に巻いた少年が姿を見せた。おそらく彼が探していた、「空中浮遊」の能力者。彼には聞こえないように小声で、奈緒に話しかける。

「予測通り現れてくれましたね」

「はい」

俺に返事をした後、奈緒はバンダナの少年に話しかけた。

「いやー、みんな、家出中なんですよー。理由は様々ですが、意気投合しちゃいました。はっはっは」

実にわざとらしい。けど、バンダナの彼は狙い通りの反応を見せた。あからさまに不快な態度。

「それは、まだここに居続ける……ということでしょうか？」

「はい、ずつつといるつもりです。ここならバレませんから。絶対に」  
「でも、僕にバレてしまいましたね。親御さんも心配されるでしょう？」

バンダナの少年は俺たちに向かってそう告げると、スマホを取り出し操作し始めた。

「あ、警察に通報したら、あなたも一緒に連行されてしまいますよ？」

「えっ、どうして……？」

「だってここ、私有地つすから」

「えっ!？」

奈緒の言葉になぜか他の三人も驚いた。どうやら気づいて無かったらしい。山の入口にあった、ここが私有地あることが記された看板の存在に気づいていなかったようだ。

「あとこれ、あなたですよね?」

三人の反応を気にすることなく雑誌を取り出し問い詰める。

「……… なんですか、それは?」

「あなたが、空を飛ぶ練習をしている所を撮影したスクープ記事です」  
「空を飛ぶって………」

「普通に入れる山だと人目につきやすい。ここは都心からこれなくない距離にあつて、あなたにとつて好都合な山だった。けど私たちが居ついていつこうに帰る気配がない。だから、じれたあなたは姿を現した。あたしたちを追い払い、また飛ぶ練習をするために」

「——生身の人間が空を飛べるわけないだろ! そんな超能力を使えるワケがない! 頭おかしいんじゃないか!」

——釣れた、と奈緒は小さく笑みを浮かべた。

「あれー? あたしー、超能力だなんてひとこと言つてませんよー? てつきりフライングスーツでも着てるのかと。まさかあなた、空を飛べる能力を使えるんですかー?」

「……… ツ!？」

奈緒の問い詰めにしまったと顔を逸らした。あからさまに焦った態度を見せて声を荒げる。

「つ、使える訳ないだろ! 警察には通報しておく。補導されたくないからさっさと帰るんだな!」

捨て台詞を吐き、踵を返し急いで森へ入ろうとする。

「こんな山奥までひとりで来たあなたも十分おかしいと思ひますが?」

「く、栗を拾いに来たんだよっ」

言い逃れをしようとす少年に、俺は追い詰めるように言う。

「今は夏。栗の季節ではありませんよ」

「くっ……！！」

俺に続き、奈緒がビデオカメラを見せながらとどめを指す。

「それに、あなたがこの時間にいる証拠、これで撮っちゃんですけどぉ〜？」

「——厄介なことを！ 寄越せっ！ そいつは消すっ！」

二メートル程の崖から飛び降り着地、同時に彼の姿が消えた。直後、「うわぁーっ!」と姿を消した少年が悲鳴を上げた。

「イエッス！」

奈緒は、してやったりとガッツポーズ。どうやら彼女の罠を仕掛けていたらしい。

「あの位置って……まさか、あの古井戸を落とし穴にしたのか!?」  
「井戸があつたんですか？」

「はい。テントを張るさいに、乙坂さんが片足を落とししたんですが」

高城が簡単に経緯を教えてくれた。なるほど、それをトラップに利用したのか。

「しかし、我々にも知らされていないトラップとは。悪魔のような人だ……！」

この落とし穴は誰にも知らされていないなかったみたいだった。敵を騙すには味方から、とはよくいうがまさにそれ。だがすぐに井戸の底から人影が飛び出してくる。飛び出して来たのはもちろん、あの青いバンドナの少年。これで確定した。彼が「空中浮遊」の能力者だ。

「そりゃ底知れぬ穴に落ちたら、能力使って飛びますよね。おかげで、すごいスクープ映像が撮れちゃいましたっ。ネットに上げちゃおっかな〜？」

「くそが……それを寄越せ!!」

憤怒の表情で、奈緒に襲いかかる。彼女と能力者とでビデオカメラをめぐるって取っ組み合いになった。

「乙坂さん、乗り移ってくださいっ。瞬間移動で倒しますっ！」

「アレ、痛いからやなんだがっ？」

乙坂が躊躇している間に能力者がビデオカメラを奪い取った。

「あつ、くそっ！」

「貰ったっ！」

すぐさま能力を使い上空高く舞い上がる。

——これが、『空中浮遊』。ただ上空へ舞い上がる能力じゃない。鍛練を重ねれば、ほぼ完全に制御が可能な能力。かなりレアな部類の能力だ。

とりあえず能力全容は把握出来た。遮るものがない今なら、まだ射程圏内、「使いますか？」と目で合図を送る。奈緒は、「ちよつと待つてください」と小さく首を横に振った。

「……やるしかないのかっ！」

遙か上空に飛び立つ能力者を見て、乙坂が覚悟を決めた。上空へ舞い上がる能力者へ『略奪』を使い乗り移る。同時に意識を失うしない倒れ込んだ。『略奪』を使うと、ここまで完全に無防備になるのか。

つと、感心している場合じゃない。能力者に乗り移った乙坂が落下してくる。奈緒が、落下地点に向け走り出した。俺も後に続いて落下地点へ走る。落下地点に向かう最中、乙坂が能力を制御し、空中で急停止、森の中へと落ちた。

「うっ、いったい、どうなってるんだ……？」

擦り傷だらけの能力者が倒れている。どうやら意識を取り戻したようだ。

「よくて打撲ってとこか。骨折はしてなさそうですね、結果オーライです。ビデオカメラも無事です。よかったですね、助かって」

「お前らはいったい、何者なんだよ……？」

「みんな、あなたと同じ特殊能力者ですよ」

「——えっ!？」

キズだらけの能力者は、奈緒の発言に驚愕し言葉を失う。その間に、他の三人も到着した。

「この能力は、思春期を過ぎると使えなくなります。でも能力を知られたら科学者たちのモルモットになります。それは嫌ですよね？」  
「……………」

信じられない、と言ったようすで顔を背けて黙りこんだ。無理もな

い、これが普通の反応だ。

「美砂さん、お願いします」

「おらよ」

頼まれた美砂は、俺の時と同様に右手の手のひらから深紅に光る鮮やかな炎を発生させた。

「——なっ!?! そ、そうか……」

それを見て、ようやく納得したようだ。

空中浮遊の特殊能力者は、傷付いた身体を起こし、木を背もたれにして、空を仰ぎ見る。そして語りだした。

「僕にだけに与えられた特別な力じゃなかったのか……。いつかこの力で自由に空を飛べるようになったら『スカイハイ齊藤』の名で、ハリウッドスターになろうと夢見てたのにな」

奈緒はスカイハイ齊藤を名乗った少年に視線を合わせるようにしやがみ、彼の説得を試みる。

「その気持ちも分かりますが、あなた自身のためにも今後その能力は使わないでください。もし、飛んでいる途中に能力が消えたら……」

「そうだな……。わかった。もう使わない」

悲しそうな表情で諭す奈緒に、彼は能力を使わない約束をした。説得は無事上手くいった。「やれやれ、無事に終わりましたね」と、眼鏡を直すしぐさをする高城。「長かったなー!」と、頭の後ろで手を組む美砂。「まったく」おとさかと泥だらけの顔で空を見上げた乙坂。ようやく問題が解決したことで、三人とも肩を荷が降りたのか緊張感が解けたみたいだ。

テントに戻り、素早く荷物を片付けて下山。自転車で帰宅する齊藤を見送る。

「三日間、おつかれさまでした」

「まったく。早く帰ってゆつくりしたい」

と言った、乙坂おとさかの腹の虫が鳴く。

「そう言えば、食べ損ねてしまいましたね。どこかで食事でもいかがですか? 今日は私が、ご馳走します。先日のライブのお礼も兼ね

て」

「えっ、ごちそうになつていいんですか？」

「もちろんです！」

「そうだな、そうしよう」

出国時刻まで時間はまだ余裕はある、俺もうなづく。

「それなら近くにいいところあるんで、そこへ行きましょー」

タクシーに乗って数分後、奈緒なほが運転手に伝えて辿り着いた場所は、山間のスーパ―銭湯。地下から汲み上げられた天然温泉の湯船に浸かつて、三日間の張り込み生活の疲れを癒す。

「お前たち、着痩せするタイプだったんだな」

同じ湯船に浸かる乙坂おとしざかが、俺と高城たかしろうに向けて言った。他の利用客が居ないこともあつてか、高城は疑問に答えた。

「私の能力上、身体を鍛えるしかなかつたんです。制服の下にプロテクターを装備しているとは言え、やはりケガをしない肉体改造が必要でしたからー！」

鍛え上げた二の腕を見せつけるようにポーズをとつて見せる高城たかしろう。

「ふーん、能力を使いこなすために努力してるんだな」

「とまあ、私はそう言った理由です。宮瀬みやせさんは、なぜ、鍛えていらつしやるのですか？」

話を振られた。ただ単に筋トレが趣味とごまかしてもよかつたのだが、この場の和やかな雰囲気も相まって、少し真面目に答えた。

「能力に頼りすぎないため、と言つたところですかね」

「なるほど、興味深い答えですね」

「どういうことだよ？」

「以前申し上げた通り我々の力は、いずれ消滅します。そうなれば普通の人間に戻る訳ですから。つまるところ能力を失つたあとのこと考えた場合、便利である能力に頼りすぎない方がいい、と言う宮瀬みやせさんの判断は賢明かと」

「そういうものか」

「まあ、そんなところですね。では、お先に」

これから露天風呂へ行く二人より一足先に浴場を出た俺は、脱衣場に備え付けのドライヤーで髪を乾かしながら、米国の友人にされた忠告を思い出していた。「能力に頼りすぎると、いずれ痛い思いをすることになる」。対処に遅れて、左手に負った火傷が、まさにその言葉を物語っていた。

着替えを済ませ、出入り口ののれんを潜り抜けたところで、湯上がりの女子二人とぼったり出くわした。

「銭湯って言えば、やっぱりコレっすね」

「ですねーっ」

冷えた牛乳瓶を片手に、施設内の休憩スペースで、乙坂たちが出てくるのを待つ。美味しそうに牛乳を飲んでいる二人は、湯上がりと言うこともあつてか、いつも結んでいる髪を下ろしている。下ろしたところを初めて見るわけではないけど、やっぱり少し新鮮で、それでいてちよつとだけ不思議に思ったりする。

しばらくして男湯の暖簾から出てきた二人も合流し、休憩スペース隣の食事処でちよつと早い昼食を食べることになった。ざる蕎麦を食べる高城に、降霊した美砂が食って掛かったりと賑やかな食事だった。

食後再びタクシーに乗り、最寄りの駅へ。星ノ海学園方面行きの電車に乗り換える。いくつかの路線星ノ海学園の最寄り駅に着いたところで、奈緒が提案した。

「それでは今日は、ここで解散にしましょう。荷物などは、あたしが処理しておきますので」

「そうですか、もう授業も終わる頃ですし。少しゆっくりしたいです」「わたしも、ちよつとつかれました〜……」

「僕も、そうする。歩末が心配だ」

「はい、おつかれさまでした。お気をつけて」

と言う訳で解散、併設のマンションへと帰って行く三人を見送る。三人と一緒に帰らなかった奈緒は、スマホでどこかに連絡を入れると、俺と向き合ってた言った。

「では、あたしたちも行きましよう」

「どちらへ?」

「あなたの家に決まってるつしよ。荷造り手伝います。あ、荷物やゴミはすぐに処理が来ますので、ここに置いていって問題ありません」  
逸らさず、まっすぐ見つめられる。

「どうやら、俺にはうなづく以外の選択肢はないようだ。」

「…… お願いします」

「はい、行きましょう」

奈緒と一緒に六本木の自宅へ帰る。

「タオルにトラベルセット。あつ、下着いれましたか?」

「はい、入れましたよ」

滞在予定は、1週間。正直荷造りもそこまで大変ではない。実はもう、荷造りは終わっている。だから、今しているのはただの確認作業だったりする。

「よっし、これで全部っすね。出立は、0時の便でしたよね」

「はい、そうです」

「あと7時間くらいかー。少し早いですけど夕食にしましょう」

そう言って奈緒は、自宅に来る前に買った食材の入った買い物袋を持って台所に立つと、手際よく料理を始めた。

その後ろ姿を見ながら、パソコンの電源を入れる。届いているメール確認し、いつも通り売買報告書に目を通す。この作業も、今日でしばらくやり納めだ。すべてのメールに目を通し終えた時、「出来ましたー、さあ、食べましょう」と、彼女の声が聞こえた。パソコンの電源を落とし、ダイニングに行く。ダイニングテーブルの上には、見事な和食料理が並んでいた。

「スゴいですね」

「しばらく食べられないと思ひまして」

いろいろ気を効かせてくれたみたいだ。

「ありがとうございます。いただきますね」

「はい、どうぞ〜」

肉じゃがに箸を伸ばし口に運ぶ。

「……………」

「口に合いませんでしたか？」

黙っていた俺に、奈緒は少し不安そうな表情を見せる。

「あ、いえ…………… すごく、おいしいです。本当に」

「よかったです」

白い歯がこぼれ笑顔を見せてくれた。彼女の肉じゃがは、どこか懐かしく優しい味がした。

「でも、こんな短時間でよく作れましたね」

「それは、あれを使いましたっ」

奈緒が指差した方向を見る――なるほど、納得。そこにあつたのは圧力鍋だった。確かにあれなら短時間で火が通る。初めてご馳走してもらった料理といい、弁当といい、どうやら彼女は料理が得意みたいだ。洗い物を終え、時刻は19時を回った。自宅を出るまであと2時間弱。食後のお茶を飲みながら時間が許す限り話をした。

「それで今度、＼＼＼＼＼＼＼＼の日本ライブがあるんすよっ。運良くチケットも当たったんですよ！」

「そうなんですか、よかったですね。ぜひ楽しんでください」

「はい、当然っす！ ライブ会場限定グッズもあるんで絶対ゲットしない……………！」

そんな話をして気がつくと、時計は20時50分を指していた。

「そろそろ、空港へ行きますね」

「あたしも見送りに行きます」

「いや、でも……………」

見送りに来てくれると言ってくれるのは、純粹に嬉しい。けどその反面、併設マンションに戻るのは午前2時を過ぎるだろう。さすがに、それは――。

「ダメっすか？」

「こんな顔をされて、断れる訳がない。

「わかりました。一緒に行きましょう」

タクシーに乗り約30分程で、羽田空港に到着。発着ロビーのベンチに座り、ほとんど会話をすることもなく、搭乗手続きの時間が来てしまった。

「じゃあ、行きますね」

足を止めて振り返る。奈緒なおの元へ戻り、彼女を見つめる。奈緒なおも、同じように見つめ返してくれた。まるで時間が止まったかのように一瞬周囲の雑音が消えた。

「これ、預かってくれますか」

「これは……」

「家の鍵。約束、帰ってきたら一番最初にあなたに会いにいきます」

荷物から取り出した自宅の鍵を、奈緒なおに差し出す。

「…… わかりました。預かります」

「それじゃあ、行ってきます」

「はいっ、行ってらっしゃいませっ」

受け取った鍵を、胸の前で大事そうに握りしめる奈緒なおは、まっすぐな眼差しで見送ってくれた。

手続きを済ませ、国際線の飛行機に搭乗。目的地のLAまで約8時間のフライト。俺は、約1年と半年振りに遠くアメリカの大地へ向かう。

後ろの席に乗客が居ないことを確認して、リクライニングを倒し、窓の外を見る。遠くに奈緒なおの姿を見つけた。

お互い手は振らない。

その代わり俺は、心の中で、*“すぐに帰ってきます”*と彼女に伝えた。

## Episode 21 く揺らぎく

部屋の明かりをつけて、あたしは、まるで糸が切れた操り人形のようにはベットへと倒れ込んだ。三日ぶりに触れる、固くないふかふかなの布団の感触がとても心地いい。

「はあ……」

枕もとの目覚まし時計のデジタル表示はもう、午前2時過ぎを示している。さすがに疲れました。きつと今、目を閉じれば、このまま自然と眠ってしまうだろう。でも、制服のまま寝るわけにいきません。閉じそうになっていたまぶたを開いて、ベットから体を起こす。パジャマに着替えるだけでよかったです、シャワーも浴びることにしました。スーパージェットでお風呂には入りましたけど、また少し汗をかきましたし。汗を流した方が、きつとスッキリ寝付けると思ったからです。

クローゼットから替えの下着とパジャマを用意して、制服のリボンをはどき、上着と一緒にハンガーにかける。スカートのファスナーを下ろす前に、ポケットのスマホとサイフを、ビデオカメラと一緒に机の上に置いておく。

その時、不意にポケットの中で別の物が手に触れた。それがなにかは見なくてもわかる。あの人が、旅立つ前に預けてくれた大切な鍵<sup>モ</sup>。

——なんすかね、これ……嬉しいような、寂しいような、とつても複雑な感情の揺らぎ。これが、思春期というものなのでしょうか。いやいや、あり得ないっしょ。だって、もう誰も信じないって決めたあたしが、こんなにも気持ち搔き乱されるだなんて、そんなこと……。

「——はあ……よし、シャワー浴びよつと」

こんなことを考えるのは、きつと疲れているからに決まっています。こう言うときは、なにも考えずに眠って、気持ちを切り替えるのが一番。と言うことで、シャワーを浴びるためスカートを脱いで、お風呂場へと向かった。

そしてお風呂上がり、明かりを消して真っ暗な部屋のベット上で改

めて横になっている。でも、体は確実に疲れているにも関わらず、あたしはなかなか寝付けないでいた。考えないようするというのは、言い換えれば考えるのと同じことで……。

あたしの頭の中は今、いろいろな複雑な想いがぐるぐると渦巻いていた。

「うくん……」

ダメだ、眠れない。大きなタメ息をついて、枕もとの充電中のスマホを手取る。時間は既に丑三つ時を回っていた。

飛行機が離陸してから三時間、今どの辺りを——つて、こんなことばかり考えるから寝られないんすよ。あ、そうだ。別のことに集中すればいいんだ。

「ひさしぶりに撮りますか」

体を起こして、カーテンを開ける。柔らかな月の光が室内を照らす。月明かりを頼りに、机に置いたビデオカメラを手にはベツトに戻り、カメラの録音機能を使って、恒例の日記をつけることとした。

「生徒会活動日誌くつ。えっと、今回は——」

撮り損ねた日から、今日までに起きた出来事を順番に記録していく。そんなことをしている間に、いつしか自然と眠りに着いていた。

\* \* \*

朝、数日ぶりに星ノ海学園へ登校。今日からまた授業を受ける日常に戻る。ただ、授業の内容は、月末の期末試験に向けてのものに変わっていて。上からはまだなんの指示もありませんが、また勉強会を開かないといけないのかなーっと思っていた矢先、午前の授業が終わり昼休みに入るのとはぼ同時にスマホが振動した。着信は、メールの受信。内容は、「今、向かっている」とひとことだけ書かれている。協力者、熊耳くまがみからのメール。それはつまり、新しい能力者が見つかったということ。

「生徒会室へ行きます。準備してください」

「あ、はい、わかりましたー」

お弁当を広げるところだった隣の席の黒羽くろばねさんに声をかけ、教室の後方の席でダベっている二人の男子の机へ向かう。

「協力者が現れます」

「了解しました。生徒会室へ行きましょう」

「ハア、またかよ」

三人を引き連れ、生徒会室で熊耳くまがみが現れるのをお昼を食べながら待つ。話をしている三人の話題が、深夜に渡米した宮瀬みやせさんの話になった。

「どうしたんでしようね?」

「ただの病欠じゃないのか?」

「でもでも、昨日は元気そうに見えましたよ」

——ん? みんなは知らないんだ。あれ、今ちよつとだけ……。

「もしかして、急な発熱でしようか?」

「ありえますね。夏風邪はやつかいと言いますし、訊いてみましょう」  
病気じゃないかと心配する黒羽くろはねさん。連絡を取ろうと、高城たかしようがスマホを手を持った。

時差を計算すると今、向こうは夜。この時間の連絡は迷惑になりかねません。なので、高城たかしようが連絡を入れる前に話しました。

「ご心配なく、病欠ではありません。宮瀬みやせさんは、アメリカへ行きました」

生徒会室が、しんと静まり返る。

沈黙を破つたのは、乙坂おとしざかさん。

「はあー!? アメリカ!」

「はわわっ」

「な、なんと。いつですか!」

「今日の深夜です。0時過ぎの便で立ちました」

みんな驚きを隠せない様子。寝耳に水ってやつですね。

「0時ってことは、下山したその日に行ったのか……って、友利ともりは知ってたのか?」

「本人から聞きました」

「なぜ、我々には教えてくれなかったんですか?」

「話す機会がなかっただけです、急遽決まった話だったそうで」

と言うか、てつきり本人から聞いているものだ。

「それで、何しに行ったんだ？」

「大学に用事があるみたいですよ。一週間後には帰ってきます」

渡米の目的は特殊能力に関する資料とはいえ、彼の事情を知らない三人には話せる内容ではないので、伏せておくべき事案。

「あのく、友利さん？」

「なんですか？」

黒羽さんが近づいて来て、なぜかじつと見つめられる。にしても、ホント作り物みたいに整った容姿。胸も大きいし。

「何ですか？ ジロジロと」

「いえいえ、何でもありませんよ。えへへ」

また、この間と同じニコニコ顔。いったい何なんですか、この屈託のない笑顔は。

黒羽さんに視線を向けていると、突然、生徒会室の扉が大きな音を立てて開いた。どやら来たみたいですね。思った通り、現れたのは全身ずぶ濡れの男子生徒。生徒会の協力者、熊耳。

「能力は——『崩壊』」

テーブルの地図上に濡れた指先から一滴の水を落とし、それだけを告げると、生徒会室を出ていった。

「『崩壊』か、どんな能力なんだ？」

生徒会長の椅子から立ち上がって、テーブルへ向かいながら話す。

「さあ。言葉からして狙ったものを壊せるとか、そんなあたりでしょう。しっかし……」

——破壊じゃなくて、崩壊というところがちよつと気になりますね。どちらにせよ、名称からして危険な能力であることは間違いなさそうですが。

「おや。ここは、併設の我々のマンションですね」

高城が、地図に落とされた水の位置を見て言った。

「なんだ、能力者がいて当然じゃないか」

「そうでしょうか。今、この時間にマンションにいるんですよ。不思議に思いませんか？」

「何が？」

「大人は特殊能力者に成り得ません。思春期にしか発生しませんので」

「あ、そうか……」

まったく、どうでもいい悪知恵は働くのに。こういうところは疎いですね。

「ということは、今マンションにいる生徒さんですね」

「はい、正解。風邪でも引いて欠席してるとかでしょう」

「やったー、ゆさりん、友利さんにほめられましたーっ」

「やりましたね、ゆさりん！」

ハイタッチを交わす二人のすぐ横に立つ、乙坂さんの表情がこわばった。二人のテンションに引いている感じじゃない。これは、何かありますね。

「どうしました？ ただならぬ動揺のしかたですね。話してみてください  
さっ」

「……妹が、熱を出して家で寝てる」

「歩未ちゃん、ですか」

高城を押し退けて、黒羽さんを見る。

「やっぱり、兄妹だと両方発症することが多いのかも…… ですね」  
「はい？」

「ま、あたしたちは科学者ではないので詳しいことはわかりません。お見舞いも兼ねて、歩未ちゃんが本当に能力者になってしまったのか探ってみましょう」

「ちよつと待て。全員で来る気か？ 相手は病人だぞ」

「それもそうですね。じゃあ、あたしだけいきますか」

「ああ、そうして——」

言いかけた乙坂さんの視線が、突如、高城に向いた。その視線を直感的にマズイと感じ、咄嗟に乙坂さんの気を逸らしにかかる。

「歩未ちゃんは、プリンが好きですか？」

「……はあ？」

「だから、プリンっすよ、プリン。お見舞いは必要っしょ？」

「そりゃあ好きだと思っけど……」

よし、ひとまず気を逸らすことには成功。次は、と。

「そうですか。では高城<sup>たかしよう</sup>、このお店のプリンを買ってきてください」  
スマホの地図アプリを見せながら、都心に看板を掲げる有名店を指定する。

「了解いたしました。では、さっそく——」

「あ、瞬間移動は禁止。ここのお店のプリンは、とても柔らかくなめらかな食感で有名なので慎重に運んでください」

「な、なんと……！！ 了解しました。では行ってまいります」

瞬間移動の使用を制限された高城<sup>たかしよう</sup>は、やや重い足取りで生徒会室を出て行く。指定したお店はここから結構遠いところ。それに平日でも長蛇の列が出来ることもあるような人気店、時間は稼げます。

「これで満足ですか？」

「えっ!？」

この反応は間違いないかったみたいですね。本来の能力を知らないとはいえ、高城<sup>たかしよう</sup>の能力を奪われる訳にはいきません。対策は後日考えるとして、今日のところは未遂で防げたのでよしとしておきましょう。

「さて。では、あたしたちも行きましょう。黒羽<sup>くろばね</sup>さんも、行きますよ」

「はい、わかりました！」

乙坂<sup>おとさか</sup>さんの部屋へ向かうため早退して校門を出る。信号待ちの間に出された黒羽<sup>くろばね</sup>さんの要望により、向かいのコンビニで買い物をしていくことになった。

コンビニに入ると、乙坂<sup>おとさか</sup>さんはレトルトのお粥とスポーツドリンクを買い物カゴの中へ入れていく。夕飯は、お粥にするそうです。そこであたしは、あたしたちも一緒に食えることを提案しました。最初はちよつと渋った様子の乙坂<sup>おとさか</sup>さんでしたが、黒羽<sup>くろばね</sup>さんの「親元を離れて、ひとりぼっちのご飯はさみしい」という素直な想いを聞いて、提案を受け入れてくれました。

「あ、これもお願いしまーす」

「なぜ、なめ茸……?」

会計の途中に「なめ茸」の瓶をみつつ置くと、いぶかしげな顔をさ

れた。

「だって、なめ茸最強じゃないっすか！ 白いご飯にはもちろん、お粥との相性も抜群なんすよっ！」

「それ、ただの好物だろ」

「いいじゃないっすか、おいしいんだから。あ、ここの会計はあたしが出しますので」

「……いいけど、なんか悪いな」

「いえ、問題ないっす。お見舞いでも思っていただければ」

黒羽さんも、レジの上の値の張るクッキーの缶をお見舞いに買つてますし。会計を済ませたあたしたちはそれぞれなめ茸の瓶、お粥と飲み物、クッキー缶の袋を持ち、併設のマンションへ向かって歩く。乙坂さんは、自宅の前に着くと足を止めて振り向いた。

「妹は、お前の相当なファンだ。自分の部屋の壁にデカイポスターを何枚も貼ってる」

「それはますます会うのが楽しみですっ！」

「だが！」

テンションが上がった黒羽さんに待ったをかける。何かと思えば、歩末ちゃんは今、体調不良で休んでいるからあまり興奮させないようにとの要請を受け、黒羽さんは顔バレ対策の大きなサンングラスと白いマスクで変装した。バレバレな気がしてならないのは、あたしだけでしようか。乙坂が納得しているのでいいとしておきましょう。

「じゃあ、ここでもちょっと待っていてくれ」と言っ、乙坂さんはひとりで部屋に入っった。

「あの一、友利さん」

黒羽さんが、変装用のマスク外して話しかけてきた。そう、まるでドアが閉まって二人きりになるこの時を待っていたかのようなタイミングで。

「何ですか？」

「告白したんですか？ されたんですか？」

「はあ？」

まったく予想だにしていなかった質問に、あたしは間の抜けた返事

をしてしまった。そんなあたしを見て、黒羽くろばねさんは不思議そうに小さく首を傾げる。

「あれ？ 付き合ってるんですよね？」

「誰と誰がですか？」

主語が抜けているので、いまいち話の概要を掴めない。

「友利ともりさんと、宮瀬みやせさん」

「いえ、付き合ってます」

答えると同時に、無意識に黒羽くろばねさんから顔を背けてしまった。

「えっ、そうなんですかーっ？」

「はい、って何でそんな話になってんすか!？」

顔を上げて、黒羽くろばねさんを問い詰める。

「えーと、いろいろ噂うわさになってて……」

「噂？ いったいどんな噂うわさすかつ？」

たじろぎながら、辿々しく話し出した。

「手作りのお弁当を持って、二人で生徒会室に……」

——ああそっか、あれで勘違いされたんだ。迂闊うくわんでしたね。

「あれは、ただのお礼です。前日に晩ご飯をご馳走していただいたそのお礼。あなたもありました。ま、早退したので持ち帰ってしまいましたけど」

「そうなんですか？」

「はい、そうなんです」

この話はこれでおしまい、と思ったなら——。

「でも、好きですよ。宮瀬みやせさんと一緒に居る時の友利ともりさん、とても楽しそうに笑ってますよ。一緒にお買い物していた時とか本当に楽しそう」

「……なんすか。それ……」

楽しそうに笑ってるって、あたしだって笑うくらい普通に。それに好きって……恋とか、そういう類いの感情のことでしょうか？

あたしが、恋……？ ああもうダメっすっ。また夜みたいなのに、いろんな感情モが頭の中を駆け巡る。

「あっ、お邪魔してすみませんっ」

葛藤していたところへ、黒羽くろばねさんとは違う女子の声。歩未あゆみちゃんと同じ中等部の制服を着た女の子と、彼女に手首を掴まれて、若干痛そうな顔をしている男子の二人。歩未あゆみちゃんのクラスメイトでしょうか。女の子は掴んでいた男子の手首を離し、かしこまって会釈をした。

「大丈夫ですよ」

それに、あたしにとっては頭を切り替えられるいいきっかけになった。

「みんな、歩未あゆみちゃんの友だち？」

あたしは両膝に手を添えて、会釈をした女の子に視線を合わせて訊ねる。

「はい、友だちですっ。お見舞いを兼ねてプリントを持ってきた所存でありますっ」

「そっか〜」

「お姉さま方も、あゆっちのお知り合いですか？」

「うん、友だちですよー。お見舞いに来たんです」

女の子と話していると、また玄関が開いた。今度は、白いヘアバンドをつけた女の子。その子は黙ったまま会釈をして、この場を離れて行く。

「小西こにしさんっ？ あっ、お姉さま方、失礼しますっ。ほら、行くぞっ！」

「あ、だから痛いって！ 待ってっ」

女の子は出てきた時と同じように、男子を引っ張って先に行つた小西こにしと呼ばれていた女の子を追いかけていった。

「なんだったんでしよう？」

「さあ、とにかくお邪魔しましょう」

あたしは、乙坂おとさかさんが呼びに来る前に、黒羽くろばねさんを促して玄関のドアを開けた。

\* \* \*

「悪夢の内容を聞き出してください。『崩壊』の手がかりに繋がるかもしれない」

歩未あゆみちゃんから眠っている間に悪夢を見ると聞き、乙坂おとさかさんに悪夢

の内容を聞き出すようお願いする。

「待て。歩未あゆみが特殊能力者だって証拠は、まだないじゃないかつ！」  
「だからこそです。わからないから探ってほしいんですよ。それに――」

ずっと引つ掛かっていた「破壊」ではなく、「崩壊」というワード。

「崩壊…… 危険な能力の気がしてなりません」

乙坂おとしざかさんの顔色が変わった。

もしかしたら、あたし同じ不安を感じていたのかもしれない。

「ですので聞き出してください。歩未あゆみちゃんのためにも」

「…… わかった。それとなく聞き出してみる」

「はい。あ、それから、もし熱が下がっていったとしても明日は休ませてください、念のために。現状では、情報量が少なすぎます」

「わかってる。そもそも最初から休ませるつもりだ」

さすがシスコンっすね、過保護と言うか。

自分の部屋に帰る途中、マンションの通路で高城たかしろうと会った。疲れきった表情かおをしている。

「おつかれっす」

「本当に疲れました、まさかあれほどの行列とは……。それで、お見舞いの方は？」

「もう済みました。能力者になったかどうかまではまだ不確定。一応、乙坂おとしざかさんには探るように指示を出しておきました」

「そうですか。これは、どうしましょう？」

プリンプリンの箱を持ち上げて見せた。て言うか買えたんすね。

「ご自由にどうぞ。領収書」

「こちらです。こちらは明日、みんなでいただくことにしましょう。ではまた」

「はい、おつかれさまでした」

領収書を受け取り、お互い自宅へ帰る。

シャワーを浴びてパジャマに着替えたあたしは、昨夜と同じようにベットにの転がった。まくら元で充電中のスマホを手取る。着信もメールも届いていない。どうしてでしょうか、少しだけ切ない気持ち

ちになった。

——黒羽<sup>くろぼね</sup>さんが、あんなこと聞いてきたせい、ですよね……。

そんなことより今は、崩壊の能力者の対応に集中しないと。

それなのにあたしは、電話帳のアプリを起動し表示された名前に問いかけていた。

「こんな時、あなたならどうしますか……？」

## Episode 22 可能性

長いフライトを経て、遠い異国の地、米国L.Aに降り立った。

ここから目的地のCA大学まで約600kmの長い道のりを移動することになる。

「Hey! Show!」

国際線の発着ロビーへ出ると、ダークブラウンの髪にブルーの瞳、整った顔立ちのスーツ姿の青年に声をかけられた。

彼は、ニール・サンティ。共にCA大学に通っていた友人であり、全米でも指折りの若き天才遺伝子工学者。

久しぶりの再会を祝して、どちらからともなく自然と握手を交わした。

「突然日本に帰ったと思えば、今度も突然戻ってくるって聞いて驚いたよ」

先日送ったメールは、彼に宛てたもの。急遽アメリカに戻ることに、その目的を伝えた。空港からは鉄道で移動するつもりだったが、はるばる迎えに来てくれた。

「すまない。例のファイルが必要になったんだ」

「わかってるよ。タイムが、車を用意してくれてる。急ごう」

空港の外へ出ると、タクシーやバスを含めて多くの車が停まっていた。その中の一台の車の横に、長身で自然なブロンド髪の青年が腕を組んで立っている。サングラスをかけているから顔ははっきりとは認識できないが、そのスマートな立ち姿ですぐに彼だとわかった。

「タイム、ひさしぶり」

「やあ、ショウ。ひさしぶりだなー」

サングラスを外した下には、まるで海のようなブルーの瞳が輝き、俳優と言われても疑わない程の整った容姿。彼は、タイム・バートン。ニールと同じく、大学時代からの友人。そして、元能力者。

「挨拶は後だよ、さあ乗って!」

再会を懐かしむ俺たちを、ニールが急かす。

「そうだな。タイム、頼む」

「オーライ！ 4時間で行ってやるよ！」

「安全運転で頼むよ」

目的地の大学へ向かって、ティムが運転する車はフリーウェイを高速でひたすら進む。その車内で、質問攻めが始まった。

「しかし、急にどうしたんだい？ あれが必要だっただなんて」

「助きたい人がいるんだ」

「助きたい人？」

「これだろ」

「誰？」と首を軽く傾げるニール。一方ティムは、片手をハンドルから離して、後部座席の俺たちに見えるように小指を立てた。

「ああ、なるほど。そういうことか」

「ほら、当たり前だろ？」

「結果的にはそうなるかもな」

「ほら、やっぱりそうだ！」

ティムはこういう話になると、すぐに面白がって茶化してくる。

「茶化さないでくれ。真面目な話なんだ」

「いいことじゃないか。なあ？」

「オレもそう思う。帰国した時と比べたら、ずっといい顔してる」

本気で心配してくれていたと改めて感じた。

それは同時に、二人にとつてあの頃の俺はそんなにも脆く、危うく見えていた証拠。自覚がなかった訳ではなかったけど、あの頃の俺は生きることに執着を持ってない時期だった。

そんな俺を変えてくれたのは――。

「俺の恩人なんだ」

「へえ、シヨウに恩を売るなんてすごいな。その子」

「つたく、こんなことを聞きたいんじゃないだろ？」

「そうだね。じゃあ、さっそくだけでも本題に入ろうか」

ニールの顔と声色が真剣なモノに変わった。

「いくつ見た？」

「6……いや7だな」

「内容は？」

ひとつずつ、その時の状況も思い出しながら話す。

「発火、口寄せ、瞬間移動、念動力、電撃、空中浮遊。そして——略奪」  
「略奪って……」

「まさか、他者の能力を奪う能力なのか!？」

略奪という途轍もない能力に、車内の空気が一変。

「俺も驚いた。もしかしたら、神にもっとも近いのかもしれないな」

「欲しいな、その能力<sup>サンプル</sup>。協力は得られそう?」

「どうかな。能力者本人が、自分の本当の能力を把握していないんだ」  
「いろいろ事情があるんだね」

「ああ」

車内の空気が落ち着いたところで「ところで、口寄せってなんだ?」  
と、タイムから質問が上がった。

「そうだな。わかりやすくいうと、降霊術。こつちだと、ネクロマン  
シーってやつかな。降ろせる対象は一人だけで、しかも降ってくる方に  
実権ある」

「へえ、それはまたユニークな能力だね」

「それで、そっちは?」

研究の成果を訊くと、バックミラーで目を合わせた二人は意味深に  
うなづいた。

「目的の物は完成してない」

「だけど、見つかったよ。シヨウが長年探していた、あの能力者——」

「本当か!？」

「マジだ、帰ってくるってメールが着た直前にな」

「すぐにでも知らせたかったけど、ね」

「ああ、わかってる」

情報漏洩は絶対に避けなければならない最重要事項。だけど、サブ  
ライズもいいところ。まさか、本当に手がかりが見つかるだなんて――  
。

「ただ、能力はもう使えないみたいなんだよ」

「……そうか、能力を失ったのか」

あれから既に二年近くが経過している。年齢次第で、その可能性は

十分にあると思っていた。

「いや、能力自体は持っているみたいだ。だけど、使えない状態になっているらしい」

「どうにせよ、やっかいだな」

「それでもないよ、使えないなら別の方法で使えばいいんだから。それこそ、『略奪』で奪うとかね」

「そうだな。そのためには、まず急がないとな」

「うん、頼むよ！ ティム！」

「オーケー！　ところで、彼女の能力はどれなんだ？　彼女も能力者なんだろう？」

「あ、それ、オレも気になるな」

「……… 知らん」

言われてみればまだ、彼女の能力を知らない。

たまたま能力を使う場面に出くわさなかつただけのことなのかもしれないけど、少しだけ寂しい気持ちになった。

「本当に4時間で着いたな………」

「90マイルでとばしたからな！」

「死ぬかと思ったよ………」

「ニールは、大袈裟だな！　H A H A H A！」

アメリカのホームコメディのように笑う。

「ありがとう、助かったよ。ティム」

「大学へは、いち度休んでから行こう」

近くのホテルで仮眠と昼食を摂り、長い年月を過ごした母校のCA大学へと向かう。広大なキャンパスの一番奥に構える遺伝子工学の研究室のロッカールームで、ひさしぶりに白衣に袖を通す。

「じゃあ、検査を始めるよ」

「ああ、頼む」

血液、脳波等の検査を順番に受ける。

「はい、終わりく。結果が出るまで時間掛かるから見てきなよ」

「そうさせてもらう。いくつ？」

「No. 511だよ」

「了解」

ニールに目当てのファイル番号を聞いて、ラボの地下へと潜る。研究所の中でも最深部に位置する場所に目的のファイルがある。重要記録が保管されているだけあって、そのセキュリティは嚴重だ。指紋、音声、虹彩認識などの嚴重なセキュリティを越えた先にある、俺を含めて数名しか入れない部屋の中には、ハッキング対策のため旧型パソコンと大量の8インチフロッピーが保存されている。

「No. 511.....」

ニールに教えてもらったナンバーのフロッピーを捜し出し、旧型パソコンへ挿入して、そのデータを閲覧する。

「——本当にあった。あの能力者.....！」

パソコンの画面に写し出された、能力と能力特徴と長年ずっと探し続けていた能力——“タイムリープ時空移動”を保有する能力者の名前が記されていた——SHUNSUKE OTOSAKA.

\* \* \*

アメリカに来て三日目、今日も朝からラボの地下へ潜り、大量のデータの中から日本へ持っていくため厳選して資料を作成している。

「シユンスケ・オトサカ。ようやく見つけた、時を操る能力——“タイムリープ時空移動”の能力者、か.....」

例のフロッピーに記録されていた情報は有益なモノだった。

まずは、能力について知れたこと。“タイムリープ時空移動”は文字通り、時間を遡ることが出来る能力。しかし、膨大な情報を持ったまま瞬時に時間を巻き戻すため、目に多大な負荷がかかる。能力が使えない理由は、年齢による喪失ではなく、能力を使いすぎたことによる代償により視力を失った可能性が高い。

「道理で、戻らなかつた訳だよな.....」

思わず漏れるため息。

命懸けで身につけたチカラも意味がなかった。いや、意味はあった。お陰で恩人である、一希さんかずきの現状を知れることができた。タイムリープ時空移動を使えば、一希さんかずきを救うことができる。

そのために俺は——違う、一希さんだけじゃない。タイムリープ時空移動の能力

者と同じ「オトサカ」の名を持つ彼の協力があれば、可能性が見えてくる。長い年月をかけて成し遂げようと奔走している「救済」への光が。

「シヨウ」

突然、後ろから声をかけられた。ここに入れる人間は限られている、俺を含めて片手で数えられる人数しかない。振り返ると、その中の一人が立っていた。

「ニールか。どうした？」

「伝言。日本から電話だつて」

「日本から？ こんな時間に？」

「うん、トモリつて女の人だつて」

「友利？」

「なんだか急ぎの用件みたいだよ」

「わかった、ありがとう」

ニールに礼を言つて、地上へ戻る。

作業していた地下は、セキュリティの関係で携帯の電波も届かないから大学に掛けてきたといったところだろう。

しかし、時差を計算すると日本は今、深夜帯……急を要する事態が起こつたとも。

「来たか、3番な」

「ありがとう」

「ラブコールか」と、戯れ言が聞こえた気がするが、おそらく疲れからくる幻聴だろう。一度しっかり睡眠をとつた方がよさそう。彼の言葉を無視して、内線3番のボタンを押し、デスクの受話器を上げる。

「宮瀬です」

『友利です。急にすみません』

三日ぶりに聞いた奈緒なほの声には明らかに覇気がなかった。やはり、何かあつたのだろう。

「構いませんよ。どうしました」

受話器越しでも感じる空気の重さが確信させる。

何かが起きた、それも相当重大な事件が。

『歩未ちゃんあゆみが、校舎の崩壊に巻き込まれて亡くなりました』

『歩未さんあゆみが——……』

突然の報告に、思考が止まってしまった。

『…… 確証が持てなくても早急に保護すべきでした。あたしの判断ミスが招いた結果です』

今、安易な励ましは慰めにもならない。

彼女の心労はもちろんのこと、何の前触れもなく唐突に、家族を失ってしまった乙坂おとしかの心情は計り知れない。一度しか合ったことのない俺が、これほど動揺しているのだから。腐るか、壊れるか、自暴自棄になることも。

『乙坂さんおとしかは今、入院しています。現場に駆けつけた際ケガを負いましたが、命に別状はなく、明日には退院できるそうです』

「そうですか、分かりました」

『あたしは、彼を見守ります。立ち直れるまで、ずっと——』

確かに、誰かが傍にいたべきなのは間違いない。

デスクに置いた、作りかけの資料に視線を向ける。

——いや、希望は残っている。可能性を見せれば、きっと立ち直れる。幼い頃、一希かずきさんに救われた、俺と同じように。

『友利さんともり。今日中に戻ります、待っていてください』

『——はい』

彼女の返事を聞いて、受話器を置いた。

「タイム。車を出せるか？」

「訳ありみたいだな。いつでも行けるぜ」

「…… すまない、頼む。一度地下に潜って準備してくる。車を回しておいてくれ」

「オーケー！ 日本行きの航空券も手配しておくー！」

車のキーを持った彼は、駐車場へ駆け出して行った。俺も支度を済ませるため、ラボの地下へと潜る。地下に入ると俺の様子の異変に、ニールはすぐに気がついた。

「どうしたの？ 深刻な顔してる」

「日本でトラブルが起きた。今すぐに帰る」

「そっか。なら手伝うよ」

「ありがとう、助かるよ」

ニールの手を借りて、作りかけのファイルを完成させる。そのファイルを手を持ち、彼と共に急いで地上へ戻りタイムの元へ走る。地上では既に玄関前に車が用意されていた。その車に乗り込む。

「シヨウ、検査結果。脳波、血液、その他、異常なし！でも油断大敵だからね」

「ああ、ありがとう。じゃ、行くよ」

「うん、またね」

再開した時と同じように、ニールと握手を交わす。

「タイム、頼む」

「オーライ！」

ニールに別れを告げて、タイムと共に空港へと向かった。

\* \* \*

緊急帰国した俺は、奈緒なおと合流するため自宅がある六本木へ急いだ。六本木タワーの入り口で彼女と合流、一度自宅に帰り、星ノ海学園の併設のマンションへ。星ノ海学園生徒会長の権限を使った彼女が管理人からマスターキーを借り、俺たちは乙坂おとしざかの部屋へ向かった。

彼の部屋の前には、先客が居た。黒羽くろぼねと高城たかじょうの二人。うつむき加減で肩を落とす彼女の頭に軽く手を乗せる。

「えっ？ あ、宮瀬みやせさん！」

「どーも」

「何してんすか」

——ひくなっ！ と言いたげなジト目で奈緒なおから痛い視線を貰う。

「宮瀬みやせさん、いつ帰っていらしたんですか？」

「つい、2時間ほど前です」

「乙坂おとしざかさんの様子はどうつすか？」

「それが……」

心配そうな表情かおをして、黒羽くろぼねは固く閉ざされた玄関の扉を見る。言葉につまる彼女の代わりに、高城たかじょうが答えてくれた。

「見ての通りです。柚咲ゆささんが元気が出るようにと、クリームシ

チューを作ってくれたのですが。やはり、時間が必要なようですね」「いえ……………」

足下にぶちまけられたクリームシチューは、それか。ただこれは、乙坂おとしがのしわざではなく、降霊した美砂みさが自身のやるせなさをぶつけた結果。

「なるほど。友利ともりさん、お願いします」

「はい」

奈緒なおは管理人から借りた鍵を使い、ドアのロックを解除。

「では、行きましょう」

「お二人は、ここで見張りをお願いします。逃げられると厄介ですので」

「わ、わかりました!」

「お任せください。乙坂おとしがさんをお願いします……………!」

二人を残し、部屋に上がる。奈緒なおの案内で廊下を進み、リビングに入ると、フードを被り暗闇の中虚ろな瞳でテレビ画面を見つめる乙坂おとしががソファーに座っていた。

まるで精気のないその姿を見て、責任を感じてた彼女はやや唇をかむ。言葉をかける代わりにぼんつと頭に手を乗せ、部屋の電気を点けてから、彼に話しかける。

「乙坂おとしがさん」

「…………… 何だお前、帰って来たのか」

「ええ、つい先ほど。事情を聞きました」

「あ、そう。で?」

「覚悟はありますか?」

「…………… はあ?」

「全てを犠牲にしても、歩未あゆみさんを救う覚悟はありますか?」

「何訳分かんない言ってるんだよ? お前?」

「歩未あゆみさんを救う手段があると言っています」

「ふ、ふっざけんなよ!? お前!? 歩未あゆみは、歩未あゆみは死んだんだよッ!」

胸ぐらを掴み上げ、目から大粒の涙を流しながら怒鳴り声を上げる。感情を露わにする彼に対し、アメリカから持ってきた一冊のフア

イルを広げて見せる。

「これを見ろ」

「んだよっ!？」

「時を操る能力、時空移動の能力者だ」

「タイムリープ?」

「そうだ。この能力を使えば、記憶を持ったまま過去へ戻ることができる。妹さんを救える可能性がある」

胸ぐらから手を放して、まだ焦点が定まらない目でファイルを見つめる。

「ホント、なのか……?」

「可能性はあるだけだ。当然確実じゃない」

「でも、ゼロではありません。賭ける価値はあると思います」

「友利……」

奈緒の言葉を聞いて、少し眼に力が戻った気がした。

「いいか、乙坂。三日待つ。死を受け入れるか、このまま腐るか、可能性に賭けて覚悟を決めるか。お前自身が考えて選べ」

「時空移動」の能力者に関するファイルをテーブルに置いて、俺たちは部屋を後にした。外に出るとさっそく、高城が心配そうな顔をして訊いてきた。

「どうでした? 外まで怒鳴り声を聞こえましたが」

「可能性は見せた。あとはアイツ次第だ」

「慰めなかったんですか?」

高城の横から、黒羽が顔を出す。

「今の状態でそんなことしても神経を逆撫でするだけ。お前に何が分かるってんだって感じに。こういう時は思考が停止する。今重要なのは、考えさせること」

例えそれがどれ程残酷なことであろうとも。

「なんか……今日の宮瀬さん、優しくない。優しくないですーっ」  
むうーつとふくれっ面になった。怒った表情も可愛らしくて思わず笑いそうになる。

「ちゃんと戻ってきたら、笑顔で迎えてあげてください」

俺の言葉に「はいっ」っと笑顔で返事をしてくれた。横を見ると、奈緒がめんどくさそうな顔をしながらダメ息ついていた。

「とりあえず、今日は帰りましょう」

「そうですね」

「はい。あつ、シチュー片付けないと」

管理入室に鍵を返し、代わりに清掃道具を借りる。掃除が終わったところで高城と黒羽は自宅へと帰っていった。

「じゃあ俺も一度帰りますね」

「ダメです」

「なして？」

「乙坂さんが逃げ出したら、あたし一人では押さえられませんから。今日はここで一緒に見張りましょう」

「わかりました」

「では、クッションと食べ物を用意して来ます」

奈緒はそう言って、自宅へ歩いていった。清掃道具を返して戻ってくる、彼女もちやうど荷物を抱えて戻ってきた。

「すごい荷物ですね」

「夏とはいえ雨ですから、羽織れるものも持ってきました」

レジャーシートの上に長座布団敷いて並んで座る。クッションをフェンスの間に挟んで背もたれにして、一枚の羽織を横にして膝掛けした。落ち着いたところで彼女は、前に弁当を作ってくれた時と同じピンク色の包みを取り出して、膝の上に広げた。

「どうぞー」

「ありがとうございます」

手渡されたのは、おにぎり。その具材は初めて見る組み合わせ。

「これ、なめ茸ですか？」

「はい、なめ茸と小ネギの混ぜこみおにぎりです」

「いただきますね。あ、おいしい」

「でしょっ！ なめ茸、最強っすからっ！ ご飯はもちろん、お粥とも抜群の相性で……」

上機嫌でなめ茸の魅力を語っていた奈緒の言葉が詰まった。

「どうしました？」

「歩<sup>あゆみ</sup>未ちゃんと一緒に食べたお粥にも、なめ茸を……」

「大丈夫、また一緒に食べれます」

「そうっすね。それ見せてください」

「どうぞ」

おにぎりを片手にファイルの写しに目を通し始めた。その目はとても力強かった。

## 生徒会活動日誌 3

生徒会活動日誌。

さて、今日も記録をつけますかー。

黒羽くろばねさんのライブ当日、電撃の能力者の企みを阻止するため招待者チケットでライブ会場に潜入しました。

想像以上の熱狂ぶりに若干戸惑いつつも、能力者に注意を払っていると、高城たかしろうがそれらしき人物を発見しました。

その人物は、あたしと目が合った瞬間鉄製の仕切りに握り、能力を発動させ、ステージ上の黒羽くろばねさんの真上の照明機材を落下させました。

炎上するステージを、ただただ見つめることしか出来なかったあたしを正気に戻してくれたのは、宮瀬みやせさん。

彼女は無事。その言葉に、はつとしました。そう、妹の危機をあの人が放っておくわけがありません。能力者の確保を優先し、ライブ会場を飛び出しました。

通路で追う途中、宮瀬みやせさんが一気にスピードを上げて能力者との距離を詰めた。その時、能力者が壁に手をやった。宮瀬みやせさんも同じように手を振れる。何も起きずに動揺する能力者は、高城たかしろうが体当たりをまともに喰らいその場に倒れ込みました。

その後能力者を引き渡し、ライブ会場へ戻るとトイレから出てきた宮瀬みやせさんとばったり会いました。なんだか左手を隠しているような気がして、ブレークタイムを挟んで再開されたライブ中も注意見ていると、やはり左手を庇っているみたいようでした。

ライブ後さりげなく、あたしたちの元を離れた宮瀬みやせさんを待ち、戻ってきたところを駅へ向かって一緒に歩く。途中でドラッグストアにたちより火傷の治療薬を買って、近くの公園で手当てをしました。

いつから気づいていたのか訊かれて、ライブ再開後すぐにと答えたいんですが。これじゃあまるでライブ中ずーつと見ていたみたいじゃないっすか。あれ、そういえば最近――。

ん。まあ失言には、気づいていないようでしたのでよしとしておきましよう。

\* \* \*

翌日、あたしは、とある駅前の公園に来ていた。その理由は昨夜した約束。任務中に火傷を負った宮瀬みやせさんを組織が運営する病院まで案内するためです。

電車の時間もあつて待ち合わせの三十分くらい早くついてしまったため、ちようど日陰になっているベンチで座つて待つことにしました。

公園には、同じ年くらいの友だち同士で楽しそうにおしゃべりしていたり、ランニングをする人、犬を連れて散歩に来ている人、他にも大勢の人たちが居て。その中には、家族連れも多く見受けられた。

噴水の近くではしゃぐ、小さな子どもを見守る両親。幸せそうな家族の休日。あたしには、縁遠い家族形がそこにありました。

——あたしもいつか、結婚とか……いえ、それはないですね。

ふと顔を横へ向けると、彼が居ました。待ち合わせの時間までまだ15分以上あるのに。目線の先には、あの家族。どこか寂しそうな目に見えた、そんな気がしました。

「おはようございます」と、声をかけるとちよつと驚いた表情かおをしたあと「おはようございます。早いですね」と穏やかに微笑みかけてくれる。

——この笑顔が、なんとなく安心するのはどうしてなんでしょう。もう誰も信用しないと誓つたハズなのに。

さて、気を取り直して続きです。

病院へ行つた帰り、案内のお礼として駅近くのカフェでお昼をこちそうしてもらいました。

大通りに面したテラス席で話をしていると、見覚えのある女子があたしたちに声をかけてきました。黒羽くろばねさんです。この近くに買い物に来ていたそうで、二人でいたあたしたちがデートしていたと勘違いされました。

デートではないと言つたんですが、なにやら釈然としないご様子。

でも本当に、デートじゃないですし。

その後、三人でお店を見て回るようになりました。今後来るやもしれない能力者対策のための準備です。ドラッグストアやホームセンター、黒羽くろばねさんも買い物をすると言うカジジュアルショップ。そして最後に、下着の専門店に行きました。

ここで、あの事件が起きました……………。

そうあれは、ブラを見ていた時のことです。

目移りしているのか、なかなか決まらない黒羽くろばねさんに「迷ってるんですかー？」と声をかけたら「あ、いえ、えつと、合うサイズがなくて……………」と苦笑いを浮かべていました。

…………… なんすか、それ？ 当て付けっすかっ？ なんて贅沢悩み……………。

何でも、アイドルになる前は自然豊かな田舎育ちだそうで、新鮮な野菜をたくさん食べていたそう。今でも、毎日必ず食べているそうです。

あたしは、この時決意しました。これからは野菜もしっかり食べよう、と。

\* \* \*

翌日の昼休み、”ZHIEND”<sup>ジエン ド</sup>を聴きながらカメラを弄っていると四人の女子生徒があたしの机を囲んできました。

——まあ、まああることなので慣れてますけど。

その中の一人に腕を掴まれ、校舎裏へ連行されました。

しっかし、リンチイコール校舎裏って…………… べたっすよね。捻りがないって言うか、なんとと言うか。

なんてこと考えていると、思い切り壁に押し付けられ、右拳が顔をめがけて飛んできました。抵抗するのも面倒なんで殴られるつもりだったんですけど。当たる直前で宮瀬みやせさんが、拳を受け止めてくれました。

あなたは、漫画の主人公っすか。

その後言い合いになり、宮瀬みやせさんは殴られました。どうやらわざと避けなかったようです。それを見て女子生徒は怯んだのか、取り巻き

を連れて戻っていき。なぜ庇ったのか訊ねると 彼は「守るためです」と恥ずかしげもなく。

きつと、彼の恩人である友利一希ともりかずきの妹だから、という意味なんですよね。

教室に戻ろうとすると熊耳くまがみから連絡がありました。生徒会室で熊耳くまがみから、見つかったのが「空中浮遊」の能力者であることを聞き、すぐに準備に張り込む準備に掛かりました。

いや〜雑誌で目つけてたんつすよねー、さすがだな、あたしっ！

山の中でテントを張り終わり。森を進んだ先で夜景を眺めていると乙坂おとしがさんがやって来ました。何を聴いてるのか聞かれたので、兄が好きだった『Z H I E N D』であることを伝えました。

その時少し、表情が強ばった気がしましたが気のせいでしょうか。聴かせて欲しいと言われたのでプレーヤーを貸すと聞き入っていた様子です。感想を聞くと『広い場所に一人で立ってる様な不思議な感覚』と反ってきました。

やっぱり『Z H I E N D』の良さはわかる人にはわかるんつすよね！あと、気に入った様でしたのでプレーヤーごとあげました。

乙坂おとしがさんがテントに戻り、入れ換わる様に宮瀬みやせさんがやって来て一緒に前は見えなかった星空を見ました。そして戻り際に差し入れてケーキを買ってきてくれたことを教えてくれましたっ！

いや〜、気がきくつすね！醤油とかタレとかばかりだったんで甘いものが欲しかったんすよー！

\* \* \*

翌日の夜。

宮瀬みやせさんから、一度アメリカに戻る事を告げられました。アメリカには能力者に関するデータがあるとのことでした。

そんな顔しないでくれと言われましたが………どんな表情をしていたんでしょうか？自分ではよくわからないっす。

翌日、空中浮遊の能力者に乙坂おとしがさんの能力で乗り移り、その後説得することに成功。今後は、能力を使わない事を約束してくれました。ようやく一件落着です。

下山したあと、疲れと汗を流すため近くのスーパー銭湯へ行きまし  
た。この時、黒羽くろぼねさんの体をあらためて見ましたけど、お腹とか引き  
締まっててちゃんと努力してるんだなって、ちよつと尊敬しました。  
胸は、ほんとデカかったすけど……。

\* \* \*

最寄り駅についたあとみんなと別れ、あたしは宮瀬みやせさんの自宅へ行  
き、荷造りの手伝いをして、ご飯を食べて空港に見送りにいきました。  
去り際に自宅の鍵を預かって欲しいと言われ預かる事になりました。  
約束、守ってくれるまでしつかり預かります。

\* \* \*

翌日の昼休み、高城たかしょうが宮瀬みやせさんが居ないことを疑問に思っていた  
ので、アメリカに行ったことを伝えると三人とも驚いていました。  
黒羽くろぼねさんがあたしをじつと見つめて、「いいいえ、なんでもありません  
よ」とニコニコ顔で言ってきましたが、あれはいつたいたなんだつた  
んでしよう？

その後、熊耳くまがみが現れて能力者の情報を残して行きました。能力は  
崩壊”。嫌な感じがしてなりません。場所が併設のマンションだつ  
たため、おそらく欠席しているのだろうと口にしたら、乙坂おとさかさんが明  
らかに動揺しました。問いただすと歩未あゆみちゃんが熱を出して欠席し  
ているとのことです。

——やはり兄弟は発症しやすいんでしようかね？

宮瀬みやせさんが、アメリカから戻って来たら聞いてみますか。

お見舞いがてら探りに行くこととして、歩未あゆみちゃんから悪夢を見ると  
言う話を聞きました。崩壊の手がかりになるかもしれないので、乙坂おとさか  
さんに聞き出すようお願いしました。思い過ごしならいいのです  
けど。

もし、あなたが居たら、どう対処したでしょうか。

にしても。食べ終わった後の食器を流しに放置して……お前、  
何型だっ!? 普段からこんな感じなんすかねっ！ 歩未あゆみちゃんの苦

労が目には浮かびます。

\* \* \*

熱が下がった歩未ちゃんあゆみは、自分の判断で3時間目から登校してしまっただけです。嫌な予感がして、すぐに併設の中学校に向かいましたが。結果は、最悪な結末になってしまいました……校舎の崩壊に巻き込まれ、歩未ちゃんあゆみが亡くなってしまいました……。

——あたしの判断が不適切だったんです。すぐに歩未ちゃんを安全な場所に保護していれば、こんなことに……。

気がついたら、宮瀬さんみやせに電話を掛けていました。崩落での出来事を話すと、今日中に帰るから待っていてくださいと。十数時間後スマホが鳴り、空港に着いたと連絡がありました。まさか、本当に帰ってきてくれるなんて。

彼の自宅で落ち合うことを決め、あたしは急いで向かいました。無事に再会するできたあたしは、張っていた気が抜けてしまっ……。

そんなあたしに「大丈夫、後は任せてください」と、穏やかな声で力強く言ってくれました。

あたしは何もできなかったのに。なんであなたは、そんなに優しい言葉をかけてくれるんですか……？

併設マンションに向かう途中、アメリカから持ってきた資料を見せてくれました。そこには彼が長い時をかけて探していた『時を操る能力』タイムリープの能力者の情報が書かれていました。たしかにこれなら、歩未ちゃんあゆみを救うことができるかもしれません。

しかし、そのためには……。「強要はしない、乙坂次第だ」と言っていました……。今の乙坂さんおとさかに答えは出せるのでしょうか？

部屋の前に着き、予め借りた鍵で中に入ると、まるで抜け殻のような乙坂さんおとさかが電気の消えた部屋の壁に寄りかかって座っていました。歩未ちゃんあゆみを助ける手段を話し、外に出るました。彼が答えを出すまで見守ろうと思います。

今日の記録は、これで終わりにします。

今日、わかったことがあります。いえ、今までは無意識に考えない  
ようにしていたのかも知れません。

だって、こんなことあり得ないって思っていました。あたしは、もう  
誰も信じないって心に決めて…………。

でも…………それは想像よりもずっと…………うくん…………。あ  
あーっ!! まとまんないっ! ここ取り直しっすっ!!

## Episode 23 　　〜想い〜

一晩中降り続けていた雨は止み、東の空がオレンジからすみれ色に変わり始めた雨上がりの明け方。固く閉ざされていた目の前の部屋のドアが、音をたててゆつくりと開いた。

——三日も必要なかった。

灯りの点っていない暗い部屋から姿を見せた乙坂おとさかに問う「答えは出たか？」と。

「ああ…… 決めたよ。僕は、もう迷わない」

泣き腫らして赤くなった瞳。きつと自分の不甲斐なさを責め、無力さを知り、一晩中葛藤したんだろう。あの頃の俺と同じように——。

それが今では、まっすぐ力強い瞳で俺の目をしっかりと捉えている。前へ進むと覚悟を決めた顔。そして、力強く答えた。

「必ず歩未あゆみを救ってみせる……！」

「いい顔になった。斜に構えてた頃よりも、ずっと」

気恥ずかしさを覚えたようで、一瞬目を背けた顔を戻して、俺に訊いた。

「…… 教えてくれ。僕はどうすれば、歩未あゆみを助けられるんだ？」

悔やみ、悩み抜いた末に答えを出した。

本当なら今すぐ希望を示してやりたい。だけど……。

「今日は、ゆつくり休め」

「えっ？ だ、だけど、僕は……」

「疲れているだろ。それに——」

隣に感じる温もり。身体を肩に預けて、規則正しく小さな寝息を立てる彼女は、目を覚ます気配はない。

「少し休ませてやってくれ。お前にはまだ、乗り越えないといけないことも残ってる。話しはそれからだ」

「…… そう、だな。わかったよ。じゃあまた——」

頷いた乙坂おとさかが部屋に戻ったのを見届けて、起こさないように奈緒なおを抱きかかえる。

—— 軽い。

この華奢な身体にいったいどれだけのものを背負ってきたのだろう。母親に裏切られ、友人に裏切られ、兄の心を壊され、それでも瞳を閉じることなく前を見据えて、自分の進むべき道を歩いている。そんな彼女の力に、守ってあげたくて、俺は……。

「部屋のカギ、借りますね」

腕の中で眠っている奈緒なおに話しかける。当たり前のことだけど、返事は返ってこない。彼女の制服のポケットの中から部屋の借りたカギを回して部屋に上がり、寝室兼勉強部屋になっている部屋のベッドにそつと寝かせる。

「今日は、ゆっくり休んでください。カギは、ポストに入れておきます」と書き置きを机の上に残して、彼女の部屋を出た。

一度自宅に帰り、シャワーを浴びて汗を流して、軽い朝食と着替えを済ませて、星ノ海学園へ向かう。一時間目が終わって休み時間になったのを見計らって、教室に入る。するとすぐに、高城たかじょうと黒羽くろばねが神妙な面持ちで寄ってきた。その理由はもちろん、乙坂おとさかのこと。

「おはようございます。やはり、乙坂おとさかさんは欠席のようですね」

「彼は、もう大丈夫ですよ。妹さんの告別式が済んだら登校してきます」

「そうですか。ではその折には、復帰祝いにみんなで牛タンカレーを食べましょう」

「いいですね。また、取り置きを——」

「あ、友利ともりさんは？」

「彼女も、今日は——」

「おはようございます」

——欠席です、といいかけたところで後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ると、そこには何食わぬ顔をした奈緒なおが立っていた。

「友利ともりさん？」

「そうですが、別人に見えますか？」

嬉しそうに笑顔で黒羽くろばねが、駆け寄っていく。

「おはようございますっ、友利ともりさん！」

「はい、おはようございます」

俺は挨拶をすることも忘れ、体調を訊いていた。

「もう、いいんですか?」

「大丈夫です、問題ありません。ありがとうございます」

挨拶もそこそこに、二時間目を告げるベルが鳴り響く。

「あ、予鈴ですね。ほら、三人とも自分の席に戻ってください。授業が始まるぞー」

そう言つて、奈緒は窓際一番前の自分の席に付いた。

学校は昼休みに入り、高城は学食へ昼食の調達。黒羽はクラスメイトの女子たちと机を囲んで、賑やかに弁当を食べ始めた。

自販機で購入した缶コーヒートを飲みながら、今回の件においての最重要事項、時空移動の能力者の情報を得るため、アメリカから持ってきた資料に目を通してしていると、そこへ「生徒会室に行きましょう」と奈緒の方から声をかけてきた。案件が案件だけに迂闊に話せない彼女と二人で、生徒会室へと向かった。

東京都の地図が掲げられたテーブルの横のソファに並んで腰を下ろし、今朝彼女が眠っていた間に、乙坂とのやり取りを伝える。

「そうですか、無事に立ち直ってくれましたか」

「もう大丈夫ですよ。けど、本当に大変なのはこれからです」

「時を司る能力、時空移動の能力者ですか」

「唯一の手がかりと言えるのは、能力者の名前と能力の詳細のみ。見つけ出すのは至難の技……文字通り雲を掴むような話です」

「熊耳に訊いてみます。アイツなら何か知っているかも知れません」

「そうですね、お願いします」

ポケットからスマホを取り出した彼女は、着信履歴から能力者探知探査できる能力を持つ協力者、熊耳に電話をかけた。しばらくしても会話は始まらない。

「ダメです、電源が入っていないようです。留守番電話にも繋がりません」

「そうですか」

電源を入れっぱなしにしておけば、居場所を特定される可能性があるあ

る。情報漏洩のリスクを考えれば至極当然の対応。時空移動タイムリープの能力者が本当の意味で力を失うまで、おそらくあと1年から2年。いや、早ければ半年で失う。そしてもう、能力は使われることはない。となれば、探知探査系の能力がなければ見つけ出すことは不可能に近い。さて、どうしたものか。方法はあっても見つけ出せなければ意味をなさない。結局、今出来ることは、探知能力者の熊耳くまがみが再び連絡をしてくるのを待つしかない。

「すごいですね」

「何がです？」

思考を巡らせていると、彼女は突然、俺に向けて賛辞の言葉を口にした。

「あたしが悩んでいる時、あなたはいつもどうすればいいのか一緒に考えてくれて、より正しい答えに導いてくれます。野球の試合も、兄のギターも、黒羽くろばねさんのライブの時も、今回の歩未あゆみちゃんのことも、乙坂おとしがさんのことも。リンチに遭いそうになった時も。いつも、いつも助けてくれます」

可能な限り出来ることをしたまでのことで、それは俺にとって当たり前のことで――。

「あなたは、どうして――。いえ、いつもありがとうございます」

言いかけた言葉を飲み込んで、代わりにお礼の言葉。

本来続いていたであろう言葉は、なんとなく想像はついた。だから、俺の方から話を切り出した。

「礼を言うのは、俺の方です」

「えっ？ 何ですか？」

「あなたは……俺に、もう一度生きる意味を与えてくれたんですから」

「それは、どういう意味でしょうか？」

可愛らしく小さく首を傾げる。

「あの日、絶望の中で目覚めた日。唯一の目的を失って、失意のドン底で日本に帰国したあと、ただただ同じことを繰り返す日々を送っていた俺を、あなたは見つけてくれた。協力して欲しいと言ってくれた、

あの時から——」

彼女の大きくて綺麗な目を見る。彼女も俺の目を見つめ返した。「あなたの力になること、あなたを守ること。それが、俺の生きる意味になったんです。だから、あなたには幸せになってもらわないと困るんですよ」

思いの丈を伝え終えた時、昼休みの終わりを告げるベルが鳴り響いた。

「時間ですね、戻りましょう」

立ち上がって、ドアに向かって歩き出す。

「あ、待ってください——」

ドアノブに手をかけたところで、背後から腕を取られた。

「……教えてください。あたしを守ると言ってくれたのは、あたしが、友利一希ともりかずきの妹だから……ですか？」

ドアノブから手を離してゆっくり振り返り、彼女に向き合う。

彼女は真剣な眼差しで、真っ直ぐ俺の目を見つめている。けど、どこか不安そうに見えて、腕を掴む手は小さく震えていた。

乙坂おとさかがこんな状況で苦しんでいると言うのに、この気持ちを伝えていいんだろうか……？ だけど。何より今、目の前にいる彼女にこの想いを伝えてしまえば、必ず深く傷つけることになる。

それなら、今のまま——いや、違う。それは、ただの言い訳に過ぎない。

まったく、あれだけに偉そうなことを言っておきながら、ここまで言わせた上で逃げようだなんて卑怯にも程がある。

目を閉じて、ひとつ深く呼吸をしてから開き。

そして、彼女に伝える。俺の素直な想いを——。

「友利一希ともりかずきさんの妹ではなく、あなたを守りたい。ひとりの女の子として、あなたが好きです。奈緒なほさんのそばに居させてくれますか？」

彼女の目元に浮かんでいる涙の粒。掴んでいた腕から手を離れた彼女は、手に握り直した。涙の粒がこぼれ落ちてもそらすことなく、真っ直ぐ目を見て問いかけに答えてくれた。

——はい、そばに居てください、と。

しばらくして、奈緒なおが口を開いた。目は赤かったけど、もう涙はすっかり乾いていた。

「お昼食べ損ねたので、お腹が空きました。一緒に、学食へ行きますよ」

「今、授業中ですけど？」

「サボっても内申に影響ないので大丈夫です」

「そうですか」

「はい。ですので行きましょう」

二人一緒に、学食に向かう。

繋がれた手の温もりを確かに感じたままで――。

## Episode 24 仮説

「おはようございます」

「おはようございます。行きましょう」

「はい」

後日の朝七時前。併設マンションの入り口で待ち合わせをして、少し早めの登校。途中学園前のコンビニで、朝食と昼食を調達してから正門を潜り、教室で机の上に置いた資料の束を前にしての会話。

「では、この彗星の粒子が作用して問題を引き起こしているんですか？」

「ええ」

教室で奈緒と特殊能力について話していると、乙坂が登校してきた。先日たったひとりの肉親の妹さんの通夜と葬式を終えてたばかりで心身共に厳しいだろうけど、告別式の最中一切涙を見せず、立派に喪主を務めきった。

「あつ、乙坂さんっ！ お帰りなさいですー！」

「おかえりなさいませ、乙坂さん」

乙坂の姿を見つけた黒羽はすぐさまは小走り、高城は彼女の後について出迎えにいった。

「いろいろ心配かけて悪かった。葬式の時のお礼もちやんと言えなくて…… なっ?!」

「俺たちのゆさりんを」や「俺だっておかえりって言ってほしい！」と呟き、嫉妬に狂う野郎共の殺気を帯びた視線に、乙坂はたじろいでいる。極力意識しないように努めていたけど、俺の時もあんな感じだったのだから。

「そんな謝られるようなことではありませんよ」

「そうですよ〜」

「そっか、ありがとう」

二人との挨拶を済ませた乙坂が、こちらに気がつき近づいてくる。

「おはようございます」

「おはようございます。お疲れさまでした」

「おはよう。お前たちもありがと。それで何を見てるんだ？」

乙坂は、奈緒が持っている資料へ視線を向ける。

「特殊能力に関する資料。すごいんすよ、これ！」

彼女は、見ていた資料を手渡す。その資料を受け取った乙坂は目を通すと、無言で固まってしまった。

「どうしました？」

「読めないんだが」

資料は基本全文英語、カルテに至ってはドイツ語。専攻していない人に読めというのは無理難題。俺も最初の頃は何一つとして理解できなかった。英語の成績のいい彼女にも、ひとつひとつ解説を交えて話していた。

「興味があるなら訳しますよ」

「遠慮しておく。どうせ分からないし。どんなことが書いてあるんだ？」

「簡単にいうと特殊能力発症のメカニズム、どういった能力があるのか、などですね」

「すごいじゃないか！これで、例の能力者を見つけたのか？」

「それは、また別の方法です。これはあくまでも、特殊能力に関する研究データです。時間ですね、続きは放課後にしましょう」

予鈴が鳴り、ホームルームのあと午前の授業を受ける。そして、昼休みを迎えた。

「では、先に学食に行っています！」

「あ——」

高城は、乙坂が返事をする前に瞬間移動を使って、ガラス窓を突き破り教室から消えていった。それを見ていた乙坂は、やれやれといった様子でタメ息をついてから高城のあとを追いかけて学食へ向かった。

「あたしたちは、生徒会室へ行きますよう」

「あ、はい」

「ほら、黒羽さんも行きますよー」

「あ、はい」

クラスメイトに囲まれる前の黒羽と、コンビニの袋を下げた奈緒と一緒に教室を出て、三人で生徒会室に向かう。教室を出る前途轍もない殺気を背中に感じた気がするが、きつと気のせいだと信じたい。生徒会室に着き、昼食を食べながら朝の続きを話す。

「現時点での手がかりは、名前と能力だけつすか」

「そうなります。名前からして日本人、あるいは日系人の可能性が非常に高いです」

「あの、お二人は何のお話をしてるんですか？」

弁当を食べ終えた俺たちの話を、不思議そうな顔で聞いている黒羽からの質問に答えたのは、奈緒。

「歩未ちゃんを救うための方法ですよ」

「歩未ちゃん？ えっ…… ええーっ!？」

とても驚いた顔を見せた。そう言えばまだ話していなかった。

「話していませんでしたね」

「はい、あたしも忘れてました」

「そんな大事なことを忘れないでくださいよー!」

とても驚きながら可愛く抗議する黒羽に、これまでの経緯をかい摘まんで説明する。

「えつとく。つまりく 時空移動」という能力を持つ能力者さんを見つけて、それで過去に戻って、歩未ちゃんが校舎の崩壊に遭わないようにしようというでしょうか？」

口元に人指し指を当てながら答えた。

「正解、100点の回答ですよ」

「やった〜! ゆさりん、ほめられました〜!」

「痛々しいので減点です」

「はわわあ〜!？」

「あ、あはは……」

ちよつと騒がしい昼休みが終わり、放課後を迎える。

生徒会室に集合し、本格的な話し合いに入る。

「では、今回の任務について本格的に話します」

「協力者を待たなくてよろしいのですか？」

話しを切り出した奈緒へ、高城のからの質問。昼食を共にしていた乙坂からは聞いていないらしい。

「今回は、上からの指令ではありません。生徒会の独自の判断で、歩未ちゃんを救うために行動します」

「な、なんと！ いったいどういうことでしょうか!？」

要約して経緯を説明し、本格的に話し合いに入る。

「本題に戻します。先ずは、これを見てください」

「どうぞ」

奈緒がテーブルに広げた資料と同じ資料を、三人に手渡す。

「えくと?」

「これは、能力者についての情報のようですね」

「こいつを見つけ出せれば……」

乙坂は、この場にいる誰よりも真剣な表情で資料に見入っている。妹を救える唯一の可能性、当然の反応。

「先ほど話した通り、今件は独断です。熊耳からもたらされたものではないです。ですので、現時点で把握出来ているのは能力と名前だけになります。名前からして日本、または日系の男子である可能性が非常に高いと踏んでいます。保有する能力は、時空移動。名前は、S HUNSUKE OTOSAKA。」

「オトサカさん?」

「シユンスケさん、ですか?」

示し合わせたように黒羽と高城は、能力者を同じ姓を持つ乙坂に目をやった。

「何だよ?」

「お知り合いかな? と思ひましてー」

「知らないぞ」

「本当ですか?」

「ウソを言う必要ないだろ。探してるんだから」

乙坂は、二人の疑問を完全否定。三人のやり取りに構わず、奈緒は話しを続けた。

「シユンスケと言う名の人に心当たりがあります」

「本当か!？」

「はい。兄の入院先の病院を無償で提供してくれた方です」

「友利のお兄さんの……」

乙坂は、深刻そうな表情を浮かべた。事情を知っている。ともあれ今は、話しを進めることを優先。

「友利さんの言うシユンスケさんと同一人物かは不明ですが。オトサカという名の人物に関して、ひとつ仮説を立てました」

「どんなだ?」

乙坂が食い付いてくる。高城と黒羽は、少し話においてかれたように呆然として。奈緒に至っては、どういう訳かやや眉をひそめた。

「乙坂さんと歩未さんの近い関係者である可能性が高いと踏んでいます」

「いや、さつきも言ったけど知らないぞ? 親戚にも居ないし——」

「本当に心当たりはありませんか?」

「あ、ああ、僕と歩未は二人兄妹——」

何かを言いかけた乙坂は、やや伏し目がちになり考え込んでいる。おそらく、俺の言った心当たりがあつたのだろう。

「思い当たりましたか?」

「…… 歩未が、もう一人家族が居たような気がするって言っていた。それに僕も、夢の中で子どもの頃の僕と歩未が歩いてて、その隣にもうひとり誰かが一緒にいたような。そんな気がするんですが……」

空中浮遊の能力者、スカイハイ齋藤の時に言っていた夢の話し。その話を思い出して、この仮説を立てた。

「おそらくですが、何らかの原因で二人の記憶が曖昧になっているのだと考えられます」

「もし、本当に兄弟だとしてもどうして、記憶が曖昧になっているんだ? そんな大事なことを忘れるわけがない」

乙坂の疑問に少し考えて、言葉に出す。

「記憶喪失の要因は大きく分けて、二つのケースがあります。一つは身体的、もう一つは精神的。前者は頭を打つなどした場合、後者は心

に何か強いショックを受けた場合です」

「うーん、どっちも心当たりはないな」

乙坂おとしがの態度からして確かに心当たりはないよう。だとすれば、ほぼ確定。奈緒なおに視線を移す、彼女は頷いて答えた。

「それでしたらやはり、乙坂おとしがさんの気のせいなのでしょうか」

「かもですね、兄弟のことを忘れるなんて普通ありえませんか」

「だよな。結局、手掛かりなしからのスタートかよ」

あからさまにがっかりと項垂れた乙坂おとしがとは裏腹に、俺と奈緒なおは正反対の答えに行きついた。

「心当たりがないなら、別の要因ですね」

「ええ、可能性は非常に高いと思います」

「はあ？」

俺と奈緒なおのやり取りに、三人は意味がわからないといった様子。

「身体的でも、精神的でもないのなら、別の要因しかないっしょ。つまり、特殊な要因ってことです」

「特殊な要因……？ それって、まさか——！」

例に挙げた二つ以外の特殊な要因と聞いて、三人ともその可能性に気づいた。

「これも憶測になってしまいましたが、二人の記憶が特殊能力によって操作されている可能性があります。そして、何かをきっかけに閉ざされた記憶に綻びが生じ、少しずつ思い出し始めた」

「きっかけ……？ あ、そう言えば——」

どうやら、思い当たる節があつたらしい。

「どんな些細なことでも構いません」

「気のせいかも知れないけど、ZHIENDジエントの楽曲を聴いてから、三人で居る夢が鮮明になった気がする」

「ZHIENDジエントですか。歩未あゆみさんも、ZHIENDジエントを聴いていたんですか？」

「いや、歩未あゆみは柚咲ゆさの、ハロハロのファンで、よく聴いていた。テレビでも、スマホでも、部屋にデカイポスターを何枚も貼ってる」

「なんと!？」

黒羽がボーカルを務める「ハロハロ」のファンと聞いた高城が、ハイテンションで割り込んできた。

「ゆきりんのファンだったとは聞いていましたが、それほどまでとは！ それは、ぜひとも語り合いたかったーッ！」

興奮して会話を妨げた高城にローキックを入れた奈緒は、何事もなかったように話の続きを促す。

「放っておいて、続けてください」

「あ、ああ……それで僕より先に、夢で見ていたみたいだ。言い始めたのは、今年に入ってからだったと思う」

「なるほど……」

横目で黒羽を見ると、俺の視線に気がついた黒羽は首かしげを頭にクエスチョンマークを浮かべた。今度は奈緒に視線を向け、意見を仰ぐ。

「どう思いますか？」

聞こえなかったのか反応がない。もう一度話しかける。

「友利さん？」

「なんすか？」

奈緒は目を細めて、どこか不機嫌そうに答えた。

「いや、どう思うのかなと……」

「ま、そうっすね。話を聞く限り、二人とも歌がきっかけになってるかと」

「同意見です。シユンスケさんの連絡先は？」

「連絡先は知らされていません。会ったのも助けていただいた時だけです。活動目的など一通りの説明を聞いて、あとは熊耳からの連絡を受けて、調査に向かうだけでしたので」

「そうですか」

彼女から視線を外し、再び乙坂に向き合う。

「乙坂さん、あなたの記憶を取り戻すことが一番の近道だと思います」

「そう言われてもどうすれば……そうだ！ 熊耳は？ 熊耳に聞けばー！」

「最初に考えました。何度試しても連絡はとれません。友利さんに掛

ける時以外は、常に電源を切っているんでしよう」

「そ、そうか……。それで僕は、どうすればいい？」

「とりあえず、ZHIENDを聴き続けてください。特に就寝前は念入りをお願いします。今の所それしかありません」

「どうして、寝る前に？」

「夢で見るなら、就寝前の方がより印象を植え付けられるっしょ」

「そういうことです」

「ああ、そっか。わかった、そうする」

「では今日は、ここまでにしましょう。熊耳からの連絡もなさそうですし」

スマホの着信を確認した奈緒が解散を宣言すると、三人とも生徒会室を後にして帰宅していった。生徒会室で二人になった俺たちは、話し合いの続き。

「どう思いますか？」

「おそらくですが、あたしが知っているシユンスケさんと同一人物だと思います」

「ですよ。ただ……」

「なんですか？」

「同一人物であるなら、親族の歩未さんが亡くなったことは当然知っているはず、なのに——」

「何もアクションを起こさないのが気になる、ですか？」

「普通なら、残された乙坂さんのことが気にならない訳がない」

「何か事情があるんでしょう」

「でしょうね。二人の記憶から、自分の存在を抹消しなければならぬいほどの事情が」

「やっぱり、そうなりますよね。うーん、でもなー」

眉をひそめた奈緒は、難しそうな顔で腕を組む。

星ノ海学園の運営、病院を無償で提供出来る財力、能力者を束ねる統率力も持ち合わせている。組織内に記憶操作の能力者を抱えていてもなんら不思議はない。彼女が気になっているのは、何故完全に関係を絶つ必要があったのか。おそらく表に出たくない、もしくは出ら

れない。

ひとつ息を吐き、仕切り直してから話しかける。

「考えても仕方ないですし、帰りましょうか」

「そうっすね。帰りましょう」

戸締まりをして、生徒会室を出る。併設マンションへの帰り道で質問された。

「ところで、どうして分かったんですか？」

「乙坂兄妹との関係を完全に絶つていて、記憶を消去したのが彼の抱えた仲間であるか、ですか？」

「はい。プライバシーに関わることなので、詳しい家庭環境は話してませんでししたし」

「歩未さんと初めて会った時、彼女はこう言いました。コンビニは割高ですので、と。急ぎの物だったら多少割高でも近場で済ませますよね。その時、あまり家計に余裕がある方ではないと感じました」

ただ単にしつかり者とも最初は思えたけど、シヨップピングカートの中は冷凍しておけば日持ちする食品や割り引き商品、徳用の洗剤などが目に入った。

「なるほど。記憶の方は？」

「有宇お兄ちゃんと言前つけて呼んだことです。普段、一希さんのことをどう呼んでいましたか？」

「どうって、普通にお兄ちゃん…… あっ！」  
気がついたみたいだ。

「そうですね。普通、二人兄妹ならあまり名前を付けてお兄ちゃんとは呼ばないですよ。だから歩未さんには、乙坂さんの他にお兄さんがいるんだと思っていました。けど、合宿の時乙坂さんが自分たちは二人兄妹だと言ったのが、ずっと引つ掛かってたんです」

「そんな些細なことから。やっぱ、さすがの洞察力っすね」

先ほどから一つ疑問に思ってたことを、奈緒に訊いてみる。

「ひとつ質問してもいいですか？」

「なんすか？」

「何で不機嫌だったんですか？」

何故かまた、彼女は目を細めた。なにやら釈然としないご様子。

「それ、訊きますか？ 別にいいっすけどー」

「あっ……」

——ああ、そういう事か。

「どこか寄り道して行きましようか？ 奈緒さん」

「ん。さ、行きましょー」

笑顔になった奈緒な おに手を取られた。

その手を握り返す。彼女の横顔は、ほんの少しだけ恥ずかしそうに見えた。

## Episode 25 涙

「やっぱり、このピザは美味しいな」

帰り道、少し寄り道をして奈緒と一緒に六本木タワー近くの、とあるカフェに来ていた。

あの日、初めて彼女と出会った日。約束の時間まで、ここで時間を潰して過ごしていたらしい。

「あつ、店員さん！ このピザ、追加お願いしまーすっ」

皿に残っているのを食べ終わる前に彼女は、メニューを指差して追加注文。一番小さなサイズのピザを二人で食べているとはいえ、これで3枚目。

「晩ごはん、食べられなくなっちゃいますよ?」

「だいじょうぶです。その辺りは、ちゃんと調整しますんで!」

そう言うと、しばらくして運ばれてきた焼きたてのピザを上機嫌でほうばった。そんな彼女のすがたが微笑ましくて、つい見入ってしまう。俺の視線に気がついたのか、奈緒は不思議そうな表情をして小さく首をかしげた。

「どうかしましたか?」

「ソースがついてますよ。ちよつと動かないでくださいね」

頬に付いたピザソースを紙ナプキンで優しくぬぐう。少し恥ずかしくも顔をして「ありがとうございます」とお礼を言うと、「あなたも恥ずかしい思いをしてください」と言わんばかりに、小悪魔のような微笑みでピザを口に近づけてきた。

「あなたも食べてくださいいっ。はい、あくんっ」

「いただきます」

特に躊躇することなく食べたのが予想外の反応だったのか、やや納得いかないと言いたそうな表情をしている。

「どうしました?」

「…… いえ、あまりにも躊躇なく食べられたので。こういうことに慣れているのかなー、と」

「うーん、慣れと言うか。海外生活が長かったからですかね?」

「そういうものっすか？」

「たぶん」

「……なんとなく、わかった気がします」

「なにがですか？」

「内緒っす」

——なんだろう、皆目見当もつかない。だけど、機嫌が悪いと言う感じじゃない。どちらかと言えば上機嫌に思えた。その証拠に今も、とても美味しそうにピザを食べているし。

「うくん、おいしかったっ！ ごちそうさまです」

「ごちそうさま。では、出ましようか？」

「はい」

レジで会計を済ませ、カフェを出る。

腕時計を見ると、時刻は17時半を回ったところ。もう季節は夏、この時間でもまだ日は高く明るかった。

「買い物にでもいきましようか？」

「——えっ？」

奈緒は俺の提案に、少し驚いたような表情を見せた。夏とは言え、今から帰っても午後六時を過ぎるから、たぶん、そろそろ帰ろうと言われれると思っていたんだろう。

「いいんすか？」

「もちろんですよ」

「あたし、欲しいモノがあったんです。行きましようっ」

奈緒に連れられて、彼女が欲しい物が売っている目的地へ向かい、大勢の人たちが行き交う中をはぐれないように並んで歩く。

「とーちゃーく、ここでーすっ」

「ここは……、家電量販店ですか？」

「はい。ちょうど新しい音楽プレイヤーが欲しかったんですっ」

やや肌寒さを感じるほど冷房の効いた店内、入り口からすぐの昇りエスカレーターに乗って目当ての音楽プレイヤーが展示されている、オーディオコーナーがある3階へ向かう。

「いろいろあるなー、どれがいつかなー」

売り場に到着すると奈緒は、機能説明書と展示品を実際に手にとつて見比べて悩んでいる。

「種類が豊富なんですね」

ざっと見ただけでも数十種類以上。同じメーカーの製品でも容量を重視した機種、音響を重視した機種など、それぞれ特色があるみたいだ。

「そうなんですよ。それにちょうど今、夏の新モデルも出ているみたいで。うくん、迷うなー」

「あ、これって、奈緒さんが使ってたのと同じモデルですか？」

「ん？ どれっすか？」

隣に寄ってきて、製品サンプルを見る。教室や生徒会室でよくZHIENDの音楽を聴いていた、紫色の音楽プレイヤー。

「あつ、これ新モデルっす、出でたんだ。音響も性能も上がってるし、使い慣れもしてるから、これにしようかな？」

他の機種と見比べ、しばらく悩んだ末に「やっぱりこれにしようと思いますっ」と先ほどの新モデルのプレイヤーをチョイスした。続けて周辺器機コーナーでイヤフォンを選び、レジで会計を済ませると商品袋を持って嬉しそうに寄ってくる。

「お待たせしましたーっ」

「気に入ったのが見つかってよかったですね」

「はいっ」

目当ての買い物が終わわり、降りのエスカレーターに乗っていると「あなたは、いいんですか？」と訊かれた。

「そうですね」

特にこれと言って欲しいものはないのだけれど、ふと、とある特設コーナーが目に入った。

「そこ寄ってもいいですか？」

「ん？ CDコーナーですか、いいっすね。行きましょー」

「ありがとうございます」

二階でエスカレーターを降りて、CDコーナーに立ち寄り、店内の奥にある洋楽の棚を探す。

「なにをさがしてるんですかー?」

「えっと…… あった。これですよ」

彼女に見つかつた目当てのCDを見せる。

「おおっ、Z H I E N Dのアルバムじゃないっすかー!」

「いい機会なので購入しようと思ひまして」

「わかつてるっすねっ」

「さつきよりも三割増しの笑顔を見せてくれた。

Z H I E N Dのアルバムを購入して店の外に出ると、長かつた夏の日もすつかり暮れて、辺りは街灯とビル灯りに照らされていた。

「さて、どうしましょうか」

「そうですね。うくん…… 百貨店へ行つて、晩ごはんの食材を買いましょう。冷蔵庫の中にもないっすよね? あたしが使つちやいましたし」

確かに、緊急帰国してから買い出しもしていないから、冷蔵庫はほとんど空の状態なのだけれど。それ以前に――。

「食べられますか?」

カフェを出てから、まだ二時間弱くらいしか経っていない。

「結構歩き回つたんで、だいじょうぶっす」

と言うことらしいので、ここから少し離れた百貨店への歩いて向かう。ショッピングカートを引きながら、食品売り場で食材を見て回る。

「献立は、何にするんですか?」

「それは、出来てからの楽しみです。あつ、あの調味料の瓶取つてもらえますか?」

「これでいいですか?」

棚の上の方にある小瓶を取つて渡す。

「どもつす。では、次行きましょー」

調味料の小瓶をカゴの中に入れた奈緒は、迷うことなく必要な食材をカゴに入れていき、ものの20分ほどで買い物を済ませた。結局、何を作るのか教えてくれなかつた。荷物があるため帰りはバスに乗つて、六本木タワーの自宅へ帰る。

「それでは、作りますので」

「手伝います」

「仕事は、いいんですか？」

「渡米前に、ほとんど処理してしまったので」

「そうですか。じゃあ一緒に作りましょう」

「許しをいただいて、キッチンに並んで立つ。」

「それで、なにを作るんですか？」

「ハンバーグにしようと思います」

「手分けして夕食作りに取りかかる。」

「手際いいっすね」

「転校する前は、ときどき作ってましたから」

「今度、ごちそうしてくださいよー」

「簡単な料理もので良ければ」

「約束っよ？」

「はい……………ところで、それは？」

「玉ねぎをみじん切りにしていると、奈緒なおはステンレス製のボールを冷凍庫の中に入れた。」

「ひき肉は熱に弱いので、こうして予め容器を冷しておくんです」  
「なるほど……………」

「冷やしていたボールより、一回り大きいボールに氷を敷き詰め、その中に冷凍庫から取り出したボールを入れる。」

「こうすれば、より完璧です」

「手間かかるんですね」

「この手間が変わるんすよ」

「まっ、料理サイトの受け売りですけど」と言っ、冷えたボールの中でひき肉とみじん切りにした野菜、繋ぎを入れてこねる。だえん状に形を整えたハンバーグを、サラダ油とバターを溶かしたフライパンで焼く。焼き上がったハンバーグを、彩り鮮やかなサラダが添えられた食器に移して、焼いている間に作っていたソースをかけた。

「はい、できましたっ」

「おお〜」

まるで本格的なレストランに出てくるような見事な出来映えのハンバーグに思わず声が出る。

「どうぞっ」

「いただきます」

中心にナイフを入れると中から肉汁が溢れてきた。ひと口大にして、フォークで口に運ぶ。あまりの衝撃に黙り混んでしまう。

「……おいしくなかったっすか？」

奈緒が、不安そうな表情で見つめてくる。

「……うまい」

「よかったっす」

その言葉に安堵の表情を見せる。奈緒が作ってくれたハンバーグは、無駄に高い店を出てくるハンバーグよりも遥かに美味しかった。正直、ピザがまだの残っていて、さほど空腹ではなかったのだが食が進む。食事を終え、食器を洗い終えて、一息つくと「一緒にZHENNDを聴きましょう」と提案してきた。

「時間、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。明日は休日ですので」

「……あれ？」

カレンダーを確認すると、確かに明日は休日だった。

「……あ」

「ん？ どうしたんすか？」

「……一日ずれていました」

渡米から緊急帰国して数日、濃い時間を過ごしていたため、向こうの日付の感覚のまま過ごしていた。

「お、意外な一面発見っす」

「案外抜けてるところもあるんすね」と、どこか嬉しそうに笑った。

「そういうことです。時間はたっぷりあります。ZHENNDを聴きましょー」

奈緒は、そう改めて提案した。この様子にからすると、今日は帰宅するつもりはないのかもしれない。とりあえずオーディオがある寝室へ移動して、先ほどの購入した『ZHENND』のアルバムをセツ

トし、再生ボタンを押して、ベッドを椅子にして並んで聴く。

「やっぱ！ ZHIENDは最高っすねっ！」

流れる曲に合わせて身体でリズムをとりながら詩を口ずさむ。上機嫌だった奈緒だったが、アルバムも後半に差し掛かった頃、それはなんの前振りもなく突然起きた。

さっきまで上機嫌だった奈緒が、うつむきすすり泣きだしてしまった。

「……おいで」

軽く腕を広げる。彼女は顔を埋めてくれた。

俺は、その小さな身体を抱きしめる。

——この時、きつと彼女も同じことを考えていたんだろう。

あと、どれくらいの時間があるかはわからないけど。そう遠くない未来、必ず訪れる別れの時を迎えることを——。

「ごめん、ごめんね……」

「どうして、あなたが——」

そんな彼女を泣き疲れて眠るまで、優しく抱きしめてあげることしか出来なかった。

## Episode 26 くちケツトく

彼女が目覚める前に、俺は朝食の準備を始める。電気ポットでお湯を沸かし、その間に簡単な料理とこしらえる。調度品出来上ががった頃、寝室から眠気眼の奈緒が姿を現した。

「……おはようございます」

まだ眠そうだ。それに目も赤い。

「おはようございます。朝食出来てますよ」

「ありがとうございます。先に顔洗ってきます」

洗面所から戻ってきた奈緒と、たわいの無い会話をしながら朝食を食べる。

「ごちそうさまでしたっ。あのあたし、一度に部屋に帰って着替えたいんですけど」

「じゃあ準備してきますね」

そう断りを入れて私服に着替える。電車を乗り継いで、彼女の自宅がある星ノ海学園併設マンションへ向かう。奈緒の部屋に着き、リビングで彼女の身支度が整うのを待つ間、俺は考えごとをしていた。それは乙坂の妹、歩未を救い出す方法について。

彼女を救い出すためには、ふたつの大きなハードルを越えなくてはならない。

一つ目はもちろん、タイムリープ時空移動の能力者を見つけ出すこと。正直な所、これは乙坂が鍵を握っている。

二つ目は、過去に戻ったあと実際に彼女の死を回避しなければなら  
ない。

奈緒に訊いたところ确实ではないが、歩未自身が「崩壊」の能力を  
発動させ、中等部校舎の一部が崩れ落ち、その瓦礫下敷きになったと  
のこと。

まずは崩壊が任意か、強制のどちらであるかを調べる必要がある。  
たとえ乙坂の「略奪」で能力を奪ったとしても、次は彼自身が「崩壊」  
を発動させてしまう可能性を否定できない。長年の経験上、常に最  
悪を想定して対策を建てておかなければ大きな代償を支払うことに

なることが多い。

「お待たせしましたー」

その声に引き戻される。顔を上げると目の前に、部屋着に着替えた奈緒なおがいた。

「いいえ、どうしましょうか」

「そうっすね〜」

奈緒なおは隣に座り「うくん……」と考え込み、少し考えてから「じゃあZHENNDジエンンドのPVを観ながら考えましょうっ」と提案した。その言葉に頷く、奈緒なおは寝室に置いてあるパソコンを持つてきて、テーブルに置き起動させる。パソコンの小さな画面を観るために、さつきよりも身体を寄せてきた。着替える前にシャワーを浴びたのか、スゴく甘い良い香りがする。「どうっすか？」とPVの感想を聞かれた。

「楽曲ともマッチしてとてもいいですね」

「おおくわかってるなー！ あたし、ZHENNDジエンンドのPVを撮るのが夢なんすよっ！」

「あ、そうなんですな」

「はいっ。ZHENNDジエンンドの活動を追ったドキュメントでもいいなくつて。今は…… あんまり撮りたくない映像もばかり撮ってますけど……」

いつも持ち歩いているカメラを弄りながら、少し悲しそうな表情かおをした。そんな彼女の頭にそつと手を乗せて、優しく撫でる。

「んっ…… なんっすか〜？」

「なんとなく。嫌でしたか？」

「…… 嫌なわけ、ないです」

少し頬を染めながら顔を逸らして恥ずかしそうに言った。PVを見終わると、今度は撮りためたカメラの映像を観ながら、俺が転校してくる前の話をしてくれた。

「じゃあ、二人とも転校してきたんですか？」

「そうです。乙坂おとしさかさんは、能力を使ってカンニングしてた証拠をこのカメラで押さえたんです」

乙坂おとしさかはかつて、都内屈指の進学校である、陽野森高校に通っていた

が。星ノ海学園生徒会長である彼女——奈緒の策略により星ノ海学園に転校することになった。

「黒羽さんの時は？」

「大物プロデューサーに追われてるところを救出しましたっ」

大物プロデューサーのスマホを間違えて持ち帰ってしまったことにより、黒い交際が発覚するのを恐れたプロデューサーに追われていたところを、四人の個々の能力を巧みに使い脅したらしい。「あたしは、脅す作戦を立てるのが大の得意ですのっ」と笑顔で得意気に言ったあと、さらに映像を巻き戻した。

「今のは？」

見覚えのない人が写った。

「ああ、有働さんっすね」

画面を一時停止すると、袴姿の少年が写っていた。

「有働さん？」

「〃念写〃の特殊能力者です」

「〃念写〃……………」

「撮った相手の下着姿を写す、エッチな能力っす」

——下着姿、か。制約次第ではあるけど、汎用性の高い能力だな。

「あたしも撮られたんすよー」

そう例えば、服だけではなく壁を透視でたりするのなら情報収集などに役に立つ。

「需要なんて無いのに」

仮に下着姿までが制約だったとしても、対象の所持品などを調べられる。諜報活動なんかに使えそうな能力だ。

「……………聞いてますか？」

「あ、はい。なんですか？」

奈緒は目を細めて、「興味ないっすか……………いや、知ってたけど」と、なにやら自虐しているようだった。

「それで、彼も星ノ海学園に転校を？」

「いえ、福山さんの時と同様に、乙坂さんが〃略奪〃で奪いました」

「そうですか」

どこまで透視できるのか試して見たかったけど、それなら仕方ない。

「……………」

「どうしました？」

「なんでもないっすっ！」

「そうですか？」

奈緒はカメラの電源を切って、ケーブルを繋いでカメラの充電を始めた。隣に座り直すと「今度は、あなたの話を聞かせてください」と話を振ってきた。

「うくん、と言われても前に話した通りですよ？」

彼女に本来の能力を打ち明けた時にCA大学時代の話もした。だから、改めて話すようなことはもうなにもない。

すると奈緒は、「恋人はいなかったんすか……………？」と真剣半分、不安半分にそんな感じに訊いてきた。「いませんでしたよ」と、正直に答える。——実際、そんなことを考える余裕はなかった。

「ほんとっすか？」

どこか嬉しそうに疑ってくる。

「ずっと研究室に籠っていましたから。そもそも恋人なんていたら日本に帰国してませんよ。それに——」

「それに？」

「そばに居たいって思えたのは、あなたが初めてです」

「……………そ、そうっすか。それはまた奇特な方で……………」

頬を染めて顔を背けた。けど、直ぐに復活した。

「お昼を食べに行きましょう」

「え、けど……………」

時計を見る。まだ、9時になったばかり。

「ほらほら、行きますよー」

「あ、はい」

有無も言わず、手を引っ張られて連行された。結局、あちこちと買い物に付き合わされて休日は終わった。

それから結局、昨夜の話はどちらも口にしなかった。

——いや、お互いに言葉にするのが怖かったのかもかもしれない。

\* \* \*

翌日の昼休み。久しぶりに男三人学食で昼食を食べることになった。乙坂おとしがに、記憶の進行具合を訊ねる。

「夢の方は、どうですか?」

「ん? ああ、そうだな。前よりは少しだけ鮮明になった気がするけど、相変わらず顔は靄がかかったみたいで上手く思い出せない」

「そうですか」

——どうやら、まだ時間が必要なようだ。

「いったいどこの誰が、なんのために乙坂おとしがさんの記憶を操作したんでしょうね?」

「それが解れば苦労しないんだけどな」

乙坂おとしがと会話をしていた高城たかしょうのスマホが震動した。

「おや……友利ともりさんからです」

「まさか、熊耳くまがみの呼び出しかッ!」

乙坂おとしがが大きく反応した。

俺たかしょうも高城たかしょうも、同く反応をする。

「ありえますね。急ぎましょう」

「はい! なんでこんな時にパスタを頼んだんでしょうか! 私わたしはっ!」

「ああ、くっそ! まったくだっ!」

「……………」

サンドイッチを食べながら悪戦苦闘する二人を眺めて、食べ終わるのを待ってから急いで生徒会室へ向かった。

「おっせえな! お前まへら何座だ!」

生徒会室に入ると、生徒会長席に行儀悪く足を組んだ奈緒なから罵倒おの言葉を頂戴するはめに。その隣には既に生徒会室に来ていた黒羽くろばねが、苦笑いをして気まずそうに立っている。

「申し訳ありません。昼食がパスタだったので、かきこむのにいささ

か時間が掛かってしまいました」

「……まあ、いいです」

高城たかしようが、どこか不思議そうな表情かおをして眼鏡を直す。それが気になり声をかける。

「どうしました？」

「いえ、いつもなら激しい罵倒くまがみが飛んでくるモノでしたので……」

「それより用件は？ 熊耳くまみみが来るのかっ!？」

やや興奮気味に奈緒なおに問いかける、乙坂おとせが。

「いえ、今回はあいつは現れません」

「そう、か……」

明らかにうなだれた。代わりに何の用件か聞こうとしたら「では、なんの用件でしょう？」と高城たかしようが訊いてくれた。

「これです！」

奈緒なおは、バーン！ と音が出るほど机に長方形の紙を置いた。置かれた紙を高城たかしようが確認する。

「これは…… ZHIEジエNDンドのライブチケットですね」

「ZHIEジエNDンドって、乙坂おとせがさんの記憶を取り戻すきっかけになるかもって言うっ？」

黒羽くろはねは口元に人差し指を当てながら聞く。

「はい、その通りですよ」

「そのZHIEジエNDンドのライブチケットが、ここに1枚あります。これをどうするかが問題です」

「いや、お前が見に行けばいいじゃないか？」

「そりゃ、あたしだって行きたいです。前から楽しみにしてましたから！ ですが……」

奈緒なおは、乙坂おとせがを見る。

彼も彼女の視線には気がついていない様子。

「なんだよ？」

「はあく、察し悪いなー！」

「つまり奈緒なおさんがいいたいのは、今回は乙坂おとせがさんに譲るということですよ」

めんどくさそうにタメ息をつく奈緒の代わりに、買いつまんで説明する。

「え!? 僕に? なんで?」

「脳ミソ詰まってるんすか? あなたの記憶を取り戻すきっかけになるかも知れないっしょ?」

「あ、そ、そうか……」

「と言うことで、あなたが見に行ってくださいっ」

机に置いたチケットを乙坂の胸に押し付ける。少し躊躇したが、それを受け取った。

「…… わかった、行かせてもらうよ」

「はい。あと首尾よく助けたら、あたしに歩未ちゃんをください」

「やるかっ!」

と、最終的に不毛な話で終わり。それぞれ生徒会室を後にし始める。生徒会室を出る前に黒羽が笑顔で、奈緒に寄っていった。

「友利さんっ」

「なんですか?」

「よかったですねーっ」

「はあ? なにがっすか?」

黒羽は、奈緒の耳元で何かを囁いているみたいだ。

「…… なっ!」

奈緒が驚いた表情になった。対照的に黒羽はますます笑顔になって、「やっぱりっ」と、どこか嬉しそうに教室へ戻っていった。

—— いったい、なにを話していたのだろうか。

残された奈緒に話しかける。

「どうしたんですか?」

「な、なんでもないっす! さあ、あたしたちも教室へ戻りましょう!」

なぜかとても慌てている彼女に背を押されて、生徒会室を出て教室に戻る。よく見えなかったけど、彼女の頬は少し紅かった気がした。

## Episode 27 後悔

目が覚めると、ベッドで横になっていた。

見覚えのある天井、年期が入ったくすんだ天井、懐かしい天井。いったいどうして俺は、ここに居るのだろうか？ そんな疑問が頭に浮かぶ。

「ここ、は……ッ!？」

想定外の出来事に驚いて飛び起きる。

これは、いったいどういうことなのだろうか。今自分が置かれている状況を把握することすら出来ず。ただただ戸惑うことしか出来なかった。

冷静に事態を把握することが出来るようになったのは、しばらく経ってからのことだった――。

\* \* \*

誰かに呼ばれている。

体を感じるわずかな振動と一緒に聞こえる声。優しい声、心地良い声。誰だろう、俺を呼んでいるのは――。徐々に意識が覚醒していく。まぶたをゆっくりと開いて周囲を見回す、生徒会室。どうやら俺は、話の最中に眠ってしまったらしい。

「大丈夫ですか？ 少しうなされていたていましたけど……」

すぐ傍で、奈緒が心配そうな表情をしていた。

「大丈夫ですよ。すみません、話の途中に寝てしまつて」

「いえ。今日も熊耳は現れないようでしたので、もうみんな帰りました。あたしたちも帰りましょう」

うなづき手分けして生徒会室の戸締まりをして、星ノ海学園の校門をくぐる。彼女の自宅がある併設マンションの方へ向かって歩道を並んで話をしながら歩く。

「おつかれみたいでするので、スタミナの付く料理を食べましょう」

「と言いますと?」

「お肉に決まつてるじゃないですか!」

間髪入れずに、とても魅力的な笑顔で答えた。

「ですよ」

「はいっ。と言うことでさっそく、スーパーへ寄って帰りましょー」

マンションの前を素通り。最寄り駅近くのスーパーマーケットへ行くことになった。目的のスーパーに到着、買い物カゴを乗せたショッピングカートを押して、さっそく精肉コーナーへ。

「どれにしよっかな。やっぱり、牛肉つかね？ でも、スタミナ満点の豚肉も捨てがたいっすし」

「うーん……」と難しい顔でメニューと相談しながら牛と豚、鶏肉のパックを見比べて悩んでいる。

「友利と、宮瀬か？」

「んー？」

不意に名前を呼ばれた俺たちは、同じタイミングで振り向く。前にも同じようなことがあったような気がする。どことなく既視感を覚えながら声の主を確認すると、乙坂おとさかだった。

「ああー、あなたでしたか」

「お前ら何してるんだ？ こんなところで」

「夕食の買い物ですよ。乙坂おとさかさんもですよ？」

「ああ、僕も同じだよ。夜飯の調達に来たんだ」

そう言うと乙坂おとさかは、出来合いの弁当とお茶のボトルが入ったカゴを軽く持ち上げて見せた。カゴに視線を落とした彼女は、彼に問いかける。

「いつも、お弁当なんですか？」

「ん。まあ、そうだな。自分で作るのよな」

彼女はチラッとこちらに目配せ。言いたいことはすぐにわかった。返事をする代わりにうなづいて答える。

「そうですか。では、そのお弁当は戻してきてください。たまには温かい食事をしないとダメです」

「いや、食べてるぞ」

「カップ麺とか古典的なこと言わないっすよね？」

「そ、そんなわけないだろ？」

思い切り目を泳がせ、顔を背ける。凶星だったみたいだ。

「出来合いの弁当ばかりだと体壊しますよ。ほら、置いてきてください」

「乙坂さん」

「……わかったよ」

押しきられた乙坂は、弁当をしぶしぶ戻しにいった。

「さて。では、あたしたちは買い物再開しましょう」

「献立は決まりましたか？」

「ん、そつすね」

再び「うん……どうしよつかなく」と、悩みながら食材を見て回る。そして。

「うん、トンカツにしましょう」

「トンカツですか。パン粉とか調味料、見てきますね」

「はい、お願いします。あ、パン粉は油分カットののでお願いします」

別行動を取って、指定されたパン粉と食用油などの材料、胡椒などの調味料を探していると、また同じように声をかけられた。弁当とお茶を元の売り場に戻し、手ぶらになって戻ってきた乙坂。

「ひとりなのか？ 友利は？」

「食材を見えますよ」

「そっか。悪いな」

「はて？ 何のことでしょう？」

「……いや、なんでもない」

「そつすか、じゃあ行きましょう」

近くにカゴがなかったため半分持つてもらう。既に食材を選び終えていた奈緒と、レジ付近で合流。

「お待たせしました」

「あ、来ましたか」

「これでよかったですか？」

「はい、問題ありません。ありがとうございませう」

食材を傷めないように、カゴの中へ入れる。

「で、何を作るんだ？」

カゴの中を覗き込もうとした乙坂を阻止するように、奈緒はすつと死角にカートを移動させた。

「なんだよ?」

「出来てからのお楽しみです。ほら、レジへ行きますよー」

レジで会計を済まして、併設マンションの乙坂の部屋へ向かう。来た道で買い物袋を持って歩き、マンション入り口に着くと見知った顔がいた。黒羽。

こちらに気がついた黒羽は、笑顔でパタパタと早足で駆け寄ってくる。見慣れた制服姿ではなく、ライブの後の時のようなラフな格好をしている。

「あれ? みなさん、お揃いでどうしたんですか?」

「柚咲か」

「これから乙坂さんの家で晩ご飯を作るんですよー」

「あ、そうなんですネー」

「ところで、黒羽さんは?」

「えっと、マンションの周りを走っていました」

「オフなのに大変なんだな、アイドルって」

「お疲れさまです。奈緒さん」

声をかけると、彼女はすぐに俺が言いたいことを察してくれた。

「黒羽さんも夕食がまだでしたら、一緒にどうですか?」

「えっ? わたし、お邪魔していいんですか?」

「もちろんですよ」

俺の言葉の後に「いいですよ?」と、奈緒は家主の乙坂に目を向けて確認をとる。「ああ、別に構わないよ」と乙坂が頷いたことで、黒羽も一緒に夕食を食べることが決まった。

「食材の買い足しに行ってきますね」

「お願いします。あたしは先に下準備をしておきますので」

「じゃあ、僕も……」

一緒に買い出しに行くと言った乙坂を、奈緒は呼び止める。

「あなたが居ないと家に入れないっしょ」

「あ、それもそうか」

「それでしたら、わたしがお手伝いします」

二人のやり取りを見て、黒羽くろぼねが名乗りをあげた。

「そもそも、わたしの分ですし」

彼女から発せられる無言の視線が痛い。

「えっと。あの——つたく、これならいいだろう!？」

見かねた姉の美砂みさが、黒羽くろぼねへ降りてきた。奈緒なおは少しおもしろくなさそうに言う。

「美砂みささんがいいなら、別にいいっすけどー」

「めんどくせえーな。おい、さつきと行くぞー!」

「とりあえず、行ってきますね」

先に歩き出した美砂みさの背中を追って、先ほどのスーパーマーケットへと急いだ。道中、美砂みさと話す。

「こうして、二人で話をするのは初めてですね」

「ん? ああ、そうだな……」

「黒羽くろぼねさんは——」

「美砂みさでいい、あいつらもそう呼んでるし。ややこしいだろう?」

「そうですか。では、美砂みささんで」

「で、なんだ?」

「意識的に出ないようにしてましたよね」

凶星を突いたからしく、美砂みさは足を止めた。空気がほんの少しだけ重くなった。

「…… チツ、気づいてたか」

「そりや気づきますよ」

緊急事態とはいえ、黒羽くろぼねを自宅に泊めた時も美砂みさは出てこなかった。普通なら心配して出てくるだろう。これで気づかない人は相当鈍感な人間だと思う。彼女はやや声のトーンを落として、ゆっくりと打ち明けた。

「アタシはお前と初めて会った時、妙な恐さを感じていたんだ。柚咲ゆさきはお前のこと優しそうって言ってたけど、笑顔の向こう側に冷めたもんを感じてた」

「女の勘ですか?」

「アタシは一度死んでるから、たぶんそういうのに敏感なんだ」  
「確かにそうだったかもしれないね。死に急いでいた訳ではないですけど」

「けど、今のお前から優しさをを感じる。それは、あいつのためなんだろ？」

「そつちも気づいてましたか」

「先に気づいたのは柚咲だけだな。しっかし、あいつのあんな顔を見れるなんて思わなかったぜ！」

彼女は、とても愉快気に笑った。きつと、生徒会室での奈緒と黒羽のやり取りのことだろう。

「よし！ 着いたな。で、何を買うんだ？」

「トンカツ用の豚肉と付け合わせキャベツに調味料です」

「おおつ、晩飯はトンカツか！ さっさと済ませちまおうぜ！」

美砂のテンションが上がった。彼女も肉が好物なんだろうか。今度黒羽に、それとなく訊いてみるのもいいのかも知れない。初めに入口近くの野菜売場でキャベツひと玉をカゴに入れ、続いて精肉コーナーでトンカツ用の厚めの豚肉二枚のパックをカゴの中に入れる。

「ん？ 一枚多いんじゃないのか？」

黒羽の分だけなら確かに一枚だけいい。

「彼も呼ばないワケには行かないでしょう？」

「……誰を？」

絶対分かってていっている。苦手意識があるのかやや嫌そうな表情をした。

「身の危険を感じるんだ」

とても正直だった。黒羽が絡んだ時の高城のテンションは異常。

一緒に夕食なんて言った日には、どんなテンションになるのやら。まあ、どうにかなるだろう。一緒にキャンプもしたことだし。

「美砂さんが出ていれば、安心じゃないですか？」

「それでもいいんだけどよ。やっぱり、柚咲に食べてもらいてーんだ。

柚咲は、いつもひとり食べてるからな。一緒にはいるけど、一緒に食べてはやれねーからな……」

普段の強気な美砂とは違って、とても優しくも寂しそうな表情。少し言葉や態度がキツいところはあるけれど、妹思いの優しい姉なんだと改めて思えた。

「わかりました。彼が暴走しそうになった際は抑えます」

「そっか、わりーな」

「いえいえ」

そんなやり取りをして、レジで会計を済まし、スーパーを出る。併設のマンションへ向かう前に高城にメールを入れておいた。携帯をポケットに入れた直後に返信が来た。「ゆさりんと夕御飯!? 是が非でもっ! 大枚はたいても参加させてくださいっ!」と。

「お前、ちゃんと責任とれよ?」

「はい……」

少し後悔しそうになった。スーパーを出て少し歩いた頃、美砂が唐突に話を切り出した。

「ちよつと柚咲に替わるな」

「あ、はい、どうぞ」

——ふつ、と彼女の雰囲気が変わる。

「あれ? 宮瀬さん? もしかしてわたし、また寝てましたか?」

「きつと運動のあとで疲れていたんでしようね」

適当に話を合わせておく。

「あ、そうだ!」

言葉尻は緩いが、声色は真面目。だから、こちらも真面目に聞く。

「なんでしよう?」

「泣かせちゃダメですよ?」

「はあ?」

なんのことかわからず生返事を返してしまう。

「宮瀬さんがアメリカにいった日、友利さんの瞳、赤かったんですよ?」

——ああ、そういうことか……最低だな。

「善処させていただきます」

そう返事を返すと、また雰囲気が変わった。

「大変だなっ！ お前もっ！」

「笑いながら言わないください」

黒羽くろばねにはお叱りのお言葉を頂戴し、美砂みさには弄られた。止まっていた足を動かし、再び併設マンションに向かつて歩き出す。併設マンション前の信号機の無い横断歩道の前で左右を確認してから渡る。途中で美砂みさの一步前に出て、彼女の内側を通り歩道に戻る。

「ふーん、そういうところか」

「なんですか？」

訊いた直後、俺の真横をスクーターが通り過ぎた。

「原付き、か」

「結構飛ばしてましたね」

法廷速度を遥かに超えるスピードを出していた。美砂みさは足を止め、猛スピードで走り去っていくスクーターを寂しそうに見つめている。

「スクーターがどうかしましたか？」

「……聞いてないのか？」

「何をです？」

「アタシが……」

口をきゅつと結んで話すのを躊躇している。おそらく美砂みさの死の理由に関係することだったのだろう。彼女の様子から見て、バイク絡みの交通事故。

「無粋でしたね。すみません」

「……ッ」

「はい？」

小さくて上手く聞き取れなかった。

「……ダチとニケツして単独で事故った」

バツが悪かったただけか。返事をせずに黙りこむ俺に、美砂みさがキレた。

「っんだよっ!? 文句あんのかつ！」

「なんで、美砂みささんがキレルんですか？」

舌打ちをして、簡単に経緯いきざしを話してくれた。彼女は生前は、両親に反発して少しばかりやんちゃをしていたらしい。そして半年ほど前、

仲間の原付きで二人乗りして事故に遭い亡くなってしまった。

「柚咲はアタシになついていたから、スゲー辛い思いをさせちまったし。親不孝ばっかで……。まったく、センスがねえぜ……。」

「後悔してるんですね」

「ああ……。」

話を聞き終わつた頃、乙坂おとさかの家の前に到着。ちょうど大きめの荷物たかじょうを持った高城たかじょうもやって来た。

「ゆさりん！ と宮瀬みやせさん、お疲れさまです」

テンションに差を感じた。どうやら高城たかじょうにとって、俺はついでみたいだ。

「ゆさりんじゃねえよ！」

美砂みさは牽制するように言い放つ。思わぬ出来事たかじょうに高城はたじろいだ。

「み、美砂みささん!」

「アタシじゃ文句あんのかつ！ ああん!」

「い、いえ、ありません……。」

美砂みさの迫力たかじょうに気圧される高城。

「で、お前何を持ってきたんだ？」

「これですか？ あとのお楽しみですよ。ふふふ……。」

「なんだよ、もったいぶりやがって」

「えっと、とりあえずお邪魔しましょう」

乙坂家おとさかのインターフォンを押す。中からの反応を待っていると、高城たかじょうが小声で訴えてきた。

「ところで宮瀬みやせさん、話が違うじゃないですか」

「黒羽くろばねさんとは書きましたけど、柚咲ゆささんとは書いてませんよ?」

「謀りましたね!」

批難を聞き流しているとドアが開き、家主おとさかの乙坂が顔を出した。

「お前も来たのか」

「はい、お邪魔させていただきます!」

「別にいいけど、上がってくれ」

「邪魔させてもらうぜ」

「キッチン、お借りしますね」

食材の入ったビニール袋を持って、俺はキッチンへ行く。奈緒は既に下ごしらえを終わらせていた。

「あ、おつかれさまですー」

「いえ、手伝いますね」

「はい、おねがいます」

二人で五人分のちよつと遅い夕食を作り始める。リビングの方では三人の盛り上がっている声が聞こえてきた。トンカツを揚げながら隣を見ると追加で買ってきた豚肉を、奈緒が調理していた。その過程を見ていると少し気になることがあった。

「なにしているんですか？」

「ちよつと……これだよしつと。もう揚がったんじゃないですか？」

鍋に目を戻す。いい感じにこんがりときつね色に揚がっていた。キッチンペーパーで余分な油を切り、千切りにした大量のキャベツを横に添える。

「出来ましたよー」

テーブルにご飯と味噌汁も一緒に用意して、奈緒はリビングで盛り上がっている三人に声を掛けた。テーブルに着いた三人は、出来上がった料理を見て声をあげた。

「なんとっ」

「ああ、すごいな……」

「うまそうだなっ！」

「はいはい、手洗ってきてください」

奈緒の指示に素直に従い、三人は手を洗って席につき料理を食べ始めた。

「う、うまいー！」

「衣はサクツとしていて、中はとても柔らかくジューシーですね！」

美味しそうに食べる二人の向かいで無言で俺に目を向けた美砂は、クイツとアゴで指示を出す。わかってますよ……。

「高城さん、飲み物を用意するのを手伝ってもらえますか？」

「はい、お任せください」

高城は席を立ち、飲み物を用意するのを快く手伝ってくれた。まったく良心が痛むな。

「お湯を沸かすのを忘れていました」

「では、私がやりましょう。乙坂さん、こちらの電気ケトルを使わせていただいても？」

「好きに使ってくれて構わないよ」

「了解いたしました」

ケトルに水を注いでいる間に、テーブルの方を確認する。

「友利さん、すっごくおいしいですっ」

「そうっすか」

上手くいった。ポットをセットし電源を入れている高城に話題を振る。

「盛り上がっていたようでしたけど、何をしていたんですか？」

「よくぞ聞いてくれました！ 私が持参した、似天同46の配管工カートをプレイしていたんです！」

あの荷物の正体は据え置きของเกม機か。

「レトロゲームですよね？」

「はい、我々の産まれるよりも前、今から約20年近く前のゲームです。乙坂さんは、携帯ゲーム機を持っていないそうでしたので、両親の持ち物を拝借してきました。最新作と比べると使用キャラのバリエーションや、グラフィック、操作性などの面において作り荒い部分は多々ありますが、プログラムの穴を利用したショートカットも多数存在し、最下位から逆転優勝を狙えること等もあり、今だ根強い人気を誇っているんですよ」

「へえ、そうなんですか」

高城の力説に生返事を返しつつ、沸いたお湯を適温に冷まして急須に注ぎ、濃い目にお茶の入れる。氷で冷やした冷茶を作ってテーブルに戻ると、美砂に戻っていた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「ごちそうさままでしたっ！ 乙坂、高城、勝負の続きやるぞ！」

美砂は冷茶を飲み干すと、二人を急かすように言った。

「またやるのか？」

「少々お待ちを！」

急かされた高城と乙坂は、残ったおかずを急いでかき込み、冷茶で流し込んだ。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」

「ほんとう良かった。ありがとうな」

「いえ、お粗末様です」

「片付けはしておきますので、どうぞ」

「悪いな、なにからなにまで……」

「いえいえ」

奈緒にお礼を言って、二人は美砂の待つリビングへ。俺は奈緒の正面の席につく。

「では、あたしたちも食べましょう」

「そうですね」

「ちよつと冷えちゃったつすけど」

「でも、おいしいですよ」

「そうっすか？ それならよかったです」

少し冷えてはいたけど、味はしつかり付いていた。きつと奈緒は、こうなることを最初から見越して追加の豚肉にしつかり下味を付けていたみたいだ。食べ終わり片付けを終えて、ゲームをプレイ中の三人に声を掛ける。

「おーい、そろそろおいとまするぞー」

「おや、もうこんな時間ですか。続きはまた後日と行きましょう」

「ああ、そうだな」

「チツ、しかたねーな」

壁時計を見て高城は同意し、美砂は名残惜しそうにしている。乙坂は、ちよつと疲れたようすだ。

「お騒がせしました」

「いや、久しぶりにいい気分転換になった。ありがとうな」

玄関先で見送られ、俺たちは外に出る。

「うまかったぜっ！　じゃあな！」

「では私も、ここ失礼します。ごちそうさまでした」

美砂みさと高城たかしやうは、それぞれ自宅へと帰っていった。二人を見送ったあと奈緒なおは俺を見る。

「時間があるようでしたら少し寄って行ってください。期末試験のところで教えて欲しいところがあるんです」

「はい。あ、そうだ。プリンを買っておきました」

「おおく！　気が利くつすね、行きましょーっ」

上機嫌になった奈緒なおの一步後ろついて歩き、彼女の部屋へと向かった。

## Episode 28 〱 歌声〱

「結局、今日も現れないかー」

「そうみたいですネ」

今日も熊耳くまがみは現れずしまい。

結局、あの日からなにも進展はなく、ただ時間だけが過ぎ去って行く。

「乙坂さん、記憶の方はいかがですか？」

高城たかしように問いかけられた乙坂おとしさかは、首を横に振って答えた。彼の記憶の方も特にこれといった進展はみられないようだ。

「そうですか」

「手がかりなしのようですね。今日も解散にしましょう」

「はい、わかりましたー。それではお疲れさまでーすっ」

「我々も帰るとしましょう。どうですか乙坂さん、先日の勝負の続きをすると言うのは？」

「ん？ ああ、そうだな……」

黒羽くろばねはこれからクラスメイトの女子友だちたちと買い物へ。高城たかしようの誘いを少し悩みながら乙坂おとしさかたちは帰宅していく。

扉が閉まり、生徒会室で二人きりになると「はあ……」と、奈緒なおが珍しくため息をついた。

「お疲れですか？」

「あ、いえ、明後日は『ZHIEND』のライブだなーって」

「ああ……」

ZHIENDジエンは世界的に人気のあるポストロックバンド、チケットが当たったのも奇跡のような確率だ。

「わかってるんすけどねー。でも、やっぱり行きたかったなー」

頭の後ろで手を組んで名残惜しそうな表情かおを見せた。そんな彼女に問いかける。

「よかったですか？」

奈緒なおは言わないけど、ZHIENDジエンのライブチケットは必ずもう一枚あるはずだ。闘病中の一希かずきさんの分を取っていないワケがない。

だから、本当に行きたいのなら――。

「なにがすすか?」

逆に聞き返されてしまった。

俺が聞きたいことは見透かされているんだ思った。だから俺は、違う提案をすることにした。

「いいえ、なんでもないです。デートしましょうか?」

「――えっ?」

「ライブの代わりにはならないかもですけど――」

「…… します、しましょうっ」

「よかった。じゃあ決まりですね。どこ行きましょうか?」

「そうっすね〜」

さつきまでの顔が一転して嬉しそうに腕を組んで考えて考え込む。

「シヨップングだと放課後の寄り道とかわんないですし……」

「そうですね。とは言っても遠出は熊耳くまがみから呼び出しの可能性がありませんね」

奈緒なおは「そうなんすよねー」と、組んでいた腕を再び頭の後ろで組み直し、椅子の背もたれに体を預ける。俺も左手を口元に持っていつて考えるが、これといったところは思い浮かばなかった。

そうこうしているうちに下校時間を知らせる放送が校内に響き渡った。

「日曜日までに一緒に考えましょうか」

「はい、そうしましょう」

急いで戸締まりして生徒会室を後にし、奈緒なおを併設マンションの入り口まで送り届ける。

最寄り駅への道を歩くと先日夕食の買い物をしたスーパーの近くで、乙坂おとしざかを見つけた。隣に行つて声をかける。

「乙坂さん」

「ん? ああ、宮瀬みやせか」

「夕食の買い出しですか?」

「ああ、弁当を買いにな」

「そうでしたか」

——ちょうど、いい機会なのかも知れない。

「暇だったら一緒に夜飯行きませんか？」

「まあ、別にいいけど？」

「じゃあ行きましょう」

以前黒羽くろばねと食事をした六本木タワーに暖簾を構える店へ、乙坂おとさかを連れていく。個室くろばねがあり、客のプライバシーを一番に尊重してくれるこの店なら外部に話が漏れることは絶対にならない。その証拠に黒羽くろばねと食事したことも一切外には漏れなかった。

「めちやくちや高そうなんだが！ しかも会員制とか書いてあるぞ！？」

店構えを見て、乙坂おとさかは盛大に取り乱した。

「そう見えても値段は良心的なんですよ」

「ほんとかよ……」

疑いの眼差しを向けてくる乙坂おとさかをうながし、店内に入り、個室席を用意してもらいメニューを開く。

「どうですか？」

「ぶっ飛んだ値段のものもあるけど、日替わり定食なら500円のワンコインからあるのかっ！」

「意外でしょ？」

「ああっ」

「年間費の分、食事の価格は良心的なんです。それにおかわり自由です」

「マジか!? 豪華な弁当よりも安上がりになりそうだ！」

互いワンコインの日替わり定食を注文。運ばれてきた定食を食べると、乙坂おとさかは箸を止め話を切り出した。

「この前は、ありがとな」

「なんのことですか」

「友利ともりと夜飯を作ってくれただろ」

「ああー、そのことですか。むしろこちらが強引に押し掛けたんですけど」

「いや、あのうざいくらいの賑やかさが…… ありがたかった」

心からそう思っているのが解るほど、とても穏やかな声だった。

「それにしても、友利ともりのヤツ、変わったよな」

「そうですか？ 初めて会ったときから、あまり変わらない気がしま  
すけど？」

「いや、宮瀬みやせは知らないだけだぞ。僕なんて、初めて会った時ボコボコ  
されたんだ……」

いつも調査に使っているビデオカメラで特殊能力を使用した証拠  
映像を撮られ、それを奪い取ろうとしたところ奈緒なおに特殊能力を使わ  
れ返り討ちにあつたらしい。

「へえー、そうなんですな」

「…… お前、信じてないだろ？」

「信じてますよ？ 一度話の腰を折った高城たかじょうさんに蹴りを入れてま  
したし」

「あれは高城たかじょうの自業自得だ。けど、なんか最近ちよつと優しくなった  
気がする」

「もともと優しい人ですよ。彼女は」

きつと誰よりも特殊能力者のことを案じている。だからこそ、時に  
は説得に暴力を使うことになっても止めるんだ。

「そうか……、お前が言うならそうなんだろうな。宮瀬みやせが転入して  
くる前に高城たかじょうから聞いたんだけど、中学に入学する前の友利ともりは、今み  
たいな性格じゃなかったって」

—— 中学入学前。ちようど奈緒なおと一希かずきさんが科学者に捕らえられ  
た頃か。

「もしかしたらお前という時の友利ともりは、その頃に近いのかもな」  
「…… どうですかね。俺は、今の彼女しか知らないから」

「そっか、そうだよな……。なあ……」

乙坂おとしざかの表情が変わった。

こちらが本題だったんだろう。

「本当に見つかると思うか……？」

「見つけるんですよ、必ず」

「けど……」

「どんな犠牲を払ってでも救うんだろ？ あれは、嘘だったのか？」

「——ッ！ いや、僕は歩未あゆみを助ける、絶対に……！」

「だったら余計なことを考えるな。例えなにが起きようとも『必ず助けだす』。今は、それだけを考えろ」

「ああ、わかった。すまなかつた」

そう言う乙坂おとさかは、制服のポケットから「時空移動」タイムリープ能力者の資料を取り出す。

「それから、ずっと気になってたんだが」

「なんですか？」

「この能力者、今は能力が使えないって書いてあるんだが……」  
資料を指差して言った。

「それについては問題ありません。いくつか方法があります」

「方法？ どんな？」

「お前の本当の能力チカラ、『略奪』で奪い取る」と教えてやりたかったが、乙坂おとさかは自分の能力を「乗り移り」だと思っている。奈緒なほもあえて真実を教えていない、なら今はまだ話さない方がいいだろう。

「その時になればわかりますよ」

「なんだよ？ それ」

「言葉通りですよ。さて、そろそろ出ましようか」

「あ、ああ……？」

会計を済ませエレベーターで一階へ降り、タワーの外まで乙坂おとさかを見送る。

「じゃあな」

駅の方へ向かって歩いていったのを見届けて、俺は自宅へと帰る。シャワーを浴びて、ベッドに横になりながら考えごとをしながら眠りについた。

\* \* \*

「今日も来ませんね」

「はい、じゃあ解散っ！」

高城の言葉聞いて、奈緒は解散を宣言をした。

「じゃあ僕は帰る」

「おつかれっすー。あつ、明日のライブ、ちゃんと行ってくださいよー？」

「ああ、わかってるよ」

乙坂が生徒会室を出ていった。彼の後を追うように高城と黒羽も帰宅していった。

昨日と同じように放課後の生徒会室で、奈緒と二人きりになった。

「俺たちも帰りましょうか？」

声をかけたが、雑誌に目を落としたまま反応が返ってこない。

「奈緒さん？」

「決めましたっ。お家デートにしましょうー！」

バンツ！ と机を叩き、急に椅子から立ち上がった。

「お家デート……ですか？」

「はい。家で映画のDVDを見たり、音楽を聴いたり、一緒に料理したりするんですっ」

手元の雑誌を見ながら説明してくれた。

「そうですね、そうしましょう」

「はいっ。と言うことでDVDをレンタルしに行きましょうー」

いつもより早く星ノ海学園を出て、レンタルショップへと向かう。その道中、「す、すみません」と少し前を歩く星ノ海学園の男子生徒が慌てた様子で、白い杖をついた女性を避けながら軽く頭を下げた。

その女性を見た奈緒が、「あつ」と小さく反応した。俺も見覚えがあった、それもつい最近のことだ。

彼女はすれ違いざまに「Why avoid me? Shit!」と、とても不愉快そうな声を発した。——この声、間違いない。

「すまない」

「宮瀬さん？」

「ん？」

彼女に英語で声をかける。奈緒は、意外にも余り興味がないのか声を掛けたことを不思議そうに俺を見て。女性の方は立ち止まって振

り向いた。

「人違いだったら——」

「お前は、日本人かっ？」

「え？ ああ、そうだけど……」

「おおっ、そうか、日本人か！ お前は、モダン焼きを知ってるか!？」  
女性の言葉が急に日本語になった。カツカツツ！ と白い杖を突きながら興奮したようすで俺の目の前まで来てで立ち止まる。

「日本語できるんですか？」

「んなこたあー、どうでもいいっ！ モダン焼きだよ、モ・ダ・ン・焼・  
きー！」

杖を持っていない方の人差し指で俺の胸をつつきながら、モダン焼きを知ってるかしつこく訊いてきた。

「え、ええ、一応知ってますけど？」

「おおっ、知ってるのか！ 頼む、食える場所に連れてってくれっ！」

「えっと……」

奈緒なおを見る。「仕方ないっすね」と言いたそうな表情かおしながら彼女が答える。

「いいですよ、お店まで案内します」

「本当かっ？ 感謝するぜ！」

「あたしに掴まってください」

「おお、ありがとよ」

「宮瀬みやせさんも行きましょう」

奈緒なおは、女性に手をかして慎重に歩きだした。駅から少し離れた商店街に到着し、一軒のお好み焼き屋に入る。

「いらさいあせー」

店に入るとイントネーションにクセのあるビジュアルバンドメンバーのようなハデな店員が出迎え、座敷席に案内してくれた。女性は鉄板が埋め込まれたテーブルを挟んで向かいに座り、奈緒なおは俺の横に座った。メニューを広げる。

「モダン焼きは……メニューにないっすね」

「ないのか!？」

メニューにないと知った女性が思いきり落胆する。

「大丈夫ですよ。作ればいいんですから」

「作れんのかっ!」

「モダン焼き風になっちゃいますけど」

「ああ、それでいい。頼む!」

ちょうど店員がメモ帳を片手にやって来た。

「きまったかい?」

「生中!」

女性は、すぐさま手を上げて生ビールを注文した。

「はあいよ」

「あたしたちもここで食べましょう。ちよつと早いつすけど」

「そうですね。じゃあお好み焼きと焼きそばを二人前、あとウーロン茶を2つお願いします」

店員は、メモ帳に馴れた手つきで注文を書き込む。

「それと、だし汁を少しいただけますか?」

「はあいよ。自分たちで焼くかい?」

「はい」

「はあいよ」

厨房に戻った店員は、早速彼女が注文した生中を持ってきた。

「生中とウーロン二つ、おまち! ところで、もしかしてそちらの方は?」

持ってきたジョッキを一瞬で飲みほした彼女が答える。

「ちよつす! ZHIE<sup>ヅ</sup>ND<sup>ド</sup>のボーカル、サラ・シエーンでよつす」

—— やっぱり。そうか……。奈緒<sup>なお</sup>を見る、特に表情を変えていない。俺の視線に気が付いた。不思議そうに首を傾げた。

「なんですか?」

「いえ、なんでもありませんよ」

ZHIE<sup>ヅ</sup>ND<sup>ド</sup>のボーカリストのサラだと気が付いた店員は動揺した。その様子から見て、彼女のフアンのようだ。

「サ、サラさん!? サラさんがこんな小汚ない店に来てくださるなんてっ! 感激っす! 明日のライブ観に行きます! それで! そ

の色紙にサ、サインをつ」

「あ、いいよー」

小走りに厨房の奥に行き、色紙とサインペンを持って戻って来た。その色紙とサインペンをサラに手渡す。サラは色紙とペンを受けると視力を失っているはずなのにスラスラと器用にサインを書いた。「ありがとうございます！　こちらお好み焼きと焼きそばでつす！　どうぞー！」

「ありがとうございます。じゃあ作りましょうか」

「はい」

まずは焼きそばをだし汁で炒め、それをお好み焼きと混ぜて焼き上げ、モダン焼き風に仕上げる。出来上がったモダン焼き小皿に取り分けて、サラに手渡す。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

サラは器用に箸を使い、モダン焼きを口に運んだ。目をつむりじつくりと吟味している。

「うくん…… うまいっ！　これがモダン焼きかつ！　さすがジャパンー！」

「それはよかったです。奈緒さん、食べましょうか」

「はい。うくんっ、美味しいな」

モダン焼きを食べ終わり会計を済ませ店を出ると、サラが唐突に話を切り出した。

「ところでさ、おまえらなにかあったのか？」

「と、いいますと？」

「二人とも、なんかスゲー覚悟みたいなモノを感じる」

「わかるんですか？」

「見えない分、息遣いや声色で分かるんだよ。なんとなくな」

サラの言葉に、奈緒は黙ったまま目線を落とす。

「仲はスゲー良いみたいだし、別れ話って訳じゃないみたいだが。よかったです聞かせてくれないか？」

少し躊躇したが近くの公園に移動して、ベンチに腰をかけて話をす

る。もちろん能力のことは隠して。

「な、なんてこった……彼女さんのお兄さんと友だちの妹さんが……！」

サラは両手で頭を抱え、まるで自分のことのようにうなだれた。

「奈緒さんのお兄さん、一希さんは、ZHENNDの……あなたたちのファンだったんです。ZHENNDに憧れてギターを始めたんです」

奈緒は、黙って俺の手を握ってきた。その手を握り返す。

「そうか……奈緒のお兄さんに会わせてくれないか？」

「さすがにそれは……それに明日ライブでしょ？」

「んなもんはどうでもいい！リハなんてバンメンがどうにかしてくれる！会わせてくれ、頼むっ！」

手を合わせたサラは、真摯な言葉と一緒に頭を下げた。

「……奈緒さん」

「……わかりました。お願いします」

奈緒は、彼女の言葉に頷いた。

一希さんが入院している他県病院を目指す。途中で立ち食いそばを食べたいとリクエストされ、駅で食べてからバスに乗り換えて改めて病院へ向かった。

「友利奈緒です。兄の面会に来ました」

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます。行きましょう」

奈緒の後に続き、病室へ。

彼女はノックをして病室の扉を開けた、続いて病室に中へ入る。すると、初めて面会に来た時と同じように、一希さんは掛け布団を引きちぎり叫び声をあげていた。病室内に羽毛が舞い散っている。

「また鎮静剤が切れてる……」

ただならぬ雰囲気、サラが少し戸惑いながら訊いてきた。

「奈緒のお兄さんは、なにをしてるんだ？」

「作曲です。兄はこれでギターを弾いているつもりなんです。唸り声はメロディ……主旋律なんです」

「そうか、そいつはヘビーだな」

サラは奈緒の体から手を離して、ベッドへ近づきながら歌を唄い始めた。

——この歌……初めて奈緒に聴かせてもらった歌だ……。透き通るような歌声。一希さんの様子が徐々にだが、明らかに変わっていった。俺は、奈緒の手を引き一希さんの元へ連れていく。

「一希さん、妹の奈緒さんですよ、わかりますか？」

不安を感じているのだろう。奈緒は俺の手を強く握ってくる。一希さんの視線が奈緒を捉えた。そして——。

「な……お……」

「あっ……はいつ、奈緒ですっ！」

俺の手を離し、一希さんの側へ行き彼の手を取った。サラに小声で話しかける。

「二人にしてあげましょう」

「ああ、そうだな」

サラの手を取り、俺たちは病室の外へ出る。

病室の扉横の壁にもたれながら話す。

「なんだか奇跡でも起きたようだな」

「ええ、あなたの歌声が起こしてくれた奇跡です。ありがとうございます」

「嬉しそうだな、私も嬉しいよ……お前、死ぬ気だったろ？」

「……そんなことまでわかるんですか？」

「お前の覚悟は、奈緒の覚悟とは少し違う感じがした」

「……そうだな。死ぬかどうかはわからないけど、もし必要があるなら命を賭ける覚悟はある」

——もうそんなことは、何年も前に覚悟している。

「そいつは奈緒を残してでも、か？」

「……誰も悲しまないよ。それをやれば、誰も……奈緒も俺を憶えていながら」

「……そっか、お前は私と同じか……。もしその時が来たら、お前は上手くやれよ？」

——そうか、この人も能力者だったんだ。それもきつと……あの能力。

「ああ、そうならないように善処するよ」

サラとの話を終えるのとほぼ同時に病室の扉が開き、奈緒が姿を見せた。眼は赤かったけど、表情は明るく感じた。

「もう、いいんですか?」

「はい、ありがとうございます」

サラに深く頭を下げて、お礼を言った。

「礼を言うのは私の方だ。充実したいち日を送れてよかったよ」

バスに乗り、電車に乗り換えて最寄り駅へ向かう。その車内。

「そういえば明日、友人がサラさんのライブを観に行くんですよ」

「それ、さつき言ってた妹さんを亡くした友だちのことか?」

「ええ、そうです」

「そうか。だったら、その友だちがいることを意識して歌うよ。ところでお前たちは来ないのか?」

「あたしは、行く予定だったんですけど。その人にチケットを譲ったんです」

「そっか……」

奈緒の話聞いたサラは、何か考えるように目を閉じた。東京駅に着き、外に出るとスーツを来たスタッフがサラを迎えに来ていた。サラが車に乗ったのを確認して帰ろうとすると、彼女に声をかけられた。

「ちよつと待ってくれっ」

呼び止められ、サラの方を見る。彼女は車の中でスタッフと話しをして、何かを受け取った。スタッフに肩を借りながらこちらへやってくる。

「これやるよ」

スタッフから受け取ったものを、俺たちに手渡してくれた。

「これは……」

「ZHENNDのチケットじゃないっすか!」

「関係者席の一番端の席になるけど、よかったら受け取ってくれ」

「いただいていいんですか？」

「もちろんさ。あんたらに聴いてほしい」

「ありがとうございます」

「ありがとうございますっ！」

今度こそ車が走り出すのを見届けて、サラと別れた。併設マンションへの帰り道。隣で上機嫌で鼻唄を歌う奈緒<sup>な</sup>。曲はもちろん、お気に入りのZHIEN<sup>ジエン</sup>。

「よかったですね」

「はいっ。あ……でも」

「どうしました？」

「お家デートが……」

「デートは、いつでもできますよ。明日はライブデートにしましょう」

「……はい、そうっすね。楽しみっす！」

併設マンションの入口で明日の待ち合わせの約束をして、この日は自宅へ帰った。

翌朝、待ち合わせの約束をしたライブ会場最寄りの駅の改札を抜ける。

晴れ渡った夏の青空から降り注ぐ、まるで肌を焼くような日差しに少し目が眩み、熱せられたアスファルトには陽炎が揺れて、湿度の高い体にまとわりつく蒸し暑い空気は、ただその場に立っているだけなのに額に汗を滲ませる。

そんな人通りも多い駅前の木陰になっているベンチに、待ち合わせ相手の奈緒なおが座っていた。淡い桃色のキャミソール、膝上丈の白いフレアのミニスカートと、夏らしく涼しげなファッションで。髪型もいつものツーサイドアップと違って、青いリボンでポニーテールにまとめていた。

「あ、おはようございますーす」

「おはようございます。待たせちゃいましたね」

「あたしも今しがた着いたところですのでお気になさらずに」

「そうですか。奈緒なおさん、ポニーテールも似合いますね」

「そうっすか、ありがとうございます。さて、では行きましょー」

ライブの開場は、18時半から。会場近くのモールでショッピングを楽しみ、昼の12時を回る前にメイン通りから一本入った路地に看板を掲げる昔ながらの洋食屋に入った。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまです。おいしかったですね」

「はい、グルメサイトの評判通りでした」

とても幸せそうな笑顔を見せてくれる。

思わずこちらまで嬉しくなってしまうほどの魅力的な笑顔。

「開場までまだ時間ありますね、どこかで涼んで行きましょーか？」

「あ、それなんですけど。欲しいライブグッズがあるので少し早めに会場へ行きたいんですけど、いいっすか？」

「そうなんです。もちろんいいですよ」

「ありがとうございます。実は数量限定の商品なんですよっ」

「じゃあ早めに並ばないとですね。何が欲しいんですか？」

「これです、高機能スマホケース！」

俺に見えるようにして、スマホをテーブルに置いた。写っているのは、ZHENDDのロゴが入ったシンプルなデザインのスマホケース。ライブ会場での限定発売の商品で、公式ファンサイトの通販でも手に入らない代物らしい。

「このスマホのケース自体に独自バッテリーが内蔵されていて、高画質のカメラと高音質リニアPCMレコーダーも付いているんです。きつと、今後の調査にも役立ちますっ！」

やや興奮した様子で欲しいライブグッズの魅力を語っているとこころへ、突然の着信。スマホを手にとった彼女は、画面を見る。

「ん？ あ、電話だ。乙坂さんから？ 珍しいな。ちよつと出てきます」

席を立った奈緒は、電話に出るため店の外へ。そして、二分も経たないうちに店内へ戻って来た。

「乙坂さんが、今日のライブに着ていく服を買いだそう。お店を教えて欲しいそうなんですけど」

「ああー、そうなんですか。奈緒さんがよければ、俺は構いませんよ」  
「わかりました。じゃあ折り返しの電話をしてきまーす」

再び店の外へ出て、今度は一分ほどで戻ってきた。

「15時に先ほどの最寄り駅で待ち合わせになりました」

腕時計で時間を確認すると、あとまだ二時間ほど時間がある。けど、このまま居座るのは忍びない。昼時とあつて店内にお客も増えて来た。迷惑にならないように、店を出て近くのカフェに移動、互いに冷たいものを頼んで過ごすことにした。

「そう言えば、スマホにしないんすか？」

カフェへ向かっている最中、携帯ショップの前を通りかかったところで訊かれた。

「便利っすよ。いろいろと」

今から行く予定のカフェも、奈緒がスマホで調べてくれた店で、スマホのナビアプリを頼りに向かっている。こういう使い方を見てい

ると、確かに便利なのは便利なのだろう。

基本的に電話とメール、メモ以外の機能を使用しない俺には、スマホに機種変更してもあまり使い道がなさそう。大抵のことは自宅のパソコンでこと足りているし、電話帳にも奈緒なおを含めて両手で数えられるほどしか登録していない。

それに今、買い換えてたとして。あとのくらい時間が、俺たち残されているのだろうか。

「全部終わったら、買い換えるのも悪くないですね」  
「全部ですか」

少しだけ、しんみりした空気になる。

今の言葉の意味を、彼女も理解しているから。だから俺は、出来る限り普段通りを心がけて言葉を紡ぐ。

「買い換えたら使い方教えてくれますか？」

「はい、それはお任せください。では行きましょう、立ち止まっている時間ももつたいないつす」

そう言つて奈緒なおは俺の手を取り、一度スマホのマップで現在地を確認してナビゲートの音声に従つて歩き出した。

\* \* \*

「あ、来た。おはよーございまーす」

「ああ、おはよう……つて、宮瀬みやせも居たのか」

知らされていなかったらしく、ちよつと驚いている。

「どーも」

「あいさつは済みましたね。じゃあさつそくショップへ行きますよ」

「あ、ああ……」

午前中に行ったショッピングモールへ行き、学生向けのカジュアルショップへ。

「どころでお前たち、どうして会場こ付近じに来てたんだ？」

「どうしてつて、ZHENジエンDドのライブに行くからに決まってるじゃないっすか」

「はあ？ だつて、チケットは一枚だけだつて——」

「じゃーんっ！」

奈緒は肩に下げたトートバッグから、昨夜サラから直接貰ったチケットをこれ見よがしに、乙坂に見せつけた。

「これって、ZHIENDのチケットじゃないか。どうしたんだ？それ」

「なんと、ボーカル本人からのプレゼントつす！」

「本人から!？」

驚愕の表情を見せた乙坂は、奈緒が持っているチケットを食い入るように見る。

「……本当だ。柚咲の時みたいに関係者席って書いてある。柚咲の未発表のライブチケットといい、宮瀬は、いったいどんな人脈を保持してるんだよ……?？」

「いえいえ、今回は何もしていませんよ。本当に偶然です。昨日の帰宅途中で偶然奇跡的に出会ったんです」

「ホントかよ……?？」

「本当ですって」

疑いの眼差しを向けられたが事実は事実。まさに現実は小説より奇なり、思いもよらないことが起きる。

「あのー、そんなことより、まだ決まらんないんすかー?？」

ラックの前で上着を見比べている乙坂の後ろで腕を組んだ奈緒が、急ぐように促す。

「優柔不断だなー」

「悪かったな。けど、柚咲のライブとはやっぱりちよつと雰囲気とか違うんだろ?？」

——ああ、それで。

どうして、奈緒に聞くのかと不思議に思っていたけど、会場で浮かぬように雰囲気に合わせてたかったからだだった。

「それはまあ確かに、客層はアイドルのライブとはぜんぜん違いますけどー。仕方ないなー。時間がかかりそうなので、あたしたちがコーディネートします。それでいいっすか?？」

「あ、ああ、任せるよ」

今履いている黒の綿パンを生かしつつ、白シャツと薄手でハーフ袖

のサックスブルーのサマージャケットを合わせ、爽やかな感じに仕上げ、最後にアクセントにシルバーのネックレスをチョイスして完成。

「これは、イケているのか？ 普段、こういう服着ないんだ」

「夏らしくていいと思いますよ。爽やかに見えますし」

「あたしもいいと思います。少なくとも浮きはしませんのでご安心を」

「そっか」

「はい、そうです。では、行きましょう」

会計を済ませ、三人でライブ会場へ歩いて向かう。会場に近づくとつれて、同じ方向へ歩いている人も多くなっていた。

「なあ、まだ早いんじゃないのか？ 18時半開場なんだろう？」

「欲しいライブグッズあるんすよ。人気商品は大抵売り切れてしましますので」

「なんだ、グッズに興味あるんだな。高城たかじょうにミーハーとか言ってたのに」

「別に、タオルとかTシャツ、リストバンドの類いの物を買うつもりはありません」

「じゃあ何を買うんだよ？」

「アレです！」

奈緒なほが指を差した先には、喫茶店で欲しいと話していたスマホケースの商品案内が、大きなディスプレイに映し出された。

「バッテリー内蔵で、高音質リニアPCMレコーダー付の優れたものなんすよ！」

「そ、そうか、それはすごいな……」

奈緒なほのハイテンションに若干引いてる。と言っている間にも、目的のスマホケースを取り扱っている物販ブースの前の行列が徐々に延びてきている。

「急いだ方がよさそうですね」

「はい。さっそく、列に並びましょう。よし、行きましょー！」

「え？ 僕も並ぶのか？」

「別に待っててもいいっすけど。ひとりでぼーっと待っているより、

話でもしていた方が気も紛れて暇潰しにはなるかと」

「それもそうだな。わかったよ、僕も並ぶ」

「残ってるといいな」

行列の最後尾に並び、話をしながら待ち時間を過ごす。

「二人は、何も買わないんすか？ ライブ会場限定商品もありますよ」

「特にこれといって。スマホじゃないですしね」

ライブグッズの他にもCDの販売ブースもあるけど、アルバムは先日購入したばかり。

「僕も特にないな。てか、買ったらペアになるぞ」

「あ、それは困ります。買わないでください」

「地味に酷いな」

「冗談つすよ」

実際はそこそこの時間がかかったが、体感としてはあつという間にショップの先頭に辿り着いた。邪魔にならないように列を避けて待ち、そして……。

「ケースゲット〜！」

手に入れた限定商品のスマホケースを早速自身のスマホに装着した奈緒は、周りの目は一切気にせず屈託のない笑顔でスマホを掲げた。今度は、それを俺たちの目の前に持ってきて。

「見て、見て、見てくださいっ！ どうつすか？ この裏ロゴ！

ZHIE<sup>ッ</sup>ND<sup>ド</sup>の文字の造形美！」

「あ、ああ、いいんじゃないか？ カッコいい思うよ」

「無事を買えてよかったですね。見本よりもスタイリッシュですね」

「でしょ！ シンプルなデザインだからこそ、この洗礼されたロゴが映えるんです！」

思いの外スムーズにグッズは買えたため、まだ開場時刻まで時間がある。運良く空いていたベンチに座って、近くのコンビニで購入したホットスナックで小腹を満たす。

その間も、とても満足そうな笑顔でスマホケースを見つめる奈緒の仕草が凄く微笑ましかった。

「じゃあ、僕はこっちだから」

チケットの座席を確認して、乙坂は前列の方へ歩いて行く。関係者席の俺たちも、指定された席で腰を落ち着ける。

「結構、近いっすね」

「そうですね」

やや斜めの位置の席のためステージは見にくいだが、距離自体は近い。それにちよつと距離はあるけど、ほぼ正面に乙坂が見える位置。

「ちよつと、トイレに行ってくださいませね」

「あ、はい。ごゆっくりどうぞー」

彼女はに断りを入れて、席を立った俺はトレイで手と顔を水で洗ったあと、乙坂のところへ立ち寄った。

「どうしたんだ？」

「ちよつと話がありました」

「なんだよ？」

乙坂は、軽く首をかしげる。

「仮にですが。もし今日、熊耳が現れて、歩未さんを助ける手段を話してきたら知らないふりをして欲しいんです」

「はあ？ どうして？」

——意味がわからない、といった様子。当然だろう。乙坂にとっては待ちわびた人物であり、何より隠す理由が意味もないんだから。そう、これは俺の個人的な問題。

「一応念のためです。警戒されないために」

「…… わかった。お前がそう言うならそうする」

「すみません、お願いします」

お礼を言つて、俺は自分の席に戻った。

「混んでました？」

「いえ、そうでもなかったですよ」

回転の速い男子トイレと比べると、女子トイレの方はそこそこ並んでいただけ。

「少し、乙坂さんと話をしていました。熊耳が、姿を現した時の対応について——」

「…… そうっすか」

小さな声で呟くように言うと、ゆつくりと手を重ねてきた。

その手を握り返す。彼女の温もりが、緊張感が伝わってくる。きつと奈緒なおも、俺と同じことを感じている。

昨夜の思いがけない奇跡が起きた一希かずきさん一件もあって、今日、何かしらの決着が着く。

そんな予感を、心のどこかで感じているんだ。

そして、ライブ会場の照明が落ち、ステージ上が目映いスポットライトに照らされ、ZHENNゼンのライブが幕を開けた――。

## Episode 30 対峙

会場の照明が落ちて、液晶モニターに大きく『ZHENND』の文字が浮かび上がったステージの真ん中にスポットライトが当たり、ボーカルのサラ・シェーンが姿を現す。そして、バックバンドの演奏が始まり、いよいよライブの幕を開け。

「はじまるっー!」

演奏が始まる前のテンションとはうってかわって、奈緒のテンションは沸々と上がっていく。彼女はずっと楽しみにしていた生演奏に集中していたが、俺は乙坂のことが気になって時折目をやっていた。オープニングから数曲が終わり、サラがマイクを手に持ちMCを始める。

『次はここ、愛すべきジャパンの地で世界初お披露目の曲をやるぜッ!』

「おおっ、新曲!」

思いがけないサプライズに、奈緒のテンションは更に上がった。

『いくぜ! Trigger!!!』

サラが曲名を叫ぶ。激しい曲調の新曲「Trigger」の演奏が始まり、その激しい演奏と力強い演奏と相まって会場中が熱気に包まれる。そして、演奏がサビに差し掛かった時だった。

今までずっと座ってZHENNDの演奏を聴いていた乙坂が、不意に立ち上がった。どこか、ようすがおかしい。

「奈緒さん……!」

「……えっ?」

肩を揺さぶり声をかけられた奈緒は俺を見る、直後――。

「うっ…… うわあーっ!」

サラの歌声に負けないほどの叫び声が会場に響き渡った。その声の主は――乙坂。突然大声を上げ、頭を抱えて、その場に倒れこんだ。

「乙坂!」

「乙坂さんっ!」

突然の事態に演奏は止まり、どよめく場内。俺と奈緒は人混みをか

き分け、急いで乙坂おとしがの元へ駆け寄った。倒れている彼を確認すると完全に意識を失っていた。

「乙坂、大丈夫か!？」

「乙坂さん?!」

声をかけても反応がない。運営スタッフが慌てて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか!?! 担架持ってきます!」

「お願いします、それから救急車も——」

救急車の要請を頼もうとする俺に奈緒なおは、俺にだけ聞こえるように小声で訴える。

「ダメです。組織の病院に直接連絡をして——」

「大丈夫、任せてください。救急車をお願いします」

「は、はい、わかりました!」

運営スタッフと協力して慎重に、乙坂おとしがを担架に乗せる。その時ふと視線を感じた。ステージを見ると、サラが俺たちの方をじっと見つめていた。

視力を失い、見えていないハズなのに。

どうしてか、彼女の目は、俺にこう言っているに思えた。

——うまくやれよ、と。

\* \* \*

「傷病者は?!」

乙坂おとしがを医務室へ運んで間もなく、救急車と救急隊が到着した。

「こちらです!」

「どうも、失礼します。ふむ……特に目立った外傷はないな、呼吸も安定している、だが意識はない。どういった状況で?」

「突然、頭を抱えて倒れこみました」

「頭を!? おい、すぐに脳外科がある病院に連絡……」

頭と聞いてすぐに別の隊員にすぐに指示を出そうとしたところへ割り込む。

「待ってください! 彼は、持病を持っています。この病院へ搬送してください!」

先日、手の火傷の治療を受けた病院の情報を表示させた携帯の画面

を見せて話す。組織の息が掛かっているこの病院なら科学者に捕ま  
ることはない。

「お知り合いですか!？」

「はい、同じ学校の友人です。以前も同じ症状で倒れたことがありま  
した。この病院には彼の、乙坂おとさかの主治医がいます。ですので、こちら  
へお願いします」

「そうでしたか、わかりました。大至急この病院に連絡をしてくれ!」  
「了解です! ライブ会場で収容した傷病者は、持病があり——」

指示を受けた別の救急隊員は無線で傷病者、乙坂おとさかの容態を例の病院  
に連絡を入れる。

「自分と彼女が付き添います。彼の家族へは、こちらから連絡を入れ  
ておきました」

「わかりました、ではお願いします。ストレッチャー!」

携帯を操作するふりをしながら小声で、奈緒なおに話しかける。

「うまくいったでしょ」

「はい。ですが、どうして……?」

「病院からだど、時間がかかりますから」

「あ、なるほど」

病院に直接要請して往復するよりも最寄りの消防署の救急車で搬  
送してもらった方が断然速い。

救急車が指定した病院に収容されると、すぐに検査が行われた。検  
査の結果は、異常はなかったただ眠っているだけとのこと。乙坂おとさかが眠る  
ベッド近くのパイプ椅子に座り、目を覚ますのを待つ。

「大丈夫なんですかね?」

「きつと大丈夫ですよ。おそらく、一希かずきさんの時と同じ症状だと思  
います。それに……いや」

「なんですか?」

「確証はありませんけど、今日で見つかると思います」

「何がっすか?」

「熊耳くまがみとシユンスケ・オトサカ」

探し人である二人に名前を出したことで、奈緒なおも気づいた。

「なるほど、組織の息が掛かっている病院に乙坂さんが搬送されたとなれば、必ず上に連絡が行く訳ですね」

「正直、こういった形で利用することになってしまったて申し訳なく思いますけど」

「今は、乙坂さんが無事に目覚めるのを待ちましょう」

「そう、ですね」

奈緒は安心させるように手を握ってくれた。いつまでも長い夏の太陽がようやく傾き出し、鮮やかなオレンジ色の西陽が病室に差し始めた頃――。

「うわああーッ!？」

再び叫び声をあげて、乙坂が目を覚ました。その大きな声に驚いた奈緒の背中を軽く支える。

「わあっ！ もう、驚かさなideてくださいよー。危うく倒れるところだったじゃないっすか!」

「はあはあ……友利?」

奈緒の顔を見て、しつかりした声で彼女の名前を呼んだ。どうやら意識はハッキリしているみたいだ。

「気分は、いかがですか?」

「宮瀬、ここは……?」

「病院つすよ。ライブの途中で倒れたんすよ、覚えてますか?」

心配そうに訊ねる奈緒に、乙坂は頭の中を整理しているのか少し黙ってから口を開いた。

「……友利、宮瀬。やっぱり僕には、僕と歩未には兄がいるかもしれない。いや……確かに居たはずなんだ」

「ほう、思い出したか」

ノックもなしに病室の扉が開き、一本に束ねた長髪を右の肩口から前に垂らした男子が入って来た。

「……誰だ?」

奈緒は初めて見る顔に警戒し、長髪の男子に訊ねる。

「フツ、『特殊能力発見』の能力者と言えはわかるか?」

「おお、あなたですか。乾いてるとイケメンだな」

——釣れた。探していた一人、時空移動タイムリープの能力者に近づくための最重要人物である、熊耳くまがみ。

「熊耳、お前もいたぞ。僕の夢の中に……！」

「ん？ この姿で会うのは、初めてのはずなんだがな……！」

乙坂おとしがの言葉が予想外だったらしく、彼はどこか不思議そうな表情をしている。しかし、そんなことは気にすることなく、乙坂おとしがは自分の中の曖昧さを払拭くまがみするため、熊耳くまがみを問い質す。

「お前は、兄さんのことを知ってるんだろ？」

「まーな、よく知っている」

「教えてくれ、すべてを……！」

「落ち着け。こっちもそのつもりで来た。黙ってついてくれば、お前が疑問に思っていることはすべて氷解する。そして、助けに行くんだ。妹さんを——」

「え？ 今、なんて……？」

色々と混乱しているんだろうけど、ちゃんと演じてくれている。ありがたい。

「お前が、妹さんを助けに行くんだ。乙坂有宇おとしが ゆう」

「死んだ人間をどうやって助けられるんだっ！」

「今のお前なら、隼翼しゆんすけの能力も分かっているんじゃないのか？」

「兄さんの能力——」

「どうした？」

——まずい、上手く演じてくれていたけど。ここらが限界か。

「あの、シユンスケさんって、あの隼翼しゆんすけさんでしょうか？」

助け船を出そうとしたところで、奈緒なは熊耳くまがみに問いかける。事前に示し合わせた訳じゃない。これは、彼女自身の疑問を晴らすための質問。

「ああ、そうだ」

「ええく!? あなた、あの人の弟だったのか？ ぜんぜん似てないな」

「ど、どうだっていいだろっ!」

やや呆れ顔でタメ息をついた熊耳くまがみは、親指で廊下を差した。

「外に車を待たせてる。行くぞ」

「あの、あたしたちも行っていいですか？ ずいぶんどご無沙汰して  
いますので。挨拶をしたいのですけど」

「別に構わないが、お前は……」

熊耳は、俺を見る。

「あなたが見つけた『予知』能力者ですよ。調査の時も何度もあたし  
たちを助けてくれてます。隼翼しゅんすけさんにも紹介したいんです」

「……そうか。まあ、いいだろう。俺もお前と話したいことがあつ  
た。一緒に来い」

熊耳くまがみに聞こえないように、奈緒なおにお礼を言う。

「ありがとうございます」

「いいえ、行きましょう」

熊耳くまがみの後に続いて病院の外に出ると、彼の言った通り黒塗りの高級  
車が止まっていて、隣には短髪のオールバックで黒縁メガネをかけ  
た運転手が腕を組んで待っていた。熊耳くまがみは助手席に乗り、俺たち三人  
は後部座席に乗る。

しばらく高速道路を走っていた車は、やがて山中へと入っていっ  
た。舗装されていない林道を進み、少し開けた場所に停車した。

「ここからは歩きた。ついてこい」

月明かりを頼りに山道を登り、大きな岩の前に立つと熊耳くまがみはリモコ  
ンらしき物を使い操作した。すると巨大な一枚岩が動き出し、地下へ  
の入り口が現れた。

「……すごいな」

「金だけはあるからな」

地下へと向かう階段を降る。

「すっげー！ 撮ってもいいっすかっ？」

「ダメに決まってるだろ」

「ちっ」

「なんなんだ、ここは？」

「言わば、特殊能力の研究施設だ」

研究施設と聞いて、乙坂おとさかが取り乱す。

「それは僕たちにとっても敵じゃないのか!？」

「違う。つべこべ言わずついてこい」

階段を下りきると嚴重そうなセキュリティの扉が現れた。熊耳は扉の前で端末にパスワードを打ち込み、指紋、網膜認証とセキュリティを解除行っていく。すべての作業が終わり、扉が開いた。

扉の向こうは、エレベーターに直結していた。エレベーターに乗り、さらに地下へと潜っていく。

「嚴重なんですネ」

「最後の砦だからな」

「ところで話とは？」

「ああ、そうだったな。臨時教師を引き受けてくれた件だ。隼翼からも機会があつたら伝えてくれて頼まれていてな。助かった、改めて礼を言う」

「いえ、それはどうも」

大した話ではなかった。だけど少しだけ、この組織を束ねる隼翼と言う人物のことが分かってきた気がする。

エレベーターを降りた俺たちの前は、熊耳の言う最後の砦である長い廊下が現れた。熊耳を先頭に廊下を奥へと進む。

——目的地は近い。そう感じた俺は声を潜め、隣を歩く奈緒に話しかけた。

「奈緒さん」

「あ、はい、なんででしょうか？」

「俺は、彼らの返答次第で。彼らの……あなたの敵になるかもしれない。……」

「……大丈夫です」

そう言つて、俺の手を取り優しく繋いだ。

いつもの重なるだけの繋ぎ方じゃなく、離れないように指を絡めて……。

彼女の言つた大丈夫は、「そんなことにはならない」と言う意味なのか。それとも「どんなことになっても味方でいてくれる」と言う意味なのか、どちらかはわからなかった。

ただ、手から伝わる温もりは……彼女の優しさは痛いほど伝

わってきた。

「ここだ」

センサーに手を置くとセキュリティが解除され、一番奥の扉がゆつくりと自動で開いた。

「入れ」

熊耳くまがみに促され、乙坂おとさかにが最初に中に入り、俺たちも続いて部屋に入る。部屋の中には誰も居なかった。

「誰も、居ない……？」

「有宇ゆうか、久しぶりだな」

声のした方向を見ると入口付近で、どこか乙坂おとさかに似た男子が壁にもたれ掛かって立っていた。彼が、乙坂隼翼おとさかしゅんすけ。乙坂おとさかの兄で。そして「時空移動」の能力者——。

「隼翼しゅんすけ」

これが能力を使えない理由、やはり視力を失っているらしい。隼翼しゅんすけはサラと同じように、熊耳くまがみの肩を借り、もう片方の手で杖をつきながら移動する。

隼翼しゅんすけと熊耳くまがみは、話をしながら奥の机へ移動。その姿を乙坂おとさかは、じつと見つめている。

「思い出していないのか？」

「ああ、どうやら前泊まえどまりが消した記憶は思い出していないようだな」

「記憶を消したって？ なんのことですか？」

質問をした奈緒なおは俺を見た。言葉には出さず、うなづいて返事をする。少し名残惜しそうに手を離れた奈緒なおは、隼翼しゅんすけの元へ歩いて行く。「その声は、奈緒なおちゃんか。随分とご無沙汰だな」

「はい、助けていただいた時以来です。あの日、あなたが示してくれた道を今も歩み続けています」

「そっか」

隼翼しゅんすけは、手探りで奈緒なおの頭に手を乗せ撫でながらお礼を言う。

「おかげで助かってるよ。よくやってくれている」

「……ありがとうございます」

隼翼しゅんすけに礼を言った奈緒なおは、どこか複雑な表情かおをして隣に戻ってきて

た。

「で？ 有宇は？ 俺がお前の兄貴なんだぜ？ 感動の再会だ。抱きついてきたりしないのかよ？」

「混乱してるんだ。疑問だらけで……」

「んだよ、寂しいなー。つってもまー自業自得か」

隼翼は、机の角に腰をかけるように座った。

「じゃあ全部話してやるとするか、なあ？ プー」

「ああ」

熊耳のキャラからは似合わないニツクネームに「プー!？」と、奈緒と乙坂の驚きの声が重なった。隼翼は二人の反応に笑いながら、話し始めた。

「では、長い長い。俺の『時空移動』の話を始めようか」

『時空移動』……やはり彼が、俺が長い年月をかけて探していた能力者――。

\* \* \*

隼翼が話した体験談は想像を絶するの物語だった。弟の乙坂、妹の歩未を救うだけではなく、日本全国も特殊能力者をすべて保護するために何度も『時空移動』を繰り返し、今の保護システムを作り上げたこのことだ。

そして、その代償として、視力と愛する弟妹との関係を断ち切った。

「はい、おしま〜い」

とてつもなくて重い話なのに当の本人は手を叩きながら軽いノリで言つてのけた。

「『時空移動』を繰り返して、今の教育機関を作っただなんて……すげー!」

奈緒は心からの賛辞の言葉を、隼翼に送った。

「奈緒ちゃんのお兄さんは、間に合わなくてごめん」

「いえ、今は順調に回復に向かっていますので大丈夫です」

乙坂は、神妙な表情で呟く。

「能力で消されていたのか、兄さんとの記憶は……。それに、視力までなくして……」

「試してみただけど、やっぱり飛べなかった……。俺の能力、  
「時空移動」は目で見てきた時間を巻き戻して過去に跳ぶ能力。だから目に光が射さないと飛べないんだ。でも、まだやり残したことがある。それは、絶対に達成しなくちゃならない俺たちの約束だろ?」  
「歩未を助ける……でも、どうやって? 兄さんはもう、  
「時空移動」を使えないんでしょ?」

「それはな、有宇。お前の本当の能力、「略奪」を使って、俺の  
「時空移動」を奪ってだ」

パチンツと指を鳴らした隼翼は、乙坂の声がする方へ指を差した。  
「略奪? 確か夢でもそんなこと……」

「能力者の能力を奪い取る。それがお前の本当の特殊能力なんだよ」

「な、なんだよ、それっ!」

気絶している間に夢で見た能力。そして隼翼から告げられた本来の能力に戸惑っている乙坂に、奈緒は真実を告げた。

「あたしと高城、それに宮瀬さんも知っていました。あなたの本当の能力のことを——」

「高城に宮瀬も……? そうか…… 能力者は能力が使えない、

「略奪」がお前の言っていた方法ってことなんだな!」

俺は、黙ったまま頷いた。

「ん? なあ、宮瀬って誰だい?」

初めて聞く俺の名に、隼翼は首をかしげた。

「臨時教師を引き受けてくれたヤツだ」

隼翼の近くで、壁に寄りかかっていた熊耳が答える。

「ああ、そうかそうか」

「ついでに俺が見つけた「予知」能力者でもある」

「予知」能力? スゴいな、会ってみたいな」

「ここにいますよ」

「えっ!? 居るのか?」

この場に居ると知って、隼翼は驚いた。

「ああ、そういえば今まで一言も発していなかったから気づかなかつたんだろう」

俺は少し前に出て、乙坂隼翼おとさかしゅんすけに話しかける。

「はじめまして、宮瀬翔みやせしやうです」

「乙坂隼翼おとさかしゅんすけだ、よろしくな！ で、「予知」能力者だって？ 確か、奈緒なおちゃんからの報告書じゃ——」

「いいえ、「予知」能力は持っていません」

「ん？ どういうことだ？」

熊耳くまがみを見た。いや実際は見えていないから顔を向けたただけだが。熊耳くまがみは、こちらに向かい歩きながら答える。

「いや、間違いなく「予知」能力者だ。俺が見つけたんだからな」  
自信を持って言っただけのける。

「だよなっ」

「それは、探知系能力対策の能力「偽り」で擬装した能力が「予知」能力だっただけのことです」

「俺対策の、「偽り」だと……!？」

「ちよ、ちよつと待て！ ってことは…… お前は特殊能力を……？」

「ええ、複数保有しています」

「いや、あり得ない！ 有宇ゆうの「略奪」以外に、能力を複数持つ方法は見つかっていない！」

隼翼しゅんすけは、特殊能力を複数持つと言う俺の言葉に声を荒げる。その通りだ。俺が大学にいた頃にも、一人の人間が複数の能力を保有する事例はなかった。

「身に付けたんですよ。命を賭けて……」

「な、なんだと……!？」

隣に来た奈緒なおは心配そうに、俺を見上げて手を繋いでくれた。

「宮瀬さん……」

「大丈夫、ありがとう」

隼翼しゅんすけと前に立ち、対峙する。

そう、すべてはこの時のために俺は生きてきた。

「乙坂隼翼おとさかしゅんすけ……俺は、ずっとあんたを捜していた」  
「どうしてだ……？」

眉を潜め、険しい表情で俺の方へ顔を向ける。

「お前は、俺の運命を狂わせた元凶だ」

「俺が、お前の運命を……？ どういう意味だ」

俺の言葉を聞いた熊耳くまがみは警戒して、隼翼しゅんすけを守ろうと彼の隣に立った。

気にせず目を閉じて、大きくひとつ深呼吸をし、ゆっくりと話し始める。

俺の過去を。そして未来で起きた、あの出来事を――。

## 救済編

### Episode 〇 〓 共鳴 〓

初めて異変が起こったのは、高校に進学してから半年以上の月日が経つてのことだった。

かずき  
一希さんとの出会いから五年という年月が流れ、高校生になった俺は、養護施設を離れ、築四半世紀以上の小さなワンルームの寂れたアパートで、ひとり暮らしを始めた。

施設を離れた理由は単純だった。施設を離れることで、なにかが変わるような気がしたからだ。だけど、実際は変わらなくて。毎日授業を受けて、夜までアルバイトをして、眠りにつく日々の繰り返し、むしろ苦労が増したばかりだった。

でも、これだけは言える。施設に身を寄せていた頃よりも、ずっと「生きているんだ」という実感が持てた。

そんなある日のこと、それは唐突に訪れた。  
高校入学から半年以上が経って、今の生活にも慣れ始めた初秋のこと。自分の将来について、なんとなく見え始めてきた。残暑がまだ残る秋の夜ことだった。

いつものように授業を受けて、アルバイトをしてから自宅のアパートへ帰っている途中、突然視界が歪み、俺はその場で意識を失った。そして目が覚めると、そこはかつて生活を送っていた養護施設のベッドの上だった。

この状況に違和感を感じていた。通常であれば、道端で意識を失い倒れた人間が目覚ます場所は、必ず病院であるはずだからだ。

なぜ病院ではなく、幼少を過ごした施設なのか。施設の職員に事情を聞くために部屋を出ようとしたその時、身体に猛烈な違和感を覚えた俺は、ベッドから飛び起きた。

自分の身体なのに、自分の身体じゃないような奇妙な感覚。訳もわからず、ただただ戸惑うばかりで。

それでも、しばらくして少し落ち着きを取り戻した俺は、とにかく

今、自分が置かれている状況を把握するために部屋を出た。階段を下り、職員室への通り道になっているレクリエーションルームに入ったその時、信じられない光景が目にとまった。

それは、テレビの映像。レクリエーションルームのテレビ画面に映し出されたのは、かつて一世を風靡した芸人や流行のファッション、懐かしさを感じる映画のCMなどが放送されていた。

俺は急いで、この時間帯に放送している報道番組にチャンネルを合わせた。画面に映し出された映像には、「尖閣諸島沖、漁船衝突事件最新情報」と特集が組まれていた。

この事件が起きたのは、2010年。今から五年前のハズだ。なぜ今になって、こんな特集が再び組まれているのか不思議に思っていると、話を聞こうと思っていた施設の職員に声をかけられた。俺は、その職員に今が何年の何月か訊ねた。すると不思議な表情しながら、こう返ってきた。

——2010年9月、と。

信じられなかった。俺の記憶では今、2015年9月のはずだったからだ。意味が分からない、気分が優れない、頭が痛い、気持ちが悪い。混乱している頭を冷やすため、洗面所で冷水を頭から浴びる。タオルで水を拭い、顔を上げた俺は驚愕した。目の前の鏡に映っていたのは、あどけなさが残る少年の顔、その少年は——子どもの頃の俺、そのモノだったから……。

——俺は、過去に戻ってきたんだ……。

信じられなかった、いや信じたくなかった。これは夢で、寝て起きれば自分のアパートのベッド上で目を覚ます。そう信じて、この日は眠りについた。

翌朝、目を閉じたままでも意識が覚醒していくのがわかる。一抹の望みを胸に抱いて、ゆっくりと目を開く。目覚めた場所は、昨夜眠った施設のベッドの上。認めたくないが、どうやらこれは現実らしい。気分は最悪だった。だが病気でなければ、学校を休むことは許されない。実に四年ぶりにランドセルを背負い、かつて通っていた小学校へ登校。教室には懐かしい顔ぶれが並んでいた。今となってはとて

も簡単な授業を受けて、放課後はまっすぐ施設へ帰る。ただそれだけの生活に戻った。

\* \* \*

過去に戻って数カ月が経ち、冷静に現状を受けとめられるようになり。少しずつ状況の把握と整理を行える余裕を持てるようになった。わかったことがいくつかある。

一つ目は、未来の記憶を持っているのは自分だけということ。これは会話の流れから容易に判断することが出来た。

二つ目は、過去に戻った日からこれまでの間、記憶の中にある出来事は必ず起こるということ。

三つ目は、俺の行動次第によつて大小異なるが、ある程度未来を変えられることができるということ。

そして四つ目、これが一番重要かもしれない。  
ゲームやマンガ、小説、映画等でよくあるタイムトラベルものと違い。同じ時間軸の中に自分が二人存在することはないということだ。これは、あくまでも過去の自分自身の中に戻ったということなんだろう。

今の現状に俺は思った。もしかしたらこれはチャンスなのかも知れない、と。

漠然と見ていた未来へと向うその針を、自らの手で進めることができるのかも知れない。そう思った。少しずつだが過去に歩んできた道とは違う道を、俺は歩き始めた。その最中、それはまた唐突に訪れる。

そう。俺は、また過去に飛ばされた。

前回と同じ月日、同じ時間、同じ場所で目覚めた。だが前回とは明らかに違うことがあった。飛ばされた年だ。前回は高校一年の秋、今回は中学二年の冬だった。飛ばされるまでの時間が五年から三年に縮まった。

これがなにを意味するのか、この時の俺には知るよしもなかった。

\* \* \*

三度目の人生が始まった。そして、思った。

なぜ自分にだけが、こんな非現実的な現象が何度も起こるのか。それをよりいっそう知りたくなった俺は、前世以上に学力に入れた。知識は武器になると思ったからだ。

そこからは必死だった。二度起きたのなら、三度目も十分にあり得る。だから、また過去に飛ばされるまでの間に出来るだけの知識を詰め込んだ。効率をあげるため学校の図書室だけではなく、近所の図書館や大学の図書館に通いつめ、ありとあらゆる知識を頭の中に詰め込んだ。

目標があると成長は早いというが、その言葉通り俺の学力は、前世とは比べ物にならないほど上がっていた。

勉強浸けの日々を過ごし、二回目の過去へ飛ばされた日が近くなり、よく外で遊んでいた子どもを見掛けなくなつたと言う噂だ。勉強に必死で余裕がなく、あまり気に止めていなかったが思い返してみれば確かに学校でも、ここ数カ月で何人かの生徒が事後報告と言う形式での転校があつた気がする。

——まあ、特に気にする事でもないだろう。そう、転校なんてよくあることだ。この時は、そう思った。

そしていつものように図書館へ勉強をしていると、スーツを着た見覚えのない大人たちに話がしたいと言われ、図書館の応接室へ連れていかれた。

彼らは、俺に協力を求めてきた。

子どもながら、既に国内最難関も大学を狙えるの学力を持っている俺の噂を聞き付けやって来たとのこと。簡単にいうと将来を見据えたスカウト。

詳しい話を聞くと彼らは、遺伝子や脳科学に関する研究をしている学校の科学者であるということだった。俺自身そちらの方面の知識

はあまりなかったこと、専門の人から話を聞ける機会と言うこともあつて興味本意で見学をすることにした。

案内された先は、とある中高一貫の学校。

そこには大掛かりな研究施設があり、かつては空気を自在に振動させる実験などを行っていたそう。空気の振動が、遺伝子や脳にいつたいなんの関係があるのか、知識のない俺にはさっぱり理解できなかった。

そして今、ここで行っている主な研究は、子どもの潜在能力を高める実験。この研究所で行われていた実験（こごと）を見て、あの噂を思い出した。「最近、引越す家が増えた」「よく外で遊んでいた子どもを見掛けなくなった」、次の瞬間確信した。転校したクラスメイトが検査と称して、実験を受けていた。

——ここは、危険（ヤバイ）。

直感的にそう感じた俺は、あまり面白そうじゃないと言つて学校をあとにした。

それから数日後、明らかに施設の職員の態度が変わった。これは確実に根回しが来ていると感じた俺は、施設から逃げ出した。

身寄りの俺には行く宛てなくてなかった。でも生きるため年齢を偽り、住み込みのバイトで命を繋いだ。

そして予想通り、三度目が起こった。

\* \* \*

この時間軸で俺は、本格的に遺伝子の勉強を始めた。例の学校の科学者が行っていた実験を見たことで、俺はこの現象の答えが遺伝子にあるのではないかと考えたからだ。しかし日本に居てはまた、原因を突き止める前に科学者に捕まってしまう。だから海外へ渡ることを考えた。だが、当然のことながら問題は山積み。

一つは、資金力。これがないと本当にどうしようもない。

二つ目は、語学力。これも必須だ。テキストならなんとかなるが会話となるとやはり勝手が違う。

語学の方は後回しにして先ずは、とにかく資金力の方を解決することを優先した。新聞配達などのバイトしつつ投資などで資金を貯めるが、投資の知識もなく、元本も少ないため、あまりにも効率が悪い。そこで俺は賭けに出た。投資の知識を得るために読み漁っていた雑誌の載っていた、マーケットの世界で伝説と謳われる相場師に、弟子入りを志願した。

マーケットの世界でなら一瞬で何百何千万何億の金額が動く。海外での留学費と生活費を考えれば、最低でも数千万の資金が必要になる。俺には時間も資金もない。短期間で一気に稼ぐなら、これしかないと思った。

もちろん最初は、突っぱねられた。だが諦めず、雨の日も、風の日も、雷鳴が轟く嵐の日も、絶えず訪ね懇願し続けた。根負けしたのか、雑用という形で雇ってもらえた。

そして俺は、この人からマーケットの世界の全てを叩き込まれた。今の俺が、天才投資家といわれるルーツになった出来事だ。

そして、そこで何か問題が起こったら彼を頼れと、証券会社の坂本さかもとさんを紹介してもらった。

莫大な資金力と、日本経済をたった一人で動かせるほどの人物の後タイプろ楯を得た俺は、海外留学への準備を進めながら、四度目の“時空移動”を待ってアメリカへ渡った。

\* \* \*

アメリカを留学先に選んだ理由は単純だった。

有名私立大学には、高卒程度の学力があれば年齢に関係なく入学することが出来る飛び級制度があるから。アメリカに渡って最初の三年間は、大学入学試験をパスすることを目標に置き、アメリカでの生活に慣れることから始めた。初めは断片的にしか理解できなかつた会話も、五度目の“時空移動”タイムリープが起こる頃には殆ど理解できるようになった。人間の環境適応能力はスゴいものだと思えて感じた。

そして、五度目の“時空移動”タイムリープが起こる。

三年間の経験と学力を活かし、CA大学の入試試験をパスして無事に大学へ入学することができた。

これでようやく、スタートラインに立つ権利を得た。

しかし、ここからが大変だった。遺伝子工学を専行するも、あまりにも難解な内容にまったくついて行けなかった。日本で独学もほとんど役に立たなかった。

俺は、教授や研究者に無理を言っつて、基礎の基礎から教えてもらっつた。

そんな生活をして約一年が経過した頃、ニールと出会った。この時は俺より三つ年上の14才でありながら、アメリカの遺伝子工学界の希望の星と謳われていた。でも、そんな素振りは微塵も見せずともフランクで、俺と年齢が近いこともあつてなのか、よくわからないうちにいつの間にか仲良くなつていた。

そして、彼なら信頼出来ると思つた俺は打ち明けた、自分の境遇を……。彼はバカにすることなく、驚きもせず俺の話を実剣に聞いてくれて、ある話をしてくれた。

それは、とても衝撃的な内容だった。

そしてそれを聞いた時、彼が俺の話をおバかにせず、驚きもしなかつた理由が判明した。

彼の話は、俺以外にも特殊な能力を持つている人間が存在しているという話だった。

しかも、それは数人というレベルではなく世界中で何千何万人もいるとのことだ。ニールは、能特殊力の研究をするためにこの大学へ進学したと話してくれた。

ニールと相談し、俺の能力を教授に話すこととした。教授は最初とても驚いてたが、特殊能力の研究をしている研究所<sup>ラボ</sup>へ案内してくれた。

そこである青年に対面する。彼がティムだった。俺より五つ年上の16才の彼は「間に合つて良かったな」と、俺にそう言つて握手を求めてきた。

それに応じて手を離すとティムは、「レア中のレアだな」と言つた。彼も特殊能力者だった。彼の能力は、対象者と左手で握手をするこ

とで対象者の能力の有無や能力を知ることができる探査系の能力者。そこで聞かされた俺の能力は——継承。

他人から何かを引き継ぐわけではなく、自分を記憶を引き継ぐ能力のことだった。

——どういうことだ？ と詳しく聞くと、こう返ってきた。

俺以外の能力者が、時間を操った時に強制的に発動する能力。能力者が移動した時間軸に、記憶を保有したまま俺も移動する。制約は自身では自由に扱えず、他の能力者により、時を操る能力が発動されないという意味がないと言うもの。

その話を聞いた時、長年の疑問がすべて氷解した。

誰かが何度も過去へ戻り、人生をやり直している。

この神にも等しい能力を持つ人間を見つけ出し、その真意を問う。

俺の新しい生きる目的が見つかった瞬間だった。

この日から俺のホームグラウンドは、このラボになった。ラボには保護された特殊能力者が何人もいた。

世界中で日本で見た研究所のように軍事転用を目的として利用するため、特殊能力者を集める機関がいくつも存在するらしい。それに対抗するため、この大学のように能力者を保護する機関も存在しているとのことだ。

「いいものを見せてあげよう。もしかすると、手がかりになるものが見つかるかもしれない」と、教授に連れられてラボに地下へと潜った。嚴重なセキュリティを越えた扉の先にはハッキング防止のための旧型パソコンと8インチフロップピーが保管されていた。特殊能力者を捜すならここを使うといいと提供してくれた。

データベースには現在発見されている能力者と能力。過去に能力者だった人のデータが補完されていた。数カ月を費やし、すべてのデータ見たが“時空移動”<sup>タイムリープ</sup>の能力者の情報は見つからなかった。

しかし、ありがたいことに、このラボは他の保護施設と情報を共有しているため新しい能力者の情報がすぐに入ってくるらしい。見つけるのを待つ間、このラボで研究を続けることにした。

研究を進めるうちに分かったのは、ある粒子が第二次性徴時の体内

ホルモンの変化に影響を受けて能力に覚醒するということ。その特殊な粒子は太陽系を回る、長周期彗星に含まれているらしい。

その彗星の名前は——Charlottesville彗星。

だが、これらの能力は、長くても思春期を過ぎる18才前後を目処に失ってしまう。タイムが「間に合つてよかつたな」と言ったのは、これが理由だった。

それから、この研究所の主な研究は特殊能力を消し去ること。保護された能力者もそれに協力しているとのことだ。俺も、研究に参加した。

俺は研究データを記憶し、タイムリープ「時空移動」が起こる度に大学へ持つていき、そのデータを元に一気に研究を進める。そんなことを何回も繰り返していた時のことだ。

能力を消去するという本来の目的とは、まったく正反対の投薬を産み出してしまった。

それは、特殊能力を得る投薬。

これは偶然だった。

長い年月の研究の末、特殊能力者の遺伝子に付着した、Charlottesville彗星の粒子を抽出する方法を確立。別の遺伝子の粒子と掛け合わせることで相殺出来るのではないかと考え研究を進めていると、ある成分を加えたことでどちらでもない、まったく別の能力を産み出してしまった。

俺は自らが実験台になり、新たな能力を得た。

「偽り」、それが新しい能力だった。己が保有している特殊能力を、別の能力に偽装する探知・探查系能力者対策の能力。

ただ、それを得るための代償は大きかった。

投薬を打つてから約二週間ほど、昏睡状態が続いたらしい。

そして目覚めた後は、猛烈な倦怠感と命を絶ちたくなるほどの激痛が身体中を駆け巡った。

そして、またタイムリープ「時空移動」が起こった。

もう何度目かわからない。正直もう、どうでもよくなっていた。ただ、タイムリープ「時空移動」の能力者を見つけ出して真意を問う。それだけが支

えになっていた。

研究所に最新データを提供した俺は、肉体改造を始めた。新たな能力を得るためには強靱な肉体と精神力が必要だと身を持って体験したからだ。一旦研究を休み、効率を重視した科学的トレーニングを積む。

そこでニールに、ある物を渡された。それは一定の間隔で、視界の遮蔽・透過を繰り返すゴーグル型のトレーニング機器。この特殊なゴーグルを着用して、近所のバツティンクゲージに通いつめ、勘に頼らない予測力、判断力、洞察力を身につけた。ファウルだったものの、念動力で操られた偽ナツクルを捉えられたのは、この力のお陰だろう。

さらに、武術に長けていたティムから護身術として、対人格闘術を教わった。便利な特殊能力に頼りすぎていると、いずれ痛い目を見る。そう、警告されたからだ。

そして、三年目の年末を迎えた。

最初の「タイムリープ時空移動」以降、多少の前後はあるが大抵この時期に、「タイムリープ時空移動」が起こる。

その寸前、ある能力が完成した。ずっと求めていた能力——「共鳴」を得る投薬が完成した。

「共鳴」は自分の身体を媒介にし、相手の能力を干渉できる能力。この力なら、いつ発動されるかわからない「タイムリープ時空移動」に干渉できる。文字通り、「干渉」と言う「共鳴」と近い能力もあつたが、これには制約が存在し、自分から数メートル周囲でなければ干渉できないうえ、目に見える能力に対してしか対処できないのが難点だった。

どこの誰が、いつ使っているかわからない「タイムリープ時空移動」には対応出来ない。だから、一度自分の身体を通す分リスクは高いが、確実に相手の能力に干渉でき、そして使われた能力を探查できる「共鳴」を求めた。

ただ強力な能力だ、もう次は戻って来れないかも知れない。だが、命を賭けるには十分すぎる能力……すべては覚悟の上だった。

それに、ここで終わってもいいと思っていた。

まるで出口の見えないトンネルのように、終わることのない永遠の時間ときに縛られることに、俺はもう疲れ果てていた。

\* \* \*

投薬を打って半年間、生死の境をさまよった。

目覚めた時、戻ってしまった時、タイムリープ「時空移動」は起こっていなかった。タイムリープ「時空移動」が使われなければ「共鳴」を身につけた意味はない。

教授からは、これからも研究者としてラボに残ってくれと説得されたが、もうそんな気力も沸かなかった。

俺は大学を卒業して、日本へ帰国した。

目的を失った俺は、坂本さかもとさんの進めで投資家として活動を始めた。有名になってしまえば、日本の科学者も手を出しづらくなると思ったから派手に荒稼ぎをした。

六本木タワーに住んでいたのも極力外に出る必要がなく、セキュリティが厳重だったから、光坂高校に籍を置いていたのは「学生生活を楽しみなさい」と師匠に諭されたからだ。ただ、この生活は本当に退屈だった。目的もなにもなく、ただ生きているだけの日々。

そんな俺を見つけてくれたのが、友利奈緒ともりなおだった。

彼女は、目的もなくなただ生きているだけの俺を見つけてくれて、自分に協力して欲しいと言ってくれた。そばにいて欲しいと言ってくれた。

恩人かづきの一希さんと、彼の妹の奈緒なおに俺は救われた。もう一度生きる意味を与えてくれた。

その日から、クソつまらなかつた日常が大切な日々が変わった。

そして俺は、長年の間探し続けていたタイムリープ「時空移動」の能力者を。乙坂隼翼おとさかしゆんすけを、ついに見つけ出すことが出来た――。

## Episode 31 温もり

アメリカで行ってきた研究、本来の能力、あとから身に付けた能力、長い時間をかけて歩んできた過去。その全てを話し終えた。俺の過去を知っている奈緒以外の三人の反応は、三者三様だった。

「俺の『時空移動』が、お前を巻き込んだのか……」

「特殊能力を得る投薬だと？ まさか、そんなモノが存在するのか……！」

隼翼は重苦しく、熊耳は信じられないといった感じで戸惑い。足下に視線を落として聞いていた乙坂は顔を上げて、奈緒に問いかけた。

「……友利は、知っていたのか？」

「はい、知っていました」

予想通りの答えだったのか、「そうか……」と呟くように言って、再び足下に視線を戻した。それから誰も言葉を口にすることなく、沈黙が訪れる。

数分間の沈黙を破ったのは、隼翼だった。

「……それで、元凶を見つけたお前は、どうするつもりなんだ？」

彼の隣に立っていた熊耳が、警戒を強める。

「別に、何も」

「長年、俺を探していたんだろ……？ 正直、俺自身も、何度やり直したか覚えていないくらいだ。お前にとっては、本当に終わりの見えない時間だっただろう」

「まあ、見つけ出したら、とりあえず一発殴ってやろうと思っていましたけど」

「それなら、どうしてだ？」

俺は目を閉じて、ゆっくり、深くひとつ呼吸してから彼の疑問に答える。

「俺はずっと、私利私欲のために『時空移動』を繰り返しているんだと思っていました」

スポーツで良い結果を残したいとか、志望校に受かりたいとか、思

い人が居て振り向いてもらいたいとか。そう言った個人的な私利私欲で、能力を乱用しているんだと思っていた。

「あなたの話を聞いて、違うと知った」

いや本当は、もうずっと前にわかっていた。奈緒なおから聞いた話や、星ノ海学園の生徒会のあり方で。本気で、能力者を保護するために活動していることはわかっていた。

ただ、認めたくなかっただけだ。もし認めてしまったら、俺が歩いていた時間を、生きてきた意味を否定してしまうような気がしたから……。

それは全部、俺の弱さ。

でも今は、素直に受け入れられている。それはきつと、隣に大切な人が居てくれるから。

「隼翼しゅんすけさん、あなたは俺と同じだ」

「どういう意味だ？」

「歴史を変えてでも、人の理ことわりに触れてでも助けたい人がいる。それは痛いほどわかりますから……。」

——俺にも、助けたい人がいる。

きつと俺だけじゃない。誰もが誰かを、何かを想って生きているんだ。

「納得いきませんか？」

「ああ。知らなかったとは言え、俺の”時空移動”タイムリープが、お前を巻き込んでしまったのことは紛れもない事実だ。人生を狂わせちゃった、それは償わせてくれ」

「正直最初は恨みました。けど今は、感謝しています」

今も隣に居て、ずっと手を繋いでいてくれる大切な人を見る。示し合わせたように同じタイミングで彼女も俺を見た。小さくうなづいて、視線を隼翼しゅんすけに戻す。

「大切な人と出逢うことができました」

隼翼しゅんすけに向けた言葉じゃない。これは、奈緒なおに向けて言った言葉。

その想いは伝わり、繋いでいる手に少し力を入れて握ってくれた。

「それにあなたは、もう十分すぎる代償を支払っているじゃないです

か」

視力を失い、愛する弟妹きょうだいとの関係を絶った。十分過ぎる代償。責める気など起こらない。

「……そっか、すまない」

本当に申し訳なさそうな顔で謝罪の言葉を述べた。

「ああ、そうだ。ひとつだけありました」

「なんだ？ 遠慮なく言ってくれ、俺に出来ることならなんでもする」  
「あなただけにしか出来ないことです。すべてが終わったら、乙坂おとさかさんと歩未あゆみさんを抱きしめてあげてください。心から」

「——わかった、約束する」

力強い返事だった。必ず果たしてくれる、そう思えた。まあ乙坂おとさかの方は、戸惑って動揺していたけど。それは兄弟の問題だからノータッチにさせてもらおう。

そして、隼翼しゅんすけは話題を本題に変えた。本来の目的である、崩壊の能力に巻き込まれた妹の歩未あゆみを助けるための話へ。

「さあ、有宇ゆう。俺の能力を奪え、使えなくても能力自体は失われていないハズだ。お前が過去に飛んで、歩未あゆみを助け出すんだ」

乙坂おとさかは視線を落としたまま、深く考え込んでいるようだった。本当に上手く行くか不安なんだろう。もし失敗すれば、もう一度あの絶望を味わうことになる。

「作戦を立てましょう」

「宮瀬みやせ？」

ようやく顔を上げた。

「そうですね、あたしもそれがいいと思います。事前に計画を立てておけば、過去へ戻ったあとも円滑に進みます」

「友利ともり……すまない」

「いい友だちをもったな、有宇ゆう」

乙坂おとさかにかけての声は、とても嬉しそうに聞こえた。一度仕切り直し、歩未あゆみを救出する作戦を立てるため状況整理を始めた。

「中等部の見取り図はありますか？」

「熊耳くまがみ、頼む」

「ああ、ちょっと待ってろ」

熊耳くまがみは後ろの柵からファイルを取り出して、テーブルの上に中等部の見取り図を広げた。俺たちは、見取り図を囲むようにして立つ。

「奈緒なおさん、どこが崩壊したんですか？」

崩壊の詳しい状況をよく知らなかった。現場保護のため規制線が張られていて中に入れなかったし、中等部校舎の約半分がブルーシートで覆われていたため外からでは詳細は分からなかった。本人から聞くのも酷な話と思って避けていたが、今更ながら忍び込んででも観ておくべきだったと後悔する。正直、こんなに早く訪れるとは思っていなかった。

「ここです。正門から向かって左側の角です」

崩壊現場を指で差す。場所は校舎の左端。

「なるほど、どういった状況で崩壊したか分かりますか？」

「いえ、あたしたちが現場に着いた時にはもう崩れてしまっていましたので……」

崩壊した現場の状況と助けられなかったことを思い出したのか、二人の表情が曇った。

「そうですね。校内の監視カメラの映像は？」

望みは薄いですが、念のために一応聞いておく。

星ノ海学園は保護した特殊能力者たちのために、隼翼しゅんすけたちが買収したと言っていた。高等部の校舎には特殊能力者の状況を把握するため大量に監視カメラが設置されていた。おそらく中等部の方も同様のハズ。

「警察に押収されちゃってる。現場検証って名目でな」

「バックアップは必ず取ってください。常に最悪を想定して動かなければなりません」

期待してはいなかったが、隼翼しゅんすけの返答は想像通りの答え。

「了解、組織を優先したとはいえ迂闊うごんだった。有宇ゆう、戻ったら伝えてくれ。でも、俺の相棒が観ていた。な、プー」

「モニタールームでリアルタイムで観ていた。映像が途切れた崩壊直後の詳しい状況は、目時めときから聞いている」

組織の創設メンバーの一人。いつもこの時間帯には、ここへ帰ってきているらしいのだが。

「目時は今、他の仲間たちと別行動をしている。今日はまだ戻っていないんだ」

出来れば直接本人から聞きたかったが、聞けるだけありがたい。

「熊耳さん、教えてください」

「隼翼と弟の妹は、カッターナイフを持った女子生徒に追われて、この最上階に追い込まれた」

奈緒が指を差したところと同じ場所を差した。

「女子に追われてた？ それに、カッターって……！」

様子からして、乙坂も初耳だったらしい。それにしても刃物か、確かに穏やかじゃないな。

「その女子生徒は誰か、特定できていますか？」

「いや、そこまではな。なにせ生徒数も多いし、映像も遠くではつきりとはな。だが、髪はお前くらいの長さで白いヘアバンドをしていた」

奈緒の外見と比較して、カッターを持った女子生徒の特徴を話した。俺は二人に、なにか心当たりがないかを訊いた。

「……もしかして、あの子でしょうか」

心当たりがあったのか、奈緒が呟いた。

「心当たりがあるんですか？」

「はい。風邪をひいて欠席していた歩末ちゃんのお見舞い来ていたクラスメイトの中に、特徴が似ている子が居ました」

「歩末の見舞い？ あっ！ 歩末を睨んでた、女子か!？」

「歩末を睨んでた？」

「妹さんは、恨みを買うような性格じゃなさそうだったかな」

「カッターを持った女子生徒と特徴が似ている、歩末さんを睨んでいたクラスメイトですか。彼女には注意しましょう」

女子生徒は一時的に置いておき、実際に歩末を救出する方法の算段に入った。

「まずは、歩末さんを崩壊に巻き込ませないことが最重要です」

「そうだな……。なにがファクターになるかわからない。有宇、過

去に戻ったらず先ずはお前の「略奪」で、歩未の「崩壊」を奪え」

「ああ、わかった」

俺も隼翼の意見に賛成。

事前に「略奪」で奪っておけば、とりあえずは「崩壊」が発動することはなくなり、歩未が巻き込まれることもなくなる。

あとは、なぜ「崩壊」が発動したかを知りたい。そして出来れば、乙坂や高城タイプの任意発動能力か、俺の「継承」のような強制能力のどちらであるかを知りたい。もし後者であったなら次は、不意に乙坂が巻き込まれる可能性がある。

「次ですが。崩壊が起こった日……なにがあったかを知る必要があります」

「中等部に潜入しましょう」

「出来ますか？」

「はい、中等部に通っていた時の制服があります」

それなら周囲に警戒されることなく潜入できるな。

「僕も行く。歩未は僕が守る」

「ほう、頼もしいな」

真剣な顔で言った乙坂を、熊耳は若干茶化すように言った。

「茶化すなよ。乙坂さん、歩未さんはあなたに任せます。崩壊を止められても、追われていたことは事実です。現場……歩未さんが追い詰められた最上階で待ち伏せしてください」

「ああっ！」

「奈緒さん、最上階になにがあるかわかりますか？」

「屋上に出られる扉があります。ですが普段は、安全面を考慮して施錠されていて外へは出られないはずですよ」

「なるほど……」

俺より早かったとはいえ、乙坂も星ノ海学園に転校してきたばかりだと以前奈緒から聞いた。なら妹の歩未も同様。施錠されていることを知らずに、最上階へ行ったということも考えられる。

「奈緒さん、女子生徒を尾行できますか？」

「はい、あたしの能力を使えば見つかることはありません」

「能力？」

「あ、そういえば話していませんでしたね。あたしを見ていてください」

少し距離を取った奈緒なおを見ると、突然彼女の姿が消えた。

「あれ？ 消えた」

「いや、僕には見えてる」

——乙坂おしざかには見えているのか。

その言葉を合図にしたように、奈緒なおが同じ場所に姿を現して戻ってくる。

「これがあたしの能力、 “不可視” です。ただし対象は意識したひとりに対してだけっす」

「なるほど、尾行にはうってつけですね」

——正にステルス、ごきげんな能力だ。タイムマンなら最強の能力だろう。

「では尾行は、奈緒なおさんをお願いします」

「はい、任せてください」

そして最後に、 “時空移動”タイムリープ で戻る時間軸を決める。

「乙坂おしざかさんが、 “時空移動”タイムリープ で戻る時間軸ですが……」

「歩未あゆみが能力を発症する日でいいんじゃないか？」

「それだと、宮瀬みやせが……」

「なにか問題があるのか？」

隼翼しゆんすけの提案はもつとだ。いつ能力に目覚めるかは個人差がある。

まあ事件が起きた当日に奪うのがもつとも確実ではあるけど。と思っていると、奈緒なおが代わりに理由を説明してくれた。

「アメリカにいる可能性もあります。事件が起こる前に渡米してしまったので」

「なら、アメリカに行く前に戻ればいいんじゃないか？ いざとなつたら “共鳴” って能力で “崩壊” もくい止められるんだろ？」

「まあ状況によりますけど。ですが、アメリカで調べたいことがあります。歩未あゆみさんの発病時期によりますが、今回は生徒会メンバーで対処してもらおう可能性が高いと思います」

「………… 最悪、宮瀬抜きか」

「わかりました。その時は、あたしたちで必ず守りきります」

「お願いします。では最後に確認します。乙坂さんが、隼翼さんの「タイムリープ時空移動」を「略奪」で奪う。そして歩未さんの能力、「崩壊」が発症する日までに戻り、この作戦を過去の奈緒さんに伝える」

「ああ、わかった」

乙坂が力強く頷いたところで、隼翼が勢いよく話し出した。

「よし、決まったな！ 有宇、俺の能力を奪って歩未を救ってくれ。そしてなにも知らない俺に、歩未と必ず二人で一緒に、これまでの経緯を説明しに来てくれ」

「わかったよ。兄さん」

乙坂は意識を集中させ、隼翼に対して「略奪」を使う。そして五秒後、彼に乗り移っている間失っていた意識を取り戻した。

「あとは任せただぞ、有宇」

「ああ、歩未を救うために…………！」

二人は必ず妹を救い出す、その決意を固めた。

彼らの決意に、俺も覚悟を決めた。

——必ず訪れる未来、別れの未来。

隣にいる奈緒に向き合う。けど、彼女はうつむいていた。

「これでお別れです」

「………… はい」

「顔を見せてください」

「………… むりつす。わかってたけど…………」

彼女の足元に、涙の粒が溢れ落ちた。

そう、わかった。こうなることは………… 最初から。それでも一

緒に居ることを望んでくれた。

「………… 早すぎます」

「仕方ないです。わかっていたことです」

「わかっています…………。でも、とまらないっす…………」

俺は、周りの目など気にもせず。

あの日の夜のように彼女を抱きしめ、優しく頭を撫でる。

「約束、守れなくてごめん」

「そうですよー。まだ、おうちデートしてないんすよ……」

「……うん」

「一緒に、DVD観て……」

「……うん」

「一緒に、料理して……」

「……うん」

「また一緒に、星空みたかったです……」

「……うん」

「だから、約束してください」

「約束？」

「はい」

抱きしめた腕の中で、俺にだけ聞こえる小さな声――。

「また、あなたの彼女にしてください」

「……いいんですか？」

「あなたじゃないと、いやっす」

「約束、します。必ず守ります」

「はい――」

「奈緒さん」

「……はい」

「あなたのことが好きです、愛しています」

「はい、あたしもです」

苦しくならないように抱きしめる。

優しく、それでも強く、心から抱きしめた。

「乙坂、飛んでくれ……」

「だけど僕は、お前たちに……」

「有宇、有宇ッ！」

手探りに乙坂の肩を掴み、隼翼は強い口調で言い聞かせる。

「二人の覚悟を、想いを無駄にするなッ！」

「覚悟……。そっか、これが――。兄さん、僕は行くよ、歩未を救う

ために……！」

「ああ、そうだ。行け、有宇！」

視界が歪む、タイムリープ“時空移動”が起こる時の感覚だ。もうすぐに過去に戻る、別れの時を迎える。

俺は腕の中の彼女を、奈緒なおを抱きしめて続けた。意識を失う、その瞬間まで――。

\* \* \*

――ここは、どこだ……？

辺りが暗い、しばらくして目が慣れてきた。

柔らかな色の間接照明が灯っている。どうやら飛行機のシートに座っているようだ。座席のモニターで日付を確認する。“空中浮遊”の能力者を対処した日、日本時間の早朝。なら“崩壊”が起きるのは二日後か。

乙坂おとさかは、上手くやれるだろうか。きっと大丈夫だ。奈緒なおがついている。

――……わかってたけど。

さつきまで確かに腕の中にあつた温もりは、もう余韻すら残っていなかった。

## 生徒会活動日誌 4

生徒会活動日誌。

さて、今日も記録をつけていきましょう。

乙坂さんの家の前で見張っていたハズが、気がついたらあたしは、自分の部屋のベッドの上で眠っていました。机の上に書き置きがあったので、宮瀬さんが運んでくれたようです。

……重くなかったすかね？

それから机に書き置きには「今日はゆっくり休んでください」と書かれています。さて、シャワーを浴びたら行きますか。

一時間目の終りに教室に入ると、宮瀬さんは驚いた表情をしています。……

やはり今日は休むと思っていたんでしょね。

乙坂さんの姿が見えないところを見ると、今日は欠席のようですね。疲れ切った表情をしてましたし、休息が必要だと思います。

昼休み、宮瀬に声をかけて生徒会室へ。

宮瀬さんは、あたしが彼にもう一度生きる意味を与えたと幸せになってもらわないと困ると言いました。そんなことを聞いたら……。

乙坂さんが、歩未ちちゃんがこんなことになってるのに……でも、止まらなくて……。

彼は質問に友利一希の妹ではなく、友利奈緒として守りたい。そして、あたしのことを好きと、そう言ってくれました。

あたしは、彼にとっても残酷なことをしました。それでも側に居たいと、好きだと言ってくれて……それが嬉しくて……。

\* \* \*

翌日、乙坂さんは無事に復帰し、放課後本格的に歩未ちちゃんを救出するための話し合いをしました。

あたしの知ってる「隼翼さん」と「タイムリープ」の能力者「シユンス

ケ」さんが、おそらく同一人物という結論にいたりりましたが、それは乙坂おとさかさんの記憶が鍵を握ることになりそうです。

きっかけ、あれっすねー。名前で呼んでもらえるってうれしいものっすねっ。

そして、学校帰りに寄り道をしました。

一緒にピザを食べて、新しい音楽プレーヤーを買って、宮瀬みやせさんは『Z H I E N D』のアルバムを買いました。

ここで『Z H I E N D』を選ぶなんて、やっぱ！ わかってるな！

彼の家に着いて、夜ごはんを食べて、さっき買った『Z H I E N D』のアルバムと一緒に聴きました。

あたしは曲の途中で泣いてしまいました。

ずっと考えないようにしてたのに……。そんなあたしを、彼は優しく抱きしめて、ごめんと……。

あたしは忘れられる……。傷つくのはあなたなのに……。どうして、そんなに優しくしてくれるんですか？

\* \* \*

翌朝作ってくれた朝ごはんを食べて、一度自宅に戻りシャワーを浴びて、身支度を整えてリビングに行くと、宮瀬みやせさんはなにやら考えごとをしているようでした。

今日は休日、これからどうするか考えましたが、これといって浮かばず『Z H I E N D』のPVを観ながら考えることにしました。

この映像カッコイイすよねー！ あたし、将来『Z H I E N D』のPVを撮るのが夢なんすよー！ 『Z H I E N D』の活動を追ったドキュメントでもいいなっ。

そのあとはカメラの映像を観ながら、彼が転校してくる前の話をしていたら、有働うどうさんの話になりました。

“念写”の特殊能力者だと話し、あたしも念写で下着姿を撮られたことを話しましたが……。

完全に無視つす！ あたしの下着姿は必要なしっすか、いや知ってたけど……………。

まあ、あの様子からしてなにか考え込んでいるようでしたが……………なにを考えてたんすかね？ まさか良からぬことを、つてそれはないですね。

あたしの話をしたんで、今度は宮瀬みやせさんの話を聞きました。アメリカでは彼女はいなかったのかを訊いたら……………。

まったく、よくあんな恥ずかしい言葉をストレートに言えますねっ。

日本とアメリカの文化の違いなんでしょうか？

でも、あたしの思い過ごしであったとわかったので、よしとしましょう。

\* \* \*

登校日の昼休み。生徒会のメンバーを生徒会室に呼び出しました。

黒羽くろばねさんはすぐにきましたがおつせえーなー！ あいつら

何座だ！ やつと来たと思ったらパスタを食べてたって、女子か！  
まったく。

全員が集まったところで本題に入ることに、本題はそう『ZHIEND』ジエンドのライブチケット。前から楽しみにしていたのですが……………今回は乙坂おとさかさんの記憶を取り戻すきっかけになるんじゃないかと考え、泣く泣く譲あゆみることにしました。

無事に助けられたら歩未あゆみちゃんをくださいと言ったら、「やるか！」と本気で即答されてしまいました。冗談が通じないんすから。

教室への戻り際、黒羽くろばねさんに話しかけられました。

彼女から話しかけてくるなんて、珍しいな。と思っていたら、彼女に「よかったですねっ」と言われましたが、なんのことかわからなかったので「なにがすすか？」と聞いたたら小声で、「奈緒なおさんっ」と言われ、突然のことで動揺してしまいました。

あたしの反応を見て「やつぱりっ」と嬉しそうに言っていたので鎌

をかけたようです。別に隠してた訳ではありませんが…… やられました。お姉さんに似てきたんじゃないっすかね？

\* \* \*

その日の放課後、宮瀬さんと二人で話をしていたんですが、しばらくして彼は眠ってしまいました。

きつと疲れていたんでしょう。無理もありません。アメリカから帰ってきて、歩未ちゃんのこと、乙坂さんのこと。それにあたしのことで無理をさせてしまいましたから……。

よし！ 今日スタミナ料理を作りましょう！ あたしにはこれぐらいしかできませんから……。彼が起きたら一緒に買い物にいきますか。うーん、なににしよつかない？ スタミナ料理といったら、やっぱり肉っすよねー！

起きるのを待っていたら、うなされ始めたので名前を呼んで起こしましたが、「大丈夫」となんだから無理しているように感じます。うんっ、やっぱりっ、お肉料理で元気になってももらいますっ！

一緒にスーパーに行き買い物していると乙坂さんに声をかけられました。そういえば、歩未ちゃんともこんなことあったなー。

どうやら彼も、夕食を買いに来たようです。ですが、出来合いのお弁当を持っていたので「いつもお弁当なのか」と訊ねたら、予想通り「そうだ」と答えました。ですので、持っていたお弁当を戻させ三人で食事をすることにしました。

買い物を買わせて併設マンションに着くと、ちょうど運動をしていた黒羽さんを発見。流れて夕食と一緒に食べることに、宮瀬さんは材料の買い足しに、それに美砂さんが同行することに……。

…… まあー、別にいいっすけどねー。

あたしは乙坂さんの家のキッチンで、先に下準備を始めました。しばらくして二人が高城を連れてやって来ました。

ご飯ができると美砂さんが、宮瀬さんになにやら合図送ってました。なにかと思ったら、高城をどうにかしろといったところですね。

三人は食べ終わると、高城たかじょうが持ってきたレトロゲームを再度プレイし始めました。

それを見て、あたしたちはようやく食事をすることに。ちよつと冷めちゃいましたけど、美味しいと言ってくれたのでよかったです。

実は遅くなると予想していて、買い足しの分は、冷めてもいいように予め下味をしっかりとつけておいたんすよ。

\* \* \*

今日も、熊耳くまがみからの連絡はないようでしたので解散。三人が帰ったあと深い夕メ息をうたいてしまいました。

宮瀬みやせさんは心配して、疲れているかと聞いてきたので『ZHENN』のライブに行けないからと答えたら、代わりにデートをしようとステキな提案をしてくれました！

いやー、女心わかつてるなー！

さらに翌日の放課後。

熊耳くまがみの連絡を待ちながら、あたしは雑誌を見ていました。しばらくしても連絡は来ないようなので、この日も解散。その雑誌で見つけたんです『おうちデート』なるステキなワードを！

それを彼に提案すると了承してくれました。

さっそくDVDを探すため下校すると、前方から『ZHENN』のボーカルが……。彼が英語で彼女に話を掛けると、日本語でモダン焼きを食べさせてくれと言われました。

仕方なく彼女をお好み焼き屋に連れていくことに。お店のメニューにはモダン焼きがなかったため、お好み焼きと焼きそばを組み合わせて作ると、彼女も満足したようです。

食べ終わると彼女があたしたちに、ただならぬ雰囲気を感じたらしく話を聞かせて欲しいと言われ公園のベンチで話をすることに。

そこで兄のこと、歩未ちゃんのことを話すと兄に会わせて欲しいと言われました。諦めそうにもなかったので、兄の面会へ同行してもらうことに。

病院に着き病室へ入ると鎮静剤が切れていて、また暴れていました。それを見た彼女がアカペラで歌うと兄の様子に変化が……。宮瀬みやせに連れられて兄に話しかけると、兄は……。あたしのことに気づいてくれました……。

今まで、なにをしても気づいてくれなかったのに……。奇跡つてあるんですね……。

兄の面会を終え、サラさんを迎えの来ている駅まで送ると別れ際に明日のチケットをプレゼントしてくれました！

一度は諦めたのに……。いいんですかね！……。でも、明日はおうちデートの約束が……。「いつでも出来ます、明日はライブデートにしましょう」そう言ってくれました！

この日は、宮瀬みやせさんと明日の待ち合わせの約束をして自宅へ帰りました。

明日は『ZHENND』のライブデート！ 楽しみだなー！ 普段とはちよつと違う髪型にしよっかな？

今日はこれで記録を終わりにしますっ。

\* \* \*

あたしは今、ZHENNDジエンンドのライブ会場でこれを録音しています。宮瀬みやせさんは今、トイレに行っているのでその間に撮っています。たぶんこれは、もう聞き返すことないでしょう。

おそらく今日、なにかしらのことが起きる。そんな予感がしているからです。昨夜の兄にのように。ZHENNDジエンンドの、サラさんの歌には不思議な力があるように思えてならないからです。

だから、今のうちに話しておこうと思います。

もし過去に戻って、今日までの日々がすべてがなかったことになったとしても、あたしは後悔しません。だって、とても幸せだったからです。

記憶を失っても、きつとまた……。

もしそうなれた時は、今度は下の名前で呼ぼうと思います。

だって恋人同士は、名前で呼び合うものだと思いますから……。

## Episode 32 決意

スマホのアラームで目を覚ましたあたしはすぐ、自分に身に起こっている異変に気がついた。

「どうして、あたし……」

それは、頬を伝う涙。パジャマの袖で拭っても、また自然と溢れてくる。キャンプでの不規則な睡眠が原因、昨夜も遅くまで寝付けませんでしたし。それにしても、これはいったい何なのでしょうか。

そう、まるで大切な物をなくしてしまった時のような切ない気持ち、心にぽっかりと穴が空いてしまったみたい。悲しい夢でも見ていたのだろうか。思い出そうとしても、そこだけ抜け落ちてしまっている様な感覚で上手く思い出せない。

「うくん…… あっ！」

考えごとをしている間に、登校時間が迫っていた。急いで支度を済ませて、預かったカギを持って家を出る。時間がなくて食べ損ねた朝ごはんは、星ノ海学園の購買のサンドイッチ。ホームルームが始まる前にジュースで流し込んで、午前の授業を受ける。午前最後の授業は、英語。

「あら。チャイムが鳴ったわね。ここまでにしましょ。それから今日の授業内容も期末試験の範囲だから、ちゃんと勉強しておくこと。いわね？」

「ええー！」

不満の声が飛び交う。何やら、中間試験の時のデジャブを感じる、と思っているとこれまた以前と同じ様に授業終わりのタイミングで、スマホにメッセージが届いた。協力者の熊耳くまがみが今、星ノ海学園へ向かっているという内容。

どうやら新しい能力者が見つかったらしい。今からだあと二十分ほど、お昼を調達する時間はありそう。

「おにー」

「あくまー！」

「うるさいわね、範囲広げるわよ！ クラス委員、号令！」

「は、はい、起立！」

みんな揃って挨拶をして、昼休みに入った。あたしは隣の席の黒羽くろばねさん、学食へ行くか話している乙坂さんおとしがと高城たかじょうにも用件を伝えて、お昼を調達してから生徒会室へ向かった。

「あら、奈緒ちゃんじゃない」

お昼を片手に生徒会室へ歩いていると、英語の授業を担当している仲村先生なかむらと廊下でばったりと出くわした。

「こんにちは」

「今から、お昼なの？」

「任務が入ったので。生徒会室で済ませようかと」

「そう、大変ね」

「いえ、お気遣いありがとうございます。それでは、急ぎますので——」

軽く会釈をして、横を通り過ぎようとしたところで声をかけられた。

「根詰めすぎちゃダメよ」

「え？」

「最近、ちゃんと寝てないでしょ？ 授業中も珍しく上の空だったわよ」

凶星をつかれた。確かに、授業に集中できていませんでした。でも能力者保護は生徒会の使命、最優先事項。弱音を吐いては生徒会長は務まらない。学業との両立をしっかりとしないと、ですね。

「すみません、気をつけます」

「別に、叱ってる訳じゃないわ。ただ、何か想うことがあるんじゃないかと思って。生徒会以外のことで」

仲村先生なかむらの心配は、生徒会の指命とはまったく違うことで。そして、思い当たってしまった、日本を飛び立つ直前に預かった自宅の力ギのこと、あの人のことを——。

空港で見送ってから、もう12時間以上が経っている。予定通りなら、アメリカに到着しているはず。今、どの辺りに居るんでしょうか？ まあ、さすがに大学にはまだ着いてないでしょうけど。

「あつたみたいね、心当たり」

「あ、いえ、まあ……」

仲村先生なかむらは「行かなくていいの?」と言って、あたしに優しく微笑みかけてながら軽く首をかしげた。

「失礼します」

急がないとお昼を食べる時間がなくなってしまいました。

「奈緒ちゃん」

「はい?」

再び呼び止められ、振り返る。

「あたしは、あなたの、あなたたちの味方だから。覚えておきなさい」

あたしは明確な返事はせずに会釈を返して、生徒会室へ急いだ。

今のは、いつたいたいのことだったんでしょか。

「能力は——『崩壊』」

生徒会の協力者で、特殊能力者を発見できる能力者である熊耳くまがみはテーブルの地図上に一滴の水を落とし、何事もなかったかのように生徒会室を出ていった。

新しく見つかった能力——『崩壊』。物理的なのか、精神の崩壊なのか詳しくはわかりませんが、能力の名前からして危険な能力な気がしてならない。

「『崩壊』ですか、何やら危険な響きですね。場所は——」

あたしと同じ懸念を感じている高城たかしやうは席を立ち、水滴が示した場所を確認。

「おや、これは……」

「どうしましたか?」

「いえ、能力者の居場所は、我々が住む併設のマンションです」

「マンション?」

あたしも席を立ち、地図を確認する。地図上の星ノ海学園併設マンションに水滴が残っていた。

「ちよつといいか?」

部屋の隅で腕を組んでいた乙坂おとさかさんが、珍しく真面目な表情かおをして会話に割り込んできた。ただならぬ雰囲気を感じ取ったあたしも、真

面目に聞くことにする。

「なんででしょう?」

「崩壊」の能力者はおそらく、僕の妹だ」

「歩未ちゃん……根拠は?」

乙坂さんは水滴が落ちた地図を指差して、妹の歩未ちゃんが能力者である可能性が高い理由を話す。

「歩未は今日、風邪で学校を欠席している。こんな時間帯に家にいるってことは、妹で間違いない」

「なるほど、辻褄は合いますね」

今日は登校していなくて、家で療養中。のほほんとしている、黒羽さんに視線を移す。メカニズムは不明ですが、兄弟姉妹は発病しやすい傾向にあることは事実、可能性としては十分あり得る。

「わかりました。ではお見舞いを兼ねて、歩未ちゃんが能力者になつてしまったか探ってみましょう」

「待て。相手は病人だ。一斉に押し掛けると、歩未の負担になる。友利、お前だけにしてくれ」

「では、そうしましょう。二人は、念のため他に欠席している生徒がいないか調べてください」

「了解いたしました。では柚咲さん、我々は職員室で出欠席名簿を借りて手分けして調べましょう」

「はーいっ」

別の生徒である可能性を拭いきれないため、そちらの方は高城と黒羽さんをお願いして、先に終わるであろう二人に生徒会室のカギを預け、四人一緒に生徒会室を後にして調査に向かう。

あたしと乙坂さんは、向かいのコンビニでレトルトのお粥とスポーツドリンク、なめ茸、デザートにプリンを買って、あたしたちが生活している併設のマンションへ。

「ちよつと様子を見てくる。呼びに来るから、ここで待っていてくれ」と言われたので、玄関前で出てくるのを待つことに。そこへ、高城からメッセージが届いた。高等部の名簿を調べ終え十人ほどが今日、病気や家の都合で欠席しているという情報と、今から中等部の方を調べ

るという内容。これで、歩末ちゃん以外の可能性も出てきた。

でも、さっきの乙坂さんの目からは、とても強い意思、決意の様なものを感じた。何か重大なことを成し遂げようという強い決意を感じさせる、そんな目をしていました。

玄関から、歩末ちゃんと同じ中等部の男子一人と女子二人の計三人が出てきた。三人は歩末ちゃんのクラスメイトで、お見舞いにきていたそう。そしてほどなくして、乙坂さんが呼びに来た。

「入ってくれ」

「おじやましまーす」

家の中へ上がらせてもらい、歩末ちゃんが休んでいる部屋へ。パジャマ姿の歩末は、布団で横になっていた体を起こした。

「友利のお姉ちゃんなのですー」

「こんにちは、体調はいかがですか？」

「この通り、もう平気なのですー！」

「薬で一時的に熱が下がってるだけだ、おとなく寝ている」

「むう、有宇お兄ちゃん、大袈裟なのですー」

それでも乙坂さんの言うことを素直に聞いて、布団に横になった歩末ちゃんは、部屋のドアの方を見つめている。

「友利のお姉ちゃんだけなのですか？」

「大勢で来ると疲れると思っています。今日は、あたしだけです」

「そうなのですか、宮瀬のお兄さんとの約束を果たせればと思ったのですけどー」

「ああ、野球の時の約束っすね。」

「宮瀬と約束？ 何の話だ？」

「ゲーキをご馳走していただいたお礼に、あゆの料理を振る舞う約束をしていたのですー」

「そんな約束してたのか。残念だったな、また今度体調のいい時にしろ。僕から伝えておくから」

「おでこに手を乗せて、乙坂さんは穏やかな声で言い聞かせる。」

「はいなのですー」

歩末ちゃんが納得してくれたところで、本格的に探ることに。近く

に座って、歩未ちゃん与会話。学校のことや体調のこと、世間話を交えながらいろいろ話をしてみました。気になったのは今朝、悪夢を見たという話し。ですが、明確な確証とまではいかず、今日のところは夕食と一緒に食べておいとますることにしました。

「悪夢の内容を聞き出してください。『崩壊』の能力の手がかりになるかもしれません」

玄関の外、部屋の前で廊下の手すりに両腕を乗せた乙坂さんは、夜空を見上げて黙り込んでいる。

「聞いていますか？」

「ああ、聞いてるよ。なあ、友利」

「なんですか？」

「もし僕が、未来から『時空移動』して来たって言ったら信じるられるか？」

——未来……なるほど、そう言うことですか。

「信じますよ」

「そっか、なら話しは早い。明後日、歩未は『崩壊』の能力で死んでしまう。それを阻止するために、未来から助けに来たんだ」

「死」という強烈なワードに少し動揺してしまいそうになる。でも、すべて合点がいました。

「そうだったんですね。それは必ず成し遂げなければいけません」

「ああ……」

乙坂さんは、ゆっくりとあたしに顔を向けた。

「お前と宮瀬には感謝してる。歩未を喪って塞ぎこんでいた僕に、歩未を救う道を示してくれた。ありがとう」

「未来のことなので身に覚えはありませんが。どういたしまして」

——で、いいんですよ。あの人が、宮瀬さんが長い年月をかけて探し続けていた『時空移動』の能力を使って戻ってきたのなら、わだかまりも解けたんでしようし。

けれど何やら、どこか申しわけなさそうな表情を浮かべている。

「どうしました？」

「僕は、お前に謝らないといけないことがあるんだ」

「なんのことつつすか？」

「お前は、お前たちは……いや、やっぱりなんでもない。僕が、話すことじゃなかった。忘れてくれ」

「そうっすか」

言いかけた口を噤んだ——あたしたちの間に、何かあったのかもしれない。言葉にすることを躊躇う程の事情、いったい何を意味しているのだろうか。

「あ、そうだ。宮瀬が、歩未を救出する作戦を立ててくれたんだ」

「なんでそれを最初に言わないんっすか！ それが一番大事っしょっ！」

まったく、いったいなんのために過去に戻って来たんだか。

あきれて出そうになったため息を飲み込む。

「わ、悪い。えっと、で作戦なんだけど——」

未来で立てたという作戦を詳しく聞き、あたしは腕を組んでうなづく。

「なるほど、わかりました。二人にも協力を頼みましょう。作戦に必要な物は、あたしが手配しておきます。あなたは先ず、歩未ちゃんの能力を本当の能力『略奪』で奪ってください。すべてはそこからです」

「ああ、わかってる。家に戻ったらすぐにでも奪うつもりだ」

「お願いします。ではまた明日学校で、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

自分の家に帰ったあたしは、机の上にスクールバッグを置いて、制服もままベッドに腰をおろす。

「あたしたちの間に、何があったんですか？」

スマホの画面に表示されているあの人、宮瀬さんの名前に向かって問いかけても、当然返事は返ってこない。通話ボタンに伸ばしたかけた指を止める。今、聞く勇気を、あたしは持ち合わせていなかった。

——今は、歩未ちゃんの救出に全力を注ぐことだけに集中しよう。

今度の作戦が上手く行ったあかつきには、報告を兼ねて聞いてみよう。

うと、あたしは決意した。

## Episode 33 く少しの勇氣く

「……また、ですか」

朝起きたあたしの目から、また涙が頬を伝っていた。

今まで、こんなことは一度もなかったのに。しかも、二日も続けてだなんて……。自分の体に異変が起きているのではないかと、少しだけ不安が過る。

「よし」

こんな時は、ZHIEND<sup>ジエン</sup>を聴くのが一番。一昨日の夜も、昨日の夜も、ZHIEND<sup>ジエン</sup>の音楽を聞いたお陰で心が休まりましたし。ベツトを降りたあたしは、勉強机に置いてあるパソコンを立ち上げて、ZHIEND<sup>ジエン</sup>を流しながら登校の準備を始めた。

「あれ？ 友利さん、どうしたんですかー？」

学校は昼休みに入り、生徒会室でお昼ご飯を食べていると突然、黒羽<sup>くろばね</sup>さんが寄ってきた。

「何がですか？」

「今日も、目が赤いですよ？」

「ああー、起きたら涙がでていたんです」

「宮瀬<sup>みやせ</sup>さんのことですか？」

「違います。どうして、あの人の名前が出てくるんですか？ ただ、夢を見ていただけです」

「夢？」

そういえば昨日も、夢を見ていたような……。ダメ。やっぱり、上手く思い出せない。深い霧に包まれている様な、不思議な感覚。でもまあ、夢なんて起きたら大抵は忘れているモノですし。

それなのに、黒羽<sup>くろばね</sup>さんはなぜか食いついてきた。他人の夢の話しながら対して面白いとは思わないんですけど。

「悲しい夢だったんですか？」

「いえ、どちらかというと幸せな夢だったような気がするんですが、よく覚えてないんすよ」

「幸せなのに涙が出ていたんですか？ とつても不思議ですねー」

「そうですねー」

テキトーな返事でやり過ごし、放課後。生徒会メンバー全員が生徒会室に集まったところで昨夜、乙坂さんおとさかから聞いた『崩壊』の件を、高城たかしやうと黒羽くろばねさんにも説明する。

「と言うことで明日は、歩未あゆみちゃんを助けるために中等部へ潜入します」

「了解しました！」

「わたしもがんばりますっ！」

「二人とも、すまない……」

「なにを言っているんですか？ 友だちではないですか」

「そうですよー」

「…… ああ、そうだな、ありがとう。明日は頼むな」

「はい、お任せください！」

「みんなでガンバリましょーっ」

二人とも気合い十分といった感じ、空回りしなければいいんですが。さてと、あたしも準備に取りかかるとしますか。中等部の制服を調達するため、今日はこれで解散にした。

翌朝、姿見の前で身だしなみを整えているあたしは、いつもの高等部の制服ではなく中等部の制服を身にまとっている。最後にこの制服に袖を通したのは卒業式の時なので、おおよそ四ヶ月ぶりくらい。時間はそれほど経っていないのに、気持ち窮屈に感じるのは成長していると言うことなのでしょうか。

——おっと、こんなことしている場合ではありませんね。

今日は中等部へ潜入するためスクールバッグは持たずに、スマホと家のカギ、それと紙袋を持っていつもより早めに家を出て、同じマンションの黒羽くろばねさんの部屋を訪ねる。部屋のインターフォンを押すと、すぐに反応があった。

「友利ともりさん、おはようございますっ」

「おはようございます。これ、中等部の制服です」

制服の入った紙袋を渡すと「ありがとうございますっ。ではさっそく着替えて来ますねっ」と言って部屋へ戻っていった。彼女が着替え

て出てくるのを外で待つ。そこへ高城たかしやうがやって来た。しかも、なぜかスーツ姿で髪も七三分けにしている。

「友利ともりさん、おはようございます」

「その格好は？」

あたしは挨拶を返すのも忘れて、訊いていた。

「実は、制服のサイズが合わなくなっていたんです。どうやら鍛え過ぎてしまったようですね……！」

なぜか得意気に、メガネを直しながら答える。

「まあそんな訳で教師に変装してみた所存です」

「そーですかー」

一瞬でバレると思いますが、違和感しかありません。

「お待たせしました」

着替え終えた黒羽くろばねさんが、部屋から出てきた。それと同時に、高城たかしやうの動きが止まる。

「どうでしょう、変じゃないですか？」

「問題ありません、似合ってますよ。サイズの方はいかがですか？」

「はい、大丈夫です」

「そうですか、それは良かったです」

「友利ともりさんも、制服似合ってますね」

「まあ、数カ月前まで着ていたの。さて行きますよ」

「はいっ」

中等部へ向かい歩き出したあたしたちを、意識を取り戻した高城たかしやうが走って追いかけて来たのは、数分後のことだった。

中等部の校門前に着くと、ちょうど歩未あゆみちゃんが校庭へ入っていくところでした。元気よく走っていった妹の後ろ姿を見送っている、

乙坂おとせがさんの背中に声をかける。

「おはようございます」

「ん？ お前たちか、おはよう」

「歩未あゆみちゃんは、無事に登校したみたいですね」

「ああ、熱も下がったからな。ところで、お前はなんだ？」

あきらかに一人浮いている高城たかしやうに、乙坂おとせがさんは疑問をぶつける。

「見てわかりませんか？」

「ああ、わからん」

「そうですか、ではお教えしましょう！ 私は、どう見ても中学生には見えないとの判断で教師に変装です！」

眼鏡をクイツとあげて、ビシツと姿勢をただし、ネクタイを直す仕事をして見せた。

「そ、そうか……」

妙なテンションの高城たかじょうに戸惑う乙坂おとさかさんは、高等部の制服を着ていた。

「あなたの分の制服も用意してますけど？」

「いや、僕はこのままでいい。歩未あゆみを……兄として助けたい」

「そうですか、わかりました。ですが、教師に見つかるとうるさいので慎重にお願いします」

「ああ、わかった。じゃあみんな、頼むな」

「はいっ。歩未あゆみちゃんの命、絶対に救いませよー、おおっつ！」

「おおー！ 因みに命を救うおまじないはありません！」

「すみませんっ！」

「さあーこっちです。裏口から行きましょう」

「あ、ああ……」

この場にそぐわない緊張感皆無な二人に対し、どう反応していいか困っている乙坂おとさかさんをうながして、校舎の裏口へと回る。

「『崩壊』は、奪いましたか？」

「ああ、昨夜奪った」

「そうですか、これで『崩壊』に巻き込まれることはなくなりましたね。名前の方は？」

「小西こにし、歩未あゆみのクラスメイトだ。クラスは1-C」

「わかりました。彼女の尾行は任せてください。二人もいいつすね？」

先ほどまでとは打って変わって、二人とも真面目に返事をした。裏口から校舎へ入り、それぞれ行動を開始する。

「おい、お前はここの生徒か!？」

「は、はい、この学校の教師ですが、なにかっ！」

「まったく見覚えがないな。怪しいヤツだな、職員室まできてもらえるかっ！」

「い、いや、いや、その……はいっ！ 行きますともっ、だから……！」

はい、高城脱落と。

一瞬で中等部の教師にバレて、職員室に連行されて行きました。まあこれは想定内です。むしろ囿役になってくれて行動しやすくなりました。これを狙っていたんですかね。

とにかくあたしと黒羽さんは、歩未ちゃんのクラスへと向かう。

「あれ？ キミ、もしかしてゆきりんじゃね？」

「えっ？ いえ、違いますよっ！」

男子生徒に指摘され、わざとらしく口笛を吹きながらごまかそうとしていますが、そんなごまかしが通じる訳もなく。あつと言う間に大勢の生徒たちに囲まれて大騒ぎになった。当然教師が対応に来る。あたしは、この騒ぎに乗じて歩未ちゃんのクラスへ急ぐ。

クラスの前に無事到着。教室の扉を開けて、近くにいた女子生徒に話しかける。

「小西さんは、いらっしやいますかー？」

「小西さんですか？ えっと……！」

探してくれている間に教室内を確認する。窓側の席で女子と話をしている歩未ちゃんを見つけた。歩未ちゃんを意識して能力を使い、視認されないようにしておく。

「あつ、いた。小西さくんっ。呼ばれてるよー」

「……はい？」

呼び掛けに、ひとりの女子が顔を上げた。

あの子が、小西さんですか。やっぱり歩未ちゃんのお見舞いに来ていた女子のひとりですね。顔を確認したあたしは、彼女に気付かれる前に、この場を後にした。

中等部一階の廊下。未来で「崩壊」が起こったと言う昼休み。あたしは能力を使つて、小西さんを尾行していた。なにかをポケットに

入れて教室を出た彼女は、ひと気の少ない廊下の角を曲がったところで立ち止まった。まるでなにかを待っているように、うつむいたまま微動だにしない。

「あれ？ 小西さん？」

そこへ、歩未ちゃんがやって来た。

「あなたが、来たせいだ……」

「え？ なにが？」

歩未ちゃんはなんのことかわからず、小西さんに訊ねる。

「及川くんと……」

「及川くんと？」

——男子の名前？

「及川くんと二人きりでお弁当食べたたり、付き合っていたハズなのに……。あなたがやって来てからっ。及川くんが、及川くんがっ、まるで私のことをまるで忘れたみたいにあなたのことばかりっ！」

なるほど、そう言う理由でしたか。片想いをしている男子が、自分じゃない別の子にアプローチをしているのが気に入らないと。ようにするに嫉妬ですね。まあ気持ちは分からなくはないですけど。ですが、それを歩未ちゃんにぶつけるのは筋違いです。擁護は出来ませんし、当然見逃すことも出来ません。

——って、どうしてあたし、あの子の気持ちがわかるだなんて…… おっと。

小西さんは、スカートのポケットからカッターナイフを取り出し、刃を剥き出しにした。歩未ちゃんは危険を感じて、背を向けて走り出した。廊下を追われて、階段を駆け上がったいく。乙坂さんが待つ、最上階の踊り場へ向かって。

最上階に追い詰められた歩未ちゃんは、扉を開けようとするが扉には施錠されていて開かない。威圧するようにカッターの刃を出し入れしながら獲物を追い詰めるかのように、小西さんはゆっくりと階段を上がってくる。

「あなたのせいだ……」

「ち、違うよっ！」

「だから…… あなたが痛い目にあうのっ！」

カッター持った右手を振り上げ、歩未ちゃんに向け振りかざそうとした刹那、乙坂さんがロツカーから飛び出して、歩未ちゃんを背中に隠して庇った。

「だ、だれ!?!」

突然現れた乙坂さんに、小西さんは動揺している。ナイスタイミングですね。

「有宇お兄ちゃんっ！」

「ちよつと脅させてもらおう……！」

福山さんから奪った「念動力」を使って、踊り場のガラスをすべて割った。怯んだ小西さんが落としたカッターナイフを、あたしは階段の下に蹴り落とし、ハサミを使って彼女の長い前髪を切り落とす。

「えっ? えっ?!? なっ、なにが……っ?!?」

連続して起こる突然の出来事に小西さんは、動揺を隠せず慌てふためく。

——あとはあなたの仕事です、有宇お兄ちゃん。

この場を乙坂さんに任せて、散らばったガラス片を避けながら階段を下り、裏口から校舎の外へ出る。すると、黒羽さんと高城が待っていた。

「いかがでしたか? 作戦の方は」

「もう大丈夫です」

「そうですね」

「よかったです」

「お疲れさまでした。今日は、これで解散にしましょう」

「午後の授業がありますけど?」

「サボっても内申に影響はありませんので」

「そうですね、柚咲さんも今日は帰りましょう。こつてり絞られましたので疲れました……」

ひと足先に中等部の敷地を出て二人を見送り、スマホを取り出す。そして報告をするために、電話帳のアプリで宮瀬さんのページを選択する。

表示されてた名前を見て、少し緊張してきた。

でも…… 未来でなにがあったのか、あたしは知りたい。

胸に手を当て、ひとつ深呼吸をして、少し勇気を出して、あたしは  
通話ボタンをタップした。

## Episode 34 胸騒ぎ

アメリカ、LA空港。

国際線の発着ゲートからロビーに出た俺は、迎えに来てくれているニールを探した。そして、スーツ姿の彼をすぐに見つけることができた。前世とは違い、俺の方から声をかける。

「ニール」

「シヨウ！ 久しぶりだね」

「すまない、時間がないんだ。タイムのところへ行こう」

「——オーケー、急ごう！」

ロビーを早足で駆け抜け、駐車場で待つタイムの元へ急ぐ。空港を出るとロータリーに車を止めた車の横で、タイムを見つけた。

「シヨウ！」

「タイム！」

「話は後だよ、早く乗って！」

挨拶も握手もする間もなく、ニールに急かされて車の後部座席に乗り込んだ。

「訳ありだな！ 飛ばすぜっ！」

タイムの運転する車は、大学へ向けて猛スピードで走り出した。そして車内では前世と同じように、ニールによる質問攻めが始まった。

「そうか、未来から来たんだね」

「ああ、ラボの情報のおかげだね」

俺が未来から、<sup>タイムリープ</sup>“時空移動”で戻ってきたことを伝えると、タイムから質問が飛んだ。

「じゃあなんで大学に<sup>アメリカ</sup>来たんだ？ 当初の目的は果たしたんだろ？」

「ああ、そっちはな。今度は本題の方だよ」

本題と聞いて、ニールが難しい表情をした。

「特殊能力の“消去”のことか…… まだ時間は掛かるよ？  
<sup>サンプル</sup>DNAが足らな過ぎる」

「わかってる、だから来たんだ」

今度は真剣な表情になった。

「そう、いくつ見た？」

「九つだ。『瞬間移動』、『口寄せ』、『発火』、『念動力』、『電撃』、『空中浮遊』、『不可視』、『略奪』、『タイムリープ時空移動』」

「うわあ、レアな能力ばかりだね」

ティムはバックミラー越しに視線を俺に向けた。

「短時間でそんなに見つかるもんなのか？」

「居場所と能力を特定できる、精度の高い探知系の能力者がいるんだよ」

「へえ、その能力の内容は？」

「実際に見てないからわからない」

「そつかり、ざんねくん」

「んで？ コレはできたのか？」

ティムが片手をハンドルから離して、おもむろに小指を立てた。前世とまったく同じ流れ。どうやら、これは変えられないらしい。

「親父か？ お前は」

「挨拶みたいなもんだろ？」

「そうだね、オレも気になるな」

——まったく、コイツらは……。

窓の外の風景を眺めながら彼女の笑顔と温もり、一緒に過ごした時間を感じ出す。

「……『タイムリープ時空移動』の前はな」

「関係絶ち切って戻って来たのかよ!？」

「うつわく、彼女かわいそー」

ティムは驚き、ニールは同情の声をあげる。

俺は視線を戻して、運転手に催促する。

「いいから、急いでくれっ!」

車を爆走させ、600kmと言う長い道のりを前世と同じ4時間ほどで大学のある都市に到着した。この日は近くのホテルに泊まり、翌日に備える。

「じゃあ検査を始めるよ」

「ああ、頼む」

そして翌朝、大学のラボへ出向き、前世と同じように様々な検査を受けた。

検査結果を待つ間、「消去」についての研究データに目を通す。最後にデータを見た去年と比べ、だいぶ進んでいるように感じたが、やはり完成にはほど遠い。

「感想は？」

データに目を通してしていると、チームが俺の肩に腕を乗せて意見を訊いてきた。

「やっぱりDNAサンプルが足りないみたいだな」

俺の率直な答えを聞いて、チームはため息をついた。

「こればかりはな。探知系能力者がいれば、もう少し進むんだろうけど……」

「ああ、そうだな」

大学には、熊耳くまがみのような精度の高い探知系能力者はいない。いくら協力関係のある組織と情報を共有しているとはいえ、やはり独自に能力者を探し出せる探知系特殊能力者がいないのは厳しい。重苦しさを感じたのか、チームは話題を変えた。

「日本には、いつ戻る予定なんだ？」

「検査結果が出しだい帰るよ」

「そうか。じゃあすぐだな」

「ああ」

そう、明日には結果が出る。

俺の検査結果と、歩未あゆみの救出作戦の結果が――。

\* \* \*

翌日21時過ぎ、CA大学・遺伝子工学ラボ。

俺は、「消去」の投薬を作製するために実験と平行して日本へ持つていく資料を精査していた。

「やっぱり上手くいかないな……」

そう呟くと、隣で手伝いをしてきているニールが励ましてくれ

た。

「焦っても仕方ないよ、気長に行こう」

「……でも、時間がない」

「大丈夫！ まだ二年もあるし、それにいざとなったら、『時空移動』  
を使えばいいよ」

「『時空移動』か、あれは代償が高いから背負わせたくないんだよ」

「隼翼の話によれば、『時空移動』の代償は視力。それは、あまりにも重い。」

俺たちの研究では、強力な特殊能力になればなるほど制約と代償が大きくなるのがわかっている。

「そっか、そうだね。じゃあ一息ついて頑張ろう」

「ああ、そうだな。そうしよう」

実験を一時中断して、ラボを出る。

「資料の方は？」

「だいぶ進んでる」

「そう。上手く協力と得られるといいね」

「そうだな」

俺が今、作っている資料は、隼翼を説得するための物。全国各地で能力者を保護している彼らの協力を得ることが出来れば、俺たちの研究も一気に進むだろう。能力者の救済と保護、アプローチの方法に違いはあっても最終的な目的は同じなんだ。協力関係を築くことが出来れば、双方にとって必ずプラスになる。

「電話じゃない？」

「ん？ ホントだ」

カフェエリアで、少し遅めの夕食を食べていると携帯に着信があった。俺は席を外し、携帯電話の通話ボタンを押す。

「はい、宮瀬」

「友利です」

「えっ？ 友利さん？」

『はい、そうですけど』

発信相手を確認せずに出たため、予想していなかった奈緒の声に、

少し驚いた。

『どうしました？』

「あ、いえ、なんでもないです」

『そうっすか。えつとですね、歩未ちゃんあゆみを無事に助けることができ  
ましたので、その報告を』

——そうか、乙坂おとしさかは成し遂げられたのか……。

「そうですか、よかった。上手くいったんですね」

『はい、未来で立てた作戦通りです。あの——』

「なんですか？」

『——未来で。あたしとあなたの間に、なにがあったんですか……？』

今、伝えてもよかった。でも、やっぱり直接会って伝えたい言う想  
いの方が強かった。

「友利ともりさん。日本に帰ったら、あなたに伝えたいことがあります。  
待っていてくれますか？」

『——はい、待ってますっ』

通話を終え、カフェエリアへ戻る。

「なにかあった？」

「帰ることにした。日本で待ってる人がいる」

「そっか。じゃあこれ食べちゃって、すぐに帰国の準備をしよう」

冷めてしまった食事を食べて、ラボに戻り、日本へ帰るための準備  
を始める。

「タイムに伝えてくるね」

「ああ、頼むよ」

ニールがタイムを呼んでくる間に、帰国の準備を済ませる。数分後  
ニールが戻ってきて、タイムが外に車を回してくれていると教えてく  
れた。

「じゃあ、行くよ」

「待って、オレも行くよ」

ファイルを持ったニールと一緒に外に出て、用意してくれた車に乗  
り込むとタイムが出国時間を訊ねてきた。

「何時発の便だ？」

「出来れば0時50分発の便、間に合うかな？」

「無理だな」

「だよな……」

空港までは約600kmもある。車を飛ばしても4時以上かかる。今は21時半を過ぎた頃、到底間に合うわけがない。落胆しているとタイムとニールがとんでもないことを言い出した。

「普通ならな」

「はあ？」

「ヘリを使うんだよ」

「ヘリ!? あるのかよ!?!」

「ああ。お前が日本に帰国した後、大学が補助金で購入したんだ。ついでオレは免許も取った」

「ウソだろ……?」

呆気にとられている俺に対してニールは、あつけらかなに言う。

「うそじゃないんだな、これが」

「つてことで、ヘリポートへ向かうぞー!」

大学に新たに設置されたヘリポートでヘリコプターに乗り換える。操縦席に座ったタイムはエンジンに火を入れ、管制塔に連絡をし、操縦かんに手をかける。

「よっしゃ! いくぜツ!」

「マジであったよ……」

「これなら二時間弱で空港に着けるよ」

空港へ向かう上空で、ニールはどこかむずかしい表情かおをしていた。

「うーん……」

「どうしたんだ？」

ヘッドフォンを通じて訊ねる。

「〃共鳴〃、使った？」

「ん? ああ、〃略奪〃を防ぐのに使った」

「そっか、それでかな? ちよつと〃共鳴〃に変化がある」

「えっ?」

予想外の話だった。前世は異常なしと報告を受けていたからだ。そのことを伝えるとニールは、ひとつの仮説を出した。

「もしかしてだけど、無意識のうちに使ったのかもしれないね」

「無意識にか……」

「なにか心当たりない？ 例えば、タイムリープ「時空移動」した時とか？」

「いや、特になにも。タイムリープ「時空移動」による違和感はあるけど、意識して使わなかったから」

「そっか。もつと詳しく調べてみるよ」

「もうすぐ着くぞっ！」

タイムのその言葉通り、空港の光が見えた。

「けど、よかつたのか？」

「ん？ なにがー？」

「俺のプライベートルなことで、へりを使うなんて……。相当経費が

かかるだろう？」

「なに言ってるんだよ、いいに決まってるだろう！」

「タイムの言う通りだよ。今までのショウの功績からいったら誰も文句は言わないよ」

「そう言うこつた。ショウが居なかったら、こんな短時間で研究は進まなかつたからな！ お前にとっては、永遠のように長かつたらうけどな……」

「だね。当然の権利だよ」

「ニール、タイム……。ありがとう」

時刻は23時10分、空港に到着した。

「マジで二時間弱で来たな。ありがとう、助かった」

「いいってことよー！」

「『共鳴』の方は、もう一回調べてみて何かわかつたら連絡するね」

「ああ、頼む」

二人に別れを告げ、急いで搭乗手続きを済まし、俺はアメリカを後にした。

\* \* \*

日本帰国して、二時間後の午前7時過ぎ。俺は、奈緒なおに電話をかけた。でも彼女は電話に出なかった。メールを送って返事は返ってこない。一時間後にもう一度電話をかけたが、やはり応答はなかった。何か嫌な予感が、胸騒ぎがして、直接星ノ海学園併設マンションへ行くと、マンションの入り口には規制線が貼られていた。

何が起きているのか分からず立ち尽くしていると、携帯が鳴った。発信相手は奈緒なおではなく、乙坂おとさか。通話ボタンを押す。

「はい、宮瀬みやせ」

『宮瀬みやせ、すまない……友利ともりが——』

震えるような声の乙坂おとさかから告げられた言葉を、上手く理解出来なかった。それはあまりにも唐突で、衝撃的な内容で、その場に呆然と立ち尽くしてしまう。力の抜けた手から携帯が落ちた。

——奈緒なおが……奈緒なおが誘拐された……

## Episode 35 検証

乙坂おとしざかからの連絡を受け、組織の仲間が迎えに来るのを星ノ海学園の正門前で待ち、隼翼しゅんすけたちの元へと向かった。車は首都高に乗り、徐々に都心を離れて行く。やがて山中に入って舗装されていない林道をしばらく走行して、開けたところで停車。礼を言っつて車を降りて、運転手に組織の施設まで案内してもらい、前世で見たりモコンで動く大きな岩の前に辿り着くと、肩に掛かるくらいのミディアムヘアの女子が待っていた。

「キミが、宮瀬みやせくんね」

「あなたは？」

「私は、目時めとき。あなたを迎えにきたの」

彼女が、〃崩壊〃の現場を見たという目時めとき。案内人は彼女に替わり、隼翼しゅんすけたちの待つ部屋へ向かう道中で経緯を簡単に説明してくれた。

「私たちに協力してくれていた仲間の家族が人質になってるの」

「それで、熊耳くまがみさんの拉致に手を貸したんですか」

「そう、熊耳くまがみから漏れた情報で奈緒なおちゃんも攫われちゃって。ごめんね」

立ち止まった彼女は足下に目を落として、本当に申し訳なさそうな声で謝罪の意を述べる。

「なぜ、あなたが謝るんですか」

「あなたたちの関係は、有宇ゆうくんから聞いてるから……」

「……相手の要求は？」

「有宇ゆうくんよ」

「乙坂おとしざか？」

「正確には、有宇ゆうくんの能力」

「なるほど」

起きた事態をまとめる。

海外のテロリストに古木ふるぎという人が家族を人質に脅され、組織ナンバーツの熊耳くまがみの身柄を売った。テロリストたちは彼を拷問し、重要

な情報を吐かせ、奈緒を誘拐。人質二人と引き換えに、乙坂の身柄を要求している。

ちょうど整理し終わったところで、前世で隼翼と対面した部屋の前に到着。目時の後に続いて。部屋の中に入った際違和感を感じた。壁の所々に前世ではなかった亀裂がいくつも入っていた。

そして部屋には、隼翼と乙坂の他に見知らぬ男子二人の計四人。一人は冷静を保とうと、もう一人は苛立ちを隠せないでいる。前者は前泊、後者は七野という名。隼翼と熊耳、目時と彼らを含めた二名が組織の創設メンバー。

「隼翼、連れてきたわよ」

「そうか、ありがとう」

目時の声を聞いて、隼翼が礼を言い。俺の姿を見た乙坂は、目を伏せてしまった。

「……友利が、ごめん」

「目時さんから聞いた。大丈夫、任せろ」

「お前が、宮瀬でいいんだよな？ 有宇から話は聞いた。頼む、知恵を貸してくれ」

深々と頭を下げた隼翼の拳は、どうしようもないやるせなさに奮えている。

「顔を上げてください。俺は、そのために来ました」

部屋中央のテーブルを囲み、二人を救出するための作戦を立てる。「『タイムリープ』は？」

「最初に考えた。けど、古木さんが脅されたのは星ノ海学園を買収する前だ。そこまで戻るとなると、同じ道を辿れるかわからない」

そうなると思えば星ノ海学園どころか、組織そのものがなくなるおそれがある。そこまで戻るとなると俺もまたアメリカに戻って、いちから全てをやり直さなければならぬ。直後から隼翼たちと協力して、星ノ海学園を買収してから渡米するという手段もなくはないが、出来ることなら俺が目指している『救済』への目処が立つまで戻るのには得策じゃない。

足下へ目を落として思考を巡らせる。俺の中で救出方法がま

りかけた時、七野しちのが名案だと言わんばかりに話し出した。

「やつぱり、弟を一人で行かせた方が勝機があるんじゃないか？ 相手が能力者でも、〃略奪〃で奪えばいいし。もし失敗しても、〃時空移動タイムリープ〃でやり直しがきくだろう」

七野しちのの提案に消極的ではあるが、目時めどきも同意。

「確かにね。一番無難だし、成功する可能性も高いわ」

「だろ？ これなら異変が生じないから、相手にも悟られない！」

「有宇ゆうに賭けるしかないか」

「僕ぼくに……」

隼翼しゆんすけは揺らいでいる。乙坂おとさかは、テロリスト相手に立ち回れるのか、と不安そうに顔を伏せた。名案だと自信を持って提案した七野しちのに対する俺の答えは、もちろん――。

「却下」

返答に全員の視線が一斉に集まる。提案を否定された七野しちのは声を荒げた。

「何でだよ、完璧じゃないか！」

「落ち着け、七野しちの。宮瀬みやせ、どうしてなんだ？」

七野しちのをなだめてくれた隼翼しゆんすけには悪いが、返答は控えて前泊まえどまりに意見を仰ぐ。彼に訊いたのは今、この中で一番冷静でいるから。

「前泊まえどまりさん。あなたが思う一番最悪な状況はなんだと思いますか？」

「そうだね……」

前泊まえどまりは少し考えて、自分なりの見解を述べた。

「弟さんを一人で行かせた結果、弟さんの身柄を拘束された上で誰も助けられない。そうなれば、組織は壊滅的な打撃を受けます」

「だから！ そうならないようにいざって時には、〃時空移動タイムリープ〃を使つて――」

「おい、少し黙れ」

「――なっ、チツ……」

ドスを効かせ、七野しちのに言い聞かせる。憤る彼をなだめつつ、目時めどきが訊いた。

「どうして、ダメなの？」

「リスクが高過ぎる。仮に、敵の要求通り乙坂おとさかが一人で行ったとしても。相手は、乙坂おとさかが『時空移動』を持つていることを熊耳くまがみから聞き出している。そうだな？」

俺の問いに目時めときではなく、隼翼しゅんすけが答えた。

「ああ、間違いない。すべて吐かされている、保有している能力のことも。自分たちの計画に少しでも狂いが生じれば、古木ふるぎさんの家族を殺すと脅迫してきた」

「つまり、相手が欲しがっているのは『略奪』であって、『時空移動』が欲しい訳じゃない」

むしろ、計画遂行のための障害であると判断しているとみて差し支えない。

「『時空移動』は、目に光が射さなければ跳べないと言ったが、他に制限は？ 例えば、月や星、海底、街灯の光も差さない夜、深い森、洞窟、地下室。真つ暗な空間でどの程度の光があれば跳べる？」

「それは…… わからない」

隼翼しゅんすけは、首を横に振った。両目の視力を同時に失った彼には、もはやそれ知る術はない。彼の返答を聞き、目時めときに頼む。

「性別は問いません。今、この施設に居る人で成人している人を呼んできていただけますか？」

「うん、わかった」

目時めときは職員を連れに部屋を出て。乙坂おとさかは、少し困惑気味に訊いてきた。

「何をするんだ？」

「実験と検証」

「はあ？」

しばらくして、目時めときは先ほどの男性運転手を連れて戻ってきた。

「連れてきたわよ」

「何か、ご用でしょうか？」

「少々協力をお願いします。照明を落としてください。まずは、間接照明から」

「わかりました。切り替えます」

前泊まえどまりが照明を切り替え、乙坂おとさかと運転手の協力のもと実験開始。目隠しをした状態や光の加減、幾つかの条件下で何度も検証を重ねた。部屋の明かりを通常に戻す。

「ありがとうございます」

「いえ、では私は、これで……」

運転手は困惑した表情かおを見せつつ、部屋を出ていった。

「仕上げに今の状態で、時空移動タイムリープを」

「ああ、わかった」

片目を両手でしっかりと密着させ、光が洩れない状況で乙坂おとさかが目にも力を入める。だが、何も起こらない。俺の身体にも異変は起こらなかった。

「ダメだ、跳べない！」

実験の結果、微かな光でもあれば使用可能な「時空移動タイムリープ」は両目に同じように光が射さなければ跳べず、「略奪」の乗り移りは片目でも発動可能という検証結果が出た。

「片目を潰されたら終わり。つまり最悪は、熊耳くまがみと——」

声にしたくなくて言葉に詰まった。

「……奈緒なおを失うことじゃない。乙坂おとさかの片目を潰され、薬か何かで操り人形にされること。相手の目論見通りにやらせる訳にはいかな  
い」

「なら、どうすればいいのよ……」

俺以外の全員が落胆した。

「そう悲観することはない」

勢いよく顔を上げた隼翼しゅんすけは、やや声を大に言う。

「何か策があるのか？」

テーブルにノートを広げ、ペンを片手に敵のプロファイリングを始める。

「まず、敵の人数だが。多くても七、八人といったところだろう」

「何でわかるんだよ？」

七野しちのは、疑しちのるように言う。

「テロは基本的に少数で行う、目立たないように。とりあえず、四人

以上なのは確定だ」

「四人以上？ どうして分かるの？」

「まず、隼翼しゅんすけに電話をかけてきたのは通訳、これで一人。指示・指揮している人物がいる、これで二人。そして、奈緒なおを襲ったヤツは複数人で間違いない」

奈緒なおを襲ったのが複数人と聞いて、隼翼しゅんすけが勘づいた。

「そうか、奈緒なおちゃんちゃんの能力は『不可視』だから、相手が一人なら逃げられる……！」

「そう、ボスと通訳は戦闘には不向きだろう。それらから戦闘に長けた人員が二人以上居ると推察できる」

「相手は複数か。有宇ゆう一人じゃ厳しいな……」

場の空気が重苦しくなった。この空気を払拭するために言う。

「言っただろ、悲観する必要はない。コイツらは素人だ」

その言葉に全員が、身を乗り出して食いついた。

「仮にプロだとしたら、あまりにもお粗末だ。お世辞にも頭が良いとは言えない」

推察まえどまりに異議を唱える人がいた、前泊。

「いえ、それはありません。相手は間違はなくマフィアです」

「なぜ、断言できる？」

「僕の能力、『記憶操作』は対象に触れて記憶を探り出し消すことができる能力。以前キミたちが解決した『電撃』の能力者と、彼らに依頼をした黒幕の記憶を探った時、黒幕だったテレビ局のプロデューサーと大陸系のマフィアの繋がりを見ました。おそらく、今回の誘拐犯と同一のグループかと」

「身なりは？」

「身なりですか？」

「見たんだろ、そいつらの姿を」

「交渉に当たっていた通訳らしき男は、スーツを着ていました。その他は、まちまちだったかと……」

更に突っ込んで、詳しく訊く。

「一番年配と思われる人物は？」

「確か、半袖シャツに半ズボンとラフな格好でした」

「なら、間違いない。敵はマフィアではなくチンピラだ。本物ほど身だしなみに気を使う。普段からいいスーツを着るし、装飾品や小物類にも独自のこだわりを持つ場合が多い。交渉や取引の場においては特にな」

「…… そうかもしれない」

「兄さん？」

隼翼が、俺の意見に同意した。

「俺も、今に辿り着くまで何度も危ない橋を渡ってきたからわかる。そういった相手は、信頼関係を重要視する」

「つまり、相手の身なりや待たせている間の態度で信頼出来る相手かを見極めるってこと？」

「その通りだよ、目時。交渉はテーブルに着く前から始まっているんだ。莫大な金を用意して約束を取り付けても、肝心の交渉相手が姿を現さないなんてこともザラあった」

「そうなんだ……」

「僕たちは、そういった分野を経験のある隼翼に頼りきっていたことが多かったですからね」

「お前の理屈はわかったけどよ。どうすりやいい？ 熊耳と友利が拉致されているのは変わらねーぞ」

七野の言う通り、問題の本質はそこ。だが、やりようはいくらでもある。

「優位に立っていると思っ込んでいる相手の隙をつく」

「って言うと、慢心や油断と言ったところか？」

「ヤツらは、古木が屈したことで勝ちを確信している。だからこそ、必ず隙が生まれる。そこをつく」

「具体的には？」

「俺が乙坂のふりをして、相手の指定した場所へ乗り込む。乙坂の顔を知っているかは分からないが、幸い髪は長い方だからウィッグで顔を隠せば誤魔化せるだろう」

「だが、相手は複数人だろ。お前一人で、どうにかできるのか？」

「敵は多く見積もっても四人。その内の二人は、戦闘力のない通訳とボス。実質二人ならどうにでもなる」

「それ以上いたら？」

「いないな。別の場所で監禁していると仮定した場合、人質を一人見張るのに最低でも二人は人員を割かなければならない。現時点で無事か否かは出発前に確認すれば済む。乙坂を行かせたとして、本当に古木の家族を無事に解放すると思うか。一度奴らに屈してしまっているんだ。一度でも脅しに屈してしまった人間はもう相手の言いなりだ。俺なら何度でも利用する、利用価値がなくなるまでな」

意見を交わしていた隼翼が黙った。

俺は構わず、話を続ける。

「いいか？ 次はない、ここで確実に潰すぞ」

ここに居る全員に、作戦の全容を伝える。

「隼翼と乙坂を除く全員で古木の車に乗り、敵が待つ拠点へと向かう」

「古木さん、了承してくれるかな？」

目時が、不安そうに呟いた。

「脅してでもさせる。家族のためとはいえ組織を裏切り、重要人物の熊耳を売り、無関係の奈緒を巻き込んだ。これぐらいのことはやってもらう」

有無をいわささないほどの怒気を込めて口に出した俺の言葉に、全員が黙り込んだ。

「話を続ける。敵のアジトを目視できる位置で三人は車を降り、その場で身を隠し待機。古木が戻って来たところを再度車に乗り込み、家族が捕まっている現場へ向かう」

「もし、古木さんが戻って来なかった場合は？」

七野からの質問。それはもつと疑問。

「その時は、取引が成立しなかったと見なし、拠点に乗り込んで来てくれ。二人の能力は？」

「俺は、〃透過〃だ。障害物をすり抜けられる。けど、壁を一枚抜けるのにも極度に疲れる」

「私は、『催眠』よ。ただ、使うと私自身も寝てしまうの。二人が精一杯かな」

七野は「透過」、目時は「催眠」。そして前泊は「記憶操作」。どれもレアな部類の能力。よくこれだけの面子が集まったものだ。

「それで、あなたの本当の能力は？」

「確か、奈緒ちゃんの報告書によると、任意で使える能力じゃなく、ただ漠然と断片的な未来が突発的に見える予知能力って話しだったけど。戻ってきた有宇の話だと、それは虚偽だったんだろ？」

奈緒は、そういう報告をしていたのか。まあ、能力に関してはもう別に隠す必要はないし、話してもいいだろう。

「『継承』、『偽り』、『共鳴』の三つ」

「えっ？ 三つも持つてるのっ!？」

三種の能力を保有していると聞いて、目時は目を大きく見開いて驚いている。七野と前泊も同じような反応。どうやら俺の本当の能力について、三人は知らされていなかったようだ。詳しく聞きたいと言った様子ではあるが、この場合は簡単に説明することだけで納得してもらうことにする。

「『共鳴』ってのは、具体的にはどういう能力なんだ？」

訊いてきたのは七野、他の二人も興味津々といった感じで俺を見ている。

「簡単に言えば、相手の能力に直接干渉できる能力。対象者の能力の強弱を操る能力。乙坂の『略奪』を防いだのも『略奪』の力を無力化した。逆に能力を強制的に引き出すことも可能。実際に見せた方が早いな。『透過』の能力で、この壁を廊下から抜けて見せてくれ」  
部屋の壁を軽く叩く。

「あん？」

「七野、頼む」

「わーっつたよ」

隼翼に頼まれた七野はめんどくさそうに、いったんドアから部屋の外に出て、壁を抜けて戻ってきた。肩で息をしている。まるで100メートルを全力で走り抜けたあのようなようだ。

「じゃあ今度は、こつちから外へ抜けて見せてくれ」

「見ての通り疲れるんだけどな……」

「出来ないなら別にいい」

「くそ！ やってやる！」

挑発に乗って、勢いよく壁に向かって走り出した。壁に手を触れて能力を使う。

「ぐはッ……!!」

七野は壁を通過できずに思い切り激突、仰向けに倒れ込んだ。

「ちよつと、大丈夫っ？」

目時が、心配して駆け寄って行く。

「な、なんで通り抜けられなかったんだ……？」

「この壁を通して能力を使った。意識している間は、ほぼ完全に無力化出来る」

「電撃」の能力者相手に使ったのと同じ手段。ただあの時はまだ、不馴れなこともあって対処に遅れて軽い火傷を負う嵌めになった。

「もちろん制限はあるが、精神的な攻撃に関しては完全に無力化することが出来る」

「つまり、私や前泊の能力は効かないってことなのね」

「そう思ってくれて差し支えない。ただ、俺の身体を媒介に発動するから当然リスクはある。この能力は本来「時空移動」を無力化するために身に付けた能力だ」

「驚異的な能力は、俺対策の能力だったってことか……」

能力の説明は終わらせて、話を戻す。

「まずは、情報収集。監禁場所にもよるが、透過の能力で偵察後、見張りを可能な限り多く眠らせる。捌ききれない場合は、透過で死角から攻撃。威力は不意打ち同然、鉄パイプか金属バットでも使えば余裕で倒せるだろう」

「おっけー、七野がカギを握るわね」

「任せろ！」

「僕は、どうすれば？」

「眠ってしまう彼女の介抱と、敵の記憶から能力者の情報を消す。パ

スポーツや身分証明書の種類、査証を持つていたら全て回収し、ナイフでも持たせて、交番付近に放置しておけばいい。身元不詳の上に銃刀法違反も加われば、身柄の拘束は免れない。加えて外国籍なら、大使館との調整でしばらく足止め出来る」

「わかりました。そう対処します」

一通り話を終わったところで、隼翼が勢いよく言った。

「よし、これで作戦は決まったな！ 目が見えない俺は今回、役に立たない。みんな、熊耳を、熊耳と奈緒ちゃんを。古木さんの家族を頼む……！」

頭をさげた隼翼に、三人はそれぞれ任せてくれと声をかける。そのようなすを黙って見ていた乙坂が口を開いた。

「僕も一緒に連れて行ってくれ。二人で力を合わせれば——」

「ダメだ、お前を失えば全てが終わる」

「でも……！」

自分も力になりたい乙坂の気持ちは、痛いほど伝わってくる。だが、だからこそ連れて行く訳には行かない。

正直、前泊が言った最悪の状況は甘い。本当の最悪は、奈緒を含めた人質全員が既に消されている可能性があるということ。最初から乙坂を連れてこさせることだけが目的で、この取引その物が成立していないことも十分に考えられる。そんな状況で行かせる訳には行かない。乙坂を、タイムリープを失えば終焉を意味する。

隼翼は手探りに、乙坂の肩に手を置いて諭す。

「有宇、今回は四人を信じて任せよう。お前が興奮して、崩壊が発動したら熊耳と奈緒ちゃんも巻き込まれる」

隼翼の言葉からこの部屋中のヒビは、乙坂がなんらかの理由で興奮し、崩壊が発動しかけたということ。崩壊は感情で高ぶりで発動する半任意的能力…… 厄介、感情のコントロールは制御が難しい。

「兄さん…… わかった。宮瀬、熊耳さんと友利を頼む——」

「ああ、任せろ」

作戦を遂行するため別室で待機を命じられていた、古木をこの部屋

へ呼び出た。そして作戦を伝える。それを聞いた古木は唇を震わせ、深々と頭を下げながら絞り出すように言った。

「それは出来ない、すまない……」

「古木さん、不安な気持ちはわかります。けど、だからこそ協力させてください。もし仮に助けに行つて待ち伏せされていたら、あなた一人で対処できますか？」

「そ、それは……」

「大丈夫です。彼らなら必ず無事に救出してくれれます」

目時、七野、前泊の三人が力強く頷く。

「そして、捕まっている熊耳さんを。奈緒を助け出すためには、あなたの協力が不可欠なんです。お願いします。俺に、俺たちに、あなたの力を貸してください」

俺は、古木に頭を下げる。逆に古木は驚いて顔を上げた。

「ど、どうして、キミが……」

「古木さん」

「頭を下げるんだ？」と言いかけた時、隼翼が間に割つて入る。

「テロリストに拉致された奈緒ちゃんは、宮瀬にとって大切な人なんです。あなたにとつての家族と同じなんです」

隼翼の話しを聞いた古木は少し間黙り、絞り出すような小さな声で言った「…… すまない、お願いします」と。

救出に向かうため部屋を出ようとした時、不意に乙坂が呟いたのが聞こえた。

「でもどうして、友利を……」

「消去法だよ」

「えっ?」

「最初に狙ったのは、妹さんだろう」

「歩未をつ? なんで!」

乙坂の大きな声を聞いて、先に部屋を出た四人が戻つて来た。

「関係の薄い熊耳さんだけだと動かないこともあり得る。だから、もう一人人質を取りにきた。古木さんの時と同じように脅すために。乙坂さんにとつて一番効果的な人は、妹の歩未さんでしょ?」

——ああ……と、乙坂は小さく頷いた。

「歩未さんが『崩壊』を失った今が、相手に取って最大の好機だった。けど、行動を移す前に歩未さんは、この施設に保護されてしまった。そうやすやすと手は出せない。だから、他の誰かを狙うしかない。となれば、交遊関係から調べる。けど、熊耳さんから聞き出した情報しかないわけだから、彼が知っている生徒会のメンバーしかいない。つまり、俺を含めて四人。その中で誰を狙うか、まず実行当時日本にいなかった俺は除外される。次に除外されるのは高城さん、能力は『瞬間移動』だから簡単に逃げられる。次に黒羽さん、人気アイドルが突然と姿を消したら世間的に大事になるし。仮に狙ったとしても、姉の美砂さんの能力は『発火』、下手をすれば自分たちが致命傷を負うことになる」

推察を聞いた隼翼は、納得したと言った感じにうなづく。

「それで、奈緒ちゃんを狙ったのか」

「『不可視』は一人に対してのみ有効な能力。複数でなら簡単に捕まえられると踏んだんでしよう。さあ、行きましよう」

「……奈緒ちゃんを人質に取ったのは、敵にとって最大のミスだったかもしれないな」

「どういふこと？」

「宮瀬の逆鱗にふれた」

すべての準備を済ませた俺たちは、奈緒と熊耳、古木の家族を救出するべく。古木が運転する車で、敵が指定した交渉場所へ向かった。

## Episode 36 く失態く

古木が運転している車の後部座席で、目時と前泊に挟まれる形で座っている七野が、車に乗る前に俺がしていたことを訊いてきた。

「お前、さつき何してたんだ？ 携帯いじってたみてーだけど？」

「あれですか。遺書を書いていただけですよ」

「はあ!? ふぎけてんのか!？」

「ちよつとやめてよ! 縁起でもないっ!」

遺書と聞いて、七野と目時が声を荒げた。そんな二人とは違って、前泊は冷静。

「冗談ですよ、ちよつとした仕掛けです」

「シャレにならないわよっ!」

「まったくだ!」

騒がしい車内でずっと黙って運転している古木が、固く閉ざして口を開いた。

「本当にすまない……………」

「ご家族が人質になってるんですから仕方ありませんよ」

「私たちが、必ず助けだしますから……………」

前泊は氣遣い、目時は安心させるように力強く声をかける。

「三人に任せれば、大丈夫ですよ。ですよね？」

「ああ、ちゃんと準備をしてきたからな!」

ここへ来る前に用意した荷物が積まれたトランクに目をやって、七野は自信満々に答え、二人も頷く。古木の緊張も少しは解けたようだったが、指定されたテロリストのアジトが近づくにつれて再び強張っていく。

「あの工場だ」

車を停車させた古木の言葉を聞き、窓の外を見る。ここから数キロ先の森の中に、廃工場らしき建物を目視で確認。周囲は深い森に囲まれ、舗装されていない林道が延びている。

「ねえ、どのくらい待てばいい?」

「10分……………イヤ、15分待つて動きがない場合は拠点に乗り込ん

「……ありがとうございます。隼翼さんへの連絡も忘れなく」

「了解、メッセージを送っておくわ。私たちから連絡して、30分経つてもなんの音沙汰がなかったら、タイムリープ“時空移動”してって」

「お願いします」

舗装された山道から脇道に入り、舗装されていない林道を進む。

テロリストが待つ工場の約五百メートルほど離れた場所で、車を一旦停める。周囲を森に囲まれているから相手からは見えないし、隠れる場所も多い。絶好のポジション。ここで七野、目時、前泊の三人が、最低限の荷物を持って車を降りた。

「熊耳を頼むぞ！」

「任せてください」

「気をつけて。無事に帰ってきてね、みんなで……」

「はい」

「お願いします、頑張ってください」

「あなた方もお願いします」

それぞれからエールをもらって、古木に声をかける。

「行きましょう、古木さん」

「…… ああ」

小さくうなずいた古木は、再び車を発進させる。廃工場に向かう直線の林道を走り、廃工場の入口から少し離れた場所で停車した。

被ったウィッグの前髪で顔を隠し、古木の後に続き廃工場の中に入る。歩きながら、周囲を確認。現在、資材置き場として使用されている廃工場の中には鉄骨、鉄筋、木箱等が平積みになされたまま放置されている。積み重ねられた資材、工場を形成する剥き出しの骨組みの物影など、身を潜める場所が多いいささか厄介な環境。少し奥へ進んだところで、突然、古木は足を止めて上を見上げた。顔が見えないように注意して視線を上げた先に、男が二人いた。

一人は白髪混じりのオールバックに、青いシャツに短パン姿。体型は小柄で褐色の小太り、丸い黒いレンズのメガネをかけて、短パンのポケットに両手をつっ込んでいる。

もう一人は、短髪に黒縁の眼鏡を掛け、灰色のスーツを身に纏って

いる。170前後ほどの身長で、かなり細身の体格。

——やはり、素人。

スーツの男は見た感じから貧弱そうで立ち振る舞いから通訳、で隣がボス。それしても、だらしない風貌。リーマン以降チャイナマネーで成り上がって勘違いしたチンピラといったところだろう。

視界にいるのは、とりあえずこの二人だけ。だが、隠れられる場所が多い。おそらく、他に何人かいるとみて間違いない。不意打ちを警戒して周囲に細心の注意を払っておく。

「連れて来たぞ！」

古木が二階の通路で見下すように立っている二人の男に向かって言うと、小太り男が隣の男に英語で話しかけた。それを聞いて、スーツの男が翻訳。やや聞き取り難い特徴のあるたどたどしい日本語、どうやら通訳も大陸か半島の出身の人間。

「では約束通り、家族を解放しよう」

「Hey, take this！」

小太りの男は小馬鹿にしたようなせせら笑いを浮かべ、古木に向かって、カギを投げつけた。足下に投げ捨てられたカギを、彼は慌てて両手で抱え込むようにして拾い上げる。どうやら変装はバレていない、上手く欺けている。

「監禁しているマンションの鍵だ。場所は書いてある」

通訳の言葉を聞いた古木は出口の方へと振り返り、口を結んでうつむきかげんでやや小走りで歩き出した。すれ違いざま「本当にすまない、こうするしかなかったんだ……」と、涙ながらに言いつて駆けていった。工場の外へ走っていく後ろ姿を見届け、上にいる二人に目を戻す。

「二人は、どこだ？」

通訳が、真下を指さす。

「この真下です。地下に二人とも居ます」

——コイツら、本当に馬鹿だな。

奴の言葉通り、本当にここに居るのならよほど自信があるか、あるいは罠があると丁寧に教えているようなもの。廃工場の外でボタン！

と、大きな音が聞こえた。古木ふるぎが車に乗り、ドアを閉めた音。一呼  
吸開いて、エンジンに火が入った音が聞こえた。

「な、なぜだ!？」

「Why!？」

突然、二人が取り乱した。

「何を狼狽ろうたいえてるんだ？ 何か、不都合ふとごうなことでもあったか？」

「…… まあいい、向こうで始末すればいいだけのことです」

平静を装いながらメガネに触れた通訳は、そう小さく呟いた。

やはり奴らにとつて、古木ふるぎは用済みということだったらしい。見つけたのは、偶然まえじまりだった。それは、ここへ来る直前のこと。車に乗り込もうとした際、前泊まえじまりが感じ取ったわずかな異変。同じ車種、同じカラー、同じナンバーの車でありながら、以前七野しちのが不注意で付けた、後部座席のほんのわずかなキズの跡がないことに気がついた。

古木ふるぎに確認したところ、修理はおろか、キズの存在すら認識していないことが判明したため、急遽同じ車種の同じカラーリングの別の車で、ここへ乗り込むことにした。三人がいなければ、古木ふるぎは今、ここで消されていた。

どうにせよ、さっきの言葉から監禁場所のマンションで家族と一緒に始末すると宣言したコイツらが、真正銘のゲスな連中であることは間違いない。こちらも、容赦する必要はないと言うこと。

「俺が、目的なんだろう？ さっきと二人を——」

「解放しろ」と言いかけた瞬間、横から物音と気配を感じた。物陰から、マントを羽織った少女が右手にナイフを持ち駆けてくる。少女は近くに置かれた木箱を利用して飛び上がり、口から目映い光りを放った。

——目眩まし。さしずめ“閃光”といったところか。

一瞬対処が遅れた、目映い光りを浴び、瞬間的に視界が眩む。とつさに顔を両手でガードし、後ろへ飛び引く。少女が振り下ろしたナイフが、左の袖をかすめた。

「——っ!？」

瞬時に能力を中和、即座に状況を確認。袖が切れた位置からして、

狙いは右目。やはり、《<sup>タイムリープ</sup>時空移動》を潰しにきた。だが、避けられると思わなかったのだろう。少女の顔に、動揺が見られる。それでも、すぐに切り替えて再び襲ってきた。

——上の連中より、この子の方がよほどプロっぽい。

こんな状況なのに笑いが込み上げてくる。ナイフを持っているとはいえ、所詮相手は子ども。能力を用いた不意打ち専門で本格的な戦闘は乏しく、無造作に振り回すナイフのリーチも短い。牽制と距離を測る目的で繰り出した左の拳に対し、前でも横でもなく、真後ろに下がって避けた。その引いた分踏み込んで少女の右手首を掴み、間接を逆に捻り上げる。痛みには耐えられず、ナイフを地面に落とした。しかし、まだ諦めない。また口を開いたが、掴んだ腕を通して《共鳴》を常時能力を無力化しているため何もの起こらない。

「うっ……」

能力は使えず、振りほどこうとする華奢な少女を強引に引き寄せ、無防備なみぞおちに右拳を叩き込む。小さく短い悲鳴と苦痛の表情を浮かべ膝から崩れ落ち、うつ伏せで意識を失った。

「さて。次は、お前か？」

小太りの男を指差し宣告すると、慌てて通訳に指示を出した。

「ま、待てッ！ 地下の二人が、どうなってもいいのかッ!？」

二人の身柄を盾に取る通訳に、呆れ果ててタメ息が漏れる。小太りの男にも分かるように英語で話す。

「馬鹿か、お前ら。人質は無事だから意味があるんだ。今は、二人が枷になっていから殺さない程度に手を抜いてやってるだけだ。どういう意味か分かるだろ？」

冷たい言葉で言い放ち、殺気を込めて脅す。

「お前たちが、二人を生かしているんじゃない。二人に、お前たちが生かされているんだ。手を下した瞬間、その枷は外れる。容赦なくお前たちを潰す。潰したあとは、お前たちの身元を特定して過去へ跳び。そして、お前たちが計画を実行に移す前に家族、親族、友人関係すべて含めて全員始末する。曲がりなりにもマフィアを名乗っているんだ。いつ消されても文句をいえないような業を積み重ねて来ただろ

？」

「ぐっ……！」

人質を盾にすればビビると思ったんだろう、予想外の答えに相手は明らかに怯んだ。

これは、駆け引きの鉄則。一度でも屈すれば、相手は調子に乗って何度でも要求してくる。そしてその要求は、どんどんエスカレートしていく。こういった相手には、常にこちらが上の立場であると認識させることが常套手段。決して弱味を見せてはならない。

「特にお前、楽に死ぬると思うな」

小太りの男を指差し、怒気を込めた言葉をぶつける。

「——オイ、上がって来いッ！」

小太りの男は反対側の欄干を掴んで身を乗り出し、地下へ向かって大声で叫んだ。すると、カンツカンツカンツと金属性の甲高い音が地下の方から徐々に近づいてきた。地下へと続く階段から姿を現したには、筋肉隆々の上半身裸男。上下のバランスに欠いた気色悪いガタイしてる、そもそも半裸でいる意味が分からない。

「多少壊れても構わん、そいつを黙らせろ！」

半裸男は、よほど戦闘に自信あるのか、悠然と歩いて向かってきた。間合いに入ると、右腕を大きく振り上げた。振り上げられた腕を上げた角度、腰の捻り具合を観察。右の打ち下ろし、顔面狙い。半裸男のパンチを簡単に掻い潜り、右膝に蹴りを入れ、バックステップで距離を取る。

半裸男は、何ごどもなかったかのように再び俺に身体を向けた。

「フン……！」

「効果なしっすか」

距離を縮めて、左腕を大きく引いた。今度は、左フック。そして、また律儀にも顔面狙い。こんなテレフォンパンチ、無抵抗な相手と不意を突かれた相手にしか当たらない。大振りの隙を掻い潜り、もう一度右膝に蹴りを入れる。

このやり取りが何度も続いた。

上半身の動きは下半身と連動して動くため、対象の腰回りの動きを

観察すれば予測は容易い。これなら、福山ふくやまのナツクル攻略の方がよほど難儀。アメリカで培った勘に頼らない観察力と、タイムの助言で身に付けた対人格闘術が、まさか、こんなところで役に立つとは思ってもしなかった。

対峙すること五分弱、右膝だけを攻め続けた結果が出始めた。半裸男の右膝は内出血を起こし、ズボンの上からでもわかるほど腫れ上がっている。

「ウグッ……！」

「タフだな、あんた」

額から尋常じゃないほどの油汗を流している。右膝の痛みで立っているのがやっとで、まともな攻撃はもう繰り出せないだろう。工場の外で、大きな物音が響いた。近くに落ちていた鉄パイプを拾い、二階の通路に居る男たちに投げつける。

「う、うわぁーっ!」

「な、なにを……！」

落下防止のフェンスに直撃し、鈍い金属音を立てて落下。思いがけない突然の攻撃に、二人は悲鳴を上げた。

「次は、お前たちだ。逃げれると思うな」

「オ、オイッ！ 何をしている!? 高い金を払ってるんだ！ もう、略奪”なんてどうでもいい！ さっさと仕留めろッ！」

「……う、うおーッ！」

——そろそろ、頃合いだな。

捨て身で突進してくる半裸男を避けて、右膝の裏に蹴りを入れる。バランスを崩して、両手両膝を地面についた。

「うぐっ……」

「終わりだ」

「——ッ!」

半裸男に手をかざすと、廃工場の壁を突き破り、屋外の林へぶっ飛んでいった。小太りの男が動揺して声を荒げる。

「な、なんだ!? お前今、何をした!」

「可笑しなことを聞くな、欲しかったんだろ？」

「ま、まさか…… 『略奪』 で奪った能力かッ!？」

狼狽える小太りの男を無視して、通訳に視線を移して指を差す。

「おい、ひよろメガネ。燃えてみるか？」

「えっ——うぎやぁーっ!？」

「う、うわぁー!？」

突如通訳が火だるまになり、通路に繋がる階段から転げ落ちた。その様子を間近で目撃してしまった小太りの男は、恐怖で大声を上げてガチガチと歯を震わせ怯えている。

「さあ次は、お前だ…… どう死にたい？」

死の宣告に、通訳が転げ落ちた反対側の階段を駆け下りて逃げようとする。少女が所持していたナイフを拾い、階段の昇り口に先回りする。

「うわぁっ!？」

「逃がさないと云っただろ」

「ま、待て、待ってくれ…… 金ならいくらでもやる！ だ、だから——」

追い詰められた小者のテンプレートのような台詞を吐きながら青ざめた怯えきった顔で後退り。鋭い刃を向けながら一定の距離を保ちつつ徐々に追い詰めていく。じりじりと下がって行き、やがて壁まで到達、小太りの男の逃げ場が完全になくなった。

「ひっ!？ あ、あぁっ……」

黙ったまま距離を縮め、左手で男の首を押さえつけ右手に持った鋭利なナイフの先端を、男の顔面に向けた。

「殺される覚悟は当然持つてるだろ？」

「ま、待て…… 待ってくれ…… 命だけは——」

「死ね」

躊躇なく、ナイフを突き刺す。小太りの男の顔の数センチ横の壁に。顔から血の気が引いた小太りの男は白目をむき、その場で意識を失いへたれ込んだ。左手を首から離して、天井を見上げて息を吐く。

「ふう…… 終わった。ナイスタイミングでしたよ」

声をかけると、廃工場の出入り口と突き破った壁の向こうからそれ

ぞれ男女が姿を現した。

「まったく、もつと早く言えよな！」

「そうですね、ここまで来るのに苦労したんですよ?。」

工場の入口からは美砂、突き破った壁からは高城が批難の言葉を口にして廃工場に入ってきた。

「申し訳ありません。突然の出来事だったんで報告が遅れました」

ここへ来る前に書いていた遺書というのは、二人へ向けて打ったメール。奈緒が誘拐されたことを伝えて、高城の「瞬間移動」でここへ来てくれと頼み、脅しの方法は前世で奈緒が教えてくれた話を参考にした。

「見てください!」 “瞬間移動” で血塗れですよ!」

「まったくだ!」 柚咲の身体にキズがいたら、どう責任を取るつもりだつ!」

「そうですね。美砂さんを背負ってくるのは大変だったんですから、特に私の背中に、ゆさりんのむ、胸が——」

「ふんつ!」  
「ぐわあーつ!」

高城が言い終わる前に、美砂のハイキックが後頭部を捉えた。このやりとり、なんだか懐かしい。

「ここ、お任せしていいですか?。」

「任せとけ。つーか、その頭の取っていけよ」

「ああ……。ですね。じゃあお願いします」

倒れている高城の代わりに美砂に、この場を任せ。変装に使っていた前髪が長いウィッグを脱ぎ捨て、半裸男が出てきた階段を降りて工場の地下へと向かう。

地下に到達し、周囲を警戒。どうやら、もう敵はいないようだ。読み通り、マンションの見張りに人員を割いたのだろう。それでも潜んでいる可能性を考慮しつつ、奥へと進む。唯一光が灯っているところで吊るされた奈緒と、椅子に拘束された熊耳を見つけた。

「な、奈緒!」 熊耳!」

俺の声に、熊耳が顔を上げた。

「だ、誰だ……？」

熊耳くまがみの声は、聞き取り辛かった。足下に目をやると、歯や爪らしき物が散らばっている。惨い。目を覆いたくなる。

「助けに来た。『予知』能力者と言えぶんか？」

「…… ああ、ああ。俺は、後でいい…… 友利ともりを頼む……」

ロープで吊るされた奈緒なおに一瞬目を向けた熊耳くまがみは、苦しそうに顔を下げた。

うなずいた俺は、近くの机に置かれていたナイフを手取る。ナイフの横に、注射器と薬物が入っていたと思われる小瓶が転がっていた。おそらく、自白剤の類い。これだけの肉体的苦痛を与えられても吐かなかつたんだ。すごい人だ、この人は――。

ナイフでロープを切り、粗末な吊され方をした奈緒なおを受け止める。彼女の頬に触れる。前髪の下に殴られた跡がある。身体にも、いくつかが打撲の跡が残っていた。

「…… 奈緒なお」

「…… 友利ともりは、無事なのか？」

「ああ、気を失っているだけだ」

上着を脱いで、奈緒なおの体に掛ける。一旦寝かせて、今度は熊耳くまがみを拘束しているロープを切り落とす。体が自由になり、重力で腕がだらんと落ちた。

「い、いってえー……」

「だろうな。歩けるか？ 無理だよな」

奈緒なおを抱きかかえ、熊耳くまがみに肩を貸して階段に向かう。

「古木ふるぎさんの…… 家族は？」

「大丈夫だ、七野しちのたちがついている」

「…… そうか」

降りてきた階段を登り地上に出ると、俺たちに気が付いた高城たかじょうが血相を変えて駆け寄ってきた。

「ご無事ですか？ 血塗れじゃないですか!？」

「それは、お前もだろ……？」

高城たかじょうの姿を見て、熊耳くまがみは冷静に突っ込みを入れた。これなら、大丈夫

夫だろう。

「代わります。私に掴まってください」

「お願いします」

熊耳くまがみを高城たかしように任せて、奈緒なおを抱き直す。すると今度は、美砂みさが駆け寄ってきた。

「友利ともりは、無事なのかっ!？」

「どこどころ打撲がありますけど、気を失っているだけです」

「……そっか」

美砂みさは、心底安心した表情かおを見せた。

「ヤツらは?」

「ん? ああ、落ちてたロープで縛っておいた」

辺りを見渡すと確かに縛られている。半裸の男は高城たかしようの体当たりで外に飛んだから、ここには居ないようだ。

「そうですか。申し訳ないですが、乙坂おとさかさんに連絡して、ここに車を呼んでもらえますか?」

「ああ、わかった」

制服のポケットから黒羽くろばねのスマホを取り出した美砂みさは、乙坂おとさかに電話をかけて、この場所を伝える。

「わかった、じゃあな。仲間の連絡で近くまで来るとかで、あと10分くらいで着くつてよ」

「そうですか、ありがとうございます。では、外で待ちましょう」

「ああ」

「はい、そうしましょう」

廃工場の出口へ向かって歩く。

——しかし、なんだろうか、このピリついた感じは……?」

この時、絶対にしてはならない失態を犯した。

勝ちを確信した時、必ず隙が生まれる。

違和感を感じて後ろを振り返ると、ナイフを持った少女が突進してくる。違和感の正体、彼女が見当たらなかった。

——避け……ダメだ、もう間に合わない。今避けたら、奈緒なおに当たる。身体を翻した背中に、少女のナイフが突き刺さる。

「——ぐっ!?!」

「あ……お、おいつ!?!」

「くっ!?!」

背中に激痛が走る。足の踏ん張りが効かない。

咄嗟に、奈緒の頭を庇う。体が傾き、徐々に失いつつある意識の中、

高城が「瞬間移動」で少女に体当たりして吹き飛ばしたのが見え、

美砂が駆け寄って来ているのが見えた。

傾いた体が地面に叩きつけられる前に、俺は……意識を失った。

Episode 37 素直な気持ち

気がつくとき、ベッドで横になっていた。

最初に目に入ってきたのは、見覚えのない天井。どうして知らない部屋で眠っていたか不思議に思いつつ、顔を横に向ける。開いている窓から流れ込む少し生温い夏の風に、清潔感のある白いレースのカーテンが涼しげになびいて揺れている。

「ここは……？ イタっ……」

左頬が痛い。触つてみると、ガーゼが貼られていた。それに、ほっぺだけじゃない。よく見ると腕にも湿布が貼られていて、他にも痛いところがいっぱいある。意識がはつきりしていくにつれて、だんだん思い出して来た。

——そうだ、あたしは……。

「あ、気がついたのね。よかった」

女の人の声、声の方へ顔を向ける。

あたしと同世代くらいの面識のない女子が、部屋に入ってきた。警戒して身体を起こそうとしたところを制止して、あたしをゆっくりベッドへ寝かせた。

「あの、どちらさまですか……？」

「私は、めどき目時。しゆんすけ隼翼とくまがみ熊耳の仲間よ」

「しゆんすけ隼翼さんと、くまがみ熊耳の仲間……？」

知っている二人の仲間……。つまりこの人は組織の人間で、味方ということでもいいんでしょうか。というか、くまがみ熊耳は年上だったんですね。これからは「さん」付けすることにしましょう。

「連絡してくるから、ちよつと待っていて」

スマホを見せながら、部屋を出ていった。めどき目時さんが戻ってくるまでの間に、部屋の中を見回してみる。どこか、兄が入院している病室と少し雰囲気似ている気がする。やっぱり、どこかの病院ですね、雰囲氣的に。

ほどなくして、彼女は戻ってきた。部屋の隅にあったパイプ椅子をベッドの脇に持ってきて、静かに腰を下ろした。

「お待ちせ。すぐに先生がくるから、それまで少し話を聞かせて。なにがあつたか覚えてる……？」

「……はい」

あの日、歩未ちゃんを無事に助けたあと、宮瀬さんに報告の電話をした日の深夜。二人組の男が部屋に押し入って来て、一人は能力で倒したんですが、もう一人の男に殴られて。

それで——そこから先の記憶がない。

でも想像すると、どうしようもない不安な気持ちだが、とてつもなく嫌な感情が沸々と込み上げて来る。

「大丈夫、安心して。物取りとか、暴行とか、そういった類いの目的で、あなたを狙った訳じゃないから」

「と、言いますと？」

あたしの不安定な気持ちを安心させようと穏やかな声で話しかけてくれた日時さんは、真剣な表情になって、相手の目的と正体を教えてくれた。

「……そうでしたか。海外のテロリストが『略奪』を狙って、乙坂さんを誘き出すために……」

「うん。関係の薄い熊耳だけじゃ、有宇くんが動かないと判断して、あなたを拉致したみたい」

——なるほど、それで。言われてみれば、能力者保護のため通常よりも遥かに高いセキュリティを施しているマンションにわざわざ侵入なんてこと、特別な目的がなければ普通はしませんよね。

でもまあ、あたしが今、こうしてここに居ると言うことは、問題は無事に解決したとみていいでしょう。乙坂さんには、助けていただいたお礼を言わないといけませんね。

「ところで、ここは？ どこかの病院みたいですが」

「あなたのお兄さんが入院している病院よ」

やっぱり、兄が入院している病院だった。道理で部屋の雰囲気似ていると感じたわけです。でもどうして、この病院なのか疑問が残る。東京にも組織が出資している病院があるわけです。

そんな疑問を思っていると、部屋のドアがノックされた。「どう

ぞー」と返事をする、男性のお医者さんと女性の看護師さんが病室に入ってきた。二人と入れ替わりで、目時めときさんは席を外す。

——あれ、この人たち……。

二人のことは、見覚えがあった。東京の病院に勤めてる外科医と看護師さんだったはず。

「いかがですか？ お加減は」

「まだちよつと痛みがありますけど、このくらい平気です」

この程度のケガは、生徒会の任務で負うこともありますし。リンチされた時の方が、もつと痛いですから。

「そうですか、それはなによりで。確認のため、いくつかお伺いします。じゃあお願いします」

「ええ。まず最初に、あなたのお名前は？」

「友利奈緒ともりなおです」

「合っているわ。じゃあ次に——」

生年月日、年齢、通っている学校名などの一問一答。返答を聞いた看護師さんは、上から順番にチェックを入れていく。

「——以上よ、お疲れさま。彼女の意識は、はっきりしているわ」

「そうみたいだな。では、容態の説明します。左頬に受けた衝撃による頭部打撲及びその他の外傷、分かりやすく言うと全身の軽い打ち身です」

男に殴られて、床とか家具に体をぶつけた出来た打撲ケガと言うことですね。それと殴られたのが顔だったため頭部の検査もしてくれました。うで、幸い脳へのダメージはなかったそうです。それと念のため経過観察ということで、あと数日ここへ入院することになりました。

「他には何もなかったわ。あなたを受け持ったのは女性医師だから安心して」

説明を終えたお医者さんが病室を出てあと、残った看護師さんが目時めときさん同じ話をしてくれたことで本当に安心出来た。

「じゃあまた、夕方に診察へ来るわ。何かあったら、ナースコールで知らせて」

「はい、ありがとうございます」

看護師さんが病室を出ていく。そして、先ほどと同じく入れ替わる形で、目時さんが入ってきた。どこか浮かない顔をしている乙坂さんと一緒に。

「よう」

「どもつす。話は、そちらの目時さんから伺いました。危ないところを助けていただいたそうで」

「いや、僕じゃないんだ……」

「ん？ どういう意味ですか？」

口をつぐんで答えてくれません。部屋に入ってきた時の様子といい、何かあったんですかね。そういえば、時空移動で戻ってきたと打ち明けた日の夜にも似たような態度だった気が。

「私から説明するわ」

椅子に座った目時さんは、神妙な面持ちで話し出した。

「あなたと熊耳を助けたのは、宮瀬くんなの」

「宮瀬さんがですか？」

「ええ。もしものことを考えて、有宇くんのフリをして、二人の救出に行ったの。万が一にも、時空移動を失わないためにつて」

「なるほど、そうでしたか」

適切な判断だと思えます。宮瀬さんの本当の能力は、自身の記憶を引き継ぐ能力。もし仮に失敗しても失敗の教訓を活かして、タイムリープ時空移動でやり直しが出来ますし。そして何より今、あたしがここに居るということが正しかったという証拠。

それなのに、この二人の重苦しい雰囲気はいつたいなんなのでしようか。何だか、とても嫌な予感がします。

「何があったんですか？」

「ここから先は、熊耳たちからの聞き伝えになるけど……」

「構いません、教えてください」

「そう、わかった。落ち着いて聞いてね」

目時さんは、あたしに念を押した。

つまりそれは、あたしに関係のあることが起こった。それは間違いない。心してうなづいたあたしに目時さんは、あの日起きた出来

事を分かりやすいように、まとめて順を追って話してくれた――。

\* \* \*

あの日、乙坂さんおとさかに扮した宮瀬さんみやせは、高城たかじょうと美砂さんみさと連携して、テロリストたちを制圧。その後、テロリストに拉致され囚われていたあたしと熊耳さんくまがみを廃工場の地下から救出し、地上で迎える車を待っていた時、意識を取り戻して身を潜めて体の回復につとめていたテロリストの少女の手によって、背中を鋭利なナイフで刺されてしまった。その場で倒れ込んで、そのまま意識を失ってしまった。

そしてそれは、抱きかかえていたあたしを庇つてのこと……。

背中せなかのナイフは、肋骨の間を柄の付近まで深く刺さっていて、時間の経過と共に出血を引き起こした。熊耳さんくまがみの指示で高城たかじょうは治療道具を探すため地下へ行くも、治療に使えるような道具は見つからず。体当たりで気絶させた少女を拘束した美砂さんみさは迎える車が到着するまで、手が血塗れになるのも構わずに必死で背中を圧迫して止血を試みた。

結局有効な手段を打てず、乙坂さんおとさかと隼翼さんしゆんすけが乗った車が到着した時には、刃りは真つ赤に染まり血の海。

乙坂さんおとさかから状況を聞いた隼翼さんしゆんすけは咄嗟に気転を利かせ、都内の渋滞を予測し、組織の息がかかった病院へ迅速にドクターヘリを緊急要請。彼とあたしは、到着したドクターヘリで病院へ緊急搬送された。東京の病院ではなくこの病院になったのは、執刀した主治医の判断。現場から都内へ往復するよりも、障害物の少ない海上を一直線に通って飛んだ方が速いと判断したからだそうです。

宮瀬さんみやせの手術には、半日以上を要した。肋骨同士の間まに深く背中に刺さったナイフは、あと数センチで心臓に達していたそうです。もし、逆に体を捻っていたら……ですが、手術は無事に成功。幸いにも神経は無傷で後遺症も残らないとのこと。ただ搬送の遅れと大量出血により、いくつもの合併症を引き起こし、危険な状態が何日も続いた。それでも、昼夜問わず二十四時間体制で病院スタッフの懸命な治療・処置のお陰で峠を越えて、集中治療室から一般の個室へと移ることが出来た。

それは、あたしが目を覚ましてから一週間以上が経つてのことだった――。

「なあ、もう十日以上だぞ?」

病室のドアを隔てた向こうの廊下から、男女四人の話し声が漏れ聞こえて来る。今は隼翼しゅんすけさんの仲間、七野しちのさんの声。

「わかってるさ」

「弟の、時空移動タイムリープは? アイツの能力なら、記憶を引き継げるんだろ!?」

そう、時空移動タイムリープならやり直せます。でも――。

「どつくに試した。だけど、跳べなかった……」

「なんでだよ!?!」

「…… わからない。有宇ゆうの話だと、過去へ跳ぼうとすると見えない壁に弾かれるような感覚らしい」

「壁? 隼翼しゅんすけの時にはなかったの?」

「一度もなかった。もしかすると、『略奪』で奪った能力には、オリジナルとは別の制限があるのかもしれない」

「なんだよ、そりや…… 打つ手はねえってのかよ」

「結局、私たちに出来ることは何もないってことなの?」

どうしようもない、やるせない思いが四人の会話から痛いほど伝わってくる。それは、あたしも同じ気持ちだからよく分かる。

「どうして、あなたが……」

自責の念ばかりが頭に浮かんでくる。

もし、あたしがテロリストに捕まらなければ、あの電話のあとすぐに空港へ迎えに行っていれば、こんなことにはならなかったのに。

「日本に帰ってきたら、伝えたいことがあるって言ってたじゃないですか。まだ、聞いてません……」

どれくらい時間が経つたのだろう。いつの間にか外は、静かになっていった。隼翼しゅんすけさんたちは、廊下を離れたみたい。

「友利ともりさん……」

四人の代わりに、すぐ後ろで女子の声が聞こえた。この声は、黒羽くろばねさん。あたしは振り返らず、彼女に訊ねる。

「学校は、どうしたんですか？」

「今日で期末試験が終わったので」

「そうですか」

もう、そんな時期だったんですね。試験サボってしまいました。まあ、追試を受ければいいか。こんな精神状態で試験を受けても集中なんて出来る訳ないですし。

「乙坂からお聞きしました。退院してからずっと、朝からお見舞いに来てるって……少し休んでください。体を壊しちやいますよ？ そうなったら——」

「平気です」

「……そう、ですか」

黒羽さんが心の底からあたしのことを、あたしたちのことを心配してくれているのは分かる。それでもあたしは、黒羽さんの優しさを受け止めるどころか遠ざけしまった。最悪、本当に最悪ですね。

「また来ます。今度は、ご飯を作って持ってきます。一緒に食べましょう」

黒羽さんは病室を出て、ゆっくりとドアを閉めた。病室が静かになった。一定の間隔で心音を伝える電子音だけが鳴っている。目の前のベットで、規則正しい呼吸を繰り返し、穏やかな顔で眠り続けている姿になぜか、出会った頃からのことを思い出した。

「……今思えば、あなたの印象は最悪でした。あなたと会うまでは、予知能力を使ってお金を荒稼ぎしているんだと思っていましたから。でも、実際の印象は全然違って。話をしてみると、よく笑う人です——いつからっすかね」

いつの間にか、無意識に目で追うようになっていた。

普段は穏やかなのに、時々、すごく哀しそうな表情で深い目をすることがあって。何不自由のない生活を送っているハズなのに、どこか酷く孤独に思えて、それが気になって……。

——ああ……そっか。これが、そういう感情だったんですね。

誰かのために傷つくことを厭わない人、思いがけない兄との関係、歩んできた壮絶な過去を知ったあたしは、進むべき道を示してくれた

唯一信頼出来る隼翼しゅんすけさんを裏切ってまで虚偽の報告をした。

それも全部——分かってしまえば、認めてしまえば、素直になれば、こんなに簡単なことだったんですね。

「あなたが星ノ海学園に来てからのあたしは、あなたに頼ってばかりでしたね」

ひとつひとつ振り返る。野球の練習を夜遅くまで付き合ってくれた、兄のギターを綺麗に直してくれた。ライブの時も、ランチに合いそうな時も身を呈して庇ってくれて。そして、今回の誘拐事件でも瀕死の重症を負ってまで守ってくれた。

もう誰も信じないと固く誓ったあたしが、こんな感情を抱くだなんて夢にも思いませんでした。

「決めました。あなたは、いつもあたしを守るために無茶ばかりしてキズついてばかり、今回だって。そんなあなたを、今度はあたしが守ります」

一度深く深呼吸をして、パイプ椅子から立ち上がる。そして今なお、眠り続けている宮瀬みやせさんに、あたしは微笑みかけた。

「少し待っていてください、準備してきます」

病室を出て、玄関へ向かって歩く。病室と同じ階の休憩スペースに差し掛かったところで、見知った顔を三つ見つけた。

「友利ともり!？」

「友利ともりさんっ?」

売店近くの休憩スペースでダべっていた乙坂おとさかさん、黒羽くろばねさん、高城たかじょうの声が見事に重なった。

「ここは、病院ですよ。静かにしてください」

黒羽くろばねさんは、ぱたぱたと早足で近寄って来た。

「大丈夫ですか?」

「はい、大丈夫です。ご心配おかけしました」

素直に頭をさげる。

「い、いえいえっ! そんな困りますよー、顔をあげてくださいー!」  
言われた通り顔を上げると、三人ともなぜか驚いた表情かおをしていた。どうしたんですかね? まあ今は、急いでいるので気にしないで

おきましよう。

「ではあたしは、これから行くところがあるので」

「どこにいくんだ？」

「星ノ海学園です」

「今から？ もう、学校は終わってるぞ。何をしに行くんだ？」

「これからのための準備です」

「はあ？」

目的を聞いてきた乙坂さんおとさかだけではなく、高城たかじょうと黒羽さんくろばねも、頭には申し訳ないですが、今は、こうして話している時間も惜しい。

「では、急ぎますので」

あつけに取られている三人を後目に、病院の玄関へ向かって再び歩き出した。玄関を出て、長い階段を下りたところの停留所でバスに乗り、電車を乗り継いで、星ノ海学園の最寄り駅を目指す。電車が最寄り駅へ着いた頃にはもう、夕方になっていた。

星ノ海学園へ行く前に併設マンションの自宅へ立ち寄って、簡単に支度を済ませておく。久しぶりに歩く通学路、校門を潜り、昇降口で上履きに履き替えて、生徒も疎らな廊下を職員室へ向かう。ノックをしてから扉を開けて、職員室に入る。目的の担任の先生は、見つけることができた。話をするため、期末試験の採点をしている担任の先生のところへ行くと、向こうもあたしに気が付いた。

「友利ともり！ もう、いいのか？」

「はい、ご心配おかけしました」

ぺこ、と頭を下げる。

「いや、気にしなくていい。大変だったな、いろいろと」

「いえ。あの、これを——」

「ん？ なんだ」

あたしは自宅で用意してきた封筒を、担任に手渡した。封筒の中を確認した担任は、目を大きく見開る。

「これは…… ちよつと来い！」

職員室から、近くの応接室へ連れて行かれる。

「いったいどういうつもりなんだ？」

向かいの席に座った担任は、あたしが提出した封筒をテーブルに置いた。

「見ての通り、退学届けです」

「どうして!?! やっぱり、今回の件を引きずって——」

「違います」

言い終わる前に、あたしは否定。

「やらなきゃいけないことが……いえ、やりたいことがあります」

「それは何だ？ 学校を辞めてまでしなきゃならないことなのか？」

「はい、守りたい人がいます。今は、その人の側に居たいんです」

「……宮瀬、か？」

「——はい」

意思は変わらないことを示すため、はつきりと返事を返す。担任は難しい顔で頭を掻く。

「……上から大体の経緯は聞いてるし、気に病むのもわかる。だが——」

「だからこそです」

生徒会長のあたしが、いつ意識を取り戻すか分からない人を待ち続けることは、この学校の存在意義を揺るがすことと同義。今後のためにも新しい生徒会長を据えて、新しい体制で活動した方が良いに決まっています。

「理屈は分かった、確かにお前の言う通りなんだろう。けど、どうして退学なんだ？ 休学じゃダメなのか？ そこまでする必要があるんだ？」

星ノ海学園の理事長の隼翼しゆんすけさんは、二つ返事で無期限の休学を容認してくれると思います。でもこれは、あたしのなりの決意ケジメ。

「責任を感じているとか、そういう理由ではなく。私情によるものだからです」

「私情？」

ゆっくりうなづいて、答える。

「悩んだり困っている時は、いつも助けてくれて。からかうと少し

困った顔で笑って……」

話している間も、どんどん感情が溢れてくる。自分でも信じられないくらいに……。

「作った料理を本当に美味しいそうに食べてくれる、それがすごく嬉しくて。あたしは、あの人のことが——好きです」

「もう、いいじゃない」

応接室に女性教師が入ってきた。英語を担当している、なかむら仲村先生。

「なかむら仲村先生……ですが——」

「人生は、たった一度きりのもの。誰にも託せないし、奪いもできない。奈緒ちゃんの人生なの。だから、ここまで言わせた女の子の決意は誰も邪魔しちゃダメよ」

「…… わかりました」

なかむら仲村先生の説得で、担任の先生が折れた。

「よろしい。ねえ、奈緒ちゃん」

「あ、はい……」

「あなたの決意が本物だつてことはちゃんと伝わったわ。退学届けは、私がしっかり預かっておくから。だから、必ず二人で一緒に戻つてきなさい。その時は、破り捨ててあげるわ！」

「——はい！」

「うんっ、いい返事ね。行ってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

あたしは、なかむら仲村先生と担任に頭を下げて一度自宅へ帰る。玄関に準備しておいた荷物を持ってマンションを出る。

夏の太陽はすっかり傾き、オレンジ色の夕日がとても眩しくて、とても美しかった。長い間ずっと忘れていた清々しい気持ち。

鮮やかな夕日に背を押されるように、あたしは最寄り駅への一步を踏み出した。

## Episode 38 優しさ

電車とバスを乗り継いで数時間、入院先の病院に到着。病院の正面玄関を抜けて、長い廊下を宮瀬さんの病室へ歩いていると、とても仲の良さそうな男女が歩いてきた。二人も、あたしに気が付いた。

「あつ、友利のお姉ちゃんなのですー!」

「友利?」

「歩未ちゃんと乙坂さん」

前から歩いてきたのは、乙坂兄妹。

「どうしてここに居るんだ? 東京に戻ったって聞いたけど?」

時刻は既に19時を回っている。面会時間の終わりも近い疎らな時間帯に戻ってきたことを不思議に思われた。

「用事は済んだので。お二人は?」

「あゆと有宇お兄ちゃんは、隼翼お兄ちゃんの付き添いでござるっ」

「兄さんが、熊耳さんの面会に来ているんだ。込み入った話みたいだから、売店で待っているんだ」

歩未ちゃんの話に、乙坂さんが補足を入れた。黒羽さんと高城は、入れ違いで帰宅したそう。

「しつかし、本当に隼翼さんの弟だったんですね。似てないな」

乙坂さんの顔をまじまじと見て、素直な感想を述べる。ま、整った顔立ちであるところは共通点ではありますけど、歩未ちゃんも可愛いですし。

「ほっとけよ!」

「有宇お兄ちゃん、病院で大きな声を出したらダメなのです!」

歩未ちゃんにお叱りの言葉を頂いた乙坂さんは、気まずそうに顔を背けた。

「うん、そうだよねー。歩未ちゃんはいいい子だね、あたしの妹になりませんか?」

「ならないよー!」

歩未ちゃんではなく、兄の乙坂さんが間髪入れずに拒否。誰かさんと一緒に、妹のことになると全く冗談が通じない。

「どうして、あなたが答えるんっすかー？」

「うーん、どうしよーかな〜？」

「お前も悩むなっ！」

「大きな声を出したらダメですっ。冗談なのにー」

あたしと歩未ちゃんあゆみは顔を合わせて、「ねえーっ」と息を揃えて言う。

「うぐっ……」

からかわれた乙坂さんおとさかは、まるで苦虫でも噛み潰したような屈辱的な顔をしている。本当にシスコンっすよね、この人。ま、歩未ちゃんあゆみのために未来から戻ってくるような人ですし。

「ところで、友利お姉ちゃんともりはどうして、病院にいるのでしょうか？

まさか、ご病気ですかっ？」

「お、おいつ、歩未っ！」

歩未ちゃんあゆみの素朴な疑問に、乙坂さんおとさかは慌てて止めに入った。「気にしなくていいです」と制止して膝を屈め、歩未ちゃんあゆみに目線を合わせる。

「この病院には今、あたしの大切な人たちが入院しているんです」

「それは、一大事なのですー。一日も早く良くなるよう微力ながら、あゆもお祈りいたしますっ」

「うん、ありがとう」

まるで自分のことのように心配をしてくれる歩未ちゃんあゆみの頭を撫でながら、お礼の言葉を伝える。歩未ちゃんあゆみは、少しくすぐったそうにしながら顔をほころばせた。

「あ、そうだ、まだ時間ありますか？」

「ん？ ああ、まだ話が長くなりそうだったから売店に来たんだ」

「そうですか。では、少し待っていてもらえますか？」

「わかった。歩未あゆみ、ジュースでも飲むか？」

「アイスがいいー」

「わかったわかった」

一度二人と別れて、病室の中に入る。持ってきた荷物をベッドの横に置き、昼と同じように眠ったままの彼に「また、少し出てきますね」

と伝えてから病室を出て、二人が待つ売店へ向かった。

「お待たせしました」

「いや、それで何だ？」

あたしは膝を曲げて、歩未ちゃんに視線を合わせる。

「歩未ちゃんは、星は好きですか？」

「はい、大好きなのですーっ！」

「お前いつも、望遠鏡を覗いてるもんな」

「そうでしたか。じゃあ、天体観測に行きませんか？ 近くに、とても

綺麗な星空が見える場所があるんだよ」

「おっっ！ それは是非とも行きたいのですー！ あ、でも……」

歩未ちゃんはチラッと、乙坂さんに目を向けた。

「行ってこい。兄さんには、僕から話しておくから」

「いいのっ？」

「ああ。友利、歩未を頼むな」

「はい、お任せください。歩未ちゃん、行きましょう」

「はっ！ では有宇お兄ちゃん、行ってきますっ！」

乙坂さんに敬礼した歩未ちゃんと星空を見るため、病院の外へ出る。日が暮れて、辺りはもう暗くなっていった。持参した小型の懐中電灯で足元を照らして、病院の裏手からまっすぐ伸びる一本道を並んで歩く。だんだんと潮の香りが濃くなってきた。

「とうちゃーく」

「す、すごい……すごいのですー！」

目的の岬に到着。沈み行く夕日が美しい岬の澄んだ夜空には、都心とは比べ物にならないほどの満天の星空が広がっている。手を伸ばせば、掴めてしまいそう。

「喜んでもらえた？」

「はいっ！ 手を伸ばせば届きそうなのですー！」

同じことを思っていた。星々が瞬く夜空へ向かって目一杯両手を伸ばしてびよんぴよんつと飛び跳ねる歩未ちゃんは、とても無邪気で微笑ましい。黒いキャンバスの中で瞬く星々の間を光が流れた。

「あっ、流れ星！ お願い事間に合わなかったでござるく……」

「歩未ちゃんは、何をお願いしたかったの？」

願いが間に合わず残念そうに項垂れている歩未ちゃんに、叶えなかった願いがとはなんだったのか訊ねる。返ってきた答えは、とても優しい気持ち。

「友利お姉ちゃんの大変な人たちが早く良くなりますように、ですっ！」

「——ありがとう。歩未ちゃんは、優しいね」

歩未ちゃんの頭を撫でながら、お礼の言葉を伝える。地面にハンカチを敷いて、星空を眺めながら話を聞いた。学校の友だちこと、今の施設暮らしこと、いろいろなことを歩未ちゃんは楽しそうに話した。「さて、そろそろ戻りましょう」

スマホの時計を見て、立ち上がりスカートを整える。

「ええ、もう帰るのーっ？」

「あんまり遅くなると、お兄ちゃんたちが心配しちゃうよ」

「うーん……名残惜しですが、了解でござるっ！」

来た道に戻り、病院に帰ってきた。乙坂さんにメッセージを打つと熊耳さんの病室に居るとのこと、病室まで歩未ちゃんの案内してもらうことに。

話し声が聞こえるひとり部屋の病室の戸を軽くノック、「はい」と熊耳さんの返事が返って来たのを聞いて中に入る。病室には、ベッドを椅子代わりに座る熊耳さんと、パイプ椅子に座っている乙坂さん、隼翼さんの三人が居た。

「あゆ、ただいま帰還した所存であります！」

「ああ、おかえり。友利も、歩未を送ってくれてありがとう」

「いえ、お気になさらず」

「奈緒ちゃん、歩未と遊んでくれてありがとう」

「いえ、あたしが歩未ちゃんと遊びたかったんです」

「そっか」

突然、空気が重くなった。いえ、正確にはもっと重くなった、ですね。学校から報告が行き届いているみたいです。

「奈緒ちゃん、話は聞いたよ。これから、どうするつもりなんだい？」

「近くで、アパートを借りようと思っっています」

「それじゃ金がかかるだろう?」

「能力の仕事でいただいた報酬の貯金がありますので、しばらくは大丈夫です」

アルバイトを探して、ワンルームのアパートを借りて、節約して生活すれば十分にやっていける。特殊能力の方は、あとで乙坂さんおとしさかに奪っていただければもう、科学者に捕まる心配もありませんし。

「隼翼」

「ああ、わかってるよ、プー。奈緒ちゃんなお、この病院で寝泊まりするといい」

「いえ、それは——」

そんなこと出来るわけない。だってこれは、あたしのわがまま。だけど、隼翼さんしゆんすけは構わずに話を続けた。

「院長とは話についている。ただ、病室は使えないから、宮瀬みやせの病室に寝泊まりしてもらうことになるけど」

「どうして……」

「この病院は、俺たちの組織が出資して運営しているようなものだから問題ないよ。熊耳くまがみの病室と同じであいつの病室も個室だし、広いから簡易ベットを置ける位のスペースは十分にある」

「いえ、そうではなくて。どうして、そこまでしてくれるんですか?」

あたしの疑問に答えたのは、熊耳さんくまがみ。

「俺が、頼んだ。宮瀬みやせは、俺にとっても命の恩人だからな。まだ、礼を伝えられてない。それに——」

熊耳さんくまがみは視線を、隼翼さんしゆんすけに移した。

「俺たち兄弟にとっても……な。もし宮瀬みやせが居なかったら、今回の件で有宇ゆうを失っていたかもしれない。いや、有宇ゆうだけじゃない。熊耳くまがみや、古木さんふるぎたちも——」

「僕も同じだ。未来で、宮瀬みやせと友利ともりが居なかったら、僕はどうなっていたかわからない……」

「あのー、なんのお話でしょうか? ちんぷんかんぷんなのです……」

話題についていけない歩未ちゃんは、両側のこめかみに人差し指を当てながら首をかしげている。そんな歩未ちゃんに、隼翼さんは声を頼りに優しく頭に手を乗せた。

「みんな、宮瀬に感謝してるってことだよ」

「おおーっ、宮瀬のお兄さんのお話しでしたかつ！ あゆも荷物を持ってもらって、ケーキをご馳走していただいたでござるっ。それに、あゆの料理をご馳走する約束もまだなのですーっ」

「そう言えば、そうだったな」

「そうか、歩未もか。じゃあ、早く元気になってもらわないとな。奈緒ちゃん」

「あ、はい……………」

「みんな、同じ気持ちなんだよ。けど俺たちは、ずっとここにはいられない。やらないといけないことがある。だから、俺たちの代わり………… いや、俺たちの分も、宮瀬のことを奈緒ちゃんに頼みたい。お願い出来るかい？」

「………… はい。ありがとう………… ございます……………」

隼翼さんの、みんなの優しさに触れたあたしは深く頭を下げ、熊耳さんの病室を後にした。宮瀬さんの病室へは向かわず、同病院の精神病棟に入院している兄の病室を訪ねた。鎮静剤が効いているのか、兄は体を起こしたまま一点を見つめている。

「これからは、毎日お見舞いに来られます」

話かけるも、やはり反応は返って来ない。

「………… 明日、また来ますね」

兄の病室を出て、宮瀬さんの病室へ向かう。病室の前に着くと、あの女性看護師さんが中から出てきた。

「友利さんだったわね。ちょうど今、ベッドの用意が出来たところよ」

「ご迷惑おかけしてすみません、ありがとうございます」

頭を下げて、お礼を言う。

「話は聞いたから。大変だと思うけど頑張って」

「はい、お世話になります」

看護師さんを見送って、病室に入る。ちよつとだけ奥に移動された

宮瀬<sup>みやせ</sup>さんのベッドの隣に、簡易ベッドが用意されていた。あたしはベッドを椅子の代わりにして座り、峠を越えてなお昏睡状態が続いている彼に話しかける。

「あなたは、いったいどれだけの人を助けてきたんですか？ みんな、あなたに感謝してましたよ。歩未<sup>あゆみ</sup>ちゃんの手術料を食べる約束は絶対に守らないとダメですよ。えっと、それから…… あたしも……」

今日は、本当にいろいろなことがあって心身共に疲れきっていたあたしは、話し終わる前に自然と体が横に倒れた。

そして、そのまま眠りについた。

## Episode 39 〈奇跡〉

朝、セツトしたスマホの目覚ましが鳴る前に目を覚ましたあたしは、慣れないベッドの上で軽く伸びをして、カーテンを開けた。差し込む夏の朝日を浴びて、目を閉じて深呼吸。まだ涼しい爽やかな風が心地良い。

「おはよーごいいます。朝ですよ」

振り返って、隣のベッドで眠っている宮瀬みやせさんに声をかける。だけど、返事は返ってこない。

隼翼しゅんすけさんたちのご厚意で、同じ病室で寝泊まりと、看病をさせてもらってから数日。容態は相変わらず今もまだ、穏やかな顔で眠り続けている。

執刀した主治医の先生によると、もう命に別状はないとのこと、いつ目を覚ましてもおかしくない状態という話。でも、いつ意識を取り戻すかまでは分からないそう。それは次の瞬間かもしれないですし、明日かもしれない、一週間後、一ヶ月後、一年後かもしれない。

「どうして、過去に跳べないんですかね？ 他の能力は使えるのに」

「時空移動タイムリープ」を使えなかった原因を特定するため実験した結果、念動力念動力も、「電撃電撃」も、「略奪略奪」で他人に乗り移ることも出来たようですが、やはり「時空移動タイムリープ」で過去に戻ろうすると弾き返されるそうです。そんな訳で結局のところ、乙坂おとこさかさんが「時空移動タイムリープ」を使えない以上、自然に目を覚ますのを待つしかないと言う結論に至りました。

「大丈夫です。あなたが起きるまで側にいますので。よし」

着替えを済ませて、先生と看護師さんが朝の診察に来る前に、先日教えてもらった足の血流を良くするマッサージを行う。意識を取り戻した時に、少しでも役に立てばいいんですけど。

ちようどマッサージを終えた頃、主治医と看護師さんが朝の診察に訪れた。普段東京の病院で勤務している二人も、しばらくの間この病院に泊まることになったと話した。

「呼吸も、心音も、安定している。順調に回復に向かっていますよ」  
「そうですか。ありがとうございます」

あたしは、頭を下げる。

「大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

「そうですか」

気を使ってくれて、それ以上は言わなかった。なにを言っても弱音を吐かないと判断したんでしょう。代わりに看護師さんが、朝ご飯に誘ってくれました。あたしは謹んで申し出を受けて、病院職員やお見舞いの人たち用に完備されている院内のレストランで、二人と一緒に朝食を食べることに。

「そう言えば、あなたのお兄さんも、この病院に入院しているそうね」

レンゲですくった麻婆豆腐を口に運びながら看護師さんは、思い出したように兄のことを訊いてきた。

「確か、精神病棟の方って言っていたか？」

「はい。ここに入院して、もう二年以上になります」

兄の容態は、入院してから変わっていない。まあ良く言えば悪化していないとも取れますけど。いつの日か正気を取り戻して、もう一度あたしの名前を呼んでくれる日は来るんでしょうか……。

「そう。それなら、たくさん話しかけてあげるといいわ。思い出話や何気ない話をきっかけに、突然正気や記憶を取り戻した例は世界中にいくつもあるから」

「昔大事していた物を見せるとか、好きだった音楽を聴かせてあげるのも良い。脳への良い刺激になる」

正気だった頃の兄が一番興味をもっていたことは、やっぱりギターや“ZHIEND”などの音楽関連。でも入院当初、大事にしていたギターを見せたり、“ZHIEND”のアルバムを流してみましたけど、結局なにも効果はなくて――。

「諦めずに続けることが大事。興味を持っていないように見えても、あなたの言葉は、あなたの想いは必ず、お兄さんに届いているわ」

看護師さんの隣に座っている先生も、優しくうなづいた。

二人の言葉は、無意識のうちに半ば諦めかけていたあたしの心に深く突き刺さった。

\* \* \*

朝食を食べ終えて二人と別れたあたしは、兄の病室を訪ねた。虚ろな目で正面を眺めている兄のベッド横の棚の上にある花瓶を持って一旦病室を出て、水を変えてから元の位置に戻し、ベッド脇のパイプ椅子に座る。

「えっと、うーん……」

いろいろ話そうと思っていたのに、肝心な最初の言葉が出てこない。こんな時、どう話を切り出せばいいんでしょうか。とりあえず共通の趣味が無難ですかね、となればやっぱり――。

スマホを操作して、音楽アプリを立ち上げる。流す音楽はもちろん、＼＼＼＼＼＼＼＼。ボーカルの美しい歌声とバンドのサウンドが病室中に響き渡る。心地良い楽曲に合わせて体を左右に揺らしあたしは、自然とリズムを取っていた。

「ねえ、お兄ちゃん、覚えてる？ あたし、中学の受験直前だったのに『このCD聴いてみる、奈緒もぜってー気に入るからー』って、強引に＼＼＼＼＼＼＼＼のCDを渡されて。あたしが、あんまりロックに興味がないって言ったたら『違う！ 』＼＼＼＼＼＼＼＼はロックじゃない、ポストロックだ！』って何度も豪語されて――」

さつきまでが嘘みたいなのに、次々と言葉が出てくる。気がつくと話しても昔のあたしに戻っていて。結局兄は、最後まで興味は示してくれませんでしたけど、暴れることもありませんでした。もしかしたら、＼＼＼＼＼＼＼＼の楽曲を聴いていたからなのかもしれない。

この時あたしは、やっぱりあたしたち兄妹を繋いでくれているのは、＼＼＼＼＼＼＼＼なんだって改めて思った――。

「どうしたんですか？」

兄の病室から宮瀬さんの病室に戻ると、乙坂さんが来ていました。ベッド脇のパイプ椅子で足を組んで座っている。

「兄さんが、熊耳くまがみさんの見舞い行くって言ったから僕も一緒に付いてきたんだよ。それから——」

椅子から立ち上がった乙坂おとしざかさんは、病室に備え付けの棚の上に置いてった、赤いお鍋を差し出した。

「柚咲ゆさからの差し入れだ」

「なんすか？ これ」

乙坂おとしざかさんは、どこか気恥ずかしそうにして言うのをためらっている。

「…… ゆさりん特製クリームシチューらしいぞ」

「おおっつ、マジですかっ。病院のご飯って少ないんで助かりますっためらっていたのは、口に出すのが恥ずかしかったんですね。」

「あ、やっぱりそうなのか？」

「はい。あと素材の味を活かした優しい味付けのメニューが多いです。黒羽くろばねさんに、お礼を伝えておいてください。あと痛々しいので減点、と」

「ああ、伝えておく」

乙坂おとしざかさんは、小さく笑った。

「あ、そうだ。これ、あなたにあげます」

鍋を備え付けの冷蔵庫に入れて、バッグの中から取り出した封筒を差し出す。

「これ、ZHEN<sup>ド</sup>のチケツトじゃないか」

「明後日なんで急ですけど、よかったらどうぞ」

「お前は、行かないのか？」

「はい。ですので、代わりに行ってきてください」

「…… そっか。じゃあ、ありがたく行かせてもらうな」

乙坂おとしざかさんは、思ったよりもあっさりを受け取った。もしかしたらチラシと、ベッドを見たのを気づかれていたのかもしれないね。

「なにか欲しいライブグッズとかあるか？ あるなら代わりに買ってくるけど」

「いえ、特にグッズに興味はないので。そうだ、一つありました」

「ん？ なんだ？」

「スマホケースをお願いします！」

「ああー…… ZHEN<sup>ジエン</sup>D<sup>ド</sup>」のロゴが入った高機能スマホケースか」

「ん？ 知ってんすか」

「そうか、話してなかったな。未来のお前は、スマホケースを買ったんだよ」

「へえ、そうだったんすね。では、それと同じのをお願いしますっ」

「ああ、わかった。必ず買ってくるよ」

「はい、お願いしまーすっ」

「じゃあ、またな」と病室を出た乙坂<sup>おとせが</sup>さんを見送って、簡易ベッドを椅子の代わりにして座る。ふと疑問が浮かんだ。未来でライブグッズを買ったと言うことは、ZHEN<sup>ジエン</sup>D<sup>ド</sup>のライブ会場に行ったと言うこと。ライブのチケットは、兄の分と合わせて二枚取っていました。つまり乙坂<sup>おとせが</sup>さんと二人で行った？ いえ、それはないっすね。未来のあたしもきつと、今のあたしと同じ想いを抱いていたはずですし。

「起きたら教えてくださいよ？ 話も聞けてないですし。少し期待してるんですから……」

さて、お昼にしましょう。もういい時間ですし。

黒羽<sup>くろばね</sup>さんのクリームシチューは、夜にいただくことにして。お昼を買いに売店へ行くことにしました。

\* \* \*

翌日の昼過ぎ、あたしは病院を離れて近くの街へ来ていた。駅近くのコインランドリーで洗濯と乾燥が終わるのを待つ間に家電量販店へ行き、寒いくらい冷房が効いた店内を、目当ての音楽プレーヤーの売り場へ向かう。

到着した売り場の前で、あたしは悩んでいた。あたしはイヤフォンを買ってスマホで聴くとして、悩んでいるのは兄の分。小型のコンポにするか、携帯型の音楽プレーヤーにするかが問題です。病院なの

で、他の患者さんたちの迷惑にならない音楽プレイヤーにするのが最善なんですよけど。それだとイヤフォンかヘッドフォンが必要になるので、音楽を聴きながら話すことが出来ないと言うデメリットがあります。

「うん……よしっ」

悩んだ末にあたしは、置き場を選ばない音楽プレイヤーを購入することにしました。それと、プレーヤーに繋がられる小型スピーカーも一緒に購入、これなら状況に応じて使い分けられます。お店を出て、コインランドリーで洗濯物を受け取り、病院へ戻った。

「今日は、あなたの話をしました」

昨日と同じように、ZHIEND<sup>ド</sup>を聴きながら兄に話した内容を、目の前のベッドで眠っている宮瀬<sup>みやせ</sup>さんに伝える。

「きつと驚くでしょうね、成長したあなたを見たら。いつか思い出話をしながら、三人で笑い合える日が来るといいっすね」

話し終えた時には、もう外は暗くなっていた。

晩ご飯を食べようと立ち上がった時、病室のドアがノックされた。

「はい、どうぞー」

返事をする、ゆっくりドアが開いた。

「友利<sup>ともり</sup>」

「ああ、あなたですか。それに――」

病室を訪ねて来たのは、乙坂<sup>おとさか</sup>さん。それともう一人、よく知る顔の女性。

「この人は、ZHIEND<sup>ド</sup>のボーカルだ」

「ちーっす！ ZHIEND<sup>ド</sup>のボーカルのサラ・シエーンですっ！」

そう、乙坂<sup>おとさか</sup>さんが連れてきた女性は、ライブ本番を明日に控えたZHIEND<sup>ド</sup>のボーカル、サラ・シエーン。

「それは、知ってますけど……」

「友利<sup>ともり</sup>、ちよつといいか？ 事情を説明してくるから、ちよつと待っててくれ」

「あいよっ」

サラさんに断りを入れた乙坂おとさかさんは、突然の出来事にただただ呆氣にとられていたあたしを廊下へ連れ出した。

「で、なんすか？ これはいったい……」

「宮瀬みやせに、あの人の生歌を聴かせるために連れてきたんだ」

「なして？」

「僕は、未来で『ZHIEND』のライブを聴いて失っていた記憶を取り戻した。だから、あの人の歌を聴けば宮瀬みやせにも、なにか良い影響を与えてくれるかもしれない……！」

確かに、『ZHIEND』のボーカルのサラさんの歌には、特別な力がある気がします。昨日も、今日も『ZHIEND』を流して話しかけている間、兄は、ずっと落ち着いていました。もしかしたら……。…… わかりました。可能性は、ゼロではありません。あなたの判断にお任せします」

「よし！ ありがとう。じゃあ中に戻ろう」

病室に戻ると乙坂おとさかさんは、サラさんに事情を説明した。快く引き受けてくれた彼女の手を引いて、ベッドの前まで連れて行く。

「ここで、いいのか？」

「ああ、頼む……」

——わかった、と頷いたサラさんは自分の胸に手を当てて、ゆっくり息を吸った。なんとも形容しがたい独特の緊張感が漂う。そして、歌い出した。アカペラにも関わらず、音を外すことなく、澄んだ美しい歌声が響き渡る。

——あれ？ 今のは……

サラさんの歌声に混ざって、別の音が聞こえた気がした。最初は気のせいかと思いましたが、その音は、徐々に鮮明になっていった。

「ダメ、か……」

「悪いな、力になれなくて……」

「いや、サラさんのせいじゃ……」

歌い終わり、なにも起こらなかったことに落胆する二人。

「いえ……」

今にも溢れ出しそうな涙を必死に堪えながら頭を下げ、サラさん

へ心からのお礼の言葉を伝える。

「奇跡は、起こりました……。本当にありがとうございました……。」

「えっ？」

「そっか、それはよかった。私も嬉しいよ」

乙坂おとさかさんは戸惑って、サラさんは微笑みながら自分のことのように嬉しそうに言った。二人にして欲しいと伝えると、乙坂おとさかさんはサラさんを連れて病室を出て行った。

二人きりになったあたしは、ベッドの横に移動して手を重ねる。彼の体温が、懐かしくて大好きだった温もりが伝わってくる。

「奇跡って、本当に起きるんですね。全部、思い出しましたよ。あたしたちは——」

あの音の正体は——声だった。今、手を重ねている彼の声。

歌を聴いている間、知らないはずの言葉が、二人で過ごした幸せな日々の想い出が甦ってきた。

——そう、あたしたちは本当に短い間でしただけ。確かに、本当に“恋人”だった。

## Episode 40 声

昨夜あたしは、＼ZHENND＼のボーカル、サラ・シエーンアカペラの生歌を聴いたことで、前世の記憶を取り戻すことが出来た。

「あたしが見ていた夢は、あなたと過ごした日々だったんですね」

必ず別れが訪れることを知りながらも、恋人として一緒に過ごすことを選んで過ごした短くも大切な時間。そして、訪れた別れの時にした、あの約束――。

「いつ起きるんですか？ もう、二週間になりますよ」

今朝の診察によると、昨日よりも体温も上がって血色が悪くなっていくからそろそろ目覚めるのではないか、という診断でしたが、今のところ予兆のようなものは感じられない。ま、命には別状はないことですから、気長に待ちましょう。

視線を窓の外へ移す。夏の象徴の真っ白な入道雲が高く伸びて、青空を覆い尽くすほど大きく広がっている。

「もうすぐ、夏休みですね」

海水浴、プール、夏祭り、花火大会。毎日のように夏定番のイベントが目白押し。あたしにとっては、憂鬱な夏休み。学校と調査に忙しくない方が、余計なことを考えずにいられる。でも、今年は――。

「ん？ はい、今行きまーす」

時計が午後三時を回った頃、病室のドアがノックされた。席を立てて応答へ向かう。

「どうしたんですか？」

「友利さんともり、お疲れさまです！」

「こんにちは」

来客は、高城たかじょうと黒羽くろはねさん。一瞬、学校は？ 思いましたが今日は休日であることを思い出した。暑い夏空の下、バス停からの長い階段を上ってきた二人は、額に少し汗をにじませている。

「今日は、お見舞いに伺いました。こちらは、差し入れのお菓子です」  
「ですすすっ」

「ども。どうぞー」

病室に入つてすぐ、二人は異変に気がついた。

「おや、先日伺った時よりも、ずいぶんと顔色が良くなっていますね」「ですねーっ」

毎日見ているあたしよりも、二人の方が変化を実感できるみたい。

「あ、そうだ。黒羽さん。クリームシチュー、ありがとうございまして。とても美味しかったです。よかったら今度、レシピを教えてください」「さい」

「あつ………はいっ！ 宮瀬さんが退院したら、一緒に作りましょー

！ 黒羽家では、元気の源として重宝されているんですよー」

「へえ、そうなんすね」

あたしたちのやり取りを見ていた高城が、わなわなと身体を震わせていた。冷房で汗が引いて寒くなつたんでしょうか。少し設定温度を上げるか、と思っていると。

「…… た、大枚を叩いても食べたい、ゆさりん特製のクリームシチュー！ なぜ私は、健康体なんでしょうかつ！」

両手で頭を抱え込み、涙を流しながら大声で嘆く高城に「ひくなつ！」と、あたしと美砂さんは、間髪入れずに声を合わせてツツコミを入れる。

「お前、不謹慎にも程があるぞっ!？」

美砂さんは、さらに叱責を浴びせている。ま、こうして軽口を言えるということは、それだけ良くなっている証拠とも。

それはさて置き、この病室にはパイプ椅子が二組しかないので、二人にパイプ椅子に座ってもらって、あたしはベッドに座つての会話。

「生徒会の仕事、能力者の調査よりも大変だとは思いませんでした」「あたしの苦勞が、わかりましたか？」

「骨身に染みていますよ……… いえ、本当に」

「わたしも、もっとお手伝い出来ればいいんですけど………」

申し訳なきような表情の黒羽さん。期末試験が終わって芸能活動を再開したため、以前のように遅刻や早退、欠席の頻度も戻ったそう。「ゆさりんには、日本中に素敵な笑顔で元気を届けるという大切なお仕事があるんです！ 生徒会のごことは気になさらず、全て私にお任せ

ください！」

「だそうですね？」

「まっ、最初から気にしてねーけどなっ」

美砂さんが出てきて、遠慮なく思い切り笑い飛ばした。

「悪魔のような人ですね!？」

「これあげるんで、もうしばらくお願いします」

「これは？ ま、まさか……!？」

「そのまさかです」

小分けにして冷凍保存しておいたクリームシチューが入った容器を渡すと、高城は目に涙を浮かべ、また小刻み身体を震わせた。

「ううっ、天使のような人ですね……。この『ゆさりん特製クリームシチュー』があれば、あとひと月は頑張れますッ！」

「つたく、大袈裟なヤツだな。ま、生徒会のことはアタシらに任せとけよ」

普通のテンションに戻った高城が、美砂さんに同意するように頷いた。そして二人は、席を立つ。

「それでは、我々はそろそろおいとまさせていただきます」

「じゃあな」

「ありがとうございます」

席を立った二人を見送ったあたしは、空いたパイプ椅子に腰をかける。

「まったく、あの二人が揃うと騒がしいですね」

——ありがとうございますけど。

主治医の先生が夜の診察に来る前に、持ってきてくれた差し入れを片付けていると、突然、振動音が響いた。ベッドに置いてある、自分のスマホを見る。

「あたしのじゃない、と言うことは……」

宮瀬さんの所持品が保管してある箱の中の携帯電話を取り出す。振動音と一緒に、着信を知らせるランプが点滅していた。

「勝手に出たら、不味いっすよね」

そう思いながらも、大切な用件かもしれないと思って見たディスプレイ

レイ上に表示されている発信者の名前は聞き覚えがあった。

「あつ！ この人！ すみません、出ます」

眠る持ち主に断りを入れて、通話ボタンを押す。

『Hey, Sho!』

受話口から聞こえてきたのは、英語の挨拶。英会話にはあまり自信はないですけど、それでも話してみる。

「あの一」

『あれ？ ショウ、じゃない？』

「は、はい。あたしは、みやせ宮瀬さんの――」

『ああー、ショウの彼女だね！』

「えつと…… はい、そうです」

あたしは、少し躊躇して肯定した。

『うわあつ、本当に彼女なんだ！ 日本語でいいよー』

「あ、はい」

英語から流暢な日本語に変わった。非常にありがたい。

『オレは、ニール。キミは？』

「ともり友利と言います」

『トモリ…… だね。うん、覚えた。ところで、ショウは？』

「えつと……」

みやせ宮瀬さんの大学の親友ニールさんに今、起きている状況をありのまま説明。すると、動揺したような反応は見受けられず予想に反する反応が返ってきた。

『フム、なるほど。ケガの影響で今も昏睡状態が続いて、切り札のタイムリープ時空移動も、なぜか発動出来ない』

「はい……。命に別状はないのですが、いつ意識を取り戻すかわからなくて」

『それは、ちゃんと検査しないとわからないけど。』タイムリープ時空移動”を発動出来ない理由は、単純な理由だよ』

「えっ?」

『身体が大きなダメージを受けてるから、』タイムリープ共鳴”が無条件に防御に働いてるんだよ。だから、』タイムリープ時空移動”とか』タイムリープ略奪”みたいな、自分

が意図しない影響を与えるような能力を無力化してるんだろうね』  
考察を聞いて、呆氣にとられてしまう。

『どうしたの?』

「いえ、なんでもないっす」

『そう? じゃあオレも、すぐに日本へ行くから。入院先の病院の住所と名前を教えてください。』

「はい、えっと……」

ニールさんに、入院先の病院の名前と住所を伝える。

『オーケー! じゃあ病院で会おう。またね』

「あ、はい。失礼します……」

通話を終え、携帯電話を元の箱の中に戻す。

通話を終えた後も、ただただ呆氣にとられていた。あれほど疑問だったことが、たった一本の電話で。それもものの十分足らずのわずかな会話の中で、こんなにもあっさりとなんて出来てしまう解答を得られるとは思ってもなかったから。隼翼しゅんすけさんたちが命がけで作上げた組織に協力してくれている、科学者たちでさえも原因を特定出来ず、お手上げ状態だったのに。

「本物の天才とは聞いていましたけど」

新たな能力を創り出した中心人物。改めてすごい人たちなんだと思いが知らされた。

「あと、あなたの親友に彼女だと言ってしまいましたけど、いいっすよね?」

事実、前世では付き合っていた訳ですし。スマホの時計を見る。 ” Z H I E N D ” のライブ開始時刻が迫っていた。

今から数時間後、あたしたちは別れの時を迎えた。側に座って、手を重ねる。

「前は、乙坂おとしざかさんが倒れたから最後まで聴けませんでしたが。次の機会があったら、今度は、最後まで一緒に聴けるといいですね」  
重ねた手は、昨日よりも、ずっと温かかった。

\* \* \*

翌日のお昼過ぎ、来客がやって来た。

乙坂さんと隼翼さんの兄弟二人。

「これ、頼まれてたスマホケース」

「おおっ、ありがとうございます！」

代金を渡して、受け取ったスマホケースをさっそく装着。

「おおっ、かっけー！ 見てください、この『ZHEN』のロゴの造形美！」

「ああ、いいと思うよ。色は、その色で良かったよな？」

「はい、ありがとうございますっ」

前世と同じカラーのスマホケースをゲット出来て大満足。使う機会が一度しかなかったのも、これから本格的に使える機会が、とても楽しみです。

「ところで奈緒ちゃん、容態はどうなんだい？」

「あ、はい。順調に回復に向かっているそうです」

「確かに、一昨日の夜見た時よりも顔色が良くなってるみたいだ」

乙坂さん言う通り一昨日よりも昨日、昨日より今日の朝、目を追う度に血色が良くなっているように思えます。

「そうか。それは、よかったよ」

「あの、熊耳さんの方は？」

歩未ちゃんを送り届けたあの夜から、お見舞いへは行けていない。ずっと気にはなっていたんですけど、特にここ数日は、本当にいろいろなおことがあって……。

「熊耳も、もう心配ない。ヤツらに打たれた薬物も完全に抜けたから、もうすぐ退院出来る予定だよ」

「それは、なによりで。あ、そうだ。乙坂さん、『略奪』を使ってもらえませんか？」

「は？ どうして？」

「ちよっとした実験です。もし宮瀬さんの能力を奪うことが出来れば、『タイムリープ』を使って過去へ戻れるはずですよ」

「過去へ戻れる？ …… わかった、やってみる」

乙坂おとさかさんは、ベッドで眠る宮瀬みやせさんに顔を向けた。そして、  
“略奪”を使う。

「あれ？」

「有宇ゆう、どうした？」

「ダメだ、乗り移れない……………」

「——なに!？」

「やはり、奪えませんでしたか」

「どう言うことなんだい？ 奈緒なおちゃん」

昨日聞いたニールさんの推察を、二人に話した。

「……………なるほど。確かに、それなら辻褃は合う。精神攻撃は完全に無力化出来ると言っていたけど、まさか無意識下の状態においても有効だったなんて。けどこれで、有宇ゆうが“時空移動”タイムリープ出来ない謎が解けたな」

「能力で無力化されていたから僕的能力は、宮瀬みやせに通じなかったのか……………」

「結局、自然に目を覚ますのを待つしかないワケか」

「兄さん」

「分かってるよ、有宇ゆう」

二人のやり取りが、少し気になった。

これは、新たに問題が生じているような感じがしますね。

「ん？ 診察の時間かい？」

「いえ、先ほど終わったばかりです」

「なにか、あつたんですか？」と隼翼しゆんすけさんたちに訊ねようと思ったところで、病室のドアがノックされた。それもなんだか、とてもリズムカルに。

二人に断りを入れてから対応する。ドアを開けた先に居たのは、ダークブラウンの髪に鮮やかなブルーの瞳を持ち。スタイリッシュにスーツを着こなしている、あたしより少し年上の青年。彼はあたしを見るなり、とても爽やかな笑顔を見せた。

「やあ！ キミが、トモリだね？」

「はい、そうです。ニールさん……………ですよね？」

「うん、ニール・サンティ。よろしく」

「友利奈緒ともりなおです。よろしくお願いします」

お互いに自己紹介を済ませたあたしたちは、握手を交わして、病室へ入った。

「誰だったんだ？ 話し込んでいたみたいだけど…… って、外国人！」

「外国……？」

ニールさんを見て、乙坂おとさかさんは驚き。隼翼しゅんすけさんは、警戒心を強めた。おそらく海外のテロリストたちを連想したんでしょう。二人の誤解を解くため説明する。

「この方は、ニールさん。宮瀬みやせさんの大学時代の親友です」

「宮瀬みやせの親友……？ それって——」

「そうです。この方が、タイムリープ“時空移動”を使用出来ない原因究明をしてくれた方です」

「そうか…… じゃあ敵じゃないんだな？」

「もちろん。むしろ同士だね、目的は同じだから」

「日本語?！」

とても流暢な日本語にまた驚く乙坂おとさかさんとは対照的に、隼翼しゅんすけさんは冷静に訊ねる。

「翻訳系の能力か？」

「違うよ。オレ、能力者じゃないから」

「自前なのか。日本語上手いな」

「ありがとう。さて——」

お礼を言ったニールさんは、持っていたスーツケースに目を落とし

た。  
「いろいろ話したいこともあるだろうけど、さっそく始めていいかな？」

「なにをするんだ？」

「シヨウの検査だよ」

スーツケースからいくつかの機器を取り出し、備え付けのテーブルに並べていく。

「本当に起きないね」

「もう二週間以上になります……」

「そんなに心配しなくて大丈夫だよ。『共鳴』の時は、半年近く生死の境を彷徨い続けていたから。何度も心肺停止寸前まで行ったあの時と比べたら血色も、呼吸も調ってる」

新たな能力を身につけるため命まで賭した、過酷な日々。

今の容態と比べたら、大したことではないのかもしれないかも。でも

「あたしは、心配なんです……」

「そっか。ゴメンね」

申し訳なきように謝罪したニールさんは、宮瀬みやせさんの検査を始めた。専用の器具で指先から採血をした血液を容器に移し、小型の遠心分離機にセット。待つ間、聴診器を胸に当て目をつむり心音を聞いている。それにしても――。

「こんな物よく持ち出せましたね」

「コレだね」

渡された用紙に書かれている文書は当然、すべて英語なので部分的にしか理解は出来ませんでした。これらの器具の持ち出し許可証であることは分かった。

「これは……州知事の国外持ち出し許可証ですか？」

「うん、そうだよ」

「すごい権限つすね」

「もちろん偽造だよ。IDとパスポートもね」

「とんでもない人だな！」

「俺は、見えてないから知らないからな……？」

啞然として、言葉も出ない。

隼翼しゅんすけは、盲目を言い訳に知らないを決め込んで。乙坂おとさかさんじゃないっすけど、あなたの親友は、本当にとんでもない人つすね。こんなこと普通しないし、と言うか出来ないです。そういうしている間に、ニールさんによる検査が終わった。

「うーん……」

「あの、もしかしてなにか問題があるですか……？」  
「うん、ちよつとね」

主治医の先生は大丈夫と言っていましたけど、生死を彷徨う様を間近で見えてきた人の言葉に、とてつもない不安な気持ちが込み上げて来る。

「どうにか出来ないんですか……？」

「あるよ。キミにしか出来ないことが——ね」

「あたしにしか出来ないこと……」

「そう。トモリだけが出来ること。手を握って、祈って」

「手を握って、祈る……」

もう、祈ることしか出来ないほどまで深刻な状況なのでしょう  
か……。

「ちやんと心から祈って。じゃあオレたちは、外に行くよ。いろいろ話したいことがあるんだ。キミも、だよね？」

「…… ああ、俺もすっかり話したいと思っていた。有宇、肩を貸してくれ」

「あ、うん、じゃあな……」

三人は静かに病室を出ていった。

あたしはベッドの横に膝をついて、宮瀬みやせさんの手を両手で包み込むようにして握る。

そして、目を閉じて祈る。心から——。

どれくらい時間が経っただろう。

握っていた手に、ほんのわずかに違う感触が伝わった。

「あつ……」

その突然の異変に目を開けて、確かめる。

ベッドで眠っていた彼の呼吸が変わり、ゆっくりとまぶたを開いた。突然のことに言葉が出てこない。眩しそうに細めて、ゆっくり動かしていた目と合った。

「な——と、友利ともりさん……」

「——はいっ」

声が聞けた。かすれて聞き取りづらい声だった。

でも、確かに聞いた。ずっと聞きたかった、あの人の声を――。

「…… ケガは…… 平気、ですか……？」

「あたしのことより、自分の心配をしてください……」

右手はしっかりと握って、彼の温もりと優しさを感じながら、左手で  
ナーズコールを押した。

## Episode 1 く甘えられる場所く

ナースコールで駆けつけた主治医による、名前などの簡単な受け答えで特に意識に問題がないことが確認され、最後に現在の体調を訊かれた。

「身体の方は、いかがですか？」

「大丈夫です」

鋭利なナイフで背中を刺され、緊急手術を受けてからまだ二週間。当然ながら、負った傷は癒えていない。声を発するだけでも、患部に激しい痛みが走る。ただ、麻酔のおかげで耐えられないほどの激痛ではないし、指先の感覚もある。神経系統には問題なさそう。不幸中の幸いだらう。

「今のところ、後遺症もなさそうだな。でも、意識が戻ったとはいえ、容態が急変する可能性はゼロじゃない」

「何かあったら、ナースコールで知らせて。すぐに駆けつけるわ」

「はい、ありがとうございます」

主治医と看護師の言葉に答えたのは俺ではなく、奈緒<sup>な お</sup>。二人は、どこか微笑ましそうな感じに小さく笑う。詳しい検査は後日実施することに決まり、二人は病室を出て行った。

「あ、そのまま横になってください」

体を起こそうとしたところを制止され、ややズレた掛け布団を丁寧に掛け直してくれた彼女は、ベッド脇のパイプ椅子に腰を下ろす。

「ありがとうございます」

「いえ」

そして、なぜか訪れる沈黙。

病室の冷房が効き過ぎているのではないかと疑ってしまいそうなほど、夏なのにまるで秋のようなひんやり冷たい空気が、俺たちの間に漂っている。このどことなく気まずい空気を払拭するため、改めてケガの具合を訊ねる。

「ケガは、大丈夫ですか？」

「この通り、もう平気です。あなたが、身を呈して守ってくれたおかげ

で大事に至りませんでした。ありがとうございました」

「それは、よかったです」

——よかった、本当に……。

あの場から無事に救い出せた、それだけで十分。

「あ、そうだ。熊耳<sup>くまがみ</sup>さんも、この病院に入院しているんすよ。もうすぐ退院出来るそうです」

「そうなんです。あの、ところで、コレは？」

目を覚ましてから、ずっと気になっていたこと。俺が今、横になっているベッドと隙間なく、ぴつたりと横着けされている簡易式のベッドについて。簡易ベッドの枕元のカゴの中には、女性物の小物や着替えらしき物が、綺麗に整頓して収納されている。

「看病のためです」

「ずっと、看病してくれていたんですか？」

「はい。ま、ここで寝泊まりするようになったのは、ここ数日ですけど」

そして、ずっと目を細めた。

「何か問題がありますか？」

季節が、秋から冬へと急速に移り変わった。

有無を言わさない威圧感を放ち、若干不機嫌そうな声色。まだ起きたばかりの頭をフル稼働させて心当たりを探してみても、これといった理由は思い浮かばない。

正解を導き出そうと思考を巡らせていると、タイミングよく助け船が来てくれた。病室のドアをリズムカルにノックする音。この仕方のノックをする人物に心当たりがある。「どうぞ」と返事をする、思った通りの人物が姿を現した。

「やあ、シヨウ。無事に目覚めたんだね」

「ニール。どうして、日本<sup>こに</sup>に？」

「彼女から、刃物で刺されて意識不明の重体だって聞いて、緊急来日したんだよ」

「すみません、無断で電話に出ちやいました。知らせた方がいいと思つて」

「いえ、構いませんよ。出てくれて助かりました」

「そうですか？ でしたら、よかったです」

奈緒なおの表情が和らいだ。

「そういうこと。んで、本命はこれ」

「これは——」

渡されたのは、一冊のファイル。

「例の検査結果」

帰国前のヘリの中で、変化があると言っていた『共鳴』についての詳しい検査内容の報告書。

「じゃあオレは、これで」

「帰国するのか？」

「ううん。今から、シユンスケたちの組織の科学者と面会することになったんだ。たぶん、しばらく滞在することになると思う」

どうやら、俺がアメリカで作ったプレゼン用の資料は必要なくなりそうだ。だけど、目的だった隼翼しゅんすけが束ねる組織と協力関係を築けるのなら些細なこと。これでまた一歩、『救済』への道が近づく。

「外に車を待たせてるから行くね。じゃあトモリ、シヨウのことは任せたよ」

「はい、お任せください。責任を持って安静にさせますので、ご安心を」

奈緒なおの返事を聞いたニールは「じゃあ、またね！」と、とても無駄に爽やかなスマイルを見せて去って行った。さてと——。

「ダメです」

広げようとしたファイルを取り上げられてしまう。

「まだ起きたばかりなんです。安静にしてください」

「もう大丈夫ですよ。痛み止めも効いていますし」

「ダメです。ファイルは逃げません、いつでも読めます。ですので今は、ゆっくり休んでください」

手を伸ばしても届かない位置にファイルを置くと、病室のカーテンを閉めた。病室内を明るく照らしていた夏の日差しが遮られて、少しだけ暗くなる。窓辺から戻った彼女は、ベッド脇のパイプ椅子に座

り、スマホを取り出す。

「これでよし、と。意識が戻ったこととお見舞いは明日以降にしてくださいと連絡しておきました。これで今日は、誰も来ません。ゆっくり休んでください」

と言われても、さつきまで眠っていたのだから眠気はない。

「眠れませんか？」

「ずっと寝ていたようなものですから」

「それもそっか。んー、あ、そうだ」

連絡をした後ポケットにしまったスマホを再び取り出した。

「こういう時は、音楽を聴くと眠れます。静かなバラード曲にしましょう」

スマホから静かな曲調の音楽が流れる。

ZHジIEエンNDドの「Live for You」バラードのラブソング。

ボーカルのサラ・シエーンの澄んだ歌声とバンドの洗礼された楽曲に合わせて、彼女は体を小さく左右に揺らしてリズムを取り、上機嫌で鼻歌を歌う。

心地良い歌声を目を閉じて聴いていると、いつの間にか眠りについていた。

翌朝、朝日が登り始める前に目を覚ました俺は、昨日渡された例にファイルに目を通してた。記載されているニールの見解は、まったく予想していない内容だった。

「『タイムリープ時空移動』時において、『継承』と『共鳴』の無意識下での同時発動と、『タイムリープ時空移動』の発動が重なったことにより能力に変化をもたらした。心を繋ぐ能力か。だけど——」

すぐ隣に居る、奈緒なほに目を向ける。彼女はファイルを持っている俺の右手の反対側、左腕を抱きかかえるようにして小さく寝息を立てていた。良い夢を見ているのか、奈緒なほの寝顔はとても穏やかで、ほんのりと微笑んでいるように見えた。

『——未来で。あたしとあなたの間になんかあったんですか……？』  
帰国前に聞かれた言葉が脳裏に浮かんだ。

「覚えてないんだよね？」

ファイル置いて、そつと頭を撫でる。

少しウェーブのかかった細くて柔らかい艶やかな髪の毛の感触が、手のひらに伝わる。撫でられてくすぐったかったのか、彼女は少し身じろぎをして、また小さな寝息を立て始めた。

起こさないように注意して、静かにファイルに目を戻す。

しばらくして、日の出の時間を迎え、清潔感のある真っ白なカーテンの隙間から射し込んだまばゆい光が、病室を明るく照らした。

夏の朝、早い朝。枕元に置かれたスマホのアラームが鳴る。その音で、彼女はゆっくりと重そうにまぶたを開いた。

「ん、んう……」

「おはようございます」

「んー？ ん？ はっ!？」

腕に抱きついていることに気付いて、慌てて離れた。そして、なにげともなかったかのようにベッドの上で、ちよこんと座り直す。

「おはようございます。実は最近、抱き枕にこつてましてつい抱きついちゃったんですよー。はっはっはっ」

黙ったまま見ていると、訴えるような顔を向けてきた。

「なんか反応してくださいよ、気まずいじゃないっすか」

「朝ご飯、行きましようか？」

「そうしましよう」

「外で待ってますね」

着替えをするであろう奈緒なほにそう伝え、立ち上がろうとしたところを制止された。

「いえ、大丈夫っす。少しの間後ろを向いていただければ」

「それは、さすがに——」

前世ならそれでもいい。けど今は、あの頃の関係はすべてリセットされてるわけで。

「ずっと、ここ着替えてましたのでお構いなく」

「そうだったんですか？」

「そうっす。と言うことですので、夏の青空でも見ていてください。」

それとも、あたしが着替えているところを見たいんですか？」

ベッドの上を四つんばいで近づいて来て、やや上目遣いだからかうような表情を浮かべる。俺は、すつと反対側を向いた。なにやら背中に刺すような視線を感じた気がしたけど、きつと気のせいだろうと言いついて聞かせて、冷静を保つためファイルに目を戻す。

「お待たせしましたー」

その言葉に振り向くと、星ノ海学園の夏の制服に袖を通した彼女が立っていた。なんとなく見入ってしまう。

「どうしたんですか？」

不思議そうに、小さく首をかしげた。

「あ、いえ、なんだか懐かしい気がして」

「うつわあ、もしかして制服フェチなんすか？」

からかうように「ひくな」と、笑顔を見せてくれた。笑顔を見たのも久しぶりな気がする。ベッドの手すりを掴んで起き上がる。

「大丈夫ですか？ 無理しないでください。今、車椅子を借りてきますので——」

慌てて病室のドアに手をかけた、奈緒を引き止める。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。多少強引にでも体を動かさないと良くなりませんから」

「ハア、では、手をお貸します。掴まってください」

素直にうなづいて、手を借りる。片手を壁に、もう片方の腕と腰を奈緒に支えてもらって、壁伝いにゆっくり歩き、早朝から経営をしている院内の食事処の空いている席に座る。

「食券を買ってききます。なににしますか？ って言うか、そもそも食べられますか？」

「消化の良い料理でしたら。量は少なめです。お願いしますか？」

「わかりました。では、少し待っていてください」

食券を買いに行ってくれた奈緒を待っていると、主治医の男性医師と女性看護師が入ってきた。どうやら二人も、ここで朝食のようだ。席についたまま会釈した俺に気がついた二人は、食券機の前を素通りして近寄って来た。

「もしかして、歩いてきたのか？」

「はい。手を借りてですけど」

「昨日の今日で。スゴい回復力だ」

「身体の調子は、どう？」

「おかげさまで。思っていたよりも軽いです」

「そう。それは、あの子のおかげよ」

看護師は、カウンター越しに店員と話している奈緒なおに顔を向けた。

「友利さんともり、ですか？」

「ええ、そう。血行を良くするために毎日マッサージをしていたわ。

リハビリ科の専門医の元を尋ねて、ケアの方法を一生懸命聞いて、関節の曲げ伸ばしとか、寝返りの頻度とか、本当にたくさんのことを聞いていたわ」

「そうだったんですか……」

「果報者だな。うらやましいよ」

「ふふっ、そうね」

「お待たせしましたー。あ、おはようございまーす」

おぼんを持って戻ってきた奈緒なおは、二人に挨拶する。二人も挨拶を返した。なりゆきで四人で朝食を食べることに。

「それは？ お粥っぽいけど？」

「そんなメニュー、ここにあつたかしら？」

「これは、お粥をフードプロセッサーにかけて流動食のようにしてもらったんです。これなら食べられるかと思ひまして。色が赤いのは、梅干しです」

カウンターで店員と話していた理由が判明した。

眠っていた間のマッサージのことも、この食事のことも、本当に支えられている。どうすれば返せるのだろうか。だけど奈緒なおのことだ、きっと必要ないって言うと思う。

「解せないわ」

今後の治療方針やリハビリについて話しながら朝食を食べていると突然、看護師はレンジで掬った麻婆豆腐を見つめて、やや不愉快げに呟いた。

「なにがっすか？」

「ああー…… 気にしなくていいよ。ただ好物がないだけだから」

「ここでも東京の病院でも、毎日のように要望書を投函しているのに一向に採用されないのは、どうしてなのかしら？」

「今食べてる、普通のがあるからだろ。ほら、これ入れて我慢しておけ」

一味唐辛子の入った容器を、看護師に差し出した。

「納得いかないわ」

不服そうな顔で言いながらも、一味唐辛子を麻婆豆腐にこれでもかと振りかける看護師の姿に、日替わり定食のおかず箸を伸ばす主治医は、若干呆れ顔でタメ息をついた。

\* \* \*

「辛口が好きだったんですね、あの看護師さん」

「みたいですわ」

とんでもない量の一味唐辛子を入れて食べていた。あの辛さを再現して提供するのには、病院ではちよつと無理がありそうだ。

「ところであの二人、とても親しげに見えたんですけど。もしかして――」

言いかけたところで、奈緒の足が止まった。

車椅子に乗った熊耳くまがみと付き添いの目時めときが病室の前に居たからだ。

「よう」

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはよー。起きたばかりなのに、もう歩けるの？」

「はい。こうして支えてもらえればですけど。辛そうですね」

患者服の袖や裾から治療の跡が目に入る。

「生死の境を彷徨っていたお前よりは遥かに軽症だ」

「あの一、とりあえず中に入りましょう」

奈緒なおにうながされ、病室で話すことになった。

背中に負担が掛からないように壁の間に枕を挟み、ベッドで足を伸ばす形で座る。膝の上に布団をかけてくれた奈緒は、客人の目時にパイプ椅子を差し出し、自分は簡易ベッドを椅子の代わりにして座った。

「ふう〜ん」

「なんすか？」

「ちやんと看病してるんだって思ってるね」

「はい、とても助かっています」

「いえ、どういたしまして……」

少し照れくさそうに、奈緒は答えた。

「それで、なにか？」

俺は、二人に問いかける。

「お前が起きたって知らせが入ったから礼を言いに来たんだ。助かった、礼を言う」

車椅子に座ったまま、熊耳は深々と頭を下げた。

「いえいえ、どういたしまして」

「古木さんの家族も、無事に救出できたわ。宮瀬くんの予想通り見張りが複数人いたけど、対処も上手くいったわ」

「それはよかったです。それで、彼は？」

「今は、ご家族と一緒に組織の管理するマンションで生活している。

ご家族の方は前泊が、拉致・監禁されていた記憶を消してな」

「そうですか」

しかしどういふ訳か、二人の表情が曇った。

「ただ、古木さんは今回の件で相当な責任を感じている。責任を取って組織を抜ける、と自ら申し出てきた」

家族が人質に取られていたとは言え、最悪のタイミングでの裏切り。事なきを得たが、当然の判断とも言える。ただ、組織立ち上げの当初から尽力していたこともまた事実。世話になっていた熊耳たちは、そう簡単に割り切れないのだろう。

「説得はしたんだけどね。せめて退職金をつて、隼翼が言ったんだけど。それも、拒否してるの……」

「彼を呼んでももらえますか？」

「古木ふるぎさんを、か？」

「もちろん」

「それは……………」

傷口をえぐる行為の要求に、熊耳くまがみと目時めじきは躊躇ちゅうちゆしている。

「辞めるにしても筋を通せと伝えて下さい」

「わかった。目時めじき」

「…………… うん、伝えてくる」

目時めじきはやや重い足取りで、病室を出て行く。

「お茶を入れますね」

「ありがとうございます。お願いします」

重い空気を察した奈緒なおは、すぐに気を効かせてくれる。

「そうだ。あいつ、ニールって言ったか？」

「ニールが、どうかしましたか？」

「施設の研究室を私物化しているらしいぞ。組織の科学者たちも未知の実験に興味深々らしいが、いろいろ好き勝手にイジるから冷や汗もののだそうだ」

研究室に招かれたと言うことは無事に協力関係を築けたと言うことだ。プレゼンの資料は無駄になったけど、これで大幅な前進を期待できる。

「きつと新しいおもちゃを見つけたんですね。長くなりますよ」

「能力者のDNAサンプルのことだろ？」

「ご存じなんですか？」

「ああ。お前たちの研究の内容を聞いて、俺が頼んだんだからな。組織の科学者と会ってってくれって」

「それでしたか」

「お待たせしました。どうぞー」

用意してくれた麦茶をいただき、話題を世間話に変えた。

「もうすぐ退院って聞きましたけど、いつつすか？」

「検査結果に問題がなければ今日の午後にも退院できる。菌も入れたし、入院しても爪はすぐに生えないからな」

「うわあ、生々しいっすね〜」

奈緒が、若干引いた。

「施設にも医務室は完備されているから今後は、そっちでリハビリを始める予定だ。お前は、どうする？ 転院を希望するなら、話しを通しておくぞ」

「主治医と相談して、ですね」

「それもそうだな」

コンツコンツとドアをノックする音が響く。おそらく古木に連絡し終えた目時が、戻って来たのだろう。

「どうぞ」

ドアへ向かって声をかける。予想通り目時が、姿を見せた。そして、予想外の人物が彼女の後ろに立っていた。呼んでくれと頼んだ、古木その人だ。以前見た時よりも、やつれた印象を持った。心身ともに相当参っていることは容易くに想像出来る。

「早いですね」

「この病院まで、古木さんに送ってもらったの」

「ああー、そうだったんですね」

当人はというと、黙ったままうつむいている。

「古木さん」

「——すまない！」

声をかけると、深々と頭を下げて、いきなり謝罪の言葉を口にした。

「とりあえず、顔を上げてください」

うながしても顔を上げる気配はない。

「目時さんから聞きました。ご家族が無事でよかったですね。それで、どうするつもりなんですか？」

「……組織は抜けるつもりだ。それだけのことをしでかした。責任は取る……」

「退職金を拒否してるらしいですね。せっかく助け出した家族を路頭に迷わすつもりですか？」

「お、おいっ！」

古木は顔を上げ、熊耳は声を荒げる。

俺は、構わずに話を続けた。

「組織を辞めるといふ判断は正しいと思いますよ。組織存続のためにも、家族の安全のためにも。そして何より、あなた自身のためにも最善の判断だと思えます。ですが——」

「……貯蓄はある」

言い終わる前に、絞り出すように言った。

「限りはあるでしょう。所属しているのは、裏世界の組織です。まともな企業ではありません。失業保険は下りませんよ。友利さん、携帯を取つてもらえますか？」

所持品の入った箱から携帯を取り出して、手渡してくれた。

「はい、どうぞぞー」

「ありがとうございます」

携帯を開き、発信履歴から目的の名前を選択して、通話ボタンを押す。数回のコールで繋がった。

「あ、坂本さん。宮瀬です」

『宮瀬さん、ご無沙汰ですね』

電話の相手は、鼻屑にしている証券会社の坂本さん。

「面倒をお願いしたい人がいるんですが」

『どう言った内容で？』

「生活面の方で。運転が出来る付き人を探していましたよね？」

『わかりましたー、お伝えしておきます。お任せください！』

「お願いします」

通話を切る。携帯を置いて、ベッド脇に置いてあるメモ帳を取り、氏名、住所、電話番号と一筆を添える。

「これを——」

古木ふるぎに向かって、手を伸ばす。

彼は躊躇しながらも、メモを受け取った。

「その住所を訪ねてみてください。話は通してあります。そこなら、周囲に危険が及ぶことはありません」

仮に手を出そうものなら、情け容赦ない制裁が下る。

「どうして、( )まで……？」

「今回の件はもう、どうでもいいです。二人を助け出すことが出来ま  
したから」

熊耳くまがみは、うなづき。奈緒なおは、二人のお茶を用意してるから後ろ姿し  
か見えないけど、きつと彼女も同じだと思う。

「けどー。キミも瀕死の大ケガを負って——」

「それに関しては、完全に俺の判断ミスです」

これに関していえば、俺自身の油断が招いた結果。古木ふるぎは関係な  
い。美砂みさたちの協力もあって、相手の切り札だった半裸男も一方的に  
叩きのめしたし、油断して刺されたケガ以外は一切負っていない。こ  
の結果は戒めにして、今後の糧にすればいい、それだけのこと。

「ただ、あなたのつまらない意地でご家族に迷惑がかかるようなこと  
があれば、それは許しませんよ?」

「…… すまない」

「聞き飽きました。別の言葉でお願いします」

「別の?」

古木ふるぎは戸惑いながら、目時めじきと熊耳くまがみを見る。二人とも頷いて見せた。

「…… ありがとう」

そういつて、もう一度深く頭を下げた。

「どういたしました」

「お茶です、どうぞー」

この話は、これでおしまい。そう言うように奈緒なおは、二人に麦茶を  
差し出した。

「あつ、ありがとー。ちょうど喉が渴いていたの」

「悪いな」

「気を遣わせてしまって申し訳ない、いただきます」

奈緒なおはベッドに座り直し、麦茶を受け取った二人は、パイプ椅子に  
座わる。目時めじきは、創立メンバーの思い出話などを聞かせてくれた。そ  
の大半が、七野しちのの失敗談。試験前の勉強を四人で教えたとか、実は  
黒羽くろはねのファンだとか、そんな他愛のない話しだったけど、熊耳くまがみたちの  
思い出話に、最初は硬かった古木ふるぎも時折笑顔をのぞかせていた。

「そうだ、宮瀬みやせ。お前、麻雀打てるか?」

熊耳は、唐突に違う話題を振った。

「麻雀ですか？ いえ、やったことないです」

「そうか……」

熊耳だけではなく、目時めじきも少し残念そうな表情かおをしている。

——麻雀に、なにか特別な思い入れでもあるんだろうか？

「それが、なにか？」

「いや、なんでもない。そろそろ戻る。診察の時間だ」

誤魔化すように時計を見てそう言った。

「じゃあ私たちは戻るわね」

「ええ、お大事に」

「お前もな」

来たときと同じように目時めじきが熊耳くまがみの車椅子を引いて、三人は病室を出て行く。奈緒なおがこちらを向いた。

「騒がしかったっすね」

「そうですね」

そう言った彼女の表情かおは、どこか楽しそうに見えた。

「あの、これ」

ポケットから取り出したのは、見覚えのあるカードキー。

「あなたの家のカギです」

「渡米前に預けていたんですよね」

「はい。このカギ、使ってもいいですか？ あなたの着替えとかを用意したんですけど」

「あ、そうですね。お願いしてもいいですか？」

「はい、では今から行ってきますね」

「ひとつ持ってきていただきたい物があるんですけど、お願いできますか？」

「はい、なんででしょう？」

「ビジネスルームの机の引き出しの中にA4サイズの封筒があります。それを一緒に持ってきていただけますか？」

「わかりました、封筒ですね。持ってきます。では行ってきまーす」  
「お願いします。お気を付けて」

奈緒が病室を出て行って数十分後、扉をノックする音が聞こえた。  
「どうやら、また来客のようだ。」

「どうぞ」

「げんきく？」

目時が、再び姿を見せた。

「おかげさまで。何か忘れ物ですか？」

「うん、ちよつとね。座っていい？」

「どうぞ」

身体を起こすと、目時は「そのままでもいいわ」と掛け布団を直してくれた。

「ありがとうございます」

「ううん、いいのよ」

さつきと同じ椅子に座る。

「それで？」

「ちよつと訊きたいことがあって、奈緒ちゃんは？」

「今、東京へ戻りました。いろいろと準備をして来てくれるそうです」

「そう。なら、ちようどいいわ」

奈緒が居ると、話し辛い事なのだろうか。

「奈緒ちゃんに話さないの？」

——未来での関係のことだろう。

「今は、こんな状態ですから」

「そう、そうよね。じゃあ、皆にも口止めしておくわ」

「お願いします」

「うん、ところで」

目を少し細めて、顔を近づけてきた。

「どっちから告白したの？」

「えっと、俺です」

「ふうくん」

「やっぱり、男子からよねっ」と腕を組んで頷きながら言う。

「奈緒ちゃんのどこに惹かれたの？ やっぱり、可愛いところ？」

「うくん、どこですかね」

改めて訊かれると困る。いつの間にか自然と目で追っていた。本当に自覚したのは、仲村先生なかむらに問われたからだ。

\* \* \*

「宮瀬くん、ひとついい?」

「なんですか?」

「好きなの? 奈緒ちゃんのこと」

「ああ、はい、好きですよ」

「それは、女子の友だちとして? それとも、女の子として?」

仲村先生なかむらの問いかけに、真剣に考え込む。

——どっちなんだろう…。…。友だち? だけど、黒羽くろはねを想うのは少し違う感情だと思う。

彼女と出会い過ぎた、この短くも濃い日々を振り返る。

「たぶん——いえ、ひとりの女の子として、彼女に好意を寄せているんだと思います」

「そう。奈緒なおのちゃんの過去は知ってるの?」

「知っています。本人から聞きました」

「そう、きつと、あなたの想像以上に重いわよ、覚悟はあるかしら?」

仲村先生なかむらは、真つ直ぐな目で真剣に問いかけてきた。だから俺も、真剣に答える。

「もちろんです」

「そつ、頑張りなさいっ! 男の子!」

そう、激励を貰った。

「そうですね。強いて言えば、とても女の子らしいところですね」

「具体的には?」

妙に突っ込んで聞いてくる。

「優しくて、笑顔が可愛くて、あとピンクとか、可愛いファッションとか、小物が好きだったり——」

ひとつ、またひとつ上げていく。いろいろなことが次々と出てくる。

そして、最後に……………。

「あと、料理がすごく美味しいです」

「あっ！ 胃袋を掴まれたんだー」

「そうかもしれないですね」

「そっか……………」

「やっぱり、料理か……………」と、小さく呟くのが聞こえた。二人の内、どっちだろうか。

「ありがとう、参考になったわ。じゃあお大事に」

「いえ、頑張ってください」

目時は、めとぎ「何をよっ」と言い残して病室を出ていった。

告白した時は、向こう見ずで無茶をすることがある彼女を守りたいという思いが強かった。けど今は、隼翼しゅんすけが唯一信頼できる人であるのなら。俺は、彼女が唯一甘えられる場所でありたいと、心から想っている。だから早く退院して、安心させたい。

そして、その時は、もう一度ちゃんと——自分の言葉で、心からの想いを伝えようと思う。

## Episode 42 く救済計画く

時計が午後を回ってから数時間が経ち、荷物を取りに一旦東京へ帰った奈緒が、病室へ戻ってきた。

「お待たせしました、この封筒でよかったですか？」

「はい、ありがとうございます」

頼んでいた封筒を受け取る。帰国してから一度も開くことなく、一年以上の間ビジネスルームの机の引き出しの奥に入れたままになっていた封筒は、まるで時間が止まっていたかのように、色あせることもなく、制作当初のままの姿を保っていた。

少し感慨深く眺めていると、奈緒が興味津々と言わんばかりの顔をしていた。

「見ますか？」

「見ていいんですか？」

「どうぞ。あの時、見せるつもりだった物ですから」

元々、過去を話した時に信用してもおうと見せるつもりだった資料だから問題はない。持ってきてもらった理由は、もう一度初心に戻って、今回の失態の戒めとするため。

荷物の仕分けていた手を止めた奈緒は、手渡した封筒を開封して中の資料を取り出し、最初の文字を読み上げる。

『Relief plan.』直訳すると救済計画ですか。内容は…… 全文英語ですか」

「かいつまんで読みませうか？ 専門用語も多いですし」

「お願いしまーす」

資料に書かれている内容を、要約して話す。

1、特殊能力を「消去」できる能力を作り出す。  
2、数百人規模の「消去」の能力者を量産し、世界中に送り込み、全ての特殊能力者の特殊能力を「消去」する。

3、新たな能力者が現れる時に備え、常に「消去」の能力者を一定数維持する。

「なるほど、それで「救済」ですか」

「新たな能力を生み出すことに成功した時、一番最初に立てた実用性の無い無謀な計画です。今は、もつと具体的な計画になっていますけど本質的には、あまり変わりません」

「確かに、この計画を遂行するには課題が山積みです」

「中でも特に問題なのが、この計画では、新たに生まれる能力者を『救済』するために払う犠牲が大きすぎるんです」

「特殊能力を使うには、能力を使える思春期の子どもとの協力が必須なんです。それも何百と言う単位で」

「その通りです。更にこれには、『時空移動』の能力者の協力が不可欠なんです」

「『時空移動』と言うと、乙坂さんですね」

「ええ、計画の基盤となる『消去』を作り出すためには、長い年月と大量のDNAが必要なんです」

「能力者のDNA……」

「能力を発生を抑制する抗体が出来れば、最後のひとは解決出来るんですけどね」

実のところ、もうひとつ重要な問題がある。

『消去』の能力を作り出せたとしても、どんな制約と代償があるかわからないと言うことだ。命に関わるような能力である可能性も否定出来ない。結局のところ、俺たちが成そうとしている『救済計画』も、能力を使える思春期の協力者が居なければ成し遂げることは出来ない。能力者を、ただの実験道具としてしか見ていない科学者と変わらない、同じ穴の貉。救済を謳いながらこの様だ。情けない。

本来、特殊能力者を生み出す元凶である、75年周期で地球に接近し、発症原因の粒子を振り撒く『Charlottesville彗星』が、次に地球に接近するまでに対処法を確立することこそが、本当の意味での『救済』なのだから――。

「友利さん？」

「……この計画とは別として、大量に能力者の情報を得られるであろう方法があります」

「えっ……… 本当ですかっ？」

「…………… はい。ですが、スゴく危険な方法です」

「教えてください」

一瞬間を背け、やや躊躇しつつも方法を話してくれた。

「…………… あたしと兄が居た学校です」

「なるほど……………」

奈緒なおの言葉で、かつてのクラスメイトが検査を受けていたことを思い出した。

「あの学校には、あたしたち以外の生徒も検査を受けていたので、能力者のデータが数多く保管されていると思います。無謀でしたね、忘れてください」

「いいえ、考えもしなかった画期的な方法です」

大学では、情報を共有している組織の情報を頼りに実験を行ってきた。DNAサンプルはそれなりに手に入ったし、時間さえかければ、いずれは作り出せると思っていた。

そんな考えだった俺に、奈緒なおが教えてくれた方法は、正に青天の霹靂。そう、無いなら、有る場所から奪えばいい。こんな簡単なことに気が付かなかった。

保護組織でも、実験材料の消耗品としか見ていない組織でも、能力者を集めている機関や組織は日本だけではなく、世界中に数え切れないほど存在している。当然、能力者のDNAを採取して、保管しているに違いない。上手くいけば、とんでもない成果を得られる可能性がある。

「ありがとうございます。さっそく——」

「ダメです！ 危険過ぎます！」

潜入準備を進めるため、隼翼しゆんすけに連絡をしようと手を伸ばした先の携帯電話を、奈緒なおに奪い取られた。

「あの、返して——」

「…………… ダメです！」

携帯を抱きかかえるようにして、手放そうとしてくれない。

「友利さん？」

「…………… いやです、絶対に返しません。もう危険なことは欲しくない

んです、あんな大ケガまでして……。あたし、気が気じゃありませんでした。それなのに、やっと起きてくれたのに、どうして……。どうして、自分の身体の心配してくれないんですか……。？」

震えるような小さな声、それでも彼女の悲痛な想いは痛いほど伝わってくる。だけど、だからこそ、俺は——成し遂げなければならぬ。

「特殊能力者が犠牲にならない世界。それが大切な人たちを、一希きんを、あなたの未来を守ることに繋がるのなら、俺は迷わない」

「……ズルいです、言わなければよかったです。守ってもらっても、そのせいでケガをされたら、どう思うか分かりますか？ 守ってもらった方は、自分のせいだって思っただけ辛いんですよ……」

答えられなかった。どう答えればいいのか、分からなかった。だから代わりに、身体を起こして、奈緒の頭にそっと手を乗せる。

「大丈夫、悲しませるようなことしません。信じてください」

「……信じたいです」

「それなら——」

うつむいたまま顔を上げてくれない彼女に、ある提案をすると顔を上げてくれた。

「……本当ですか？」

大きな瞳が潤んでいた。こんな顔を、想いをさせてしまっていることに、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「はい」

「わかりました、考えておきます。絶対つすよ？」

「はい、必ず守ります」

信じてもらえたのか、奈緒は少し笑顔を見せてくれた。

隼翼へ取り次いでもらうため、携帯の電話帳を開いて、彼の弟の乙坂に電話をかけた。

\* \* \*

「潜入って、本気かよ!？」

隼翼しゅんすけの付き添いで一緒に来た七野しちのが、大声をあげた。

「もちろん」

「けど、危険じゃないのか?」

七野しちのと同じく一緒に来た乙坂おとさかは、作戦に疑問を呈して。壁に寄りかかって腕を組んでいる隼翼しゅんすけは、どこか難しい顔をしている。

「リスクはあります。ですが——」

「ハイリスクだが、成功した場合のリターンは大きい。勝算は?」

作戦意義を説明するまでもなく、隼翼しゅんすけは作戦根幹へと話しを持つていった。

「なければやりませんよ」

「具体的には、どうするんだ?」

「当然のことながら、まずは情報収集です」

潜入するにあたって調べて欲しい具体的なことを伝える。

「お願いできますか?」

「なんだか地味だな」

頭の後ろで手を組んで、七野しちのはつまらなそうに言った。

「情報収集ですから、バレたら困ります」

「問題は誰がやるか、だな」

隼翼しゅんすけが呟いた。

「高城たかしやうさんに頼もうと思っています。彼は、特殊能力者の調査で情報収集の経験もありますし。いざと言う時には、『瞬間移動』で離脱も出来ます」

「なるほど、うってつけだな。けど、少し難しいかもしれない……」

腕を組んだまま隼翼しゅんすけは、重苦しい表情を見せた。乙坂おとさかも口を結んで、隼翼しゅんすけと同じような顔をしている。

「何か、問題があるんですか?」

「今、星ノ海学園の生徒会は高城たかしやうひとりなんだよ。柚咲ゆさは、アイドル活動に復帰したし。組織の施設で生活している僕は、もう登校出来ないから手伝えない」

「そう言うことだ。能力者の調査の方も今は、ストップさせている。ゆりさん……英語教諭の仲村先生なかもとが、気にかけて手伝ってくれて

はいるが限界がある」

そうか、俺も、奈緒も休学中だから、その分の負担が全部高城に集中してしまっているのか。頭が回っていなかった。

「友利が、復学すればいいんじゃないか？」 宮瀬は、もう起きた訳だし」

「奈緒ちゃんは、退学届けを提出するまでの覚悟をしたんだぞ。宮瀬が退院するまでは、復学するとは思えない」

隼翼の言う通り、簡単に復学してくれるとは思えない。なら、俺に出来ることはひとつだ。

「明日、退院しようと思います」

「退院って、まだ起きて二日だろ。さすがに無茶だ」

「もう問題ないです。歩けますから」

「お前がそう言っても、主治医が許可してくれないだろう。傷口だつてまだ塞がっていないんだからな」

「あたしが、看病します」

病室の入り口から聴こえた声に、注目が集まる。

声の主は、歩未を連れて売店へ行つたはずの奈緒。

「友利？ 歩未は、どうしたんだ？」

「スマホを忘れたんです。歩未ちゃんは、休憩スペースのベンチで待っています」

ベッド脇にあるスマホを指差し、改めて続きを話し出した。

「あたしが、看病します」

「さすがに、それは……」

「看護師さんから、ケアの方法を教わっています。眠っている間の傷口の消毒や包帯の交換も、あたしがしていました」

「そこまで……」

予想外だった。まさか、そんなことまでしてくれていたとは思いませんでした。

「ですので、大丈夫です」

「ならいいんじゃないか？」 隼翼

「そうだな…… わかった。主治医に話してみよう……」

枕元のナースコールを押して、主治医と看護師を呼んだ。

「ダメだ、認めない」

予想通りの反応が返ってきた。

「人手不足なら、他の生徒を生徒会に入れればいい」

「星ノ海学園の生徒会は特殊ですので……」

「それは知っている。だが、この件とは別だ。俺は医者として、主治医として認められない」

奈緒の言葉を遮った主治医は、強い口調で突き放すように言い放った。奈緒は助けを求めるように看護師の方へ顔を向ける。

「そうね、今の状態での退院は難しいわ」

「そう言うことだ。話しは終わりだ」

そう言つて、主治医はひとり病室を出ていった。

「彼を責めないで。あなたたちの事情はわかってるわ。あなた、ひとり暮らしよね？」

看護師は、俺に問いかけた。

「はい」

「なら、なおさら認められないわ。容態が急変したらひとりでは対応できないでしょ？ 連絡してくれる人がいないもの」

「そう、ですね……」

「そう言うことよ」

看護師も病室を出て行く。

「見事に一蹴されたな。さて、どうする？」

「やつぱり、友利が戻るのが一番の方法だろ。全部が丸く収まる」

隼翼の問いかけに、七野がもつともな意見を言う。

「そうだな、それしかないか……」

俺は黙ったまま、看護師の言葉を思い返していた。彼女の言葉には別の意図が隠されていることに気がついた。そして、それに気づいたのは、俺だけではなかった。

「隼翼さん、お願いがあるんですけど」

「ん？ なんだい、奈緒ちゃん」

「あたしの部屋に、ベッドを用意していただきたいんです。お願い出

来ますか?」

「はあ…….?」

奈緒なおの話しに抜けた声を出したのは、乙坂おとさか。奈緒なおは構わずに、その理由を説明する。

「看護師さんが言ったのは、ひとり暮らしではダメと言うことです。ですので、不測の事態が起きた時に対処できる人が側に居れば良いということですよ。六本木から、東京の病院からでも通学には不便です」

「なるほどな。それで併設マンションの奈緒ちゃんの部屋にベッドを用意したいんだな」

「はい、あたしならケガの手当ても出来ますし。いざという時はすぐに連絡が出来ます。適任だと思います」

「そうだな、よし、わかった。七野しちの、業者の手配を手伝ってくれ」  
「ああ、わかった」

当人を無視して話しは進んでいった。さすがにそれは出来ないし一度は断ったが、けど他に方法がなくと「責任がありますので」と、彼女の固い意志に押しきられてしまった。

そして、翌日。主治医を説得して、毎日東京の病院へ通院することを条件に退院の許可をいただいた。

「お世話になりました」

「必ず毎日通院すること、いいな?」

「はい、大丈夫です。あたしが責任を持って連れてきます」

「頼みます」

「はい、お任せください」

「ありがとうございます」

二人で主治医と看護師に向けて頭を下げて、お礼を言う。

「お大事に。ゆりによろしくね」

「仲村先生なかむらのお知り合いなんですか?」

「学生時代からの友だちよ。私も、彼もね」

看護師が、主治医に顔を向けた。

「お前たちのことは、あいつから聞いている。まったく、あいつには昔か

ら振り回されてばかりだ」

大きなタメ息をついて愚痴を漏らした。でも、それは嫌な感じじやない。むしろ声は穏やかで、どこか懐かしむような感じだった。

「あら、あの頃のあなたたちは、とても楽しそうに見えたけど?」

「まあ…… そうだな、楽しかったよ。大変だったけどな」

「今度、詳しく聞かせてください」

「ええ、また今度ね。私たちも東京の病院に戻るから、よろしく伝えて」

「はい、分かりました。伝えておきます」

もう一度お礼を言ってから、隼翼しゆんすけの用意してくれた車に乗り込む。星ノ海学園の併設マンションへ向かって走り出した。病院から休憩を挟みつつ走ることも数時間で星ノ海学園併設マンションに到着。エントランスからエレベーターに乗り、松葉杖を使って廊下を歩いて、奈緒なおの部屋に着いた。

奈緒はカギを回して、ドアを開けた。

「どうぞー」

と言われても、ここに立つやはり躊躇してしまい足が進まない。

「ほら、早くしてください」

腕を取られ、半ば強引に玄関の中へ。

「…… お邪魔します」

「違います。しばらく一緒に生活です」

「えっと、じゃあ…… ただいま?」

なぜか疑問系になってしまった。

「はい、それでいいです。おかえりなさいませ。さあ上がってください」

先に部屋へ上がった奈緒なおが、振り返る。

「どうしたんですか?」

「あ、いえ、何でもないです」

「そうっすか? こっちでーす」

靴を脱いで部屋に上がり、奈緒なおの後をついて行く。

誰かに「ただいま」と言ったのも、「おかえり」と言ってもらえたの

も、  
いつ以来だろう。なんとなく、  
こそばゆい気持ちになった――。

## Episode 43 日記

退院翌日、星ノ海学園の制服に袖を通して、久しぶりの登校。通い慣れた通学路に少し懐かしさを覚えながら、奈緒と並んで、病院で借りた松葉杖をついてゆつくり歩いている。

「昨夜は、ちゃんと眠れましたか？」

「おかげさまで」

「そうっすか。それは、何よりで」

奈緒の部屋での寝泊まりは、病室での寝泊まりとはまた違った意味で戸惑ったけど。鎮痛剤と一緒に処方してくれた睡眠導入剤のおかげで、夜中に起きることもなく朝まで眠ることが出来た。けれど、彼女はと言うと、俺とは対照的に軽く目元をこすっている。

「眠れなかったんですか？」

「病院の枕に慣れ始めたところでしたので……」

短期間で何度も枕が変わって熟睡出来なかった、と。

本当にいろいろなことで負担をかけてしまっているのだと、改めて思い知らされて、申し訳ない気持ちになる。

「おはようございますー！」

背中からの突然の挨拶に、俺たちは同じタイミングで振り向いた。声の主は、高城。「おはようございます」と、挨拶を返す。

「先ずは、退院おめでとうございます。もうよろしいのですか？」

「この通りですよ」

「それは、何よりです」

「あたしも、今日から生徒会活動に復帰します。仕事を押しつける形になってしまって、ご迷惑をおかけしました」

「いいえ、お気になさらず。ゆさりんと二人きりの生徒会室で、夢の様な時間を満喫させていただきましたから！」

「ひくなっ！ と言いたいところですけど、迷惑ついでに頼みごとがあります」

「私に、頼みごとですか？ どんな用件でしょう？」

「詳しい話は、昼休みにします。生徒会室へ来てください」

通学路では話せない内容であると察した高城は、「了解いたしました」と真面目な顔でうなづいた。

そのまま三人で話をしながら通学路を歩き、五分もかからず正門に到着した。

教室へ向かう高城とは昇降口で別れ、俺と奈緒は職員室へ立ち寄り、担任に復学の報告をしたのち、生徒会の仕事を手伝ってくれていた仲村先生にもお礼の挨拶へ行く。

「ご心配、ご迷惑をおかけしました」

声を重ね、二人揃って頭を下げる。

「気にしないでいいわよ。ところで、奈緒ちゃん」

手招きして奈緒だけを呼び、二人でヒソヒソと話しだした。

「えっ？ まだなの？ 意外に奥手なのね」

「それは、あたしにではなく、あの人に言つてください」

奈緒が、こちらを見た。彼女と同じく仲村先生も、俺を見る。二人に、じとーつと冷ややかに見つめられ……。いや、奈緒の方は若干睨んでいるに近いのかもしれない視線だ。

「あの…… 何でしょうか？」

「はあ、こう言うことっす」

「罰な男子ねー」

「ほら、教室へ行きますよー。失礼しましたー」

腕を取られ、強引に180度向きを変えられ、軽く背中に手を添えられて、ドアの方へ強制連行されてしまう。

「あ、はい。仲村先生、失礼します」

「はいはい、まだ無理しちゃダメよ」

職員室を出て、教室へ向かう。階段は少し苦労したけど、手を借りて無事に上り切ることができ。約三週間振りに教室へ入った。松葉杖をつく俺の姿に、クラスメイトたちは何ごとか集まってくる。

「おーい、出席取るぞー。席付けー」

担任の登場で助かったけど。心配してくれる声や、ケガの理由を聞かれたりと、まるで動物園のパンダにでもなったような気分だった。

\* \* \*

午前の授業が終わり、昼休み。チャイムと同時に教室を出た俺たちは、生徒会室へ集まっている。芸能活動で朝は居なかつた黒羽も、昼前に登校して来た。

「はあく……」

生徒会長の席に座るやいなや深いタメ息をついた、奈緒。それを不思議に思った黒羽は、小さく首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「これを見てください」

生徒会長の席上に山積みになっている書類の束を軽く叩いて見せた。

「わあく、すごい量ですねー」

「高城が代わりに業務してくれたいえ、しばらく残業つすよ」

「わたしに、何かお手伝いできることありますか？」

「では、こっちの箱に入っている書類に判子を押してください。目印がありますので、そこに押してください」

「はいっ、わかりましたっ」

頼まれた書類にほんぽんと判子を押していた手を止めた黒羽は、判子を押した書類を見ながら奈緒に訊ねた。

「これって、どう言った内容の書類なんですか？」

「今多いのは、夏休み中の合宿の申請です。移動手段と宿泊先の確認、緊急時の連絡方法とか。中には部費だけでは賄いきれない部活もあるので、その辺りの調整も大変なんすよ」

「そうなんですかー。でも合宿って、なんだか楽しそうですねっ」

「生徒会に合宿はありませんよ」

「あ、そうなんですね……」

少し残念のそうに肩を落とした。

「さあ、手を動かしてください。お昼を食べる時間がなくなりますよ」

「あ、はい」

奈緒にうながされた黒羽は、再び判子を押す手を動かし。俺も、予

算編成の方を手伝う。作業を始めて十分ほどが経った頃、個人的に用事を頼んでいた高城たかしやうが、ビニール袋を両手に持って生徒会室へやって来た。

「お待たせいたしました！」

「ん？ この匂いは……」

「カレーですねっ！」

「その通りです！」

「もしかして、牛タンが乗ってるカレーっすかっ？」

「はい、その牛タンカレーです！」

「マジっすかっ、やったー！」

難しい顔で書類とにらめっこしていた、奈緒なおのテンションが上がった。

「そのカレーって、美味しいんですか？」

「それはもう。すぐに完売してしまう限定メニューですから！ 宮瀬みやせ

さんが、裏技で確保してくれていたんです」

頼んでいた個人的な用事は、このカレーを受け取って来て貰うこと。さすがに松葉杖をついた状態では、他の生徒の邪魔になつてしまつたため、高城たかしやうにお願いした。

「冷めないうちにいただきますしよう」

四人前のカレーを中央の大テーブルに並べる。作業していた奈緒なおも手を止め、こちらのテーブルに着く。

「いただきますっ」

「では、私も、ご相伴にお預かりいたします！」

「わたしも、いただいているんですか？」

「もちろんですよ。ちゃんと人数分頼んでおきましたから」

「ありがとうございますっ」

四人でカレーを食べながら、本題を切り出す。

「高城たかしやうさん、朝の件ですが」

「あ、はい。何でしょうか？」

教室から持ってきていた大きめの紙袋から、とある学校のパンフレットを取り出す。

「これは……以前、友利ともりさんが通っていた中高一貫校のパンフレットですか?」

「ええ、そうです。この学校の研究施設へ潜入し、研究データを奪おうと考えています」

「な、なんと! また無茶なことを考えますね……」

「そこで、高城たかしょうさんの力をお借りしたいんです」

「具体的には、何をすればよろしいのでしょうか?」

「学校の警備体制、関係者の出入り状況、校舎内での大まかな人の動きなどの偵察です。それと郵便物を入手していただきたいです」

「前者の方は出来ると思いますが、郵便物は……なかなか困難なミッションになりそうですね」

「そこで、これを用意しました」

パンフレット入れていたのと同じ紙袋から、スーツと白衣を取り出す。これは、奈緒なおが記憶していた研究員の服装を元に、隼翼しゅんすけに頼んで似たような物を用意して貰った。

「生徒手帳、お借り出来ますか?」

「生徒手帳ですか? どうぞ」

「どうも。これを……っと」

受け取った生徒手帳から顔写真を丁寧に剥がす。

「写真をどうするんですか?」

「まあ、見ててください」

パンフレットの校章と学校名の部分と、“空中浮遊”の能力者がスクープされたオカルト雑誌のバーコードをハサミで切り取る。

「友利ともりさん」

「牛タン、うつまっ! ん? なんすか?」

「のり、ありますか?」

「ちよつと待つてください。はい、どうぞー」

スプーンを置いて、生徒会長の席へ戻り、引き出しからのりを持ってきてくれた。

「ありがとうございます」

「何に使うんですか?」

「ん〜？」

黒羽も気になつたらしく、興味深そうに見ている。

切り取った校章と学校名、証明写真、雑誌のバーコードを適当な大きさの白紙の用紙に張り付ける。テキトーな偽名と役職を書き記し、名札ケースに入れ紐を通して完成。

「どうですか？ それっぽいでしょ」

「なんとっ！」

「わあ〜っ」

「でも、職員相手だとバレますよ？」

「そうですね。ですが、配達員くらいなら欺けます」

「なるほど……」

「配達時間を把握して、研究員のフリをして敷地外で郵便物を受け取って下さい」

「確かに、それなら出きるかもしれませんが。しかし——」

「どうしました？」

何か気になることがあるのだろうか？

「いえ、この『高松大宙』と言う偽名に妙な親近感が湧くと言いますか……」

「気のせいでしょう？ あと、超望遠レンズ搭載デジカメと定点観測用の三脚とビデオカメラ、眼鏡に装着出来る超小型ピンカメラ。それと撮影ポイントを印した地図です」

「あつ、最新型だー！ いいな〜」

機材の方に、奈緒が食いついた。

「了解いたしましたっ！」

「校舎の敷地へ近づく時は、常に監視カメラの死角で行動してください。それと危険と判断したら即刻『瞬間移動』で離脱してください」

「はい、お任せください。この手の調査は慣れていますので」

「休学のこととは生徒会の任務だと、あたしから伝えておきます。まあ、あと数日で夏休みですけど」

「ありがとうございます。では、このカレーを食べ終えたら、さっそく任務に取りかかります」

カレーを食べ終えた高城は、必要な荷物を持ち、奈緒が通っていた学校へと向かっていった。

「あたしたちも食べちゃいましょう。もう時間がないっす」「そうですね」

偵察の道具と一緒に持ってきたコーヒーを淹れながら答える。

「飲みますか？ 紅茶もありますけど」

「はい、いただきますっ」

「いただきますーす」

「めさめさおいしいのですーっ」

\* \* \*

午後の授業も無事に終わって放課後。

俺と奈緒は、二人で生徒会室で昼の続きをしていた。

「急ぎの用件は片付きましたね」

「はい。今日は、ここまでにしましょう」

処理し終えた書類を種類別にまとめて棚にしまう。

「では、病院へ行きますよう」

「一人で行けますよ」

「まだ松葉杖じゃないっすか。ほら、行きますよ」

有無を言わず、登校時と同じように並んで歩き、最寄り駅でバスに乗り換えて病院へ。

東京の病院に戻った主治医の診察を受け、駐車場まで向かえに来てくれていた施設の職員の車に乗り、隼翼たちの拠点特殊能力者保護施設へ向う。彼らがいつも居ると言うレクリエーションルームへ向かう途中の廊下で、前方から見知った少女が歩いてきた。

「あーっ！ 友利のお姉ちゃんと、宮瀬のお兄さんなのですー！」

「あ。歩未ちゃん」

「久しぶりですね、歩未さん」

「はい、お久しぶりでござる！——って、松葉杖っ!？」

ワンテンポ遅れて、俺が松葉杖についていることに驚いた。

「だ、大丈夫なのでしようかつ!？」

「大丈夫ですよ、お医者さんが大袈裟なんです」

「そうなんですか？」

「そうなんです」

笑って見せると、歩未も笑顔を見せてくれた。

「それは安心しましたー!」

「ねえ、歩未ちゃん。隼翼さんは、どこにいますか？」

膝を曲げて、奈緒は歩未に目線を合わせる。

「こつちなのですー!」

歩未に案内してもらい、隼翼の元へ。案内された先の部屋は、よく集まっていると言うレクリエーションルームではなく、前世で隼翼と初めて対面した部屋だった。

「隼翼お兄ちゃんっ」

「ん？ その声は、歩未だな。どうした？」

「友利お姉ちゃんと宮瀬お兄さんが来てくれたのですー」

「そうか、ありがとう。歩未、目時を呼んできてくれるかい？」

「はっ！ 了解でござるっ!」

ビシッと敬礼をした歩未は部屋を出て、目時を呼びに行く。

「ニールに、用事があるんだったな？」

「ええ、研究所ですよね？」

「ああ、目時が来たら案内する。座って待っていてくれ」

ソファアに座って待つこと五分足らず、目時と、車椅子に乗ったの熊耳が部屋に入ってきた。呼びに行ってくれた歩未の姿が見えないのは、夕食の用意をしているそうだ。

「研究所に用事があるんでしょ？ 行きましょう」

みんなで部屋に出て、施設の研究所へ向かう。

「ごうよ」

「おおく、すっげー! 撮っていいっすかつ？」

「ダメに決まってるだろ。外部に漏れたら困る」

「ちっ」

奈緒が、愛用のカメラを取り出して構えようとするも、熊耳に制止

され、軽く舌打ちを打った。

「宮瀬くんは、あまり驚かないのね」

「あ、いえ、驚いてますよ」

反応が薄い俺に、目時が訊いてきた。

ただ、人を探していたため研究所の方に目がいなかっただけで、改めて見渡して見ると、補助金で賄っていた大学の研究所よりも充実した設備だ。資金力の差を痛感させられる。

「ニールは、どこにいますか？」

「こつちだ」

熊耳が先導して、研究所内を案内してくれる。

大勢の科学者たちが作業をしている研究所の一番奥の扉が開く。部屋の中では、ニールと、責任者と思われる初老の男性が作業していた。

「やあ、シヨウウ！」

「ニール、頼みたいことがあるんだ」

「オツケー、ちよつと待っててね」

ニールの作業に区切りがつくのを待っている間、隼翼から初老の研究員を紹介してもらう。

「ここの責任者の堤内さんだ。こつちは、宮瀬」

「宮瀬です」

「堤内です。よろしく」

握手を交わし、ここの研究内容を簡単に説明してもらった。事前に聞いていた通り、主に特殊能力を消す研究をしているようだ。

「お待たせー。で、なに？」

「用意して欲しい物があるんだ、頼めるか？」

用意して欲しい道具を書き起こしたリストを渡す。

「美術品でもかっ攫うの？」

「いや、他の研究所から研究データとDNAを奪う」

「何それ、面白そう。オレも行っていい？」

「研究はいいのか？」

「うーん、こつちも今、面白いところだし。わかった、準備しておくよ」

「ありがとう。頼むな」

「了解、他にも役立ちそうな物を用意しておく。クマガミ、あとでまた、まーじゃんだっけ？ やろうね」

「あ、ああ……」

なんだか、歯切れの悪い返事だ。

「麻雀？」

「ここには、一通りの娯楽は揃ってるんだけど。私たちは、ボードゲームをすることが多いの」

「結構快適なんすね」

「まあね。だけど、熊耳くまがみが負け込むのなんて初めてみたわ。しかも素人を相手に」

「ほんと、驚いたぞ」

「へえ、強いんすね」

隼翼しゆんすけたちの話しですべてを察した俺は、研究の邪魔になると言っ  
て研究所を出ることをうながした。

その後、歩未あゆみが、いつか約束した夕食をごちそうしてくれろと言う  
ことで、乙坂おとさか兄妹が生活している部屋へ招かれることになった。

「いらっしやいませなのですー」

「こんばんは、お邪魔します」

「久しぶり……でもないか」

「二日ぶりですね」

軽く笑い合って、家庭的な料理が用意されている席に着き、歩未あゆみ  
料理をご相伴にあずかる。

「いかがでしょうか……？」

少し不安そうに味の感想を求めてくる。

「すっごくおいしいよっー」

「本当に美味しいです。こんな美味しい料理を毎日食べられるなん  
て、乙坂おとさかさんが羨ましいですよ」

「えへへ、よかったのですっ。いっぱい食べてくださいっー」

美味しく料理をいただいている間、乙坂おとさかは、ずっと何かを訴えたそ  
うな顔をしていたような気がしたけど、きつと気のせいだろう。

「ごこの生活には、もう慣れましたか？」

「ああ。ちよつと退屈なこともあるけど、特に不便もないし。みんな、よくしてくれる」

「有宇お兄ちゃん、いつも難しいゲームで遊んでばかりでちんぷんかんぷんなのですー…………。あゆにも出来るゲームで遊んで欲しいのですー！」

「ああ、麻雀でしたか？」

「兄さんたちがよくやっているから、僕は付き合ってるだけだよ。つて言うか、お前の知り合い強すぎだろ？　メンバー最強の熊耳くまがみさんが、東場トウで飛ばされたぞ？　みんなで対抗策を練っても、悪魔に魂を売ったみたいなの鬼引きをしてくるんだ」

「ほら、またーっ。こんな風にいつも置いてけぼりなのですー」

「わかったわかった。兄さんと話して、今度、どこかへ遊びに行けるように頼んでみるよ」

「えっ、ほんとっ？　あゆ、プールに行きたいでござるっ」

「プールか…………。夏だもんな」

服の袖を軽く引つ張つて来た奈緒なおが、話で盛り上がっている兄妹の邪魔にならないように小声で話しかけてきた。

「どうしたんですか？　さつきから難しい顔してますよ」

「イカサマですよ」

「ん？　イカサマですか？」

「麻雀の話です。おそらく何かしらの細工を施しているんです」

「…………。そんなこと出来るんですか？」

「ニールの偽造の腕は、超一流の鑑定士を欺くほどの腕前ですから。まともに勝負したら、絶対に勝てません」

「うわあ…………」

対策を練つても無駄と知り、熊耳くまがみたちに同情していた奈緒なおに、歩未あゆみが笑顔で話を振った。

「お二人も一緒に…………。友利お姉ちゃん？」

「どうしたんだ？」

「いえ、何でもないっす。プールの話でしたね。もちろんいいです

よ」

歩末あゆみにお礼と、隼翼しゅんすけたちにも挨拶をして、行きと同じ職員に、マンションの最寄り駅まで車で送ってもらう。

リハビリがてら、併設マンションまでの道を歩いて帰る。

「あなたなら勝てますか？」

「麻雀ですか？」

「はい」

「正直、勝てる気はしないですね」

「そうですか……」

その声は、少し残念そうに聞こえた。

「友利ともりさんは『格闘家を倒せ』と言われたら勝つ自信はありますか？

特殊能力はなしで」

「無理っす」

即答。

「でしようね。けど、ニールは勝ちます」

「あの人、そんなに強いんですか？」

「迷わずに銃口を向けるでしようね」

「——えっ？」

「仮に短距離の世界記録保持者が相手だったら、事故に見せかけて足を潰します。コース上にピアノ線を張るとか、スターターに細工するとか」

予想外の回答に啞然としている。

「卑怯だと思えますよね。でも、そう言うことなんです。麻雀も一緒、麻雀を麻雀で勝負する時点で負けなんです」

「……………」

「策略の立て方などは全てニールの戦術を見て学んだんです。言わば、師匠みたいなものですね」

「何か、わかった気がします」

何やら納得しているようだった。

併設のマンションに到着、彼女の部屋に上がる。あまり傷口が濡れないように注意してシャワーを浴び、リビングに入る。

「いつもすみません」

「気にしないでください。この背中キズが、あたしを守ってくれたんですから」

自分では手が届かない傷口の消毒してくれる。

「はい、終わりました。もう上着を着ていいですよ」

「ありがとうございます。ところで気になっていたんですけど、さっきカメラで何を撮っていたんですか?」

「あれっすか? まあ、日記みたいなものです」

「どんなことを——」

「秘密です」

ピシヤリと拒否され、結局撮っていた動画は教えてもらえなかった。

翌日から俺は、本格的にリハビリを開始した。

例の計画を遂行するために——。

## Episode 44 　　〈潜入〉

本格的にリハビリを開始して一週間が経ち、まだ痛みは残っているものの落ちた体重も徐々に戻ってきて、身体もある程度自由に動くようになった。頼んでいた道具も一通り揃い、潜入作戦の準備は着々と調いつつある。あとは、偵察に当たってくれている高城たかじょうの報告を待つばかりとなった。

そして、その時がやって来た。

「お待ちせいたしました！」

「あ、おつかれっす」

一学期の課程が修了し、学校が夏休みに入って最初の週末。かつて奈緒なほが通っていた学校の偵察任務を終えた高城たかじょうは、行きと同じく大きな荷物を抱えて、生徒会室へ姿を現した。

「お疲れさまです。首尾はいかがでしたか？」

「すべて順調に行きました。こちらが頼まれていた物です」

「ありがとうございます」

「カメラは、あたしが預かります」

「お願いします。では私は、資料の方を——」

奈緒なほは、ビデオカメラをテレビに繋げて動画を再生させ。高城たかじょうは、関係者の出入りなどを記録した資料と写真をテーブルに並べる。その間俺は、受け取った郵便物を確認する。

「正門の守衛は、常に二人か」

「はい。ですが、一人になることもままあります。おそらくトイレ休憩などかと」

「潜入するなら、その時が狙い目だな。人の出入りは……あまり多くないんすね」

「一日平均に十数人と言ったところです。それと、生徒の出入りは殆どありませんでした」

「この学校は全寮制、学生寮と校舎は渡り廊下で直結しているので敷地外へ出る必要がないんすよ。長期の休みの時は、帰省する生徒も中にはいますけど」

「なるほど、それでですか」

「それにしても、少ないな」

「ええ、校内の科学者の人数自体は出入りしている数の倍近いはずなのですけど」

「うーん、どう思いますか？ 経験者の立場として」

一旦手を止めて、二人の話に加わる。

「そうですね、校内で寝泊まりしているんだと思いますよ。俺も、よくラボで寝ていましたから」

「では、出入りをしている科学者たちは？」

「帰る理由があるからっしょ。自宅じゃないと落ち着いて休めないとか、家庭があるとか」

奈緒の言葉に、高城の顔がやや険しい顔付きに変わった。

「家庭ですか……」

「職場を離れば一般人ですから、そういった科学者がいても不思議じゃないっしょ」

「……そうですね」

プライベートでは家庭を持っていながら、思春期の子どもたちをただの実験素材としか思っていない。普通の感性なら、良心の呵責に耐えられなくなるだろうに。まあ中には、それ感じながらも家族の生活を守るために続けざるを得ない科学者もいるのかもしれないけれど。

「ん？ これは……」

「どうしたんですか？」

郵便物の中に、某省庁の名称が記載されている封書を見つけた。ドライヤーの熱風をのり面に当てて粘着力が低下させ、慎重に開封し、書状の内容を確認する。

「お偉いさんの視察状ですね。とても有益な情報です」

「では、その日は避けた方がよさそうですね。警備も厳重になるでしょう」

「いえ、この日に潜入します」

「それは、あまりにも危険なのは!?!」

高城が、声を荒げる。

「そうですね。でも裏を返せば、視察員へ意識が向くと言うことです。研究の予算を得るためには、それ相応の成果を見せなければなりませんから。プレゼンに躍起になっているはずですよ」

「人が多くなる代わりに他人への注意も散漫になる、と言うことですね」

「そう言うことです。さっそく準備に取りかかりましょう」

元通りに封をした郵便物は、配達員に変装した高城たかじょうに届けてもらい。俺と奈緒なおは、隼翼しゅんすけの元へ向かった。

\* \* \*

「問題は、誰がやるかだな」

「俺が行きます。この学校には、以前入ったことがありますから内部の構造もある程度頭に入っています」

「そうか。でも一人で行くのはさすがに危険だ、見張りを出来る補佐が居た方がいいだろう」

「となると『透過』の七野しちのか、『不可視』の友利ともりあたりが適任だろう。どうする?」

隼翼しゅんすけと熊耳くまがみの問いに、二人の特性から考える。七野しちのの『透過』は、潜入には持ってこいだが対面してしまった時の対処が難しい。一方奈緒なおの『不可視』は、対象は一人に対してだが汎用性は高い。

「そうですね……。今回は、友利ともりさんをお願いします」

「あたしっすか?」

「はい、お願いできますか?」

「お任せください、校内の案内も出来ます」

「そう、力強くうなづいた。

「じゃあサポートは、奈緒なおちゃんに任せるとして。必要な物はあるか?」

「白衣とウィッグなどの変装道具とハンズフリーで会話が出来る無線通信機器をお願いします」

「服は、制服じゃなくていいのか?」

「潜入するのは制服の方が楽ですけど、校舎に入ってからには白衣の方が動きやすいですから」

「木を隠すなら森の中、か。オーケー、わかった。目時、手配を頼めるかい？」

「任せて。写真の衣装と同じ物を調達しておくわ」

その後、実行当日の細かな予定を伝え、目時と一緒に部屋を出て、乙坂が居るレクリエーションルームへ案内してもらう。

「あ、居た」

「あーっ、友利お姉ちゃんたちなのですか」

「ん？ ああ、お前たち、来てたのか」

「歩未ちゃん、私たちと一緒に話してお話しよ？」

「女子トークつすね、もちろん男子は禁制です」

「別に聞きたくもないんだが……？」

「とか強がりを言っていますけど、気にせずにお話ししましょう」

「はいですーっ」

「おい！ つたく……」

目時と奈緒は、歩未を遠ざけてくれた。

乙坂さん、頼みごとあります」

「僕に？」

「日取りが決まりました。決行当日に協力をお願いしたいんです」

「それで、歩未を遠ざけたのか……何をすればいいんだ？」

「これを。詳しいことはリストにしておきました。護衛も付きますし、遠くからなので危険はありません。ご安心を」

「…… わかった、やってみる」

「お願いします」

三人の女子トークが終わるまで待つて、星ノ海学園の最寄り駅まで送ってもらった。帰り道を話しながら歩く。

「どうして、あたしだったんすか？」

「迷惑でしたよね」

「いえ！ そう言う意味じゃないです。ただ、どうしてかなーと気になったので」

「今回は、『不可視』の方が向いているので」

「……そうっすか」

「本当は、こんな危険なことに巻き込またくはないですけど……」  
何よりあの学校は、一希かずきさんの心を壊した元凶であり、奈緒なおの心にも深いキズを負わせた場所だ。本来であれば二度と近づけさせたくない、忌まわしき場所。

「そう言えば、三人で何を話していたんですか？」

わざとらしく話題を変える。奈緒なおは、すつと顔を背けた。

「女子トークですので、回答は控えさせていただきます」

夕日なのか分からないけど、少し顔が紅く見えたのは気のせいだったのだろうか。いったい何を話していたのだろう。それを知るよしはなかった。

\* \* \*

作戦決行日の当日。学校から数百メートル離れた場所に止めてた車の中で、乙坂おとさかの準備が整うのを待っていた。

『えーと、これでいいのかな？ 聞こえるか？』

左耳に付けた受信機から、乙坂おとさかの声が聞こえた。

「ええ、聞こえますよ」

「あたしも、聞こえています。こちらの声は聞こえますか？」

『大丈夫だ、問題なく聞こえてる。地図上のチェックポイントに着いた。正門に二人、守衛が居るのが見える。高城たかじょうの情報通りだ。お前たちの車も見えるぞ』

「そうですか。では今から、行動に移ります。合図をお願いします」

『わかった』

乙坂おとさかとの通信を終えて、科学者に変装した俺と奈緒なおは車を降りる。帯同してくれていた前泊まえとまりが、車の窓を開けた。

「二人とも、十二分に注意を払って行動してください。危ないと判断したら、弟さんに連絡を入れて『時空移動』を……」

「ええ、わかっています」

「行つてきまーす」

科学者に変装した俺と奈緒なおは、作戦を遂行するため学校の正門へ向かって歩き出した。正門まであと数メートルのところおとさかで、乙坂から通信が入る。

『まだ二人とも居るぞ？ どうする？』

視察が来る予定時刻は迫っている。今ここで、もたついている時間はない。

「強行突破します。一人に乗り移ってください」

『もう一人は？』

「ご心配なく、あたしの能力で気を引きますので」

『そうか、わかった。お前たちが正門に入ったら乗り移る。すぐに後ろを向くから、そつちが僕だ』

「了解つす」

正門前に到着。

『おい、行くぞ？』

「はい、お願いします」

敷地に入ると同時に、守衛の一人が不自然に後ろを向いた。それを合図なに奈緒は、もう一人の守衛に能力を使って近づき、置かれていた筆記用具を内側へ払い落とした。慌てて拾っている間に通り抜ける。そして、手袋を付けた手でゆっくりドアを開けて入り、校舎に潜入することに無事に成功した。

「潜入成功つす」

『そうか、上手くいったな』

「ええ、二人のおかげですよ」

頭の中に叩き込んだ記憶と照らし合わせて廊下を進み、階段を上つて二階、そして三階の廊下へ出る。幸運なことに今のところ、科学者とは遭遇していない。

『今、黒塗りの高級車が来賓客用の玄関前に止まったぞ。人が大勢集まってる』

お偉いさんのご到着。どうやら出迎えに人数を割いているようだ。腕時計を見る。到着は予定よりも五分遅れ、少し余裕がある。

『一人、突き当たりの角からそつちへ行く』

「わかりました。ここで待機します。首から下げたパスカードをこちらへ向けてください」

『ああ、わかった』

乙坂おとしぎの合図に合わせて、科学者と廊下の角ですれ違う。

「ここから一旦僕の死角に入る。すぐに移動するけど、気をつけろよ」  
「わかっています」

「そちらもお願ひしまーす」

すれ違いざま、こちらへ向けたパスに機器を合わせる。スキミングは完了。これで、科学者でなければ開けられない扉のロックを解除出来るようになった。

『今、集団が移動を始めた。階段の方じゃないから、たぶん実験室の方へ向かうと思う』

それなら十分間に合いそうだ。

廊下の角を曲がって少し廊下を進むとセキュリティが施された扉が、俺たちの行く手を塞いだ。スキミングしたカードでロックを解除し、一般生徒が立ち入れないエリアへ潜入。周囲に気を配りながら先へ進む。

「あまり人気がありませんね」

「おそらく実験の方へ人を割いているんでしょう」

こちらにとっては好都合だ。稀にすれ違う科学者に対しては奈緒なほは能力を使い、俺は物陰に身を潜めてやり過ぎしつつ進む。少し離れたところに立ち止まっている科学者を見つけた。その科学者は、廊下の窓枠に両腕を預けて窓の外をぼーっと眺めていた。しかし、動きのない状態で見られるのはリスクがある。

「友利ともりさん、お願ひします」

「はい」

『不可視』を使って科学者の隣へ行き、白衣のポケットから小ビンを取り出した奈緒なほは、蓋を開けて科学者の鼻に近づける。すると科学者の身体が少し傾き、もたれ掛かるような体制になって目を閉じた。奈緒なほが、手招きをして俺を呼ぶ。

「すごい効き目つすね。すぐに眠っちゃいました」

「ただのリラックストアロマに、睡眠を促す物質を少し混ぜただけなんですよ」

「疲労が溜まってたつてことつすか」

「お偉いさんが視察に来るわけですから、現場は相当ピリピリしてたでしょうね。さあ、行きましょう」

しばらく歩くと、目当ての部屋を見つけた。

カード認証だけの他の部屋の扉よりも嚴重なセキュリティが施されている。

「なぞるタイプの電子ロックみたいつすね。どうするんすか？」

「これを使います」

白衣の内ポケットからスプレーを取り出し、中の液体を吹きかける。指でなぞられて油分が残っている部分が液体を弾き、英字の「N」を反転させた様な形が浮かび上がった。問題は、どちらからなぞるか。下の先の方に擦れた様な跡が僅かに残って見える。

「上からみたいつすね」

「ええ」

出発点から終点へ向かってなぞる。電子音が鳴り、ロックが解除された。

「拭き取らなくていいんですか？」

「液晶パネルに影響を与えず、すぐに気化するように特殊調合してもらった液体なので問題ありません。下手に拭くと反応しかねませんから」

扉を少しだけ開けて、室内の様子を窺う。人の気配はない。どうやら誰も居ないようだ。

「では、あたしは見張りをしています」

「お願いします」

電子ロックの機能を遮断する特殊加工を施したプレートをドアの間に挟み、室内に入る。極力触らずに室内を物色。奥の方に、DNAを保存しておくための小型の冷蔵庫を見つけた。当然のことながら、これにもロックが掛かっている。外見からセキュリティのタイプを

特定し、それに応じてニールが用意してくれた複数の道具の中から合った物を選んで、解除の作業に当たる。

——よし、開いた。

DNAが保存されている容器から専用のスポイトで空の容器へ移し、減った分を生理的食塩水で補って元の保存場所へ戻す。作業は滞りなく順調に進んでいたように思えたが、突如、奈緒なおから通信が入った。

『まずいつす、視察員と科学者たちが、こちらへ向かってきますっ』『プレートを回収して、部屋に入ってきてください』

『了解っす』

作業を終えて、扉を閉める。そこへちようど奈緒なおがやって来た。

「どうしますか?」

室内に身を隠せる場所はない。窓を開けて、外を確かめる。ベランダはないが足を十分に置ける出っ張りがある、高城たかじょうの情報通りだ。

「こっちへ」

DNAの入った容器を奈緒なおに預け、滑り止め付きの手袋に付け替え、窓枠から二メートルほど下の校舎の出っ張りに足を置き、左腕で窓枠を掴んで奈緒なおを呼ぶ。

窓枠に手をかけ、慎重に降りてきた奈緒なおを右腕で抱きかかえる。窓を閉めてもらい、出っ張りに足を置いてもらってから支え直す。

「背中は、大丈夫ですか?」

心配そうな声と顔。

「大丈夫ですよ。それより怖くないですか?」

「平気っす」

はつきりとした声で返ってきた。

その直後、科学者を引き連れて視察員が部屋へ入ってくる。だがお偉いさんは「ここはいい。次の場所へ」と言つて、やや戸惑う案内役たちを引き連れ、そそくさと部屋を出ていった。

扉が閉まる音が聞こえてから少し待ち、人の気配がなくなったのを見計らつて奈緒なおを持ち上げ、窓を開けてもらい、先に上がった彼女の手を借りて壁をよじ登る。

「目的は果たしました、すぐに出ましょう」

「はいっ」

部屋のドアを開け、科学者たちとは逆方向へ向かい、角を曲がる。周囲に誰もいないことを確認してから話す。

「ありがとうございます」

「ホント、助かったっす」

『間に合ってよかった。お前たちが、外壁に居たのを見た時は驚いたぞ』

今から校舎を出ることを伝え、乙坂には最初のポイントへ移動してもらう。校舎を出る前にサーバールームへ立ち寄り、細工を行う。その様子を奈緒は、興味深そうに見ていた。

「何をしているんすか？」

「DNAを貰ったお礼に、プレゼントをしておこうかと」

こちらの方は、一分も掛からず仕掛けを終えて校舎を脱出。

そして、潜入時と同じ手順で守衛をやり過ごし、学校の敷地からの離脱に成功した。

「無事に終わったみたいですね」

「はい、任務完了っす」

奈緒は得意気な顔をして、車の助手席に座る前泊にDNAが入ったケースを見せつける。

「それはよかった。では、戻りましょう。乗ってください」

俺と奈緒が後部座席に乗り込むと、車は特殊能力者保護施設へと向かって走り出した。車内でウィッグと眼鏡を外し、変装を解いてひと息つく。施設に到着、前泊にケースを預け、シャワーで汗を流してから、隼翼たちが待つ部屋へ。

部屋には、俺たちより先に戻った乙坂も居たが、奈緒はまだ来ていなかった。

「おつかれさま。はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

労いの言葉かけてくれた目時が用意してくれた冷たい飲み物をいただきつつ、パソコンを起動させる。

「よし、出た」

「何を見ているんだ？」

「これです」

覗き込んできた熊耳くまがみに、ディスプレイを見せる。

「これは……あの学校の生徒のデータか？」

「えっ？　ほんと？」

目時めときたちも、肩越しにディスプレイを除いてきた。

「ハッキング用のサーバーをプレゼントしておきました」

「そんなことして、大丈夫なのか？」

「問題ないですよ。仮にバレても世界各国200カ所以上から同時にアクセスされているように細工してありますから」

キーボードを操作し、データを観覧する。

「この名前って、友利ともりのお兄さんだよな？」

「ええ」

乙坂おとしさかの言ったように今、一希かずきさんのデータが表示されている。どのような実験をしたか、どう壊れていったかなどが事細かに記されていた。

「なによ……これ……」

「ひでえな、こりゃ……」

「人のやることではないですね」

「……これは見せない方がいいだろう」

「ですね」

「なんの話っすか？」

入り口から聞こえた声に全員が振り返る。

そこには、着替えを済ませた奈緒なおが立っていた。

「いえ、何でもありませんよ」

「なんすか、見せてくださいよー」

パソコンの画面を肩越しに覗き込んできた。咄嗟にエンターキーを押す。

「——なっ!?!　なに見てんすかつ!」

血相を変えて声を荒げる、奈緒なお。不思議に思い画面を見ると、中学

時代の彼女の身長・体重・スリーサイズなどのデータが写し出されていた。

「あっ……」

「早く消してくださいっ！」

「は、はい！」

急いでキーボードを操作して、パソコンの電源を落とす。

「見ましたか……？」

「いえ、見てないです……」

そう言う他に選択肢はなかった。

## Episode 45 〈覚悟〉

——アラームが、鳴っている。

目を閉じたまま、手探りで枕元の目覚まし時計のスイッチを押す。だが、アラームは鳴り止まなかった。おかしいな、と思って重いまぶたを開くと、目覚まし時計の横に置いてある、携帯のランプが点滅した。

「ああ……電話か……」

目覚ましを手放して携帯を取り、発信者を確認することもなく通話ボタンを押して、耳元へ持っていく。

「はい、宮瀬……」

『宮瀬か？ 今すぐ、こつちへ来てくれ！』

「はあ……？」

『そつちへ車を向かわせた、それに乗れ！』

睡眠薬の睡魔のおかげで、まだ頭が上手く回らない。ただ、電話越しから聞こえる声は、何やら緊急事態を。なのだけれど……。

「……どちらさまでしょうか？」

『俺だ、隼翼だ！』

通話を終え、少し気だるさが残る身体を強引に起こす。ベッド脇に奈緒が用意してくれたカゴから、一番上私服を引っ張り出して、静かに着替えを始める。

「うーん、どーしたんすか……？」

背中越しに、奈緒の声が聞こえた。起こしてしまったみたいだ。振り向くと、奈緒は隣のベッドの上に座って、まだ眠たそうに軽く目を擦っていた。

「すみません、起こしちゃいましたね」

「いえ……キズが痛むんですか？」

「そうじゃないですよ。隼翼さんから、呼び出しの電話が来たんです」

「えっ、こんな時間につすか？」

スマホのデジタル時計に目をやって、不思議そうに首をかしげた。

無理もない。今の時刻は、午前三時を少し回ったところ、草木も眠る丑三つ時なのだから。

「緊急の用件みたいです。ここへ迎えを寄越しているそうですので行ってきますね」

「そうですか。ではあたしも、すぐに支度します」

「寝ててくれていいですよ。早いですし」

「もう目が冴えました。と言うことで、着替えますので」

「あ、はい。外で待ってますね」

「はい」

簡単に身仕度を整え、寝室謙自室を出て、一足先に玄関を出る。

季節は、夏。日が昇るのも早いとはいえ、外はまだ闇の夜の錦。深夜帯のため人気もまったくなく、とても静かな夜だった。やや絞られた柔らかな常夜灯とライトグリーンの非常灯が灯る廊下の手すりに片手を置き、手入れが行き届いた中庭を四角に囲った造りのマンションの吹き抜けから、空を見上げる。都心から離れているからなのか、静寂の夜空の向こうには、まるで宝石をばらまいたかのように、夏の星座がキラキラと輝きを放っていた。

——こんなにも静かな夜に突然の呼び出し、よほどのことがあったのだろう……。

無数の星々が瞬く夜空を眺めていると、後ろで静かにドアが開いた。

「お待ちせしました。さあ行きましょー」

身支度を済ませて出てきた奈緒なほに言葉に頷き、エレベーターに乗って、マンションのエントランスへ出ると、前に迎えに来てくれた施設の職員が待っていた。駐車場に止められていた車の後部座席に乗り込むと、隼翼しゅんすけが待つ施設へ向かって走り出した。

「どんな用事なんすかね?」

「さあ。けど、こんな時間に呼び出すと言うことは——」

「大ごとですよね、きつと」

「おそろく……」

もしかしたら、奪ったDNAから有力な物を得たのかも知れない。

もしそうだとしたら何かが大きく動く。そんな予感が頭に浮かんで離れなかった。

「ところで、それは？」

奈緒なおの膝の上にあるトートバッグに目をやって、半ば強引に話しを替える。

「救急道具です。いつもの時間には帰れないと思って持ってきました。怠ると大変なことになりますから」

「ああー……… ですね」

つい先日、すごい剣幕で主治医に叱られたことを思い出した。毎日朝晩必ず傷口を消毒することを言いつけられ、通院時の診察で処置を怠ったと判断した場合は、問答無用で即再入院と言う、とてもありがたいお言葉をいただいた。

ただ、その主治医の迫力より恐ろしかったのが、隣に立っていた看護師の無表情で発せられる威圧感。俗に言う「目で殺す」とは、ああ言うことなのかと深く思い知らされた出来事だった。

「着いたら、すぐに消毒します」

「はい、お願いします」

マンションを出てしばらく、特殊能力研究施設へと続く山中の広場で車は停車。職員に礼を言っ、ライトを受け取り、暗い足下に注意を払いながら山道を上る。施設入り口の大岩の前に、人影があった。前泊まえとまりだった。

「いらっしやい、二人とも。さあ入って」

「失礼します」

「お邪魔します」

前泊まえとまりの案内で、隼翼しゅんすけが待つ部屋へ。

「隼翼、二人を連れてきたよ」

「ああ、ありがとう。奈緒なおちゃんも来たんだね」

「お邪魔でしたか？」

「そんなことはないよ。って言うか悪いな、こんな時間に呼び出しちまって」

「いえ、それで？」

「本題に入る前に背中を見せてください」

「あ、はい」

上着を脱ぎ、奈緒なおに背中を向ける。

「はっはっは、順調に尻に敷かれてるみたいだなー!」

「みたいだね」

「で、用件は……?」

「ああ、そうだったな。研究所の方で重要な発見があったらしい。それで呼んだんだ」

「発見? 詳細は?」

「わからない。急いでお前を呼んでくれって頼まれただけだ。研究所は今、ごたついていて話しを聞ける状況にないんだ」

「そうですか。では、すぐに行きます」

「まだ動かないでくださいっ!」

「あ、はい! す、すみません……!」

俺たちのやり取りに隼翼しゆんすけは笑い、前泊まえどまりは微笑んでいる。

「これでよしっ、と。はい、終わりました。もう上着を着ていいつすよ」

「ありがとうございます」

お礼を言つて、上着を着る。

そして、隼翼しゆんすけたちと一緒に研究所へと向かう。研究所へ入ると、施設の科学者たちは慌ただしく動き回っていた。

「騒々しいっすね」

「そうですね」

「こう言う状況なんだよ」

なるほど、確かに気軽に話しを聞ける雰囲気じゃなさそうだ。

「隼翼しゆんすけ」

熊耳くまがみの声が聞こえた。奥の方から、目時めどきと一緒に急ぎ足でこちらへ歩いて来た。

「待ってたぞ」

「なあ、プー。これは、いったいなんの騒ぎなんだ?」

「詳しくことは奥で話す。着いて来い」

「隼翼は、私に捕まって」

「ああ、ありがとう」

熊耳くまがみの後に続いて、忙しく動き回る科学者たちの間を縫うようにして奥の部屋へ。

「もう歩けるようになったんすね」

「ああ、リハビリには苦勞したけどな」

俺も最初の頃は、苦勞したからよく分かる。

「堤内つつみうちさん、連れてきました」

「おお、そうか、ありがとう」

礼を言った堤内つつみうちは、こちらへ来た。

「朝早くすまないね」

「いえ、それで用件は？」

「うむ、これを見てくれるかい？」

数枚綴りの資料を受け取り、内容を確認する。

そこに書かれていたのは、まったく予想していない内容ものだった。

「これは……」

「なんつすか？ あたしにも見せてください」

奈緒なおに試料を渡す。

「何が書いてあったんだ？」

「乙坂おとさかさんの、弟の有宇ゆうさんの検査結果です」

「有宇ゆうの検査結果？」

「驚きの結果ですよ、これは……」

乙坂おとさかのDNAからは、本来の「略奪」だけではなく、「念写」「念動力」「電撃」「空中浮遊」「崩壊」「時空移動タイムリープ」と、今までに奪った能力全ての情報を採取することが出来た。

「そう。私も、彼も得られるは「略奪」だけだと思っていたが……」

これは嬉しい誤算だった」

「では、「消去」の能力開発の研究が進みますね」

「その通りだよ、乙坂おとさかくん」

——いや、これはそんな次元の話しじゃない。もっと、とてつもない可能性を秘めている。それこそ、時計の針を一気に数十年先へ進め

ることが出来るかも知れない。

「どうした？」

足下に目を落として考え込んでいた俺に、熊耳くまがみが声をかけてきた。「いえ、なんでもありません。ニールは、どこにいますか？」

「今は、実験室にいる。案内しよう」

ニールは、同室内の無菌室で能力開発の実験を行っていた。大学のラボで見慣れた光景にどこか懐かしさを感じつつ、軽く窓をノックする。ノックの音に気がついたニールは、手を止めて部屋を出てきた。

「やあ、シヨウ」

「ああ、とんでもないことになったな」

「うん、そうだね、驚いたよ。まさか、たった一人から七つも得られるなんて思いもしなかった」

「そうだな。なあ、ニール…… 作れるか？」

俺の問いかけに、「何を？」とは聞かずに答えた。

「…… 出来てるよ」

「——ホントか!？」

「本体が手に入ったからね。ゼロから作るよりも簡単に出来た」

「なあ、なんの話しをしているんだ？」

主語がない俺たちの会話に、隼翼しゅんすけが疑問を投げ掛ける。

「〃略奪〃を得る投薬の話ですよ」

「〃略奪〃を!？」

〃略奪〃と訊いて、資料を読むことに集中している奈緒なお以外の全員の顔色が変わった。

「どこにある？」

黙ったまま俺に背を向けたニールは、医療品用の冷蔵庫の奥から小瓶を取り出し、テーブルに置いた。

「これが、そうなの？」

「想像よりも小さいですね」

「つんだよ、俺にも教えてくれよ」

「小さな瓶だ。三センチくらいのな」

熊耳くまがみが言ったように、高さ三センチほどの小瓶の半分ほどに〃略奪

“を得ることの出来る投薬が入っている。その小瓶に手を伸ばしたところ、ニールは取り上げた。

「これは、科学者として言わせてもらおうよ……………」

「何だ？」

珍しく真剣な表情だ。

「…………… 最後だ。これを打ったら、命の保証は出来ない」

それほど危険なのか、と全員が絶句している。

ただ一人…………… 俺を除いて。

「覚悟は、もう既に出来てる」

「知ってる。でも、万全を敷いていたあの時とはワケが違う。もう次はない。身体は限界なんだ」

「…………… そうなのか？」

深刻な顔の隼翼しゅんすけからの問いかけに、ニールはゆっくりとうなづいた。

「“偽り”、“共鳴”、今回の大怪我。死線を三度越えた。病院で検査をしたけど、生きてるのが奇跡だ」

「…………… そこまでなのか？」

隼翼しゅんすけから外した視線を、俺に向け直す。

「シヨウの考えは分かっている。この投薬で“略奪”の能力を得て、世界中の能力者から特殊能力を奪い、オレたちの悲願である“消去”を完成させる。だろ？」

—— 言い当てられた、その通りだ。

特殊能力を使えなくなる時期には個人差がある。早ければ、あと二年持たないかも知れない…………… 時間がない。だが、“略奪”を使えば、他の組織からデータを奪うより確実に、なおかつ短時間で莫大な数のデータを集めることが出来る。俺が特殊能力を使える間に“消去”を作り出すには、この方法しかない。命を賭ける価値は十分だ。

「…………… 寄越せ」

「ち、ちよっと、宮瀬みやせくんっ？」

「お、おいつ!? 前泊まえどまり、止めろ！」

普段とは違う俺の声色に、隼翼しゅんすけは慌てて指示を出した。前泊まえどまりはす

ぐさま、俺とニールの間に割って入った。

「ここは、いったん落ち着いて話しを——」

「邪魔だ、どけ……」

前泊まえどまりを、力づくで押し退ける。

「時間がないのは分かっているだろ……他に方法はない。寄越せ……」

「だとしてもだ。死ぬのが解ってるのに渡すわけないだろ？」

険悪な空気が部屋中に流れる。

だが、この空気を一変させる言葉が放たれた。

「打ってください。あたしが、『略奪』の能力者になります」

「友利さん!？」

「トモリ!？」

覚悟を決めた、迷いのない力強い声。

奈緒なおの目は、本気だ。

「絶対にダメだ!」

「そうだよ! これは命に関わるんだよ!？」

さつきまで言い争っていたのに、俺たちは二人で止めに入っていた。

「わかっています」

「だったら——」

「時間がないんですよね?」

「それは……」

奈緒なおは、まっすぐ俺の目を見つめる。

「いつも守ってもらって……今度は、あたしがあなたの力になりました」

「何を言ってるんですか? 入院していた時も、退院した後も、ずっと

助けてくれたじゃないですか」

「ぜんぜん足りません」

「いいえ、もう十分過ぎます!」

「ニールさん、打ってください」

俺の横をすり抜けて前に出た奈緒なおは、自分の腕を差し出した。

「ダメだっ！」

後ろから抱き止める。

「ニール、絶対に打つなッ！」

「邪魔しないでくださいっ」

奈緒は、離れようと必死に抵抗をした。だけど俺は、抱き留めている力を緩めなかった。そんなこと出来るわけがない。

「離してくださいっ」

「……考える。他の方法を考えるから……だから、お願いします。こんなことやめてください。あなたが居なくなったら、俺は……」

抵抗する力が、次第に弱くなっていくのが分かった。

「……本当ですか、今の言葉。本当に、他の方法を考えてくれますか？」

「……はい」

「……もう『略奪』の投薬を打つなんて、絶対に言いませんか？」

「……はい、言いません」

「約束……してくれますか？」

「はい、約束します」

「今度は、絶対つすよ？」

「はい、必ず守ります。だから——」

「じゃあ離してください。ちよっと苦しいっす」

「あっ！ すみません……」

その言葉に慌てて腕を離すと、奈緒は胸に手を当てて深く深呼吸をして振り向いた。

「はい、それでは他の方法を考えましょう」

「お前、切り替え早いな」

冷静な突っ込みを入れた熊耳は、場が落ち着いてから仕切り直した。

「時間がないと言ったが、『時空移動』は？」

「却下」

間髪入れずに俺は答える。

「オレもショウと同じ意見だよ。『時空移動』の代償は、視力。あまりにも重い。仮に使うにしても回数に限りがあるから、ある程度の道筋が見えてからじゃないと」

「……だな。俺も、有宇には俺と同じ代償を背負わせたくはない」「そう言うことです。『時空移動』は、あくまでも最終手段です」

「それで、『略奪』なのね」

「ええ、『略奪』なら能力者を説得する必要もなく、確実に奪えますから。でも——」

隣に居る奈緒を見ると、「ダメっすよ」とジト目で睨まれた。

「なるほどな。さて、どうしたものか……」

「ちよつと考えさせておくれよ」

目を閉じて言った隼翼の言葉が合図となり、ニールと堤内を残して研究所を後にした。

「さつきは、すみません。つい感情的になってしまつて……」

「気にしないでください」

別室へ向かいながら謝罪すると、前泊は穏やかに微笑んで許してくれた。

「ねえ、前泊、いいアイデアはありそう？」

「……そうだね。やっぱり先ずは、組織が保護している能力者たち全員から協力を得て、DNAを採取するのが近道じゃないかな？」

「急がば回れ、ね」

前泊の意見はもつともだ。でも、それには時間がかかり過ぎる。

専用の検査機材が揃い、作業にも慣れている大学のラボの科学者が行うならまだしも、ここには俺とニールしかない。ずいぶん前に採取した乙坂の検査結果が出たのが、今日。先日奪ったDNAには、まだ手が回っていない状態だ。聞いた話によると、組織の科学者たちは特殊能力の発症そのものを抑えるワクチンの量産に手一杯、そちらの邪魔は出来ない。俺たちだけで能力者全員分となると、いったいどれだけの時間がかかることか。

「あれ？ 友利と宮瀬じゃないか。どうして、こんな時間にいるんだ？」

「あなたですか。隼翼しゅんすけさんに呼ばれたんすよ」

「兄あにさんに？」

「まずは部屋に入ろう。有宇ゆうも、詳しい話は中でする」

着いた時と同じ部屋に入り、乙坂おとしさかに状況を説明してから話の続き。

「で、どうする？」

「隼翼しゅんすけさん、あなた方が囚こわれていた場所は、どこですか？」

「お前、まさか……！」

「忍しのび込みます」

「ダメだ！ 奈緒なほちゃんちゃんが居た学校とは訳が違う！ 戦闘訓練を受け  
た武装集団が監視しているんだ、容赦なく殺されるぞ！」

血相けつさうを変えた隼翼しゅんすけは、全力で止めに来た。

それは、分わかっている。だが――。

「他に短時間で集める方法がありますか？」

「それは……」

「…… 熊耳くまがみの能力で探るのが無難だと思います」

「任意で探せますか？」

「いや、俺の能力は前触れもなく唐突に発動する。任意では無理だ」

強制型の探知・探查能力。居場所と能力を把握出来る代わりに自在には使えない制限がある。今、七野しちのがここに居ないのは、昨日見つか  
った能力者の調査へ出かけているからだそうだ。

「あなたたちは、三年生ですよ？ なら、能力を消失するまで長くて  
あと半年ほど。到底集められるとは思えません」

「因みに、どれぐらいの数が必要なの？」

「最低でも、あと三千は必要です」

「三千!? そんなに必要なのっ？」

「新しいモノをゼロから創り出すのは大変なんです。近い能力があれ  
ば別ですけど」

議論は止まり、場が静まり返った。

その沈黙を破ったのは、ずっと硬く口を閉ざして話を聞いてい  
た、乙坂おとしさかだった。

「…… 僕が、やる」

「有宇!？」

「有宇くんっ?」

「いやいや、無謀ですって。聞いていたっしょ」

「正気ですか? 乙坂さん」

「正気だ。僕は、お前たちには恩がある」

「恩って、前世の話しっすか? 動機としては薄いっすよ。当たり前  
のことをしたただけですし」

「薄くないっ! お前たちは、僕と歩未を救ってくれた……」

——関係を断つてまで……。そう言いたそうだったけど口にはし  
なかった。

「だから今度は、僕がお前たちの力になりたい」

「どう言う意味か分かっているんですか?」

「えっ……?」

「特殊能力を奪うというのは、身体や脳へ尋常じゃない負荷がかかる  
んです」

「そうっすよ、考えてみてください。特殊能力を持っているだけでも  
常人からしたら化け物じみた力です。それを宮瀬さんは、新たな能力  
をたつた二つの得るために命懸けだったんです」

「……………」

「あなたは今のところ正気を保っていますが、能力を奪い続けたらど  
うなるかは分かりません。それこそ、あなた自身を滅ぼしかねませ  
ん」

「二人の言う通りだ、有宇」

手探りに乙坂の肩に手を乗せて、言い聞かせるように諭す。

しかし、乙坂は、隼翼の手を払いのけた。

「……………それでもいい、壊れてもいい! 世界中の能力者から能力を  
奪ってみせるッ!」

「有宇……………無理だ、やめておけ」

「なら、他に方法があるのか!？」

誰も反論出来なかった。

確かにその通りだ。机で何時間、何日議論を重ねたところで結論は

出ないだろう。はつきり言って無駄な時間でしかない。いくら知恵を絞っても他に有効な策を見いだせない。なんて無力なんだ、俺は――

乙坂は、俺に目を向けた。

さっきの奈緒と同じ、覚悟を決めた力強い目をしている。

「宮瀬、これは僕にしか出来ないことだ。やらせてくれ……！」

「有宇、ダメだ！ 切り札の『時空移動』<sup>タイムリープ</sup> を使えるお前に、もしなにかあったら――」

「…… わかった」

「宮瀬!？」

「ただし、条件がある。俺も一緒に行く。お前が壊れないように、俺がお前を支える。それが条件だ」

「でも、それは……」

乙坂は、奈緒に目をやった。

「あたしは、いいと思います」

「奈緒ちゃんまで……！」

「大丈夫ですよ、隼翼さん。乙坂さん一人では心配ですけど、宮瀬さんが一緒なら安心です。必ず成し遂げてくれます」

「…… 友利。宮瀬、一緒に行こう。兄さん、僕は必ず帰ってくるよ。」

だから、歩末のことを頼むよ」

「有宇……」

「乙坂さん。はいっ！」

奈緒は、乙坂に向かって両手を広げた。

「何だよ？」

「あたしの能力を奪ってください」

「えっ？」

「あたしの能力が使えることは、学校潜入の時に実証済みです。必ず役に立ちます」

「だけど……」

俺は頷いて、乙坂をうながす。

「わかった…… すまない」

「謝る必要なんてありません。これで真つ当な人間に戻れるので」  
「…… そつか、じゃあ行くぞ?」

乙坂は「略奪」を使い、奈緒の「不可視」を奪った。

「んっ、ありがとうございませす……」

きつちり五秒後、意識を取り戻した奈緒は嬉しそうに。そして、どこか寂しそうな声で感謝の言葉を伝えた。

乙坂は、隼翼と向き合う。

「兄さん、もうこれで引き返せない」

熊耳が、険しい顔でうつむいている隼翼の肩に手をやった。

「隼翼、コイツらの覚悟は本物だ。世界を変えるために己の視力を、人生を犠牲にしてきたお前と同じだ。そうだろうか?」

「熊耳…… わかった。お前たちに任せる」

「兄さんっ!」

「有宇、宮瀬、お前たちは海外へ飛んでくれ。日本の能力者は、俺たちが見つけ出す。今、調査している能力者を含めれば、ある程度の人数は集められるはずだ。手分けをすれば、奪う必要のある絶対数は減らせる」

今、組織が保護している能力者と元能力者を含めて三百人強くらいの数はある。必要な数の一割とは言え、これは大きい。それに大学との連携が円滑に進めば、合わせて三割近くは稼げるはずだ。全てが上手く回れば、半年かからないかも知れない。

そして何より、奪う数が少なくなれば乙坂への負担が軽減出来る。

「でも、二人はどうやって探すの? 熊耳の能力を奪って行くの?」

「それは、ご心配なく。海外には大学と協力関係を築いている保護組織がいくつもあります。そこから探知・探查系能力の能力者の情報を得ることができますので、現地調達出来ます」

「そうか、それなら大丈夫だな。ただ気をつける。今、世界中で能力者たちを束ねる組織が一斉蜂起し、身の危険を脅かす科学者や政府関係者を狙った大規模テロを行おうとしている動きがある」

ならば、なおのこと急がなければならぬ。

隼翼の警告を聞いた俺は、奈緒と一緒に施設を後にして、急いで併

設のマンションへ戻り、さっそく旅の準備に取りかかった。

## Episode 46 く誓い

あの日から、五日後。俺と乙坂おとしさかは、遠い異国の地、東南アジアの一国フィリピンに居た。

「で、どこに居るんだ？」

「貰った情報によると、この辺りのハズなんですけど」

フィリピンへ降り立つ二日前、情報を共有しているシンガポールの特殊能力者保護組織で、最近、急速に勢力を増している若者の集団があると言う話を聞き、探知系能力者が居る可能性が高いと判断し、急遽フィリピンへ飛ぶことにした。

「あつー。あの車じゃないか？」

首都から外れたやや寂れた街のメイン通りに路上駐車している一台の自動車を、乙坂おとしさかが指を差した。貰った情報のナンバーと合っているか確認する。車種も、ナンバーも一致していた。

「間違いないですね。この車の所有者が、まとめているリーダーです」  
「そうか、どうする？」

「そうですね……」

今持っている情報は、隼翼しゆんすけたちと同世代くらいのリーダーと思われる青年と、彼の仲間と思われる数人の顔写真だけ。そもそもこの中に、目当ての探知系能力者が居るかも分からないのが現状。あまり目立ちたくはないが、ここだけはどうしようもない。

「ここで待ち伏せして、本人から直接聞き出すのが確実に手っ取り早いですね」

「だな」

うなづいた乙坂おとしさかが車の後部座席に目をやると、ドアに掛かっていたロックが独りでに開いた。

「じゃあ僕が、リーダーを脅して情報を聞き出す。近くで待っていてくれ」

「『念動力』、便利な能力ですね」

「こんなことに使うことになるなんて思わなかったけどな」

どこか自虐的に言った乙坂おとしさかは、車の後部座席に座ってドアを閉め。

俺は、少し離れた場所で観光客のふりしてリーダーが現れるの待った。しばらくして、それらしき青年が歩道を車へ向かって歩いて来た。タイミングを見計らって、肩をぶつける。

『おっと、失礼』

『チツ』

不機嫌そうに軽く舌打ちをしたリーダーが運転席へ乗り込んだのを確認し、俺はこの場を離れて、乙坂おとさかが戻って来るのを待った。

「お疲れさまです。どうでした？」

角を曲がった路地裏で乙坂おとさかと無事に合流し、成果のほどを訊ねる。

「あのリーダーは、『読唇』の能力者だった。相手が思っていることが分かる能力だ」

「それはまた、レアな能力ですね。本命の方は？」

「そっちも分かったよ。探知系能力者の名前は、アンジエロ」

「アンジエロ、ですか。えーと……」

スマホの電話帳アプリを立ち上げて、名前を探す。アルファベット順に表示されているからすぐに見つかるだろう。

「そのスマホ、どうしたんだ？」

「これですか？ 肩がぶつかった拍子に落としたんですよ、はっはっは」

「…… どうしてぶつかったのかと思ったら、そう言うことか。お前、友利ともりに似てきたんじゃないのか？」

「さて、何のことやら？ あった。メッセージを送って、人通りの多い場所へ呼び出します」

「どうして？ あー、そっか、人混みに紛れて目立たないようにするの  
か」

さっそく考えを読まれた。便利な反面、読まれる方としては厄介な能力だな。別に困ることでもないけど、『共鳴』で遮断しておこう。能力を意識して断ち切る。

「あれ？ 急に聞こえなくなったぞ？」

「便利でしょ？」

「例の能力の無力化か…… とんでもない能力だな。でもどうして、

熊耳<sup>くまがみ</sup>さんは見つけられたんだ?」

「あれは、受信されただけなので」

指定した、人通りの多い駅前広場へ話しをしながら向かう。

「直接能力をかけられた訳じゃないから無力化できないのか」

「だから“偽り”が必要だったんですよ。ああいった能力への対処は難しいんです」

他者へ直接影響を与えない能力相手には、能力者だと知っていないと対応できないのが難点。などと話して歩いている間に指定した広場に到着。二人がけのベンチに座って、呼び出したアンジェロが現れるのを待つ。

ほどなくして、それらしき三人組が広場へ姿を現した。スキンヘッドの屈強そうな男、黒髪の短髪、特徴的な金髪のモヒカン頭少年の三人。キヨロキヨロと周囲を見回し、モヒカンの少年がスマホを取り出した。直後、俺の手元にあるリーダーのスマホにメッセージが入った。

「メッセージが来ました。送信者は、アンジェロ」

「あのモヒカン頭が、探知の能力者か」

「能力の使い方が知りたいですね」

「取り巻きが邪魔だな」

「ええ。先ずは、“念写”で所持品を調べましょう」

「了解。撮ったぞ」

ポラロイドのフィルムに徐々に浮かび上がってきた。下着姿の三人が写り、服の中の携帯や財布などの所持品が透けて見える。

「黒髪の男が、ナイフを持っていますね」

「じゃあ最初に、そいつを倒そう。あと、どうでもいいんだけど男の下着姿をまじまじと見るのは気分が悪いな……」

「同感です、後で燃やしてください」

能力を奪うために必要な“略奪”の乗り移りで、スキンヘッドの男に乗り移った乙坂<sup>おとさか</sup>は、アンジェロの隣に立っている黒髪の男を殴ってノックアウトさせると、自らの頭を思い切りコンクリートの壁に打ち付けた。そのまま仰向けで倒れ込む。

「……すごい痛かったんだけど？」

「4・7秒くらい。ちよつと速かったですね」

「コンマ単位でタイミングとれるか！ …… とりあえず奪う」

突然の仲間割れを目の当たりにして、腰を抜かしているアンジェロに「略奪」を使って乗り移り、そして、きつちり五秒後に意識を取り戻した。

「どうですか？」

「うーん、特になにも感じないな。隣に居ても能力者だって分からない」

「そうですか、じゃあ行きましょう」

「ああ」

変装用のダテメガネを掛けて、野次馬が出来上がっているアンジェロたちの元へ向かう。乙坂は野次馬の中で待機して、俺は、リーダーのスマホを片手にアンジェロの隣で片膝をつく。

『今、救急車を呼んだ。すぐに来る』

『え、あ、ああ……』

『ところで、どうやって能力者を見つけているんだ？』

『——えっ？』

野次馬の中の乙坂から、合図が来た。指紋を拭き取ったスマホをアンジェロに押し付けて、立ち上がる。

『落とし物だ。お前から、届けておいてくれ』

茫然としているアンジェロを後目に、野次馬の中へ紛れ込み現場を離れる。隣町のビジネスホテルの部屋に入ると、乙坂はベッドの上に地図を拡げた。

「…… スゴい、完璧な探知能力だ！」

乙坂の話しによると、地図上に赤い点が表示されているらしく、それは今居る、このビジネスホテルにもあるらしい。つまり俺の反応と言うこと。一応確かめるため意識して遮断してみる。

「あっ、地図上からホテルにあった反応が消えた」

「間違いないですね」

「これですべての能力者の居場所が分かるぞ！ だけど、スマホの地

「図アプリには反応がない」

「紙媒体専用の能力ですか。あとで調達しましょう」

軽く頷き、持ちやすい大きさに折りたたんだ地図を持った乙坂おとさかは窓際に立ち、窓の外に広がる景色と地図を照らし合わせて「略奪」を使う。五秒後に意識が戻り、もう一度地図を確認する。

「……よし、反応が消えた。これで、能力を奪えたはずだ」

「意識の方は？」

「大丈夫だ、問題ない。それよりも急ごう。こうしている時間も惜しい」

「ですね。ですが、くれぐれも慎重に……」

「ああ、分かっている。行こう！」

日本を発つて一週間足らずの早い段階で、完璧な探知能力を手に入れることが出来たことにより、計画は一気に加速することになった。

\* \* \*

地図上にリアルタイムで表示される能力者から、特殊能力を片っ端から奪い去り、別の街へ。そして、別の国へと舞台を移し、同じ手順で能力を奪っていく。そんなことを続けているうちに、日本を旅立つてから数ヶ月が経過しようとしていた。

この数ヶ月で変わったことは旅に慣れたことと、「有宇」「翔」とお互いの名前で呼び合うことになったことくらいだ。日本とは比べものにならないほど治安の悪い遠い異国の地で、お互いに命を預けて旅を続けるうちに遠慮なく話せる関係になった。

「この国の旅も終わった。明日の朝、次の国へ行くよ、兄さん」

隼翼しゅんすけと電話で報告している間に俺は、都市部から少し離れた砂漠の大地に張ったテントの片隅で夕食の下準備を始める。運悪く空き部屋は見つからず野宿することになったが、代わりに市場で偶然日本のインスタントラーメンを見つけた。一緒に購入したカセットコンロで湯を沸かし、沸騰したお湯を容器に注ぐ。

「うん、大丈夫。歩末あゆみにも、よろしく伝えてくれ。じゃあ、また「出来たぞ」

出来上がったインスタントラーメンの容器とフォークを渡す。

「ああ…… ありがと。美味しいな！」  
「だな」

箸じゃないから少し食べづらさがあるけど、久しぶりに口に作る醤油味のラーメンは懐かしい味がした。

「次は、どこへ行く？」

「そうだな。中東は避けて、欧州へ行くか。イタリアに情報を共有してる能力者保護組織の施設がある」

「それはいいな。久しぶりにゆっくり眠れそうだ」

能力を奪う旅を本格的に始めてからホテルでも、野宿の時も常に交代で見張りをして休むことにしている。まともに休んだことはほぼ皆無に等しかった。

「先に寝てくれ。俺は、航空券を手配しておく」

「ああ、そうさせてもらうよ。スマホ」

「サンキュー」

スマホを借りて、欧州行きの便に空きが有るか調べる。

「あと幾つくらいだ？」

「そうだな……」

手を動かしながら今まで奪った能力の数と、隼翼<sup>しゆんすけ</sup>たち、そして情報を共有している保護組織が見つけた能力者の数を合わせておおよその数字を出す。

「半分以上はクリアしてるハズだ」

「そっか、もう半分も奪ったのか。じゃああともう少しだな」

「ああ、そうだな」

今のペースを維持して奪い続けることができれば、新年度までに集められるかも知れない。けど、自国の能力者たちから不自然に能力が消えていることは気づかれているとみて間違いないだろう。警戒が強まることは必至だ。今まで以上に慎重に動かなければならない。

航空券の手配が済み、上着を脱ぎ、ボディシートで身体を拭く。

「それ、ずっと着けてるよな」

「ん？ あー、これか」

視線の先は、首から下げたネックレス。

「連絡してやらなくていいのか？」

「…… ああ」

——声を聞くと、きつと逢いたくなる。

「そっか、じゃあ僕は寝る。おやすみ……」

察したのか有宇は、俺に背中を向けて横になった。

上着を着て、すっかり日が暮れた空を見上げる。異国の大地の夜空には、東京では決して見ることの出来ない、まるで宝石を散蒔いたような満天の星々が瞬いていた。

夜空を見上げながら、ネックレスのチェーンに通った指輪を軽く握る。

これは、日本を旅立つ前にした誓いの証だ——。

\* \* \*

保護組織の研究所から併設マンションへ戻った俺は、奈緒の手も借りて海外へ向かうための準備を始めた。必要最低限の必需品を出来るだけコンパクトにまとめる。

「これで、一応は揃いましたか？」

「はい、ありがとうございます」

足りないものは現地調達すればいい。あとは病院へ行つて、主治医の許可を貰う。正直、これが一番の難題になりそうだ。そう易々と認めてくれないだろう。今から気が重い。

「あつ！ ひとつ忘れ物がありましたっ」

突然思い出したように、奈緒が言う。

「何でしょう？」

「長旅に必要な物です。今から行きましょー」

最初にリストを作つて、確認しながら荷造りをしたから特にこれとって思い当たる物はないのだけれど。少し疑問に思いながら忘れ物を購入するため、マンションの最寄り駅から電車に乗って都心へと向かった。

連れてこられた場所は自宅のある六本木の近く、赤坂のとある神社

だった。

「お待たせしました、どうぞ」

「これは、お守りですか？」

「はい、この神社のお守りは良く効くと評判です。ですので、必ず無事に帰って来てください」

お守りはなくさないように紙袋に入ったまま財布の中にしまっておく。

「診察まで、まだ時間がありますね」

「そうですね」

診察は午後の予定だから十分に時間がある。

「買い物に付き合ってくださいますか？」

「ええ、もちろんです」

「では、行きましょうっ」

近くのショップで“ZHIEND”のライブDVDを購入。歩道上を機嫌で歩いていたら足が不意に立ち止まった。奈緒が見ている方向に目を向ける。そこは、小さなアクセサリーショップ。

「入りましょうか」

「いいんですか？」

うなづく嬉しそうにショップの中へ入って行く。店内を見て回っていると気になる物があったのか、ショーウィンドウを見つめている。視線の先にあった物は、指輪だった。

「プレゼントさせてください」

「でも……」

「看病してくれたお礼、じゃあダメですか？」

奈緒は少し考えて、遠慮がちな目を向ける。

「あの……」

「はい？」

「あの時の約束、ここで使ってもいいですか？」

「あー、はい、どうぞ」

学校潜入の前、彼女を納得してもらったためにした提案。

わがままを聞いてもらう代わりに、無事に成し遂げた時は、どんな

わがままでも聞く。

あの約束を、ここで使いたいみたいだ。

「えつとですね……これ、ペアで欲しいです」

「——えつ？」

「ダメですか……？」

不安そうな表情。こんな顔をされたら断れる訳がない。

「ペアで買いますよう」

さつきまでの表情が嘘だったみたいに笑顔になった。店員に声をかけると、サイズの調整に少し時間がかかると言う話だったため一旦ショップを出て、近くのスーパーで昼食の買い物をするに。買い物済ませた後ショップへ戻り、出来上がった商品を受け取って、久しぶりに六本木の自宅へ帰る。

「では、少し早いですけどお昼にしましょう」

「手伝います」

いつもは頼んでも手伝わしてもらえなかったけど、今日は許しをもらえた。手分けをして昼食を作る。

「こうやって、二人で作るのもいいですね」と、どこか楽しそうな様子だった。二人で一緒に作った昼食を食べて、先ほど購入した“ZHENDD”のライブDVDと一緒に観る。

「そういえば、“ZHENDD”のボーカルのサラさんが、お見舞いに来てくれたんですよ」

「そうだったんですか？」

「はい、乙坂さんが連れて来てくれたんですよ。もしかしたら、あなたに良い影響を与えてくれるかもって、まっ、あなたには影響なかったみたいですけど」

その言葉に少し引つ掛かった。

「あなたには？」

「言葉のあやっすよー」

「はあ？　そうですか？」

「そろそろ時間っすね。病院へ行きましょう」  
持つてきた荷物を持って、病院へ向かう。

主治医の診察を受けたあと、海外へ行くことを伝えると怒るを通り越して呆れられてしまった。なにを言っても無駄だと判断したのか機内へ持ち込める常備薬と救急キットを用意してくれた。主治医と看護師にお礼を言つて、東京駅から特急列車に乗り、一希さんかずきが入院している病院へ向かった。

病室へ入り、海外へ行くことを報告するも反応は返つてこなかった。でも、どこか落ち着いているように思えた。

「ZHENDD」の音楽を聴いていると、こうして落ち着いているんです」

「そうでなんですかね」

やっぱり一希さんかずきにとつて、ZHENDDは特別な存在なのだと改めて思った。

「あつ、そうだ」

奈緒なおは、手荷物からさつき一緒に観ていたZHENDDのDVDとポータブルDVDプレイヤーを取り出して、一希さんかずきの膝の上に置き、再生ボタンを押した。一希さんの目は画面に行つたが、さほど大きな反応はない。でも見入っているようにも思えた。

「うーん、ダメか。ライブ映像なら、もう少し反応してくれると思ったんですけど……」

「大丈夫、必ず救います」

——そう、必ず救う。能力者も、一希さんかずきも。

そう誓つて病室を後にした。

病院の外へ出ると、日が傾き始めオレンジ色の空が広がっていた。不意に奈緒なおと目が合う。それを合図にしたかのように、どちらからともなく、あの岬へと歩き出した。

夕日と夜空の狭間というのだろうか、言葉では表現できないほど幻想的な風景が眼前に広がっている。やがて日が沈み、夜空には満天の星空が姿を現した。

「ここは、綺麗に見えますね」

「はい、すごく綺麗です」

キャンプの時に一緒に見た星空とは、また別次元の星空が広がって

いる。

この時、気がついたんだ。ずっと引つ掛かっていた。二つの言葉の意味を――。

『今度は、絶対つすよ?』

『あなたには影響なかったみたいっすけど』

今日の行動、一緒に買い物して、一緒にご飯を作って、一緒にD Vを観て、そして星空を観る。

あの日、前世の別れの日。出来なかった約束のデートを今日、奈緒は果たしてくれたんだ。

――奈緒は、前世の記憶を取り戻していたんだ。

「奈緒さん」

「――はいっ」

本当は、伝えるつもりはなかった。

想いを胸に秘めたまま旅立ちたかった。

「あなたが、好きです」

「…… はい、あたしもです」

「…… でも俺は、また、あなたを泣かせてしまいます」

俺は、この旅を終えたら。

全てを救済するために、全てを終わらせる旅に出る。

「わかってます。それでもあなたに、もう一度好きと言って欲しかった、あたしのわがままです……」

――違う。これは、俺のエゴだ。

奈緒が傷つくのが、傷つけるのをわかっていて、それでも想いを伝えずにはいられなかった。

「そんな顔しないでください。大丈夫つす。また逢えます。絶対つす！」

ニツと笑顔を見せながら言った。

俺が成そうしていること、彼女は気づいている。

「逢えない、ですよ……」

「じゃあ、あなたがどうにかしてください」

「えっ……?」

「天才なんでしょ？」

彼女の言葉に、思わず笑ってしまった。

「あはは…… そうですね、そうでした。俺は、天才でしたね」

「はい、だから…… 先ずは無事に帰って来てください。あたしのところへ——」

「必ず帰ってきます」

奈緒は、アクセサリーショップで買ったペアの指輪の箱から小さい方の指輪を取り出した。

「これを持っていてください」

「これは、奈緒さんのですよね？」

「はい、あなたのはあたしが預かっておきます」

箱に入っているもう一つ指輪を両手でとても大事そうに包み込んだ。

「そろそろ行きましょう。夜ご飯と休む時間がなくなってしまうす」

「そうですね。帰りましょう」

必ず帰ってくる。

そしてまた、必ず再開することを誓い、美しい岬を後にした。

## Episode 47 記憶

砂漠の都市から欧州へ渡って数週間、数カ国の能力をすべて奪い、あえて奪わない国をひとつフェイクとして交え、保護組織があるイタリアへ到着。地図に表示される能力者の能力を奪いつつ、最大限の警戒をしつつ保護組織の施設へと向かう。

「なんか、ヨーロッパって感じの街だなあ。人も多いし」

中世の空気が残る街並みを眺めながら有宇は、ボソツと呟いた。

「この辺りは、手つかずの街を観光の売りにしてる。まあイタリアは、国全体が観光地みたいなものだけど。古代ローマ、水の都とか」

「ふーん。それにしても、ずいぶん警備が多くないか？」

確かに、有名な観光地だからなのか、近隣の街と比べると見回りをしている警備の数が若干多いように思える。ただ、ゴミ箱を覗いてみたり、ベンチに置かれたの荷物の所有者を確認したりと、特定の間を探している感じじゃないから必要以上に警戒することないだろう。むしろ過剰に反応すると怪しまれる。自然に観光を装っているのが一番。

それに理由は、すぐに判明した。

配られていたビラによると、今いる近くの会場で、著名人や実業家、民間企業などを協賛のチャリティーイベントが開かれているらしい。要するにテロを警戒した巡回。この辺りは、路上マーケットもあったりして、人通りが多いから警備を強めているのだろう。有宇のスマホの地図アプリ上には、何人かの能力者が表示されているらしいが、目に付きやすいこの場での能力収集は止め、ひとまず保護施設へ向かうことにした。

郊外の保護施設に到着して早々施設の所長に、CA大学の教授からの伝書を受け取った。

「あれ？ 『翻訳』でも読めない。存在しない文字なのか？」

「大学で使ってた暗号だよ、このまま読んでも文章にならないんだ」

「それか、なんて書いてあるんだ？」

この暗号は、決して外部に漏れないよう細心の注意を払うときに

使ってた暗号だ。つまり、重要な案件と言うこと。法則に当てはめて暗号を解き読む。そこに綴られていたのは、信じがたい内容だった――

「……日本を含めた、世界同時テロ計画が実行に移されようとしているらしい」

「えっ、そんな！ 僕たちは、そうならないためにも能力を奪い続けてきたのに……！」

——もしかしたら……このテロ計画の指針を進めたのは、俺たちなのかもしれない。世界中の能力者たちから能力が消えていることに気づき、消え去る前に計画を急いだ可能性がある。

「……二手に分かれよう。有宇は、中東へ飛んで能力を片っ端から能力を奪い去ってくれ。他の主要都市の能力は奪い尽くした。能力を使うテロなら、避けた中東から難民を装って能力者を送り込んでくる可能性が高い。一人でやれるか？」

「大丈夫だ。攻撃系も防御系の能力も使いこなせる」

「そうか。俺は、日本へ戻る。既に潜伏されていることも考えられるが、能力を使ったテロであるなら、俺の『共鳴』で阻止できる」

仮に別の手段を用いるとした場合も、手段は限定される。同時に行うことに何か特別な理由があるとすれば、上手く立ち回れば、テロ行為そのものを事前に回避することも可能なはずだ。時間がない、急がないと。

俺たちは施設を出て、敷地内の中庭へ移動した。

「急いでいても、『不眠』の能力は使うなよ。あれは、体力と精神を削る」

「ああ、わかってる。じゃあ、行ってくるよ。すべてを奪い終えたら僕も、すぐに日本へ帰る。日本で会おう！」

そう言つて空を見上げると、『空中浮遊』と『瞬間移動』を同時に発動させ、大空へ飛び上がった。青空の向こう、遙か彼方へと消えていく、人影。

「俺は、もう足手まといだな……」

旅の間時間を見つけては鍛錬を重ね、徐々に能力を使いこなせるよ

うになつていった。今では、同時発動も完璧に使いこなしている。本来であれば、もつと早く目標の数字に届いていただろう。今回のテロ計画その物もさえも存在しなかったのかもしれない。

でも有宇は、飛行機で共に旅をすることを選んでくれた。

「よし、行くか」

ひとつ大きく息を吐いて、顔を上げて歩き出す。

——今、俺に出来ることをする。

日本への直航便に空席がなかったため、イギリスのハブ空港を経由して帰国。国際線のターミナルを出ると、見知った人物が迎えに来てくれていた。

「あつ、こつちよっ！」

「目時さん」

「おかえり。外に車を待たせてあるわ、急ぎましょ！」

ロビーを早足で抜け、玄関前のロータリーに停車されている車の後部座席に乗り込む。

「じゃあ、お願い」

「ああ」

運転席から聞こえた声も知っている声だった。身を乗り出して運転席に座る人物の顔を確かめる。

「熊耳さん？」

「よう、久しぶりだな」

「びつくりしたでしょ？ 能力者調査と同時進行で免許を取ったの。今、施設の職員はみんな忙しくて。年齢順に取ることにしたのよ」

「そう言う訳だ」

「そうなんですな。ところで、いつ本試験を？」

「先々週。そう心配するな、俺が一番上手い」

はたして俺は、無事に辿り着けるのだろうか。そんな不安など関係なく、熊耳が運転する車は、施設へ向かって走り出した。

「例の話、どこまで掴んでいますか？」

「正直、ほとんど掴めていないわ。日本も標的になつてるって情報だけ……」

予想はしていたけど、研究室に入り浸っているニールを通して同じ情報を得ているだけ。つまり具体的には皆無に等しい。俺と同じだ。

「能力は、まだ使えますか？」

「頻度は落ちたが、俺はまだ使える。だが、前泊まえとまりは使えなくなった」「私も、少し力が弱まってきている。七野しちのも、時々通り抜けられないことがあるみたい」

年齢的にちょうど今、転換期を迎えている。前泊まえとまりの対象の記憶を探れる「記憶操作」が使えなくなったのは、少し厳しい。けど、この程度のことだろうたえている余裕はない。日本を離れている間の活動成果を聞きつつ、無事に施設へ到着。

嚴重なセキュリティを抜け、いつも隼翼しゅんすけがいた部屋へ入る。部屋に入ってまず目に入ってきたのは、正面の巨大なスクリーンに投影されたデジタルの日本列島の地図。地図上には、色分けされた丸い点がいくつも表示されていた。

「隼翼、連れてきたぞ」

机に片肘をついて難しい顔をしていた隼翼しゅんすけは、熊耳くまがみに声に反応して顔を上げた。

「熊耳、目時めどきもありがとう」

「どういたしました。私、ちよつと電話してくるわね」

スマホを見せて目時めどきは、部屋を出て行った。

「宮瀬みやせ、久しぶりだなんて挨拶をしてる余裕も正直ない」

「ですね。この地図の表示の意味は？」

「能力者の分布だ。赤は調べ終えた能力者、緑は現在調査中、青はまだ手つかずの能力者を表してるんだ。これは、お前ゆづと有宇が旅立ったあとのデータだよ」

「なるほど。赤を消せますか？」

「熊耳くまがみ」

「ああ」

ノートパソコンのキーボードを操作して、赤丸を消した。だいぶ見やすくなったけど、まだ大まかで見づらさが残っている。

「関東近郊をクローズアップ出来ますか？」

「ちよつと待ってくれ」

画面が切り替わり、東京都全体と周辺の県が映し出された。

テロは基本、人が多い場所を狙う。おそらく首都圏内を狙うはずだ。

「能力者が固まってる様子はないですね」

「未調査を含めて全部で30人ほど居るが、ほぼ全員が調査中で、テロとの関わりはないとみてる」

「有宇ゆうの能力なら、見つからない能力者を全部把握出来るんだけどな……」

「大丈夫、策はあります」

熊耳くまがみの肩に手を乗せ、〃共鳴〃を使う。

「なんだ？ なっ……これは——」

「どうした？」

「……能力者の居場所と能力が分かった」

「また唐突だな。まっ、いつものことだけど」

「違う、今回は一人じゃない。一気に二人も見つかった」

「二人？ 黒羽くろぼね姉妹みたいの時みたいにか？」

「いや、二人はそれぞれ違う場所で見つかった」

「上手くいっただけですね」

「お前の仕業か！」

旅で得た最大の収穫は、自分の能力を実践で使えたこと。能力の精度は、旅立つ前と比較にならないほど向上した。

新しく見つかった能力者の居場所を熊耳くまがみから聞き、地図上に新しく追加していく。新しく見つかった能力者は二人とも関東近郊ではあったが、テロとは無縁そうな能力だったため通常の調査対象に指定し、次の能力者探しへ移る。

結局帰国当日のこの日は、この作業にすべての時間を費やして終わった。

\* \* \*

「ふう……」

「休憩しましょう」

施設内の空き部屋に泊まらせてもらった翌日も、朝からぶっ通しで能力者探しをしていた。それも自然にはなく、俺の「共鳴」の能力で強引に引き出しているんだ、疲れるのも無理はない。けど、収穫はあった。続けているうちに頭に思い浮かべてもらうことで、ある程度の範囲を限定して見つけることが出来ることに気がついた。だがそれでも、それらしき能力者は見つかっていない。やはり、能力を使つたテロでないのかもしれない。となれば、考えられる可能性は――。

「ん？」

「誰か来たみたいだな」

紙コップに注がれたコーヒを口に運びながら地図に目を向けて考えていると、突然、部屋のドアが開いた。

「おはよう。お客さまよ」

最初に入ってきた目時の後ろに、三人の人影。星ノ海学園の生徒会メンバーの三人。先ず一番に黒羽が駆け寄つて来て、後ろを高城が一步遅れてくる。

「お帰りなさいですっ」

「ご無沙汰しております！」

「ひさしぶりですね、ほんと……」

久しぶりに見る二人の後ろに、彼女がいる。

旅をしている間、片時も想わない日はなかった。

「奈緒さん、おひさしぶりです」

「はい、おひさしぶりです」

とても業務的な返事が返ってきた。

「えっと……怒ってます？」

「別に。怒ってませんが」

言葉とは裏腹に、奈緒は表情を変えず、冷めた目を向けてままだ。その視線が、とても痛い。たぶん、帰国してから連絡してなかったことを怒ってるんだろう。ここは素直に謝るに越したことはない。

「すみません」

「なにが、ですか？」

取り付く島もない、とはこう言うときに使う言葉なのだと実感した。でも、やっぱり笑顔が見たい。奈緒なほにだけ聞こえるように耳元で、会えなかった日々の素直な気持ちを伝える。

「……もういいつす。おかえりなさいませ」

一瞬照れくさそうに足下へ目をやって、上げてくれた表情は少し和らいでいた。

「あ、そうだ。これ、お土産です」

「ん？ CDつすか。おおつ、"ZHIEND"ジエン ドの新譜じゃないつすか！ ありがとうございますつ

日本ではまだ発売されていない "ZHIEND"ジエン ドのCDを手に、大きな目を輝かせている。乗り換えの待ち時間に、空港内のショップで偶然見つけた代物。土産に選んで正解だった。

「友利さん、ずっと寂しそうにしてたんですよ」

「そうなんですか？」

「はいっ。お昼休みとか、放課後も、時々ぼーつと遠くを眺めたりしてまして——」

「そこ、なにを話しているんですか……？」

「い、いえ！ なんでもないです！ あ、あはは……」

慌てて両手を振って、苦笑いをする黒羽くろはね。

「ところで、乙坂おとしがさんは？」

高城たかしやうが、強引に話題を変えた。俺は、俺たちのやり取りをどこか微笑ましそうに見守っていた、隼翼しゆんすけに訊ねる。

「今朝、連絡が来た。一つの国を奪い尽くし、隣国へ渡ったそうだ。今のペースなら、たぶん、一週間もしないうちに帰国すると思うぞ」

「だそうです」

「そうですか。我々の能力は、役立ちましたか？」

「もちろんですよ」

あれは、旅立ちの日のことだ——。

\* \* \*

奈緒と隼翼たちだけではなく、高城と黒羽も、空港へ見送りに来てくれた。

「お前たち、来てくれたのか」

「もちろんですよ」

「友利から聞いていた。海外へ旅立つんだってな」

「ああ、終わらせる旅に出る」

「そこでだ、アタシらの能力も持っていきな。少しでも力になれるかもしれないねえ」

「え？ でもそれだと、お前とは、もう……」

美砂の言葉に、有宇は躊躇した。

彼女の「発火」の能力を奪うと言うことは、同時に妹の黒羽の「口よせ」を奪うと言うこと。それは、美砂との別れを意味する。

「そう言うこつた。ここらがセンスのいい引き際だぜ」

「美砂さん」

自分の存在を消す覚悟を決めた美砂に話しかける。

「なんだよ？」

「ニケツは、絶対にダメですよ？」

「今さら言われても、もう死んじまってるし……」

「それでもです」

しつこく念を押す俺に、美砂は目をつむって、軽くなづいた。

「……わかった。もう二度としねえよ、絶対にな！」

「はい」

俺と美砂のやり取りに、有宇と高城は不思議そうな表情をしていた。そんな二人を後目に美砂は、高城に黒羽への手紙を託し、俺たちに別れを告げる。

「じゃあな、お前ら！ 短い時間だったけど、最高に楽しかったぜ！」

「ああ、僕たちもだ」

その言葉を合図に、有宇は「略奪」で姉妹の能力を奪った。意識を取り戻した黒羽に、高城は美砂から預かった手紙を手渡した。

姉の美砂から最愛の妹——黒羽への手紙。

「…………… 姉は、いつも…………… みなさんと一緒にいたんですね……………」

「ああ、僕たちも楽しかったよ」

「ですね」

「それなら…………… よかったです」

真実を知った柚咲は、嬉しそうに、そして寂しそうに笑って涙を流した。

「乙坂さん、お願いします」

「ああ……………」

高城の「瞬間移動」も奪う。

「ありがとうございます。絶対に帰ってきてくださいね。なんてっ たって私たちは同じ病を持ち、苦しみながらも共に高校生活を過ごした、友だちなのですからっ」

「だっ！」

そう言っ高城は、握った拳を前に突き出す。有宇も握った拳を突き出して、高城の拳に合わせた。

「はいっ！」

黒羽も同じように拳を合わせる。

「お二人もっ」

まだ涙が残る笑顔の黒羽が、俺と奈緒を呼ぶ。

「行きましようか」

「はあ…………… 仕方ないっすねー」

三人の輪に加わり、同じように拳を合わせる。

「有宇、宮瀬、そろそろ手続きの時間だぞ」

空港内に案内放送が流れた。搭乗時間が迫っている。

「じゃあ、兄さん、行ってくるよ」

「ああ、行ってこい」

俺も、高城と黒羽に別れの挨拶をして、最後に奈緒と向き合う。

「行ってきます」

「はい、行ってらっしやいませっ」

\* \* \*

「そうですか、役立ちましたか」

「きつと、お姉ちゃんも、よろこんでいると思いますっ」

旅の思い出話をしながら、つかの間の休息。

「しかし、本当にテロは起こるのでしょうか……?」

高城は真面目な顔して、スクリーンの地図へ目を向けた。隣に座っている奈緒が、地図を指を差す。

「この表示が、能力者の居場所を表しているんすよね?」

「ええ。緑が調査中、青が未調査の能力者です」

「ふむ、未調査が多いようですし、我々も手分けして調べましようか?」

「いえ、ほとんど無関係と思われる能力者なので。それに——」

高城の申し出を丁重に断り、スクリーンへ目を戻して答える。

「ある程度の目星は付きました」

「マジか!」

別のテーブルで、熊耳と目時と一緒に、少し遅めの昼食を食べてダベっていた隼翼が声を上げた。食事の手を止めた三人は、俺たちが居るテーブルへやって来る。

「それで?」

「ここか、ここです」

地図上の二カ所を指差す。

黒羽が、小さく首をかしげた。

「なにもありませんけど?」

そう、俺は能力者の印がないところを指差した。

「なあ、どこを指したんだ?」

「都内の民間空港と東京湾沖だ。この根拠は?」

「日本は島国ですから」

「……なるほど。実行犯を送り込むとすれば、空か海からしかないってことか」

「潜伏していないこと前提ですけどね。前泊さんは、居ますか?」

「前泊? ここには居ないわ。今は、他県にある支部で、七野と一緒に

に調査の指揮を執ってるの」

「そうですか……」

「連絡する？ 二時間もあれば戻って来られるところだから」

「お願いできますか？」

「任せて」

目時は、部屋を出て行く。

前泊に、なんの用があるんだ？ もう、能力は使えないぞ？」

「分かってます。熊耳さんから聞きました。ちよつと訊きたいことが  
あります」

「訊きたいこと？」

これだけ探して、まとまった能力者は見つからない。おそらく実行犯は、まだ日本に潜伏していないとみて間違いないだろう。その可能性が膨らむにつれ、あることが頭を過ぎった。

今回の黒幕は、隼翼たちの存在を知っている人物ではないのか、と。

そして、その人物を前泊は見ているかも知れない。

——そう、奴らの記憶の中で……。

Episode 48 〱 黒幕〱

前泊まえどまりの到着を待つまでの間に、隼翼しゅんすけに用意してもらったタブレット端末にデータを入れ、円滑にことが進むよう準備を整えておく。「俺たちに来れることはあるか？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。国営、都・県営、市営、民間を問わず。港、空港、飛行場、ヘリポートをリストアップしてもらえますか？ 東京と、隣接している県だけで構いません」

「東京近郊…… 相当な数になるな。お前たちも手伝ってくれ」

「オツケー、みんなで手分けして調べましょ。柚咲ゆさちゃんは、時間平気？」

「はいっ、お休みをもらっていますので！」

クリスマスのドームライブと正月の特番が終わって、少し遅めの冬休みとのことだった。奈緒なおたちは担当する地域を決めて各自作業に取りかかり、俺も自分の作業に戻る。

「で。お前は今、なにをしているんだ？」

手てを持って余あましている隼翼しゅんすけが、俺がしている作業について訊きいてきた。

「名簿を作ってます。年商10億ドルを超える企業の重役、個人資産家及び実業家、発言力のある大物政治家など。欧米、露、大陸、中東からピックアップしています」

「テロ活動には支援者がいるとみている訳か。リストから日本を除いた理由は？」

「居たら今、保護施設ごごしは存在していないでしょ？」

「確かに、な」

今作いまっているリストの中に、前泊まえどまりの見覚えのある人物がいたのならそれは、少なくとも奴らと何かしらの接点がある人物。今回の件にも、直接ないし間接的に絡かんでいる可能性が出てくる。

ただ、腑はらに落ちないことがある。

一番は、今いまになって標的めあてを変更へんじした理由。

「当初当初の標的は、政府要人や科学者でしたよね。なぜ今いまになって、標的

を変更したんだと思いますか?」

手を動かしながら、隼翼しゅんすけに意見を求める。

「それは俺も、同じことを思っていた。当初の目的は、能力者をぞんざいに扱ってきた連中への報復……正確には、無差別攻撃テロではなく、明確な標的を定めた襲撃のハズだった。それなのに——」

「無関係の一般市民を巻き込むようなテロ行為は、民衆の反感を買う。能力者の立場をより悪化させる愚行でしかない」

「その通りだ。なにもメリツトがない、誰も得をしない。ただ不幸になるだけだ……」

やや伏し目がちになり、拳を強く握り締め、とてもやるせない表情かおを見せた隼翼は、深く息を吐いて顔を上げた。

「今作っているリストを、前泊まえどまりに見せるんだろ?」

「ええ。もし見知った人物が居たのなら、目的と手段を見いだせるかもしれない」

「……そうか。見つかるといいな」

そして、目時めどきが連絡を入れてくれてから、二時間弱。俺たちの作業が終わったのとほぼ同時に、前泊まえどまりが施設へ到着した。

\* \* \*

「お待ちせ。それで、僕に用事とは?」

「これを」

「タブレット端末……顔写真とプロフィール?」

「この中に、あの連中……奈緒なおさんと熊耳くまがみさんを拉致した奴らの記憶の中に居たか、前泊まえどまりさんの記憶と照らし合わせみてください」

「……それは、大変な作業になりそうですね」

拉致事件から時間が経っているし、探った記憶も曖昧になっているだろう。数百単位の人数、気が遠くなる作業だ。そもそも居ないことだって十分に考えられる。でも今は、わずかでも可能性がある限りひとつひとつ潰していかなければならない。

「再生を押すと、十秒ごとに自動で次の人物へ切り替わるようになって

ています。自信がなくても構いません、ほんの少しでも気になる人物がいたらチエツクを入れてください。お願いします」

「了解。さっそく始めます」

「なにか飲む?」

「ありがとう。目時に任せるよ」

前泊まえどまりに任せて、スクリーンの地図に顔を向ける。能力者の所在マークは一旦すべて消され、代わりに数え切れないほどのマークが所有者別に色分けして表示されていた。

「こうして見ると圧巻っすね。東京だけでも、かなりの数があります」  
「です」

世界中の人々が乗り降りするハブ空港、日・米軍関係の飛行場、個人所有のセスナや遊覧飛行などのヘリが発着する飛行場、患者を緊急搬送するドクターヘリを持つ大病院、市・区役所、民間企業所有のビルの屋上。自宅がある、六本木タワーの屋上も候補に入っている。これら加え、港に寄港する客船や漁船、物資を運搬する大型タンカーなど。この数え切れないほどの候補の中からピンポイントで探し出さなくてはならない。

「どうですか?」

「今のところこれと言って気になる人物はいないですね」

「そうですか。引き続きお願いします」

改めて地図へ目を戻し、思考を巡らせようとしたところ、不意に軽く袖を引っぱられた。その犯人は、奈緒なお。

「少し休憩しましょう。根の詰めすぎは逆効果です」

奈緒なおの気づかいにうなづき、一時中断して施設内の食堂へ。夕食前に軽くつまみながら休息を取っていると、テレビ画面がニュース速報に切り替わった。ニュースの内容は、中東諸国で現政府勢力・反政府勢力を問わず、次々と壊滅していることを知らせる第一報。しかも、いずれの襲撃も奇跡的に死者はいないとのこと。目撃者はテレビのインタビューに対し、突然爆撃のような轟音が鳴り響き、激しい銃声が数分間続き、鳴り止むと崩れた瓦礫の上に立つ人影の様な物が音も立てず消え去ったと、とても興奮した様子で語っていた。

「このニュース、まさかとは想いますが……………」

「乙坂さんのしわざっすね、間違いなく」

「はわわっ、だ、大丈夫なのでしょうか……………」

「大丈夫、心配ないですよ。謎の人影は消え去ったって言ってましたし。能力者が多数集まる別の組織へ向かったんでしよう」

「しかし、よろしいのですか？ これほど大胆な行動を取って」

「むしろ大胆に動いてくれる方が好都合です」

「プランを大幅に変更せざるを得なくなる、と言うことっすね」

「ええ、その通りです」

そう、この行為が想定外の事案であれば、おそらく何かしらのアクションを起こしてくる。しかし、予め計算に入れられていたのだとしたら——。

「ん？」

目の前に突然、銀色のスプーンが現れた。そのスプーンには、ホイップクリームがトッピングされたプリンが乗っかっている。

「休憩に来たんすよ、考えごとは部屋に戻ってからにしてください。と言うことで、はい、あーん」

「生クリーム、あまり得意じゃないんですけど……………」

「たまには甘い物を食べて、ちゃんと糖分を摂らないと頭も回らないっすよ。ですので、はい、あーん」

話しが最初に戻った。黒羽は、にっこりと微笑み。高城は観念した方が良いですよと、すまし顔で、湯気の立つ汁粉を食べている。どうやら食べる以外の選択肢はないらしい。意を決して食べる。

「どうっすか？」

「……………甘い」

「そんなに甘い物が苦手なんですか？」

このプリンと同じプリンを美味しそうに食べている黒羽は、少し首をかしげた。

「研究に没頭してた頃、まともな食事をしてなくて低血糖になりかけたことがあったんです。それでラボの同僚が、近くのコンビニでショートケーキを買ってきてくれたんですけど……………。そのケーキ

の生クリームが尋常じゃないほど甘くて……」

元々ちやんとした食事をしていなかったところへ、水飴に砂糖とグラニュー糖を混ぜたような激甘生クリーム。当然、胃が受け付ける訳もなく。激しい胸焼けにみまわれ、二日ほど寝込むことに。まともな食事を心がけるきつかけであり、若干トラウマでもある出来事。野球の試合のあとに奈緒と一緒に食べたケーキは、フルーツが多めで甘さも控えめだったからまだ良かったけど。あの出来事以来、生クリームは苦手。

「じゃあ、チョコとかもダメなんですか？」

「チョコは普通に食べられますよ、甘過ぎなければ」

「あ、そうなんですねー」

黒羽が、奈緒に笑顔を向ける。しかし奈緒は、特に反応することなく、食べかけのプリンをスプーンですくって自分の口へ運んだ。

\* \* \*

食堂を出て、対策室へ戻る。

休憩中も用意した顔写真の確認作業をしてくれていた前泊に、成果のほどを訊ねる。

「どうですか？」

「いえ、明確にこれと言った人物は……」

結果は、空振り。別の方法を見つけないなら、と思ったが、前泊の話には続きがあった。

「ですが、少し気になる人物が。この写真なんですけど」

タブレット端末の画面には、何かの式典に参列している女性の写真が映し出されてた。確か、環境問題に熱心に取り組んでいる欧州の政治家だったはずだ。

「それから、これ」

別の写真へ切り替えた。今度は、男性の写真。更に続けて別の写真へ切り替える。今度も男性の写真だった。見せられた三人のプロフィールは、政治家、官僚、企業経営者。職業も、国籍も全員ばらば

らで特に共通する点は見受けられない。

「この三人ですか？」

「ううん、見て欲しいのは、写真の後ろの人よ」

「後ろ？」

目時めときが俺の肩越しに指を差した先、写真の端を見る。そこには、見るからに値の張るスーツを身にまとった男性の後ろ姿が写っていた。右手には、特徴的な金色の指輪が光っている。

「他の写真にも似た人が写ってるの」

画面を戻して写真を確認すると、確かに似たスーツを着た人物が写っている。指輪も同じだ。

「この三枚以外にも写っている写真があった。ただの偶然かもしれない関係ないが、少し気になってな」

目時めときの横から手を伸ばした熊耳くまがみは端末を操作して、更に二枚別の写真を見せてくれた。正面の写真はないし、横顔が写っている写真も、サングラスをかけているから断定は出来ない。だが、おそらく、奴らと同じ大陸系出身と思われる。

「お前は、どう思う？」

「…… そうですね」

数百人分ある写真の中の、たった五枚の写真に写る人物…… いや、五枚もの写真に写り込んでいると捉えるべきか。

「念のために調べてみましょう」

五枚の写真を画像検索にかけて、写真が撮られた日付と場所を調べる。有名人をリストアップしているだけあつて簡単に特定することが出来た。そして、すべての写真に共通する点も見つかった。

「環境問題、人権問題、チャリティー…… 他も全部、慈善事業のイベントみたいね」

「よほど熱心に取り組んでいるみたいですね、この人は」

「テロとはかけ離れたイベントだな。関係ありそうな気がしたが、思い過ごこしだったか」

「…… もう一度、最初から確認してみます」

「ちよつと休憩してからにしたら？ 休みなしで見てるんだし」

「そうしておけ、集中力も持たないだろう」

席を立った三人は、少し離れたところのソファに深く腰を預けて休憩に入る。その間に俺は、この男について詳しく調べることにした。

——おそらく、三人の勘は当たってる。

この男は、明らかに場から浮いている。詳しく調べていくと、この人物の正体に辿り着いた。

「…… 隼翼しゅんすけさん、国交省とパイプはありますか？」

「国交省？ いや、ない」

星ノ海学園を買収する際に、文科相に勤める元能力者の協力は得たが、国交省との繋がりはないとのことだった。

「どうして、国交省なんだ？」

「近日中に東京近郊から飛び立つ予定のヘリのフライト予定を知りたいんです。これを見てください」

テーブルにタブレット端末を置き、イベントの企画運営主催者、協賛者の名簿を見せながら説明する。休憩をしていた熊耳くまがみたちも戻ってきた。

「これらはすべて、民間企業が主催したイベントだったんです」

「あ、ホントだ。国営がひとつもないっすね」

「そうです。そこで、この男が写っているすべてのイベントに協賛している共通の企業を調べました。重複していた企業は一社だけ。該当したのは、この企業です」

該当した企業のホームページへアクセスし、事業内容を紹介しているページを開く。

「この会社…… ちょっと待って！ これ、本当なのっ？」

「これは……」

「まるつきり真逆めじぎじゃないか……！」  
声を上げた目時めじきたちだけではなく、奈緒なおも深刻な顔で眉をひそめている。

「おいおい、お前たちだけで納得しないで俺にもわかるように教えてくれよー」

「……唯一該当した企業は——」

不満を口にしていた隼翼しゅんすけだったが、熊耳くまがみの言葉を聞いて絶句した。それもそのハズ、なぜなら慈善事業とは正反対の事業を生業として  
いる企業であり。取り扱っている製品紹介ページの製品の精度をプ  
レゼンする動画には、サンングラスはしていないが、写真同じ特徴的な  
金色の指輪をはめた大陸系の男が他の重役や社員たちと一緒に写っ  
ていた。

更にご丁寧なことに、この企業が発信するSNSのURLまで記載  
されていて、掘り下げていくと例の拉致事件のボスが数年前に、他の  
企業が主催する立食パーティーに参加していたことが集合写真で判  
明、僅かながら繋がりも見つかった。

今回の件も、この企業が関わっているとみて間違いない。

あの拉致事件のボスに能力者の情報を与え、テロ活動を支援してい  
る黒幕は、ある分野において独自開発した新技術が注目を集め近年急  
激な成長を遂げた企業。

その技術は、主に紛争や内戦で多く用いられる武器や兵器。

表では慈善事業に積極的に取り組み、裏では海洋進出へ積極的な大  
陸や、対抗する東南アジア諸国へ武器を売りさばき。中東のテロ活動  
を支援する、闇の企業。

そう、この企業の生業は——軍事産業。

\* \* \*

俺は、施設の外へ出ていた。

日が沈むのが早い真冬の空は、まだ17時を回ったばかりなのにも  
う真つ暗で、とても冷たい北風が体温を奪っていく。

吐く息が白く染まるほどの寒空の下、かじかむ手で携帯を操作し  
て、ある人へ電話をかける。数回のコールで繋がった。

「宮瀬みやせです。ご無沙汰しています、先生——」

一呼吸置いて、受話口から、懐かしさを感じる深い声の返事が聞こ  
えた。

— ……  
ああ、久しぶりだね、と。

## Episode 49 〈希望〉

電話を終え、対策室へ戻って、隼翼<sup>しゅんすけ</sup>たちへ成果を報告を行う。

「話しは付きました。明日の昼前には、こちらへ使いを寄越してくれるそうです」

「使い？ この施設の所在を伝えたのか……？」

情報漏洩を懸念<sup>くまがみ</sup>する熊耳の言葉に同調して、隼翼<sup>しゅんすけ</sup>たち創設メンバーに緊張が走ったのが分かった。数ヶ月前に情報漏洩で施設の存続が危ぶまれる大事件が起きたのだから、当然の反応。けど、問題はない。なぜなら明日来る使いと言う人は、元々ここを知っている人物なのだから。

「ここを知ってる人？ あつ、それってまさか……！」

目時<sup>めとき</sup>の反応で、隼翼<sup>しゅんすけ</sup>たちも気がついた。無事に懸念が払拭されたところで、今日の作業は終了。片付けをして一息ついていると、同施設内の特殊能力研究所から、俺と奈緒<sup>なお</sup>宛に内線が入った。対策室を出て、一緒に特殊能力研究室へ向かう。

「ずいぶん騒々しいっすね」

奈緒<sup>なお</sup>の言うように、施設お抱えの科学者たちは、とても忙しく作業していた。空港からここへ来る間に聞いてはいたけど、前回ここを訪れた時以上の慌ただしさを感じる。

「とりあえず行きましようか」

「はい、一番奥の部屋です」

作業中の科学者たちの邪魔にならないように奥の部屋へ。

部屋に入るなり、一番最初に目に飛び込んで来たのは、装飾が施された円状の枠で区切られたキャンバスに描かれた、幼子を抱く女性の絵画。

「なぜ、研究室に絵画が……？」

「ニールの趣味ですよ。研究の合間に描いて気分転換してるんです。これは、ラファエロですね」

ダヴィンチやミケランジェロと同じルネサンス時代に活躍した画家ラファエロの模写。相変わらず良い趣味をしている。

「シヨウ、久しぶりだね。トモリも」

「いらつしやい。忙しいところすまないね」

白衣を絵の具で汚したニールと、この研究所の責任者の堤内つつまうちが、同室内に完備されている休憩室から姿を現した。

「ニール、堤内つつまうちさん、お久しぶりです」

「ご無沙汰してまーす。綺麗な絵ですね。ところで、どうしてライトアップしているんですか？」

「これ？ これは今、焼いてるんだよ。本当は、オーブンが欲しかったんだけどね。火事になるとことだからって却下されちゃった」

「オーブン？ 絵を焼くんすか？」

「紫外線ライトを当てて、絵具や材質の劣化具合を再現しているそうだよ。私も初めて見た時は、驚き、呆れもした。描き上げた絵に、粉ふるいで埃を撒くなど普通は考えないだろう。それほど細部までこだわるものかとね。しかし——」

不思議そうに小さく首をかしげた奈緒なおに、微笑みながら答えた堤内つつまうちの目が、絵画の方へ向く。

「繊細に、緻密に、そして時には大胆に。これでいいと安易に満足しない姿勢が、些細なことでも妥協しない精神こそが、未知なる発想を生み出すのだと改めて教えられた」

話の内容から推察すると、何か新しい進展を見せた。それも、相当に重要な事案——。

「何が、あったんですか？」

「うむ…… 実は今、能力の発症を抑制するワクチンの生産を一時停止して、改良実験を行っているのだよ」

「ワクチンの改良を？」

堤内つつまうちを中心に作り出したワクチンは、発病前の子どもに投与すると特殊能力を発病しなくなると言う画期的なワクチン。それを更に改良している。発病後の能力者にも効力を発揮するワクチン…… いや、それはないな。もしそうであるならば、俺たちが旅を続けていた理由がなくなる。すぐにでも連絡が入ったはずだ。

「はいこれ、最新の実験データ」

ニールから受け取ったデータに目を通す。人と遺伝子がほぼ同じ、マウスを使ったよくある実験のデータ。新型のワクチンが投与されているらしいのだが、以前に拝見した従来型ワクチンのデータと比べて見ても大きな違いが分からない。ページを捲り、次の検体のデータを見る。

「DNAが近いな、この類似は……親子か」

「そうだよ、改良中のワクチンを投与したマウスの子ども。因みに産まれた子どもには、ワクチンの投与は行っていない」

「ん？」

データに目を戻す。投与していないとニールは言ったが、検体にはワクチンを有していることが記されていた。つまり、それは――。

「もしかしてこれは、『遺伝するワクチン』なのか……!?」

「最初の子どもに受け継がれる確率は、まだ五割程度だけだね。でも最初に遺伝したDNAを持った子の子孫たちには、確実に遺伝するところが実証された。あとは、最初に受け継ぐ精度を高めるだけだよ」

「この新型ワクチンの生産・量産が軌道に乗れば、親から子へ、子から孫へと、これから先産まれくる新しい命へと受け継がれていく。繰り返されてきた悲劇の連鎖は、Charlottes彗星の次回接近の前に、終焉の時を迎えることになるだろう」

「そう、ですか……」

――終わるのか……？ 初めて過去へ飛ばされた、時空を越えた、あの日から始まった。永遠に続くとも想った長い、長い旅がようやく終わる……。

「そんなワクチンを開発するだなんて、すごい……！」

「実は、トモリのおかげでもあるんだよ」

「えっ？ あたしっすか？ 特に協力した覚えはないっすけど？」

「自覚がないのは当然だよ、直接的な協力じゃないからね。記憶を引き継がないハズのトモリが、前世の記憶を取り戻すと言う奇跡を起こした。シヨウの能力――自身を引き継ぐ『継承』と、他者と繋がる『共鳴』。この二つの能力が、奇跡を起こした二人の絆が、未知なる可能性を新たな希望を示してくれたんだよ」

「ふふ、キミたちが驚くのも無理はない。特殊能力の発症を抑制するワクチンと特殊能力を結合させるなどと言う発想は、私には思い浮かばなかった。なぜなら先ず、なぜ記憶を取り戻せたのかと言うことの原因究明へごく自然と思考が向かってしまう。それが、科学者の性<sup>サガ</sup>と言うものだからね」

新型ワクチンは、特殊能力と科学の融合させた代物。

二人から告げられた、あまりにも衝撃的な事実<sup>サガ</sup>に俺と奈緒は、どちらかともなく自然と向き合い、目を見合わせることにしか出来なかった。

\* \* \*

食堂で夕食を食べ、使わせてもらっている部屋のベッドで仰向けになる。真っ白な天井を見つめながら、ニールと堤内<sup>つつまうち</sup>の話<sup>ナガ</sup>を思い返していた。

まさか、これほどまで研究が進展していたなんて夢にも思わなかった。あとは「消去」能力さえ完成すれば、本格的に救済への道が現実味を帯びてくる。そのためにも先ずは、研究の妨げになる今回のテロ計画は、確実に阻止しなければならぬ。明日ここへ来る、使いからもたらされる情報が頼りだ。すぐさま行動を起こせるように準備をしておかないと。

身体を起こしたところで、部屋のドアがノックされた。簡易ベットから降りて対応する。

「こんばんはー」

「奈緒さん？」

来客は、奈緒<sup>なほ</sup>だった。他には誰も居ない。

「お邪魔していいですか？」

「どうぞ、何もありませんけど」

ベッドを椅子代わりにして、並んで座る。

「それで、どうしました？」

「一緒にCDを聴こう思ったんですけど、音楽プレイヤーもないんですね」

元々仮眠を取るためだけの部屋のため、本当に必要最低限の家具しかない。

「ノートパソコンでも借りてきましようか？」

「いえ、次の機会に取っておきます。と言うことで、お話をしましょう。いろいろ聞かせてください」

「それは構わないですけど、帰らなくても？」

「明日は休日つすよ、ほら」

スマホのカレンダーによると奈緒の言った通り、明日は休日だった。旅の間、曜日のことなんて気にも止めなくなっていたから休日と言われても、正直なんだかピンと来ない。

「それと今日は、歩未ちゃんあゆみの部屋に泊めてもらうことになりましたのでご心配なく」

黒羽くろばねと高城たかしょうも今日は、施設に泊まるとのこと。二人は今、歩未あゆみたちと一緒にレクリエーションルームにいるそうだと。

「何を話しましょうか……」

「じゃあ、さっきの旅の話の続きでっ。東南アジア諸国の能力を奪ってから、アフリカ大陸へ上陸したところからです。砂漠の都市は、いかがでしたか？」

あえてなのか、奈緒なほは研究所での話しは切り出さなかった。

「とにかく暑かった、なのに夜になると寒いんですよ。昼夜で二十度以上の気温差があつて。ホテルが取れない日は大変でした……」

「おお、過酷な旅つすね」

「でもその分、星空は綺麗でしたよ。宝石を散りばめたみたいで」

「それは、ちよつと見てみたいっす。それでアフリカでは、どんな能力を奪ったんですか？」

「主な収穫は、『完全翻訳』と『探査能力』です」

前者は、文字だけじゃなく言葉も自動で翻訳してくれる便利な完全通訳も兼ねて、英語が通じない国では本当に世話になった。後者の方は、奪った能力が頭の中でイメージとして浮かぶ能力。この能力のおかげで、以前までに奪った能力についてもある程度把握出来るようになったことが収穫だった。

「他にも攻撃能力と防御能力を複数所持……順調に化け物に近づきつつありますね。異常の方は？」

「大丈夫ですよ。しっかりと休養を取りながら進めていましたので。結構普通に観光気分楽しんでいました」

「そうっすか、でしたら安心です」

その後は、欧州に渡って現在に至る。

今度は、俺が訊く。

「奈緒さんは、どうでしたか？」

「あたしですか。あたしは、まあ、普通に学校に通っていました。能力がなくなったことに気を使ってくれてか、調査も安全な能力者が対象になりましたし。それに最近は、依頼自体もほとんど……」

奈緒は責任感が強いから、能力を失ったことを理由に調査を割り当ててもらえないと、少し負い目に感じてしまっているのかもしれない。

「それは熊耳さんが、能力を失いつつあるからですよ」

「でも対策室の地図には、多くの未調査の能力者が表示されましたけど……」

「あれは俺の能力で、強制的に引き出して見つけた能力者が大半ですよ。元々任意で見つけられる能力ではなかったですし、熊耳さんたちは三年生ですから。みんな、徐々に失い始めているそうです」

「あつ、そう言えば、さきほど来た前泊まえどまりさんも能力が使えなくなっただ…… そう言うことだったんですね」

固かった表情が和らいだ、どうやら誤解と解けたみたいだ。

「そうだ、お菓子を持ってきていたんです。飲み物もありまーす」「いただきます」

キャスター付きの小型キャビネットをテーブル代わりにして、チョコレートがコーティングされた定番の菓子と無糖の缶コーヒーをいただきながら、話しの続き。順を追って話すことしばらく、話題は先月末のクリスマスライブの話しになった。『電撃』の能力者の時と同じく、黒羽くろばねから関係者席のチケットを貰って、歩未あゆみと一緒にライブを観にいったそうだ。

「ステージバック席で観ていた高城は、引くぐらい号泣して感動していました」

それほどまでに喜んでくれたのなら贈った甲斐があると言うもの。高城と同じく黒羽の大ファンの歩未は、初めてのライブに少し興奮して鼻血出してしまうハプニングがあったりと、いろいろと大変だったと小さくタメ息をついた。だけど、話しをしている時の奈緒は、なんだか楽しそうに思えた。

「ん？ 誰か来たみたいっすね」

「ですね。出てきます」

奈緒が来た時よりも、大きめで元気な感じのノック。来客は、ちょうど話題が上がっていた黒羽と歩未、それから目時を加えた女子たち三人。二人より一歩前に出た目時は、やや探るように、そして意味深に声を潜めて訊いてきた。

「今、平気……？」

「ええ、どうぞ」

「そう、ならよかった。奈緒ちゃん」

室内が見えるように半身になると、出来た隙間から目時は手招きして、奈緒を呼んだ。

「三人揃って、どうしたんすか？」

「みなさんでお風呂に入ろうと思って誘いに来たのよ」

「そうなのですー！」

「ですすっ」

「はあ……」

「じゃあ、宮瀬くんも一緒に入る？」

「はわっ!？」

一緒に行くか迷っている奈緒を後目に、わざといたずらっぽく言った目時の爆弾発言に、黒羽は盛大に取り乱し、奈緒からは冷ややかな鋭い視線を向けられた。

「入りません、四人でどうぞ。ごゆっくり」

「だつてき。それじゃあ行きましょ。ここには、天然の温泉もあるのよ」

「へえー、そうなんすね。それはちよつと興味あります」

「泳げるくらいとつても広くて、思い切り足を伸ばせるのですー！」

「わあ、それは楽しみですねーっ」

おしゃべりをしながら賑やかに廊下を歩いて行く奈緒たちを見送ったあと部屋に戻った俺は、明日に備えて必要になりそうな物のピックアップ作業に取りかかる。

リストを作成しながら、願う。

有宇による、中東諸国に数多く存在する武装組織の能力消失・組織殲滅行動をきっかけに、日本での…… 世界での無差別攻撃を思い止まってくれることを――。

\* \* \*

翌日午前十時ぴつたり、俺の投資の先生の使い人が施設へやって来た。

「お久しぶりです……！」

その人は対策室へ入るなり、隼翼たちへ向かって深々と頭を下げた。熊耳は頭を上げるようにうながし、その人の名を口にする。

「顔を上げてください。古木さん」

そう、昨夜寄越すと言っていた使いとは、以前ここで熊耳たちの送迎係を長年に渡って務めていた、古木。彼は今、俺が師とおおぐ先生の元で付き人兼運転手を務めている。

「元氣そうで安心しました」

「熊耳くん……」

関係の薄い俺たちとは違って、きつと感慨深いものがあるのだろう。熊耳だけではなく、今朝早くここへ来た七野も含めて創設メンバー五人全員が、古木との久しぶりの再会に浸っている。

「古木さん、例の情報は何？」

「そうでした。先生から、これを預かってきました」

B5サイズの茶封筒を受け取り中を確認すると、先生直筆のメモが複数枚とUSBメモリが入っていた。ノートパソコンに差し込み、

データの読み込みが完了するのを待ちつつ、メモに目を通しながら話しを訊く。

「ご家族は？」

「おかげさまで。不自由なく過ごさせて貰っています」

「そうですか。でも、大変でしょう。いろいろと」

「ははは……」

あからさまに乾いた笑い、それだけで苦勞のほどは十二分に伝わってくる。

「今付き人をしているのは、宮瀬みやせくんの方なんですか？

どんな方なんですか？」

「そうですね。抽象的な表現になってしまいますが、とてつもない方という表現が適切かと……」

「とてつもない、ですか。具体的は？」

目時めときに続いて、前泊まえとまりに突っこんで訊かれた古木ふるぎは、黙って考え込んでしまった。まだ半年も経っていないのだから無理もない。代わりに俺が答える。

「隼翼しゅんすけさんは、どうやって株で利益を出しましたか？」

「どうやってって、未来で高騰する株を記憶して、時空移動タイムリープで戻って、事前に買い集めて天井で売りさばいてた」

「ですよね」

安値で買って、高値で売る、その差額が利益になる。ハイリスク・ハイリターンハイリターンの信用取引など別の方法もあるが、これが株投資・投機投機の基本的なスタイル。特に短期間で利益を求める投機は、秒単位で目まぐるしく動き回る数字の波を見極めて乗りこなすセンスが求められる。

だが、伝説の相場師と謳われる先生のそれは、まさに別次元。変動する波を乗りこなすのではなく、先生の売買に合わせて勝手に波が動く。

「なんだよ、それ……あり得ないだろ！」

「おい隼翼しゅんすけ、どう言う意味だよ？俺たちにも分かるように説明しろよ」

最低限の株投資に関する知識を持つ隼翼は、さすがに異常なことに気がついたが、資金面についてほぼすべて任せきりにしていた七野たちは、頭にクエスチョンマークを浮かべている。

「わかりやすく言うと、買うと必ず高騰し、売ると逆に必ず暴落するんです」

「それはつまり、株価を自由自在に操れると言うことつすか?」

「そうなりますね。まあ正確には、先生が売買を行うと意図せずと同調してしまうんですよ。先生が買うと同じ銘柄の株を買い求める投資家が増えるため高騰する、逆に売ると手放す投資家が増えるため暴落すると言った感じに。ついでに関連する企業の株価も同調して大きく変動します」

「はあー!? なんだそりゃ、それじゃあ儲け放題じゃねーかッ!」

そう、七野の言う通りだ。好きな銘柄を好きな値段で売買出来る。

「……確かに、とんでもない方ですね。ですがそれは、法に触れないのですか?」

前泊の、ごく自然な疑問に答える。

「もちろん触れません。証券外務員から個人投資家へアドバイスを行います、乗るか乗らないかはあくまで投資家個人の判断ですので、金融商品取引法の相場操縦には該当しません」

ただし、ある程度キャリアを積んだ個人投資家は必ず乗る。

なぜなら、何十年もの長い年月を常に勝ち続けて地位と信頼を築いてきた来た人だから、投資家として乗らない選択肢はない。ただ影響力があり過ぎるが故に、政財界の要人たちも常に先生の顔色を窺っている。もし仮に、大企業の株が大量に売却されるようなことになれば日本経済の根幹が揺らぐことになりかねないためだ。先生自身も自覚しているから今はもう、ほとんど投資家としては引退した状態に近い。とは言っても、株を保有する企業の株主総会や政財界主催の政治パーティーなどへ招かれることが多いから多忙であることは間違いないけど。

「先生のぐく自宅には、政財界の要人などから引つ切りなしに連絡が来ます。私の主な仕事は、スケジュール管理と送迎ですね」

「政財界との太いパイプ…… 伝説の相場師と言う呼び名は伊達じゃないってことか」

「おかげでこう言った、裏からの情報を得られるんですよ」

話し終えた頃、ちようどメモに目を通し終えて、大型スクリーンにもデータが映し出された。陸海空すべての交通関係を管理する国交省の情報。企業・個人が保有する航空機と船舶が、いつどこで、どこを通るかが分刻みで表示されている。

「スゴいっすね、旅客機のフライトルートや近海を航行する船舶までぜんぶ分かります」

「しかし、日本の、それも東京周辺だけでこれほど多くの飛行機や船が往き来しているとは驚きました。正に日本の大動脈ですね」

「はわあ〜」

「宮瀬くんの話聞いて、先生も既に動いています。入管管理局の情報によると、例の写真の人物は、数人を引き連れ既に入国しているとのこと。滞在先も特定しました」

「本当ですか！」

隼翼の言葉にうなづいた古木は、ノートパソコンを操作して、ホテルの防犯カメラが撮影した人物の写真を表示させる。サングラスにハデなデザインの金色の指輪を付けている、背格好も同じだ、この男で間違いはない。

「今、警察と公安が合同で探っています。ですが証拠がないため、現時点でしよっぴくことは難しいとのこと。もしもの時は、キミたち能力者の協力が必要になることも……」

「今まで散々実験動物扱いしてやがったクセに、いざ自分たちもテロの標的になってるって知った途端に協力しろってか！ ふざけやがってッ！」

行き場のない怒りを拳に込めテーブルにぶつけた七野を、目時がなだめる。

「七野、私たちも同じ気持ちよ。でも今は、抑えて。冷静に対処しないと大変なことになるわ」

「チツ、わーってるよ！ だからムカつくんだろ！」

——頼まれなくてもやるに決まってる。七野の目は、そう言っていた。

「何にせよ、一般人を巻き込んで良い理由にはならないからな。隼翼」

「ああ、わかってるよ、プウ。古木さん、政府との協力についてはですが条件を提示します。『現在も虐げられている能力者の即時解放、責任と過ちを公式に認め、今件に関わりを持つ政治家及び科学者、関係機関の責任者全員が法による厳正な裁きを受けることが条件です』と伝えてください」

「わかりました。私から、先生を通して政府高官へ伝えてます」

古木は一切顔色を変えず、スマホを持って対策室を出て行った。こうなることは事前に想定済みだったと言うことなのだろう。

隼翼の提示した条件は、間違いなく受け入れられることはない。再交渉で代替案を提示して来るだろうが、決して折り合わない。この交渉は、必ず決裂する。はなっから協力関係を築けないことは承知の上、お互いに干渉し合わない共闘と言う形で手打ちに終わる。だから、これだけ詳細なデータを事前に提供してくれた。

「メモには、何が書かれていたんすか?」

「例の男が、私的にヘリでの遊覧飛行の予約を入れていると言う情報です。日時とルートは、これです」

ノートパソコンを操作して、別のファイルを開く。点線で表示された一機のヘリコプターの飛行予定ルートは、都内の飛行場から都市部の名所を巡り、東京湾を回って戻るルートが予定されている。

「ただの観光とも思えるルートつすね。まあ、ヘリコプターでの遊覧飛行なので贅沢とは思いますが」

「それよりも発着地のヘリポートは、我々の星ノ海学園の近くではないですか!」

「はわわっ!」

比較的冷静な奈緒とは、正反対の反応を見せる高城と黒羽。二人の場慣れしていない普通の反応が、なんだかとても新鮮に感じる。

「別に驚くことでもないっしょ。ここはセスナなどの免許も取れる民

間の飛行場ですし、機体の手配や保管も、お金さえ積みせば多少の融通は利きますよ」

「そう言うことですね。それから当初の予定日から日程を繰り上げています。おそらく近いうちに動きがあると思われます。熊耳くまがみさん、飛行ルート上を意識してください」

「ああ、わかった」

くまがみ 熊耳の肩に手を置いて、能力を引き出す。

「…… 見つからないな。今現在、特殊能力者は居ない」

「そうですか。では、俺たちも動きましょう」

俺たちも、それぞれ行動に移る。

最悪の事態を避けるため、この大勝負に勝利し、新しい未来へ希望を繋ぐために――。

## Episode 50　くフェイクく

遊覧飛行予定日の前日の夕刻、事態が動いた。ターゲットが滞在しているホテルの表玄関付近で張り込みをしていた前泊まえじまりから、ホテルの裏口からやや離れたコインパーキングに車を止めて、ホテルが見渡せるカフェに居る俺と熊耳くまがみの元へ連絡が入った。熊耳くまがみは、スマホを操作してスピーカーモードに切り替え、ややボリウムを落とし、テーブルに置き直した。

『今、こちらで動きがありました。ターゲットと思わしき男が、仲間と共にホテルを出ました。どうやらチェックアウトしたみたいです。僕と七野しちのは、今から追跡を開始します。それから写真を送信します』  
「わかりました、お願いします」

通話を終わると、七野しちののスマホからタブレット端末へ写真が送られてきた。サングラスと金色の指輪をはめた、例の大陸系の男が、仲間たちと共にホテルを出て、横着けされたタクシー二台に別れて乗り込むところが写っている。

「俺たちも追うか？」  
車のカギを手取る熊耳くまがみに、俺はタブレット端末で同ホテルの予約状況を確認しながら答える。

「いえ、ここは様子を見ましょう。卵は一つのカゴに盛るな、です」  
「何のことだ？」

「投資家の心得の一つです。割れやすい卵を同じカゴに盛ると、落とした時に全部割れてしまう。一つにまとめずリスクを分散しろと言う意味です」

「そう言えば、裏口こつちの公安たちも動いていないな」  
「おそらくホテルに確認を取っているんですよ。今ホテルを出た男たちが、本当にチェックアウトしたのかを」

「なるほどな」

タクシーの尾行は前泊まえじまりたちに任せ、待つこと十分ほどで、裏口の近くで停車していた警察と公安の車両が動き出した。

「動いた。どうやら裏が取れたようだな」

「前泊まえどまりさん、今、どの辺りを走っていますか？」

繋いだままの状態にしてあるスマホへ声をかける。

『タクシーは二台とも、大田区を羽田方面へ南下しています』

「羽田？ まさか、空港へ向かっているのか？」

『おそらく、そう思われます』

「そのまま追跡してください」

『わかりました。新たな動きがあれば、すぐに連絡を入れます』

「追わないのか？」と、再度聞いてきた熊耳くまがみにタブレットを見せる。

「同部屋ですが、空室になりません」

「どういうことだ？ 警察か、公安が押さえた…… なら、捜索に入ってるか」

所詮、タレコミ情報、令状は下りない。現行犯でない以上一般人を、それも外国籍の人間相手には迂闊に手を出せない。下手を打てば、外交問題に発展しかねない事案。

ただ、このホテルは、ビジネスホテルじゃない。決して単価も安価ではないし、特別観光シーズンでもない今、グレードの高い部類に入る同じタイプの部屋が他にもある中で、あの男が泊まっていた部屋が空室にならないまま埋まっている。そして、他の仲間が泊まっていた部屋は先ほど、空室と表示されてたまま残っている。

「予め予約が入っていたとしても、偶然にしては少々できすぎているな」

「ええ、ですので調べます」

「どうやって？」

「もちろん、ホテルへ行くんですよ。昼過ぎに、正面の部屋に空きが出たので取っておきました。戻ってくる前に、別室で待機します」

「抜かりないな」

会計を済ませて、カフェを出る。辺りは、すっかり夜になっていた。コインパーキングの車をホテルの駐車場に停め直し、念のためダテメガネをかけて変装。

「よし、じゃあ行くか」

「ええ」

「はい」

妙な違和感を感じた。返事が一つ多い。同じ違和感を共有した俺と熊耳は、同じタイミングで後部座席を振り返る。すると、ここに居ないハズの人物が澄ました顔で座っていた。

「な、奈緒さん、どうして?」

「学校が終わったので、手伝いに来ました」

「いや、そんなことよりお前、どうやって乗った!?!」

「ん? 車のキーは、ちゃんと施錠しておいた方がいいですよ。車上荒らしも多いっすし」

熊耳に、批難の視線を向ける。

「しっかりロックしたぞ、お前も見えていただろ。そう言えば、出かけにスペアキーが見当たらなかったような」

再び奈緒を見ると、勝ち誇った顔をしていた。スペアキーを返すことを条件に、彼女も一緒にホテルへ行くことに。広いエントランスを、フロントへ向かいながら話す。

「俺は、ターゲットが泊まっていた両サイドの空いている部屋を借りる。お前たちは、二人で正面の部屋に入れ」

「了解っす」

「わかりました。入室以降は、電話やメッセージでの連絡はなしで。用件がある場合はさり気なく、部屋のドアをノックしてください。このラウンジで落ち合いましょう」

「前泊、七野、聞こえてたな。今から通話を、無線イヤフォンに切り替える。インカムじゃないから俺たちの声は聞こえなくなるが、そっちの声は届いている、気にせず話してくれ。じゃあな」

フロント前で、熊耳と別れる。空き部屋の確認をする熊耳より一足先に宿泊代を支払い、代わりに部屋のカードキーを受け取り、エレベーターに乗って部屋の階で降りる。足が沈むほど深い絨毯が敷かれた廊下を、奈緒と並んで歩く。

「すごい廊下っすね。何だが逆に歩きづらいです」

「ですね。この部屋です」

部屋に入って、ドアを閉める。

「おお、部屋も豪華ですね。あなたの家ほどじゃないんですけど」  
「広さだけですよ、家には必要最低限な家具しか置いてないですし。さて」

「まずは、簡易機器で盗聴器の有無を調べる。」

「盗聴器の類いはなさそうですね」

「でしたら、安心して話せますね。何をするんですか？」

「ドアスコープから正面の部屋の人の出入りを調べます」

「このカメラを付けなければいいんですね」

床に置いた機器の中から細工を施した小型カメラを持って、部屋のドアスコープの前に立った奈緒が、カメラを取り付けてくれている間に、カメラから延びるコードをタブレットに繋いで、カメラからの映像へ切り替える。

「どうですか？」

「ばっちりです」

タブレットの画面には、廊下の様子が映し出されている。

そして、ちょうど今、熊耳が部屋の前を通り過ぎた。

「ばっちりっすね」

部屋の奥から持って来て椅子に座って、今までの経緯を簡単にまとめて話しながら、タブレット越しに廊下を見張る。

「では、確証があるわけではないんですね」

「ええ、ぶっちゃっけ勘です。取り越し苦労で終わるといいんですけど」

——落ちてくるナイフは掴むな。

これも教わった言葉、空中でナイフを掴もうとすると大ケガをする。落ちてから拾えば、ケガはしない。常に焦らず慎重に物事を見極めて行動しろという意味。

「あたしは、当たってると思いますよ」

「どうして？」

「女の勘です」

——何でだろう。先人たちの言葉より妙な説得力がある。たぶんきつとあれだ、黒羽を泊めたことを言い当てられたからだろう。

「今、ノックされませんでしたか？」

一瞬離していたタブレットに目を戻すと、熊耳くまがみが部屋を通り過ぎていくところが見えた。前泊まえしまりたちの方で、何か進展があつてその報告だろうか。

「このタブレットとあたしのスマホと同期させます。これなら外へ出ても映像が見られますので」

「お願いします」

一旦部屋を離れ、ラウンジに一人で座る熊耳くまがみと背中合わせで話す。

「それで？」

「今しがた、例のグループが全員揃つて搭乗手続きを行ったようだ。パスポートでターゲット本人と確認された。出国まで見届けるそうだが、ここで調査は打ち切りになるだろう」

「そうですか」

——空振り。事前に防げたとポジティブに考えるべきだろう。これで研究の方に専念できる。それで終い。

「あつ、見てください」

隣に座る奈緒なおが、血相を変えてスマホを見せてきた。

「これは……。熊耳くまがみさん、すぐに出ます。詳しい話しは車の中で」

「わかった」

ホテルを出て、車に乗って待機。

「それで、何があつた？」

「これを見せてください」

奈緒なおのスマホを見せる。

ドアスコープに取り付けたカメラからの動画には、空港にいるはずの大陸系の男らしき人物が荷物を持って、部屋を出ていく場面を捉えていた。

「どういうことだ？ 空港にいるはずの男がなぜ、ホテルにいる……!?!」

「鉄砲。昔からある古典的な詐欺です」

鉄砲は、投資における詐欺。偽装した身分証で開設した口座で投資の実績を積み、ある程度の信頼を築いたところで大勝負に打って出

る。仮に損失が出た場合そのまま行方をくらし、損失を銀行と証券会社へ押し付ける詐欺。存在しない人物だから足も付きにくい。

「騙されていたんです。俺たちが追っていた男は、最初から別人だった。サングラス、特徴的なデザインの金の指輪、同じ背格好から本人だと思い込んでしまった」

「古木ふるぎさんが持ってきた写真のターゲットは、既に偽者だったのか」

「おそらく、来日した時から影武者だったんでしよう」

「しかしこの男は、どうやって入国したんだ？」

「本人確認でサングラスを取る訳ですから、顔立ちも似ているはず。パスポートを交換するか、もしくは偽造するか。方法はいくつかあります」

「あつ、出てきましたよ！」

奈緒なおが、後部座席から声を上げた。ターゲットが、表玄関から堂々と出てきた。動きに合わせるように黒塗りの高級車が入り口前に止まり、ターゲットが後部座席に乗り込むと、車は空港とは別の方へ向かって動き出した。熊耳くまがみの運転で後を追う。

「前泊まえどまりさん、七野しちのさん、そのターゲットはフェイクです。今、本物を追跡しています」

『マジかよ?! いつすり替わったんだ?!』

『フェイク。知らせますか?』

「いえ、伏せておいてください。今下手に動かれると獲物を逃しかねません」

『敵を騙すなら味方からですね。分かりました、伏せておきます。僕たちも空港で待機します』

「お願いします。熊耳くまがみさん、対象車から最低一台以上間に挟んで追跡してください。居なくなつた場合は、最低でも150メートル以上の車間距離を取ってください」

「初心者が無茶な注文をするなよ……」

自信なさげに言っていたが、四人の中で一番運転が上手いと豪語していただけあって尾行は上手いこといった。高速道路を走り、東京を離れ、神奈川に入る。とあるインターを降りた車は徐々に南下してい

く。

「車通りが少なくなつて来たな」

「都心と比べたら、どこもそうじゃないっすか？」

「まーな」

「あつ、中華料理屋だ。おお、いかにも地元の常連さんが通つてそんな感じの年季の入った店構えっすねー」

「お前には、緊張感はないのか？」

「だって、まだ晩ご飯食べてないですし」

二人の会話を聞きつつ、カーナビの地図を広域化して行き先を予測しながら走路を指示する。

「ここで一旦離れましょう。相手の出方次第ですが、次の信号を左折してすぐに右折出来る道があります。絶対に横は見ないでください。そうですね、晩ご飯の話しでもして気を逸らしましょうか」

「じゃあさっきの中華料理屋さんで！ あ、でも中華は前に横浜で食べたしー」

「なら、カレーはどうですか？」

「海軍カレーっすか、いいっすね。近くにお店あるか探してみまーす」

「お前たち、緊張感なさすぎだからな？」

信号に引つかかつて並列する形で止まったが緊張感皆無の会話で乗り切り、道を一本隔てて再び追跡を開始。頃合いを見計らつて同じ道へ戻る。どんどん車通りの少ない道路へと進んでいくが、ナビによるとこの先は一本道のため尾行を一旦止めて、少し時間をおいてから後を追う。

「ここは…… 埠頭か」

「倉庫とかコンテナが、沢山ありますね」

「ですね。一度戻ってから車を探しましょう」

コインパーキングに車に止めて、改めて埠頭へ戻り、ターゲットの車を手分けして探す。探し始めること数分後、奈緒なほから車を見つけたとメッセージが入った。指定された場所で合流。

「あそこです、あの倉庫の影に止めてあります」

「本当だ。よく見つけたな」

「調査で慣れてますのでっ」

やや得意気に胸を張る。幸い多く点在するコンテナの物陰で、冷たい真冬の浜風を凌ぎ、ターゲットが現れるのを待つ。ターゲットの男は一時間足らずで倉庫から姿を現した。来たときと同様に車の後部座席に乗って、倉庫を離れていった。

「では、調べに行きます。中に見張りがいることも十分にあり得ます。

細心の注意を払って行動してください」

「ああ、わかってる」

「はい……！」

「行きましょう」

小走りで倉庫へ向かい、指紋が残らない様に手袋をはめた手でドアノブを回す。しかし、カギが掛かっついて開かなかった。だが、中から反応がないと言うことは見張りなどはいない可能性が高い。これは好都合だ。ピッキングで開けるか、それとも、セキュリティ対策を取っているともみて慎重に動くべきか――。

「あの、あの窓、開いているみたいですよ」

「窓？」

奈緒なほが指を差した先は、建物の二階に相当する高い位置の窓。確かに一カ所だけ施錠されていないように見える。

「あそこから入りましょう」

「だが、どうやって登る？ 登れるような足場はないぞ」

「ここから登ります」

雨樋のつかみ金具に足をかけ、一步一步慎重に登り、窓枠を掴み開けようと試みたが開かなかった。窓は実際には開いておらず、カギが中途半端に閉め損なっている状態だった。薄い金属片の先端を隙間に差し込みカギを開けて、倉庫内へ侵入。後から登ってくる奈緒なほたちに手を貸して、引つ張り上げる。

「手分けして証拠を探しましょう」

各々、ライトを手に暗い倉庫内を物色を始める。

正規の入り口付近のデスク上に一台のノートパソコンが置かれていた。引き出しを調べると、テロリストを入国させる手筈の書かれた

書類を見つけた。

「ビンゴ、奈緒さん」

「はい」

倉庫内を撮影していた奈緒を呼び、カメラで書類を撮影してもらう。その間に他の書類を調べる。東京湾沖に停泊させたタンカーから実行犯を乗せることを示唆する内容が記されていた。

——なるほど、それで遊覧飛行か。遊覧飛行の最中にタンカーに立ち寄り実行犯人を回収する。タンカーは、足が付きにくいパナマ船籍。東京湾沖を数多く航行する船舶だが、飛行ルート上から拾うならある程度絞り込めるだろう。

「宮瀬、来てくれ」

熊耳に呼ばれた。撮影は奈緒に任せて、ライトの灯りを頼りに熊耳の元へ向かう。

「これを見ろ」

「自動小銃に弾薬、手榴弾。それと自爆用の爆弾が括り付けられたベストですか……」

「ガチなテロ計画だな」

「ええ、洒落になりません」

こんな物が使用されれば、被害は計り知れない。

これらの重要な証拠はすべて奈緒にカメラに収めてもらって、倉庫を後にした俺たちは、これからの対策を練るため施設へ急いだ。

## Episode 51 旅立ち

「複数人の完全武装のテロリストによる自爆テロ、か。都心のど真ん中で実行されたら、いったいどれほどの被害がでるか……。」

「絶対に阻止しないと！」

鬼気迫る目時の言葉に、隼翼も険しい顔でうなづいた。ホテルで機材を回収したのち、施設へ戻って、奈緒が記録してくれた動画を投影しての対策会議は、難航していた。

「この情報は、共有しているのか？」

「いや、まだ政府側には通達していない。古木さんのところで止めてもらっている」

「なぜですか？ 相手が能力者ならまだしも、訓練されたテロリストであるなら、専門機関へ任せる方が賢明では？」

「頼るのは癪だけだな。チツ！」

「まあ、それはもつともなんだがな……。」

壁により掛かって腕を組んでいた熊耳は、俺に視線を移した。そう、止めているのは俺の独断。情報を通達するのであれば、最速で実行当日。それも、相手が飛行場へ姿を見せてから。そうでなければ、警備配置で計画を悟られ逃亡してしまうおそれがある。もし仮に今回、事前に危機を回避することが出来たとしても、体勢を立て直し、いずれまた仕掛けてくることが十分考えられる。そして今度は、更に入念に準備をしてくる。

結局のところ、テロを支援する母体を潰さなければ根本的な解決には至らない。

「理屈はわかった。けどお前、まさか真っ向から対峙するつもりじゃないよな」

以前相手したチンピラとは格が違う。その場しのぎで対峙できるほど、生ぬるい相手ではないことは重々承知の上。

「可能な限りの手は打ちます。ただ、最悪は常に想定しておかなければなりません」

「最悪か。考えたくないわね」

「奪った能力で武装した弟が戻ってくれば、どんな相手だろうが問答無用でぶっ潰せるのになー」

「弟さんは今、どの辺りに？」

「……今日はまだ、連絡がないんだ。奪取の邪魔にならないよう、基本的に電源は切っているからな。こつちから連絡は取れない」

眉をひそめる深刻な表情で言った隼翼の言葉を聞き、アイツの身に何かが、まさか正気を失ってしまったのではないかと心配と同時に緊張が走る。だが、それもつかの間、緊張が張り詰める対策室内に着信音が鳴り響いた。隼翼は、手探りで手に取ったスマホに大声で呼びかける。

「有宇か!? あ、ああ……悪い。今、音声を切り替えるから、ちよつと待ってくれ。目時、頼めるか？」

「うん」

頼まれた目時は、スマホの音声を切り替える。どうやら、話題に上がっていた張本人と連絡が付いたようだ。しかし、これ以上ないタイミング。まるで話しを聞いていたかのように——ああ、なるほど、そういうことか、それなら話しは早い。これで、大胆な立ち回りが出来る。

「それで、正気は保っているか？」

『うん、問題ないよ、兄さん』

「そうか、それなら安心した。歩末も元気だ、有宇に会いたがってる。あとで電話かメールをしてあげてくれ」

隼翼との受け答えもすっかりしている、本当に問題ないみたいだ。「それはなによりで。それで今、どこに居るんすか？」

『その声は友利か、お前も居たんだな。中東で、最後に最大規模のグループを狙ってる。けど、武装した護衛が厚くてちよつと苦労してるんだ』

「そうですか。ところで、日本地図は持っていますか？」

『日本地図？ あるにはあるけど、日本を含めた東アジア広域の地図しかないから細かいところはわからないぞ』

「構いません。今、東京湾沖近辺に能力者が居ないか調べていただき

たんですが」

『東京湾沖？ わかった、ちよつと待ってくれ……』

ガサガサとバッグをまさぐる音がして、ほどなく声が戻る。

『居たぞ。東京湾沖東へ約100キロの位置に、能力者がひとり居る。けど、あまり動きがないな』

おそらく、海上で停泊している貨物船<sup>タンカー</sup>。飛行ルート上から更に東の房総半島沖の位置、こちら側の探知能力を警戒してなのかは不明だが、これだけ正確な居場所が分かれば十分に探り当てられる。

「熊耳さん、意識してください」

「見つかった。能力は、『物体移動』」

「『物体移動』か。文字通り、物を移動させる能力なんだろうけど。有宇<sup>ゆう</sup>、どんな能力か分かるか？」

『無理だよ、兄さん。奪えばイメージは浮かぶけどね』

「そっか、だよな」

——物体移動。倉庫の武器も、同じ能力者による密輸と考えるのが自然。迎えのヘリの移動に合わせて、タンカーが日本へ近づき、能力を使ってテロリストをヘリへ送り込む算段。可能であれば、直前に潰しておきたい能力——やれるか？ 合図をくれ。

『あつ、ごめん、こつちで動きがあった。切るよ』

「ああ、くれぐれも無理はするなよ」

『分かってるよ。じゃあまた——』

ツーツーツー……と、通話が終わったことを告げる音が対策室内に鳴り響いた。有宇<sup>ゆう</sup>は、動き始めた。俺も、本格的に仕掛けるとしよう。最後で最大の<sup>ディール</sup>大勝負を——。

\* \* \*

「本当に、一人で行くのか……？」

日が暮れ始めた夕刻、テロリストを迎えに行くヘリが飛び立つ予定の飛行場付近まで送ってくれた熊耳<sup>くまがみ</sup>は、止めた車の運転席の窓から険しい顔を覗かせた。

「ええ、ここで潰すべき相手ですから。策は何重にも施してありますので、ご心配なく」

「……ならいいが。目時めじきからだ。今から、埠頭の倉庫へ捜査が入るようだ。海保の巡視船も、東京湾沖へ展開を開始している」

「そうですか。じゃあ、俺も行つてきます」

入国は既に確認済み、種は蒔いた。

連絡を合図に準備した荷物を背負い、事前に細工しておいたフェンスを破り、飛行場内の格納庫へ向かう。だが、ヘリコプターは既に格納庫からヘリポートへ移動され、エンジンに火が入っていた。

予定時刻よりも動きが速い、焦つて速めたか、それとも動きを読まれているのか。建物の影を利用して近づき、ドア付近にしゃがんで、機体の影に身を潜める。

「どうするんすか?」

「そうだな……」

整備中に侵入して、ヘリ内部に盗聴器とGPSを仕掛けるつもりだったけど、もう遅い。機器の入った荷物を放り込んでも捨てられる。こうなったら乗り込んで時間を稼ぐしか……

「——つて、奈緒なおさん、どうしてここに!?!」

「作つてもらったスペアキーで、隠れて乗つてついでにきました。得意な人がいるつしよ?」

——ああ……思い当たった、研究所で画を描いてるアイツだ。まったく、余計なことをしてくれる。

「あつ、誰か降りてきました! 行きましょう!」

止める間もなく奈緒なおは、整備士が降りた隙をついてヘリに乗り込んでしまった。予定変更、直接乗り込む。動いてくれ。ドア横の取っ手を掴んで、ヘリに乗り込む。するとドアは自動で閉まり、機体は重力に反して地面から浮き上がった。

『なんだ、このガキどもッ!?!』

俺たちに気づいた例の大陸系の男が、スーツの懐へ右手を持っていた、威嚇するように英語で大声を上げる。

『待て』

別の男の声、操縦席からじゃない。大陸系の男の後方から聞こえた。内部で話しが出来るほど防音対策は完璧のようだ。大陸系の男

の影から、白いスーツを着た欧米系の男が姿を現した。

『ようこそ、と言いたところだが、キミたちを招待した覚えはないのだがね』

——間違いなく本物、近年欧州諸国を中心に近年急成長を遂げた軍事産業のトップ。引きずり出せた。咄嗟に奈緒なほを背中に庇い、欧米系の男と対峙する。

『それは、失礼しました。特殊能力者と言えば、分かりますか?』  
『ほう』

『能力者だと? そうかテムエか、アイツらをやったのは……!』  
あの連中を差し向けたのは、この大陸系の男と判明。予想通りだ。男は怒気を強めながら詰め寄って来る。

『待て。うかつに近づくな』  
『しかしッ!』

一瞬後ろを振り向いた隙に、左の懐へ手を伸ばす。

『二度も言わすな』

『…… 申し訳ありません』

有無を言わさぬ迫力に気押されて、後ずさり。相当な力関係が、この二人の間には存在しているようだ。

『ボス』

『こちらは構わなくていい。予定通りに飛べ』

『了解しました』

地上を離れたヘリは、東京湾方面へ向かって動き出した。

ボスは椅子に座って、足を組む。

『さて、化かし合いは苦手だね。単刀直入にいこう、どのような用件かな?』

『こちらの要求はひとつです。即刻ヘリを戻し、日本から退去していただきたい』

『フツ…… なるほど、確かに分かりやすい。だが、その願いを聞くことは出来ない。見ての通り、これからスカイクルージングを楽しむ予定だね。私も、何かと忙しい身だ。せつかくの休暇を台無しには——』

『こんな輸送ヘリで、ですか?』

表情が変わった。

『お前たちの目的は分かっている。今から、東京湾沖のタンカーに待機させているテロリストを迎えに行くんだろ』

『テロリスト? いったいなんの話しかな』

『とぼけるな。もう計画どころじやないだろ』

『そうか、キミか、仕掛けてきたのは……!』

立ち上がるうとしたところで、機体が突き上げられたように縦に揺れた。もう少し穏やかにいかないものなのか。まあ愚痴を言っても仕方ないか。とりあえずこれで準備は整った。

『大丈夫ですか?』

「平気つす」

突然の衝撃に少し驚いて腕にしがみついていたけど、平気そうだ。一方、男たちの方はと言うと不測に事態に状況確認を急いでいる。

『うおっ!』

『くっ……何ごとだ?』

『レーダーには何も。おそらく、突風かエアスポットと……』

『この機体が揺れるほどのか? まあいい……』

機体の揺れが収まり、改めて立ち上がったボスは、俺に向き直した。  
『……あの攻撃は、見事だった。わずか一週間足らずで株価は元値の三分の一以下まで大暴落。自社買いでかろうじて支えてはいるが、世界中の投資家たちは今も株を手放そうと躍起になり、金融機関の信用も完全に失い追加融資を受けられないほどのダメージを負った。まさか、キミのような少年の作業だったとは……!』

俺が仕掛けた、相場師としての大勝負<sup>ディール</sup>。

師匠から学んだ知識のすべてと、日本に帰国してから荒稼ぎして貯めた全財産をつぎ込み、世界中の投資家たちを巻き込んだ相場操縦――風説の流布。証券取引法に抵触する犯罪行為。

しかし、罪に問われることはない。裏付けとして、奈緒<sup>なほ</sup>と一希<sup>かずき</sup>さんが囚われていた学校で行われていた非人道的な実験データ等を、内部リークという形に見せかけて流失させた。

株主は当然、事実関係の確認に動く。例え口で否定したところで、植え付けられた疑念は簡単には拭えない。真犯人は存在しないため、処分することすら出来ない。完全否定しえないため徐々に株価は下落し、あとは滝のように墮ちる。公的資金を投入しなければならぬほどのダメージを与えた。

しかし、公的資金投入となれば。政府役人により、企業の実態を調べられる。つまりは、今まで行ってきた非人道的な行為だけではなく、テロ支援行為が白日の下にさらされることになる。国家プロジェクトの可能性のある前者はともかく、後者のテロ支援行為は完全にアウト。他国にバレた時点で、現政権は崩壊する。

秘密裏に支援していた他国の政府・企業なども損切りへ動いた。

破滅は、もう時間の問題。だが、駆け引きは、ここからが本番。何としてでも引き出す。『物体移動』の能力の本質を――。

『埠頭の倉庫も、『物体移動』の能力者を乗せた東京湾沖のタンカーもつきとめて既に包囲している。もう終わりだ、諦めろ』

『これが、証拠です』

横から手を伸ばした奈緒なおは、目時めときたちが現場を撮影しているライブ映像が共有されたスマホを、男たちに突きつけて見せた。

『大方の見当はつくが、どうやって知った？』

『お察しの通り、その男を尾行した』

『なッ!? も、申し訳ありません……』

『まあ、いい。どうにせよ、無意味なこと。接近せずとも『移動』は可能なのだよ。武器も、人も、自在に!』

はったりだな。無制限に移動させられるのであれば、輸送ヘリで迎えに向く必要などない。ある程度の接近は必要と見て間違いない。おそらく、距離が一度に運べる物量に制限がある、どうだ? 問いかけに返答がきた。

『能力者が視認できる距離まで接近する必要があるんだろ』

俺の答えに対し一瞬驚いた表情かおを見せ、顔を伏せると不気味に笑い出した。

『クツクツク…… もつたいない、もつたいないな。キミほどの才気

があれば世界でも十分に戦える！ 攻撃の出所を探りに自ら極東の島国まで足を運んだ甲斐があつたというもの。どうだ、私と共に、世界を相手に勝負する気はないか!？」

『そう言つて取り入つたのか、今までも』

俺に向かつて差しだそうとした手が止まる。

『おたくが開発した最新兵器…… あれは、現代の科学力では到達しえないオーバーテクノロジー。何人犠牲にした、答えろ』

『…… その質問に答える前に、ひとつ忠告しておこう。頭が切れすぎると長生き出来ないぞ。さて、どうだったかな…… 十から先は数えていない。キミと、キュートなガールフレンドも加わるか？ 特殊能力者——』

胡散臭い薄ら笑いが消え、目が据わつた。ようやく本性を現した。奈緒なおの手に力が入つたのが分かる。怒りと一緒に緊張感が伝わってくる。俺は、ボスの額に狙いを定めて銃を構えた。

『ん？ そんなオモチャでどうしようかと？』

『オモチャかどうかは、そいつに訊け』

アゴで、大陸系の男を指す。

『ああん？ なつ、ない……!?!』

懐の銃が無くなつていることに気づき、慌てふためく男。銃が本物であることを悟つた途端、顔色が急変した。セーフティを外し、狙いを定めて引き金に指をかける。

『ま…… 待て、よく考えるんだ。倉庫も、タンカーも、我々の能力者の情報も押さえたのなら、キミたちの勝ちだ。こんなことをしても得はしない、キミの手が汚れるだけだ。な？ そうだろう……』

ゆっくりと両手を上げ、じりじりと下がっていきながら一瞬目をシートへ落とした。

「奈緒なおさん、しっかり掴まっていってください」

「はいっ！」

彼女が力強くうなづいたのを合図に、隠されている武器を取られる前にフロントガラスへ向けて引き金を弾き、空いている左手で非常口のドアを開け放つ。同調するように、メインドアも同時に開いた。外

の空気が一気に流れ込み、機体が大きく左右に揺れる。

『な、なんてクレイジーなヤツだ！ 高高度高速飛行中にドアを開けるなど、下手をすれば墜落するぞ?!』

『では、その前に失礼します』

『ボ、ボス、前が——!』

銃を放り投げ、男たちに背を向けて別れを告げる。

「Good-bye」

奈緒を抱いて、ヘリコプターから飛び降りた。

\* \* \*

下に光が見える。都心の光。徐々に地上が近づいていく。

体勢を立て直し、夜空へ目を向ける。さつきまで乗っていたヘリコプターが、視界を失い蛇行飛行していた。だが、次の瞬間——その場から突如として消え去り、代わりに水平線の向こうが赤く光った。

「奈緒さん、身体をめいっばい広げて!」

「はい!」

両手を繋いで、身体を大の字に広げる。ほんの少しだけブレーキがかかった。けれど、落下の勢いは増していく。風を切り裂く音、真冬の冷たい空気も相まって、手の感覚がなくなってきた。でも、この手は絶対に離さない。離すわけには、いかない。

100メートル、200メートル、どんどん地上が迫ってくる。

徐々に大きくなる風切り音の中、別の音が聞こえた。

——人の声。目を向ける。夜空に輝く月を背に突如、人影が現れた。俺と奈緒は片手を離して、その人影に手を伸ばす。

「掴まれ!」

「有宇!」

「乙坂さん!」

煌びやかな高層ビルが建ち並ぶ地上まであと数百メートルのところまで迫ったところで、俺たちの手が繋がった。そして、そのまま東京の夜空を滑空し、ゆっくりと星ノ海学園の屋上に降り立った。

「ナイスキャッチ!」

褒め称えながら有宇の背中を叩く。

「いてっ！ 無力化して叩くなよ！ 僕たち、能力の相性悪すぎだろ……………」

大袈裟に背中をさすりながら愚痴をこぼす有宇を笑い飛ばし、手で髪の毛を整えている奈緒に目を移す。

「ケガは、ないですか？」

「あ、はい、大丈夫です。乙坂さん、ありがとうございます、助かりました。ところで、ヘリコプターはどこへ消えたんですか？」

「ん？ ああ、奪った『物体移動』の能力でタンカーの甲板上に飛ばした」

「さつき海で光ったのは、それっすか。大丈夫なんすか？」

「どうなったかはまでは責任持てない」

ヘリコプターが消えてから少し間があったから、たぶん脱出してるだろう。まあ、海保がタンカーを包囲してるからどのみち終わりだ。テロリストの資金源は潰した。これで研究に専念できる。

「さあ、施設へ帰りましょう」

「ああ、さすがに疲れた……………」

「はい、お腹もすきました」

熊耳くまがみに連絡して、車を星ノ海学園へ回してもらおう。

「そう言えば友利、どうしてお前まで居たんだ？」

「もちろん言い逃れ出来ない証拠を押さえるためっすよ。じゃーんっ」

得意気な表情でスマホを取り出して、映像を再生させる。さつきのヘリコプター内でのやり取りが、バッチリ録画されていた。言い逃れできない完璧な物証。

「見てくださいっ、この緊張感と臨場感！ この高画質・高音質が『ZHIEND』のロゴ入り、高性能スマホケースの実力っす！」

「はあ………… さすがだな、こう言うところは」

「まったく。ハラハラさせられるけど」

屋上から降りて、校門前まで迎えに来てくれた熊耳くまがみの車に乗り、俺たちは保護施設へ向かった。施設へ到着後さっそく、有宇が持ち帰った目標の三千を越える能力の採取が行われ、『消去』を産み出すため

の実験を開始した。

そして、約ひと月。冬の終わり頃、ついに特殊能力に関するすべてを消し去る特殊能力——“消去”<sup>デリート</sup>が完成した。

俺は自ら被験者になった。“消去”<sup>デリート</sup>の投薬を打つと告げても、今回は誰にも止められなかった。最悪の場合に備えて“時空移動”<sup>タイムリープ</sup>を使える有宇<sup>ゆう</sup>がいることと、俺が能力を得ることが必須である分かっていたからだと思う。しかし、代償を覚悟して投薬を打ったが意識を失うことはなく。それどころか、身体に異常は何もおこらなかった。詳しく検査をすると、保有する能力のひとつ“偽り”<sup>デリート</sup>が消えていることが判明した。

これが“消去”<sup>デリート</sup>を得るための代償……能力の消失。俺は、三つ能力を所持していたため、その中のひとつが消失した。

そして俺は、最終目的である、救済の道を歩み始める。

一希<sup>かずき</sup>さんが入院している病院近くの岬で、水平線へ沈んでいく夕日を見つめていた。

「本当に行くのか？」

背中越しに隼翼<sup>しゅんすけ</sup>が、改めて意志を問う。

「はい。完成した新型ワクチンのデータも記憶しました」

「お前一人で、出来るのか？」

「大丈夫です。道筋は立てました、必ず終わらせます。それに——」

顔だけ動かし、隼翼<sup>しゅんすけ</sup>を見る。

「俺は、天才だから。まあ、本物ではないですけど」

事実、“時空移動”<sup>タイムリープ</sup>に巻き込まれた恩恵だ。

やや自虐的に笑って見せ、顔を戻して再び空を見上げる。

「そうか……。だけど、奈緒<sup>なほ</sup>ちゃんのことはどうするんだ？」

「……絶対にもた逢うと約束をしました」

夕日は沈み、オレンジ色だった空がスミレ色に染まり始めた夜空に、無数の星々が瞬き始めた。刺すような冷たい北風が頬をなでる。

「なあ、俺と一緒に連れて行ってくれ」

「あなたはもう、能力を使えないじゃないですか」

「ここへ来る前に調べてもらった。消えかかってはいるが、まだ残っ

てた。お前の「共鳴」は、自身の身体を媒体に発動する。だったら、俺の目が見えなくても引き出せるハズだ。違うか？」

「記憶を保持したまま過去へ戻って、どうしようか？」

「もう一度、星ノ海学園を買収する。お前が、帰って来られる場所を作ってやる」

「……能力を失いますが、力業は使えませんよ」

「だとしてもだ、絶対に作ってやる……！」

決意に満ちた、とても力強い目をしている。

——そうか、熊耳たちは、隼翼のこの目に惹かれたんだな……。「何を言っても無駄ですね。分かりました。もし俺が、あなたの前に姿を見せなかったら計画は順調に進んでいると思ってください。それから——」

口頭で、俺の師匠の住所と名前を伝える。

「身体に変化が起きたら、その人を頼ってください。必ず力になってくれます」

「……分かった」

隼翼は、俺に手を差し出した。

その手を取ると、強く握り返してきた。

「じゃあ、行きます」

「ああ、また過去で。そして、未来で会おう！」

「共鳴」を使い、眠っていた隼翼の「時空移動」を引き出す。視界が歪む、世界が戻っていく——。

そう、すべてはこの時のため。

すべての特殊能力者を救済する。

そのために俺は、過去へ飛んだ。

\* \* \*

意識が戻る。気がつく俺は、ベッドに横たわっていた。自宅とも、奈緒の部屋とも、保護施設とも違う天井が視界に入ってきた。知っている天井、かつて俺が生活していた養護施設の天井だった。

ベッドから降りて、カレンダーを確認する。初めて「時空移動」で戻された、あの日だった。どうやら時空を越えることが出来たらし

い。隼翼しゅんすけは、どうだろうか……考えても仕方ない。知るすべを  
持っていないのだから。もう一度、カレンダーに目を戻す。

——届かなかった、か……。よし、始めよう。

小さく息を吐いて顔を上げ、しっかり前を見て歩み始める。

悲願を成し遂げるために——。

## Episode 52 約束の場所

枕元の目覚まし時計を止めて、ベッドの上で上半身だけを起こす。夢を見ていた気がする。とても、とても長い夢を。正面の壁を見つめながら夢の内容を思い出そうとしていると、突然、部屋のドアが開いた。

「奈緒、早く着替えないと学校に遅刻するわよ」

「お、お母さん……？」

起こしにきた母の姿が、どうしてなのかとても酷く懐かしく感じた。ただ黙ったまま呆然と見つめるあたしに、母は少し不思議そうな顔で膝について手を伸ばした。

「どうしたの？ ぼーっとして」

おでこに触れた母の手は、とても暖かかった。

「熱は、ないみたいね。大丈夫？」

「あつ、うん、大丈夫。すぐに行くから」

「そう？ じゃあ早くなさいね」

部屋を出ていく母の後ろ姿を見送って、ベッドに座り直す。

確かに、夢を見ていた。

悲しい夢、辛い夢、苦しい夢…… だけど、幸せな夢。

まるで本当に経験していたように思えるほど、リアルな夢だった。だけど、思い出せない。どこに居たのか、何をしていたのか、誰と居たのか。どうしても思い出すことは出来なかった。

とりあえず、急いで着替えを済ませて、洗面所で顔を洗ってからリビングに入ってすぐのテーブルの左側の席に着いて、手を合わせる。「いただきます」

さつきといい今日のあたしは、少し変。食べ慣れたはずの母の料理なのに、とても懐かしい味がした。気を紛らわすように「兄ちゃんは何？」と母に訊ねる。

「起こしたんだけどね。まったく、いつも夜遅くに出歩ってるから」

「はよす……」

噂をすれば影。まだ眠そうな兄が、頭をかきながら姿を現した。そ

のだらしない姿に、母は若干の呆れ顔を覗かせる。

「寝癖ついてるから直してきなさい」

「へーい……って、奈緒なお、どうしたんだ？」

隣の椅子に座った兄が、あたしを見てとても驚いたような顔をした。母も、洗い物の手を止めた。二人して何を驚いているんだろうと想っている、自分で異変に気がついた。目から涙がこぼれ落ちた頬を伝う涙を、長袖の先で拭う。

「マジどうした？　もしかして、学校で嫌なことでもあったか？」

「そうなの？」

「ううん、本当に何も無いんだけど……」

でも、本当にどうしたんだろう。兄と母を心配させてしまっているのに、とても幸せな気持ち胸いっぱい込み上げて来る。切ないほどに。まるで胸にぽっかりと穴が空いたような喪失感を一緒に。とても大切なことを忘れてしまっているような……　幸せと切なさ相反する想いが混ざり合う複雑な感情の揺らぎ。

だけど、それもいつしか気に止めることも少なくなっていくって、冬、春、夏と季節は巡り。そしてまた、秋が訪れた。

空気が肌寒く感じ始めた初秋の帰り道、家の玄関からスーツ姿の男性が二人出てきた。二人は真剣な顔付きで言葉を交わしながら、あたしと反対方向へ歩いていく。うちに何の用だろうと思いつながら、カギを開けて家に入る。兄も、母も、まだ帰っていない。いつものように机に向かって宿題を始める。しばらくして兄が帰ってきた。続いて、母も帰宅。

「奈緒なお、試験結果の封筒が届いてたわ。はい」

「あ、うん、ありがとう」

先日受験した、国立の附属学校の試験結果の封筒を受け取り、ハサミで封を切つて、緊張しながら合否通知を確認したあたしは、部屋を飛び出した。夕食の支度をしている、母の元へ急ぐ。

「お母さん！　やったよ、受かったよー！」

「よく頑張ったわね、奈緒なお」

「まさに末は博士か大臣じゃない？」と大袈裟に言う、母。あたしも嬉

しくて、小さくはずむように頷いた。そのまま、ギターを弾いている兄へ報告へ行くと、兄も自分のことのように褒めてくれた。

「兄ちゃんのバンド、レコード会社に目をつけられてるって言ってたじゃん」

「うちは貧乏だから、とつととメジャーデビューしてひとり立ちしてえなー。そう言えば、前に貸したCD聴いたか？」

確か、〃ZHIEND〃とかいう海外のロックバンドのCD。勉強の妨げになるから聴いてない、と伝えると「〃ZHIEND〃はロックじゃない、ポストロックだ！」と以前と同じように豪語された。〃ZHIEND〃の魅力を延々と語る兄の話を生返事で聞き流し、勉強に戻った。

この合格通知を受け取ってから約ひと月後のこと、夜中にふと目が覚めたあたしは、渴いた喉を潤すため廊下を歩いていると、リビングからテレビの音と灯りが漏れていること気がついた。消し忘れたのかな、と思ってドアを開ける。

「お母さん？」

「奈緒?」

食い入るようにテレビを見ていた母は、とても慌てた様子で電源を消した。

「どうしたの?」

「な、なんでもないわ。お母さんももう寝るから、奈緒も早く寝なさい。明日も学校でしょ」

「うん……」

少し不思議に感じつつも、キッチンで水をひとくち飲んで、改めてベッドに入って眠りについた。

そして、厳しい寒さの冬が過ぎ去り、季節は——春。

真新しい制服に袖を通して、あたしは姿見の前に立つ。何だかしつくりこないけど、この制服を着ていると、今日から新しい学校生活が始まるんだと改めて思った。

「いってきまーす」

「いってらっしゃい。気をつけて行くのよ」

「はーいー」

玄関先で母に見送られ、国立の附属学校へ向かって足を踏み出した。いつもと違う通学路、薄紅色の花びらが雪のように舞う。大袈裟だけど、なんだかまるで、本当に世界が変わったような気持ちになった。

\* \* \*

附属中学の三年間は、あつと言う間に過ぎ去った。あたしはそのまま、同じ附属の女子校への進学。入学してひと月あまり、新しい学校生活に慣れ始めた頃、先生の推薦もあつて中学時代も務めてしていた生徒会に所属することになった。

ひとりで仕事をこなせるようになった七月の初めの放課後、生徒会で使う備品を学校近くのショッピングセンターで買い揃え、学校へ戻る。

時間で言えばもう夕方なのに、まだ高い位置にある太陽、肌を焼くような夏の暑い日差しが照りつけるアスファルトには陽炎が揺れている。

正門横の木陰でひと休みしようかと頭を過つたけど、冷房が完備されていて快適な校舎へ入ってしまった方がいいと思つて、足を止めることなく校舎へ急ぐ。しかし途中で、異変に気がついた。校庭が、少しざわついていて。正門へ向かつて歩いている生徒たちが、やや後ろを気にしている。あたしから見て、前方にその原因を見つけた。

うちは女子校なのに、校舎から男子が歩いてくる。それも共学だった中学の男子とは違う制服。つまり、別の学校法人の男子生徒。注目を集めるのも道理、けれどあたしは、特に気に止めなかった。校庭を歩いているということは、守衛の居る正門を通過したということのため、正当な理由があつて学校へ招かれたということ。だけど、校舎から歩いて来た男子とすれ違った瞬間あたしは、はつとして歩みを緩めた。どこかで会つたことがある、そんな気がした。昇降口の手前で立ち止まり、確かめようと振り返ろうとしたところで声をかけられた。声の主は、生徒会長。

「ちようどよかった。校長先生から大事なお話があるみたいだから、

校長室へ行きましょう」

「はい、わかりました」

返事をしてから振り返ると、もう、さっきの男子は居なくなっていた。

\* \* \*

翌日の放課後、他の生徒会の役員数名と一緒に都内のある学校へ向かっていった。その学校は近年経営者が替わり、学業・部活動共に著しく評判を上げた。

学校名は——星ノ海学園。

その名を聞いた昨夜は心がざわついて、なかなか寝付くことが出来なかった。

「ここ三年間で偏差値は10以上も上がっている。三年後には、うちと同等レベルまで上がるかもって話しよ」

「たったの三年ですか？ スゴいですね」

「うーん、なんでも全国から入学希望者を募ってるみたい。しかもほとんどが、家庭の事情とかで進学や部活動を——」

星ノ海学園について話す会長たちの話も、あたしの耳にはあまり残らなかった。なぜなら、見たこともない景色のハズなのに見覚えがある、そんな不思議な既視感で頭の中がいつぱいだったから。特に、星ノ海学園学生寮と標記された併設のマンションを通り過ぎた後は、一歩、また一歩と学校へ近づく度に徐々に強く明確に現れていく。

「うわあ、綺麗な校舎ですねー」

「本当ね。じゃあ行きましょう。友利さん？」

「…… あつ、はい」

「大丈夫？ 何だか顔色が優れないみたいだけど」

「大丈夫です」

「そう？ ならいいけど」

会長たちの後に続いて正門を潜って来賓用の玄関へ着くと、星ノ海学園の生徒会役員が出迎えてくれた。

「本日はお忙しいところを、遠くまでご足労いただきありがとうございます。星ノ海学園の生徒会役員が、星ノ海学園生徒会長の——」

「いちいちこそ、お招きいただきまして——」

生徒会長同士の挨拶が終わって、生徒会室へ招かれることに。ガラス張りのスタイリッシュな生徒会室中央のテーブルを挟んで対面して座り、話し合いが始まる。議題は、来学期に執り行われることになった学校交流会。詳しい理由は不明ですが、

話し合いが行われる中あたしは、ずっと違うことに気を取られていた。校舎、廊下、生徒会室、窓から見える外の景色を、あたしは知っている……。

「——では、そのような流れで進めて行きましょう」

話し合いは思いのほかスムーズに進んで、校内を案内してくれることになったけど、あたしは、椅子から立ち上がることが出来なかった。足がふらついて上手く立てない。テーブルに手をつけて身体を支える。

「大丈夫!？」

「無理しない方がいい。保健の先生を呼んできてもらえるかい？」

「うん、すぐに呼んでくる!」

肩にかかるくらいのボブカットの女生徒が、生徒会室を飛び出して行った。あたしは、附属の会長たちの手を借りてソファで横になる。保健の先生の診察は、寝不足が原因の軽い目まいではないかと言うことで、このまま休ませてもらうことになった。

「すみません、〴〵迷惑をおかけしてしまって……」

帰りの予定時間を過ぎても、あたしの体調は良くならなかった。會長たちには先に帰ってもらって、もう少し休ませてもらうことに。

「いや、気にすることはないさ。誰にだって体調が優れないことはある。ところで、音楽をかけてもいいかな? BGMがないと、どうも書類作業がはかどらなくて」

「はい、どうぞお構いなく……」

「ありがとう。有宇、かけてくれるか?」

「あ、うん、わかったよ」

生徒会長から有宇と呼ばれた男子は、リモコンを操作してコンポを再生させた。静かなスローテンポのメロディと澄んだ綺麗な歌声が

響き渡る。

しばらくして、コンポを再生させた男子が突然、椅子にもたれように座り込んで顔を伏せた。そんな彼と反するように身体を起こしたあたしは目を閉じて、曲に聴き入る。

——…この曲を、この歌を知ってる。辛いとき、苦しいとき、いつも支えてくれた。でも、誰の歌なのか思い出せない。だけど、大好きなバンドなことだけは鮮明に覚えている。

曲が終わると生徒会長は停止ボタンを押し、取り出したCDをケースにしまつて、あたしに差し出した。

「あげるよ」

「えっ？ でも……」

「気に入ったんだろ？」

遠慮しなくていいよ、と笑顔で言ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

「体調の方も良くなったみたいだな。下まで送るよ」

生徒会長を出て来賓用の玄関へ行くと、車が止められていた。もう辺りが暗くなっていたため、自宅の近所まで送ってくれるそうです。体調も良くなったこともあって遠慮するあたしを後目に、保健の先生を呼んでくれた女子生徒が手を取って一緒に後部座席へ。

「あの、CD、ありがとうございます」

「どういたしまして。じゃあ、付き添い頼むな」

「任せて。お願いします」

ゆつくりと走り出した車は、自宅の近所で停車。車を降りたあたしは、女子生徒と運転手さんにお礼を伝える

「送ってください、ありがとうございます」

「ううん、気にしないで。お大事にね」

「どうぞお気をつけて」

走り去る車を見送って自宅へ帰り、部屋に荷物を置いてからCDを持って、兄の部屋をノックして入る。兄はベッドに座って、ギターの手入れをしていた。

「おう、おかえり」

「ただいま。お兄ちゃん、これ——」

「ん？ なんだ。おつ、ZHIENDのアルバムじゃねーか！ ようやく、奈緒も聴く気になったんだな！」

中学の受験前に「気に入るから聴いてみる」と渡された、海外のロックバンドのCD。進学してからも勉強に生徒会と何かと忙しくて、結局一度も聴く機会がないまま机にしまったままのCDと同じアーティスト名。

「うん…… コンポ、借りてもいい？」

「当たり前だろう」と上機嫌に言った兄は、セットしたCDリモコンで再生させた。生徒会室で聴いた曲と同じ演奏が流れる。

「くっ！ やっぱ ZHIENDの奏でるサウンドは最高だな！」

「どうした？」

「う、ううん、なんでもない」

「そうか？ おお、そうだ。今度、他県の野外ライブに出演が決まったんだ！」

「えっ、ホント？ スゴいじゃん！」

あたしが入試試験に合格した四年前の冬、レコード会社との契約が決まった兄はデビューの直前に極度スランプに陥ってしまい、思うような演奏を出来なくなってしまった。でも努力を重ねて、一昨年念願のメジャーデビューを果たし、小さな頃からの夢を叶えた。

「関係者用のチケット用意してやるから、聴きに来いよな」

「ええ、学校あるしー」

「んなもん休め、俺が許す！」

「ダメに決まってるでしょ」

呆れ顔の母が部屋の前で、大きなため息をついている。

「まったく。引越しの準備は済んだの？」

「どうせ、服とギターしか持っていかねーし。つーことで、このコンポは置いていくから、奈緒にやる」

「いいの？」

「おう。他のアルバムも置いてってやるから、好きに使ってくれていいからな」

「うん、ありがと！」

「さあ、二人とも晩ごはんにしましょ」

晩ごはんを食べて、お風呂に入って、ベッドで横になる。

この日の夜、夢を見た。いつか見た、不思議な夢の続き。

そして夢の終わり、最後に約束をした——ずっと待っている、と。だけど、いつ、誰と約束をしたのか思い出せない。

心にもやもやした気持ちを抱えながら授業を受けていると、教頭先生が慌てた様子で教室に入ってきた。教師と言葉を交わし、あたしを呼ぶ。廊下に出て聞かされた話しに言葉を失った。

兄が…… 病院へ緊急搬送された——。

「ほん…… つとに心配したんだから！」

学校を早退して急いで病院へ行くと、兄はベッドで元気そうにくつろいでいた。

「悪い悪い。兄ちゃん、野外ライブだからハッスルしすぎちまってさ」

本番前日のリハーサルで張り切りすぎて軽い熱中症で倒れた、ということ。

「ハア、なんか喉渇いちゃった。飲み物買ってくるね」

「スポーツドリンク、頼む」

「はい」

頼まれたスポーツドリンクとパックジュースを買って、病室へ戻る。来たときは気が気じゃなくて気にとまらなかつたけど、この病院前に来たことがある。そんな気がした。

「おつと……」

「あ、すみません」

辺りを見回しながら歩いていたら曲がり角で、出会い頭にぶつかってしまった。

「大丈夫かい？ ケガは、ないようだね」

ぶつかってしまった相手、品の良い初老の男性は優しく微笑んで、あたしの心配をしてくれる。

「はい、大丈夫です。すみませんでした」

「僕の方こそ、もつと周囲に気を配るべきだった。おや、こぼれてしまったようだね」

「え？ あっ………！」

看護士さんに事情を話して、借りた清掃道具で汚してしまった廊下を掃除し終わると、新しいジュースをごちそうしてくれた。

「すみません、いろいろと」

「いや、当然のことだよ。ところでその制服は、都内の国立の附属高校のようだね」

「あ、はい、そうですけど………」

「失礼、自己紹介が遅れてしまった。僕は、こういう者だよ」

渡された名刺の肩書きを見て、とても驚いた。

「星ノ海学園の………理事長先生!?!」

「形式上ではね。少し話を聞かせてくれるかな？」

他に誰も居ない休憩スペースのベンチに座って、理事長先生と話しをすることになった。

「そうか、お兄さんが。大変だったね」

「軽い熱中症なので、明日の朝には退院できるそうです」

「それはよかった。ところで、学校交流の話しは知っているかな？」

「はい。生徒会に所属していますので聞いています。先日は、ご迷惑をおかけしてしまって」

体調不良で家まで送ってもらったお礼を伝えると、理事長先生は

「そうか、キミが………」と小さく呟いて、口元へ片手を持っていった。

「はい？」

「いや、何でもないんだ。ひとつ、訊いてもいいかな？」

「何でしょうか？」

「この世界には、特殊能力といわれる不思議な能力を持つ人間チカラが存在している、と言われたら信じられるかい？」

「えっと………」

唐突なオカルト的な話しに、思わず返答に困ってしまう。

「信じられないのも無理はない、それが普通の反応だ。だが、事実なのだよ。どうだろう。最近、妙に既視感を覚えることはないかな？ そ

してそれは、星ノ海学園を訪れてから顕著に現れるようになった」

——思い当たってしまった。

「心当たりがあったようだね。少し昔話をしよう。まあ、昔と言っても、ほんの五年ほど前の話だが……」

理事長先生から語られたのは、この世界がたったひとりの特殊能力者の信念の元「救済された世界」という、とても信じることの出来ない突拍子の話だった。

「あの。どうしてあたしに、この話しを？」

「ふむ、そうだね。ちよつとしたロマンと言ったところかな。僕はあまり、運命や奇跡などの類いは信じるタチではないが、少し信じてみたくなった」

よく分からず首をかしげるあたしに、小さく笑った理事長先生は窓の外へ顔を向けた。視線の先には、裏庭から一本の道がのびている。

「この道が続く先に、美しい岬がある。そこに、真実が眠っている」

ひとつ大きく息を吐いた理事長先生は、ゆっくりと席を立った。

「さて、僕は失礼するでしょう。長く引き止めてしまって申し訳ない」

「あ、いえ。ジューズ、ありがとうございます」

お礼の言葉を告げてあたしも席を立ち、兄が待つ病室へ戻る。

\* \* \*

兄が待つ病室へスポーツドリンクを届けたあと、裏庭から岬へと続く一本道を、星ノ海学園や病院と同じように既視感を覚えながら歩いていた。

帰りバスの時間を待つ間にスマホで調べた、特殊能力者の件。映画や漫画などの設定がほとんどで、理事長先生が話したような事案は直接見つけることは出来なかった。けれど、条件を絞って検索していくと関係のありそうな記事を見つけた。日本を含めた世界各国で一部の政府要人、科学者、警察や教師を含む公務員、民間企業、反社会勢力などの人間が同時期に逮捕・拘束されたと言う記事。

容疑は、未成年に対する極めて非人道的な人体実験。

目を覆いたくなるほどあまりにもショッキングな内容であったため、地上波・衛生放送などでは深夜帯を中心に報道され、極力未成年

者の目には触れないよう配慮された。中には相当重い罪状で立件された人物もおり、世界中で延べ数万人以上の人間が関わっているとみられ、まだ全容の解明まで時間がかかるだろう、と締めくくられていた。

この記事が書かれたのは今から四年前の冬のことです。思えば当時、通っていた学校にも時期を同じくして退職した教師が時を同じくして複数人いた。もしかしたら、理事長先生が話していたのはこの記事のことではないかと思つて、どうしても気になって、バス停に到着したバスを見送つたあたしは「真実が眠っている」という、岬へ向かうことを決めた。

舗装されていない道をしばらく行つた先に辿り着いた、真実が眠っているという美しい岬には先客が居た。オレンジ色の夕日に照らされた少し長めの茶髪の毛先が、海風になびいて揺れている。佇まいから見て、男性。目の前に、何かがある。あれは、何だろう？　と思つて近づくと、その人が振り向いた。夕日の逆光で顔ははつきり見えなけれど、レンズが光っていることでメガネをかけているのは判つた。その人は、少し驚いたようなそぶりを見せてつつも「どうぞ」というように黙つたまま一歩横へ移動した。隣へ行く。そこにあつたのは――。

「慰霊碑ですか？」

綺麗な花束が供えられている。

「そうみたいだね。実際に見るのは初めてだけど、聞いていたより立派だった」

「あの、もしかして、知っているんですか？　特殊能力者のこと――」

一瞬の沈黙。

「特殊能力のことを、どこまで知ってる？」

「正直、あまり詳しくは。特殊能力者が世界を救つただけ聞きました」

「そうか」

風にかき消されてしまうような小さな返事。少し寂しそうに聞かされたのは、気のせいでしょうか。

「この慰霊碑は、世界中で虐げられ命を落とした特殊能力者と、救済を扇動した能力者の墓標。名前は——」

告げられた名前は——宮瀬翔。みやせしやう。

名前を聞いた瞬間、知らないはずの記憶がまるで水のように溢れてよみがえっていく。

「彼には、彼らには敵が多かった。日本だけではなく、世界中を敵に回したから目的を達成したあと追われる身だった。特に、面子に拘る裏社会の人間からは執拗に狙われた。そして、海沿いのホテルの一室に居たところを襲撃され、凶弾に倒れた。撃つたのは、彼の相棒。殺されるくらいなら、と引き金を引いた。そして彼もまた、後を追うように自らのこめかみに向けて引き金を引いた。二人は、海へと落下した。潮流の速い海域で、遺体は発見されなかった。だから、せめて形だけでもと。ここは彼が、世界で一番大切な女性と約束をした場所です」

「あたしは……この人が、好きでした。約束したのに……どうして……」

溢れる涙が止まらなかった。

「ほんと、最低ですよね」

あまりにも無神経な言葉に、キツと睨みつける。

だけどその人は、少し困ったように微笑んでいた。

「あっ……」

彼の笑顔は、あたしの知ってる笑顔だった。

ほっとする笑顔、安心させてくれる笑顔。

「やっぱり、泣かせちゃいました」

あたしは、彼の胸に飛び込んだ——。

## Episode Final 　　（愛）

過去へ戻った俺は計画通り、救済への道を歩き始めた。

先ず手をつけたのは、前世で隼翼<sup>しゅんすけ</sup>たち組織の科学者とニールが共同で開発した、遺伝型の新型ワクチンの量産化。相場の師匠である、先生の協力を得ると同時に無謀な計画に巻き込み。莫大な資金源と強力な人脈を得た俺は、日本を先生と坂本<sup>さかもと</sup>さんに任せて、アメリカへ飛んだ。新型ワクチンのデータは頭に叩き込んでいたから比較的簡単に再現できた。量産をニールと教授たちに任せて、俺は日本へ帰国、本格的に計画を実行へ移した。

ここからは、本当に速かった。

日本屈指の資産家である、師匠の人脈をフルに活用して政財界、教育界など、あらゆる権力者たちを引き込み。元々実験に反対している、良心的な科学者たちの協力を取り付けることにも成功。こうなることを予め見越していた先生は、既にいくつかの倒産寸前の製薬会社の株を買い集め買収していた。そこらを中心に、世界中に点在している保護組織の科学者たちとも連携して、ワクチンの大量生産を開始。

ある程度目処が立たった頃を見計らって、世界中で子どもたちが実験台にされている現状を、内部へ潜入調査していた科学者からもたらされた実験映像や静止画等を言い逃れが出来ないほどの莫大な数の資料を、世界へ向けて告発した。

これらがネットやメディアを通じて拡散され、子どもを実験台にしていた科学者は糾弾。実験を容認・指示していた世界各国の政治家を始めとした官僚、教育、国家・地方公務員、民間企業から。延べ何千何万と言う単位の間人が拘束・断罪された。

当然のことながら、いつべんに中枢を失った世界では大小様々な混乱が起こった、反発する国家も。ただ、各国の首脳不在のまま臨時に開かれた世界会議では新政権発足後に新型ワクチンの無償投与が各国共通の条約として義務付けることが拒否権を行使しようと目論んでいた国家も含めて満場一致で可決された。抑止のため、違反した場合は経済・武力を含めた厳しい制裁が下されることも同時に決まっ

た。元々根回しをしていたとはいえ、これほどまでに順調に進んだのはそもそもが、特殊能力の軍事転用導入を一番最初に考えた国家へ対抗するために国や軍事産業で研究が広まったため。特殊能力その物がなくなってしまうえば頓挫することは必然だった。

ともあれ、目的の第一段階はクリア。

ただし、このワクチンは既に発症した特殊能力には効果がない。前世で身に付けた「消去<sup>デリート</sup>」を使う時がやってきた。

特殊能力を消せる範囲は、自分を中心に円状で最大半径5km以内。円状に発動出来る利点を活かし、ヘリやセスナなどを使って、空からしらみ潰しに消して回った。決して取りこぼしが起こらないように、世界を何周、何十週もして。特殊能力を消し始めてから約三年後、全ての特殊能力は葬り去られた。

俺が、俺たちが目指していた「救済計画」は、長い年月をかけて成し遂げられ、終焉を迎えた。

そして今、腕の中には――。

「奈緒さん？」

飛び込んで来た彼女は顔を埋めたまま、やや不満げに言う。

「茶髪、似合わないっすよ？ チャラすぎです」

「あはは、仕方ないですよ」

命を狙われていた身としては、常に細心の注意を払う必要があったから素顔は絶対に晒さなかった。「じゃあ仕方ないっすね」と、奈緒は小さく笑って腕から離れる。

ちようど一人分の距離を取って、向かい合う。涙で潤んだ瞳、頬を伝う涙の跡に、とてつもない罪悪感を感じる。

「メガネで、よくわからないっす」

両手を伸ばす、奈緒。ゆつくりダメメガネが外された。俺は、彼女に問いかける。

「どうですか？」

彼女は、小さくうなづいた。

「……うん。翔くん、おかえりなさい」

「……ただいま、奈緒さん」

もう一度、強く抱き合った。

懐かしい匂い、懐かしい温もり。ああ、本当に帰ってきたんだと改めて思った。

どのくらいの間だろうか。しばらくして、腕の中にいる奈緒が、少し苦しそうに声をあげた。

「うくん、なんかちよつと痛いっす」

「たぶん、これですね」

肩を抱いていた手を胸元へ持っていき、首から下げていたネックレスを取り出して見せる。シルバーのチェーンに通っている、ふたつの物にすぐ気がついた。

「あっ！ これ……」

「前世で買ったのと同じ、ペアの指輪。受け取ってくださいますか？」

奈緒は、黙ったまま頷いてくれた。ネックレスを外して、小さい方の指輪を手取る。

「あ、こっちの薬指でお願いしまーす」

右手を差し出した奈緒は、左の人差し指で右手の薬指を差した。ご所望通りに右手の薬指に指輪を通す。サイズもぴったり。だけど、指輪をはめた右手ではなく左手を夕日にかざした。

「左手は、とっておきますー！」

そう笑顔で言った奈緒は「貸してください」と、もうひとつの指輪を手取った。

「はい、右手出してください」

「どうぞ」

右手を差し出す。今度は、奈緒が薬指に指輪をはめてくれた。お互いの右手と右手を重ねる。

「お揃いっすね」

「お揃いですね。そろそろ戻りましょうか？」

「はいっー！」

病院へ続く道を、手を繋いで歩幅を合わせて並んで歩く。

「いつ、日本に帰ってきたんですか？」

「今朝ですよ。奈緒さんは、どうしてここに？」

正直、帰国当日に再会できるなんて思ってもみなかった。  
しかも、この思い出深い岬で――。

「兄が、この病院にいるんです」

「え？ まさか、科学者に――」

「いえ。野外ライブのリハーサルで、調子に乗りすぎて軽い熱中症で運ばれたんです。明日には退院できるそうですので、ご安心を」

「そう、ですか……」

間に合わなかったかと思った。そんな俺の気を知ってか知らずか、代弁するかのように「まったく。ホント、人騒がせで困ります」と大きなため息をついた。

「ですが。彼女を泣かせたのは減点です。普通なら破局案件つすよ？」

「はい、すみません」

戻りかけの記憶を取り戻すきっかけになれば、とは言え。泣かせてしまったのは事実だから、ここは素直に謝っておこう。

「まったく。でも命を狙われていたのは、本当なんですよ？ 革命家のような活動をしていたわけですし」

「それは、まあ……」

内部に内通者が潜んでいることは早い時期に判明・特定していたから、逆に利用させてもらった。目の前で死んだと思えば、おかげで自由に動けた。

「許します。無事に帰ってきてくれたのでっ」

繋いでいた手を解いて、腕に抱きついて来た。

「これくらいはいいっしょ？ さあ、行きましょー」

野外ライブの話しを聞きながら歩いていると、あつという間に病院へ到着。裏庭から表玄関へ回る。入り口前のベンチに見知った顔の男子が座っていた。

「よう、ご無沙汰だな……で、いいんだよな？」

ベンチを立て、俺たちの前へ来た隼翼<sup>しゅんすけ</sup>。

「ええ、ご無沙汰してます。どうして、ここに？」

「理事長から連絡をもらったんだよ。お前が、帰ってきたってな」

「そうでしたか。先生が……」

「ん〜?」

奈緒は、隼翼の顔を見ながら不思議そうな表情をしている。

「どうしたんだい? 奈緒ちゃん」

「隼翼さん、ですよね?」

「ああ。有宇と歩未の兄の乙坂隼翼だよ」

「ですよね……あの、目は?」

「見えてるよ。こいつのおかげでな」

爽やかな笑って見せた隼翼は、俺を指差した。

「『消去』<sup>デリート</sup>は、特殊能力に関する全てを『消滅』させる特殊能力なんです。だから、特殊能力が原因の代償も消え去ったんです」

「急に見えるようになったから驚いたぞ。医者もビツクリしてた『学会で発表するレベル』だってな。けど、俺にとっては驚き以上に安心材料だった。ことが上手く進んでる証拠だからね」

「なるほど。うーん……でも、それならどうして、あたしは前世の記憶を思い出せたんですか? 隼翼さんも、記憶を持っているみたいですし。消えるんすよね?」

「ああ、それは……いや、ここで理を通すのは不粋ですね、止めておきましょう」

「ええ〜、なんつすか? 教えてくださいよー」

興味津々で上目使いで見つめてくる。

「そうですねー。簡単にいうと『愛』です」

一瞬で真顔になった奈緒は目を細めて、指輪を外そうとする仕草を見せた。

「ちよ、ちよつと待つてください!」

「真面目に答えないと破局つすよ?」

「いや。結構真面目に答えたんですけど……」

「別れましょう」

「あっはっは、尻に敷かれてるな!」

俺たちのやり取りに隼翼は、白い歯を見せて笑った。

「笑いごとじゃないんですけど」

「真面目に答えないあなたが悪いんです」

と言うことらしいので、簡単にかいつまんで話す。

有宇の「タイムリープ時空移動」の時、無意識に「共鳴」も発動していた。それはきつと「忘れて欲しくない」と想いが働いたため、奈緒も「な継承」の影響を受けた。けれど、無意識下の不完全さゆえに完全には継承されなかった。それを、サラ・シェーンの歌をきっかけに眠っていた記憶を呼び起こした。

「つてことは、つまり……」

「愛です」

「つて、本当に愛だったのかよ!？」

「だから、言ったじゃないですか」

「デリート消去」には、能力者自身の能力は消せない制約が存在する。つまり、「共鳴」で「な継承」の能力を受けた奈緒。「共鳴」で能力を引き出されて過去へ飛んだ隼翼も本来の「タイムリープ時空移動」は消滅してしまったが、記憶保持については「デリート消去」の影響を受けなかった。関係性が近いほど、「記憶保持」にも強い影響を及ぼす。

「奈緒さん？ 大丈夫ですか？」

「は、はい!？ な、なんつすか?」

「ぼーっとしていたみたいでしたので」

「なんでもないっす!」

夕日のせいでそう見えただけなのか、ほんのり頬を赤く染まって見える。まあ、反応を見る限りはストレートに言ったから恥ずかしくなかったと思う。仕切り直すように隼翼は、真面目な顔をして訊いてきた。

「ところでだ。これからどうするつもりなんだ?」

「そうですね、どうしましょうかね……」

身を隠してる間に大学は卒業したし、特にしたいことも思いつかない。

「まだ何も決まっていけないのなら、星ノ海学園へ通うつてのどうだ?」

お前の席は、用意してあるぞ」

「復学…… じゃないか。転入するのも悪くないですね」

さつきまで赤かった奈緒の表情が、少し曇っていた。

「どうしたんですか？」

「いえ、別に……」

「そうか、奈緒ちゃんは……」

今になって気が付いた。奈緒は、星ノ海学園とは違う制服を着ている。髪型も、ZHIELDのライブの時と同じ青いリボンでまとめたポニーテール。

「あたし、附属の学校です……」

「そうだったな」

「転校しま——」

「それはダメです」

——転校する、と言い出そうとしたところを食い気味に止める。

「なんでつすかつ？ 嫌がらせつすかつ!？」

「違いますよ、むしろ逆です」

「だな。奈緒ちゃんの学校は星ノ海学園よりもレベルが高い、転校はもつたないよ」

「でも……」

ささらに表情が曇る彼女に提案する。

「じゃあ、こうしましょう」

「…… なんですか？」

耳元に口を近づけて奈緒にだけ聞こえるように、小声で話す。

「マジっすか？」

「はい」

「それなら、別々の学校でもいいです」

そう言っつて俺の腕から離れると、一足先に病院の入り口へ駆けていった。

「お前、何を言っつたんだ？」

「さあ」

「まあ、いいか。これで俺も、ようやく約束を果たせる」

「約束？」

「おいおい、忘れたのか？」

隼翼しゅんすけは思い切り両手を広げて、大きな声で言った。

「愛する有宇ゆうと歩未あゆみを抱きしめるんだよ。心からなっ！」

「ああ、してましたね。そんな約束」

「何してるんですか！ おいて行きますよーっ？」と、病院の入り口から催促する奈緒なお。

「じゃあ、行きましようか」

「俺も、一緒に行つていいの？」

「もちろんですよ」

近況を聞きながら、前に行く彼女を追つて歩き出す。

「転入は、二学期からにします。今からだど中途半端ですし」

「オーケー。その間は、どうするんだ？」

「しばらくは、投資稼業に専念します。先ずは、生活基盤を構築しないと。これからのために」

奈緒なおへ顔を向けながら、疑問に答える。

「そっか。そう言えばお前は、天才投資家だったな」

「ええ、天才です」

伝説の相場師唯一の弟子。

前世では、荒れ狂う数字の波を自在に乗りこなすことから、こう称された——比類なき天才、と。

「自分で言うなよ」

「事実ですのよ」

俺と隼翼しゅんすけは、お互いに前を見たまま笑い合った。こんなに笑ったのは、いつ以来だろう。こんなくだらないことで笑える。それは本当に気が遠くなるほど遠い昔のことで、とてつもなく久しぶりだった——。

Epilogue  
Epilogue 未来

レースカーテンの隙間から差し込む眩い朝日で、自然と目が覚める。穏やかな朝。身体を起こそうとしたところ僅かに抵抗があった。温かくて、とても柔らかな感触を腕に感じる。

顔を横に向けると、腕に抱きつきながら奈緒なおが小さく寝息をたてて眠っていた。

「……すう……すう……ん、くう……」

「ああ、そっか……」

日本に帰国し、奈緒なおと再会を果たしてから約二週間。今俺と奈緒なおは、一緒に暮らしている。

「奈緒さん、起きてください。朝ですよ」

「んっ……」

なぜ今、こんなことになっているかと言うと帰国した日から始まった。

\* \* \*

軽い熱中症で搬送された一希かずきさんのお見舞いを終えて、病院の廊下を三人で歩いていると突然、隼翼しゅんすけが思い出したように訊いてきた。

「そういうえばお前、どこに住むんだ？」

「ああ、そうですね。しばらくはビジネスホテルになるかと」

《タイムリープ 时空移動》の後、すぐにアメリカに飛んだから今、日本に特定の住居は存在しない。とは言っても、今さら元の施設へ戻る気はない。新居が決まるまでの間は必然的に、空いているビジネスホテルを転々とすることになる。

「それなら、今は学生寮になってる併設のマンションに住むといい。星ノ海学園の生徒になる訳だから手続き上の問題はない」

「それでもいいんですけど……」

奈緒なおを見ると、何かを訴えるような表情かおをしていた。まあ、普通に遠い。

「とりあえず近いうちに、不動産屋を訪ねてみます」

「じゃあ、あたしも一緒に行きます。明日行きましょう。ちようど休日ですし」

そんな訳で新居を探すため、一緒に不動産屋へ行くことになった。「このことか、どうつすか?」

不動産のカタログを見せてもらう。

「吉祥寺ですか」

「はい」

星ノ海学園と奈緒なおの学校のほぼ中間地点、お互いに往き来しやすい場所だ。候補のひとつにして、カタログをめくり他の物件も見る。すると、とある物件が目にとまった。

「この……」

「ん?」

覗いてきた奈緒なおは、開いたページに掲載されている物件の住所を確認。

「でも、遠いつすよ?」

「六本木からと大差ないですから」

「いいんですか?」

「はい。ここにします」

決めた物件は、古き良き路地裏が残る石畳の街。

都心とは思えない落ち着いた街並み、何処かノスタルジックな雰囲気が漂う街、神楽坂。他にもいくつか候補はあったけど、彼女が通っている学校と実家からも近いこの街を選んだ。

後日最寄り駅で奈緒なおと待ち合わせをして、挨拶へ行く。彼女の、母親の元へ。

実際に対面して話した印象と、未来で聞いた印象とはだいぶ違ったものだった。初対面にも関わらず優しく接してくれて、ふたりのことを本当に大切に思っていると感じた。

挨拶を済ませた帰り際、母親に呼び止められた。最近奈緒なおが、少しよそよそしくなったらしい。それは正直俺も、感じていた。ただ、よそよそしいと言うよりも、どう接したらいいのか戸惑っている……

そんな感じだった。

おいとまして、自宅近くのカフェでそれとなく聞いてみたところ。「えっと、実はですね……」

奈緒の迷いは、ある意味必然とも言える事情だった。前世の記憶を取り戻したことによる弊害。母親に、科学者たちへ売られた記憶も思い出してしまい。今は違うと頭では判っていても、心のほうがどうしても割り切れないみたいだ。

奈緒の葛藤にどんな言葉をかけてあげればいいのか、俺は答えを出せなかった。父親は物心ついて間もなく他界、母親もその後を追うように亡くなってしまった。それから基本的にはひとりの生活を送ってきた俺には、正直なところ家族という存在がよく判らないからだ。

自分に何ができるのか、何をすればいいのか、何をしてあげられるのか、ベッドで横になって天井を見つめながら考えていた。そんな時ふと、前世での黒羽姉妹と両親との出来事を思い出した。有宇は旅立つ前に、黒羽姉妹に会えるうちに家族に会いに行けと諭し、突然の事故死でこの世を去ってしまった美砂が、両親と最期の別れをする時間を与えた。あの時の彼女の素直な気持ちを、心からの言葉を、今でも良く覚えてる。

——よし、やるべきことは決まった。投資稼業はしばらく休業。

翌日俺はひとり、奈緒の実家を訪ねた。忙しいところ時間を作ってもらって話しをした。もちろん、前世で起きた重要な部分は隠して。翌日も、彼女の母親を訪ねる。いろいろなことを教えてくれた。俺の知らない奈緒のこと、一希さんのこと。とても優しく穏やかに微笑みながら話す姿に、確信を持てた。

この人は決して金に目が眩んでふたりを売ったんじゃない——脅されたんだ、と。

翌日からは、自分の話をすること。と言うのも今日も平日、普通なら学校へ行っている時間帯。娘の彼氏が学校をサボっているとなれば、母親として心配……というよりも不信感を覚えるのは当然のこと。

その不信感を払拭してもらうため、生い立ち話した。両親は他界し

ていること、アメリカの大学を卒業していて先日日本へ帰国したこと。二学期からは俺の後見人で投資の師匠でもある先生が理事長務める、星ノ海学園へ転入する予定であることを伝え。今は投資家として、安定した収入を得ていること話すも、にわかには信じられないといった感じだったが、卒業証書やアルバムなどの物的証拠を見せることで信用してもらえた。

そして、ようやく本題に入ることができた。母親の話しを聞いた後、ペンとメモを借りて書き記した連絡先を手渡し、あるお願いをしておいとました。

そして、引越後初めての週末。昼前に奈緒が、初めての新居を訪ねてきた。

「おじやましまーす」

「いらっしやいませ」

淡いピンクを基調とした、涼しげなサマーセーターにポニーテール……ではなく、今日は見慣れたツーサイドアップにしている。

「わっ、なんすか?」

「懐かしかったのついでい。奈緒さんって感じですよ」

「まあ、いいっすけどー」

久しぶりに見る懐かしいシルエットについて頭を撫でてしまっていた手を離して、予め頼まれて用意しておいた食材で昼食作り。

「なんだか、久しぶりっすね」

「そうですね」

持参したエプロンを付けた奈緒は、機嫌良さそうに鼻唄を歌いながら手際よく調理していく。曲はもちろん、ZHIEND。

「はい、できましたー!」

「おおー」

テーブルの上に、色とりどりの料理が並ぶ。

懐かしい。初めてご馳走してもらった時と同じく、野菜をふんだんに使った料理と肉じゃが。コップなどの食器を用意し終えたと同時に、呼び鈴が鳴った。

「ん? 誰か来たみたいですね」

「そうみたいです。ちょっと出てきます」

断りを入れて玄関へ向かい、客人を迎え入れる。

「お邪魔します」

「お、お母さんっ!？」

思わぬ来客に目を丸くした奈緒は、勢いよく俺に顔を向けた。とりあえず笑顔を返すと、すかさず寄ってきて小声での抗議。

「なに爽やかに笑ってんっすかっ。これは、どういうことっすかっ?」

「招待しました」

「なっ……なんで黙ってたんですかっ!？」

「そっちの方がおもしろいかなー、と思いまして」

睨まれてる気がするけど、スルーしておこう。何はともあれ席に着いてもらい、三人で昼食を食べることに。奈緒は俺の隣に、母親は彼女の向かいの席に座っている。

「美味しい。これ、奈緒が作ったの?」

「う、うん」

これは……想像以上だ。思っていた以上によそよそしい。

「この肉じやがも食べてみてください。スゴい美味しいんですよ」

「ええ、美味しいわね」

「ですよー」

「本当に美味しい。いつの間にこんな作れるようになったのかしら?」

結局俺が、奈緒の母親と話すだけで、親子の会話はぎくしゃくしたまま食べ終わってしまった。食卓の片付けて、シンクで洗い物。

「どうして……」

「こんなことを、ですよね」

一緒に食器を洗っている奈緒は、無言で小さく縦に首を振った。

「早い方がいい思ってたんです」

「それは、分かってますけど」

タオルで濡れた手を拭いて、そっと抱きよせる。

「大丈夫、そばにいるから」

「……はい」

肩に身体を預けてくれた。残りの洗い物を済ませ、お茶を用意してから母親が待つリビングへと向かう。

「どうぞ」

「ありがとう」

ソファーに座り、しばらく沈黙が続いた。待っている母親に、奈緒は意を決して話した。

夢の中という形で、前世で起きた悪夢の出来事を。夢の中とは言え、母親に裏切られたことが本当にそうなるんじゃないかと不安に想っていたことを話した。

彼女が話し終わると、真剣に聞いていた母親がとった行動は、予想外の行動だった。頭を下げて、奈緒へ謝罪。

「お、お母さんっ?」

「ごめんなさい」

驚きのあまり奈緒は、俺に顔を向けた。首を横に振り、わからないことを伝える。これは本当に予想外だった。奈緒は戸惑いながらも、母親に向き直す。

「お母さん……」

「不安にさせちゃって、ごめんなさい」

「でも、だって夢の話だよ?」

「それでもよ。奈緒が不安に思ったのは確かだから……。それをわかってあげられなかった、ごめんなさい」

「……お母さん」

奈緒の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

ぽんつと、優しく彼女の肩に手を乗せてから席を立つ。

「冷めちゃいましたね、入れ直してきますね」

リビングの扉を閉めて、玄関を出る。どこまでも青空が広がっていて、降り注ぐ夏の日差しが眩しくて、暑かった。

今日もいい天気だ。そのまま散歩に出て近くカフェに入りアイスコーヒーを飲みながら奈緒の母親に聞かされたことを思い返す。

四年前の秋頃、とある学校法人が一希さんと奈緒を特待生として迎え入れたいと申し出た。二人の進路は既に決まっていたこともあつ

て、その申し出は断ったそう。そして学校関係者は、二度と姿を見せることは無かった。理由は、ひと月後に判明した。その学校法人から複数の逮捕者が出た。学校の生徒たちに対し検査と称して人体実験を行っていたことが判明。解体後に発足した新政府の下、携わっていた政治家や科学者は裁かれ、学校そのものが廃校になった。

そう、ぎりぎりで間に合ったと。

しばらくして携帯が鳴った。発信者は、友利奈緒ともりなお。「ありがとうございます。ございました、もう大丈夫です」と明るい声。溶けた氷で味気なくなっグに入ると、奈緒なおと母親は隣に並んで待っていた。

「宮瀬みやせさん。奈緒なおのこと、よろしくお願いします」

「は、はい、こちらこそよろしくお願いします」

「じゃあ奈緒なお、お母さん帰るわね」

「うん、またね、お母さん」

——…またね？ その返しに何となく違和感を感じた。そしてそれは、当たっていた。

「荷物は、まとめておくから」

「うん、ありがと。あとで取りに帰るから」

「荷物？」

「はい。今日から、あたしもここで住みます」

「……はい？」

「あの言葉を忘れたんですか？」

あの言葉、と言うと転校を諦めさせるためにした提案のことだろうか。「合鍵を預けます、いつ来てくれていいですよ。許可出たら泊まってもいいですよ」と、許可は絶対に出ないと計算していった言葉だったんだけど。

「思い出しましたか？」

「いや、あれはあくまでも許可が下りたららの話で……」

「許可はもらいました。まあ、条件付きですけど」

母親を見ると、ニコニコと微笑んでいた。

そんな母親から出された条件は、ふたつ。

ひとつは、奈緒本人に出された条件。一日一度以上電話をすること。もうひとつは、俺と奈緒の二人に出された条件。週末には必ず二人で顔を見せに行くこと。

「学校に知れたら、退学になりますよ?」

「その時は、星ノ海学園に転入します」

「本気ですか?」

「もちつす。責任取ってくださいよね?」

「それは、もちろん取りますけど…… 本当にいいんですか?」

彼女の母親に、改めて何う。

「はい、お願いします」

「…… わかりました」

ひと休みしてから実家に荷物を取りに行き、一度荷物を置きに自宅に戻り。今度は、生活必需品と家具を選びに買い物に出る。注文した商品は取り寄せの物もあったため後日まとめて配達してもらうことにした。

夕食を食べ終えて、22時を過ぎた頃。

「やっぱり、ソファで寝ますよ」

「いえ、大丈夫つす」

間接照明が灯った薄暗い寝室のベッドの上で、会話をしている。ベッドのサイズは、セミダブル。シングルより広いとはいっても、二人で横になるとやっぱり窮屈に感じる。それを考慮して、リビングのソファで寝るといふ提案は脚下されてしまった。

「そんなに嫌なんすか?」

「ん?」

「あたしと暮らすの……」

「それは、すごくうれしい」

じとーつと疑いの眼差しを向けられる。

「その割には渋っていたように思えたんですが?」

「あの状況で手放して喜んだらどう思いますか?」

「最低つす」

即答。身体を起こして、ベッドを椅子代わりに並んで座り直す。

「ならよかった。やっぱり、俺の判断は間違ってたな」

「はあ…… まったく」

起き上がって、肩に身体を預けて来る。ふわっといい香りがした。「なんだか、懐かしいですね」

少しの間、未来と一緒に過ごした生活を思い出した。

それは、彼女も同じで。

「はい。あの日から五年戻って、五年待ったので十年ぶりです」

その試算だと、俺はどれだけの時を…… いや、これは無粋だな、悪い癖だな。今こうしてまた一緒に居られる、それだけで十分過ぎる。

「十年か…… 長いですね」

「ほんとおすよ」

彼女の手に、自分の手を重ねる。

握ってくれた手を、握り返す。

「奈緒さん——」

「——はい」

長い時を超えて、一時も忘れることのなかった心からの想いを言葉にして伝える。

「あなたのことが、好きです」

「あたしもです」

どちらからともなく、距離が縮まって行く……。

そして、次の瞬間——まるで失った時間を取り戻すように、月明かりが照らす部屋の中で、初めてのキスをした。

\* \* \*

そして、現在に至る。

まだ眠っている、奈緒の髪を撫でる。とてもなめらかで、サラサラした髪の感触が心地いい。くすぐったかったのか軽く身じろぎした。このまま眠らせておいてあげたいところけど、それは時間が許してくれない。

「起きてください」

「んう……」

とても重そうに、ゆっくりとまぶたを開いた。

「うくん……ん？」

腕に抱きついていていることに気がついたみたいだ。以前にも、こんなことがあった気がする。あの時はすぐに飛び引いたけど、今度は抱きついたままだった。

「暑くないですか？」

「…… お構いなく」

「さいですか。でも本当に起きないと、遅刻しちやいますよ？」

抱きつかれていない方の人差し指で、部屋の掛け時計を差す。時刻は、七時半を回ったあたり。そして今日は、月曜日。目を大きく開いた奈緒は、慌てて飛び起きた。

「なっ、なんで起こしてくれなかったんすかっ!？」

「何度も起こしましたよ」

「むうっ、シャワー浴びてきますっ!」

まだ整理し終わっていない荷物の中から着替えを引つ張り出してバスルームへ走って行った彼女を見送ってから、俺は朝食の支度を始めた。ちようど出来上がった時バスルームから、奈緒が姿を現した。目を細めて、何か訴えたそうな表情をしている。

「どうしました?」

「…… 今日から、夏休みでした」

「ああ、そうだったんですね。髪の毛、濡れていますよ?」

「…… 知ってますよ」

「ふう、こつちに来てください」

テーブルの椅子を引いて、ぽんぽんつと軽く叩いて呼ぶ。洗面所から持ってきたドライヤーを、奈緒の濡れた髪に当てる。

「髪、キレイですよね。細くて、ふわふわしてて」

「そうっすか? でも、くせっ毛っすよ?」

「そこも可愛いんですよ」

恥ずかしいのか黙ってうつむいてしまった。

髪が乾くと、いつものナチュラルにウェーブがかかった艶やかな髪になった。

「はい、乾きましたよ」

「ありがとうございますーす」

手ぐしで軽く整えると、手首に付けていたヘアゴムで髪の毛を結んでいく。あつという間に、見慣れたツーサイドアップになった。

「よし、じゃあ朝ごはん食べましょ……わっ！」

立ち上がった奈緒を、後ろから優しく抱きしめる。

「なんっすか?」

「おはよう。奈緒さん」

朝の挨拶をするのを忘れていた。

腕の中で振り向いた奈緒は、答えてくれた。

それはまるで、これからの未来を思わせてくれるようで、とても明るい。

「おはよう。翔くんっ」

今までで一番の、とびっきりの笑顔だった。

## 生徒会活動日誌5

生徒会活動日誌く。

って、日記をつけるのもスゴく久しぶりっすね。 // 時空移動 // 前に書いていたものは、すべてなかったことになってしまったので、改めて思い出しながらつけていこうと思います。と言う訳で、退院したところからにしましょう。

二人一緒に病院を退院し、久しぶりに星ノ海学園へ登校。先ずは職員室へ行き、担任の先生と、後押しをしてくれた仲村先生に復学の報告。教室へ向かおうとしたところで、個人的に仲村先生に呼び止められました。

話しの内容は、想いは伝えたのか否か。状況が状況だったため、そう言う話しにはなっていないことを話すと「えっ？ まだなの？ 意外と奥手なのね」と驚かれました。当の本人はと言うと、あたしが非難の目を向けるも、よく判っていない様子で小首をかしげていました。

まったく、頭でも打ったんですかね？ あたしから言うのも癪だったので、記憶は取り戻していないように装っておきました。

そして、久しぶりに授業を受けて、昼休み。高城に以前囚われていた学校の調査を依頼し、たまりに溜まった生徒会の仕事を片付けることに。黒羽さんは仕事の合間、翔くんもリハビリと並行して手伝ってくれたのでとても助かりました。このお礼ははずれしたいと思いません。

そして、作戦決行日がやって来ました。あたしと翔くんは科学者の姿に変装をして、科学者が能力者を実験台にしている学校へ潜入。乙坂さんの手助けもあって、無事にデータ奪取の任務を成功させました。

ですが。施設に戻って、シャワーで汗を流して戻ると、翔くんの操作するパソコンの画面には、当時のあたしのデータが……. ちゃんと成長してますよね？ サイズも合わなくなりましたし。

まあ、それは置いておいて本題へ戻りましょう。

後日、早朝に呼び出しがありました。すぐに保護組織の施設へ向かうことに。そこで驚愕の事実が判明しました。なんと、乙坂さんおとさかからは今まで奪った特殊能力のデータを回収できると言うとてもない検査結果です。

そこで翔くんしょうくんは、大学時代の親友のニールさんに「略奪」の投薬の制作を依頼。既に完成していることを知ると、拒否するニールさんと一触即発の状況になってしまいました。その緊張状態を破ったのは、あたしです。

あたしは、「略奪」の能力者になることを自ら名乗り出ました。ようやく恩返しを出来ると考えたからです。ですが翔くんしょうくんに、後ろから抱きしめられ止められてしまいました。別の方法を模索することを条件に引き下がり、別室で案を出し合っていたところ。なんと、あの乙坂さんおとさかが世界中の特殊能力を奪い去ると言い出しました。どれほど危険なことか説いても引き下がらず、意志は変わらないと判断した翔くんしょうくんは、自分がサポートするきことを条件に了承。近日、二人は日本を発つことになりました。

そこで身支度を兼ねて、買い出しへ出かけました。一通りの必需品を買い揃え、赤坂の神社でお参り。良く効くと評判のお守りをプレゼントしました。あの時すぐにしまったので気づいていないみたいでしたが、恋愛成就のお守りだったんです。縁が切れないように、と願いを込めて……。効果は靦面でしたね。

そして、前世では出来なかったお家デート。ペアのリングをプレゼントしてもらって、最後に兄のお見舞い。帰る前に、あの美しい岬で水平線へ沈む夕日を一緒に眺めました。

そして、二度目の告白……。

お互いの指輪を交換して、無事に帰国してくれることを祈って待ちました。ですが、状況が状況だったため仕方がないとは言え、帰国の報告後一度も連絡しないってどう言うことっすかね……？ ひとこと愚痴を言おうと想っていましたが、顔を見たらどうでも良くなっ  
てしまいました。

人手不足とのことだったので、あたしたちも調査を手伝うことに。

しかし、まさかテロリストを支援している組織が軍事企業だったとは…… 想定外もいいところでしたね。ともあれ、ターゲットが既に来日している情報入手。替玉フエイクを見破って、本物が乗った車を追跡し、テロ計画の証拠を掴みました。

そして決行当日、あたしは車の後部座席に潜んでついていきました。ちなみにスペアキーは、ニールさんが作ってくれたものです。

計画予定よりも速く相手が動いていたため、翔くんしやうくんと二人で直接ヘリコプターに乗り込み、遂に黒幕と対峙。正に映画さながらの…… いえ、映画以上の臨場感あふれる画が撮れました！ ヘリが途中で揺れたのは、乙坂さんおとさかさんが張り付いたことが原因。あとから聞いた話によると、二人は“テレパシー”の能力で常に意思の疎通をしていたそうです。聞いて納得、道理で銃を持つ相手に大立ち回りを演じられた訳ですね。隼翼しゆんすけさんたちにも伏せていたのは、リスクを極限まで回避するため。あたしにくらい教えてくれてもよかったのに、って教えたら安全だと思っただけで、と考えると考えると考えたんでしょね。どっちにしても同じ結果でしたけど。

テロ計画は未然に阻止、後始末は政府に任せ、幕引きとなりました。その後は、ほとんど、研究所に缶詰状態で日夜研究の日々。学校も、外へ出ることもなくなっただけ。向こうではこういつた生活を、“タイムリープ時空移動”が起きる度に何度も何度も繰り返していたんだな、と……。それでも会いに行くと、疲れている時も、忙しそうにしている時も、いつも微笑みかけてくれました。それも、とても申し訳なさそうな表情かおで。そんな彼にあたしに出来ることは、料理で元気をだしてもらおうことくらいだったので、レパートリーも増えました。

そして、研究を終えた最後の日には久しぶりに外へ出て、二人でデート。街を一緒に歩いたり、カフェでおしゃべりしたり、ウインドウショッピングをしたりと、取り立てて特別じゃない普通のデート。でもそれが、本当に特別に感じるほど幸せな時間で…… あっという間に過ぎ去り。

そして、二度目の別れの時を迎えました。

また必ず再会すること約束をして――。

で。現在に至ります。今は神楽坂のマンションで、一緒に生活をしています。出来ることなら一緒に暮らしたいと、思い切って母に打ち明けたところ、絶対に反対されると想っていたのに案外とすんなり認めてくれました。どうやら記憶を取り戻したあたしがどう接すればいいか悩んでいた頃、母の相談に乗っていたことで、とても信賴しているみたいでした。それに家から歩いて五分ほどなので、いつでも往き来できる距離と言うのも大きな要因ですね。

それから母には「あんなにしつかりした子、今時いないから絶対に離しちやダメよ」と逆に応援されました。まあ理由はどうあれ許可は下りたので、ひと安心です。

そして、初めて一緒に過ごす夜。

月明かりが照らす静かな部屋で——初めてのキスをしました。軽く触れるだけでしたけど。キスってスゴいっすね、本当に。今までの空白の時間をすべて埋めてくれたような感じががしました……。

本当は、少しだけ戸惑うこともあったんです。今までの自分と前世の自分、ふたつの記憶と感情が混在していて…… 本当のあたしは、どっちなんだろうって……。ですが、どっちも本当の自分で、今、感じている想いは間違いなく本物なんだと自信を持って言えます。

これからは、毎日一緒にいられる幸せな時間を当たり前と思わずに大切に過ごしていこうと思います。

それでは、今日はこの辺で…… あ、そうだ忘れていました。

しゅんすけ  
隼翼さんの発案で、今度みんなで屋内プールへ遊びに行くことになったんです。みんなと会うのも久しぶりだなー。そうそう、水着を新しく買わないとっすね、サイズが合わなくなっただけ！

それでは今度こそ、これでお終いにしまーす。

# Another Episode

徐々に意識が覚醒していくのが判る。

懐かしい感覚だ。この感覚は、もう二度と体感することのないと想っていた。

「今日の朝食は、兄さんの担当だろ？」

この声は、まだ小さな頃の有宇の声だな。

俺はまた、無事に時空を遡ることが出来たのか……。そうだ、アイツは、どうなったんだ？ 記憶を持って飛べたのだろうか。

「——つて、兄さんどうしたの？ ぼーっとして」

「ああ……。悪い。なんか、目が見えないんだ」

「え……。ええーっ!？」

有宇がとても驚いた声をあげると、奥からぱたぱたと足音が聞こえてきた。

「どうしたのですよーか？ 有宇お兄ちゃん」

「大変だ歩未！ 兄さんが、目が見えないって……。！」

「え……。ええーっ!？」

有宇とまったく同じ反応。やっぱり兄妹だな、と思わず笑いそうになる。だけど、立ち止まつてる暇なんて俺にはない。俺には、やらなくちゃいけないことがあるんだから。

先ずは何を置いても、熊耳くまがみに見つけてもらう。そこから、すべてが始まる。心配する有宇と歩未あゆみを置いて、俺たちが出会う河原へ向かった。

「すごい能力者が現れたな……。」

土手に座っていると、背中から懐かしい声が聞こえた。

「やっと来てくれたか、熊耳くまがみ」

「——なっ!? 俺を、知っているのか……。？」

「混乱するのは判るけど、今は時間が惜しいんだ。目時めときたちのところへ連れて行ってくれ」

「アイツたちのことも…… やはりお前は、未来から『時空移動』して来たのか!？」

熊耳くまがみたちが作った、能力者たちの小さな集まりの隠れ家ある、山間の廃屋の地下室で要約して説明した。未来から『時空移動』タイムリープして来たこと、能力の代償として視力を失っていること。そして、これからすべきことを――。

\* \* \*

前世と同じ道を。いや、前世よりも遙かに良い道を歩き出した。

「しかし、こんなにもスムーズにことが進むだなんて。けど隼翼しゆんすけ、ずっと疑問に思っていたんだが、前世で視力を失ったお前は、どうやってまた過去へ戻って来たんだ?」

「ああ…… そう言えば、まだ話してなかったな。それは――うっ!？」

熊耳くまがみの疑問に答えようとした時、光りを失った目に突然、強烈な刺激が走った。目を開けていられない。両手で抑えつけるように目を覆う。

「隼翼!?! どうした!?!」

「えっ、大丈夫なのっ?」

「オイオイ、何だっつんだよっ?」

「隼翼……!」

心配する目時めどきたちの声が聞こえる。手を借りて、洗面台まで連れていってもらい。刺すような初冬の冷たい水で顔を洗うと、徐々に刺激が治まってきた。タオルで水滴を拭って、恐る恐るゆっくり目を開ける。

「…… 何だよ、これ――」

見えないはずの目の前に、懐かしい少年の姿があった。そいつに向かって手を伸ばす、向こうも同じように手を伸ばしてきた。そして、俺たちの手が重なった。

「はは…… あはは……」

思わず笑いがこぼれた。そう言うことかよ、やってくれる。

「ちよつと、本当に大丈夫？ 病院行く……？」

「ああ、悪い。大丈夫だよ、目時<sup>めとき</sup>。心配してくれてありがとう」

「う、うん、それならいいんだけど……」

目を見て微笑みかけると目時は、初めて「時空移動<sup>タイムリープ</sup>」して能力を言い当てた時のように少し頬を紅く染めた。

「それから悪いけど、用事を思い出した」

「そうか、じゃあ——」

「いや、ひとりで大丈夫。って言うか、ひとりじゃないと片付かない用件なんだ」

「と言うと、前世での重要事項か」

「そんなところだよ、プー。じゃあ行ってくる」

俺は、ひとりで部屋を出た。

外出時欠かさず持ち歩いていた、杖を持たずに——。

\* \* \*

目黒区自由が丘の住宅街を、スマホの地図アプリを頼りに歩いている。都内屈指の高級住宅街に門を構える純和風造りの屋敷の前で、アプリのナビゲートは終了した。

「ここか……？」

表札で確認する。「時空移動<sup>タイムリープ</sup>」の前、アイツが教えてくれた名前と一致していた。この家で間違いない。ひとつ息を吐いて、インターフォンを押す。応答は、すぐに返ってきた。

『はい。どちら様でしょうか？』

若い男性の声。どこかで聞いたことのある声のような気がしたが、用件を伝えることを優先した。

「乙坂<sup>おとしが</sup>と言います。家主の方にお話を伺いたく、お訪ねしました。宮瀬<sup>みやせ</sup>の同志、と言えば分かる」と

『……少々お待ちください』

しばらくして、重量感のありそうな横開きの格子戸が滑らかに開い

た。

「乙坂隼翼くん、ですネ？」

「えっ……ふ、古木さん!？」

俺を出迎えてくれたのは、前世でも組織の立ち上げに協力してくれた古木さんだった。まさかの再会に戸惑う俺を後目に家へ上がるようにうながし、鍵をかけて家の中を案内してくれる。

「話しは聞いています。前世では、多大なるご迷惑をおかけしたと…… 本当に申し訳ない」

「いえ、気にしないでください。それより、なぜここに？」

「先生の知り合いの方から声をかけていただいたんです。どうやら前世の働きを高く評価してくれたようで。今では、同期の友人の倍以上の給料をいただいています。こちらへ」

廊下を曲がり、まるで日本庭園のような池が正面に見えるふすまの前で立ち止まった。古木さんは両膝をついて、ふすまに向かって声をかけた。

「先生。宮瀬くんのお客さまをお連れしました」

『ありがとう。通してくれるかい?』

ふすまを開けた古木さんは、俺を部屋に通すと席を外した。

「いらっしやい、良く来たね。まあ、座ってくれ」

「失礼します」

一枚板の漆塗りのテーブルを挟んで、正面の座布団に座る。

「はは、そう堅苦しくなくていい。見ての通り、僕も崩しているからね」

そう言つて穏やかに微笑んだ。そう言うことならと、俺も遠慮せずに足を崩させてもらう。

「さて、話しは聞いているよ。とある学校法人買収の件だね」

「はい。その前に、アイツは…… 宮瀬は今?」

「タイムリープ」

「時空移動」してから、ずっと気になっていたことを訊ねる。宮瀬

の師匠で、今俺の目の前に座っている品の良い雰囲気纏う初老の男

性、伝説の相場師と謳われる——勝龍馬。

「うむ。彼は今、世界中を飛び回っている。文字通りね」

順調にいつてゐることか。

「そうですか。帰国の予定は？」

「未定。一年や二年では済まないことは間違いないだろう。さて、本題の方だが、少し面白い話があつてね。買収したいという学校法人の理事長を含めた一部の理事たちが、国からの補助金を私的流用していると言う話だ。加えて虚偽申請での補助金不正受給も判明した」

「そんな話しまで……」

前世では、札束をばら撒いて学園の理事たちを味方につけてた。不正な金の流れがあることを知ったのは後になつてからだ。内部情報を事前に把握しているだなんて、政財界との太いパイプは伊達じゃないらしい。

「文科省を始めとした関係各所とは既に話しは付けてある。あとはタ  
イミングだけだったが、乙坂<sup>おとさか</sup>くん、キミが来てくれたことで本格的に  
進めることになるだろう」

「では星ノ海学園の買収資金については、俺が……」

「いや、その必要はない。併設マンションの改修費用と並行して用意してある。現在在住の住人たちには去年から説明会を複数回開き、利便の良い同等レベル以上の新居への引っ越しを快諾してもらった」

不正の判明で学校法人の元値自体が下がるため買収経費はあまり掛からないとのこと。しかし、併設のマンションごと買い取つて地方から上京してくる学生の寮として活用しようだなんて、本当に別次元の人だな。

「しかしだ。僕にも出来ないことはある。そこでキミに、重要な仕事を頼みたい。新星ノ海学園の初代生徒会長として尽力してもらいたい」

「俺が、生徒会長ですか？」

「ああそうだ、これは大変な仕事だよ。来年度から受験者数も生徒数も確実に増える。経済的な理由などで進学を諦めざるを得なかった子どもたちの編入試験も積極的に行う方針だからね。元々の生徒と新しく入学してくる生徒、何らかの衝突が起きるだろう。巨大組織を束ねたカリスマ性を発揮して欲しい。今の学校から転入してもらう

ことになるが、構わないかな？」

俺がうなづくくと、老人は安心したように微笑んだ。

「引越しのタイミングは任せる。弟さんと妹さんも一緒に越してくるといい」

「ありがとうございます。ですが、どうしてこれほど……」

「責任を取るのは、しでかした大人の仕事だからね。キミが責任を負う必要はない。ただ今は、本来過ごせるはずだった家族との日常を、学生生活を楽しまなさい」

俺はこの人の、人としての器の大きさを知った。

そして宮瀬は、間違いないなくこの人の影響を受けている。

「……ふむ。いかな。年を重ねるとどうも説教ほくなってしまう。コーヒーを淹れよう。今度は、乙坂くんのお話を聞かせてくれるかい？」

\* \* \*

「あ、隼翼しゅんすけっ」

隠れ家へ帰ると、目時めときが駆け寄ってきた。

「どうしたんだ？ そんなに慌てて」

「どうしたんだ、じゃないわよっ。電話も繋がらないし、何かあったんじゃないかって。みんな心配してたんだからっ」

「ああ、悪い。人と会ってたからサイレントモードにしてた」

スマホを見ると、目時めときだけではなく熊耳くまがみたちからも着信が残っていた。

「けど、ほんとよかった。無事で」

「心配かけて悪かった。申し訳ついでにメンバー全員の招集を頼めるか？ あと、前髪が乱れてるから直した方がいい」

「はあ、了解……って今、髪が乱れてるって何で——」

「それも含めて話す。全員集まったら、な」

戸惑う目時めときと一緒に、廃墟の地下へと続く隠し階段を降りた。

「みんな、忙しいところ集まってもらってすまない。重要な話しだか

ら緊急に集まってもらった」

ランタンの明かりだけが灯る薄暗い地下室で、コンクリート打ちっ放しの壁を背に話しを切り出す。全メンバーの注目が俺に集まる。右から左へとゆっくり視線を移し、仲間たちの顔を見終え、目を閉じ。改めて、まっすぐ前を見据える。

「今、この時を持って、この組織を解散する」

一瞬の沈黙。そして、響めきが起こる。

「隼翼、どういうことだ!?!」

「そうだ！俺たち能力者を、科学者から守るための組織なんだろう!?!」  
「もう必要が無くなったんだ。ちゃんとした理由もある。説明するか  
ら落ちつけてくれ」

場を宥め、鎮まるのを待つ。

「それで、どういうことなんだ?」

熊耳くまがみからの質問に答える。

「さっきも言ったけど、必要が無くなったんだ。百聞は一見に如かず。  
七野しちの、この壁を通り抜けてくれ」

「何でだよ?」

「七野しちの」

「チツ！わーったよ!」

面白くなさそうに舌打ちをした七野しちのだったが、熊耳くまがみに促され渋々、  
壁に向かって走り出した。そして、ゴツツ！と鈍い音を立てて仰向  
けに倒れる。

「い、イテエーツ!?!」

「——なっ!?!」

「ちよつと、大丈夫っ?」

額を抑えながらの転げ回る七野しちのの元へ、目時めどきが駆け寄る。なるほ  
ど。前は見えなかったけど、透過に失敗した七野しちのはこうなったのか。

「これは……隼翼しゆんすけ!」

「能力が無くなったんだよ。特殊能力は、この世界から全て——」

この場に居る全員が絶句し。そして各々、自身の能力を試した。そ  
の結果、全員が使用不能であることが証明された。

「本当に使えなくなってるだなんて……でも、どうしてなの？」  
「特殊能力を消し去ることの出来る能力者が現れたんだよ、目時。その能力者は今、世界中を飛び回ってる。これを観てくれ」

世界中で非人道的な行いをしていた政治家や科学者が拘束されている、というニュースが表示されているスマホを見せる。

「こんなことが……」

「まだ表にはなっていないが、日本も例外じゃない。もう、俺たちを狙う敵は居なくなっただよ」

信じられないと言った感じだったが、他のニュースサイト等からの情報。なにより、現に能力が使えなかったことで信用せざるを得なかった。後日また話し合いの場を設けることを約束し、協力してくれた元能力者の大人、集まってくれた仲間たちを見送った。地下室へ戻って、椅子に座る。

「ふう……」

「おつかれ、ほら」

「おつ、サンキュー」

無糖の缶コーヒーをテーブルに置いた熊耳は、隣の椅子に腰掛けた。プルタブを開けて、口へ運ぶ。この安っぽい味の缶コーヒーも悪くないな。

「しかし、能力が使えなくなっただけではなく、見えなくなった目に光りが戻るとはな」

それについては、俺が一番驚いている。サプライズもいいところだ。日の光を受けると、まだちよつと目がちかちかする。

「それで隼翼、これからどうするんだ？」

「どうしたんだ、プウ。マジな顔して」

「真面目に答えろ。こうなることを知っていたのなら、この組織そのものを創設しなかったはずだ」

さすが俺の親友。まだ子どもなのに、俺のことをよく理解してくれている。目時、七野、前泊の創設メンバー三人も戻ってきた。

「七野、大丈夫か？」

「お前のせいだろ！」

「あつはっは！」

「誤魔化すな」

「ああ、悪い悪い。ふう………」

仕切り直し。

「信じていなかった訳じゃないが、保険は必要だったんだ」

常に最悪を想定して行動しろ。アイツ自身が言っていた言葉だ。必ず上手くいくなんて保証はどこにも無かったから――。

「それはつまり、能力を消した能力者は前世での知人と言うことか？」  
「まあな。で、これからのことだけ。さつきも言った通り、俺たちを狙う科学者は居ない。これからは自由に生きてくれ」

「いきなり自由って言われたってな………」

「そうですね。身を守ることを目的に生きてきたことですし」

唐突に目的を失ってしまったがゆえの戸惑い、つてところか。無理もない。事情を知らなかったら、たぶん俺も同じ反応をしていただろう。けど俺には、まだやる<sup>しゅんすけ</sup>ことが残ってる。

「隼翼は、どうするの？」

「俺か？俺にはまだ、やらなくちゃならないことがある」

今度は俺が、約束を果たす番だ。

アイツが帰って来られる場所を、星ノ海学園を誇れる学校にする。

## Another Episode 2

暖かな春の日差しが差し込む一面ガラス張りの窓辺の席に座って、窓の外に広がる景色を眺める。時折春の風の吹かれて、薄紅色の桜の花びらが空に舞う。

「隼翼、そろそろ時間だ」

「そうか。じゃあ行くか」

生徒会室を出て、呼びに来た熊耳と共に講堂へ向かう。

「なあ。お前は どうして、星ノ海学園へ来たんだ」

「今さらだな」

本当に今さらだ。

あの日、全ての能力者が消えた日、近いうちに星ノ海学園へ転校することを、熊耳たちに告げた。当然のことながら理由を問われたが、俺は答えを濁した。星ノ海学園を買収し、俺を新生徒会長に任命した、理事長の願いでもあったから。

「乙坂くん。キミに、もうひとつ頼みたいことがある。彼女の、友利奈緒さんのことなのだが」

そうだ。目が見えなかったから探せなかったけど、今なら探せる。

まずは帰って、有宇の記憶を呼び覚まして――。

「彼女のことだが。今は、そっとしておいてあげて欲しい」

「それは……探すな、と言うことですか？」

「うむ。実のところ所在は判っている。だがこれは、彼の願いでもあるんだ」

「宮瀬の願い……ですか？」

中庭へ顔を向けた理事長の横顔は、どこか愁いを帯びていた。

「本来過ごせていたであろう日々を生きて欲しい、と願っていた。あまり口にしたくはないが、彼は危険な道を歩いている。それこそ、死と隣り合わせの茨の道だ」

もしものことも――と言うこと。そうだよな。もし最悪の事態になれば、心に深い傷を残すことになる。知らない方が幸せなこともあるのかも知れない。俺が、有宇と歩未を遠ざけたように。

理事長の言葉に共感した俺は、熊耳たちへの返答を濁した。前世では俺と同じく、前泊まえどまりの記憶操作で家族との関係を断ち切って付いてきたくれたみんなにも、本来過あまごせていたであろう日々を送って欲しかったからだ。

それなのに、熊耳くまがみだけじゃなく目時めどきたちも星ノ海学園への進学を決めた。

「あの時のお前の目は、俺たちを導いてくれた時と同じ。決意に満ちた目をしていた。だから今度は、手助けをしたいと思った。きつと、目時めどきたちも同じ想いだっただろう」

——つたく、ほんと最高だな、コイツらは……。

想えば本当に険しい道だった。特殊能力による力業が使えないことが、あんなにも厳しいことだったなんて、失って初めて知った。本当に特別なチカラだったんだと。それでも熊耳くまがみたちの協力もあつて、ここまで辿り着けた。

「痛いぞ。突然叩くな……」

「あつはつは、急ぐぞ、プー！」

「まったく、ゲンキなヤツだな」

そう。なんてたつて今日は、星ノ海学園の入学式。

転校してからの悪戦苦闘の日々を振り返りながら、廊下を入学式が行われる講堂へと向かう。

講堂の中は、真新しい制服に袖を通した新入生たちが集まっていた。所定の位置に着き、式が始まるのを待つ。新入生の中に弟ゆうの有宇を見つけた。向こうも俺に気づいた。軽く手を上げて合図を送ると、ちよつと恥ずかしげに目をそらした。やれやれつれないな、これが思春期しゅんきってやつか。兄さんちよつと悲しいぞ？。なんてことを冗談冗談交じりを思っていると、司会を務める目時めどきがマイクの前に立った。

『間もなく星ノ海学園高等部の入学式を行います。新入生ならびに関係者の方々は、着席してお待ちください』

話し声で騒がしかった講堂は徐々に鎮まり、いよいよ入学式が開会。理事長の祝辞から始まり、俺の出番を迎える。

『続きまして、生徒会長挨拶。乙坂隼翼おとさか しゆんすけさん、お願いします』

席を立ち、壇上へ上がる。

『新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。星ノ海学園生徒会長おとさかしゆんすけの乙坂隼翼おとさかしゆんすけです』

決まり文句の祝辞を述べながら、新入生たちを見回す。

前日に確認した新入生の名簿に載っていないなかったのだから、入学式こに居るはずがない。そもそも顔も分からないしな。出そうになったタメ息を堪え、生徒会長の役目を果たした俺は、壇上を降りて元の席に着いた。

『生徒会長ありがとうございました。続きまして——』

その後入学式は滞りなく進行し無事に終えた。

講堂を出ていった新入生たちを見送って、生徒会室へ戻る。

「ふう」

席に着き、一息つく。

「おつかれ。ほら」

「お、サンキュー」

いつかと同じように、安っぽい缶コーヒーを差し入れてくれた。生徒会室中央のテーブルへ移動し、向か合う形で座る。

「七野しちのたちは？」

「式の後片付けだ」

「そっか、それはまたご苦労だな。あ、悪い、電話だ」

マナーモードにしておいたスマホがテーブルの上で振動した。缶コーヒーを置いて、代わりにスマホを持つ。発信者は——理事長だった。

「はい。乙坂おとさかです」

『乙坂おとさかくん。今、大丈夫かい？』

電話に出た時点で大丈夫なのは判っているけど、一応の確認。世間で一般で言うところの社交辞令というやつだ。

「はい、大丈夫です」

『それは、よかった。式はどうだったかね？ 挨拶のあとすぐに外へ出なければならなかったから少し気になってね』  
「滞りなく終了しました。ご心配なく」

『そうか、優秀な生徒会役員たちのおかげで安心だ。しかし、夜空にも夏の星座が見えるようになったが、いささか寒さは残る。体調には気をつけるように、と』

「……判りました、伝えておきます」

スマホをしまつて、立ち上がる。

「理事長か？」

「ああ。ねぎらいの言葉と、季節の変わり目だから体調に気をつけろってさ。さてと、有宇に用件を伝えに行ってくるか、生徒会室は任せる」

「ああ、わかった」

留守にする生徒会室は熊耳くまがみに任せて、有宇ゆうの教室へ向かう。

今の電話は、ただの業務連絡ではない。話題にあつた星座は、理事長と決めたキーワード。星ノ海学園だから「星」。まあ、単純な理由だ。夏の星座……つまり、夏頃に帰国の目処が立ったってこと。合わせて俺の行動にも制限が外れたことを意味する。これで本格的に動くことが出来る。急がないとな。

有宇ゆうに用件を伝えるため教室に入ると、異様に騒がしい……というより、ただならぬ熱気で満ちている。何ごとかと思つたら、窓側前方の席に人だかりが出来ていた。理由は気にはなるが、今は用事を優先。人だかりの対角廊下側後方の席へ。

「有宇ゆう、ちよつといいか？」

「あ、兄さん。どうしたの？」

「HRが終わつたら、生徒会室へ来てくれ」

「生徒会室に？ わかった」

「ところで、これは何の騒ぎなんだ？」

「同じクラスに現役の人気アイドルがいたんだよ。ほら、歩未あゆみが好きなバンドの」

「ああ〜」

騒ぎの中心は、黒羽くろばね柚咲ゆき。新入生の名簿の中にいたのを思い出した。騒ぎの理由も納得。「じゃあ、生徒会室で待ってる」と、有宇ゆうに念を押して生徒会室に戻り。そして放課後、生徒会室の扉をノックする

音が鳴った。

「来たか、どうぞ」

「失礼します……………」

やや控えぬ声と共に扉が開き、有宇が姿を見せた。

「よく来てくれたな、有宇」

「兄さん、何の用？」

「それはな、有宇。今日からお前には、生徒会の仕事を手伝ってもらったことにした」

「——はあ？」

有宇は、まるで鳩が豆鉄砲でも食ったように目を丸くした。

「おい、弟！ 次は、これを運べ！」

「は、はいっ！」

資料の束を両手に抱えて走り回る有宇。

「おい隼翼。七野のヤツ、お前の弟にパワハラしてるぞ？」

「有宇くん、かわいそ〜」

「いいんだよ、これでな」

「お茶を入れておきますね」

「ああ、頼むよ前泊」

そう、これでいい。実績を作るには、これが一番手っ取り早い。有宇のことは七野に任せて、俺は俺のすべきことをするとしよう。

「お帰りなさいませー！ 隼お兄ちゃん、有宇お兄ちゃんっ！」

中等部の制服の上にクリーム色のエプロンを着た歩未が、玄関まで出迎えてくれた。

「ただいま、歩未」

「えへへ〜」

頭を撫でてやると、歩未は少しくすぐったそうに笑う。

「…………… た、ただいま」

「って、わっ！ 有宇お兄ちゃん、どうしたのでしょーか!？」

ボロボロに疲れきっている有宇を見て、歩未は心配そうに慌てだしてしまった。

「…………… なんでもない」

「有宇には、生徒会に所属してもらったことになったんだ」

「えっ!？」

「有宇お兄ちゃんも生徒会に入るのっ?」

「ええっ? いや、そんな話しは……」

「しかも次期会長候補だ。スゴいだろ?」

「はあッ!？」

「それは、とてつもなくスゴいことなのですー!」

「ちよつと待ってー!」

全力で抗議をした有宇だったが、生徒会に所属していれば遅刻や早退をしても内申書に響かないことを話すと、まんざらでもなさそうだった。我が弟ながらチョロいな。ちよつと心配だぞ、有宇。

そんなこんなで、入学式から約二ヶ月経った放課後。

「——ということから、こいつらが生徒会の手伝いをしてくれることになった」

有宇は、男女合わせて三人の生徒を連れて生徒会室へやって来た。

「黒羽柚咲です、お世話になりまーすっ」

「高城丈士郎です」

「なんであたしまで……」

「お姉ちゃん?」

「ちつ。美砂…… 黒羽美砂だ」

さすが有宇だな。これから忙しくなるから手伝いを連れてきてくれ、と言ったらピンポイントで旧生徒会役員たちを連れてきてくれた。

「三人ともよく来てくれた、助かるよ。俺は、有宇の兄の乙坂隼翼…… って知ってるよな。二人は姉妹でいいんだよな?」

「はいっ」と姉妹の妹で、現役の人気アイドルの柚咲の方が眩しい笑顔で答えてくれた。

「オーケー。それじゃあ熊耳、あとは任せる。俺は理事長室に居るから、何か問題があれば連絡をくれ」

「ああ」

熊耳にこの場を任せ、理事長室へ向かう。

理事長室に到着。ノックもせずに入中に入る。理事長室の中は誰もいない、もぬけの殻だ。

「さてと、始めるか……」

事前に用意したメモを手にも、とある場所へ電話をかけた。

\* \* \*

黒羽姉妹と高城が、生徒会の手伝いを引き受けてくれてから約ひと月。有宇には使いを頼み。生徒会の仕事になれてきた三人に、入学式の日熊耳にしたのと同じ質問をした。

「三人はどうして、星ノ海学園を選んだんだ。三人とも実家は、地方だよな?」

一番最初に答えてくれたのは、柚咲。

「わたしは、お姉ちゃんがいる学校だったのが一番の理由ですねー」

「じゃあ、その美砂は?」

「……あたしは、なんか、この高校に行かないと後悔する。そんな気がしたんだ」

「そう思ったきつかけとかあるか?」

「どうして、そんなこと聞くんだ?」

「なんとなくだよ。嫌なら別に答えなくていいさ。プライバシーに関わるからな」

「……あたしは」

——おっ! 素直に話してくれるのか、意外だな。

「あたしは、中学の頃やんちゃばかりしてた。学校はサボるし。夜は遅くまで出歩くし。そんな時ショウとコウタって奴と知り合って。そいつらは弟みたいなのヤツで……」

美砂は髪を触りながら、たどたどしくもひとつひとつ思い出すように話し始めた。

「ある日ショウが、原付に乗ってきてさ。その時に……ショウと同じ名前の奴に『絶対に、ニケツしない』って、そんな約束をしたような気がして……それが、ずっと頭から離れなくて……それで

話していた美砂の声が、少し震えた。

「シヨウが、原付で事故って…… もちろん生きてるけどな。でも…… もし、ニケツしてたらって思うと怖くなった……」

美砂は、チラツと柚咲を見る。

「そんな時、進路を決めないといけない時期になって。柚咲が、あたしと同じ高校がいいって言い出して」

「えへへっ」

可愛らしく笑う柚咲。柚咲はシスコンか、有宇と同じだな。何だが親近感を覚えたぞ。

「そんな訳で、柚咲を馬鹿高校に入れるわけにはいかないだろ。だから、必死に勉強した。それで、学校の見学で星ノ海学園に来た時、ここだっ！ って、直感的に思ったんだ」

「ふーん、女の勘ってやつかい？」

「ああ、何でかわからないけど。あたしは勘が鋭いんだ。それに柚咲は、東京で芸能活動をしてるから、ちようどいいって思ったんだ」

「そっか。高城は？」

「私は、自分の学力と相談してというのが主な理由です。ですが、美砂さんと同じように。なんとなく、この学園で学生生活を送りたいと思ったんです。それに私学なのに学費も格安でしたし」

「それな！ 寮も広くて豪華だし、スゲー快適だ！」

「わたしも申請したら、お姉ちゃんと同じお部屋にしてくれたので嬉しいですよ」

なるほど経済面でもか。理事長が星ノ海学園を買収してから、設備とは釣り合わないほど学費も寮費も格安だからな。おかげで今は、受験者数と比例して偏差値も評判もかなり上がってる。

「なるほどな。ちなみだけど、音楽とかよく聴く方かい？」

「わたしは、聴くよりも歌うことの方が多いですねー」

「私は、その天使のような歌声を毎日聴いていますっ！」

胸をドン！ と叩いた高城は、ボーカルの柚咲に向けて高らかに宣言した。

「もちろん、新曲も既に予約済みです！」

各店舗の予約券を、これ見よがしに広げて見せた。全部で、十枚近くあるんじゃないか。

「あ、ありがとうございます」

「あたしは、高速ツアーバスを聴きながらビートを刻んでるぜっ！けど、なんか最近聴いてると変な感じがすることがあるんだよなー」

「おや。美砂さんもですか？ 実は私もなんです。ハロハロの新曲を聴く度に、以前にも聴いたことのあるような既視感のようなものを――」

やっぱり音楽がファクターか。CDの音源で既視感を覚えるなら、月末の“ZHENND”のライブへ行かせれば、有宇は記憶を取り戻せるはずだ。けど気になるのは…… 少し暗い表情をしている妹さんの方。まあアイツが帰ってくれば判ることか。

「ありがとう。いろいろ聞けかせてくれて。参考になったよ」

あとは、有宇次第だな。任せたぞ、有宇。

\* \* \*

「ただいま。封書を預かってきたよ」

「ごくろうさん。理事長には、俺から渡しておく」

受け取った封筒は、一旦机の引き出しの中へしまっておく。

「どうした？」

黙りこんでいる、有宇に聞く。

「あつ…… いや、どうして今時手渡しなのかな、って思っ」

「そうだな。向こうの校長先生に、何か言われたか？」

「…… しっかりしているって言われた」

少し照れながら、校長に褒められたことを話した。

「それだよ」

「え？」

「電話やメールにはない、相手の印象を含めて判断できる。手渡しには、そういう利点があるんだよ」

「なら、生徒会長の兄さんが行った方が……」

「俺は、有宇を信じて使いを任せた。事実、有宇は相手に褒められた。だったら、俺の判断は間違っていないなかったじゃないか」

「……ちよつと疲れたから先に帰るよ」

面と向かつて言われたことが気恥ずかしかったのか、くるりと踵を返した有宇は足早で、生徒会室を出て行った。俺は再び引き出しを開け、受け取った封筒の封を切り、手紙の内容に目を通した。

手紙の内容は、俺が理事長名義で出した生徒会主催による、学校交流の提案の返事。返ってきた相手側の手紙は、二通。提案の承諾を伝える旨の返事と、もう一枚は理事長個人へ宛てた手紙が同封されていた。

「よし、後は……」

これで、とりあえずの下準備は整った。経過を報告するためスマホを取り出し、理事長へ電話を掛ける。まあ、全部事後報告だけど。この件に関しては、すべて一任されているから問題ないだろう。数回のコールで、電話は繋がった。

「乙坂おとさかです。学校交流ですが、相手側の了承を得られました。さつそく明日、附属の生徒会役員が来校することになりました。それと附属の校長先生から、理事長宛に手紙を預かっています」

『そうか、わかった。ご苦労さま』

「届けますか？」

『明日は、少し時間が取れる。机に置いておいてもらえるかい？』

「了解です。例の件は？」

『うむ、近日中になるだろう。はっきり判り次第、こちらから連絡を入れる』

「判りました。それでは失礼します」

通話を終え、理事長宛ての手紙を理事長室の机の上に置いて、商店街へ寄り道をしてから帰宅した。

そして翌日。生徒会役員たちを翌朝に呼び出し、国立大の附属との学校交流の話を議題に上げた。

「まあ、そう言うことだから。今日の放課後、国立大の附属高校の生徒

会が星ノ海学園に來校する」

生徒会一同固まっている。沈黙を破ったのは俺の側近で、親友で、副会長の熊耳<sup>くまがみ</sup>。

「また唐突だな。毎度のことだが」

「ああ、まったくだつ！」

七野<sup>しちの</sup>が声を大にして同意。

「仕方ないだろ。相手の都合上、今日を逃すと来週以降しか空いてないんだ」

本当はこつち、というより俺の都合だけど。可能な限り早いうちに進めておきたかった。教師の許可を貰い、午後の授業を欠席した俺たち生徒会は、客人を迎える準備を大急ぎで進めていた。

「兄さん、何してるの？」

「ちよつとな…… よしつ、と」

視聴覚室から拝借したオーディオコンポに昨日、商店街のショッパで購入したCDをセットしておく。そして、約束の時間が来た。來客用の玄関で、附属の生徒会一行を出迎える。

「本日はお忙しいところを、遠くまでご足労いただきありがとうございます。います。星ノ海学園生徒会長の乙坂隼翼<sup>おとしかしのすけ</sup>です」

「こちらこそ、お招きいただきましてありがとうございます。私は――」

お互いに挨拶を済ませ、生徒会室へ案内する。

生徒会室に入ると、一面ガラス張りの豪華な造りの内装に附属の生徒たちは驚きの表情を見せている。一人を除いて。青いリボンで髪をまとめたポニーテールの女の子は他の女子たちと違って。そう、まるで迷子になってしまった子どものように、若干怯えにも似た表情をしている、この子が…… そうなのだろうか。

「昨日は、お世話になりました」

「いいえ。ところで、乙坂<sup>おとしか</sup>さんと乙坂<sup>おとしか</sup>生徒会長はご兄弟ですか？」

「はい。隼翼<sup>しゆんすけ</sup>は、僕の兄です」

「やっぱり！ 素敵なご兄弟ですねっ」

「あはは、恐縮です。さあみなさん、どうぞおかけください」

「あ、そうでしたね。失礼します」

あのポニーテールの女の子が奈緒ちゃんだとは確信が持てないまま俺は、有宇と附属の会長の会話に割って入り、対面する形でテーブルに着いて本題の話始めた。

「——では、そのような流れで進めて行きましょう」

「はい、お願いします」

書状と共に内容を添付しておいた甲斐があつてか、学校交流会の話は思いの外すんなりとまとまった。予定時間よりも早く話がまとまったため、余った時間で校内を案内することにした。

「目時、みなさんに校内を案内してあげてくれるかい？」

「ええ。どうぞ、こちらへ」

目時に続いて附属の生徒たちが立ち上がる。その中のひとり、あのポニーテールの女の子がバランスを崩した。

「大丈夫!？」

附属の生徒会長が慌てて声をかけたが、どうやら気分が優れないようだ。

「無理しない方がいい。保健の先生を呼んできてもらえるかい？」

「うん、すぐと呼んでくる!」

案内役を頼んだ目時に、保健の先生を呼びに行ってもらおう。診察の結果は、寝不足が原因による軽い目まいではないかとのこと。ソファーで休んでもらうことになった。他の附属の生徒たちには予定通り学校の見学を、俺と有宇は飲み物を調達するため売店へ。

「兄さん……」

「どうした？」

自販機のスポーツドリンクのボタンを押しつつ話を聞く。

「…… 僕は、あの女子を知っている気がする。昨日すれ違った時から、ずっとそんな風感じて……」

——そっか。やっぱりあの子が、奈緒ちゃんか……。どこか苦しそうにうつむく有宇の肩に軽くポンと手を乗せる。

「有宇、生徒会室へ戻るぞ」

「…… えっ？」

生徒会へ戻ると、ちょうど見学を終えた附属の生徒たちとばったり出会った。奈緒ちゃんも、まだ気分が良くないらしいため。あとで送っていくことを提案し、解散という流れになった。

「すみません、(´▽｀)迷惑をおかけしてしまつて……」

「いや、気にすることはないさ。誰にだつて体調が優れないことはある。ところで、音楽をかけてもいいかな？ BGMがないと、どうも書類作業がはかどらなくて」

「はい。どうぞ、お構いなく……」

「ありがとう。有宇、かけてくれるか？」

「あ、うん、わかつたよ」

有宇はコンポのリモコンを操作して再生させた。

静かなスローテンポのメロディと、澄んだ綺麗な歌声が響き渡る。

——なるほど、これが“ZHIEND”か。

心地良い歌声を耳を澄ませて聴いていると、有宇が椅子にもたれように座り込んで顔を伏せた。

さつきのことといい、もしかしたらライブじゃなくても思い出せるきっかけになり得るのかも知れない。その証拠に、横になっていた身体を起こした奈緒ちゃんは、目を閉じて聴き入っている。

曲が終わった。停止ボタンを押して、取り出したCDをケースにしまい、奈緒ちゃんに差し出す。

「あげるよ」

「えっ？ でも……」

「気に入つたんだろ？」

遠慮しなくていいよ、と微笑みかけると躊躇しつつもケースを受け取ってくれた。

「……ありがとうございます」

「体調の方も良くなつたみたいだな。下まで送ろう」

目時に付き添いを頼み、教師の車で彼女を送ってもらう

「兄さん、あのCDつて……」

「なんだ、有宇も欲しいのか？」

「そうじゃなくて……」

「いらないのか？ なんならDVD付き限定版を買ってやるぞ？ 経費でな」

「職権乱用じゃないか！ 本当に落ちるの？」

——さてと、俺に出来るお膳立てはここまでだ。

早く帰って来い。そして、奈緒ちゃんを迎えに行行ってやれ。それは、お前にしか出来ないんだからな……………。

\* \* \*

「有宇！」

「兄さん。どうしたの、そんなに慌てて…………… って！」

帰宅早々、有宇の肩を抱く。

「ちよ、ちよつと——!？」

「帰って来たぞ、アイツが！」

「帰って来た？ アイツって…………… あつ、もしかして——」

照れていた有宇の表情が変わった。

「ほんとに帰ってきたの!？」

「ああ、無事に帰ってきたんだ。奈緒ちゃんも、記憶を取り戻した」

「そっか…………… 友利も。よかった……………」

感無量って感じの表情をしている。俺も同じ気持ちだ。

「いったいなにごとでしょーか？ あつ、隼お兄ちゃん」

お玉を持った歩未が、キツチンから顔を出した。歩未を手招きして

呼び、空いている方の腕で抱く。

「ちよ、痛いってー！」

「ううっつ、隼お兄ちゃん苦しいです……………」

「あつはっは！ 悪いな。でも約束だったんだ」

「約束？ なんのことでしょーか？」

「ああ、それはな——」

愛する家族を、有宇と歩未を——心から抱きしめる。

ようやく果たすことが出来た、あの日の誓いを。

長い、長い時を越えて……………。